

一般国道  
10号線

椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第7集

# 徳永川ノ上遺跡Ⅱ

本 文

福岡県京都郡豊津町大字徳永所在遺跡群の調査

1996

福岡県教育委員会

# 徳永川ノ上遺跡Ⅱ

本 文

福岡県京都郡豊津町大字徳永所在遺跡群の調査

## 序

福岡県教育委員会は、建設省九州地方建設局の委託を受けて、昭和62（1987）年から一般国道10号椎田道路の建設に先立って埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。発掘調査は、平成2年度に終了し、平成4年12月25日に椎田道路が全線開通しました。

この報告書は、昭和63年度から平成2年度に発掘調査をした京都郡豊津町大字徳永所在の徳永川ノ上遺跡群についての第2冊目のものであります。徳永川ノ上遺跡は、プレ縄文・縄文・弥生・古墳・古代・中世の各時代の複合遺跡であります。第2冊目の報告が弥生後期から古墳前期の墳墓群を対象とし、第1冊目が弥生時代以前、第3冊目が古墳時代以後を収録することになります。この第2冊目の報告の特色は、弥生時代終末期を中心とした墳丘墓群に多数の銅鏡・玉類・鉄器を副葬している京都地方の首長墓であることです。報告書として十分に条件を満たしているものではありませんが、豊前地域の古墳出現直前の様相を知る資料として地域史研究や文化財保護思想普及などに広く活用していただければ幸甚に存じます。

発掘調査及び整理報告にあたって、御協力いただいた方々に深甚の謝意を表します。

平成8年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光 安 常 喜

## 例 言

- 1 この報告書は、昭和63年度から平成2年度までに、福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局から委託をうけて実施した、一般国道10号線椎田道路建設予定地のうちの第4地点についての埋蔵文化財発掘調査の記録である。
- 2 本書は、一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告の第7集で、福岡県京都郡豊津町に所在する徳永遺跡群の「徳永川ノ上遺跡」に関する第2冊目の報告書である。なお、昨年度の弥生時代以前を扱った第1冊目の「徳永川ノ上遺跡Ⅰ」、本年度の弥生後期後半から古墳前期を収録した第2冊目の「徳永川ノ上遺跡Ⅱ」、今後古墳中期以後を扱う「徳永川ノ上遺跡Ⅲ」を引き続き刊行していく予定である。
- 3 報告書に掲載した遺構の実測図は、柳田康雄・緒方泉・小川泰樹の各調査担当者と大西智知・笠由美子・荒巻朋子・犬塚カヲル・植山智保子・川野礼子・木下秀子・竹本美由紀・溝辺慶子・三井恭子の各氏が、遺物の整理、図面の作成には担当者の他に岩瀬正信・豊福弥生・原カヨ子・平田春美・江口幸子・岡由美子・坂田順子・田中典子・棚町陽子・久富美智子・藤原さとみ・堀江圭子・堀之内久美子・山本千鶴美・星野恵美の各氏が従事したが、とくに鉄器の一部について九州歴史資料館の横田義章氏が鋳取りと実測図作成を担当していただいた。
- 4 掲載写真のうち、遺構は担当者が撮影し、遺物を九州歴史資料館参事補佐石丸洋と北岡伸一の各氏が担当した。また気球写真は、空中写真企画に委託した。
- 5 銅鏡については、東京国立文化財研究所に修復委託したが、後に九州歴史資料館の横田義章氏に細部調整をお願いした。
- 6 本書の執筆は、赤色顔料の分析を本田光子、青銅器の鉛同位対比分析を斎藤努の各氏、他の総てと編集を柳田康雄が担当した。

# 本文目次

I	はじめに	1
1	調査の経過と調査の組織	1
2	位置と環境	5
II	遺構と遺物	9
1	C地区の調査記録	9
(1)	遺構	9
①	I号墳墓群	11
②	II号墳墓群	24
③	III号墳墓群	28
④	IV号墳墓群	33
⑤	V号墳墓群	38
⑥	VI号墳墓群	50
⑦	VII号墳墓群	56
⑧	VIII号墳墓群	70
⑨	IX号墳墓群	72
⑩	X号墳墓群	76
⑪	XI号墳墓群	80
(2)	遺物	82
①	土器	82
②	鏡	92
③	玉類	97
④	鉄器	99
2	D地区の調査記録	108
(1)	遺構	108
①	1号墳墓	108
②	2号墳墓	111

(2) 遺物	114
① 土器	114
② 玉類	115
3 E地区の調査記録	115
(1) 遺構	115
① 1号墳丘墓	115
② 2号墳丘墓	125
③ 3号墳丘墓	130
④ 4号墳丘墓	149
⑤ 5号墳丘墓	162
(2) 遺物	164
① 土器	164
② 鏡	175
③ 玉類	178
④ 鉄器	179
III おわりに	185
1 墳丘墓群	185
2 土器	185
3 銅鏡	186
4 玉類	186
5 鉄器	186
IV 化学分析	219
(1) 福岡県出土青銅器などの鉛同位体比測定結果	221
(2) 徳永川ノ上遺跡の赤色顔料について	227

## 図 版 目 次

		C地区の調査	本文対照頁
図 版 1	1	徳永川ノ上墳墓群全景（南から）	9～115
	2	徳永川ノ上墳墓群全景（北から）	115～186
図 版 2	1	徳永川ノ上遺跡C地区墳墓群全景	9～108
	2	I・II号墳墓群	11～28
図 版 3	1	II～VII号墳墓群	24～70
	2	VIII～XI号墳墓群	70～82
図 版 4	1	6号墓全景	12
	2	8号墓全景	15
	3	8号墓副葬品出土状態	18
	4	13号墓副葬品出土状態	22
図 版 5	1	19号墓全景	35
	2	19号墓鏡出土状態	35
	3	20号墓玉類出土状態	36
	4	10号墓玉類出土状態	20
	5	2号甕棺墓全景	44
図 版 6	1	42号墓全景	53
	2	42号墓棺内全景	53
	3	42号墓棺外超大型鉄製釣針出土状態	53
		E地区の調査	
図 版 7	1	徳永川ノ上E地区墳墓群全景	115
	2	4号墳丘墓全景	149
図 版 8	1	2号墳丘墓1号棺全景	127
	2	1号棺内副葬品出土状態	127
図 版 9	1	3号墳丘墓3号棺全景	135
	2	3号棺粘土除去後の蓋石	135
	3	3号棺内副葬品出土状態	137
図 版 10	1	4号墳丘墓4号棺内全景	154
	2	4号棺内副葬品出土状態	154

		3	4号棺内副葬品と人骨片	154
遺物				
図	版 11	1	6号墓出土方格規矩鏡	92
		2	8号墓出土三角縁画像鏡	94
		3	19号墓出土三角縁盤龍鏡	95
図	版 12	1	1号棺出土方格規矩鏡	175
		2	同赤色顔料除去後	175
		3	4号棺出土内行花文鏡	176
図	版 13	1	8号墓出土耳飾玉 (実大)	98
		2	8号墓出土手飾玉 (実大)	98
		3	10号墓出土玉 (左) と20号墓出土玉 (実大)	98
図	版 14	1	13号墓出土耳飾玉 (実大)	98
		2	D地区2号墓・C地区1号住居 (右) 出土管玉 (実大)	111
		3	2-1号棺 (左)・3-3号棺出土玉 (実大)	178
図	版 15	1	4-4号棺出土玉類 (実大)	179
		2	42号墓出土鉄製釣針	104
図	版 16	1	1号墳丘墓出土鉄鉤 (上)・4号墳丘墓4号棺出土素環頭刀子	179・181
		2	4号墳丘墓3号棺出土透孔付鉄鏃	181
C地区の調査				
図	版 17	1	1号甕棺墓	9
		2	1号甕棺	9
図	版 18	1	徳永川ノ上遺跡C地区墳墓群全景	9~108
		2	C地区墳墓群全景 (南上空から)	9~108
図	版 19	1	I号墳墓群全景	11
		2	VIII~XI号墳墓群全景	70~108
図	版 20	1	I~VII号墳墓群全景 (蓋石除去後)	11~91
		2	IV~VI・VII~XI号墳墓群 (蓋石除去後)	33~108
図	版 21	1	3号墓	12
		2	4号墓	12
		3	5号墓	12
図	版 22	1	6号墓全景	12

		2	6号墓副葬品出土状態	12
図	版 23	1	7号墓蓋石	15
		2	7号墓土壙	15
図	版 24	1	6・8号墓	12・15
		2	9号墓	20
図	版 25	1	10号墓	20
		2	10号墓(石除去後)	20
図	版 26	1	11号墓	20
		2	11号墓人骨	20
図	版 27	1	12号墓	21
		2	13号墓	22
図	版 28	1	14号墓蓋石	24
		2	14号墓土壙	24
図	版 29	1	15号墓蓋石	24
		2	15号墓土壙	24
図	版 30	1	16号墓	27
		2	Ⅱ～Ⅶ号墳墓群全景	24～70
図	版 31	1	Ⅲ号墳墓群鉄剣	28
		2	Ⅲ号墳墓群4号周溝	28
図	版 32	1	17号墓蓋石	29
		2	17号墓土壙	29
		3	18号墓	30
図	版 33	1	Ⅳ～Ⅵ号墳墓群全景	33～56
		2	19号墓副葬品出土状態	35
図	版 34	1	20号墓	36
		2	21号墓	36
		3	37号墓蓋石	38
		4	37号墓土壙	38
図	版 35	1	46号墓	33
		2	40号墓	38
		3	50号(落し穴)	38
図	版 36	1	V号墳墓群(発掘前)	38
		2	V号墳墓群3号周溝土器	38

		3	V号墳墓群5号周溝	38
図	版 37	1	22号墓蓋石	39
		2	22号墓石棺	39
		3	22号墓石棺掘方	39
図	版 38	1	23号墓	43
		2	24号墓墓壙	43
図	版 39	1	24号墓蓋石	43
		2	24号墓石棺	43
		3	24号墓石棺掘方	43
図	版 40	1	2号甕棺墓	44
		2	2号甕棺内	44
		3	63号墓	49
図	版 41	1	28号墓標石と蓋石	50
		2	28号墓土壙	50
		3	42号墓標石と蓋石と釣針	53
図	版 42	1	2号墓	55
		2	II・III・VI・VII号墳墓群全景	24~70
図	版 43	1	25号墓蓋石	56
		2	25号墓土壙	56
		3	26号墓	56
図	版 44	1	43号墓蓋石	57
		2	43号墓土壙	57
		3	43号墓棺内	57
図	版 45	1	44号墓蓋石	58
		2	44号墓土壙	58
		3	47号墓	59
図	版 46	1	48号墓	60
		2	49号墓	60
		3	51号墓	63
図	版 47	1	52号墓蓋石	64
		2	52号墓土壙	64
		3	53・54号墓	64
図	版 48	1	53号墓	64

		2	53号墓棺内	64
		3	54号墓	64
図	版 49	1	57号墓	59
		2	58号墓	64
		3	60号墓	67
図	版 50	1	27号墓	70
		2	29号墓	70
		3	36号墓	70
図	版 51	1	55号墓	72
		2	Ⅸ号墳墓群	72
図	版 52	1	30号墓	72
		2	31号墓	74
		3	32号墓	75
図	版 53	1	Ⅹ号墳墓群全景	76
		2	34号墓蓋石	76
図	版 54	1	35号墓蓋石	76
		2	35号墓石棺	76
		3	35号墓棺外鉄斧	76
図	版 55	1	41号墓蓋石	79
		2	41号墓土壙	79
図	版 56	1	39号墓	80
		2	62号墓	81
		3	4号甕棺墓	80
D地区の調査				
図	版 57	1	D地区	108
		2	舟形木棺	108
図	版 58	1	舟形木棺	108
		2	舟形木棺横断面	110
図	版 59	1	2号墳墓(1~3号棺)	111
		2	1号棺蓋石	111
図	版 60	1	1・2号棺	111
		2	2号棺蓋石	111

		3	3号棺	113
E地区の調査				
図	版 61	1	E地区全景	115
		2	墳丘墓群(南から)	115
図	版 62	1	1号墳丘墓	115
		2	3・4号墳丘墓	130
図	版 63	1	E地区全景	115~164
		2	墳丘墓群全景(東から)	115~164
図	版 64	1	墳丘墓全景(周溝と標石)	115~164
		2	1号墳丘墓(周溝と墳頂遺構)	115
図	版 65	1	1号墳丘墓(完掘後)	115
		2	1号墳丘墓(西から)	115
図	版 66	1	1号墳丘墓墳頂遺構(上層)	121
		2	1号墳丘墓墳頂遺構(下層)	121
		3	墳頂石組と主体部断面	123
図	版 67	1	1号墳丘墓主体部	121
		2	主体部副葬品	121
		3	主体部墓壇	121
図	版 68	1	1号墳丘墓(発掘完了)	115
		2	2号棺蓋石	123
		3	2号棺土壙	123
図	版 69	1	2号墳丘墓(表土剝後)	125
		2	墳丘土器出土状態	125
図	版 70	1	2号墳丘墓1号棺	127
		2	1号棺墓壇と蓋石	127
図	版 71	1	2号墳丘墓1号棺石棺	127
		2	1号棺石棺掘方	128
図	版 72	1	1号棺内副葬品	128
		2	1号棺石棺掘方	128
図	版 73	1	2号墳丘墓2号棺	128
		2	2号棺土壙	128
図	版 74	1	3号棺蓋石	129

		2	3号棺土壙	129
		3	4号棺	129
図	版 75	1	5号棺蓋石	130
		2	5号棺土壙	130
図	版 76	1	3号墳丘墓 (表土剝後)	130
		2	3号墳丘墓 (発掘完了)	131
図	版 77	1	3号墳丘墓 1号棺	133
		2	2号棺蓋石	133
図	版 78	1	2号棺土壙	133
		2	3号棺の墓壙と甕棺	135
図	版 79	1	3号棺墓壙の横穴	135
		2	3号棺墓壙の鋤痕跡	135
		3	3号棺外の刀子	140
図	版 80	1	4号棺蓋石	140
		2	4号棺土壙	140
図	版 81	1	3・4号棺	135
		2	5号棺蓋石	142
		3	5号棺土壙	142
図	版 82	1	6号棺蓋石粘土目張	143
		2	6号棺蓋石	143
		3	6号棺土壙	143
図	版 83	1	7号棺蓋石粘土目張	143
		2	7号棺蓋石	143
		3	7号棺土壙	143
図	版 84	1	8号棺粘土目張	143
		2	8号棺と墓壙	143
		3	8号棺甕棺	143
図	版 85	1	9号棺	145
		2	10号棺	145
		3	11号棺	147
図	版 86	1	13号棺	148
		2	4号墳丘墓標石	149
図	版 87	1	4号墳丘墓 (蓋石除去前)	149

		2	4号墳丘墓（蓋石除去後）……………	149
図	版 88	1	4号墳丘墓発掘前……………	149
		2	南周溝断面（西から）……………	150
		3	南周溝断面（東から）……………	150
図	版 89	1	1号棺蓋石と標石（北から）……………	150
		2	1号棺蓋石（北から）……………	150
		3	1号棺石棺（南から）……………	150
図	版 90	1	2号棺（南から）……………	152
		2	2号棺（北から）……………	152
図	版 91	1	3・7号棺（北から）……………	152
		2	3号棺（南から）……………	152
図	版 92	1	4号棺蓋石（復原）……………	154
		2	4号棺石棺……………	154
図	版 93	1	4号棺石棺と掘方……………	154
		2	4号棺墓石棺掘方……………	154
図	版 94	1	5号棺蓋石……………	158
		2	5号棺石棺……………	158
図	版 95	1	6号棺……………	160
		2	7号棺石棺……………	162
		3	7号棺石棺掘方……………	162
図	版 96	1	4号墳丘墓北東斜面土器群……………	173
		2	5号墳丘墓周溝……………	162
図	版 97	1	5号墳丘墓周溝……………	162
		2	周溝断面（南から）……………	162
		3	周溝内土器……………	162
E地区北端の調査				
図	版 98	1	E地区北端墳墓群……………	182
		2	1号墓……………	182
図	版 99	1	2号墓……………	183
		2	2号墓……………	183
遺物				
図	版 100		2号～4号甕棺……………	44～80

図	版 101	C地区墳墓群出土土器……………	82
図	版 102	C地区墳墓群出土土器……………	82
図	版 103	V号墳墓群出土土器……………	87
図	版 104	C地区墳墓群出土土器……………	91
図	版 105	1 3号墳丘墓8号棺(甕棺)……………	143
		2 3号墳丘墓3号棺(甕棺)……………	135
図	版 106	1 3号墳丘墓10号棺(甕棺)……………	145
		2 1号墳丘墓出土土器……………	164
図	版 107	2・3号墳丘墓出土土器……………	168
図	版 108	4・5号墳丘墓出土土器……………	173
図	版 109	1 6号墓出土鏡……………	92
		2 6号墓出土鏡……………	92
		3 8号墓出土鏡……………	94
		4 III号墳墓群出土鏡……………	95
図	版 110	1 19号墓出土三角縁盤龍鏡(実大)……………	95
		2 三角縁盤龍鏡「湯冷え」部分……………	95
図	版 111	1 19号墓出土三角縁盤龍鏡鏡面布目痕……………	95
図	版 112	1 2号墳丘墓1号棺出土鏡……………	175
		2 4号墳丘墓4号棺出土内行花文鏡……………	176
		3 内行花文鏡に付着していた布目痕……………	176
図	版 113	墳墓群出土鉄剣……………	99
図	版 114	墳墓群出土鉄器①……………	100
図	版 115	墳墓群出土鉄器②……………	102
図	版 116	墳墓群出土鉄器③……………	104
図	版 117	墳墓群出土鉄器④……………	107
図	版 118	墳墓群出土鉄器⑤……………	108
図	版 119	墳墓群出土鉄器⑥……………	179
図	版 120	1 4号墳丘墓4号棺出土素環頭刀子と布目……………	181
		2 E地区北端2号墓出土鉄器……………	184

## 表 目 次

表 1	一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財一覧表	3
表 2	徳永川ノ上墳墓群一覧表	189
表 3	徳永川ノ上墳墓群出土甕棺観察表	195
表 4	C地区V号墳墓群出土土器観察表	195
表 5	C地区墳墓群出土土器観察表	196
表 6	D地区墳墓群出土土器観察表	199
表 7	E地区1号墳丘墓出土土器観察表	200
表 8	E地区2・3号墳丘墓出土土器観察表	203
表 9	E地区4号墳丘墓出土土器観察表	204
表10	E地区5号墳丘墓出土土器観察表	205
表11	徳永川ノ上墳墓群出土玉類一覧表	207
表12	徳永川ノ上墳墓群出土鉄器一覧表	226
表13	福岡県出土青銅器の鉛同位体比	224~225
表14	赤色顔料の試料一覧と分析結果および所見	230

## 挿 図 目 次

第1図	徳永川ノ上遺跡の位置と周辺関連遺跡分布図 (1/100,000)	2
第2図	徳永川ノ上遺跡発掘区地形図 (1/2,000)	8

### C地区の調査

第3図	1号甕棺墓実測図 (1/20)	10
第4図	1号甕棺実測図 (1/4)	11
第5図	徳永川ノ上I号墓群全体図 (3~13号墓) (1/60)	12~13
第6図	I-3・4号墓実測図 (1/30)	13
第7図	I-5・6号墓実測図 (1/30)	14
第8図	I-6号墓副葬品出土状態実測図 (1/4)	15
第9図	I-7号墓実測図 (1/30)	16
第10図	I-8・9号墓実測図 (1/30)	17
第11図	I-8号墓副葬品出土状態実測図 (1/3)	18
第12図	I-10・12号墓実測図 (1/30)	19
第13図	I-10号墓副葬品出土状態実測図 (1/4)	20
第14図	I-11号墓実測図 (1/30)	21
第15図	I-13号墓実測図 (1/30)	22
第16図	I-13号墓副葬品出土状態実測図 (1/3)	23
第17図	II号墓群全体図 (1/60)	24
第18図	II-14号墓実測図 (1/30)	25
第19図	II-15・38号墓実測図 (1/30)	26
第20図	II-16号墓実測図 (1/30)	27
第21図	III~VI号墳墓群全体図 (1/60)	28~29
第22図	III・V号墳墓群付近地形図 (1/200)	29
第23図	III・V号墳墓群墳丘断面実測図 (1/60)	29
第24図	4号周溝土器出土状態実測図 (1/20)	30
第25図	III-17・64号墓実測図 (1/30)	31
第26図	III-18号墓実測図 (1/30)	32
第27図	IV-19・20・37・40号墓実測図 (1/30)	34

第28図	IV-19号墓副葬品出土状態実測図 (1/4)	35
第29図	IV-20号墓副葬品出土状態実測図 (1/3)	36
第30図	IV-21号墓実測図 (1/30)	37
第31図	V-22号墓実測図 (1/30)	40
第32図	V-23号墓実測図 (1/30)	41
第33図	V-24号墓蓋石実測図① (1/30)	42
第34図	V-24号墓実測図② (1/30)	42~43
第35図	V-2号甕棺墓実測図 (1/20)	45
第36図	V-2号甕棺墓墳実測図 (1/20)	46
第37図	2号甕棺墓墳実測図 (1/9)	47
第38図	V-3・XI-4号甕棺墓実測図 (1/20)	48
第39図	3・4号甕棺実測図 (1/6)	49
第40図	V-集石遺構実測図 (1/30)	50
第41図	V号墳丘墓周辺表採土器実測図 (1/6)	51
第42図	VI-28号墓実測図 (1/30)	52
第43図	VI-42号墓の標石と蓋石実測図 (1/30)	54
第44図	VI-42号墓実測図 (1/30)	55
第45図	VI-42号墓供献品出土状態実測図 (1/4)	56
第46図	1号墓実測図 (1/30)	57
第47図	2号墓実測図 (1/30)	58
第48図	VII号墓群全体図 (1/60)	58~59
第49図	VII-25号墓実測図 (1/30)	59
第50図	VII-26・51号墓実測図 (1/30)	60
第51図	VII-43号墓実測図 (1/30)	60~61
第52図	VII-44号墓実測図 (1/30)	61
第53図	VII-47・48・49号墓実測図 (1/30)	62
第54図	VII-52号墓実測図 (1/30)	63
第55図	VII-53・56号墓実測図 (1/30)	65
第56図	VII-54・61号墓実測図 (1/30)	66
第57図	VII-53・54号墓関連実測図 (1/40)	67
第58図	VII-57・58号墓実測図 (1/30)	68
第59図	VII-60号墓実測図 (1/30)	69

第60図	Ⅷ—Ⅺ号墳墓群全体図 (1/60)	70~71
第61図	Ⅷ—27・29・36号墓実測図 (1/30)	71
第62図	55号墓実測図 (1/30)	72
第63図	Ⅸ—30・31号墓実測図 (1/30)	73
第64図	Ⅸ—32号墓実測図 (1/30)	74
第65図	X—34・59号墓実測図 (1/30)	75
第66図	X—35号墓実測図 (1/30)	77
第67図	X—41号墓実測図 (1/30)	78
第68図	Ⅺ—39・62号墓実測図 (1/30)	79
第69図	Ⅲ—46・Ⅳ—50・Ⅴ—63号墓実測図 (1/30)	81
第70図	墳墓群出土土器実測図① (1/4)	83
第71図	墳墓群出土土器実測図② (1/4)	84
第72図	墳墓群出土土器実測図③ (1/4)	86
第73図	墳墓群出土土器実測図④ (1/4)	88
第74図	墳墓群出土土器実測図⑤ (1/4)	91
第75図	6号墓出土方格規矩渦文鏡 (1/1)	93
第76図	8号墓出土三角縁画像鏡 (1/1)	94
第77図	Ⅲ号墳墓群出土小形仿製鏡 (1/1)	95
第78図	19号墓出土三角縁盤龍鏡 (1/1)	96
第79図	I号墳墓群出土玉類実測図 (1/1)	97
第80図	Ⅳ・2号墳墓群出土玉類実測図 (1/1)	99
第81図	墳墓群出土鉄劍実測図 (1/3)	100
第82図	墳墓群出土鉄器実測図① (1/2)	101
第83図	Ⅵ—42号墓出土鉄器等実測図 (1/2)	103
第84図	墳墓群出土鉄器実測図② (1/2)	105
第85図	墳墓群出土鉄器実測図③ (1/2)	106

#### D地区の調査

第86図	舟形木棺実測図 (1/30)	109
第87図	舟形木棺横断面実測図 (1/20)	110
第88図	2号墳墓実測図 (1/60)	111
第89図	2—1・3号棺実測図 (1/30)	112

第90図	2 - 2号棺実測図 (1/30) .....	113
第91図	D地区墳墓出土土器実測図 (1/4) .....	114

E地区の調査

第92図	E地区墳丘墓群発掘前地形測量図 (1/100) .....	116~117
第93図	1号墳丘墓遺構配置図 (1/60) .....	116~117
第94図	1号墳丘墓 (1号墳) 墳丘断面実測図 (1/40) .....	116~117
第95図	1号墳丘墓周溝断面実測図 (1/40) .....	117
第96図	1号墳貼石実測図 (1/30) .....	119
第97図	1号墳墳丘西側集石実測図 (1/30) .....	120
第98図	1号墳丘墓墳頂石組実測図 (1/30) .....	122
第99図	1号墳丘墓中央主体部実測図 (1/30) .....	122~123
第100図	1号墳丘墓中央主体部周辺土層断面図 (1/30) .....	123
第101図	1号墳丘墓2号棺実測図 (1/30) .....	124
第102図	1号墳丘墓東側磔床土壙墓実測図 (1/20) .....	124
第103図	2号墳丘墓墳丘断面実測図 (1/40) .....	126
第104図	2号墳丘墓遺構配置図 (1/60) .....	126~127
第105図	2号墳丘墓1号棺実測図① (1/30) .....	127
第106図	2号墳丘墓1号棺実測図② (1/30) .....	128~129
第107図	2号墳丘墓1号棺副葬品出土状態実測図 (1/4) .....	129
第108図	2号墳丘墓2号棺実測図 (1/30) .....	130
第109図	2号墳丘墓3・4号棺実測図 (1/30) .....	131
第110図	2号墳丘墓5号棺実測図 (1/30) .....	132
第111図	3号墳丘墓遺構配置図 (1/60) .....	132~133
第112図	3号墳丘墓墳丘断面実測図 (1/40) .....	132~133
第113図	3号墳丘墓東側周溝土層断面実測図 (1/40) .....	133
第114図	3号墳丘墓1号棺実測図 (1/30) .....	134
第115図	3号墳丘墓2号棺実測図 (1/30) .....	135
第116図	3号墳丘墓3号棺実測図 (1/20) .....	136
第117図	3号墳丘墓3号棺掘具痕・玉出土状態 (1/10・1/2) .....	137
第118図	3号墳丘墓3・8号棺実測図 (1/6) .....	138
第119図	3号墳丘墓4号棺実測図 (1/30) .....	139

第120图	3号墳丘墓5号棺实测图(1/30)	140
第121图	3号墳丘墓6·7号棺实测图(1/30)	141
第122图	3号墳丘墓8号棺实测图(1/20)	142
第123图	3号墳丘墓9号棺实测图(1/30)	144
第124图	3号墳丘墓10号棺实测图(1/20)	144
第125图	3号墳丘墓10号棺实测图(1/6)	145
第126图	3号墳丘墓11号棺实测图(1/30)	146
第127图	3号墳丘墓12号棺实测图(1/30)	147
第128图	3号墳丘墓13号棺实测图(1/30)	148
第129图	4号墳丘墓遺構配置图(1/60)	150~151
第130图	4号墳丘墓墳丘断面实测图(1/40)	150~151
第131图	4号墳丘墓1号棺標石·蓋石实测图(1/30)	151
第132图	4号墳丘墓1号棺实测图(1/30)	152~153
第133图	4号墳丘墓2号棺实测图(1/30)	153
第134图	4号墳丘墓3号棺实测图(1/30)	154~155
第135图	4号墳丘墓周溝·3号棺土層断面实测图(1/30)	155
第136图	4号墳丘墓4号棺实测图①(1/30)	156
第137图	4号墳丘墓4号棺实测图②(1/30)	157
第138图	4号墳丘墓4号棺墓壙土層断面实测图(1/30)	158
第139图	4号墳丘墓4号棺副葬品出土状态实测图(1/4)	158~159
第140图	4号墳丘墓5号棺实测图①(1/30)	159
第141图	4号墳丘墓5号棺实测图②(1/30)	160
第142图	4号墳丘墓5号棺墓壙土層断面实测图(1/30)	161
第143图	4号墳丘墓6号棺实测图(1/30)	161
第144图	4号墳丘墓7号棺实测图(1/30)	162
第145图	5号墳丘墓实测图(1/60)	162~163
第146图	5号墳丘墓周溝内遺構实测图(1/30)	163
第147图	5号墳丘墓周溝土層断面实测图(1/30)	164
第148图	1号墳丘墓出土土器实测图①(1/4)	165
第149图	1号墳丘墓出土土器实测图②(1/4)	166
第150图	2·3号墳丘墓出土土器实测图(1/4)	169
第151图	4号墳丘墓出土土器实测图①(1/4)	171

第152図	4号墳丘墓出土土器実測図② (1/6)	172
第153図	5号墳丘墓出土土器実測図 (1/4)	174
第154図	1号棺出土凹帯縁方格規矩鏡実測図 (1/1)	175
第155図	4号棺出土「長宜孫子」銘内行花文鏡実測図 (1/1)	177
第156図	4号墳丘墓4号棺出土玉類実測図 (1/1)	178
第157図	墳墓群出土鉄器実測図④ (1/2)	180

#### E地区北端の調査

第158図	北端地区墳墓群遺構配置図 (1/60)	182
第159図	北端地区1・2号墓実測図 (1/30)	183
第160図	2号墓出土土器実測図 (1/4)	183
第161図	2号墓出土鉄器実測図 (1/2)	183

## 付 図 目 次

付図1	徳永川ノ上遺跡遺構配置図 (1/200)
付図2	E地区墳丘墓群遺構配置図 (1/100)

# I はじめに

## 1 調査の経過と調査の組織

一般国道10号線のバイパスとなる椎田道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査に至る経過については、『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第1集「辻垣ヲサマル遺跡」(1993年)を参照されたい。

徳永川ノ上遺跡群の発掘調査は、昭和63年6月から平成2年10月までの間で、建設工事の工期や用地買収に合わせて北九州国道工事事務所と協議し、適宜実施した。

徳永川ノ上遺跡は、用地買収が完全に終了しないままに、工事の工程上買収済の地区から発掘調査を開始しなければならなかったため、便宜上地形に応じてA～Eの地区分けをして調査することになった。したがって、椎田道路第4調査地点の中央部にあたるB地点の古墳群が集中する地区から発掘調査が始まった。

今回報告する弥生後期終末から古墳前期の墳墓群は、平成元年1月からC地区古墳群下層遺構として調査を始めることになった。

4月になるとC地区の3群の墳墓群から、鏡片・玉類・鉄器類が出土し始め、試掘で確認していた荒らされた石棺墓を含む墳墓群の内容が予想以上に重要な遺跡であることが認識できるようになってきた。なお、19号墓の龍虎(盤龍)鏡は、復原すると完形になるものであった。土壙墓(石蓋・木蓋を含む)から鏡が4面分も出土し、荒らされた石棺墓を含めると、鏡の保有数がさらに多いことを暗示している。

5月になると、大型石蓋土壙墓(42号墓)の棺外供献品として、弥生最大の鉄製釣針5本も出土し、大半の墳墓に鉄器を副葬し、赤色顔料の量もこれまでで最大量となってきた。

6月には、墳丘が現存するE地区の墳丘墓群の調査を始めたが、未買収地区が隣接するなど排土作業などに手間取ることが多い。

7月にはD地区の調査を始めたが、8月になるとD・E地区を中断してA地区を先行させることになった。

9月になるとA地区の調査が時を越したことからE地区の調査を再開し、この間に買収済となった地区の表土剥ぎも平行して実施する。21日にA地区が完了し、D地区も再開した。

10月には、D地区内にある高压電線用鉄塔をC地区東側用地外に移転するために、C地区拡張区として発掘調査することになった。遺構は、弥生終末の住居跡などで墳墓群が確認できなかったが、時期が墳墓群と重複することから、両者の関連が今後問題となって来る。



第1図 徳永川ノ上遺跡の位置と周辺関連遺跡分布図(1/100,000)

- |            |           |           |             |           |
|------------|-----------|-----------|-------------|-----------|
| 1. 徳永川ノ上遺跡 | 2. 稲童石並遺跡 | 3. 前田山遺跡  | 4. 吉田神社境内遺跡 | 5. 上所田遺跡  |
| 6. 統命院遺跡   | 7. 山鹿遺跡   | 8. 本庄遺跡   | 9. 平遺跡      | 10. 津留遺跡  |
| 11. 石塚山古墳  | 12. 番塚古墳  | 13. 御所山古墳 | 14. 石並古墳    | 15. 稲童古墳群 |
| 16. 辻垣遺跡群  | 17. 居屋敷遺跡 | 18. 神手遺跡  | 19. 綾塚古墳    | 20. 桶塚古墳  |

表1 一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財一覧表

平成7年3月

箇所名	地点	遺跡名	遺跡の概要	(当初面積) 調査面積・㎡	調査完了 年月
一般国道10号 椎田道路 (5工区)	1	辻垣	環濠集落 旧河落道	(33,400) 34,500	S62.S63
	2	徳永A 居屋敷	窯横穴墓	(980) 1,050	H1.3
	3	徳永B 鋤先	古土近世墓 墳墓	5,700	H2.10
	4	徳永C 川ノ上	墳丘墓群 弥生・古墳	(11,250) 12,500	H2.10
椎田道跡(5工区)合計				(51,330) 53,750	100%完
	5	山添	推定地	1,000	H1.11
一般国道10号 椎田道路 (10工区)	6	石丸A	推定地	(3,000) 142	S63.8
		石丸B	縄文集落	3,500	S63.12
	7	中村A	散布地	7,700	うち6,000㎡ S63.12済 H1.6完
	8-A	中村B	推定地	(3,000) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	8-B	中村B	推定地	(6,800) 150	H1.12
	9-A	黒峰尾	古墳群	(14,780) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	9-B	黒峰尾	古墳群	5,000	S62.6
	10	選仏寺	推定地	(1,050) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	11	東舟入	推定地	(600) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	12	広山	推定地	(9,000) 0	試掘結果 遺跡ナシ
椎田道路(10工区)合計				(55,430) 12,350	100%完

10月21・22日に現地説明会を実施したところ、両日で2,000人近い見学者があり、大盛会であった。

11月になるとC地区拡張区が終了して埋戻すと同時に、C地区全体も最終チェックにはいり、墳墓群の赤色顔料の取上げも行う。

12月には、C地区の石棺墓の石材抜き取りと最終実測を行うと同時に、E地区の墳丘と墳墓群の蓋石の写真撮影や実測を行い、蓋石の開棺を始めたところ、2号墳丘墓1号棺から鏡片・玉・鉄器が出土し始める。

平成2年1月には、4号墳丘墓の荒らされた3号棺から鉄器類が出土し始め、23日になると4号棺で鏡の一部を確認し、後日に完形の内行花文鏡と勾玉・管玉・素環頭刀子が共伴する盟主的棺であることが判明した。

3月29日にC地区を調査完了し、墳墓群より後に発掘した井戸や落とし穴など、深く危険な穴をユンボにより埋戻して平成元年度の事業を終了する。

平成2年4～5月は、E地区墳丘墓の残りとして、墳丘墓下の住居跡・落とし穴や、北側の中世遺構や地下式横穴の調査を続行し、北端の谷部の未買収地区を残して、5月11日に調査を完了する。

徳永川ノ上遺跡の出土品整理は、平成5年度から始まり、平成6年度に3分冊のうちの第1冊目、平成7年度に第2冊目を刊行するものである。

調査の組織と関係者は、下記のとおりである。

建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所

	平成元年度	平成2年度	平成7年度
所長	高橋松男	森久	大内英吉郎
副所長(技術)	久谷秀明	久谷秀明	高崎寿男
建設専門官	田中睦憲	田中睦憲	安部純弘
建設監督官	中川博勝	田中常美	
	桃坂繁	児玉孝夫	
工務課長	衛藤恒利	溝上利毅	中川博勝
工務係長	諏訪憲二		徳重栄紀
調査課長	久良木裕	松崎安則	田中光助
調査係長	田中敏則	田中敏則	竹下卓宏
建設技官	井上敏彦	井上敏彦	田辺稔

福岡県教育委員会

総括

教育長	御手洗 康	御手洗 康	光安 常喜
教育次長	淵上 雄幸	濱地 甫伯	松枝 功
指導第2部長	月森 清三郎	月森 清三郎	丸林 茂夫
文化課長	六本木 聖久	六本木 聖久	松尾 正俊
参事			柳田 康雄
課長補佐	平 聖峰	安野 義勝	元永 浩士
技術補佐	宮小路 賀宏	石松 好雄	
参事補佐	柳田 康雄	柳田 康雄	井上 裕弘
		副島 邦弘	橋口 達也

庶務

管理係長	池原 脩二	池原 脩二	柴田 恭郎
事務主査		和田 健作	沢田 俊夫
主任主事			高田 裕康

調査(報告)

参事兼文化財保護室長 (柳田 康雄)

参事補佐兼調査班総括 柳田 康雄

技師 緒方 泉・小川 泰樹

なお、調査補助員として、大西智和・長屋伸・鷺見昌尚・笠由美子が調査に参加した。

報告書作成については、図面の整理等で関久江・土山真弓美・山田智子・小国みどり・穴見裕子・高島妙子・安永啓子・近藤京子・森紀子・坂本恵津子・安武道子が参加した。

## 2 位置と環境

徳永川ノ上遺跡は、福岡県京都郡豊津町大字徳永に所在する徳永遺跡群の一部で、小字名が南側から川ノ上・果願寺に所属する。徳永川ノ上遺跡は、工事の工程上などから地区分けして調査したが、南側のA・B地区が川ノ上、北側のC～E地区が果願寺に位置し、副葬品の豊富な弥生終末の墳墓群が果願寺に属することになるが、遺跡名としては総称して徳永川ノ上遺跡とした。椎田道路の建設省工事分のこの第4地点は、日本道路公団工事分の第1地点に接続している。その第1地点が神手遺跡(註1)で、古墳群を主体とした遺跡範囲が小字神手になり、道路幅の発掘調査地区の弥生前期環濠集落を主体とした地区が小字川ノ上の南端にあたる。

徳永遺跡群としては、この地に第2地点の徳永居屋敷遺跡(註2)が弥生墳墓・初期須恵器窯跡・古墳横穴墓群、第3地点の鋤先遺跡(註3)が縄文落とし穴群・古墳横穴墓群・中近世遺

構群として調査されている。

徳永川ノ上遺跡は、長峽川・今川・<sup>はらい</sup>祓川の3本の河川によって形成された京都平野の南東側で、祓川右岸の標高24mから30.2mの洪積台地上に立地している。対岸にあたる祓川左岸は、標高差が8mも低い水田地帯で、その水田地帯の中央にある微高地で豊前国府跡が確認されている。本報告が弥生終末から古墳前期の墳墓群であることから、周辺遺跡の紹介も同時代に限定したい。

福岡県の旧京都郡と築上郡を合わせて京築地方と呼んでいるが、この地方の弥生終末から古墳初期は、かならずしも明らかになっていない。この地方では、九州での最古型古墳とされてきた苅田町の石塚山古墳も発掘調査によって内容の一部が明らかになると同時に、これより古式の福岡市那珂八幡古墳や小郡市津古生掛古墳の存在が明らかになり、「畿内型古墳」(註4)・「定型化古墳」の再考の声も高まってきた。さらに弥生終末の土器型式の認定についても、西新町式と庄内式・布留式土器が併行することが、この地域の苅田町松蔭天疫神社1号墳等でも明らかになってきたし、これより古式で近年になって西新町式に含まれるようになった行橋市竹並A-10号墳(註5)のような高杯の存在もある。拙稿では(註6)、竹並A-10号墳出土土器を弥生終末、松蔭天疫神社1号墳出土土器(註7)を古式土師器とする立場から述べる。

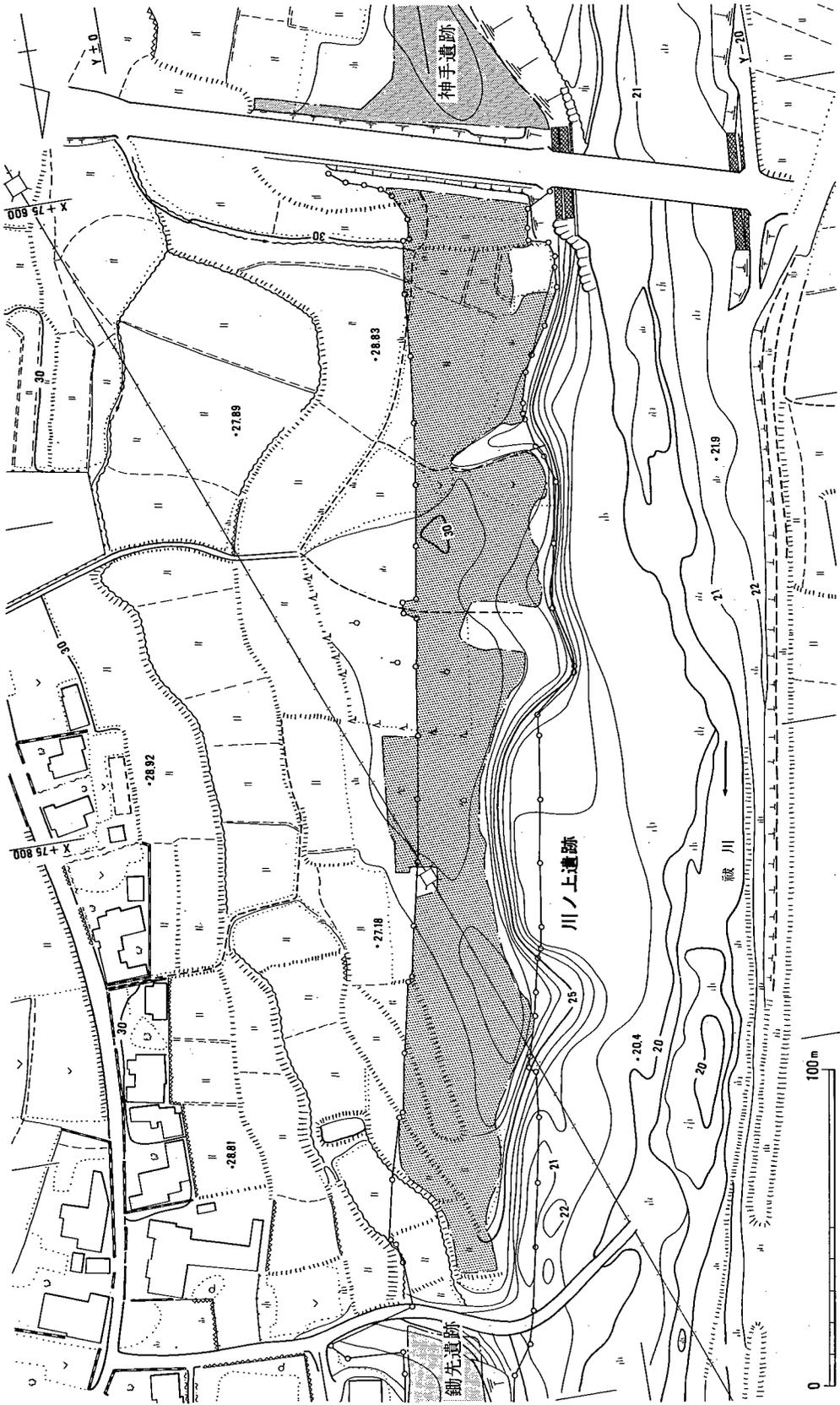
京築地方では、弥生終末から古墳初期の集落として、苅田町木ノ坪遺跡(註8)・豊前市団後遺跡(註9)・大平村上唐原遺跡(註10)・築城町十双遺跡(註11)、そして豊津町徳永遺跡群の神手遺跡と徳永川ノ上遺跡などが知られている。この他に、住居跡は検出されていないが、溝や谷で多量の遺物が出土した行橋市辻垣遺跡群(註12)などと未報告の遺跡も多い。

墳墓関係遺跡としては、後漢鏡を副葬していた行橋市前田山遺跡(註13)・稲童石並遺跡(註14)・勝山町上所田遺跡(註15)・犀川町山鹿石ケ坪遺跡(註16)・豊津町平遺跡(註17)・大平村穴ケ葉山遺跡(註18)などがあり、小形仿製鏡を副葬していた犀川町続命院遺跡(註19)・本庄遺跡(註20)・山鹿石ケ坪遺跡(註21)・タカデ遺跡(註22)・前田山遺跡などがある。

前期古墳としては、石塚山古墳(註23)・松蔭天疫神社古墳群(註7)・竹並古墳群(註5)・大平村能満寺古墳群(註24)などがある。石塚山古墳は、墳丘規模120m前後の「畿内型」前方後円墳の典型とされ、長大な竪穴式石室に三角縁神獸鏡7面以上・獸帯鏡などを副葬していた。能満寺古墳群は、前方後円墳(3号墳)・方墳(2号墳)・円墳(1号墳)の各1基から構成され、2・1・3号墳の順に築造されたと報告されている。出土した土師器から判断すると、2番目に築造されたとされる1号墳でさえ石塚山古墳出土土器より古式であり、最後の築造とされる前方後円墳が時期の前後関係を判断できるような土器資料がないことから、京築地方においても石塚山古墳以前の古墳の出現の可能性が考えられるようになってきた。

## 註

- 註1 福岡県教育委員会「神手遺跡」『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』6、1992
- 註2 福岡県教育委員会「居屋敷遺跡」『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』2、1996
- 註3 福岡県教育委員会「鋤先遺跡」『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』6、1995
- 註4 小田富士雄「畿内型古墳の伝播」『古代の日本3・九州』1970、角川書店
- 註5 竹並遺跡調査会『竹並遺跡』1979
- 註6 柳田康雄「土師器の編年—九州」『古墳時代の研究』6、1991、雄山閣
- 註7 苅田町教育委員会「松蔭天疫神社古墳群」『苅田町文化財調査報告書』10、1988
- 註8 苅田町教育委員会「黒添・法正寺地区遺跡群」『福岡県苅田町文化財調査報告』6、1987
- 註9 福岡県教育委員会「団後遺跡・西一町田遺跡・炭山遺跡」『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』3、1994
- 註10 福岡県教育委員会「上唐原遺跡Ⅰ」『一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告』2、1995
- 註11 福岡県教育委員会「十双遺跡」『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』8、1992
- 註12 福岡県教育委員会「辻垣畠田・長通遺跡」『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』2、1994
- 註13 行橋市教育委員会「前田山遺跡」『行橋市文化財調査報告書』19、1987
- 註14 定村貢二
- 註15 定村貢二・渡辺正気「福岡県京都郡勝山町上所田の石蓋土壙群」『九州考古学』7、8、1954
- 註16 鏡山猛「石蓋土壙に関する覚書」『九州考古学論攷』1972、吉川弘文館
- 註17 児玉真一「豊津町発見の箱式石棺墓と副葬品」『九州考古学』55、1980
- 註18 大平村教育委員会「穴ヶ葉山遺跡」『大平村文化財調査報告書』8、1993
- 註19 古賀武男
- 註20 長嶺正秀「豊前国における古鏡について」『亀田南遺跡』『勝山町文化財調査報告書』1、1981
- 註21 鏡山猛「石蓋土壙に関する覚書」『九州考古学論攷』1972、吉川弘文館
- 註22 犀川町教育委員会「城井遺跡群」『犀川町文化財調査報告書』3、1992
- 註23 苅田町教育委員会「石塚山古墳発掘調査概報」『苅田町文化財調査報告書』9、1988
- 註24 大平村教育委員会「能満寺古墳群」『大平村文化財調査報告書』9、1994



第2図 徳永川ノ上遺跡発掘区地形図(1/2000)

## Ⅱ 遺構と遺物

### 1 C地区の調査記録

#### (1) 遺構

C地区では、地区の北側半分に群集する弥生終末期から古墳初期に属する墳墓群を本報告書で取扱うことにし、それ以前の遺構を前年の報告書である「徳永川ノ上遺跡Ⅰ」で報告したが、甕棺墓のみ今回報告と同じ関連番号を付していたことから、C地区南側に位置する時期の違う1号甕棺墓も報告する。

C地区の主体的な遺構は、地区の北半部の祓川に沿った西側に南北方向に群集する墳墓群で、前回報告した方形竪穴住居跡が、一時期に東側に共存している。しかし、竪穴住居跡が一部焼落していることと、住居の大半が意識的に埋め戻されていること、さらに北側のD・E地区で完全に住居跡と墳墓群が重複していることから考えると、墳墓群の成立と構成が問題になってくる。そこで、C地区では、墳墓群に墳丘の一部や周溝が検出されたことから、墳墓群の大半が墳丘をもった群から構成され順次築造されたものとして、墳墓群ごとに説明する。したがって、調査時に各遺構に付けた通し番号をそのまま利用しているので、第2表の墳墓一覧表は、番号順に並んでいない。さらに、C地区南側の弥生中期に属する土壇墓（既報告）と甕棺墓各1基を今回に含め、墳墓ではなかった33号墓を欠番とし、次回に報告する方墳群と同時期のC地区南側に位置する45号墓を次回に報告することとした。

墳墓群は、C地区中央部に位置する一群が独立して営まれ、明らかな区画をもった一群として認識可能なことから、これをⅠ号墳墓群として北側に向って順次Ⅺ号墳墓群までを想定した。ところが、群・周溝などから分離するものもあるので、これらは最も近い墳墓群のところまで説明することにした。

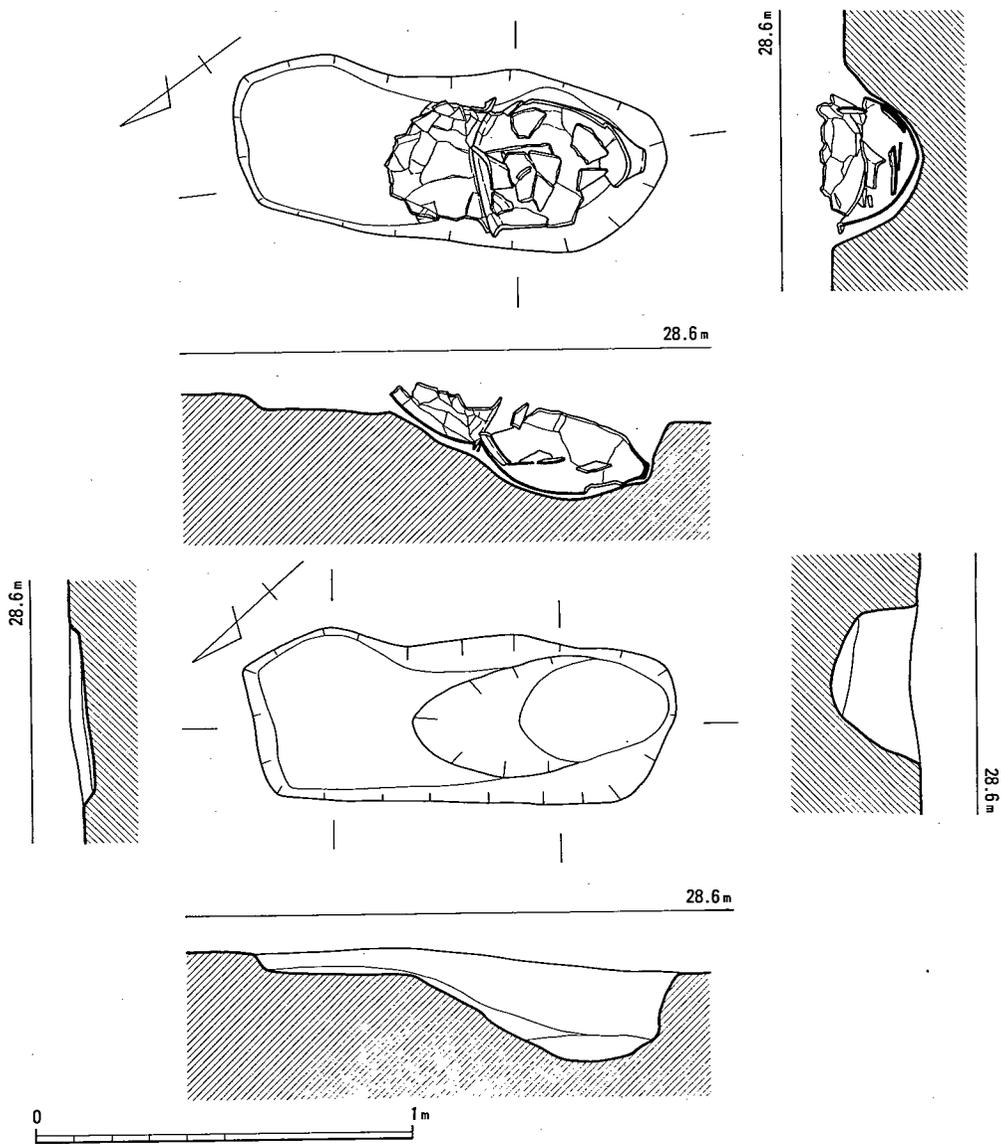
#### 1号甕棺墓（図版17-1、第3図）

1号甕棺墓は、C地区の南側の1号土壇墓の東側に位置する。甕棺墓は、削平によって上甕の大半と下甕の一部を欠損し、墓壙も浅く検出された。検出された墓壙の現状は、平面形が瓢形を呈することから、本来は竪穴部に横穴を穿つ墓壙形態をとるものと思われる。墓壙の規模は、全長116cm、竪穴部幅44cm、横穴部幅48cm、竪穴部深さ5cm、横穴部深さ23cmで残っていた。墓壙内の甕棺は、小型甕を利用した合口式で、口縁部どうしを直接合わせている。甕棺は、主軸方向をN30°Eに向け、傾斜角度30度に埋葬されていた。

#### 甕棺（図版17-2、第4図）

上甕は、口縁部付近が復原できたにすぎない。口縁部は、く字形に屈曲し、口唇部内側を摘上げ、口縁下外面に断面三角形突帯一条をめぐらす。外面に煤が付着しているので、日常煮沸甕を転用している。

下甕は、完形に復原できた。口縁部形態は、上甕と同じく摘上げ口縁で、胴部外面にハケ目、内面がナデ調整され、底部が割合薄造りで外面がくぼむ。外面の底部付近以外に煤が付着し、



第3図 1号甕棺墓実測図(1/20)

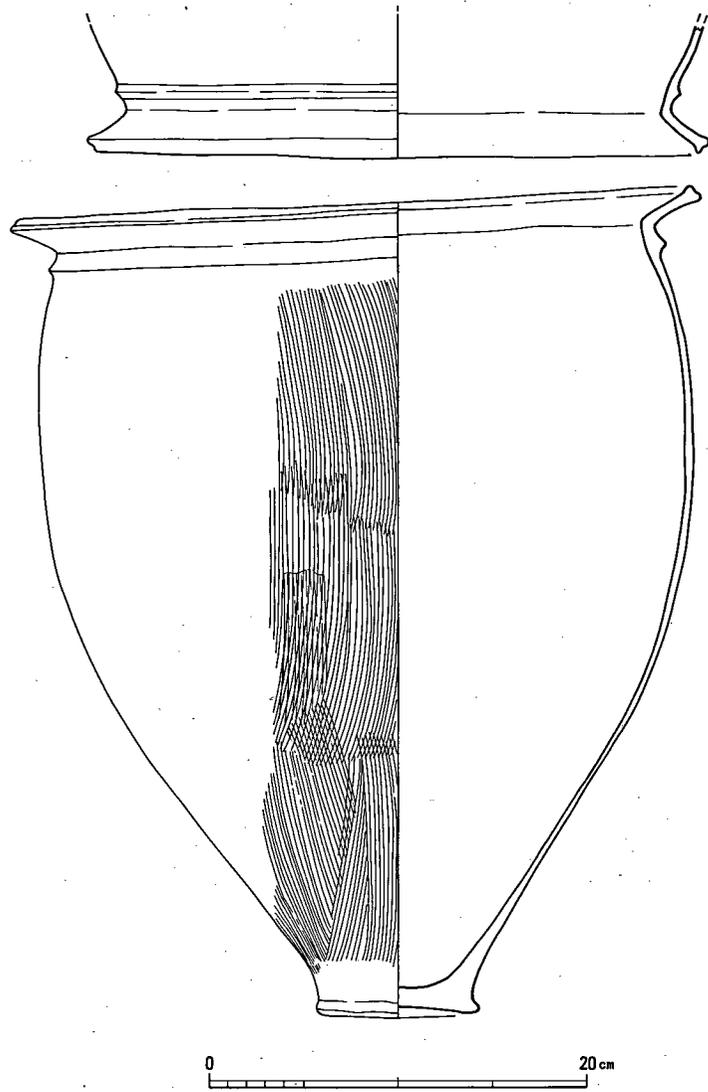
上甕同様に日常煮沸甕の転用である。甕の大きさは、口径35.6cm、器高44.7cm、胴最大径34.6cm、底径8.6cm。甕棺の時期は、弥生中期末で、同時期の遺構としてB地区に炭化米が出土した3号住居と27号貯蔵穴（長方形土坑）がある。

① I号墳墓群(図版2-2、19-1、第5図)

I号墳墓群は、弥生終末から古墳初期に属する一連の墳墓群でC地区の南端に位置するだけでなく、墳墓群全体の南域をも占めている。I号とした墳墓群は、北側の他の群から独立するだけでなく、墳墓群の西側で検出されて1号不整形土坑とした遺構が、北側のV

号墳墓群などの周溝の一部に該当することから、12号墓を墳丘または区画の角に当るものとして考えると、3号・11号・12号・9号・8号・6号を結ぶ線がほぼ直角となり、長方形の区画が想定できる。区画の規模は、周溝（1号不整形土坑）と12号墓までの間隔が約3mであることから、東北端の3号墓の北と東側にそれぞれ3m、南端の7号の南側にも3mあるものとする、南北径約17m、東西径約15mの長方形となる。

区画内には、現状で3号から13号墓の11基が検出されているが、中央部を東西に掘込まれた



第4図 1号甕棺実測図(1/4)

小道が走る上に、大半の7基にまったく墓壙が残っておらず、他の残っているものでも全体規模が判明するのが11号墓のみである。墳丘の保存が比較的良好であったE地区の墳丘墓群を参考にとすると、墓壙の深さが小児用でも60cm以上あることから、この墳墓群も、60cm以上が削平されているものと考えなければならない。したがって、当然I号墳墓群も墳丘墓と考え、墳丘内の中央部と東南部の空白地区は、削平によって消滅したのであろう。しかも、副葬品を持った一群の中央が空白であるところがとくに惜しまれる。

### 3号墓（図版21-1、第6図3）

3号墓は、墳墓群の北東角に位置し、墓壙が削平され、棺本体の深さ35cmが残っていた。棺本体は土壙で、壁面の崩壊がほとんどないことから木蓋土壙墓と考える。土壙墓の特徴は、小口の広い東側が頭部で、床面に高さ7cmの削出しの枕を付設し、両小口に丸味をもち、枕裾部に最大幅をおき、西側足部小口壁を側面壁以上に掘込んでいる。床面では、枕の下付近で若干の赤色顔料が検出された。

### 4号墓（図版21-2、第6図4）

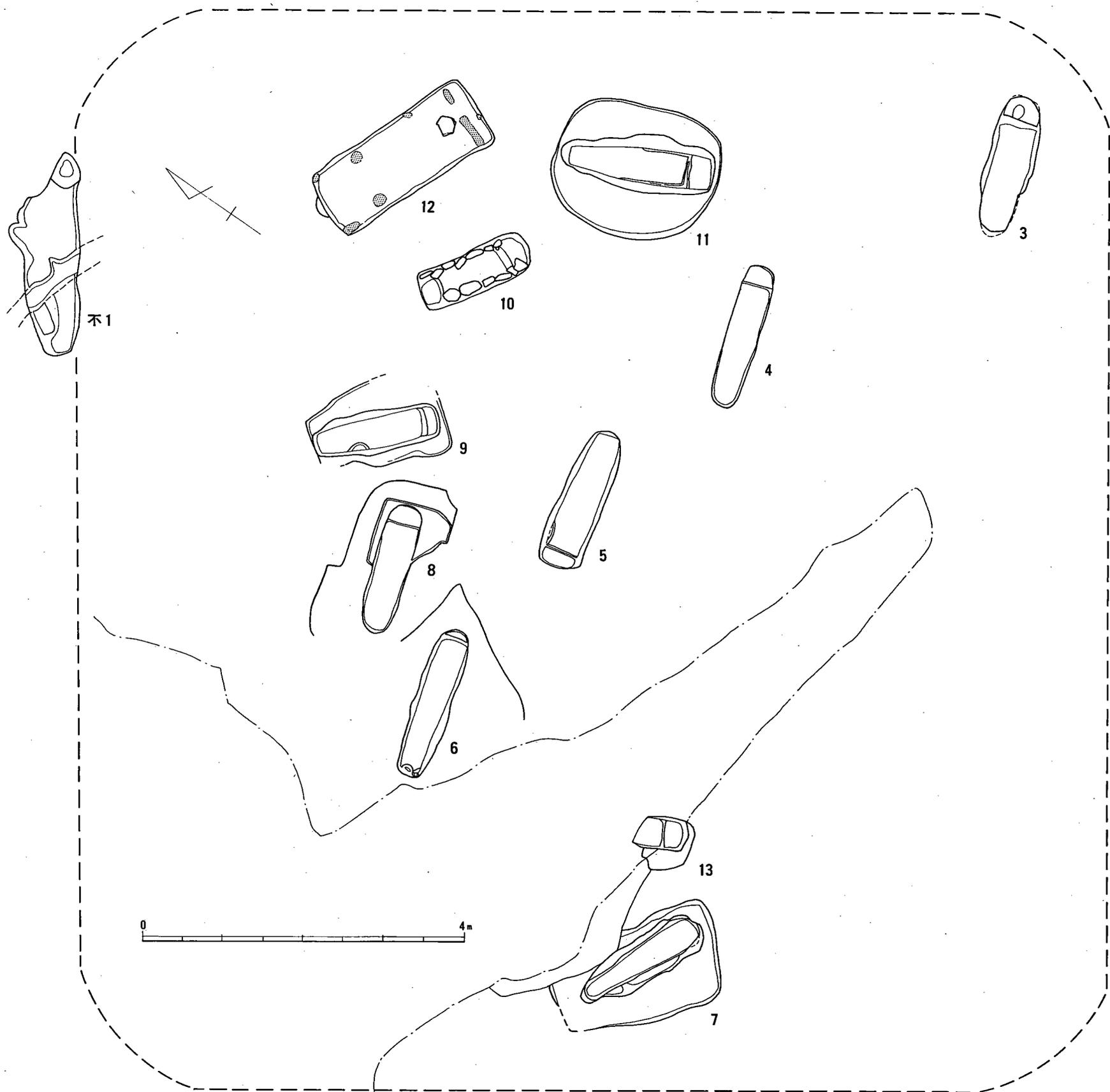
4号墓は、墳墓群の中央近くに位置しているが、これも墓壙が残らず、棺本体の深さ30cmであった。4号墓も、壁面の崩壊がないうえに、棺内中位に多量の灰褐色粘土が崩落していたことから木蓋土壙墓と考える。床面には、東側小口に削出枕をもち、最大幅を胸部付近とし、両小口が丸味をもつ。床面は、わずかに傾斜し、足側小口近くが最も深くなる。また、床面中央付近に炭化物が散乱していたが、木蓋が炭化したものであろうか。なお、床面全体に赤色顔料が5cm前後の厚さで検出された。

### 5号墓（図版21-3、第7図5）

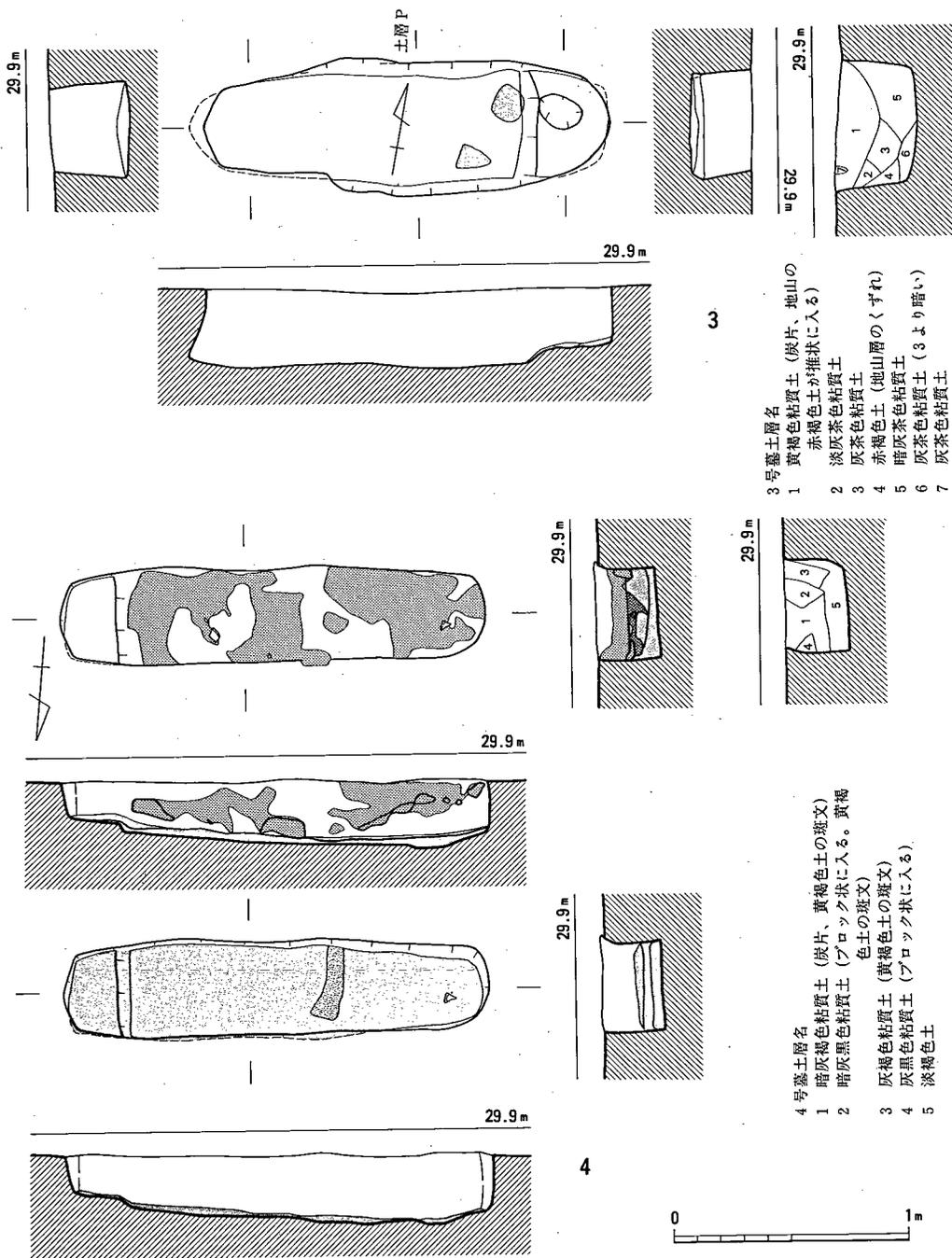
5号墓は、墳墓群の中央近くの4号墓西側にあり、やはり墓壙が削平され棺本体が38cmの深さで残っていた。土壙は、多少壁面の崩壊があるものの、棺内が荒らされていないことから木蓋土壙墓と考える。床面は、西側小口に削出枕を付設し、両小口が角張る。最大幅は胸部付近にあり、壁面が多少内傾している。床面左脇部に切先の足部に向けた鉄剣が副葬されていた。また、床面には全面に赤色顔料が敷かれている。

### 6号墓（図版4-1、22、第7図6）

6号墓は、墳墓群の西辺の中央付近に位置し、墓壙の一部が検出された。墓壙は、長方形墓壙に棺本体を対角線上に配置する型式で、東側角床面に赤色顔料が検出された。棺自体も深さ45cmであることから、棺自体は壁面と共に良く保存されていた。土壙は、床面に枕がないが、



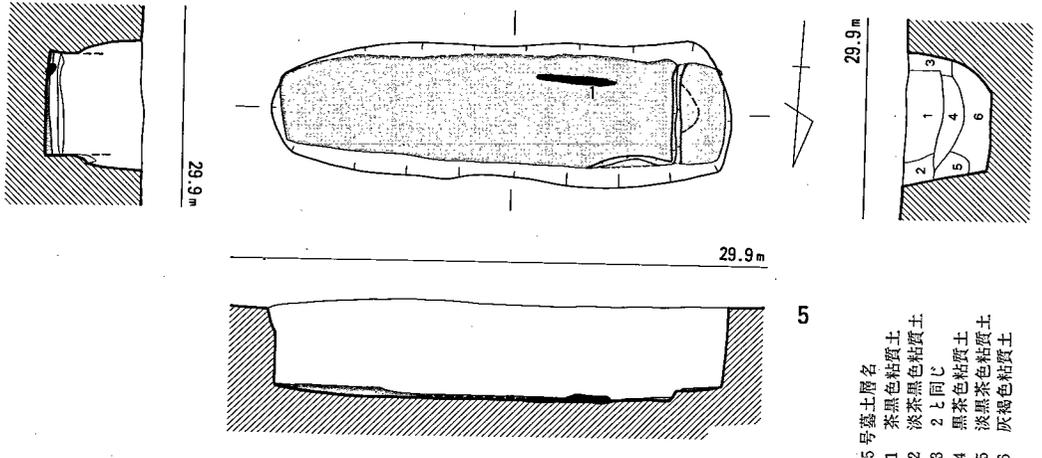
第5図 徳永川ノ上I号墓群全体図(3~13号墓)(1/60)



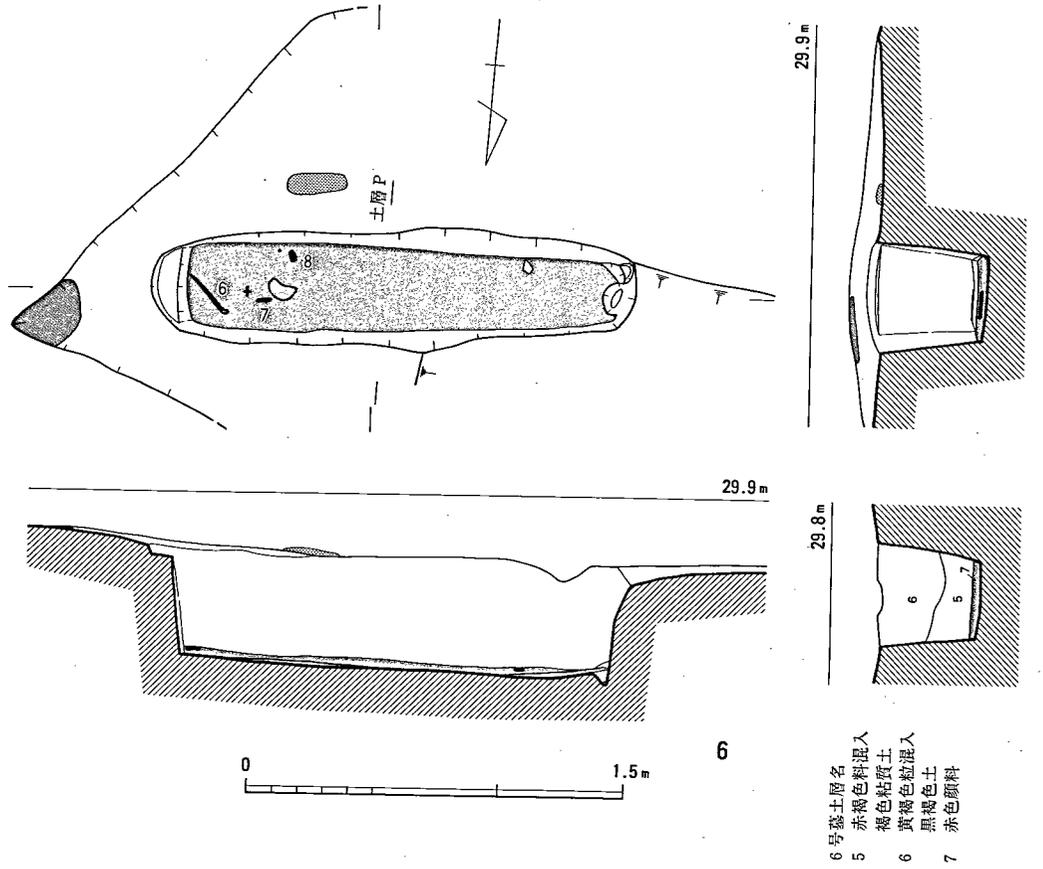
- 3号墓土層名
- 1 黄褐色粘質土 (炭片、地山の赤褐色土が推状に入る)
  - 2 淡灰茶色粘質土
  - 3 灰茶色粘質土
  - 4 赤褐色土 (地山層のくずれ)
  - 5 暗灰茶色粘質土
  - 6 灰茶色粘質土 (3より暗い)
  - 7 灰茶色粘質土

- 4号墓土層名
- 1 暗灰褐色粘質土 (炭片、黄褐色土の斑文)
  - 2 暗灰黑色粘質土 (ブロック状に入る。黄褐色土の斑文)
  - 3 灰褐色粘質土 (黄褐色土の斑文)
  - 4 灰黑色粘質土 (ブロック状に入る)
  - 5 淡褐色土

第6図 I-3・4号墓実測図(1/30)



- 5号墓土層名
- 1 茶黑色粘質土
  - 2 淡茶黑色粘質土
  - 3 2と同じ
  - 4 黒茶色粘質土
  - 5 淡黒茶色粘質土
  - 6 灰褐色粘質土



- 6号墓土層名
- 5 赤褐色粘質土
  - 6 黄褐色粘質土
  - 7 赤色顔料

第7图 I-5・6号墓実測图(1/30)

東側の幅が広く、副葬品が集中していることから東枕であり、胸部付近が最大幅となっている。両小口部が割合角張り、足部の小口下床面に小さな掘込みが見られる。この土壙も壁面の保存が良いことと、棺内が荒されていないことから、木蓋土壙墓と考える。

床面には、全面に赤色顔料が敷かれ、頭部に切先を南東に向けた素環頭刀子、胸部中央に鏡面を上にした方格規矩鏡片と、鏡側に切先を向けた鉄刀子、さらに左脇に鉄鏃が副葬されていた。

#### 7号墓 (図版23、第9図7)

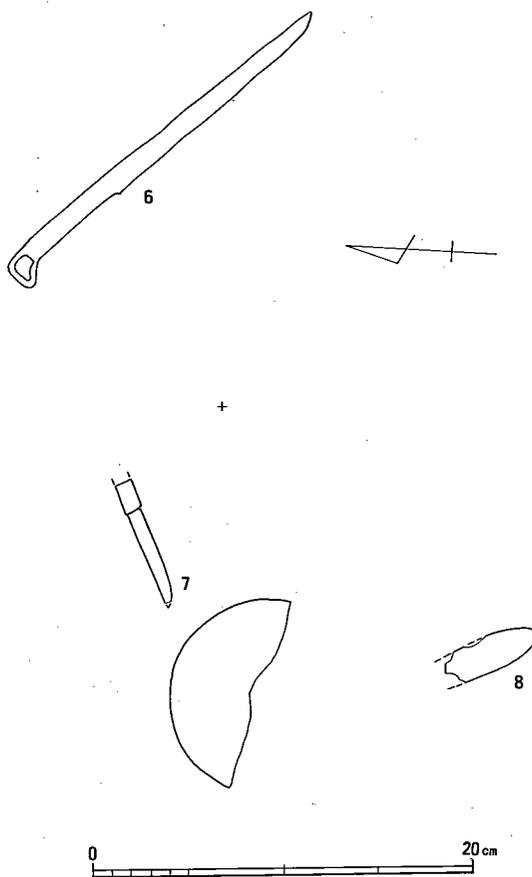
7号墓は、墳墓群の南端に位置し、この群唯一の石蓋土壙墓である。墓壙もかろうじて残存し、不整長方形墓壙に対角線上に棺を掘込んでいる。

石蓋は、不揃の板状片岩6枚と東側から2番目の1枚に玄武岩らしき河原石が使用されている。石蓋の下側にあたる棺側全面に赤色顔料が塗布されている。石蓋には、粘土目張りが見られない。

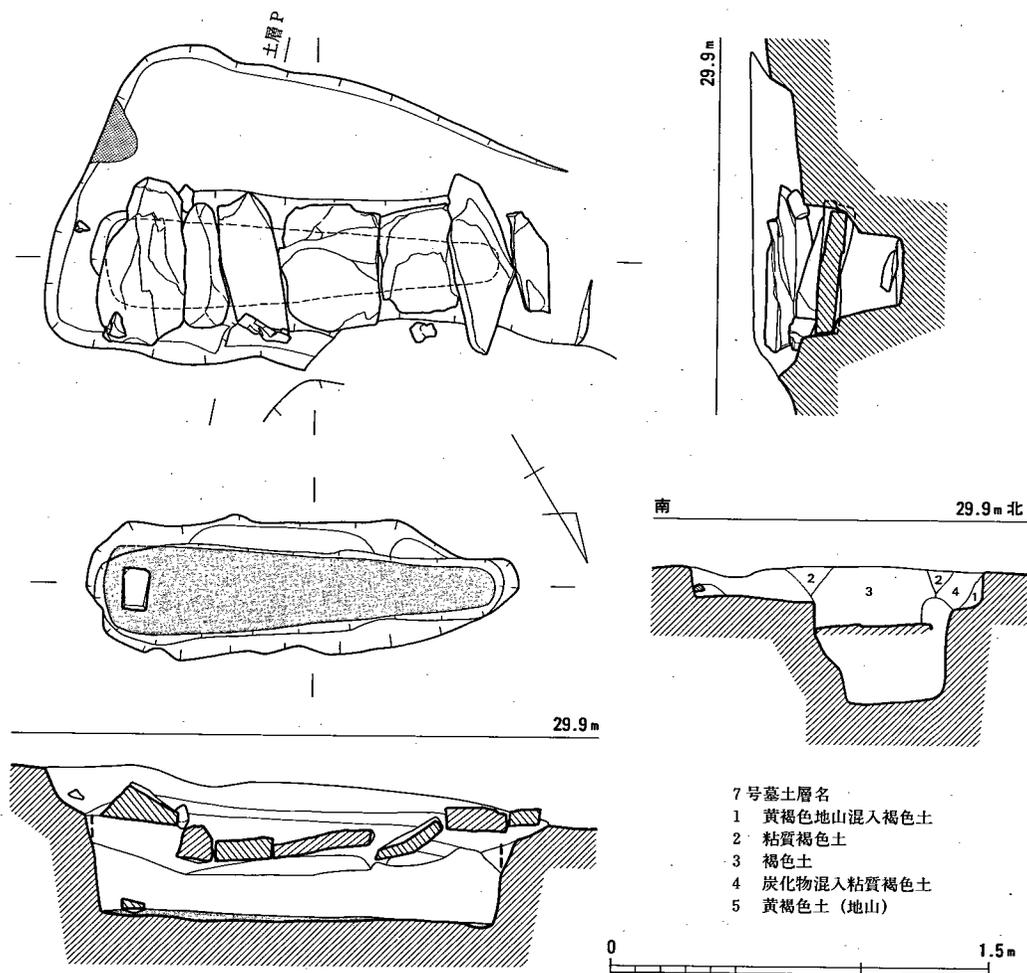
棺本体は、両小口部に丸味があり、東側床面に長方形の自然石片岩の板石を枕としている。枕石は、幅10cm、長さ16cm、厚さ5cmの大きさで、床面全体に赤色顔料を敷いた後に置かれている。床面の最大幅は肩部にあり、床面が平坦である。壁面は、蓋石の中央部が中途迄陥没しているために崩落も中途にまで及んでいるが、保存のよい部分を見ると、上方が広がる傾斜をもっている。

#### 8号墓 (図版4-2・3、第10図8)

8号墓は、墳墓群の西辺で6号墓の北側に隣接した位置に営まれている。かろうじて床面の



第8図 I-6号墓副葬品出土状態実測図(1/4)

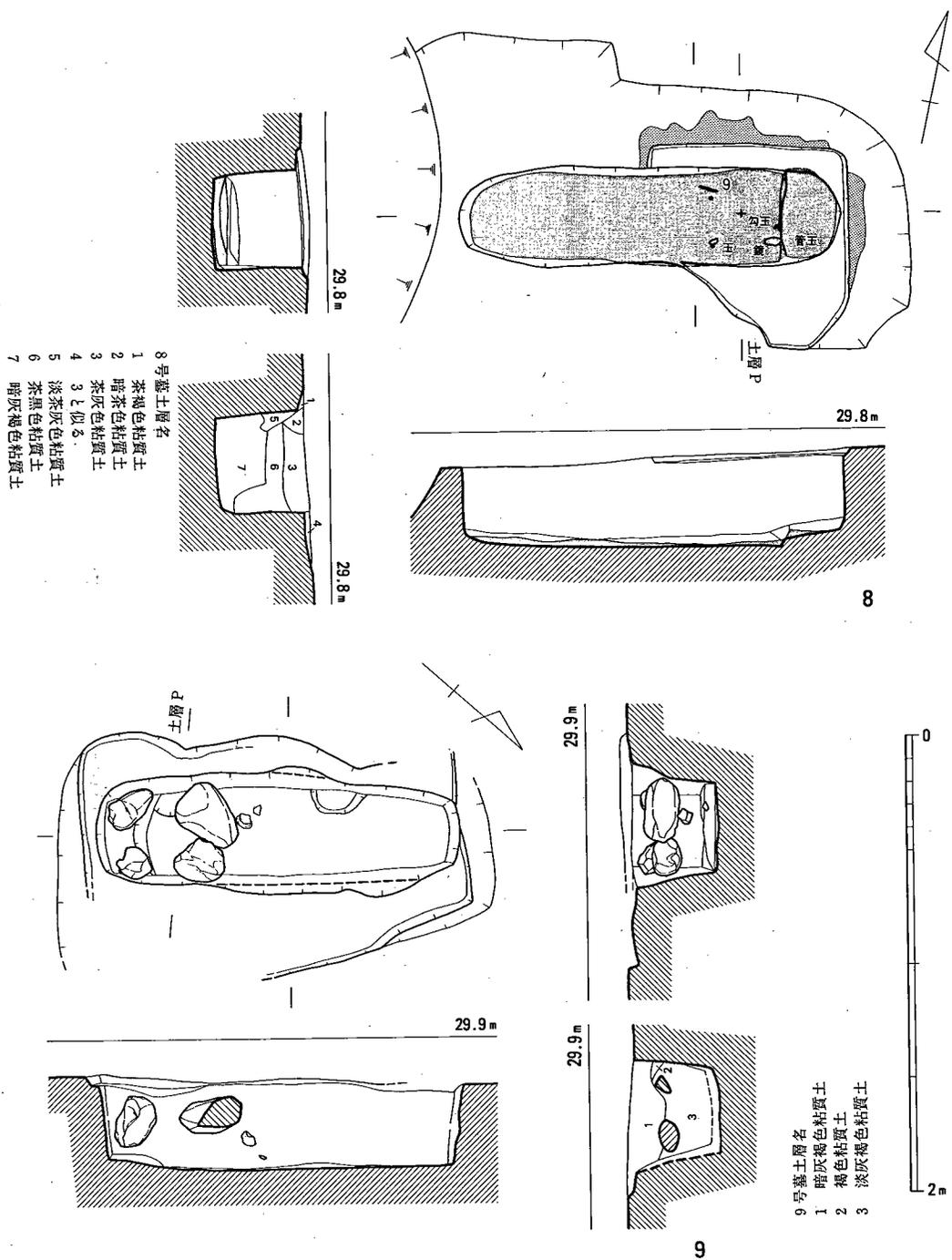


第9図 I-7号墓実測図(1/30)

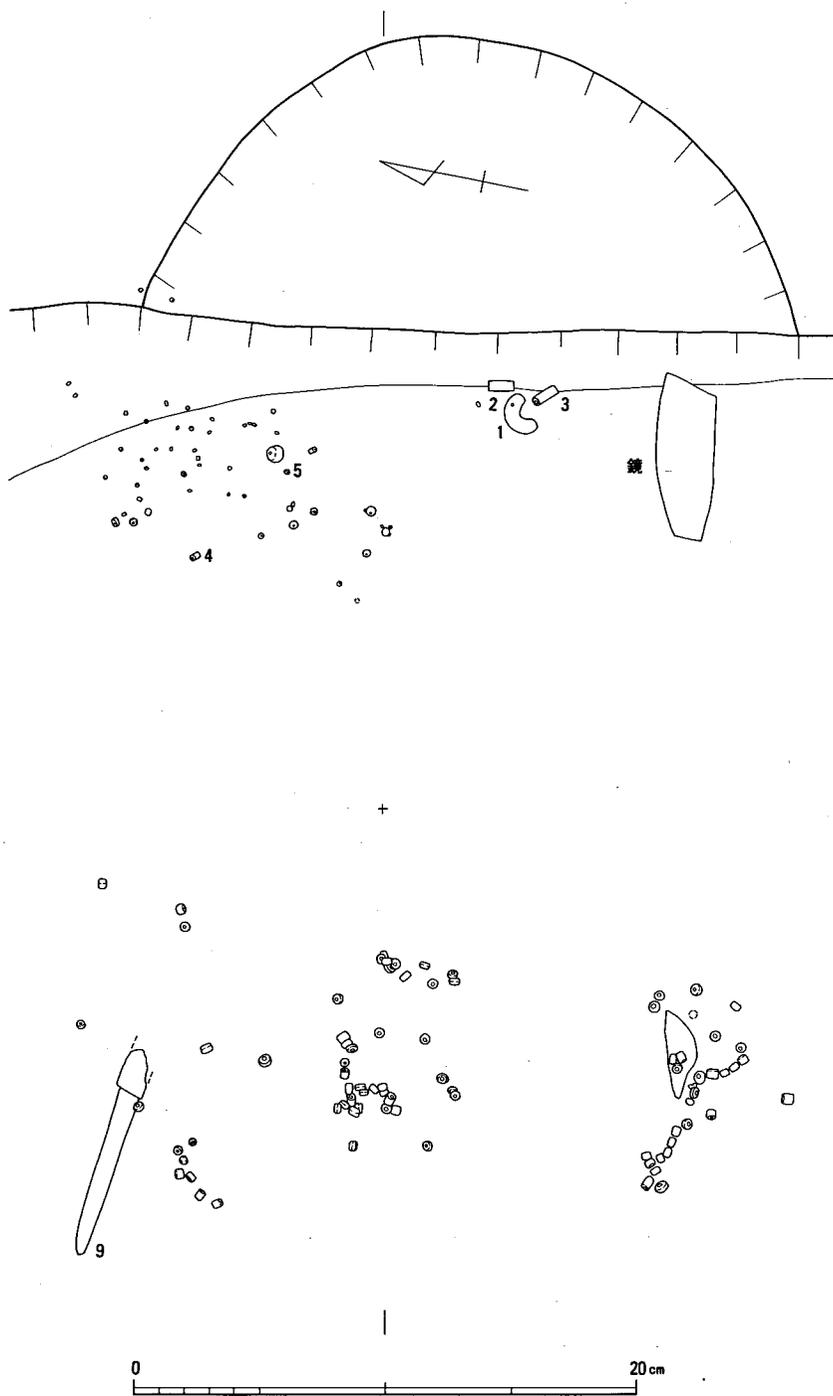
一部が検出できた墓壇は、平面形が隅丸長方形であるが、棺本体の頭部にあたる東側半分に一段低い平坦な部分があり、周囲を灰褐色粘土で囲んでいる。この平坦な一段低い部分は、木蓋の圧痕と思われるが、その木蓋も粘土目張りから考えると幅90cm、長さ87cmの1枚板で半分を覆っていたことになる。

棺本体は東枕で、床面東小口に削出枕を付設し、両小口に丸味がある。土壌の壁面は直立で床面も平坦な整美な土壇墓である。棺床面の最大幅は胸部付近にある。

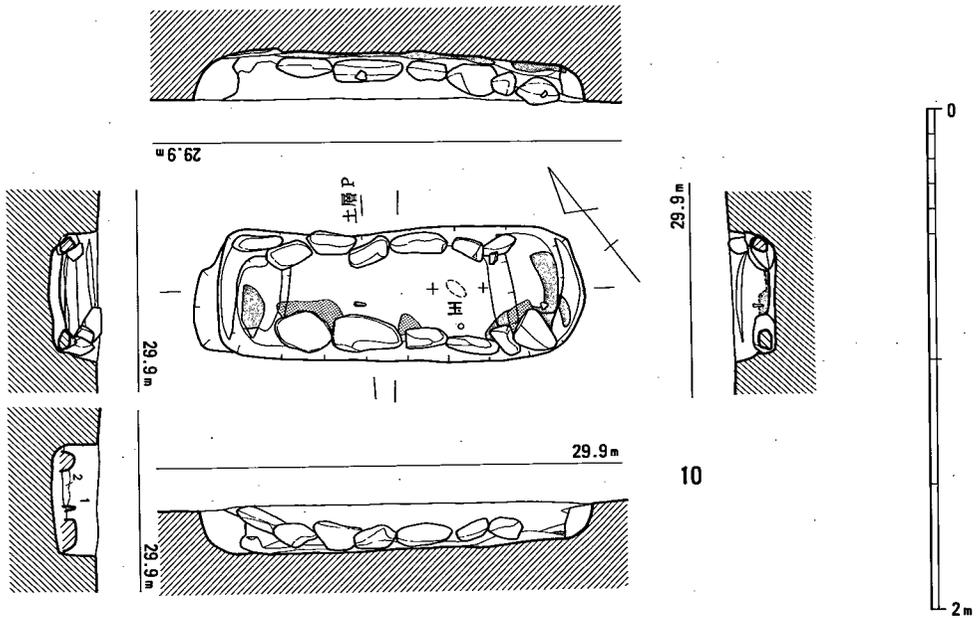
床面には、全体に赤色顔料が2～3cmの厚さに敷かれ、副葬品として鏡片が鏡面を上にして左枕下で、玉類が4群に別れて、鉄刀子が右腕付近で切先を足元に向けて出土した。玉類の出土状態は、枕直下の中央部より左寄りで勾玉と管玉3個の1群、その反対側の右側にあたる枕



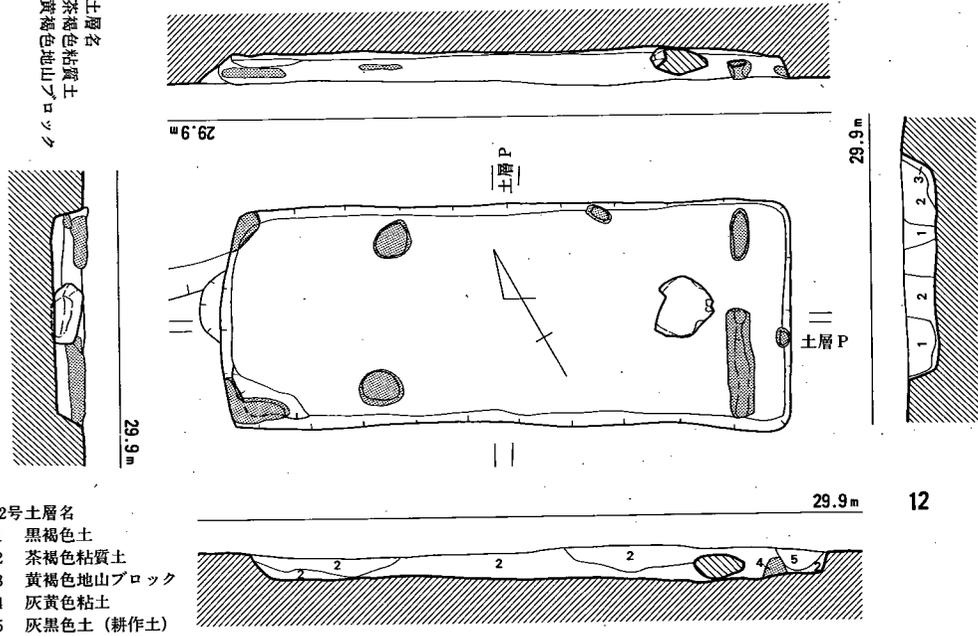
第10图 I-8·9号墓实测图(1/30)



第11图 I-8号墓副葬品出土状态实测图(1/3)



10号土層名  
 1 茶褐色粘質土  
 2 黄褐色地山ブロック



12号土層名  
 1 黒褐色土  
 2 茶褐色粘質土  
 3 黄褐色地山ブロック  
 4 灰黄色粘土  
 5 灰黒色土(耕作土)

第12図 I-10・12号墓実測図(1/30)

上から枕直下にかけての直系約15cmの範囲内に碧玉管玉・水晶丸玉各1個を含むガラス小玉・粟玉の一群、枕から約30cmの上腹部の左右に各一群のガラス小玉が連続している。玉類は、その出土状態から、枕上の玉が首または左右の耳、上腹部付近の玉が両腕または両手を組んだ時の両手首に装着して埋葬されたものとする。

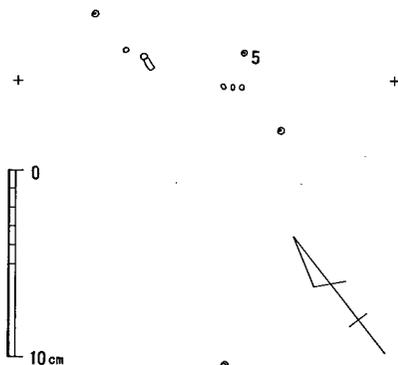
#### 9号墓 (図版24-2、第10図9)

9号墓は、墳墓群西辺で8号墓の北側に隣接して位置し、墓壙の一部も検出された。墓壙は一部2段掘りのように見えるのが、内側が木蓋に伴うもので、墓壙としてはその外側に床面の一部が残っているにすぎず、規模など不明である。木蓋であることは、棺内に20~30cm大の河原石が4個中位に落ちており、河原石が木蓋の押さえ石として使用されていたことからわかる。土壙内には、木蓋が腐食して落下した河原石があるために壁面の一部も崩落している。棺は両小口に角をもって掘られ、床面の南東小口に削出枕を付設し、床面も割合平坦に造られている。枕は、基礎が削出しによるものの、その上に地山に近い暗茶褐色粘質土を貼付けて高くしている。床面には、赤色顔料が見られない。

#### 10号墓 (図版25、第12図10)

墳墓群の北側角近くにあり、上部が著しく削平されて、土壙の深さ17cmが残っていたにすぎない。土壙は、割合広幅のもので、内部の両側壁に沿って河原石を6・7個並べて、両小口を赤褐色地山土で埋戻している。これは、側面に並んだ石列のみから連想すると一種の配石墓とも考えられるが、むしろ土壙の横断面方向から石の配石具合を見ると舟底形断面の木棺を安置したものと考えた方が、両小口の埋戻しが粘土替りの小口押えとして解釈できる。

床面には、両小口付近と多くの赤色顔料が見られ、胸部中央にグリーンタフ管玉1個を含むガラス小玉の一群と1個のみ左側から分離して出土した。

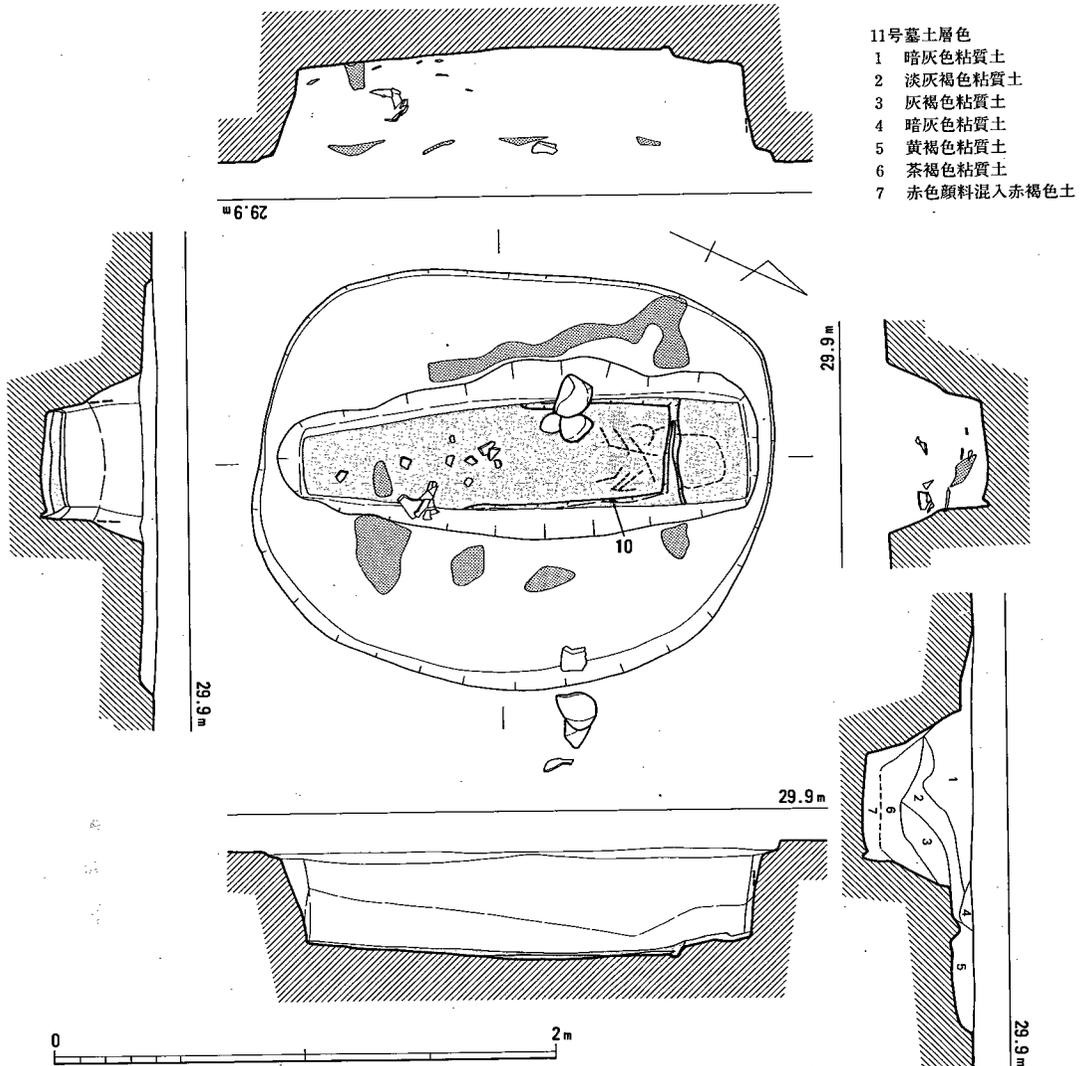


第13図 I-10号墓副葬品出土状態  
実測図(1/4)

#### 11号墓 (図版26、第14図11)

墳墓群の北辺の中央付近にある11号墓は、この墳墓群として唯一、墓壙全形が判明したものである。墓壙は楕円形で、長軸に平行して中央よりやや東寄りに棺本体の土壙を掘っている。墓壙内と棺内にかけて10~15cmの河原石数個と土器片が散乱しているが、土壙縁に残る粘土から見ると木蓋が腐食して棺内に落下したものである。

棺本体の土壙は、両小口角が明瞭な箱形で、幅広

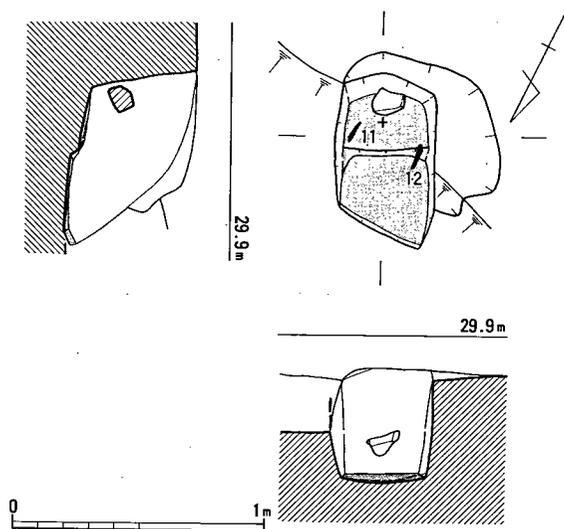


第14図 I-11号墓実測図(1/30)

い南小口床面に削出枕を付設している。壁面は、木蓋であったにもかかわらず崩壊が進んでいるが、上位で広がる傾斜をもっている。床面では、全面に2~3cmの厚さで赤色顔料が敷かれ、胸部付近のみ人骨の痕跡らしきものが検出された。また、副葬品とできるかどうか疑問であるが、左側壁中位で鉄鎌の茎の残欠が出土した。

12号墓 (図版27-1、第12図12)

墳墓群の北側角にあり、唯一幅広の長方形の整美な棺本体の掘方をもつ墓である。掘方の規模は、長さ2.27m、幅0.62mで、この群最大であるが、内部にある粘土や石枕の配置から、こ



第15図 I-13号墓実測図(1/30)

や副葬品も検出できなかった。

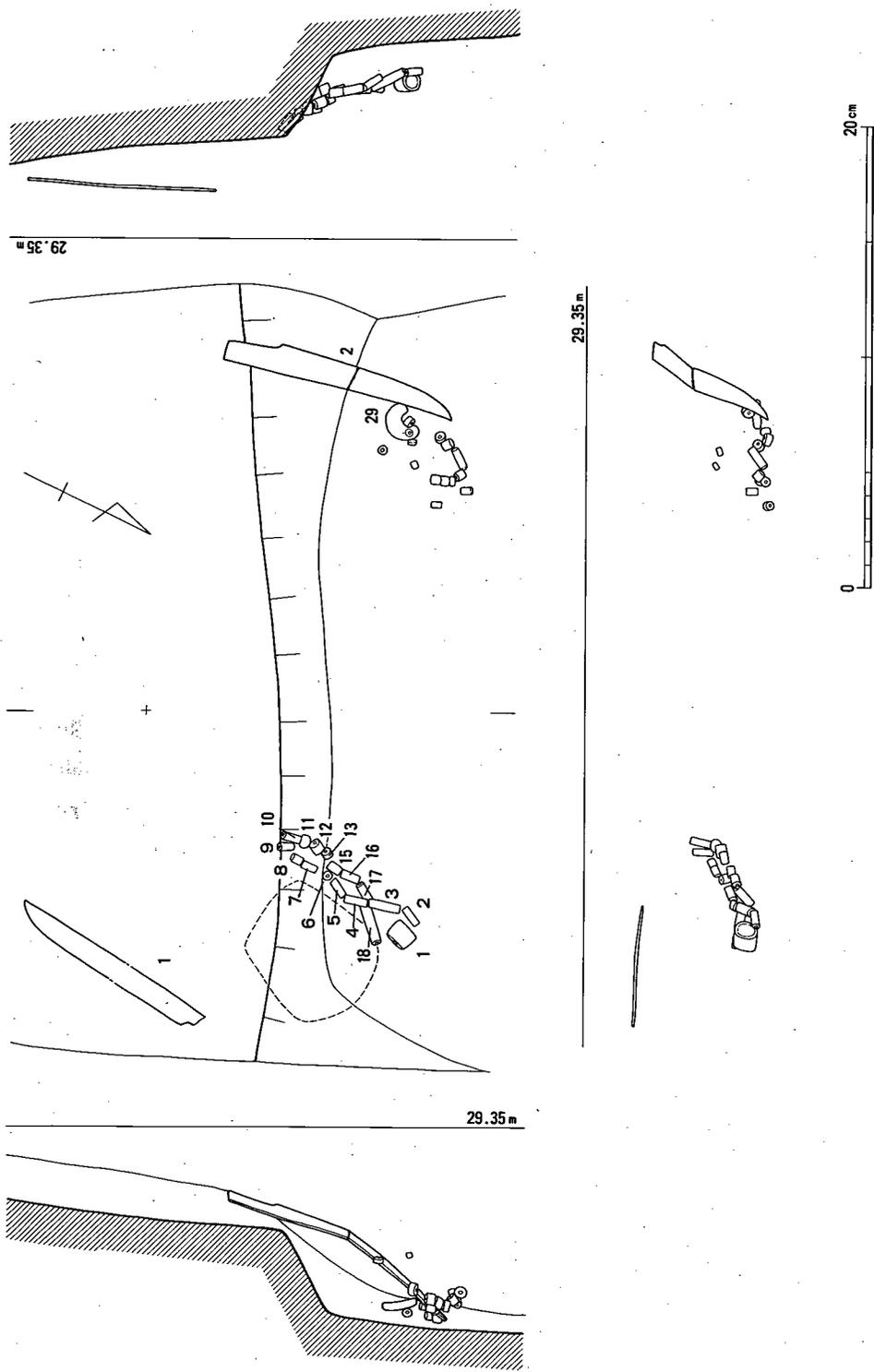
#### 13号墓 (図版4-4、27-2、第15図13)

墳墓群南端の7号墓の内側に隣接して検出されたが、墓壙と棺本体の土壌の大半を、墳墓群の中央を走る小道によって破壊されている。大半を破壊されていながら、わずかに残った頭部付近の棺内が荒されていなかったことは、早い時期に棺内が埋没していたため、隣のような石蓋土壙墓であれば棺内が荒らされていたであろうから、木蓋土壙墓であることを暗示している。

残っていた土壌の南小口は、壁面が角張り、床面に削出枕を付設している。枕の上部、埋土中位に河原石1個があるが、これは木蓋上のものが落下したものであろう。

床面には全面に赤色顔料が敷かれ、その顔料の中で枕上からその下にかけて頭部の左右で一对の玉類と各1本の鉄刀子が副葬されていた。副葬品は、第16図のように頭部右側に切先を南側に向けた鉄刀子、右耳付近でひすい丸玉を中心にメノウ管玉1個を含む管玉12個、ガラス小玉4個の一連、左耳付近で切先を足元に向けた鉄刀子とひすい勾玉を中心にガラス管玉1個とガラス小玉15個からなる一連があり、玉類が左右の耳飾であることがわかる。これが、みずらなどの髪飾りでないことは、右側の一連が丸玉を中心に垂下した状態にあることが証明している。なお、右耳飾に接した東側の5×6cmの方形の範囲に緑青らしいものが薄い膜状に検出されているが、現状ではこの部分も荒されておらず、鏡片が副葬されていたとは思われない。緑青が付着した腐食物が存在した可能性がある。

I号墳墓群は、中央の小道などで破壊されたものが多いことを述べたが、副葬品を持った一



第16图 I-13号墓副葬品出土状态实测图(1/3)

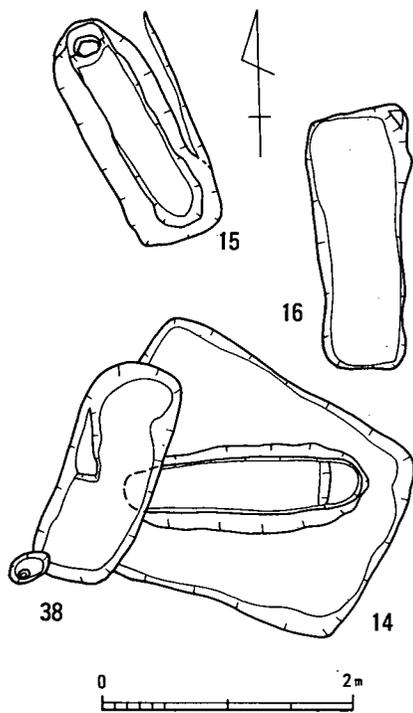
群が、西辺の鏡片を持った6号・8号を中心になって、中央付近に副葬品がない傾向が特徴ともいえる。西辺に副葬品が集中するのであれば、副葬品を持っている6号・13号の間の破壊された部分に副葬品を持った1基が削減したことも可能性が強いものとなる。さらに、この群の特徴は、木蓋土壌墓で占められ、舟形木棺・箱形木棺を含むことである。

## ② II号墳墓群 (図版2-2、20-1、第17図)

この墳墓群は、C地区で最も密集する一群の南東の一角にあり、周溝もないことから確実に分離できる確証がないが、群から若干離れていることから強いて一群として独立させた。したがって、墳墓群に墳丘が存在した可能性はなく、むしろ墓が重複したり、明らかに時期が違い、形態も異なる墓が同居していることから、墳丘の存在が否定される。

### 14号墓 (図版28、第18図14)

一群の南側にあり、38号墓の下から検出された墓壙規模の明らかな墓である。墓壙は、平面形が梯形をし、その対角線上に土壌を掘っている。土壌墓の蓋石には、4枚の輝緑岩と思われる板石が使用され、目張りとして河原石や片岩と粘土が利用されている。蓋の下側には、全面に赤色顔料が塗布されている。

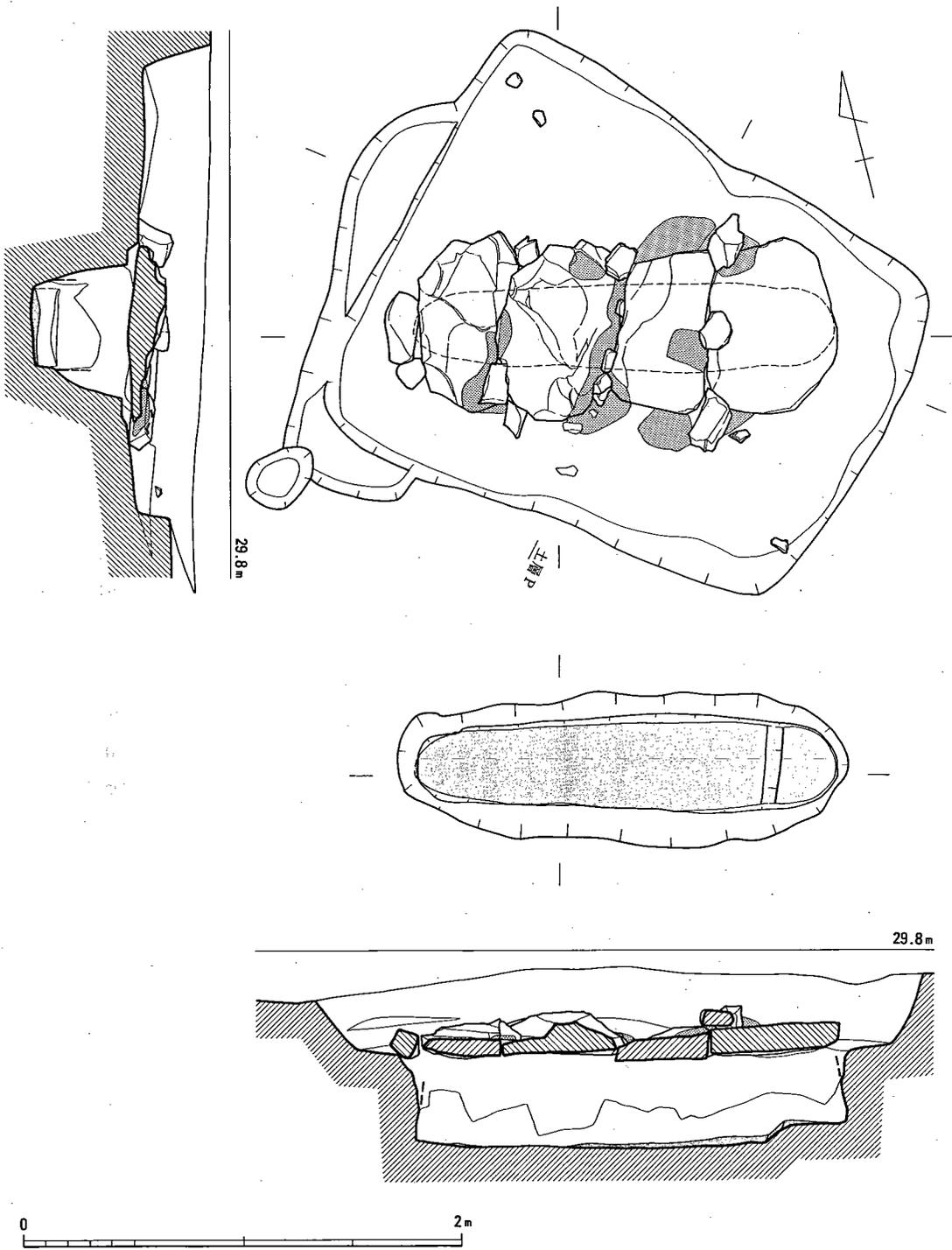


第17図 II号墓群全体図(1/60)

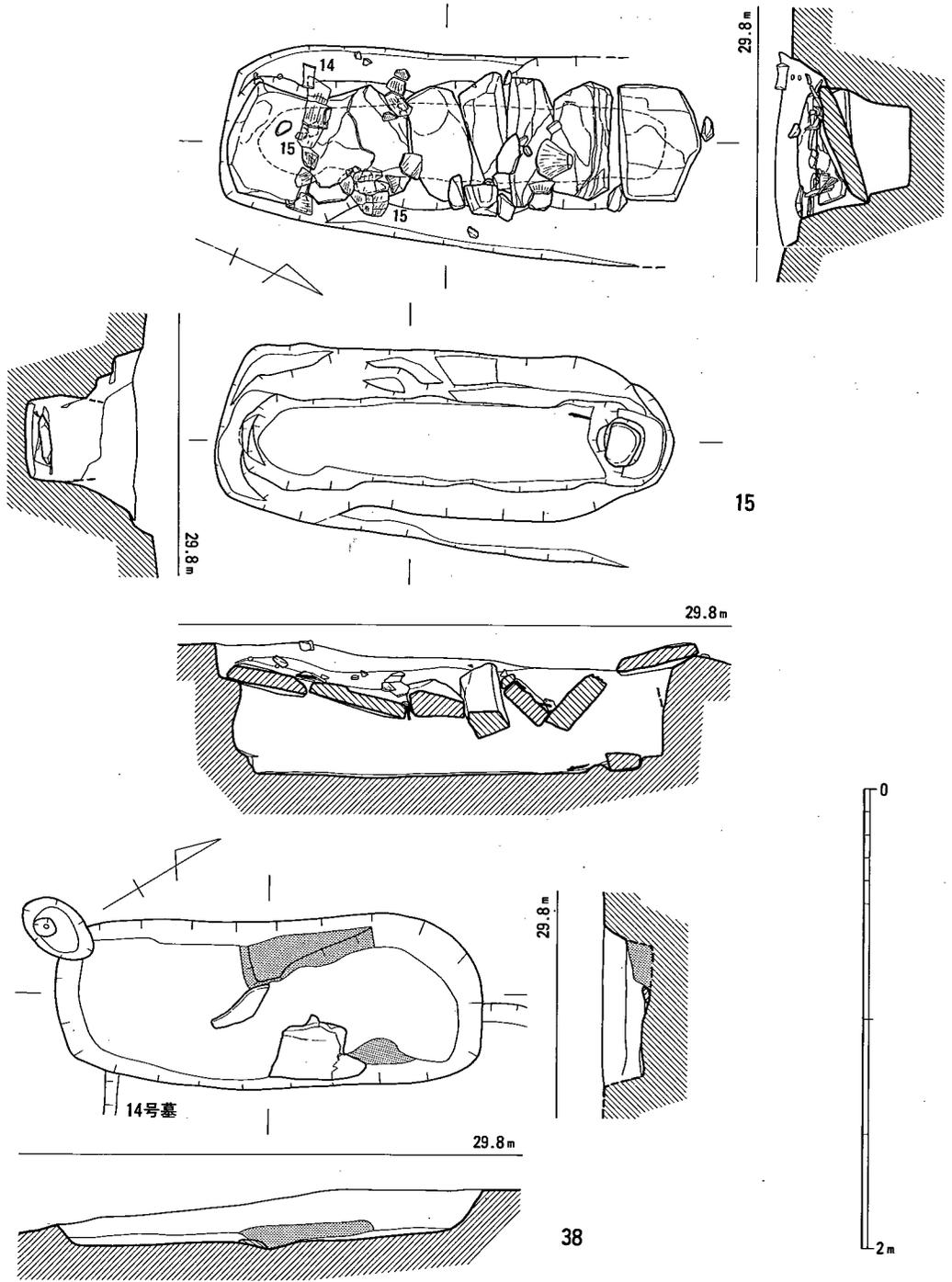
棺本体となる土壌は、両小口が丸造りで、両壁共に内傾している。東小口が頭位で、床面に削出枕が付設されている。側面壁の崩壊は著しいが、わずかに上方が広がる傾斜を示している。床面全面に赤色顔料が敷かれているが、副葬品は発見できなかった。

### 15号墓 (図版29、第19図15)

一群の北西側で発見され、墓壙も全形でないが検出できた。墓壙は小規模のもので、蓋石を囲む程度のものである。蓋石は、7枚の板石が使用され、北側の頭部から4枚が結晶片岩、5枚目が河原石、6枚目が輝緑岩、7枚目が花崗岩が利用されている。蓋石間の目張りには、粘土が使用されずに土器片や小石が利用されており、土器のうち壺が復原できるもので、内面全体に赤色顔料が付着していたことから、埋葬の際に顔料を使用した



第18图 II-14号墓实测图(1/30)



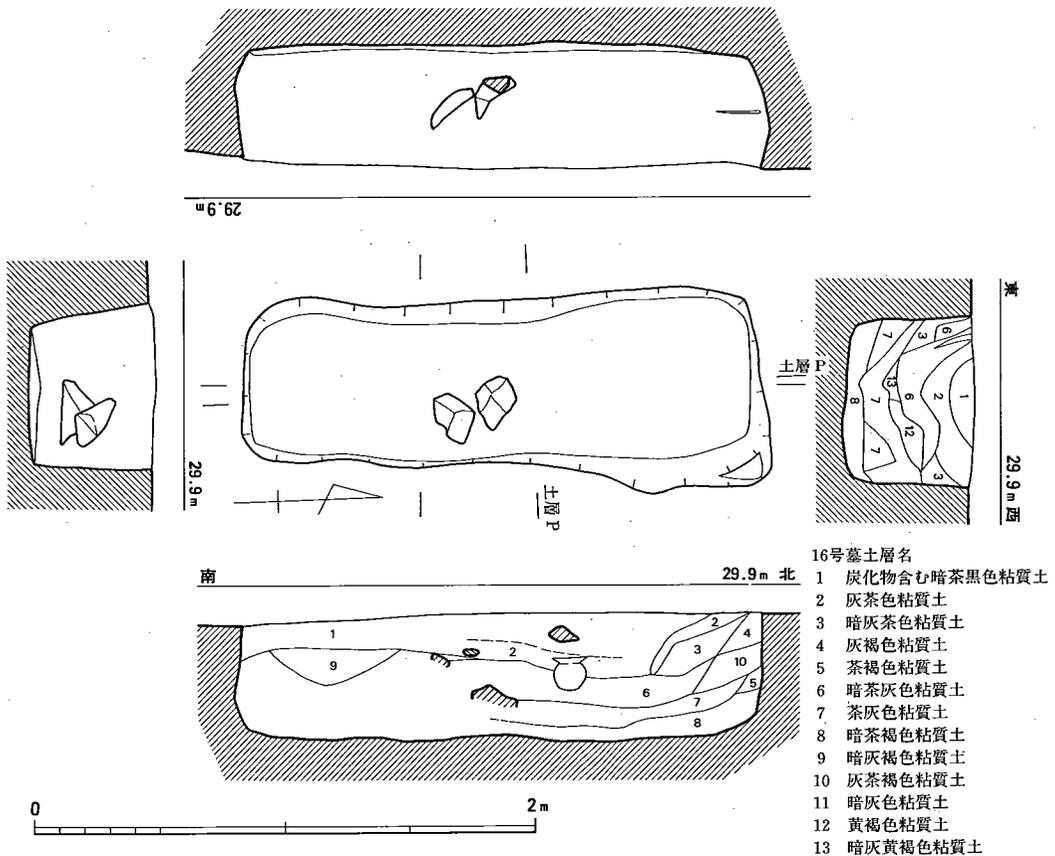
第19图 II-15·38号墓实测图(1/30)

後に破壊して目張りとして利用したものである。蓋石の下側には、北端の1枚を除く全部に赤色顔料が塗布してある。

棺本体の土壌は、平面形として両小口が丸造りで、壁面が側面と共に全面が内湾した掘方であるが、側面の崩壊が著しい。床面には、北枕として削出枕で付設されているが、枕の中央を掘りくぼめて石枕を置く丁寧さである。床面右側枕直下に切先を頭部に向けた鉄刀子が副葬されていたが、その後紛失した。

### 16号墓 (図版30-1、第20図16)

一群の北東側にあり、墓壙が残らずに土壌本体が検出された大型土壌墓である。土壌内埋土の中位で径15cm前後の石や完形土器が出土したことから、この土壌墓には木蓋が使用されていたことがわかるが、これまでの木蓋土壌と形態が異り、出土した土器も古墳前期の土師器である。土壌壁面の保存もよく、両小口部は内湾している。床面では、赤色顔料や副葬品が発見で



第20図 II-16号墓実測図(1/30)

きなかった。

### 38号墓 (第19図38)

14号墓の埋葬後に掘られた土墳で、両側面に粘土が見られることから墓としたが、形態的に一群の墓とも違い、頭位方向も不明である。石材の具合から完全に荒らされて、原形を失ったのであろう。

Ⅱ号墳墓群は、墳丘を伴わないことを述べたが、同時期のものが14・15号墓で、16・38号墓の時期が大きく離れることが出土土器からも判明している。

### ③ Ⅲ号墳墓群 (図版3-1、30-2、第21~26図)

Ⅲ号墳墓群は、C地区の密集する一群の中心近くにあつて、周溝の1号・2号・4号によって囲まれる胴張隅丸長方形の墳丘が想定される。これより前の古墳群の調査に際し、第22図のように畑の一角が墳丘のように残っていた。調査の結果南側は、14号墳とした破壊された横穴式石室が確認されたが、第23図の土層図のように、その北側で検出したのが弥生終末古段階の4号周溝であった。4号周溝の埋土の土層断面図で明らかなように、埋土の大半は南側のⅢ号墳墓群から流入しており、第24図の周溝内土器もこれに含まれ、土器が北側のV号墳墓群のものではないことを示している。なお、墳丘には、盛土と認識できるものが残っていなかった。

Ⅲ号墳墓群は、1号・2号・4号周溝で囲まれた中心部が、14号墳の石室の築造時またはその盗掘によって破壊された時に遊離した小形仿製鏡片と完形の鉄剣1本が発見された。1号周溝から出土した供献土器群は、一連の墳墓群中で最古式に属するが、明らかに墳丘墓が存在したものとⅢ号墳墓群とした。さらに、この墳丘墓と2号周溝に重複して、17号・18号・64号墓が営まれているが、これもⅢ号に含めて考え、Ⅲ号の新古で区別して整理したい。なお、その東側に離れて存在する46号墓もこの一群で扱う。

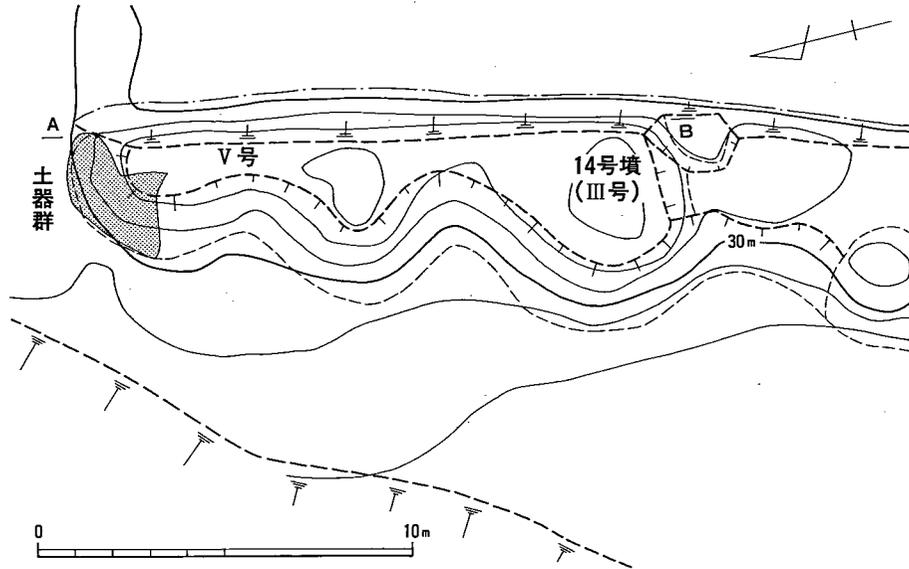
1号周溝の土器が古式であり、4号周溝出土土器との間に明瞭な差があることから、墳丘の中央に17・18号墓より古く小形仿製鏡と鉄剣を副葬した主体部が存在したことを想定したが、4号周溝はV号墳墓群の周溝も兼ていることから、V号墳墓群との関連も説明しておく。V号墳墓群には、北に5号周溝、西に3号周溝があり、これからも土器が出土している。出土した土器については、詳細を後述するが、3・5号周溝出土土器の時期差がないのに比較して、4号周溝出土土器が若干古式となっている。したがって、Ⅲ号墳墓群は、1号周溝出土土器を古段階にして中心主体部と関連させ、4号周溝出土土器の新段階が17・18号墓などに関連するものと考えたい。



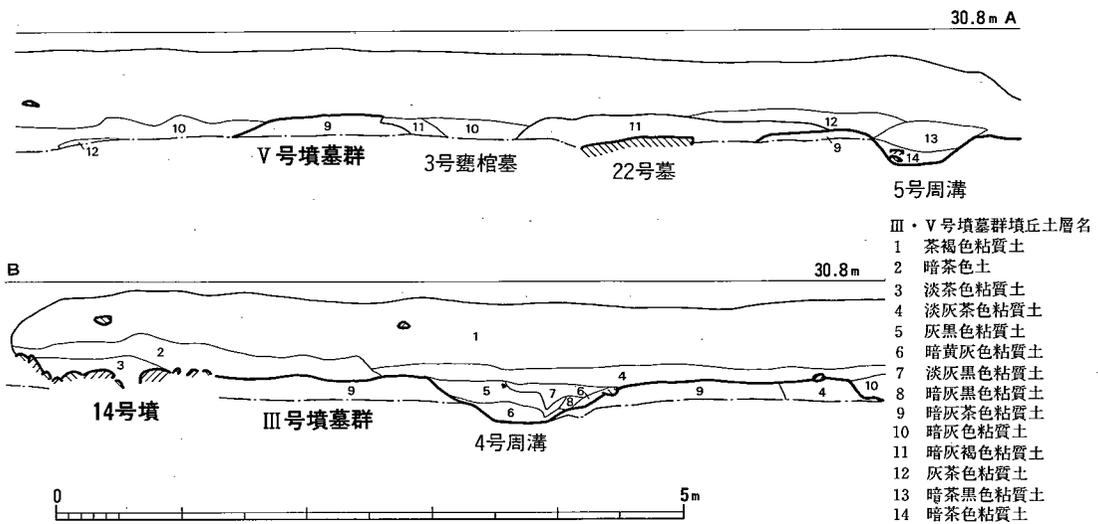
第21図 III~VI号墳墓群全体図(1/60)

17号墓 (図版32-1・2、第25図17)

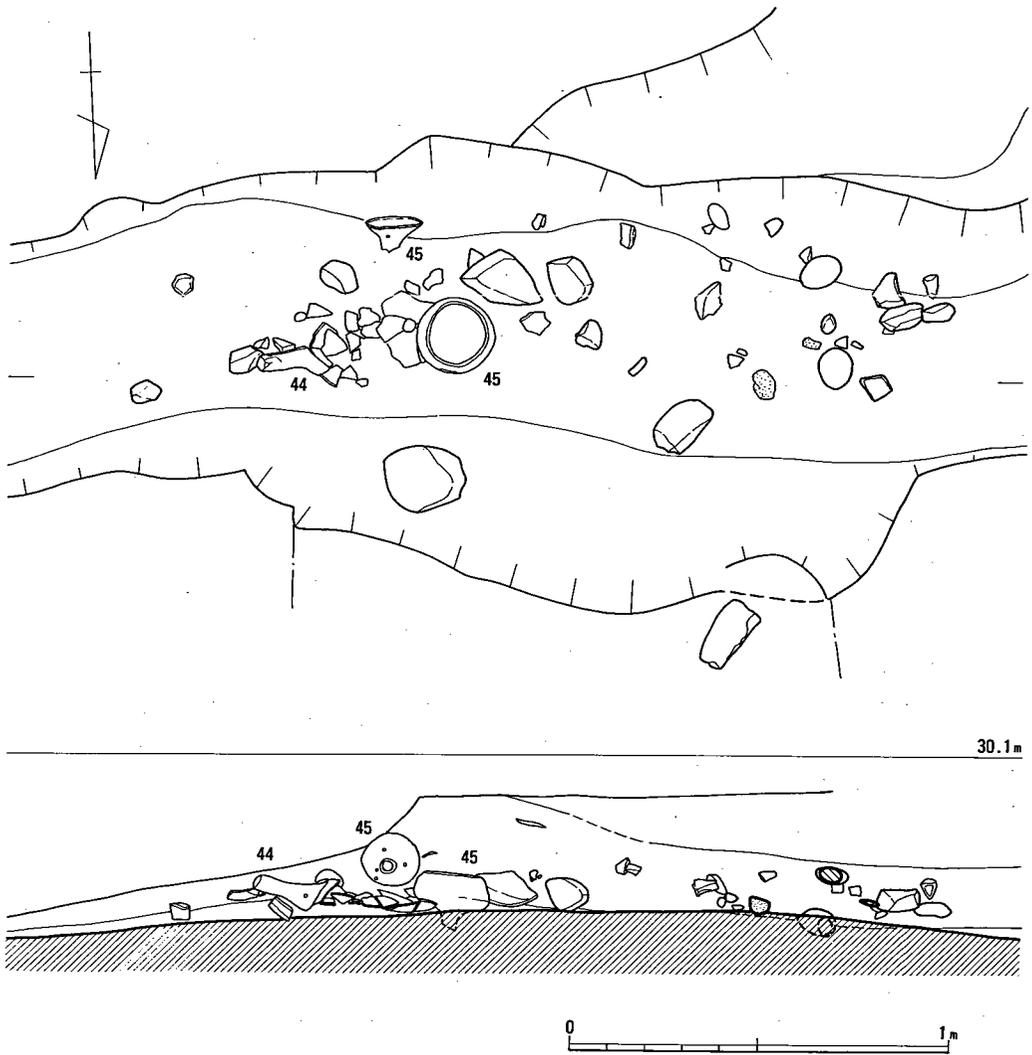
墳丘の東側にあり、蓋石より多少広い長方形の墓壇を備えている。蓋石は5枚あり、西端の1枚が結晶片岩で他の4枚が輝緑岩を利用し、目張りの小石のほとんどが結晶片岩となっている。蓋石の下面には赤色顔料を塗布しているが、さほど多くない。



第22図 III・V号墳墓群付近地形図(1/200)



第23図 III・V号墳墓群墳丘断面実測図(1/60)

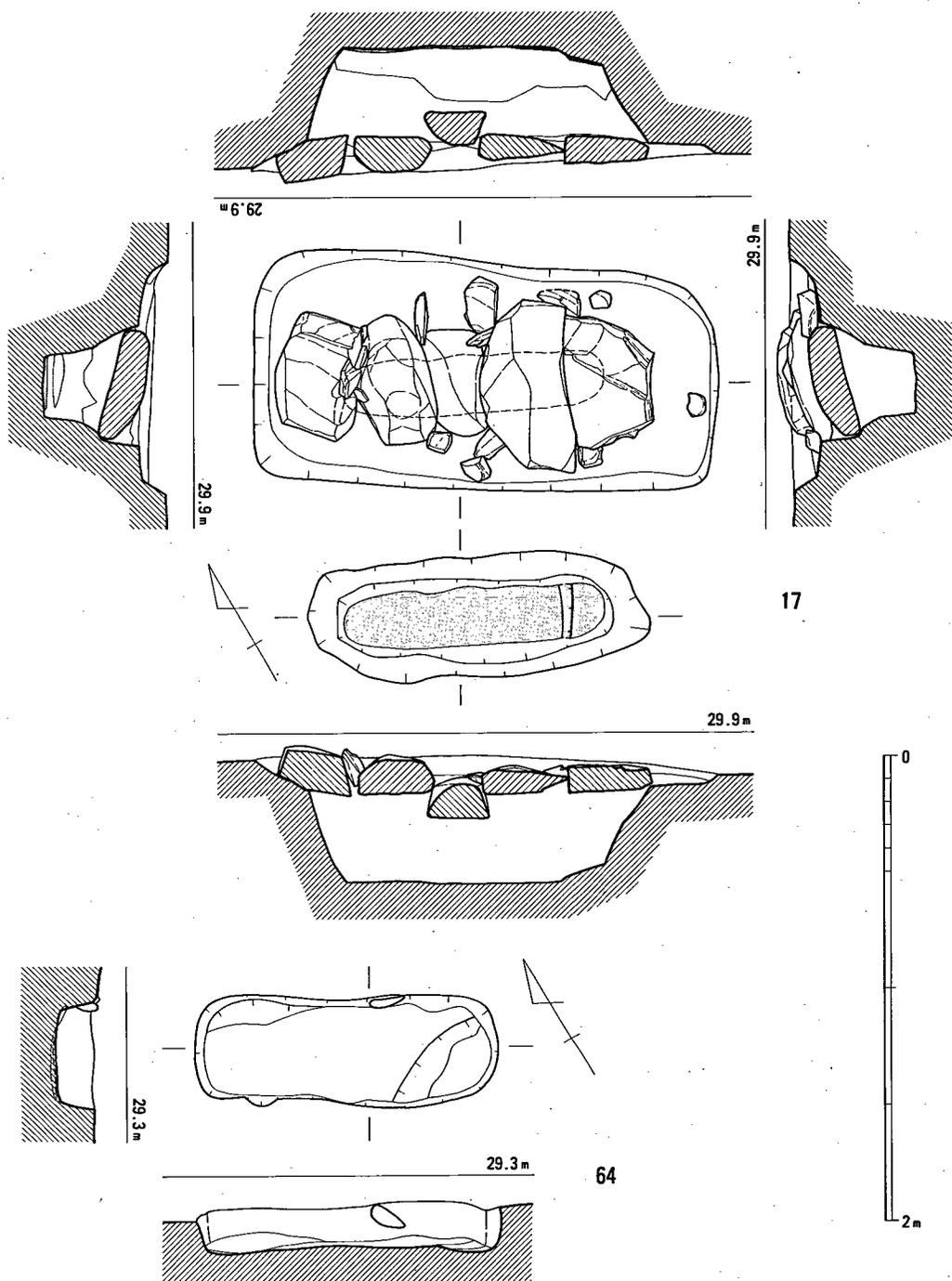


第24図 4号周溝土器出土状態実測図(1/20)

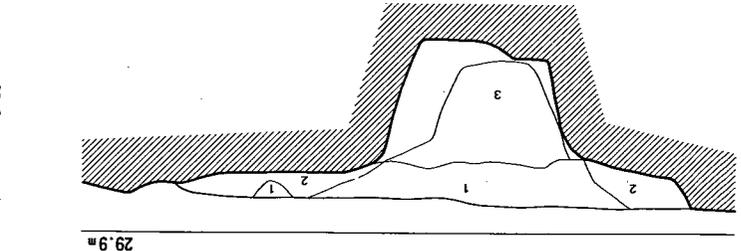
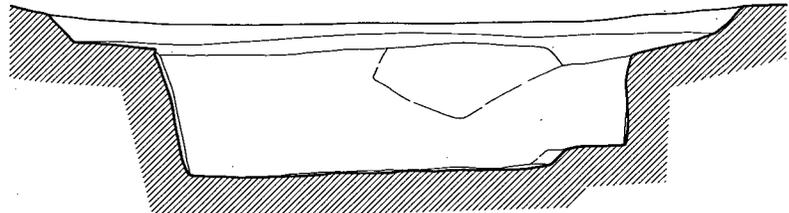
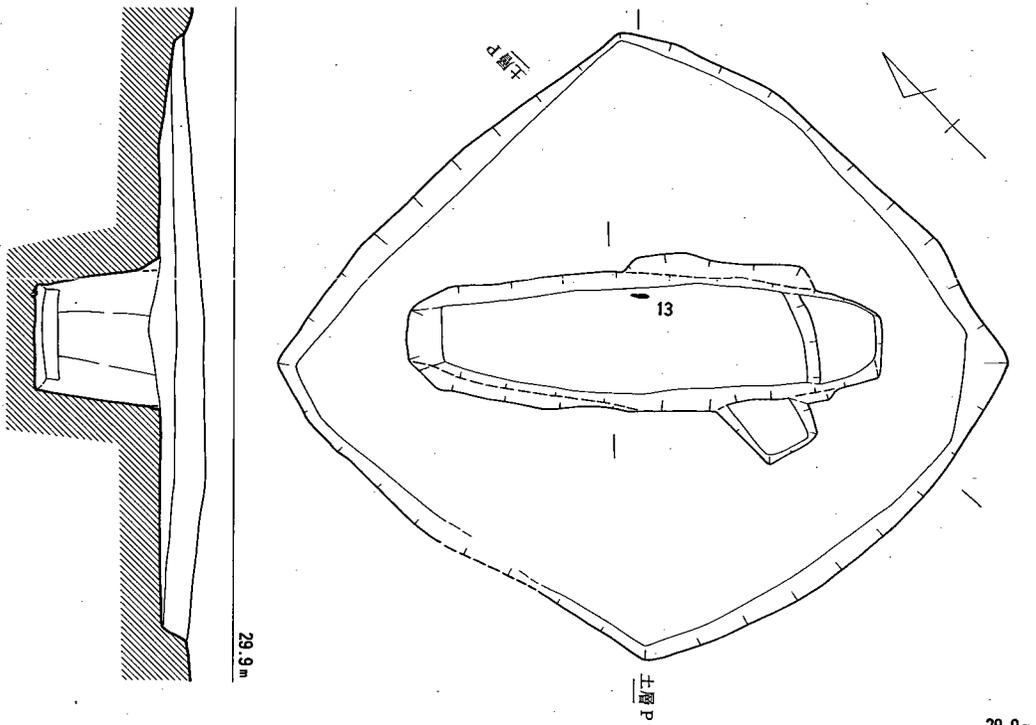
棺本体の土壙は、平面形が両小口を丸造りにし、最大幅が中央付近にある。東小口床面に削出枕を付設し、壁面傾斜は上開きとなっている。床面全面に赤色顔料が敷かれているが、副葬品は発見できなかった。

18号墓 (図版32-3、第26図18)

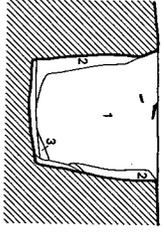
2号周溝を切って造られており、浅いながら菱形墓壙が検出された。墓壙対角線方向に主軸をもつ棺本体の土壙は、両小口が角張り、中央付近に最大幅をもつ型式で、南東側床面に削出



第25图 III-17·64号墓实测图(1/30)



- 18号墓土層名
- 1 淡褐色土
  - 2 赤褐色粒土混入
  - 3 淡褐色土
  - 混入赤褐色土



- 18号墓土層名
- 1 黒褐色粒混入褐色土
  - 2 赤褐色粒混入黄褐色粘質土
  - 3 黒褐色粒混入褐色粘質土



第26図 III-18号墓実測図(1/30)

枕を付設している。土壙の壁面は、頭部小口のみわずかに内湾するが、他が上方開きの傾斜となっている。壁面の保存のようことと、棺内が荒らされていないことから木蓋土壙墓である。床面東側壁中央付近で切先を足元に向けた鉄刀子が副葬してあった。

#### 64号墓（第25図64）

17号墓の南側で検出した土壙であるが、床面が一定しないところは、一連の墳墓群と違って、可能性として、Ⅲ号墳墓群の古段階のものであるかもしれない。床面に枕や赤色顔料が見られない。

#### 46号墓（図版35-1、第 図46）

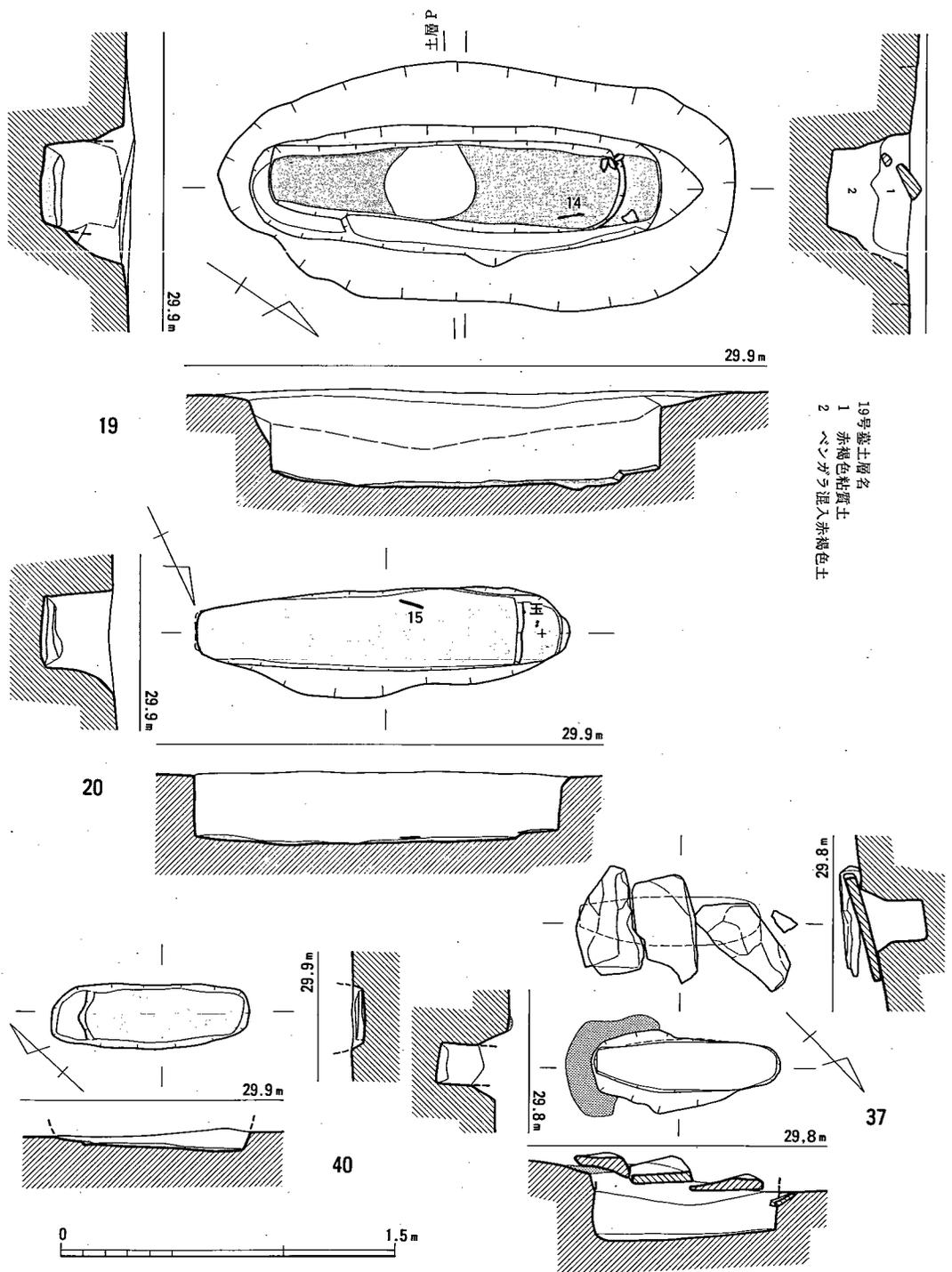
1号周溝の東側5.5mの位置にある土壙墓で、どの群にも属さないが、Ⅲ号墳墓群に最近距離にある。地形的に高位置にあるため、墓壙が完全に削平され、棺本体の土壙の深さ38cmが残っていた。土壙墓は、平面的に幅が広い北側小口が角張り、足元の南小口が丸造りで、北側の肩部付近が最大幅となっている。壁面は、全面が直線的に上位が内傾した造りとなっている。床面は平坦であるが、削出枕がないためか北側頭部が足元より5cm程高くなっている。床面には赤色顔料が敷かれているものの、副葬品がない。

Ⅲ号墳墓群は、周溝があって中央部付近が荒らされ、副葬品だけが残っている以上、墳丘墓の存在が否定できず、さらに周溝に重複して一群があり、この一群が他の群から離れていることから群としての位置づけが可能である。これを各々独立した群として扱うことも可能であるが、ここでは、多少時期幅をもって追葬されたものとしてとらえ、Ⅲ号墳墓群の中の新古で区別した。周溝内の土器の時期の違いが、埋葬の時期幅を示しているものと考え。弥生の墳丘墓では、墳丘の裾部に追葬されるのも常である。Ⅲ号墳丘墓の規模は、南北径約10m、東西径約8mの隅丸長方形である。

#### ④ IV号墳墓群（図版3-1、33-1、第21・27・28図）

この墳墓群には、まったく周溝などの区画が検出できていない。しかし、V号墳墓群を構成する4号・5号周溝が19号～21号・37号・40号墓の一群を切離すように解釈できることと、完形鏡や玉類の副葬品をもち、群とし独立可能なところからIV号墳墓群を設定した。群は、成人用3基と小児用3基から構成され、墳丘や墓壙が著しく削平されているものの、墓の数が失われているとすれば小児用だけであろう。

IV号墳墓群の規模は、削平されていなければⅢ号とV号墳墓と同じように周溝が5号と共用していたと思われることから、第21図のように19号墓と22号墓の中間が墳丘境になる。したがって、墳丘裾または区画線を各墓の約1.5m外側にあることにすれば、南北径約10m、東西径



第27図 IV-19・20・37・40号墓実測図(1/30)

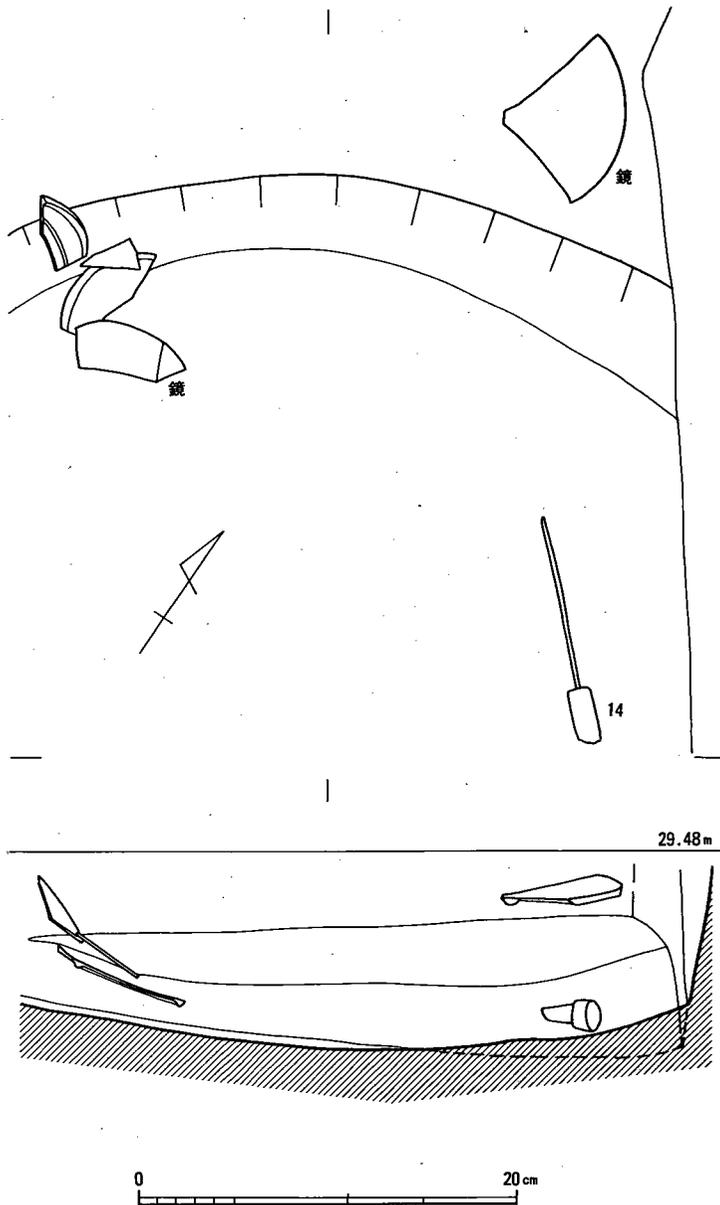
約 8 m の隅丸長方形に復原可能となる。

19号墓 (図版 5-1・2、33-2、第27・28図)

19号墓は、想定墳丘の南西側にあり、棺本体土壌の周囲にわずかに墓壙というより、蓋の痕跡を検出した。蓋の痕跡は、棺本体の土壙の壁面が中位まで崩壊していることや、棺内の赤色顔料に乱れがあり、中央付近が完全に顔料が失われている。副葬品の出土状態については後述するが、これも原位置から移動していることから、石蓋土壙であったことを示している。木蓋土壙墓であれば、開壙時に気付かれずに荒らされることはなかったと考える。

棺本体は、両小口が角張り、最大幅を中央部にもつ平面形で、壁面が直立する造りとなっている。床面には、北西枕に削出枕が付設し、中央部が最も低く掘られている。

床面には、全体に赤色顔料が敷かれていた



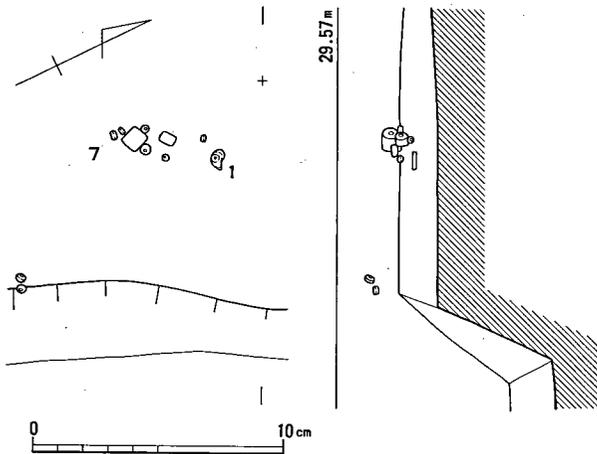
第28図 IV-19号墓副葬品出土状態実測図(1/4)

と思われるが、中央部のみ開壘時に荒らされ除去されている。枕付近に鏡が散乱した状態で発見されたが、第28図のように頭部左側の4分の1の鏡片は、最も高位置に浮いており、鏡片の下に灰色粘質土を挟んでおり、原位置から移動したことを示している。また、鏡面を上にしてあるものの、鏡面に布目が付着しており、鏡が剥出しで鏡面を上にして副葬されていなかったことを示すと同時に副葬後移動したことを暗示している。枕の右側には、残りの4分の3の鏡片が不規則に出土したが、多少床面から浮いているものの、左側の鏡片よりは原位置に近いものとする。この出土状態からは、鏡の副葬状態が明らかでないが、布目の痕跡から考えると被葬者の肩の衣服に触れるか、布に包まれて頭部右側に完形鏡として副葬されていたことになる。

左腕の位置に、切先を頭部に向けた鉄刀子が発見されたが、これも左側鏡片のように下に灰色粘質土があり移動したことを示しているが、原位置は想定できない。

#### 20号墓 (図版5-3、34-1、第27・29図)

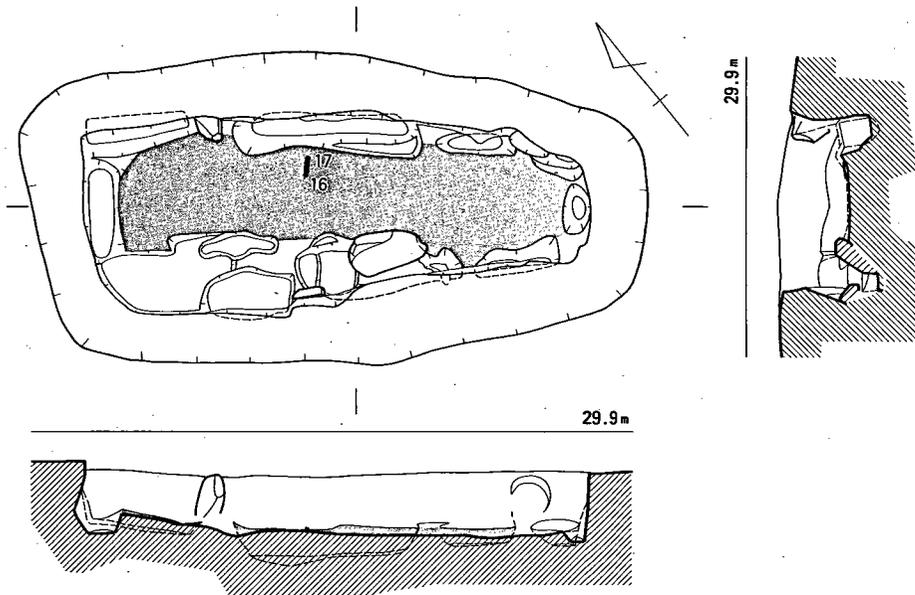
20号墓は、墳丘の東側で発見されたが、墓壙が完全に削平され、土壌も深さ32cmが残っていた。土壌は、両小口が角張り、胸部に最大幅をもつ平面形で、壁面が両小口の直立、側面の直立からやや上開きの造りとなっている。壁面がほとんど崩壊せずに、棺内も荒らされていないことから木蓋土壙墓である。床面には、北西枕として削出枕を付設し、全面に赤色顔料を敷いている。副葬品は、第29図のように枕中央部のやや右側で極小勾玉・細管玉・ガラス丸玉各1個を含むガラス小玉7個の一連の玉類と、右耳付近でガラス小玉2個が出土した。また、腹部右側で切先を足元に向けた鉄刀子も副葬されていた。



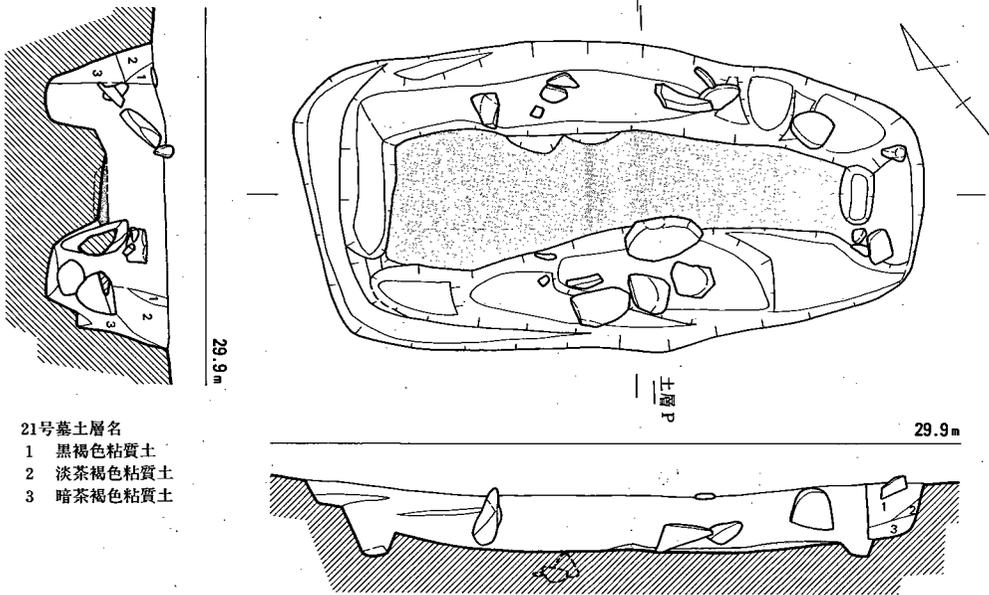
第29図 IV-20号墓副葬品出土状態実測図(1/3)

#### 21号墓 (図版34-2、第30図21)

墳墓群の北西側で発見された、開壘時に完全に破壊された箱式石棺墓である。墓壙も完全に残らず、石棺の掘方も深さ25cmしか残らないほど削平を受けている。したがって、第30図の上図の石材の抜跡から石棺を復原するしかなく、それによると両小口に各1枚、北東側壁に4枚、南西側壁に5枚の板石を使用したらしい。この石材は、輝緑岩の残片から輝緑岩が使用さ

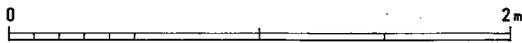


- 21号墓土層名
- 1 淡茶褐色粘質土
  - 2 灰黄色粘土ブロック
  - 3 暗茶褐色粘質土



- 21号墓土層名
- 1 黒褐色粘質土
  - 2 淡茶褐色粘質土
  - 3 暗茶褐色粘質土

- 21号墓土層名
- 1 淡茶褐色粘質土
  - 2 暗茶褐色粘質土
  - 3 黒褐色粘質土



第30図 IV-21号墓実測図(1/30)

れたと思われるが、第30図の下図のように掘方全部を掘上げると、棺材の裏や根石として河原石も利用されている。石棺掘方の規模は、長さ2.5m、最大幅1.23mとなっている。

荒らされた棺内に、鉄刀子2片が残されていた。

#### 37号墓（図版34-3・4、第27図37）

墳墓群の北側で発見された小型石蓋土墳墓である。墓壙は検出できなかったが、蓋石は3枚残っていた。蓋石の3枚は、南東側から2枚が原位置にあったが、他の1枚が移動し、さらに北西側の1枚が失われたようだ。蓋石は合計4枚が使用されていたと考えるが、石材が緑泥片岩であり、裏面に赤色顔料が塗布されていない。

棺本体の土壙は、多少幅広の北西側小口が丸造りで、他方が角造り、中央付近が最大幅の平面形で、壁面が足部の南東側が内湾し、他が直立に近い。床面には、枕の付設がなく、頭部の北西側が足元より5cm高くなっている。赤色顔料や副葬品も発見できなかった。

#### 40号墓（図版35-2、第27図40）

墳墓群の中央にある小型土墳墓。墓は、墓壙も完全になく、棺自体も深さ10cmしか残っていなかった。墳丘墓の中央部に位置することから、37号墓より高位置にあり、削平の度合いが強くなったと思われる。土壙は、両小口が若干丸造りで、中央部に最大幅をもつ。壁は、ほとんど残っていないが上開きと思われる。床面には、北西枕に削出枕が付設され、全面に赤色顔料が敷かれているが、副葬品が発見できなかった。蓋については、根拠がないが石蓋の可能性はある。

#### 50号墓（図版35-3、第69図50）

37号墓の北側4.6mの位置で発見されたものであるが、墓ではなく落とし穴であろう。前回で落とし穴として報告していないので、今回図面を掲載した。

Ⅳ号墳墓群は、墳丘墓の可能性が強いことを前述したが、墳丘の中で19号・20号・21号墓が鼎立する位置にある。19号墓に完形鏡、20号墓に玉類を副葬することから、最も厚葬の石棺である21号墓には、完形鏡などの副葬品が存在した可能性が強い。地形的な立地からも、Ⅰ号墳墓と同じく丘陵の頂部近くに位置する。また、5基の墓が全部同一方向の北西側枕であることもこの墳墓の大きな特徴となる。

#### ⑤ V号墳墓群（図版3-1、36-40、第21・31-37図）

「V号墳墓群は、第22図のように開墾された際に古墳の石材や小石の集積場所となっていたためだろうと思われるが、中央部のみわずかな墳丘と周溝が残っていた。墳丘西側の3号周溝

は、幅約40cm、長さ約3mが残っていたが、その北側の延長線上で完形に復原できる高杯が出土した。南側のⅢ号墳墓群と兼用している4号周溝からは、完形に復原できる高杯2個などが出土しているが、前述したようにⅢ号墳墓群から流入した土器で3号・5号周溝の土器やV号墳墓群内の2基の甕棺墓よりも古式の弥生終末古段階の型式である。5号周溝は、墳丘墓の北側を区画しているが、この中で塊石に混入して瀬戸内系の小型高杯が出土した。Ⅲ・V号墳墓群（墳丘墓）の周溝からは、完形に近く復原できる高杯が4個出土していることになり、他の土器片が復原できないことからすると目立った多さといえる。

墳丘は、22号墓の東側と3号甕棺墓が破壊される南北方向に削平され、墳丘の東側4分の1と、西側4分の1が失われていた。

墳丘は、残存した周溝から想定される平面形が隅丸梯形をし、南北の長径10.5m、東西8mの規模である。第23図の観察からは、墳丘に盛土が見られず、22号墓・3号甕棺墓の墓壙内の埋土と墳丘地山が墳頂に現れた形となっている。しかも、22号墓の埋土が墓壙の範囲以上に広がっていることは、少なくとも22号墓が埋葬される以前に盛土がなされていないことを示している。しかし、墓壙の深さは少なくとも50cm以上が考えられ、周溝にも墳丘からの相当の流入土があることを考慮すると、速断せずに類例を待ちたい。念のために申し添えると、22号墓と3号甕棺墓との重複関係は、第23図で見るとかぎり不明で、図の10番の暗灰色粘質土が荒らされた土である。

#### 22号墓（図版37、第31図22）

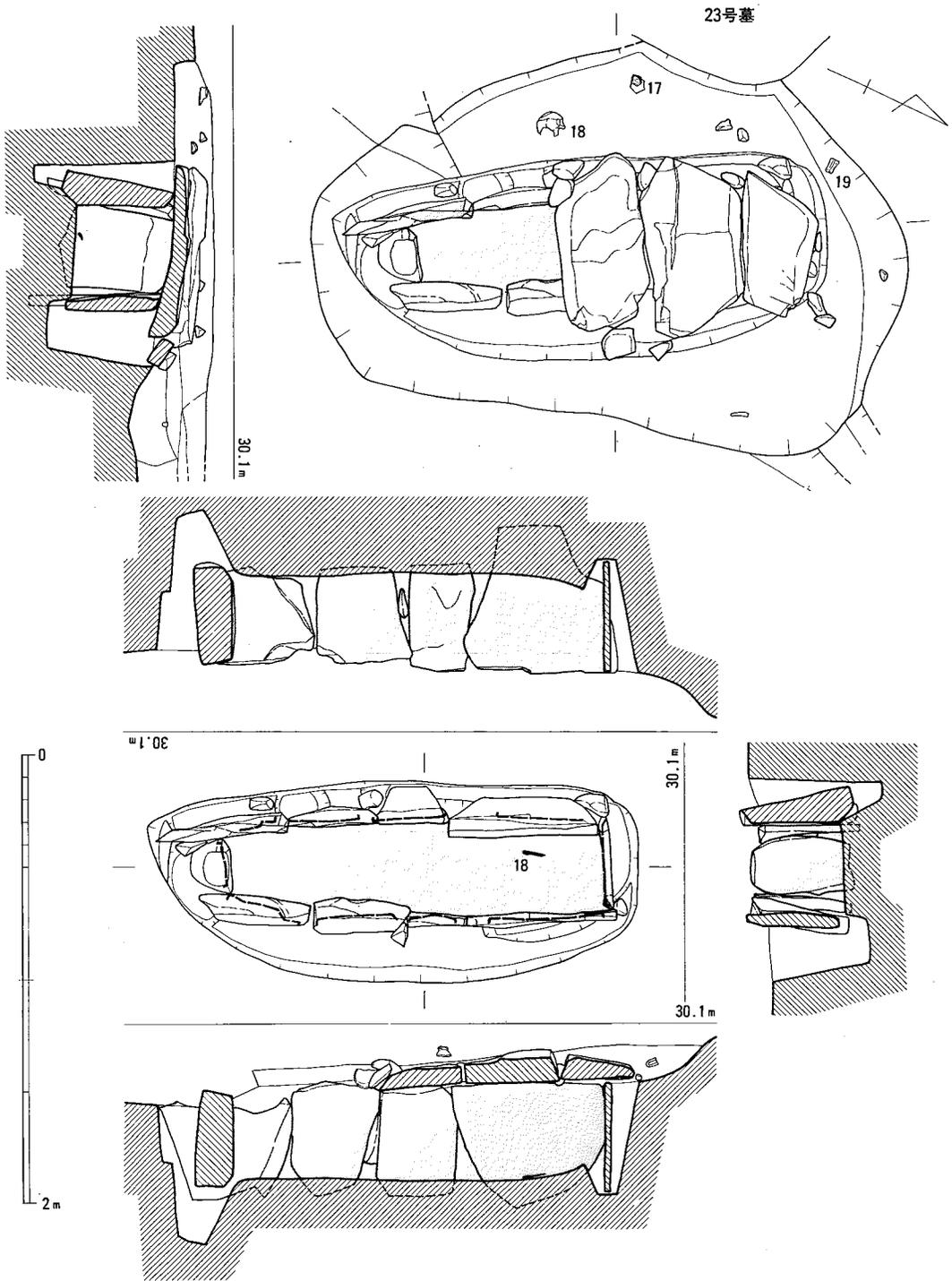
22号墓は、墳丘の北東側角にあり、墳丘東側の開墾によって墓壙と蓋石の東側を失った箱式石棺墓である。墓壙は、残っていた約半分から想定すると菱形で、対角線上に石棺を配設している。墓壙内西側に供献されたと思われる完形に近い鉢形土器などがある。また、墓壙は23号墓壙と重複し、23号墓より先に掘られている。

蓋石は、北側の3枚が残っているが、南側にさらに3枚が失われているものと思われる。残っている蓋石は、片岩が利用されている。

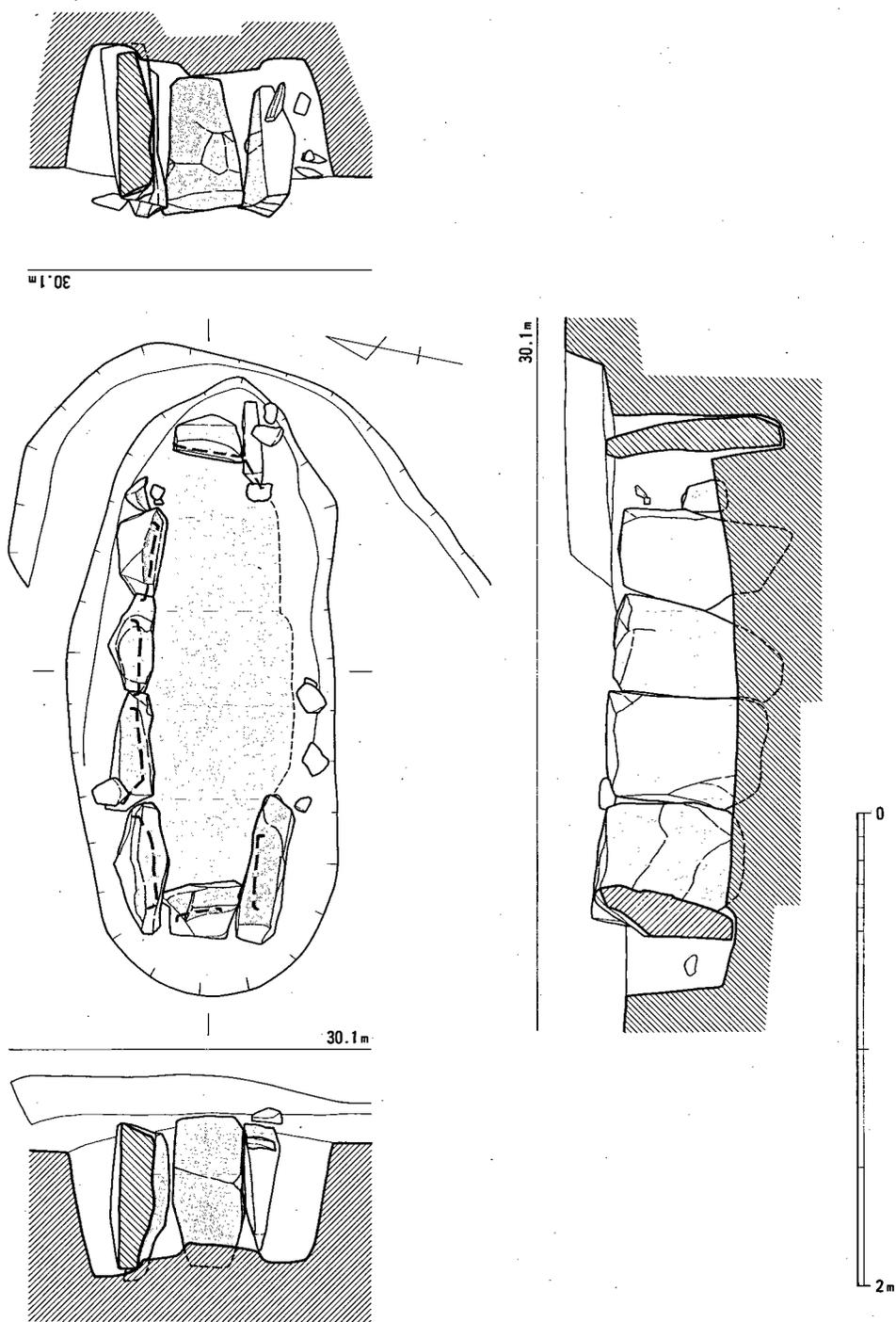
石棺本体は、北北西側を頭部とし、胸部を最大幅として、足部幅30cmとしている。石棺は、両小口に各1枚、両側に各4枚の板石を使用しているが、足小口に花崗岩、その西側壁に玄武岩を利用している以外は全て片岩を利用している。蓋石と棺本体の石材の内側全面に赤色顔料が塗布されている。

床面は、頭部が枕状に傾斜して高くなり、胸部右側に切先を頭部に向けた鉄刀子が副葬しており、全面に赤色顔料が敷かれている。

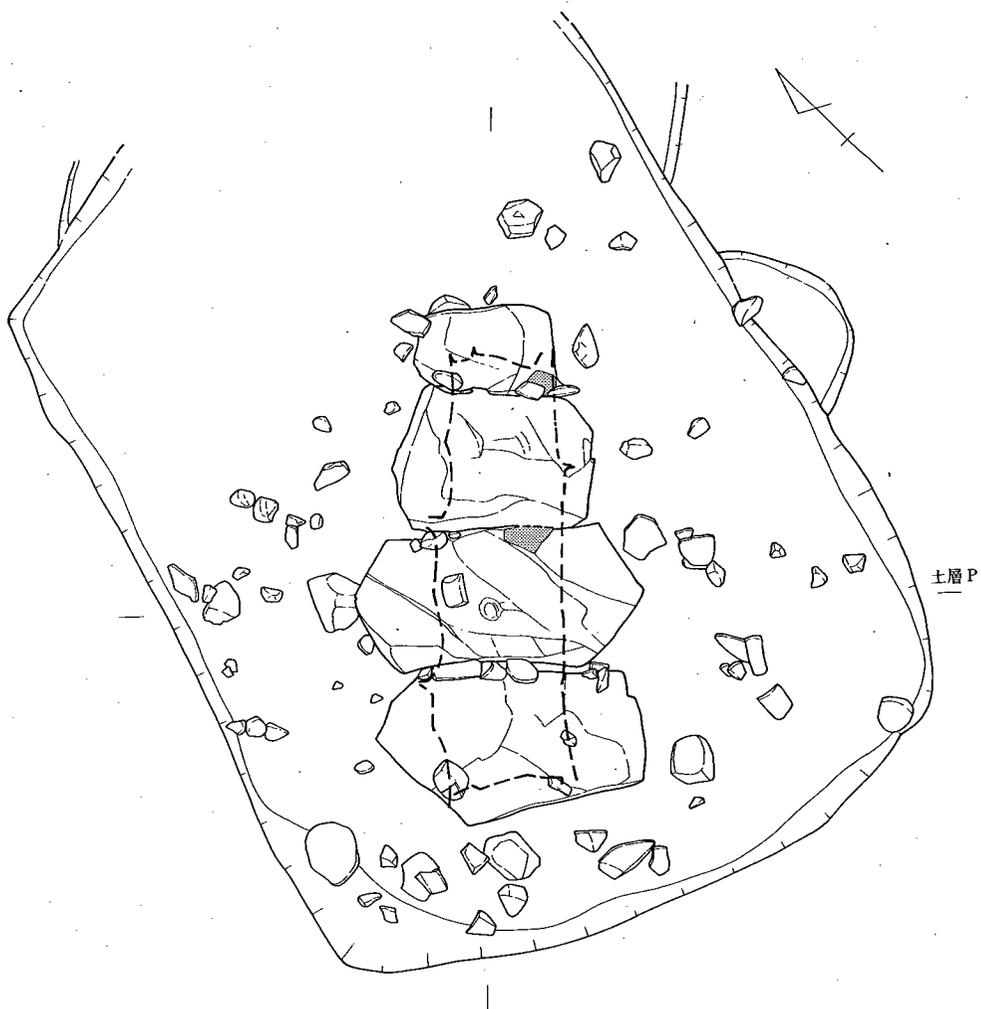
石棺の掘方は、長さ2.19m、最大幅0.9mの不整長方形の平面形で、石材を立てる部分のみ深く掘込んでいる。



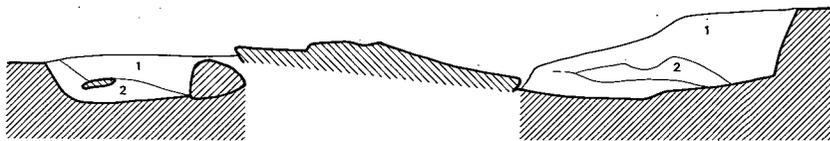
第31图 V-22号墓实测图(1/30)



第32图 V-23号墓实测图(1/30)



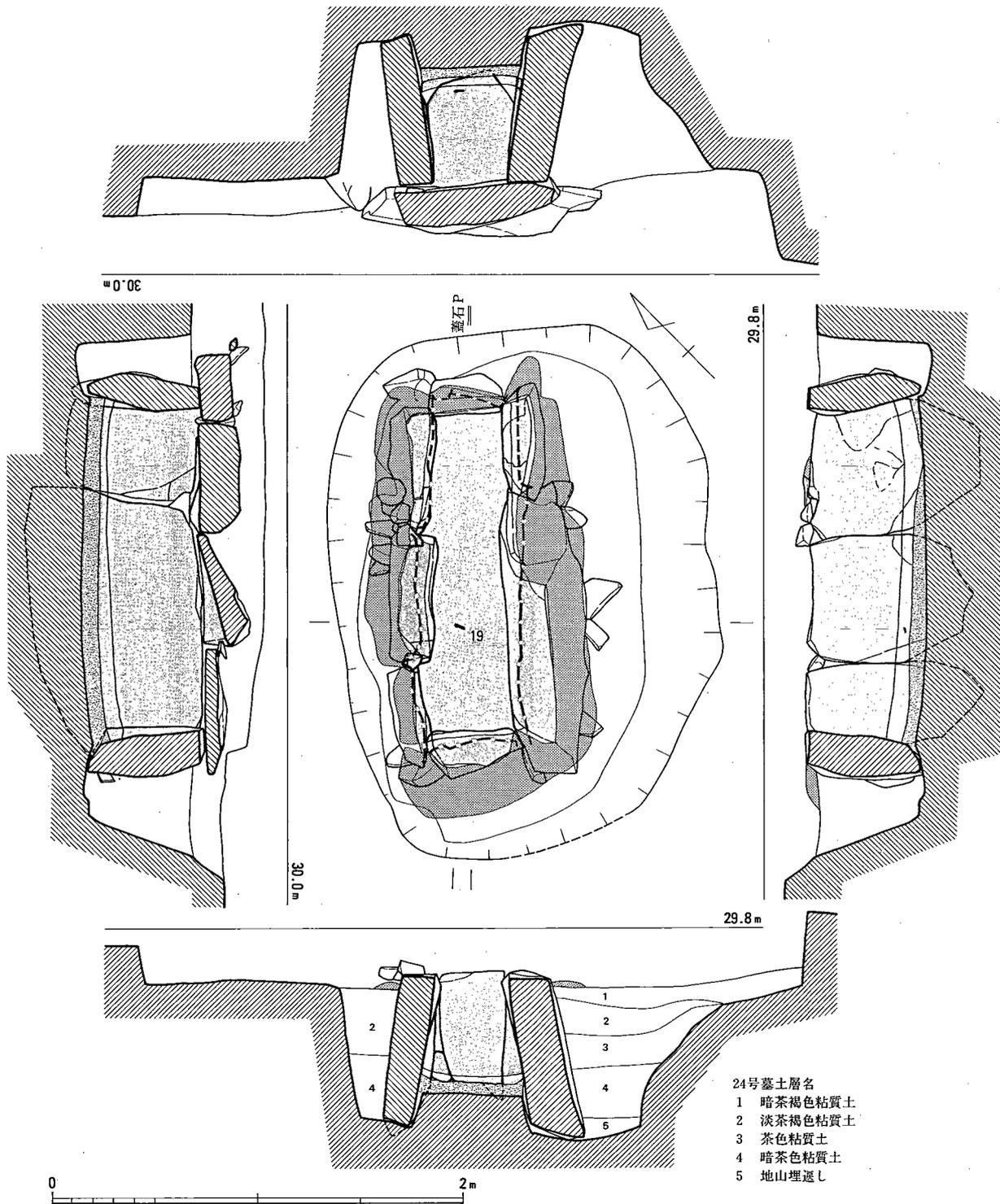
30.0m



- 24号墓土層名  
 1 灰褐色粘質土  
 2 暗灰褐色粘質土



第33图 V-24号墓盖石实测图①(1/30)



第34図 V-24号墓実測図②(1/30)

### 23号墓（図版38-1、第32図23）

23号墓は、墳丘の中央よりやや北側に位置しているが、蓋石の全部と本体の側壁の石材の一部を失うほど破壊されていた。この破壊は、周辺が開墾された時ではなく、かなり前であるらしく混入した土と掘方の土が区別が困難なほどであった。もちろん、IV号・IX号墳墓群が近年開墾時に荒らされたのと違っていた。

残っている墓壇は、22号・24号墓を切って掘られた菱形と考えられ、石棺を対角線状に配設している。

石棺は、西側が小口が広いことから西枕とし中央部を最大幅と、東小口の足元幅30cmの平面形をしている。石材は、両小口に各1枚、北側壁に5枚を使用しているが、東端を失っている。南側壁に2枚が残っているが、こちらも5枚の板石が使用されたものとする。石材の材質は、頭部小口に輝緑岩、足部小口に花崗岩、南側壁両端に輝緑岩、北側壁に片岩を利用している。壁面には赤色顔料が薄く残っているが、床面はほとんど失われている。

石棺掘方は、長さ2.6m、最大幅1.13mの両小口丸造りに掘られ、石材を立てる部分がさらに深く掘込まれている。

### 24号墓（図版38-2、39、第33・34図24）

24号墓は、V号墳墓群の墳丘の中央部を占有する大型箱式石棺墓である。墓壇も大型であることから、23号墓との重複関係について、現場において苦労したが、結局24号墓が古いことで結着した。というのも、23号墓の盗掘が古く周辺を割合広く攪乱していたことと、24号墓が墓壇を広く掘っているにもかかわらず、23号墓を意識して墓壇の南側に埋設したかのように見えるからである。近年の墳丘墓や区画墓の調査例を見ても、中心にある盟主的主体部が最も古いのが常である。したがって広い墓壇の東北側を23号墓によって破壊されているが、広い墓壇の南側に寄せて埋葬された理由が解決されていない。ここでは、甕棺墓埋葬において墓壇の片側、または横穴を掘って一方の甕を挿入する習慣と同じと解釈しておきたい。

棺本体の石棺は、不整梯形墓壇の対角線上に埋設され、蓋石を南西側から大きい順に4枚使用している。蓋石には、大きい2枚に片岩、他の2枚に輝緑岩を利用し、蓋石の間隙と墓壇に散乱する石にその小石と河原石が見られる。

石棺は、床面の平面形が南西側を頭部とし、肩部を最大幅にし、足元幅を最小幅の40cmをしている。壁面には、両小口に各1枚、南東壁に2枚、北西壁に3枚の花崗岩と片岩を利用している。最大の大石は南端壁で、長さ1.3m、幅0.8m、厚さ0.25mの大きさである。石材を安定させるための若干の根石も見られる。蓋石の下側と棺内全面に赤色顔料が塗布され、とくに床面には厚さが5～6cmに達していた。棺内には、残念ながら小型鉄刀子1点が、上腹部中央付近に置かれていただけであった。墓壇や石材の大きさに惑わされたが、棺内法は中型に属し、

23号墓の方が大型である。

#### 2号甕棺墓（図版5-5、40-1・2、第35～37図）

2号甕棺墓は、墳丘の北側に位置する合口式である。検出された墓壙は、第36図のように平面形が楕円形を呈するが、E地区3号墳丘墓のように保存のよい甕棺墓であれば、南西側にさらに広い墓壙を持つことになる。合口の甕棺は、南西側の中型壺の肩部以上を打欠き、北東側の大型壺の口縁内に挿入する形でほぼ水平に埋置されている。合口にした甕棺の内法は、長さ120cm、大型壺の最大幅56cm、中型壺の最大幅46cm、最小幅が大型壺の頸部で32.3cmの大きさとなる。この甕棺に埋葬できるのは、成人の細身の女性を大型壺に足から挿入して屈葬したとしても、一方の壺に肩幅35cm以下の体格でなければならない。小児を埋葬したとすれば、水平であるだけに、頭位方向は特定できない。棺内であるが蓋甕とされた中型壺の中に、いずれも小型の鉄鏃と刀子が副葬されていたことからすれば、小児男性の埋葬の可能性が強い。

棺外の甕棺の北側に供献された一括土器群が発見された。供献された土器は、いずれも小型で、長頸壺・直口壺・台付壺・鉢・高杯が合計7個体ある。いずれも一部破壊されているようで、完形品としては納められていないようだ。土器の中には、赤色顔料が一部に付着したものや、内部全面に付着したものもあり、埋葬の際の祭祀に利用されたものであろう。

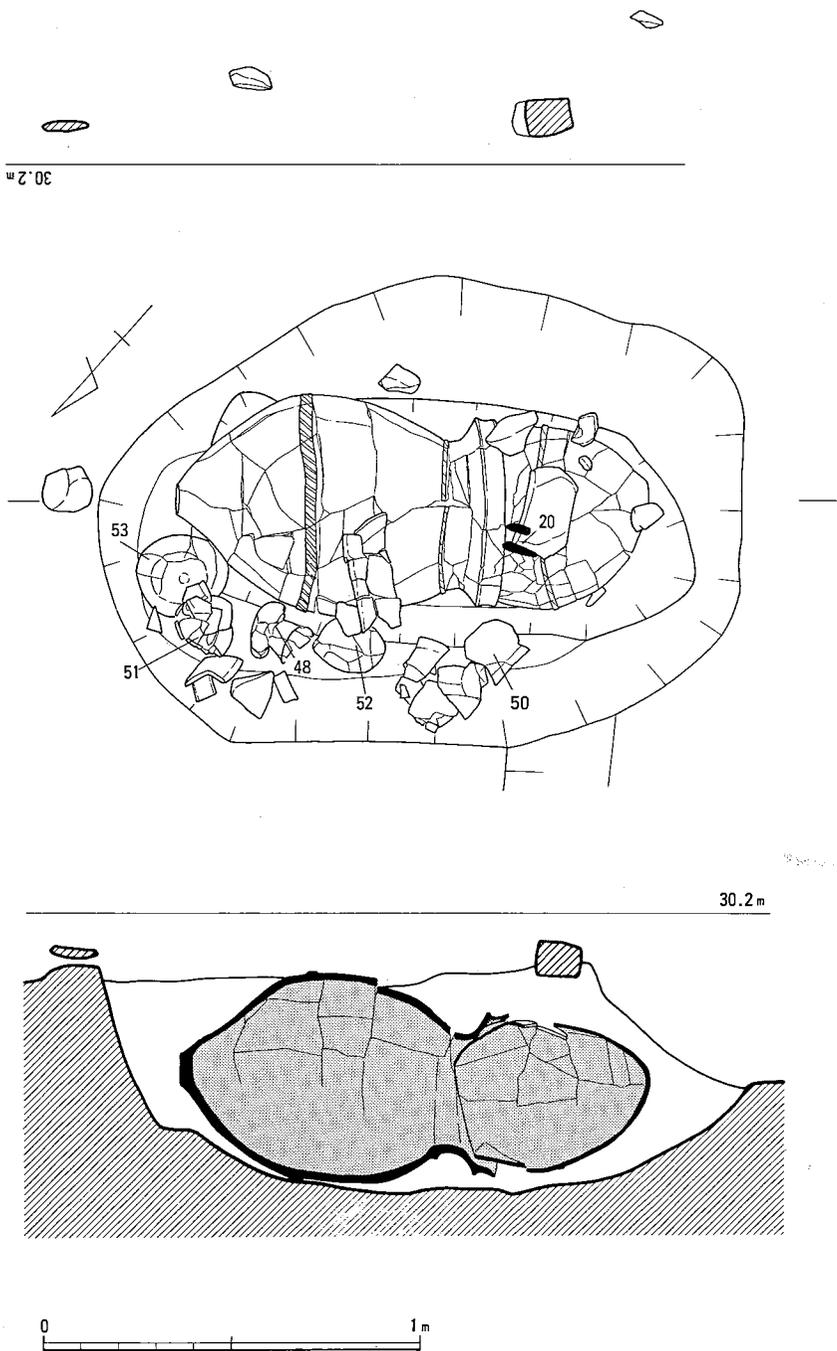
#### 甕 棺（図版100-2、第37図）

2号甕棺墓は、墳丘と周溝の一部が残っていたことから上部の削平が少なく、C地区で唯一破壊されることなく完形品として報告できる。しかも、上甕の口縁部が打欠かれていたにもかかわらず、打欠いた口縁部の約半分が墓壙内に残っていたことから上甕も完形品となり、供献土器を含めると一括資料として貴重な存在となる。

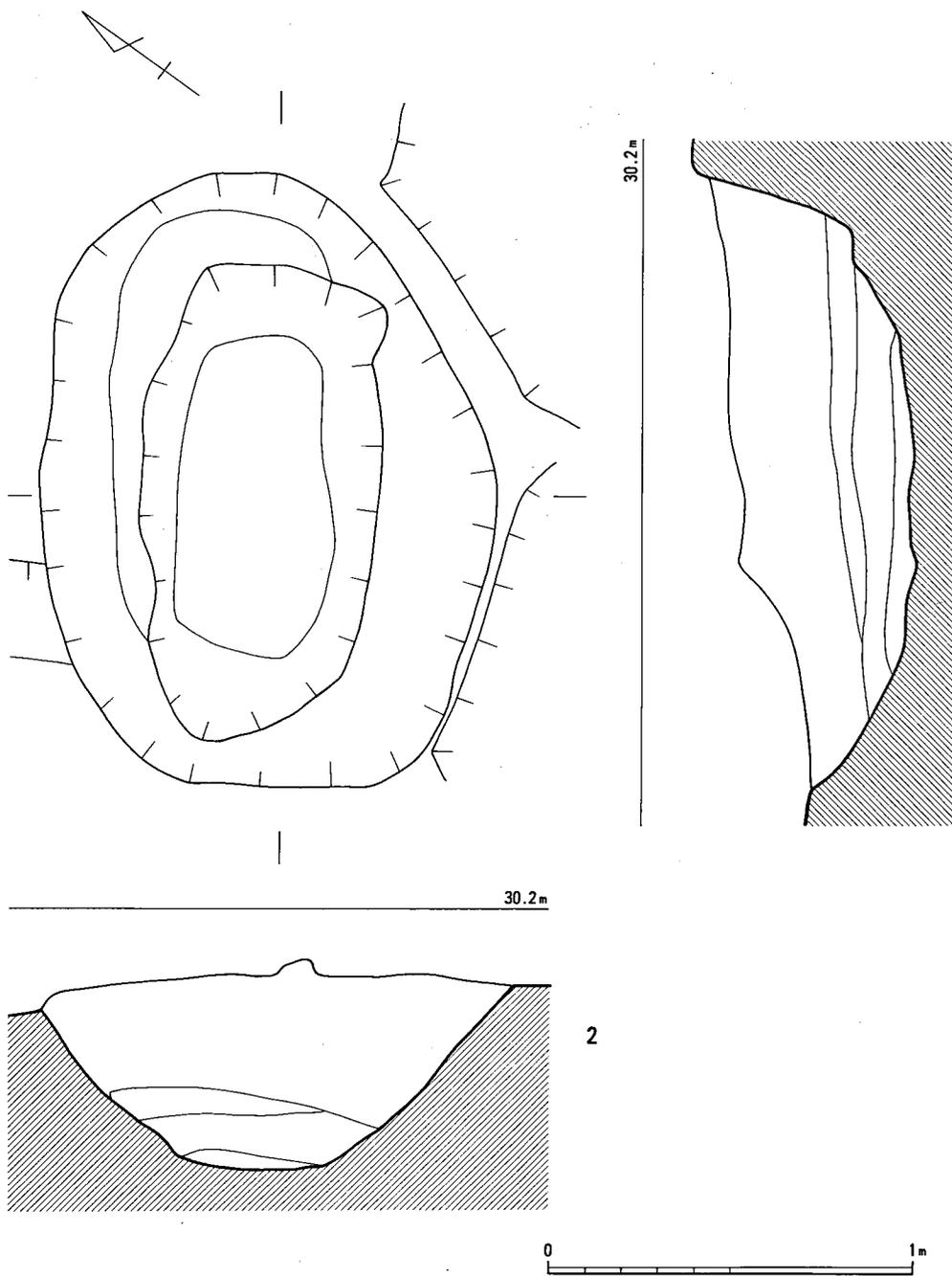
上甕は、口縁部がわずかに外反して直立に近い立上りで上端に平坦面をもつ。頸部も外反度が割合少ない。胴部は、中位に最大径をもつ割合長胴で、最大径のやや下に扁平に近い台形突帯1本をめぐらす。突帯には、粗い板目キザミを施す。器面調整は、口縁部のヨコナデ以外に内外面全体にハケ目、外面胴下半部に一部ケズリ後ハケ目とナデが見られる。底部が、凸レンズ状の平底である。大きさは、口径29.8cm、器高63.7cm、胴最大径44.5～48.5cm、底径7.5cm。

下甕は、上甕と比較しても口縁・頸部の外反度が割合強く、頸部下端にキザミ目三角形突帯1本をめぐらす。胴部は割合長胴で、下半部をケズリによって尖底状の割合に小さな凸レンズ状底にしている。胴部には、板目キザミ扁平突帯を下半部に1本めぐらす。器面調整は、内外面共に口縁がハケ目の後ヨコナデ、頸部・胴部がハケ目、胴外面下半がケズリ後ハケ目を施している。大きさは、口径47.0cm、器高83.5cm、胴最大径58.5cm、底径7.8cm。

甕棺の時期は、弥生終末新段階でもさらに新しい様相を示している。



第35图 V-2号甗棺墓实测图(1/20)



第36图 V-2号甕棺墓墳実測図(1/20)

### 3号甕棺墓（第38図3）

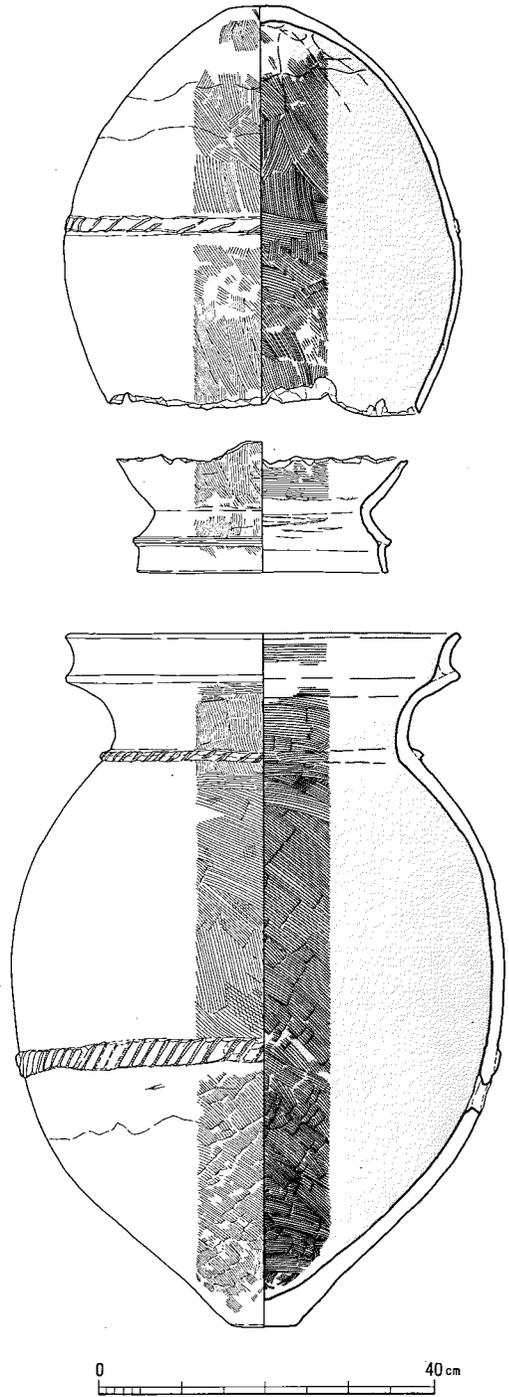
3号甕棺墓は、22号墓南側に隣接して検出できたものであるが、完全に破壊されて墓底に壺の圧痕が残り、赤色顔料が散乱していた。棺に使用されていた壺の圧痕で見ると、壺がほぼ水平で主軸をS36°Eに向けて埋置されているが、口縁部付近から南側がさらに深く削平されているために、2個の壺が合口に使用されたかどうか不明で、壺1個体分の破片が採集されたにすぎない。

### 甕 棺（図版100-3、第39図3）

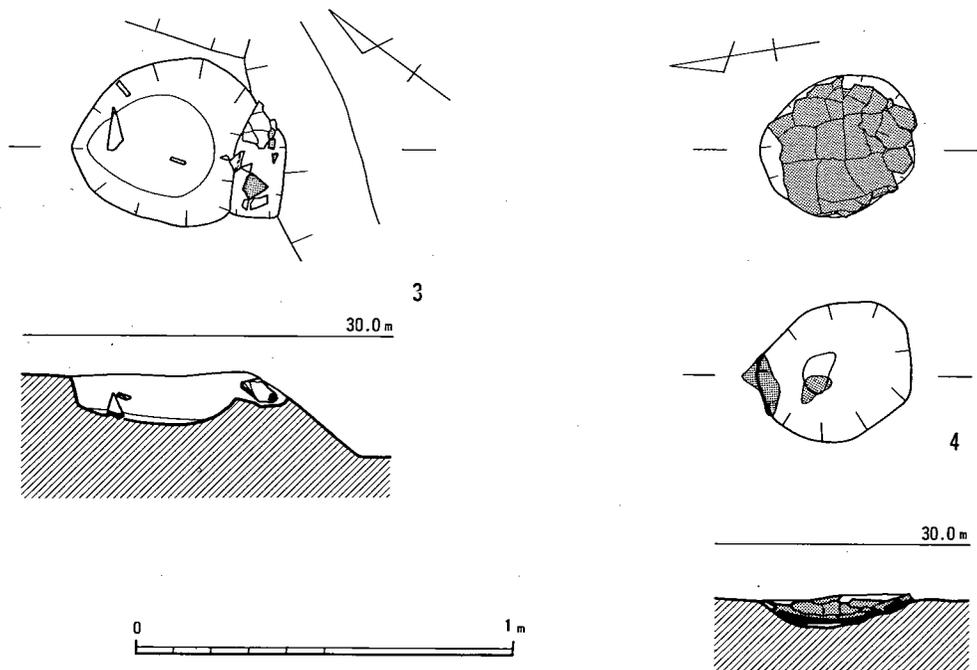
甕棺は、完全に攪乱されていたために、複合口縁壺の口縁部・肩部突帯・胴部突帯が残っていただけである。しかし、複合口縁壺の全形は不明なものの、重要な部分が残っていたところから、形式的な判定が可能である。口縁は外反が強いことと、胴部突帯が扁平に近いことから、弥生終末期でも新段階に属するものと考えられる。

### 集石遺構（第40図）

集石遺構としたものは、墳丘の北西角で発見された性格不明の遺構。遺構としては掘方も検出できず、E地区の墳丘墓の数ヶ所で見られる小さな集石遺構に似ているが、他より規模が大きい。集石は、上位に径40~50cmの河原石2個を組み、周囲に径20cm前後の石と径10cm以下の石を寄せる形態をとり、下位にくぼんだ土壌に径20cm以下の石を敷き並べている。形態的には、上位の大石が蓋石のように



第37図 2号甕棺実測図(1/9)



第38図 V-3・XI-4号甕棺墓実測図(1/20)

も見える。集石の間には、大型壺の破片と刀子片が散乱していたが、意識的に置かれたものではない。

表面採集甕棺片 (図版101-1、第41図)

V号墳墓群とした墳丘残存部表土に、2個体分の大型複合口縁壺の破片が散乱していた。V号墳墓群(V号墳丘墓)には、2・3号甕棺以外に甕棺墓の痕跡がなかったが、採集場所としてここで報告する。

1は、頸部・胴上半部と胴中位部と直接に接合できないので図上復原したものである。口縁立上りを欠損し、頸部が割合に低く強く外反する。立上りとの接合面に板目キザミを施して接合を固くしている。胴部は長胴で、上端と中位に3本の扁平突帯をめぐらし、下位突帯がとくに扁平で斜格子相目キザミを施す。胴部下半部は、外面ケズリによって著しく細めているが、底部を欠損している。大きさは、胴最大径61cmで、器高が85cm以上となるであろう。

3～5は、同一個体となると考える破片で表面採集。2が2号甕棺墓と5号周溝の間で検出された石積遺構から出土したもの。2は外面が摩滅しているが内面にミガキ状ヘラナデ調整があり、底部がわずかに凸レンズ状を呈する平底である。底径8cmの大きさ。3は、口縁立上り

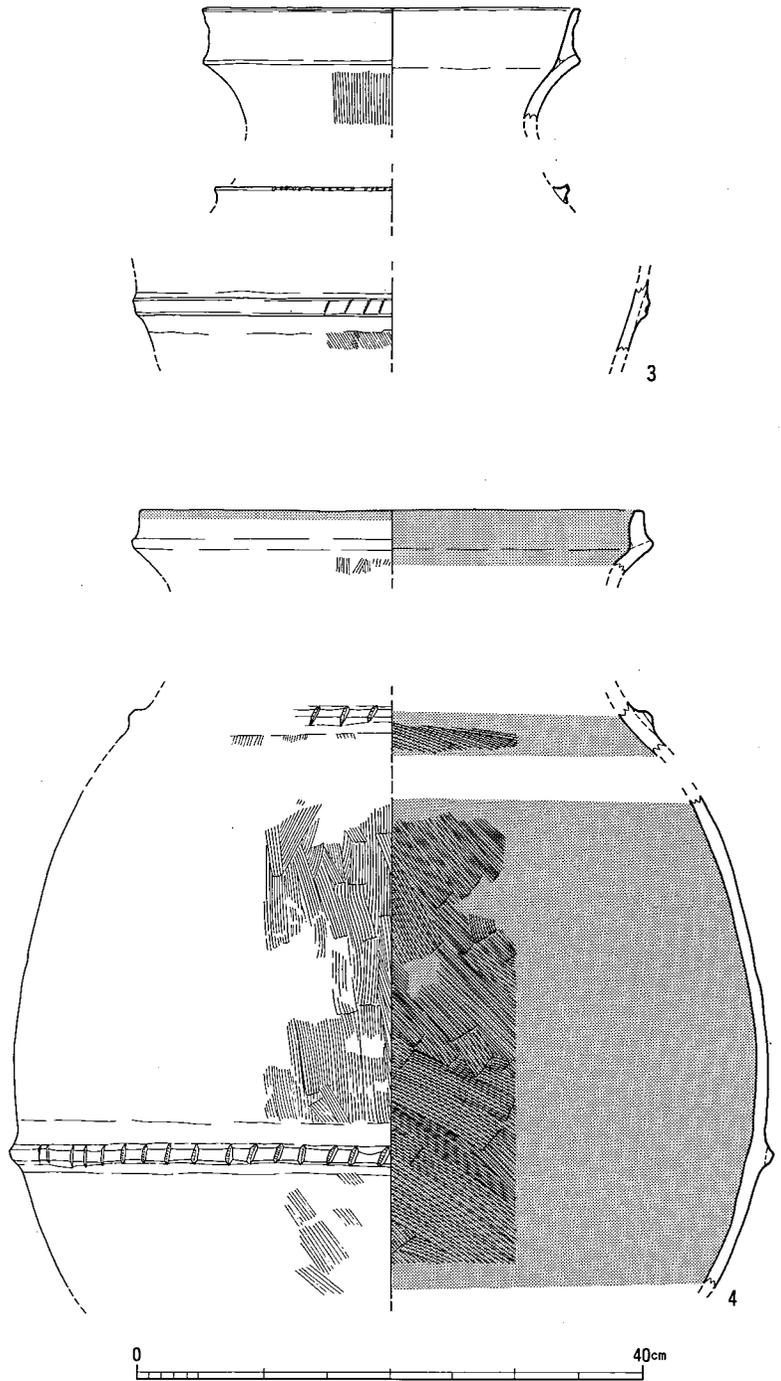
が直立に近く、頸部も立上りが強い口頸部破片・口縁内外面がヨコナデされ、頸部内外面にハケ目調整、内面に赤色顔料が塗布されている。

4は、胴肩部破片で、上端にキザミ目のない三角形突帯1本をめぐらす。器面調整は、外面にハケ目、内面にハケ目後タテナデを行っている。内面に赤色顔料を塗布している。5は、胴部中位または下半部の破片で、キザミ目のない台形突帯1本をめぐらす。器面調整と赤色顔料の塗布は、4と同じ。

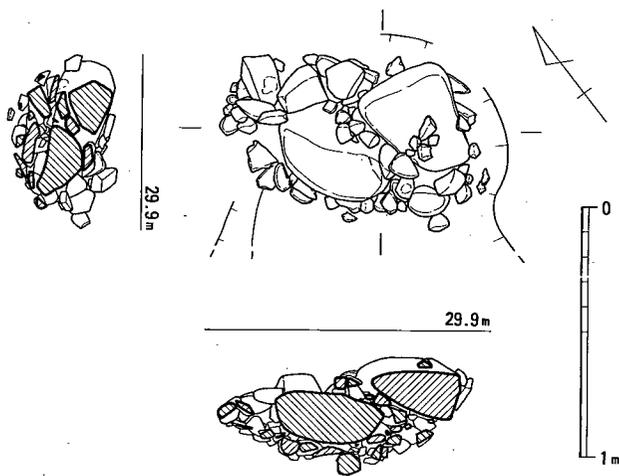
時期は、1が古墳前期前半併行、2～5が弥生終末期古段階またはやや古い様相を示す。

63号墓（図版40—3、第69図63）

墳丘外の北東角で発見された小児用土壙墓であるが、著し



第39図 3・4号甕棺実測図(1/6)



第40図 V-集石遺構実測図(1/30)

い削平によって床面のみが残っていた。平面形は、両小口が丸く、中央部に最大幅があつたらしい。枕はないが、床面の西側が高い。床面全体に赤色顔料が敷かれている。

V号墳墓群は、周溝の形態から確実に方形墳丘が想定できる唯一のもので、しかも中心的主体部も存在したが、目立つ副葬品がなかったことで、もう1つの中

心的な規模の23号墓が荒らされていたことが惜まれる。いずれにしても、弥生終末の墳丘墓の一形態としての好資料となろう。墳丘の中で、中心主体部の存在は明らかになったが、墳丘中心から南側が空白であるのも気になる。Ⅲ号墳墓群においても、荒らされた中心主体部以外が東側にあるところと通じるようだが、いずれにしても墳丘自体が高いものではなく、区画的な存在であった可能性が強い。

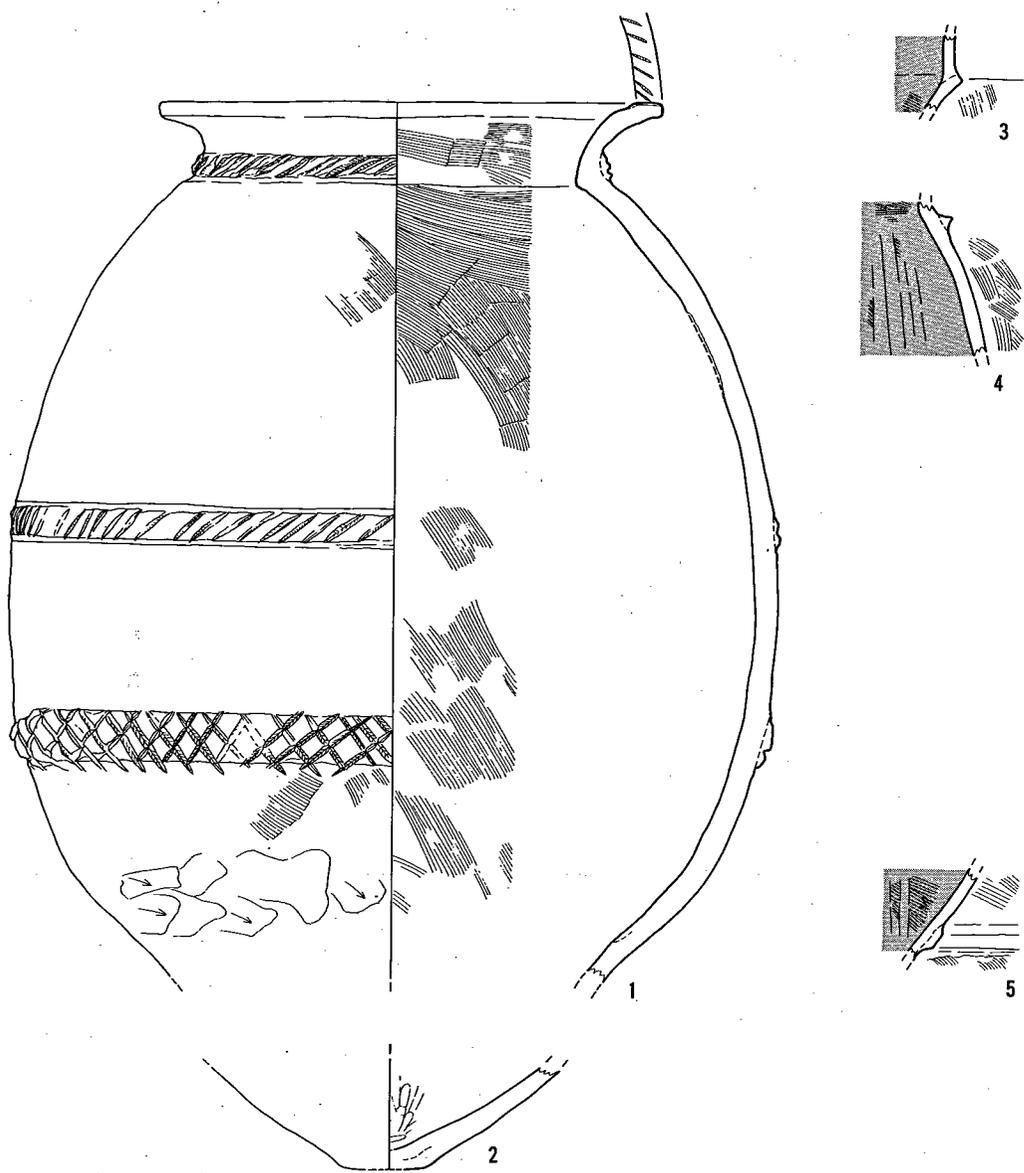
#### ⑥ VI号墳墓群 (図版3-1、33-1、第21図)

V号墳墓群の南西側にある3号周溝を切って営まれている一群をVI号墳墓群とした。この一群は、現状で4基となっているが、墓の形態と時期から判断すると、28号・42号墓の2基と1号・2号墓の2群に分けられ、1号・2号墓が6世紀以後に重複したものである。したがって、V号墳墓群に埋葬が継続している時期に、28号・42号墓が墳丘外に埋葬されていることになる。

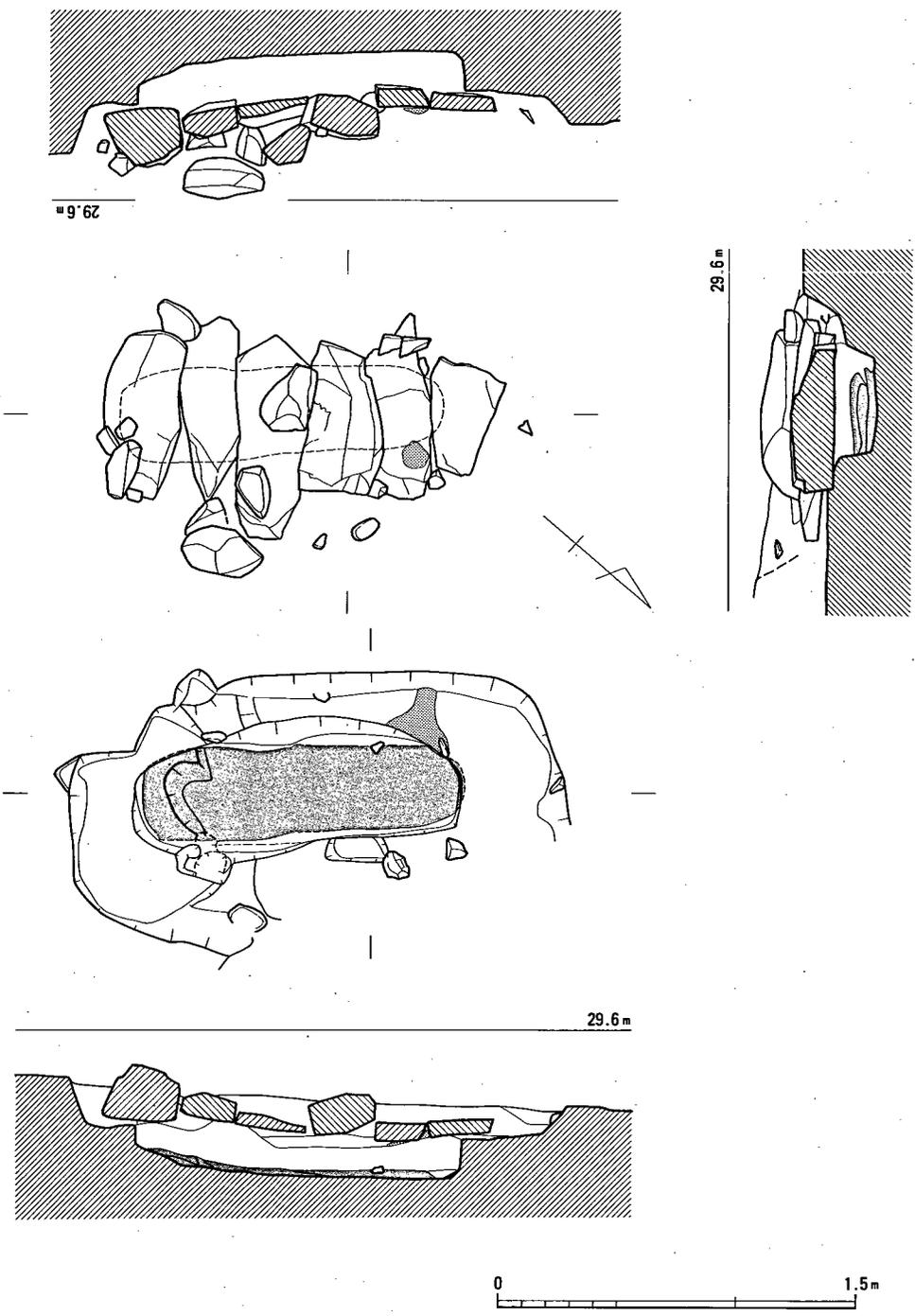
#### 28号墓 (図版41-1・2、第42図28)

28号墓は、42号墓の南側に重複しているが、現場での判断で42号墓より新しいものとしたが、明瞭に墓壙線が42号墓を切った形で検出されたわけではなく、現場での雰囲気からであった。いずれにしても、42号墓に付随する墓であろう。

墓壙は隅丸長方形で、主軸を同じくして石蓋土壙墓が中央に設置してある。蓋石は、6枚が使用され、頭部の南東側1枚が厚味のある河原石、他が輝緑岩が利用されている。蓋石の下側に赤色顔料が塗布されている。墓壙内には、多少浮いた状態で径20~30cm大の河原石が頭部側に集中して見られ、標石であると思われるが、標石とすれば高い墳丘が存在しないことになる。



第41图 V号墳丘墓周辺表採土器实测图(1/6)



第42图 VI-28号墓实测图(1/30)

棺本体の土壙は、両小口が丸く、最大幅が肩部にある平面形をし、床面に段が不明瞭な削出枕を付設する。土壙の壁面は、蓋石の重みでの崩壊もあるが、本来最も浅い土壙墓であり、成人の埋葬は不可能である。

#### 42号墓（図版6、41-3、第43～45図）

42号墓は、表土直下から径20～30cm大の河原石が集中しているのが確認されたが、墓壙の輪郭線の検出に困難を来した。実際は、V号墳墓群の3号周溝を切って墓壙が掘られていたが、墓壙を検出できたのが、河原石群が浮いた形になってからであった。この河原石群は、42号墓の埋葬が終って若干盛土となった低墳丘の上に置かれた標石で、頭部上にあたる北東側に集中している。

墓壙は隅丸方形で、棺本体が対角線上に配置してある。墓壙内には、蓋石上の浮いた位置と南側土器が各1個供献されているが、南側の鉢が28号墓に伴う可能性もある。しかし、28号墓には、他に供献土器がないところから、42号墓のものとした。墓壙の南東側は、割合余裕があり、ここに第45図のように超大型鉄製釣針5点と鉄鏃1点が供献されていた。鉄器類は、墓壙床面から多少浮いて一括して出土したので、蓋石設置後に置かれたものと思われるが、置き方が不規則である。釣針のうち第83図28の1点を発掘時に欠損したが、その軸に添って1個の小石があり、出土状況では意味ありげであった。

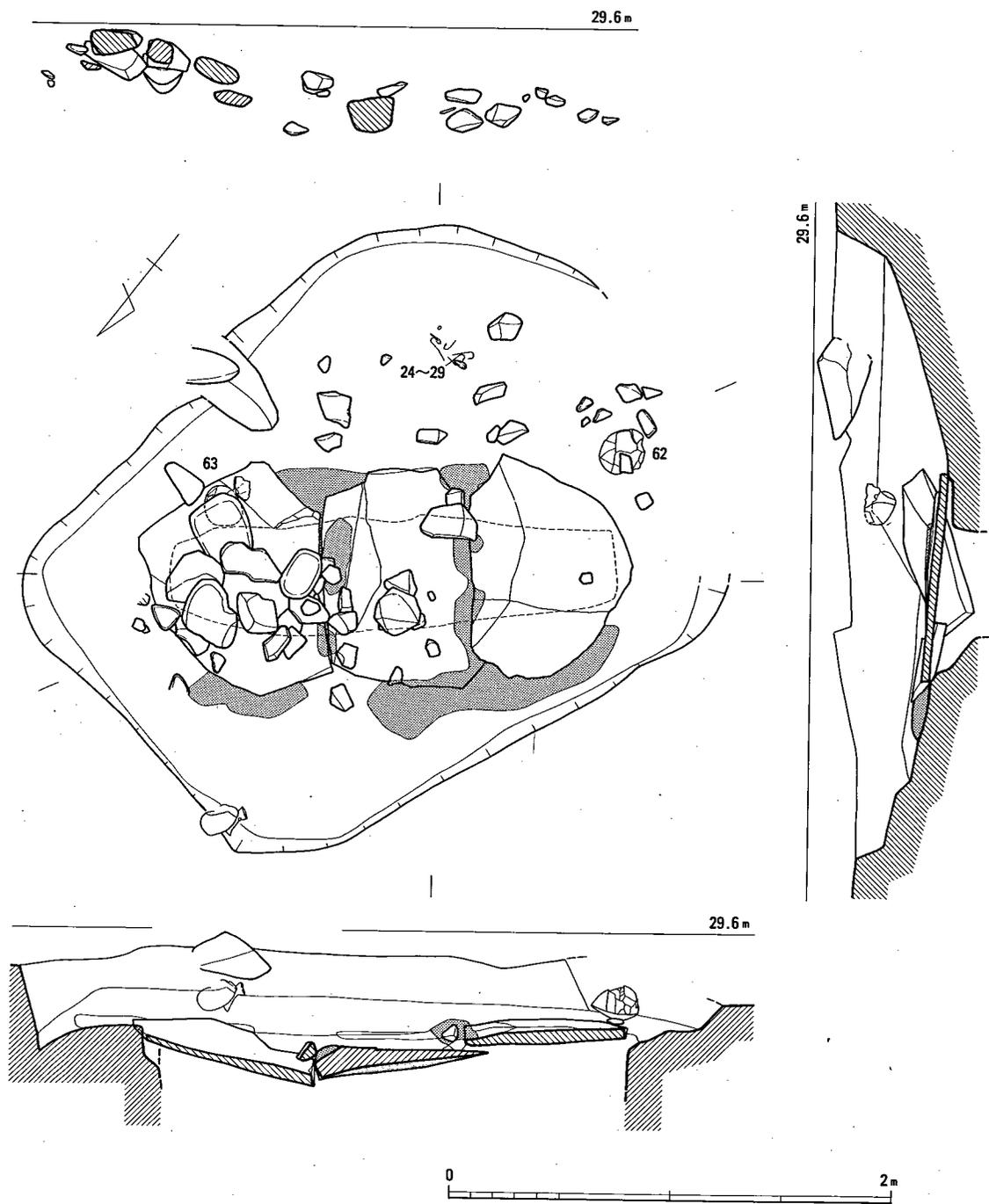
蓋石には、径1m前後の大型片岩が3枚使用されているが、厚さとして割合薄いものである。蓋石の間隙の目張りとして粘土が使用されているが、さほど多いものではない。蓋石の下側には、全面に赤色顔料が塗布されている。

棺本体の土壙は、両小口が平坦面をもつ箱形で、最大幅を肩部におく平面形をし、床面が北東小口に削出枕を付設している。土壙の壁面は垂直に掘られ、一部において内傾するところもある。

床面には、全体に5cm前後の厚さで赤色顔料が敷かれ、頭がとくに10cm以上盛上っていた。棺中央部の右側壁に添った赤色顔料の中で、切先を頭部に向けた超大型透孔付鉄鏃と、切先を足元に向けた刀子が副葬してあった。鉄鏃には矢柄着装の痕跡があり、出土位置から矢柄の長さが105cm以内となる。枕直下中央部に歯の一部が残っており、頭の位置が確定できる。

#### 1号墓（第46図1）

一群から離れた北側にある大型土壙墓。実際には、副葬品等もなく、床面も一定しないので墓としての確証がない。土壙内からは、数個の河原石が発見されることから、墓であれば木蓋や標石が存在する可能性がある。後の古墳に関連するものであろう。

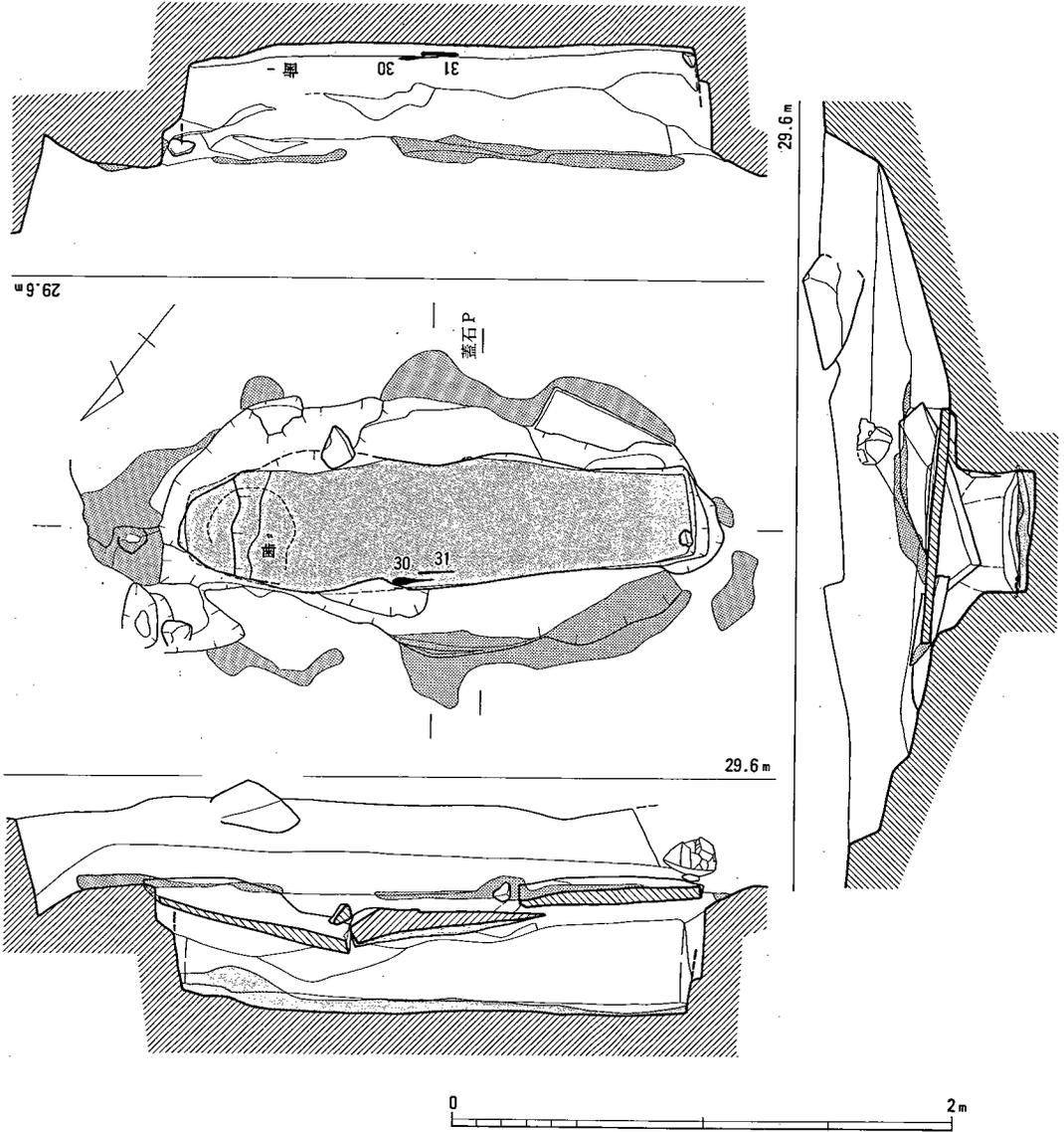


第43図 VI-42号墓の標石と蓋石実測図(1/30)

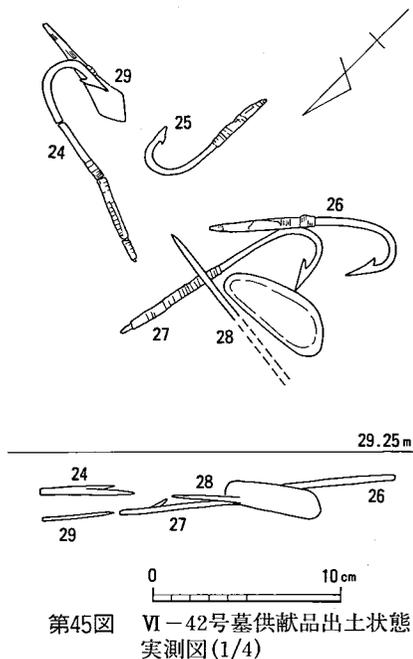
2号墓 (図版42-1、第47図2)

一群の南端にあって、28号墓を切って掘られた土墳墓。土層図からは確定できなかったが、土壌の平面形が箱形であることや、小口壁が垂直に掘られていることから箱形木棺を納めた土墳墓である。埋土中には、木蓋の上にあったと思われる河原石や土器片がある。

床面は、小口の広さでは東枕で、中央部が最大幅となり、足側幅が60cmとなっている。足部



第44図 VI-42号墓実測図(1/30)



第45図 VI-42号墓供献品出土状態  
実測図(1/4)

左側と中央部の足元寄り各1点の鉄鏃、足部右側に数点の鉄片が出土した。この木棺内蔵の墓は、鉄鏃の型式から、古墳群に関連する。

VI号墳墓群は、42号墓に超大型鉄製釣針を5点もっているが、棺本体が石蓋土壙であることから、石棺墓が多いV号墳墓群に従属的であることを否定できない。

⑦ VII号墳墓群 (図版3-1、42-2、第48図)

VII号墳墓群は、13号墳・14号墳の石室掘方・周溝・墓道との重複によって破壊されたものもあり、現場での一群としての確認が困難であったので図面上から設定した一群である。第48図のように一群として抜出すと、もっともらしい一群となるが、43号・44号・57号墓の従属する3基がIII号墳墓群の復原墳

丘の南端に含まれる可能性があり、そうだとすると、図のような長方形区画が成立しない。いずれにしても、副葬品や形態からも、中心的主体部がないところから、墳丘墓ではなからう。

25号墓 (図版43-1・2、第49図25)

一群の南側に位置する石蓋土壙墓。墓壙は隅丸長方形で、その中央に主軸を同じくして土壙を掘っている。

蓋石は、5枚の板石が使用され、頭部の南西端の1枚が片岩、他が輝緑岩が利用されている。蓋石の下側には、赤色顔料が塗布されていない。

土壙は、両小口が丸味をもち、頭部に最大幅をもつ平面形に、床面の南西小口に比較的大きな削出枕を付設する。壁面の大半が内湾するが、足元がとくに著しい。

26号墓 (図版43-3、第50図26)

一群の中央より西側にある小型石蓋土壙墓。墓壙は隅丸長方形で、主軸を同一にして中央に土壙を掘っている。蓋石には、花崗岩1個と河原石の合計4個の厚味のある石が利用されている。目張りとして、小石を並べ粘土を使用していない。

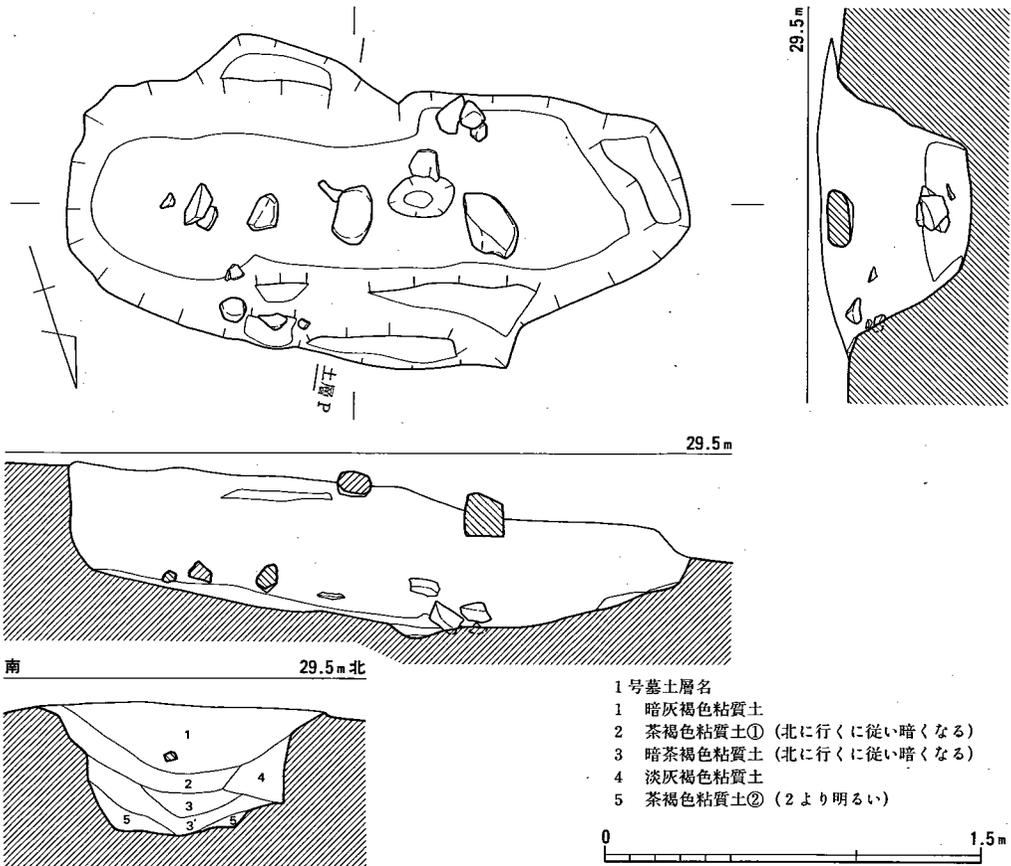
土壙は、両小口が角張り、最大幅を肩部に置き、削出枕を西側に付設する。

43号墓 (図版44、第51図43)

一群の北東角にあるが、Ⅲ号墳墓群に所属する可能性をもつ石蓋土墳墓。墓壙は、北側上部を13号墳の周溝で、西側角を57号墓によって切られている。墓壙の平面形は隅丸長方形で、対角線上に棺本体を置く。

蓋石は、片岩4枚と安山岩が合計5枚使用され、下面に薄く赤色顔料が残っている。墓壙の西側角には余裕があり、1個の片岩と赤色顔料がある。赤色顔料の両側からは、1点の素環頭刀子が柄部と身に分かれて出土した。棺内も荒らされていないことから、墓壙内に意識して置かれたものである。

土壙は、特別に東壁に2枚の安山岩の板石が立てられているが、下面に掘込まれてもいない。他の壁面は内傾ぎみに掘られ、足元小口を横穴状に掘っている。土壙平面形は、北側頭部が隅丸、足元が丸造り、最大幅が肩部となっている。

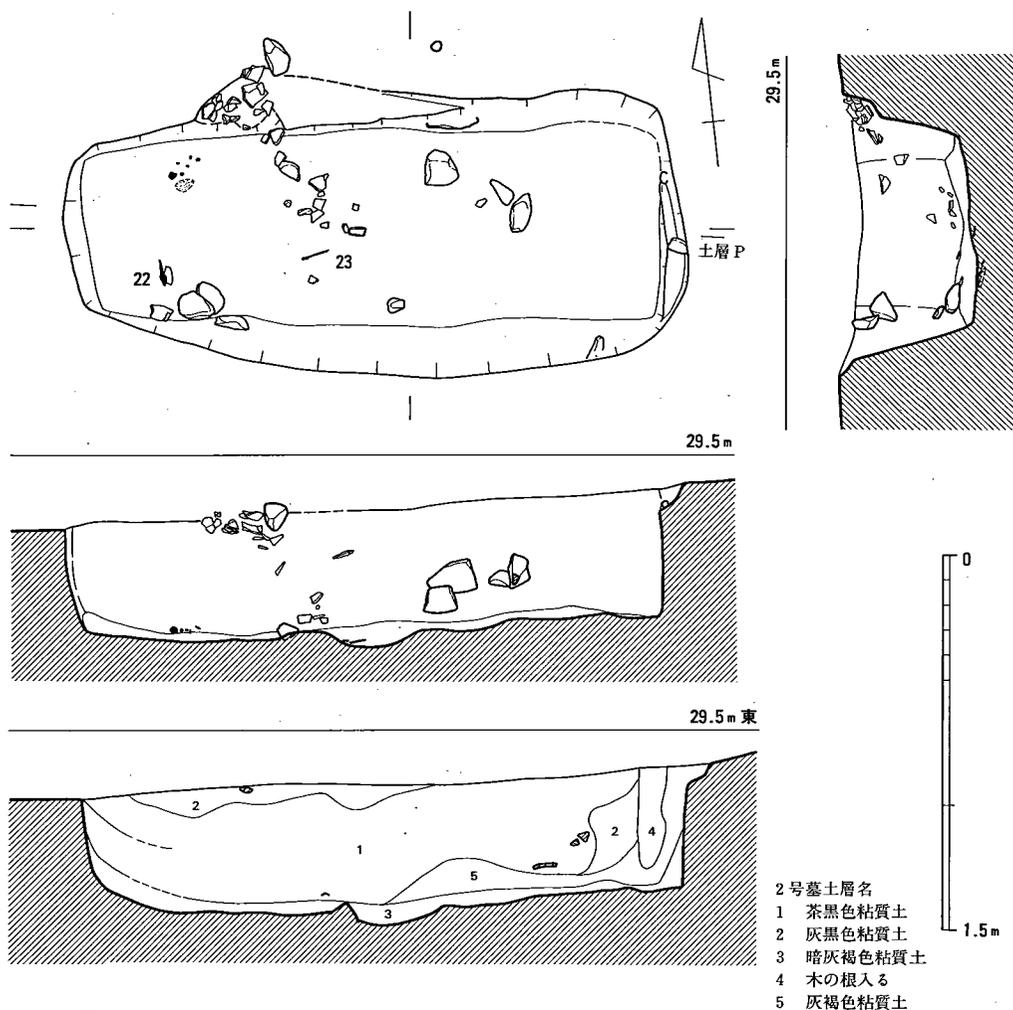


第46図 1号墓実測図(1/30)

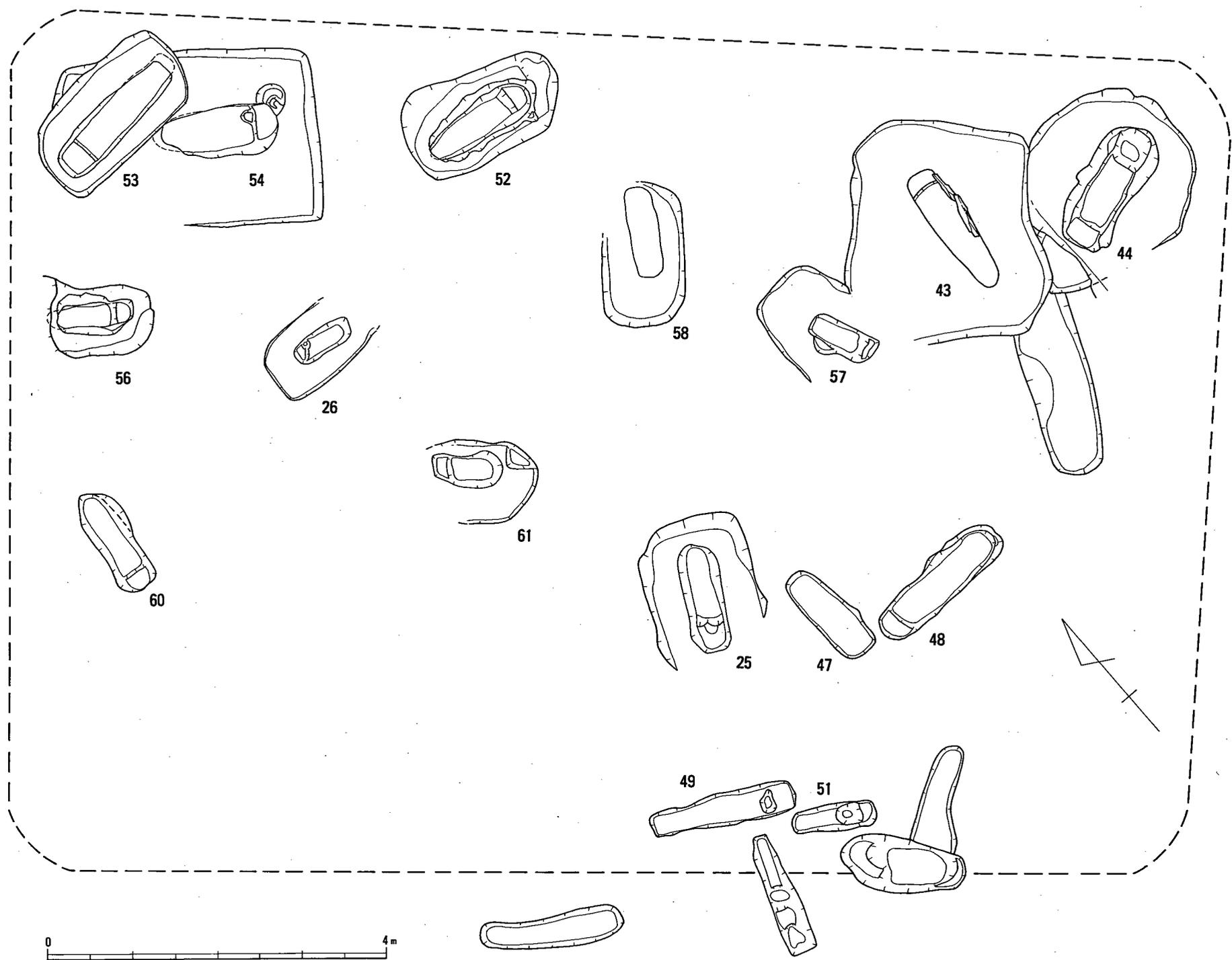
44号墓 (図版45-1・2、第52図44)

一群の北東角にあり、Ⅲ号墳墓群に属する可能性の強い石蓋土壙墓。墓壙と本体の西側半分を13号墳周溝によって破壊され、棺内も荒らされている。墓壙の平面形が変わっており、菱形の一方が丸造りとなっている。土壙はその墓壙の対角線にあり、足側が丸く広くなった形となる。蓋石は、足側の2枚が残り、片岩と安山岩が利用されている。

土壙は、西側小口に削出枕を付設し胸部を最大幅としている。足元のくぼみは、下に落とし穴があるところから掘りすぎたもので、壁面が全体に内湾している。荒らされた棺と蓋石上から、鉄鏃と素環頭刀子片が出土した。



第47図 2号墓実測図(1/30)



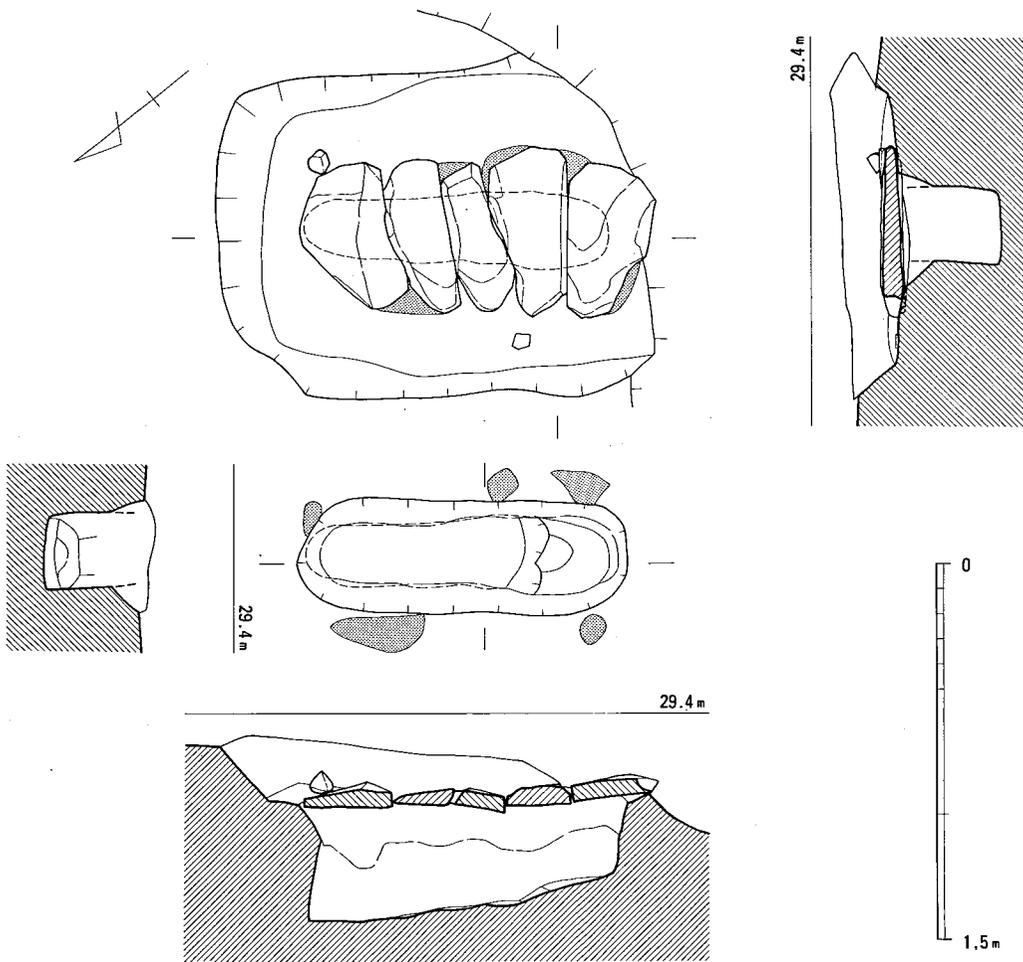
第48图 VII号坟墓群全体图(1/60)

57号墓 (図版49-1、第58図57)

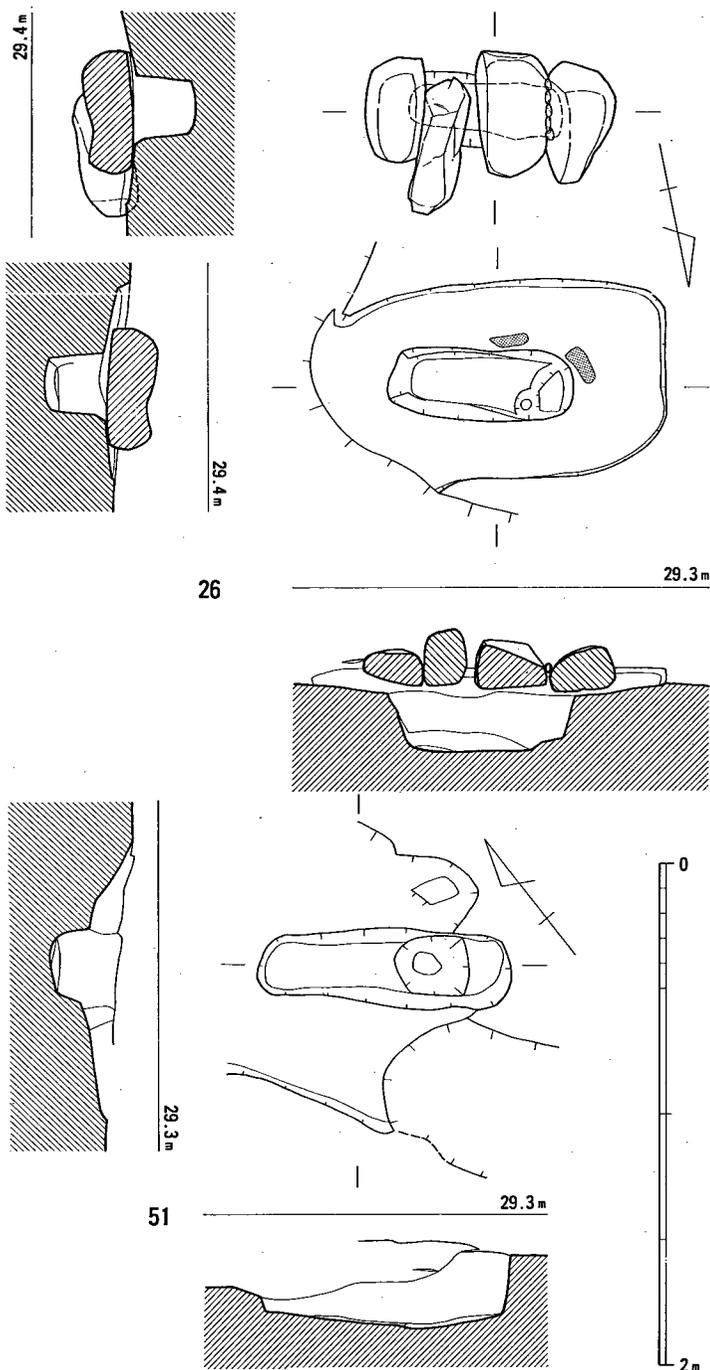
これもⅢ号墳墓群に所属する可能性の強い小型石蓋土壙墓で、13号墳周溝によって半分を破壊されている。墓壙は、隅丸長方形であるが、土壙が対角線ぎみに掘られている。蓋石は、足部に1枚の安山岩が残っているにすぎない。

土壙は、両小口が角張り、肩部を最大幅とし、南に枕が付設されている。壁面は、全部が内湾していたものらしい。

47号墓 (図版45-3、第53図)



第49図 VII-25号墓実測図(1/30)



第50図 VII-26・51号墓実測図(1/30)

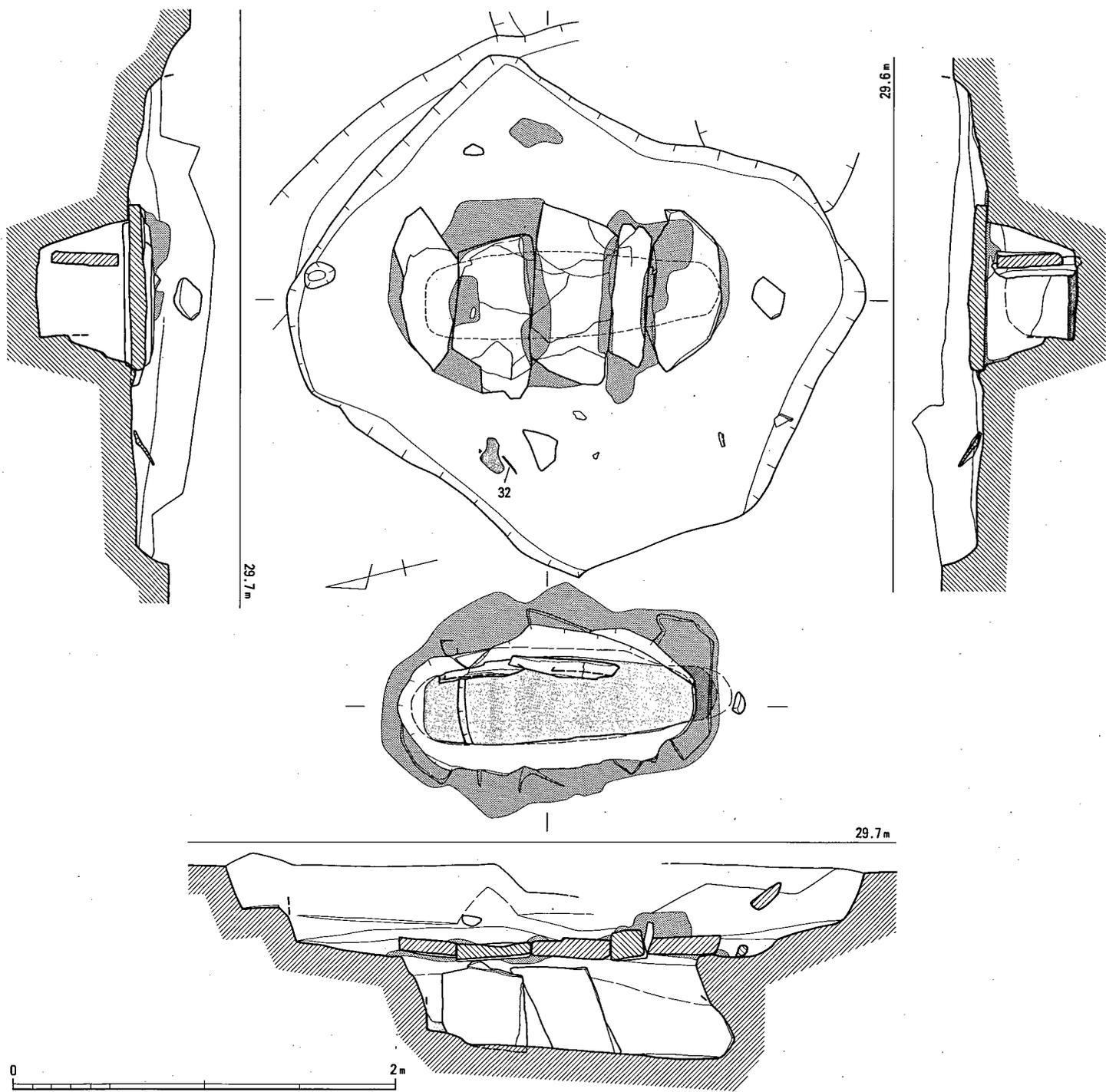
一群の南側にある土壙墓で、棺床がわずかに残っていた。床面は、両小口に多少丸味があり、中央部に最大幅をもつもので、枕が付設しないが、幅から南枕となる。床面全体に赤色顔料が敷かれている。

48号墓 (図版46-1、第53図48)

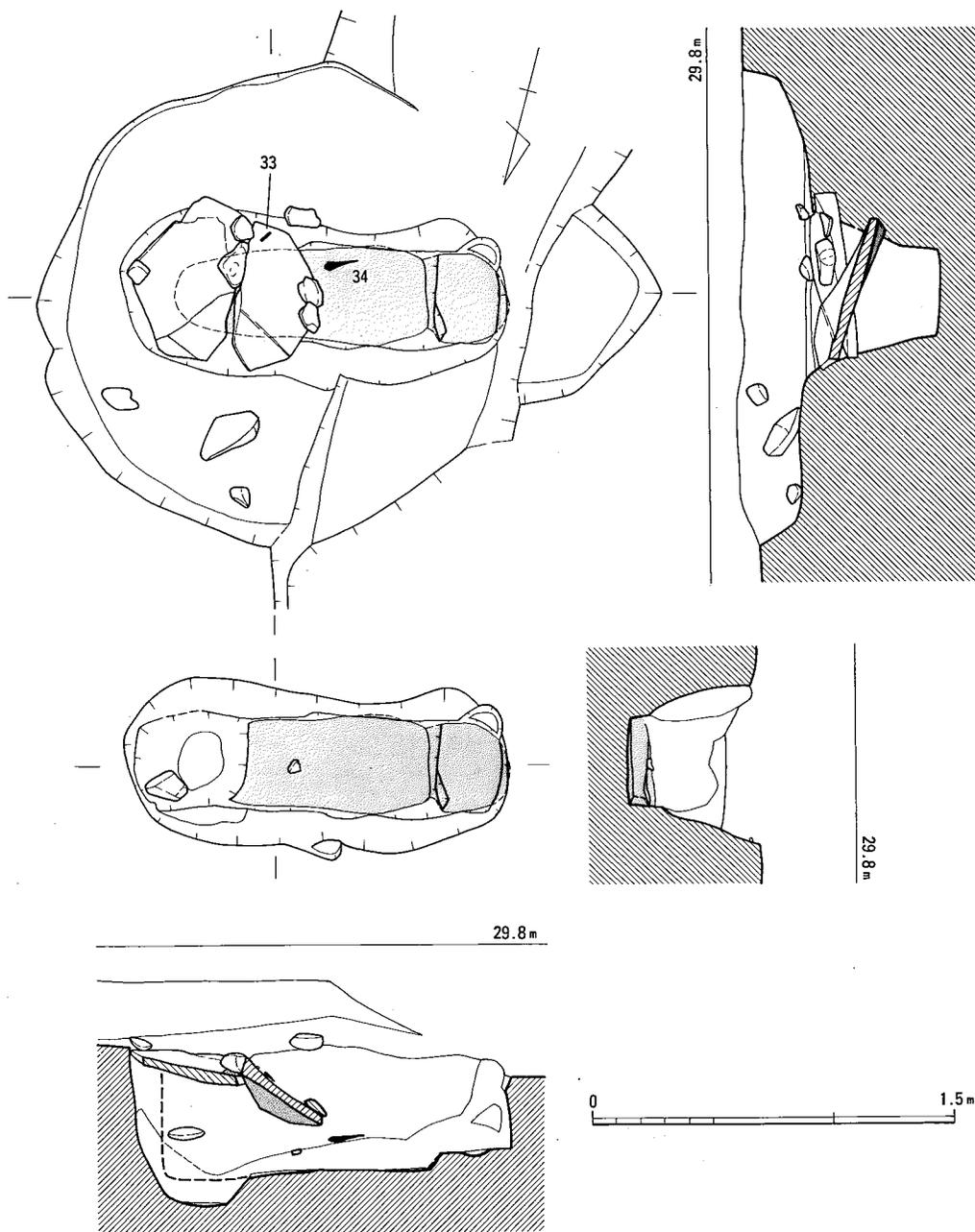
一群の南東側にある土壙墓であるが、これも13号墳の石室掘方とその盗掘によって上部を破壊されている。土壙は、両小口に丸味があり、最大幅を中央部に、高い枕を西小口に付設する。壁面の崩壊が著しいところから石蓋であったと思われ、壁の足元小口が内湾している。

49号墓 (図版46-2、第53図49)

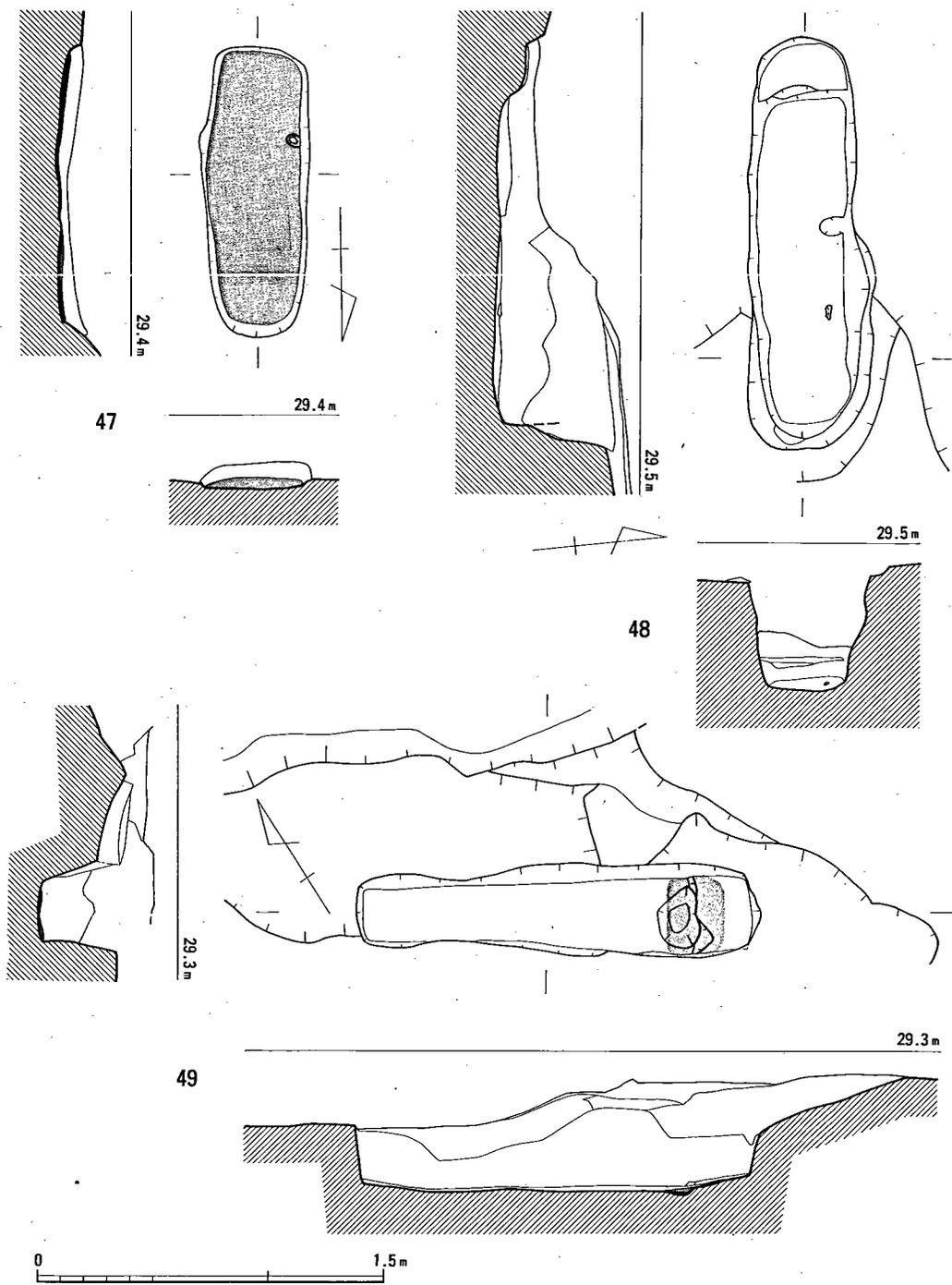
一群の南端にある土壙墓で、上部を破壊されているが、菱形墓壙に対角線に掘られてい



第51图 · VII-43号墓实测图(1/30)



第52图 VII-44号墓实测图(1/30)

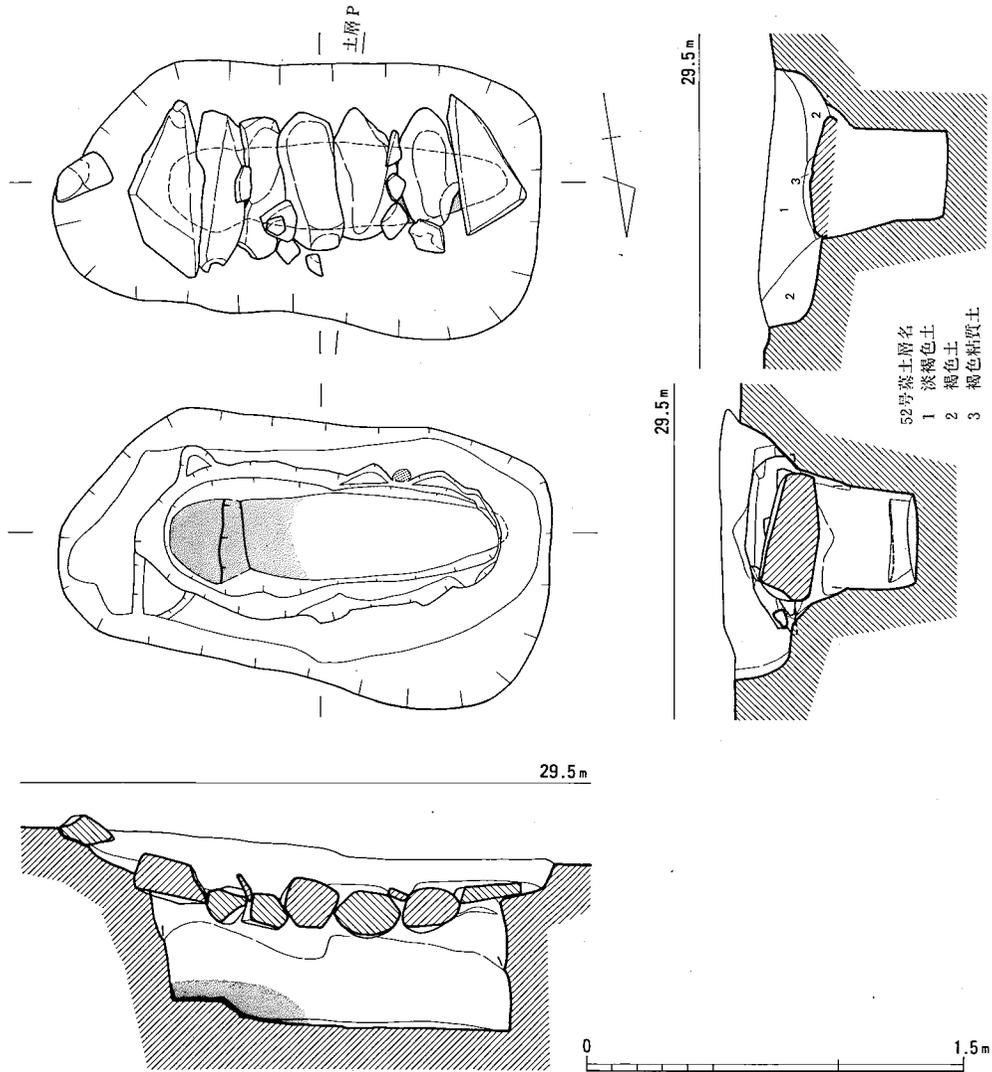


第53图 VII-47·48·49号墓实测图(1/30)

る。土壙は、細長の両小口が角張り、最大幅を頭部に置く箱形平面で、南東小口に削出枕を付設する。床面の枕直下のみ赤色顔料が見られた。

51号墓 (図版46-3、第50図51)

一群の南端にある小型土壙墓で、上部を破壊されている。土壙は、両小口に丸味があり、肩部を最大幅とし、南東枕としている。



第54図 VII-52号墓実測図(1/30)

52号墓（図版47-1・2、第54図52）

一群の北側にある石蓋土壙墓で、不整隅丸長方形の墓壙をもっている。蓋石は、両端の3枚に片岩を利用し、他の4個が河原石を利用しており、下面に赤色顔料が見られない。

土壙は、両小口を丸造りとしているが、足元が細くとがる特徴があり、腹部に最大幅がある。東枕の削出枕は高く、壁面が足元と側壁の一部に内湾するところがある。

赤色顔料は、頭部から胸部にかけての床面と壁面に見られる。

53号墓（図版47-3、48-1・2、第55・57図53）

一群の北西角にある木蓋土壙墓で、54号墓の大型壙墓の一角を切って造られている。墓壙は、細長い隅丸梯形で、保存もよい。

土壙も細長い箱形で、中央部に最大幅をもつ。床面の西側小口に削出枕を付設し、壁面の足元を内湾させている。

床面には、全体に赤色顔料を薄く敷き、枕上に刃を左下に向けた鈍と中央部左側に切先を足元に向けた小型鉄鏃が副葬されている。

54号墓（図版48-3、第56・57図54）

一群の北西角にあつて、53号墓によって大型墓壙の北西側を破壊された木蓋土壙墓。墓壙は、整美な大型であるが、土壙が中央より東寄りに中型のものが掘られている。

土壙は、両小口が丸造り、胸部に最大幅、南東枕となっている。壁面は、全面が内湾するが足元小口がとくに著しく内傾している。床面には、全面に赤色顔料が敷かれるものの、副葬品がない。

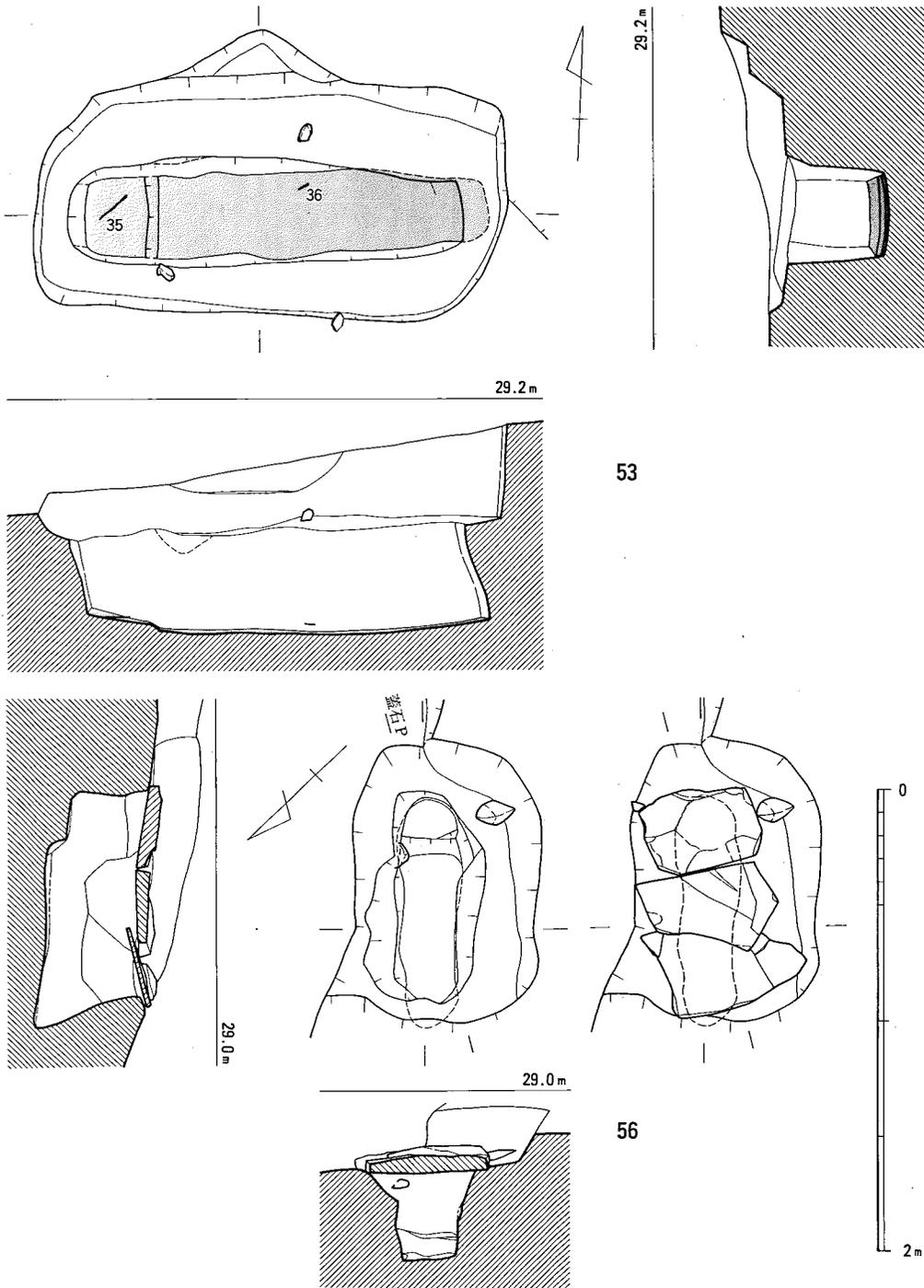
56号墓（第55図56）

一群の西側にある小型石蓋土壙墓。墓壙の東側を2号方墳に、西側を崖で破壊されているが、棺本体と蓋石は荒されていなかった。蓋石は、3枚の安山岩を利用している。

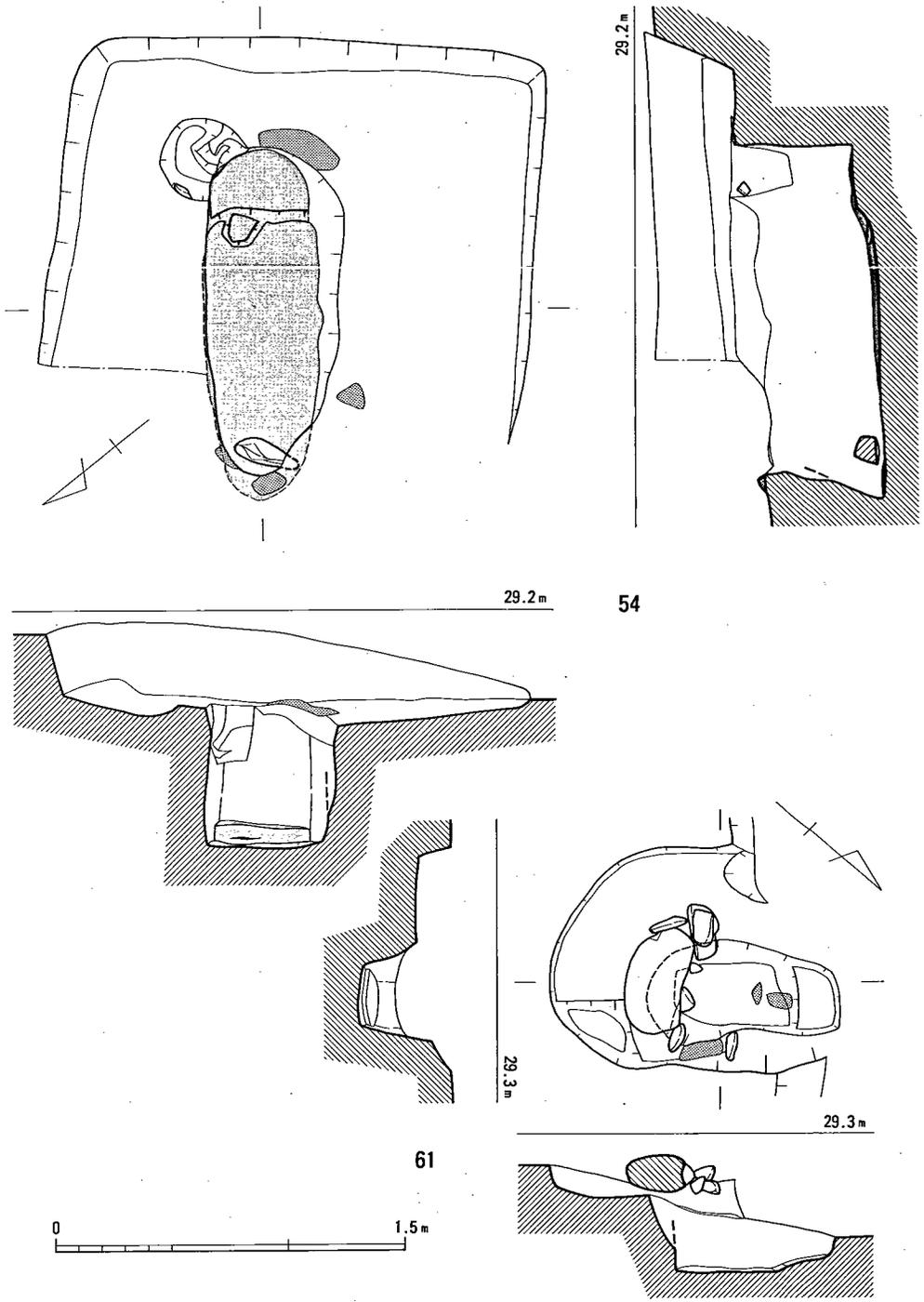
土壙は、両小口が丸造り、胸部に最大幅、壁面が内傾する造りとなり、床面・蓋石に赤色顔料が見られない。

58号墓（図版49-2、第58図58）

一群の北側にある中型木蓋土壙墓で、墓壙の北東側を14号墳の墓道によって破壊されている。墓壙は、隅丸長方形であるが、さほど大きくもないのに土壙を北東（頭部）側に寄せて掘っている。墓壙の4分の3が荒らされていないのに石蓋がないところから木蓋としたが、目張粘土や土壙壁面の保存もよい。



第55图 VII-53·56号墓实测图(1/30)



第56图 VII-54·61号墓实测图(1/30)

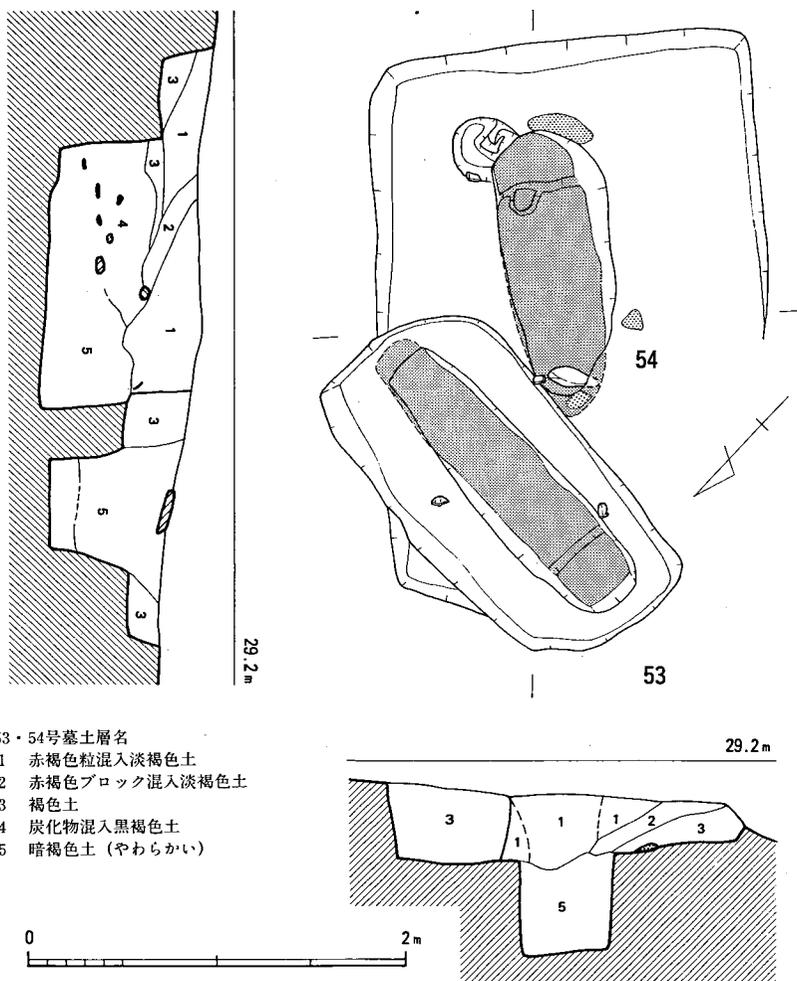
土壙は、両小口が隅丸造り、最大幅が胸部、北東小口に削出枕を付設し、壁全面を内傾させている。

60号墓 (図版49-3、第59図60)

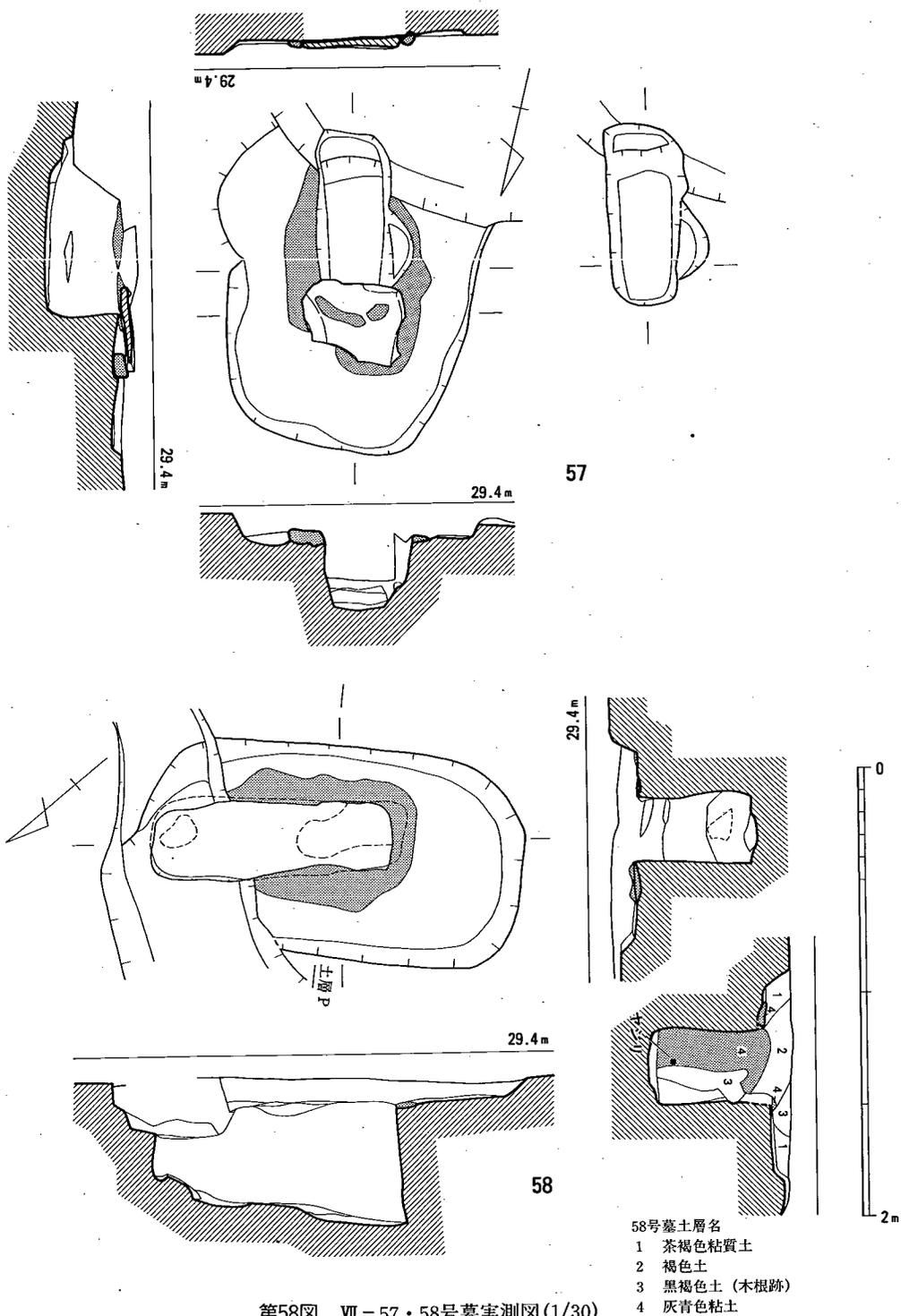
一群の西側の崖面にあつて、墓壙の一部などを破壊された中型石蓋土壙墓。一部残存する墓壙は、対角線に土壙を掘る型式で、足元にあたる北側の蓋石1枚が残っていた。

土壙は、両小口丸造り、最大幅を肩部、南小口に削出枕を付設し、壁全面が内傾する造り。

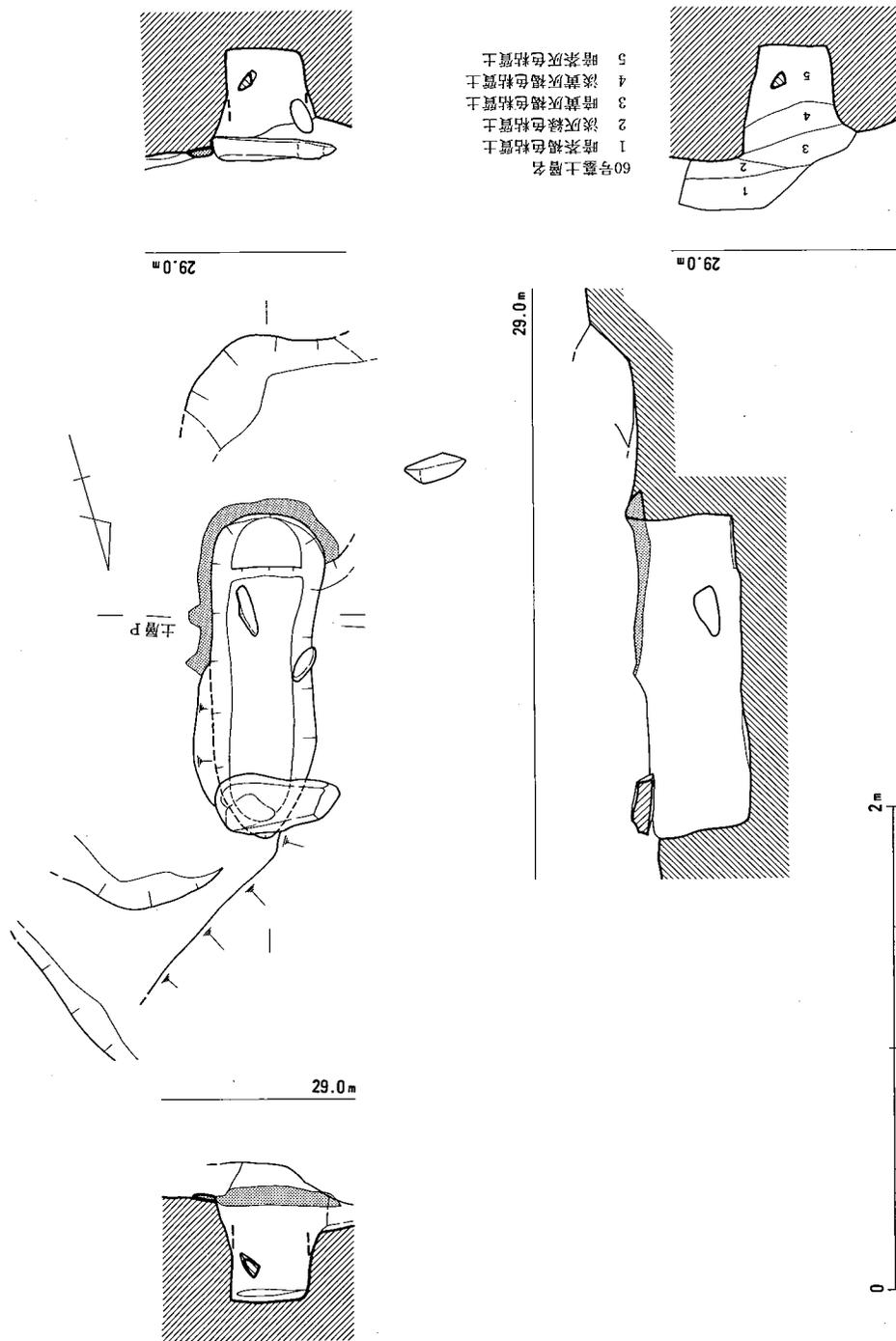
61号墓 (第56図61)



第57図 VII-53・54号墓関連実測図(1/40)



第58图 VII-57·58号墓实测图(1/30)



第59图 VII-60号墓实测图(1/30)

一群の中央部にある小型石蓋土壙墓で、北西側半分を2号方墳の周溝によって破壊されている。墓壙は楕円形と思われるが、これも北東側の長辺に沿って土壙を掘っている。蓋石は、足元の南東端に河原石1個が残っていた。

土壙は、両小口が隅丸造り、最大幅を中央に、北西小口に削出枕を付設し、壁面の足元が内傾する造りとなっている。

Ⅶ号墳墓群は、前述したように墳丘墓や区画墓として成立しない要素があり、43号・44号・57号がⅢ号墳墓群に含まれる可能性が強いことから、独立した群として扱えなくなる。そうなると、Ⅵ号墳墓群のように、53号・54号墓のような従属関係が成立する小群に分割することが可能になってくる。このように43号・44号・57号墓がⅢ号墳墓群に含まれないとしても、小群の従属関係が成立することも考えられる。

#### ⑧ Ⅷ号墳墓群（図版51-2、第60・61図）

Ⅷ号墳墓群は、石棺墓を中心主体部とするⅨ号墳墓群の南東側に隣接することもあって、一群を構成するものではなく、Ⅸ号墳墓群外に付随するものとして扱うべきかもしれない。実際に群を構成する3基のうちの1基が礫床土壙墓で、時期が離れる可能性をもっている。

##### 27号墓（第61図27）

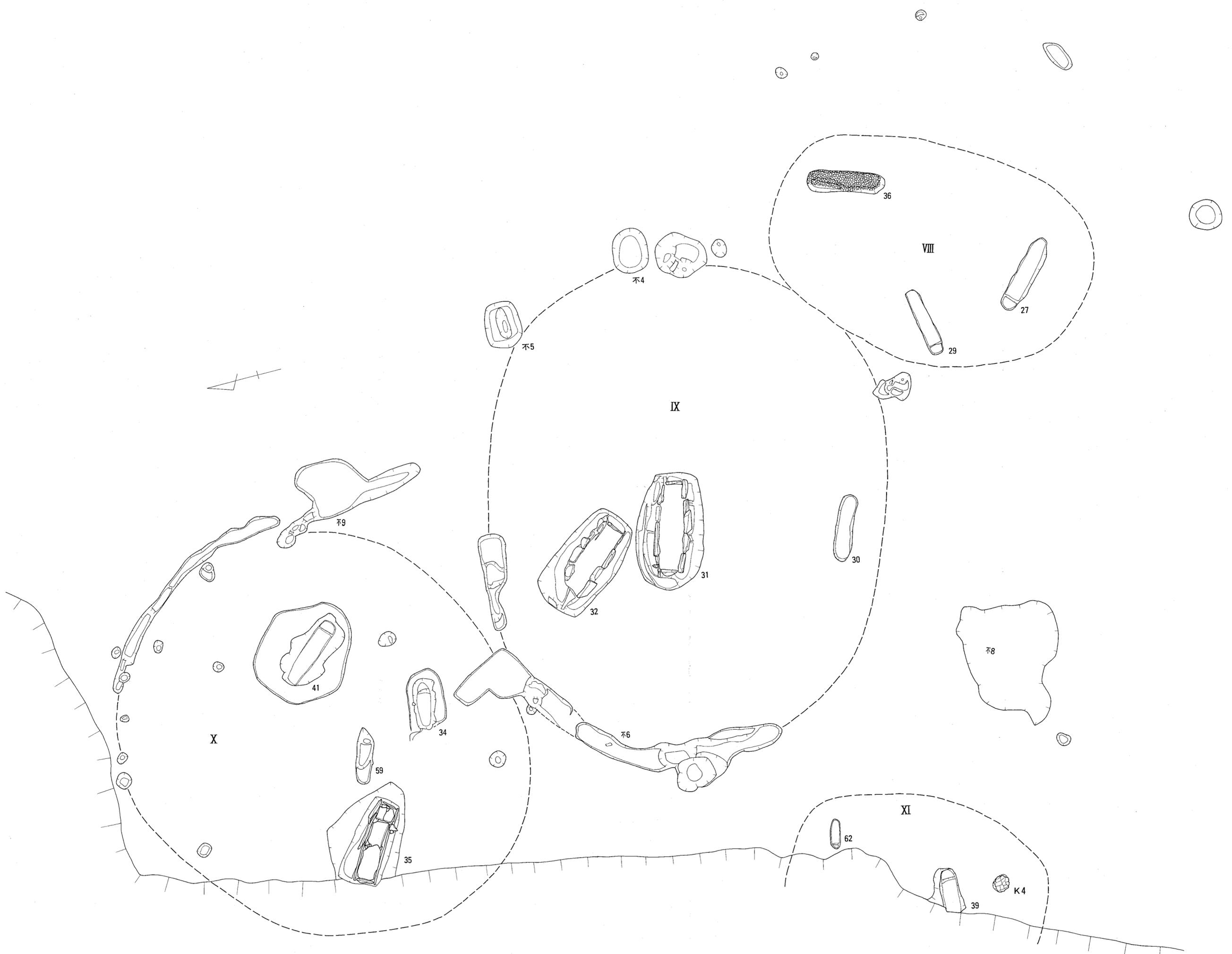
一群の南側に位置する大型木蓋土壙墓で、上部を削平によって失っている。土壙は、両小口丸造り、肩部に最大幅、北西小口に削出枕を付設、壁面を外傾した造りとなっている。棺内が荒らされていないことから木蓋とし、床面中央部左側に切先を頭部側に向けた2本の鉄鏃が副葬しており、床全面に赤色顔料が敷いてある。鉄鏃は、矢柄が着装してあることから、棺尻までの長さ70～80cm以内の矢柄の長さになる。

##### 29号墓（第61図29）

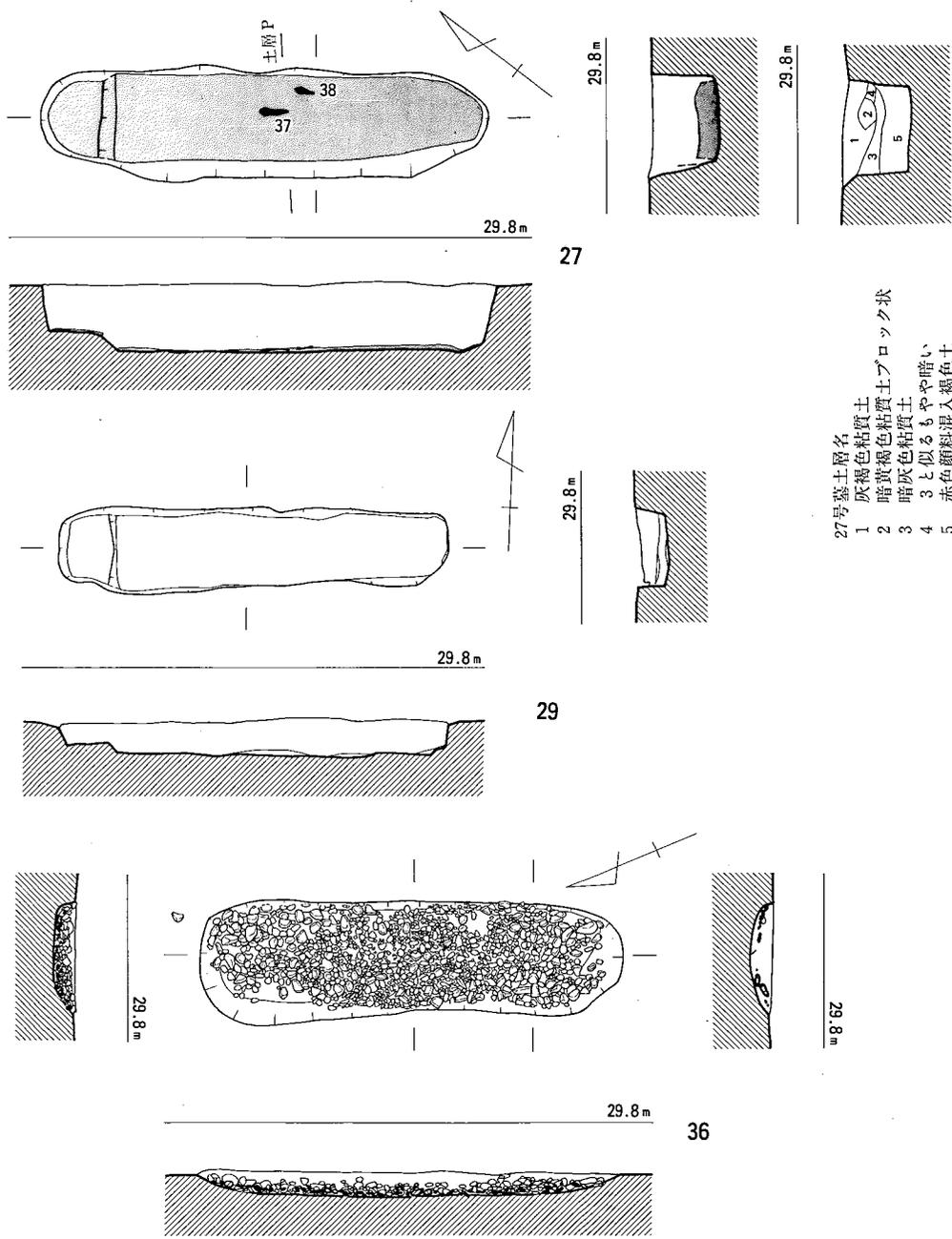
一群の西側にある大型木蓋土壙墓で、上部の大半を削平されている。土壙は、両小口が隅丸造り、最大幅を肩部に、西小口に削出枕を付設する。蓋については不明であるが、土壙が箱形であることと、棺内が荒らされていないことから木蓋とした。

##### 36号墓（第61図36）

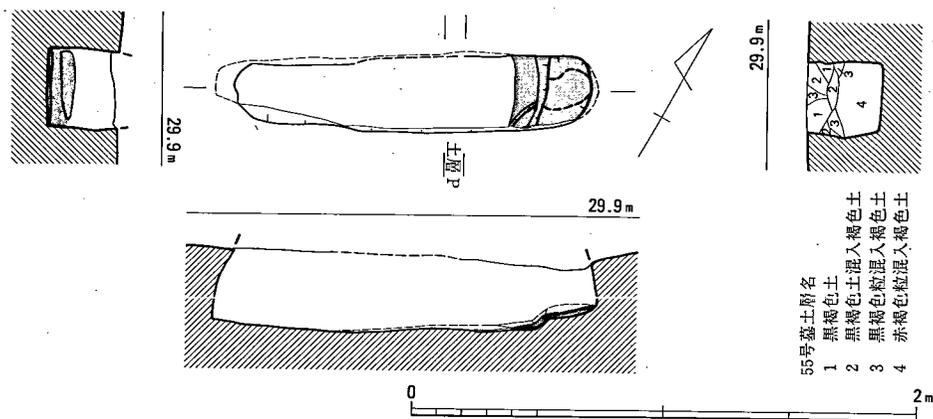
一群の北側にある礫床土壙墓で、上部を削平され床面のみが残っていた。土壙の床面には、全体に径8cm以下の小礫が敷詰めてある以外に、副葬品など何も出土しなかった。頭位方向も不明で、時期も不明。



第60图 VII—XI号坟墓群全体图(1/60)



第61図 VIII-27・29・36号墓実測図(1/30)



第62図 55号墓実測図(1/30)

Ⅷ号墳墓群は、大型土壙墓3基から構成されることから、Ⅸ号墳墓群に従属する可能性があるとはいえ、地形的にも高位置を占めることなど独立した群としておく。

#### 55号墓 (図版51-1、第62図55)

調査区東端に独立していることから、どの群にも所属しない木蓋土壙墓。地形的にも高位置にあることから、上部を削平されているが、棺内が荒らされていないことと、内傾する壁面の保存のよことから木蓋とした。

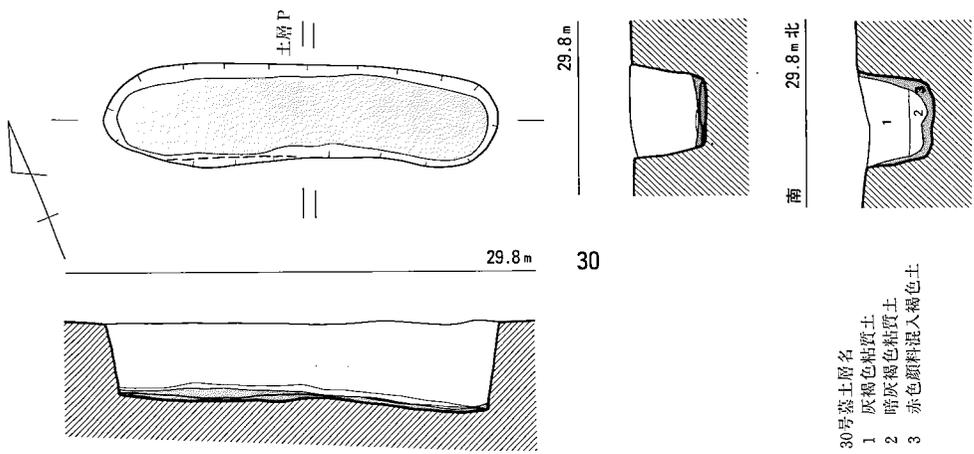
土壙は、頭部小口丸造り、足元小口角造り、最大幅を中央部に、北東小口に削出枕をもつ。頭部付近に赤色顔料を敷くが、副葬品はない。

#### ⑨ Ⅸ号墳墓群 (図版3-2、51-2、第60・63・64図)

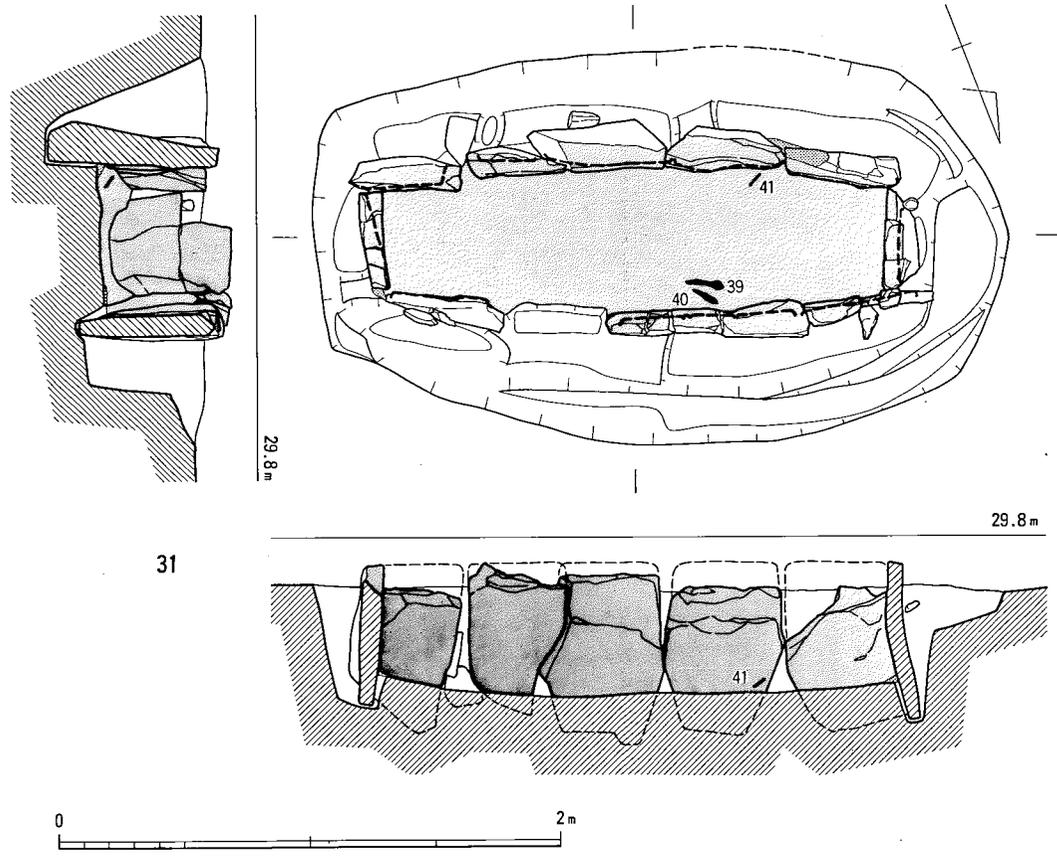
Ⅸ号墳墓群は、西側に6号不整形土壙とした弧状溝があり、これを手掛りに31号墓を中心部に位置づけて東側に反転すると、4号・5号不整形土壙などが楕円形を描く線上に連なってくる。このように考えると、これらの不整形土壙とした一群が墳丘墓の周溝が削平された痕跡であることがわかる。復原された墳丘は、長径約11.5m、短径約9mの楕円形である。この墳丘の西側周溝にあたる6号不整形土壙から古式土師器の小型丸底埴の破片が出土している。

#### 30号墓 (図版52-1、第63図30)

墳丘の南端にある木蓋土壙墓で、墓壙を失っている。土壙は、両小口を丸造りし、中央よりやや西側を最大幅とするが、小口床面に枕を持たない。土壙の床面を見ると、中央より西側に



- 30号墓土層名
- 1 灰褐色粘質土
  - 2 暗灰褐色粘質土
  - 3 赤色顔料混入褐色土



第63图 IX-30·31号墓实测图(1/30)

赤色顔料が厚く敷かれ、東側の床面が低くなることから西側が頭部と思われる。棺内が荒らされていないところから木蓋としたが、土壙形態からは石蓋の可能性も残されている。

### 31号墓（図版52-2、第63図31）

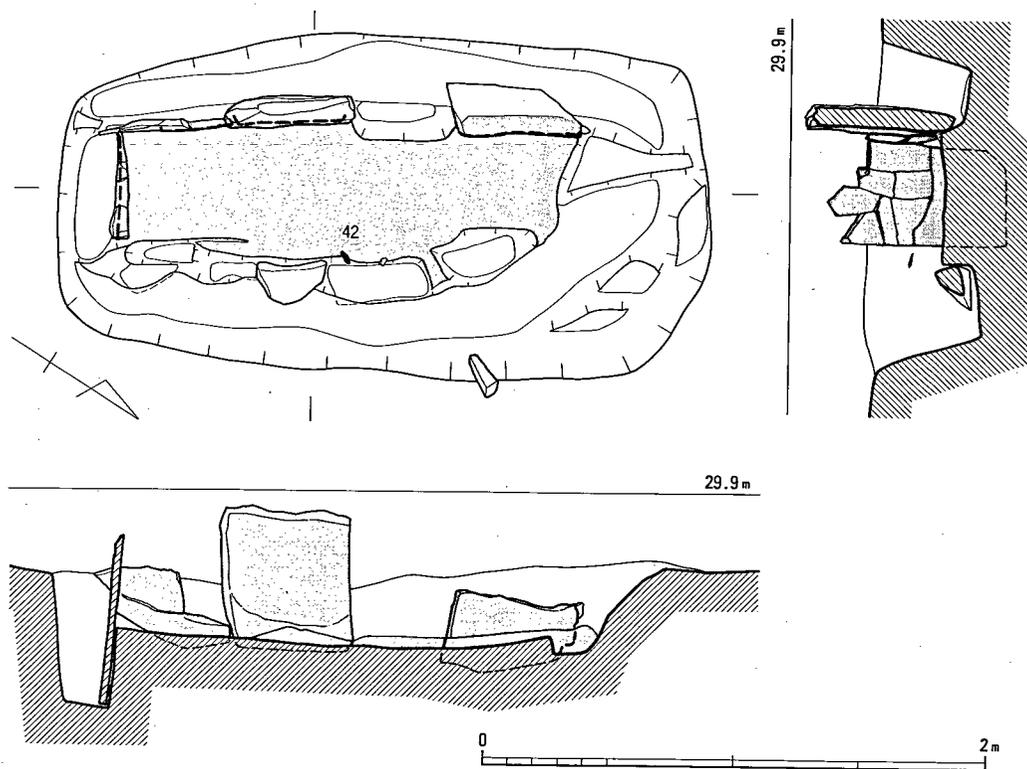
31号墓は、墳丘の中心部を占める大型箱式石棺墓であるが、半分以上が破壊され、石材が散乱していた。石材があるものは可能な限り復原したところ、原形に近いものとなった。

石棺は、両小口に各1枚、南側壁に5枚、北側壁に4枚の板石が使用されている。石材は、両小口と両側壁各1枚の安山岩を使用する以外が片岩を利用している。

床面は、荒らされた部分が多いので正確ではないが枕の造付がなかったらしいが、西側小口幅が広いところから西枕で、最大幅が中央よりやや西側の腹部となっている。

床面には、赤色顔料が残っていたが、中央からやや西の左側に、切先を頭部に向けた鉄鏃2本が副葬されていた。この部分は荒らされていなかったところから、原位置にあるものと見てよい。

石棺掘方は、長径2.78m、短径1.57mの胴張長方形の平面形をし、石材に応じた大きさと深



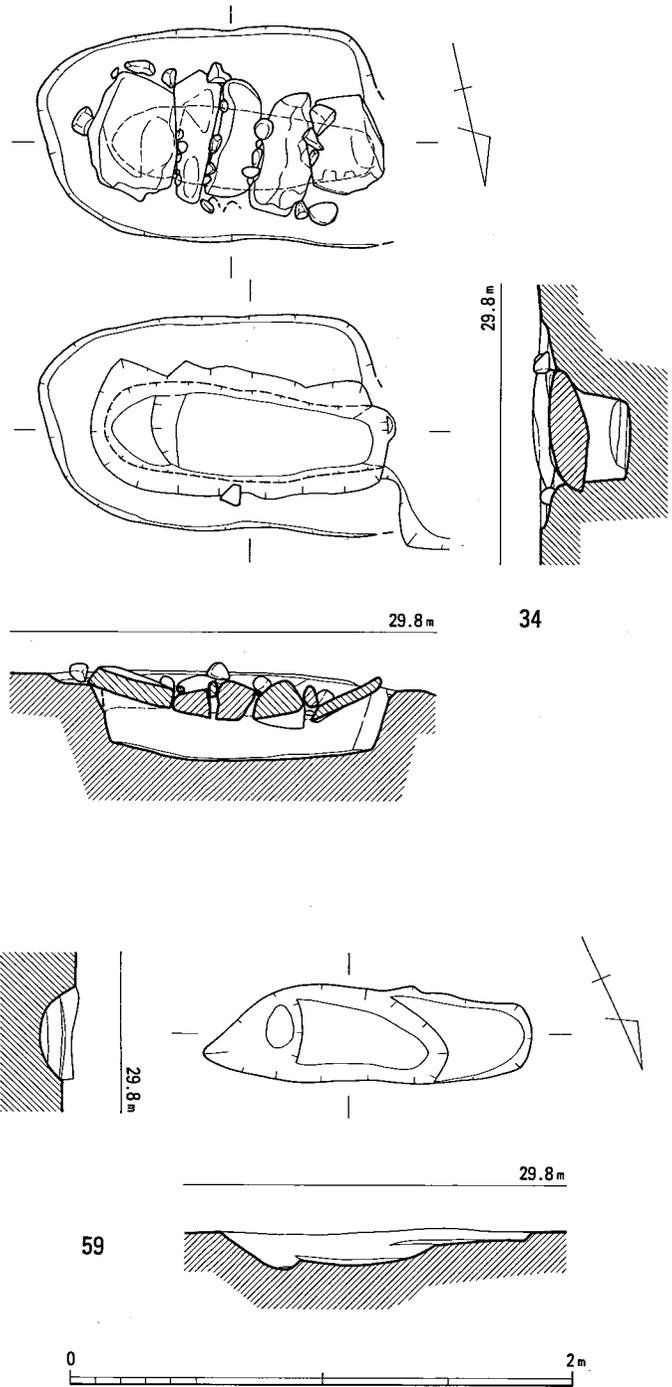
第64図 IX-32号墓実測図(1/30)

さの穴を床面周辺に掘っている。石材を立てるための根石も若干使用されている。

32号墓 (図版52-3、第64図32)

32号墓は、墳丘中央を占める31号墓に寄り添うように造られた箱式石棺墓であるが、完全に近く破壊されていた。荒らされた棺内に残っていた石材を整理して復原したところ、原形に近い側壁材1枚と小口材などが若干原位置に戻すことができた。石材抜跡から復原できた石棺は、両小口に各1枚、北東側壁に6枚、南西側壁に4枚の板石を使用していたらしい。使用された石材は、残っている小口が安山岩、側壁の残っている石材も南東側から安山岩・片岩・花崗岩の各1枚であった。

石棺の平面形は、南東小口が広く、中央部に最大幅をもつところから、南東枕となる。床面や石材内面に赤色顔料の痕跡はあるが、床面が完全に荒らされ、中央部右側で発見された刀子片も原位置のものではなか



第65図 X-34・59号墓実測図(1/30)

った。石棺の掘方は、長径2.61m、短径1.34mの隅丸長方形で、石材を立てる穴が南東小口のみとくに深く掘られている。

Ⅸ号墳墓群では、中心的位置を占める31号墓の墓壙が大型であったことが予想されるが、たとえ小型墓壙であったとしても32号墓との墓壙の重複が避けられない。重複した場合は、Ⅴ号・Ⅵ号墳墓群に例をとるまでもなく、一般的に中心主体が最初に埋葬されることから、32号墓が31号墓に従属する関係にある。いずれにしても中心主体の31号墓には、相応の副葬品があったことが予想される。

#### ⑩ X号墳墓群（図版3-2、53-1、第60・65～67図）

この墳墓群もⅨ号墳墓群と同じように、周溝の一部の弧状溝が検出された。この弧状溝を利用して円を描くとⅨ号墳墓群の周溝とも重複することから、35号・41号墓を対立させる形で、両墓の中間を墳丘の中心とすると、第60図のような楕円形の墳丘が復原できる。復原できた墳丘は、長径約10m、短径約8.5mの規模となる。周溝内からは、時期を判定できる遺物が出土していない。

#### 34号墓（図版53-2、第65図34）

墳丘の中心より南側にある小型石蓋土壙墓で、蓋石が完存し、墓壙底がかろうじて検出された。墓壙は、隅丸梯形の平面形をし、土壙が西小口に寄せて掘られている。蓋石は、両側に片岩3枚、中央に河原石2枚の合計5枚が使用され、目張りとして河原石の小石が利用されている。

土壙は、両小口が丸造り、腹部に最大幅、東小口に削出枕をもち、壁面が外傾している。

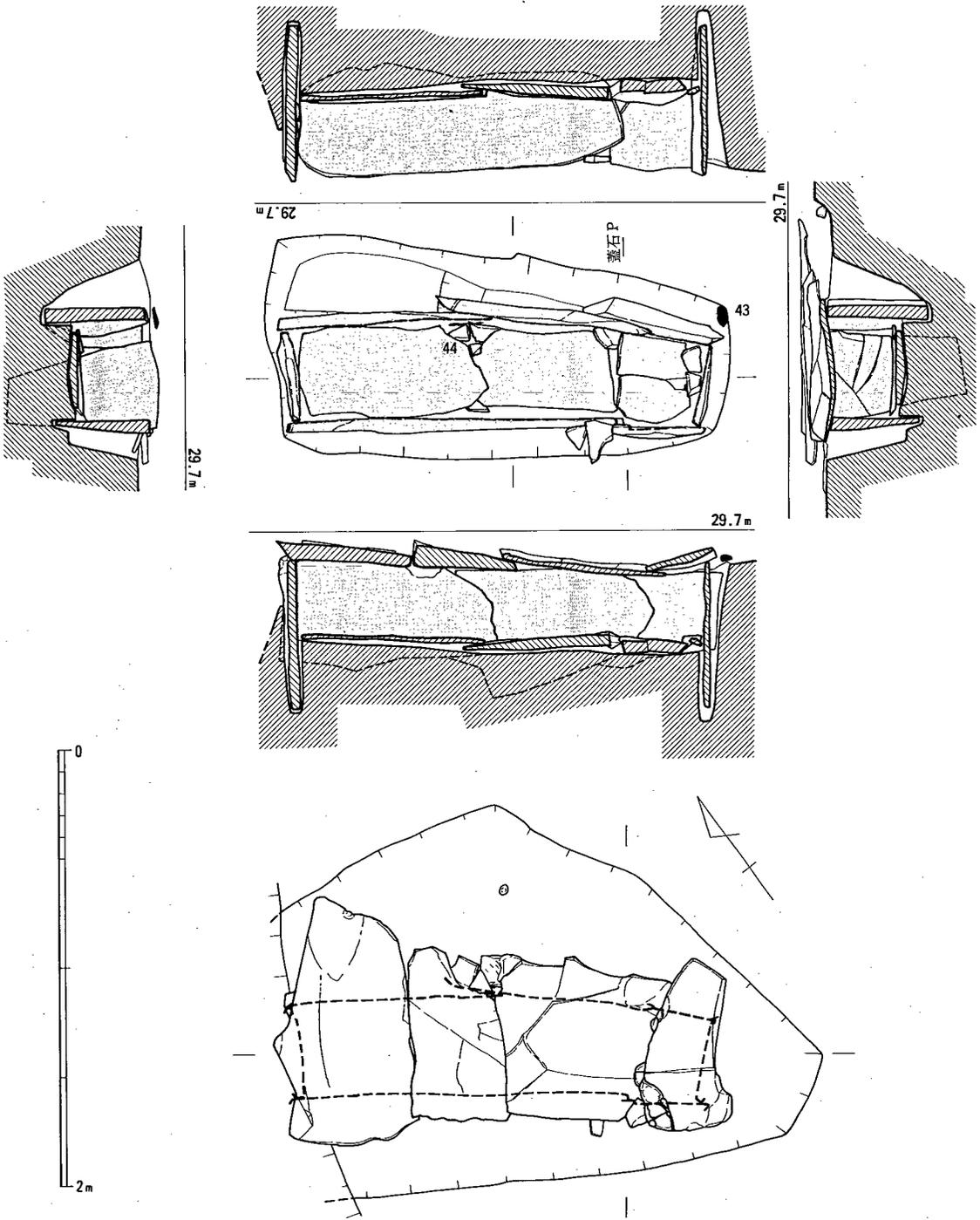
#### 35号墓（図版54、第66図35）

墳丘の西側にある優美な箱式石棺墓で、この墳丘の盟主的位置を占める。石棺は、西側崖面の土取りに際して北西側端蓋石がずらされ、北西小口壁が破壊されて棺内が荒らされている。

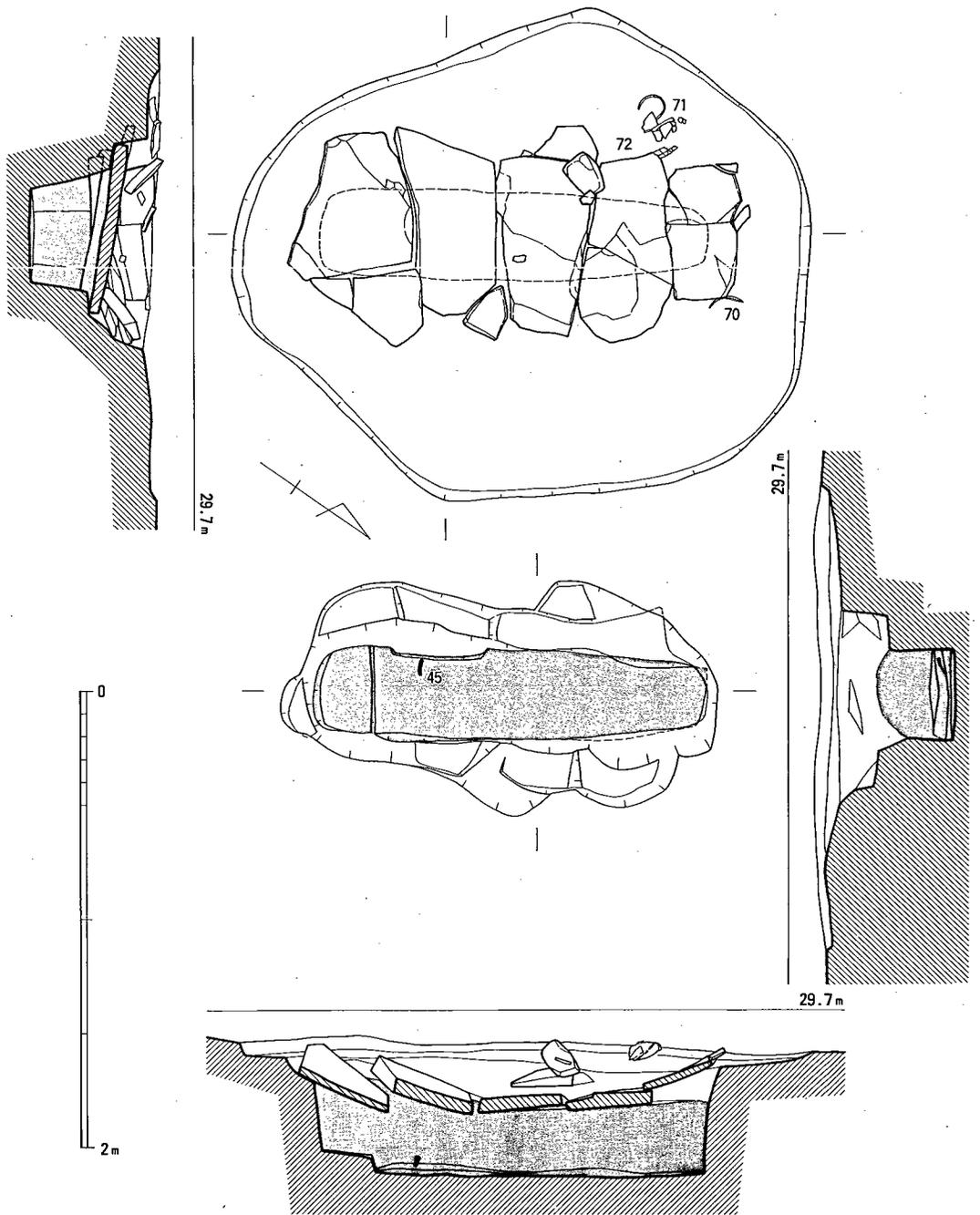
墓壙は、床面の一部がかろうじて残っていることから、菱形平面形であることがわかり、石棺本体が対角線上に配置されている。蓋石は、4枚の安山岩の板石が使用され、下面全体に赤色顔料を塗布しているが、粘土目張りが無い。

石棺は、両小口に各1枚、北東側壁に3枚、南西側壁に2枚の安山岩を利用し、最大幅を中央部におき、北西小口が南東小口より5cmだけ狭く造られている。特記すべきは、南西側壁に長さ1.54m、幅0.5mの大板石を使用していることと、頭部側小口石の上面を打欠いて面を揃えていることである。

さらにこの石棺は、床面に安山岩の板石4枚を敷き、その間隙を同じ石材の小板石で埋めて



第66图 X-35号墓实测图(1/30)



第67图 X-41号墓实测图(1/30)

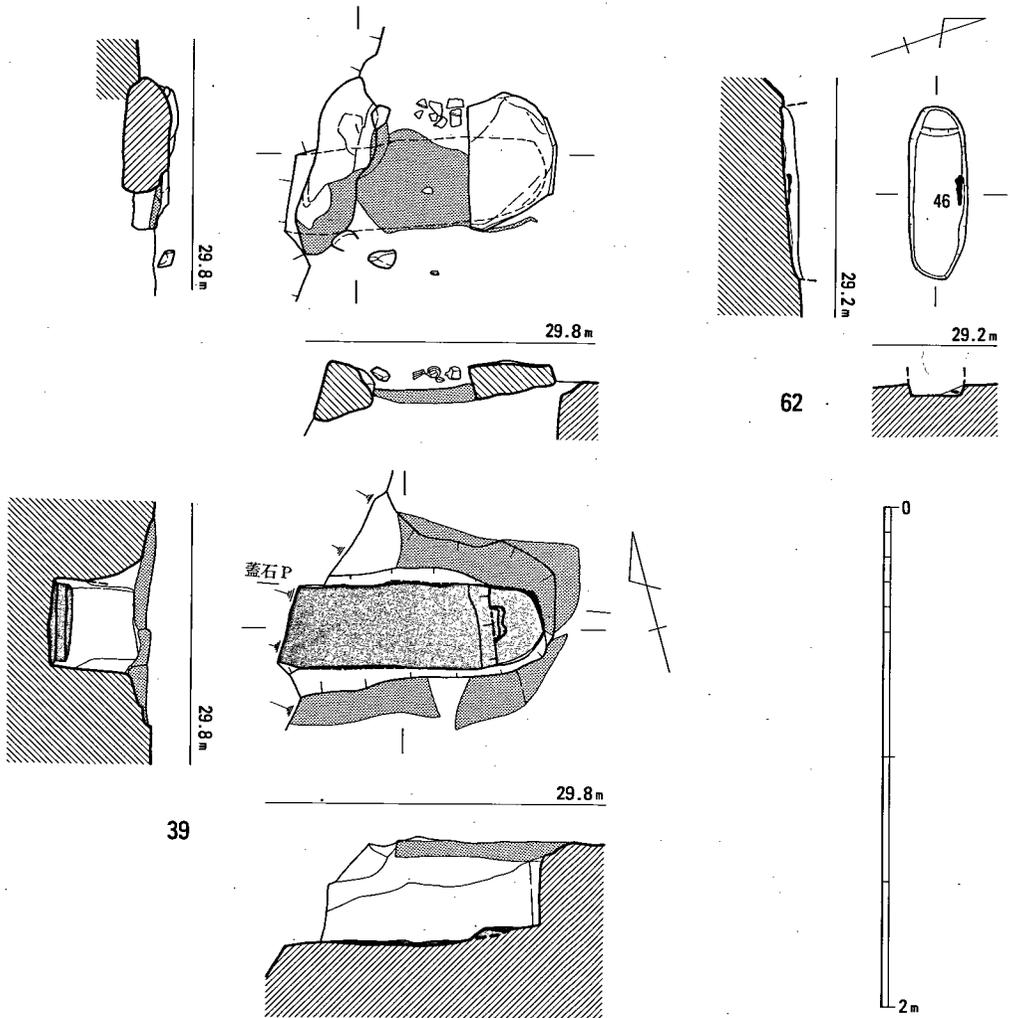
いる。棺内の赤色顔料は大半が除去されていたが、6壁全面に塗布されたものが残っていた。

副葬品は、棺内が完全に近く荒らされていたが、床石の中央左側の間隙に鈍片が残っていた。さらに石棺掘方の東側角に鉄斧が木柄が装着されて発見された。

石棺掘方は、長径2.1m、最大幅1.0mの大きさの頭側が広い梯形で、石材が扁平であるためか、両小口がとくに狭いながら深く掘られている。

41号墓 (図版55、第67図41)

墳丘の東側にあって、35号墓と対峙する位置関係にある大型石蓋土墳墓。墓壙は不整形であ



第68図 XI-39・62号墓実測図(1/30)

るが、対角線上にある形態をとり、頭部側の南東側が突がり、他面が広く取られている。蓋石は、5枚全部が安山岩を使用しているが粘土目張りが無い。墓壙内には、足元の蓋石両側に3個体部の土器が供献してあった。

土壙は、両小口が隅丸造り、肩部に最大幅、南東側小口に削出枕をもつ。壁面は、両側が内傾し、両小口が外傾する造りとなっている。棺内には、全面に赤色顔料が敷かれ、蓋石下面の中央部にも塗布され、床面胸部左側に手鎌が副葬されていた。

#### 59号墓（第65図59）

墳丘の中央近くで検出された土壙であるが、墓である確証がない。小児用土壙墓が荒らされた可能性があるため、ここで扱ったが、墓でない可能性の方が強い。

X号墳墓群は、35号墓を盟主とした墳丘墓として認識できるものの、棺内が荒らされ副葬品の程度が不明なのが残念である。これまでの中で最も丁寧な墓であることから、中型完形鏡などの副葬が予想される。

### ⑪ XI号墳墓群（図版51-2、第60・68図）

XI号墳墓群とした一群は、祓川岸の崖面にあり、一群の大半が消失した可能性をもっている。現存するのは3基で、成人用1基、小児用2基で構成されている。

#### 4号甕棺墓（図版56-3、第38図）

甕棺は、39号墓の南側に位置し、墓壙と棺の大半を削平されていた。棺は、ほぼ水平でS9°W方向に埋置し、棺内に赤色顔料が塗布され、その一部が墓壙底にも見られた。

#### 甕棺（図版100-4、第39図）

墓壙内に残っていた胴部片と、口縁部・肩部突帯から図のような複合口縁壺が復原できた。壺の口縁は、立上りがあまり高くなく、肩部と胴部台形突帯もしっかりしていることから、型的にも古い様相があり、弥生終末古段階に属するものと考えられる。

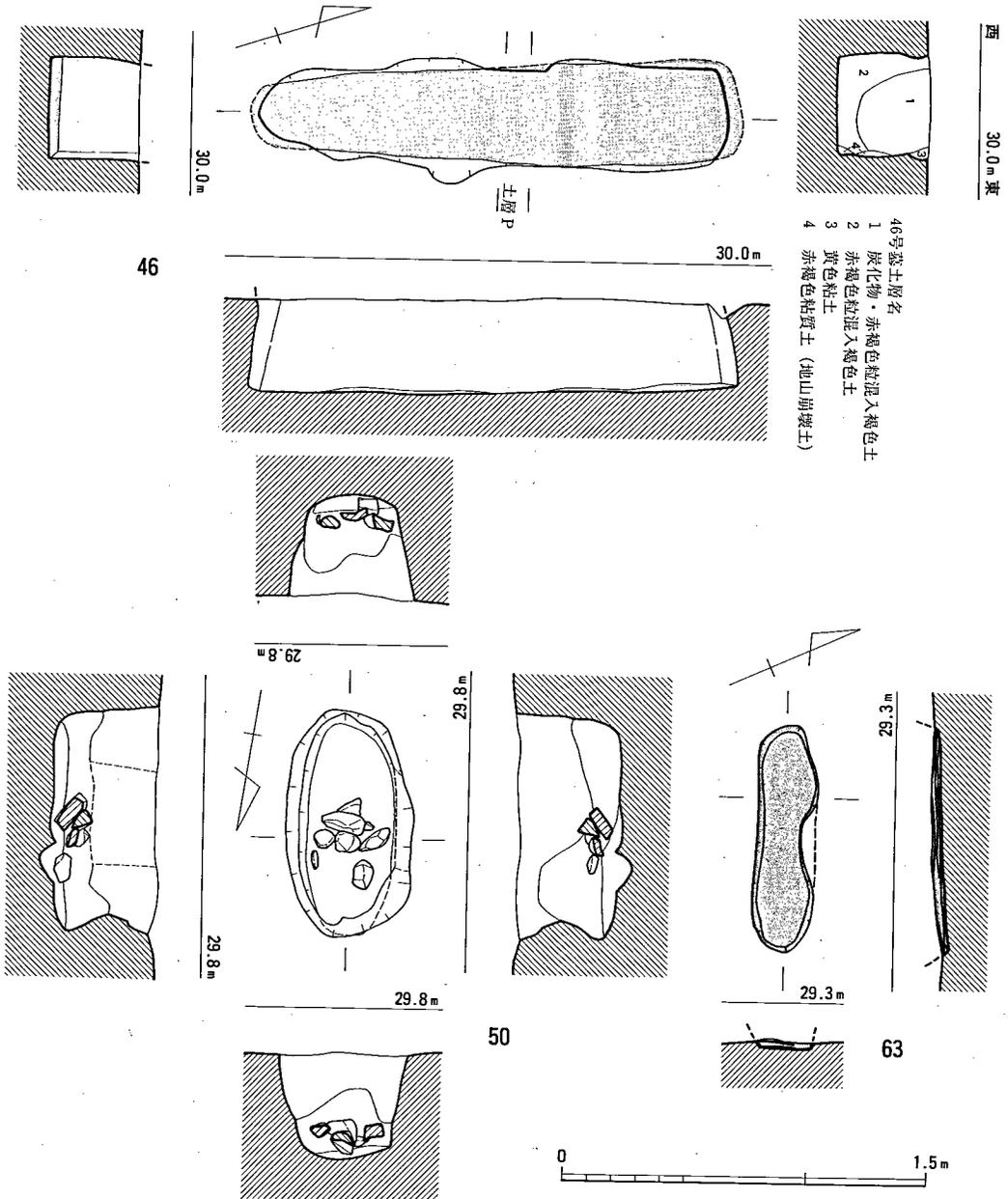
#### 39号墓（図版56-1、第68図39）

一群の中央に位置する石蓋土壙墓で、足部に当たる西側を破壊されている。墓壙は、かろうじて蓋石の周辺部に残っていたが、形態が不明。蓋石は、2個の片岩が残っているにすぎないが、下面に赤色顔料が塗布されている。

土壙は、東側小口が丸造り、最大幅を胸部、東小口に削出枕をもち、壁面が一部内傾し、他が垂直となっている。床面全体に赤色顔料が見られるが、枕上がとくに多い。

62号墓 (図版56-2、第68図62)

一群の北側にある小型土墳墓。上部を削平され床面が残るだけであるが、北側壁に添って切先を東に向けた刀子が副葬されていた。



第69図 III-46・IV-50・V-63号墓実測図(1/30)

土壙は、両小口が丸造り、最大幅が中央部、西小口に枕らしき段があるが、床面が低くなっている。

## (2) 遺物

### ① 土器 (図版101~104)

#### α I号墳墓群出土土器 (第69図1~11)

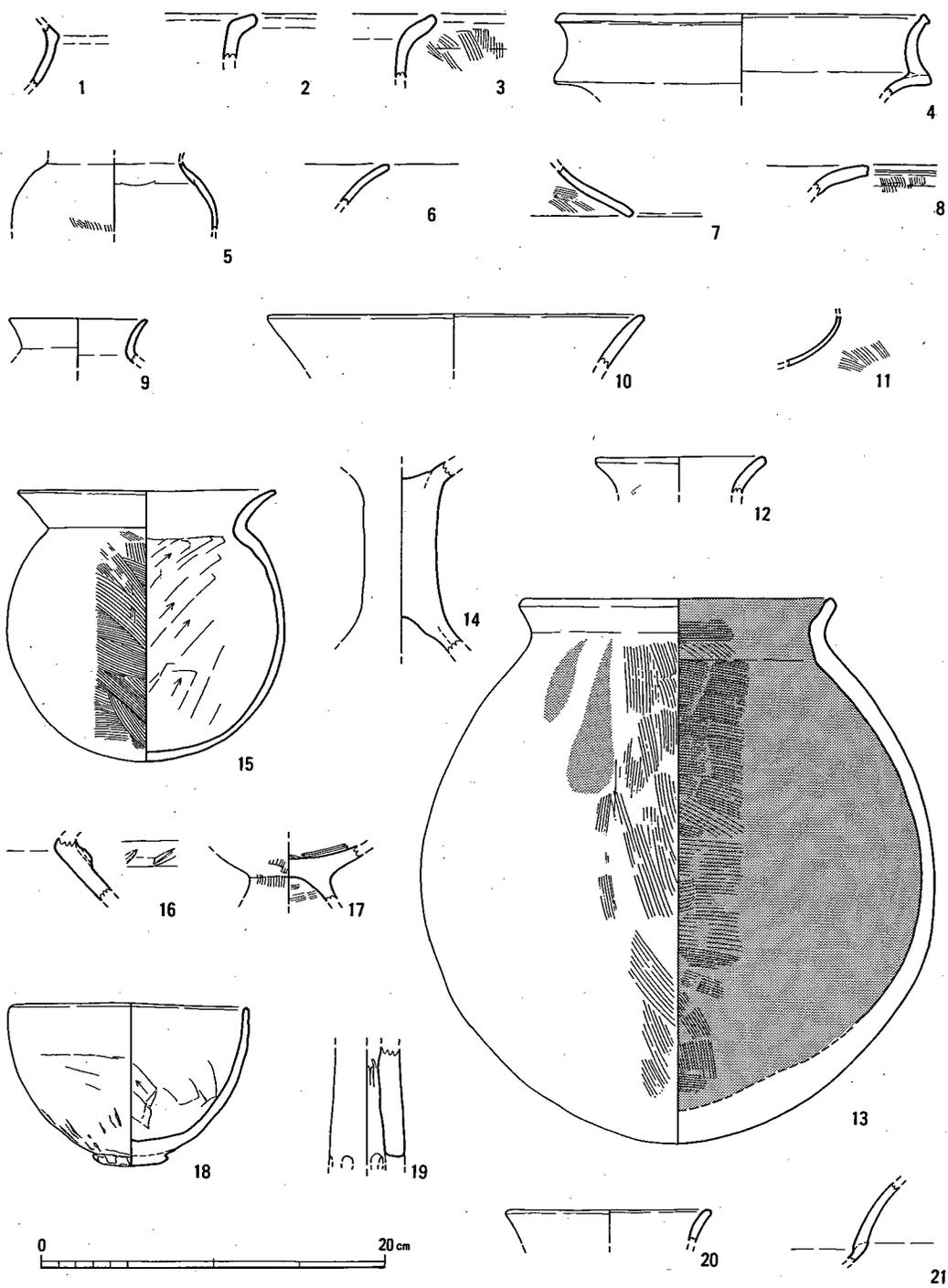
I号墳墓群の3~13号墓の11基は、上層の削平が著しいところから、墓壙の大半を失っており、供献土器などがあつたとしても当然失っている。したがって、出土土器は小破片で時期を特定できるものが少ない。1は3号墓出土の小型壺の胸部細片で摩滅が著しく、時期など不明。2・3は4号墓出土土甕口縁の細片で、詳細不明。4~7は9号墓出土で、4が中型複合口縁壺、5が小型壺、6が高杯口縁、7が高杯脚部裾である。4の口縁部の外反と5の肩部外面のヨコミガキが特徴で、時期は弥生終末前後であろう。8~11は11号墓出土土器で、8・10が甕口縁、9・11が小型壺である。8の口唇端の沈線、9の口縁外反、11の肉薄が特徴となり、弥生終末またはやや新しい時期となる。12号墓からも甕口縁細片が出土しているが時期など不明。

#### b II号墳墓群出土土器 (第70図12~15)

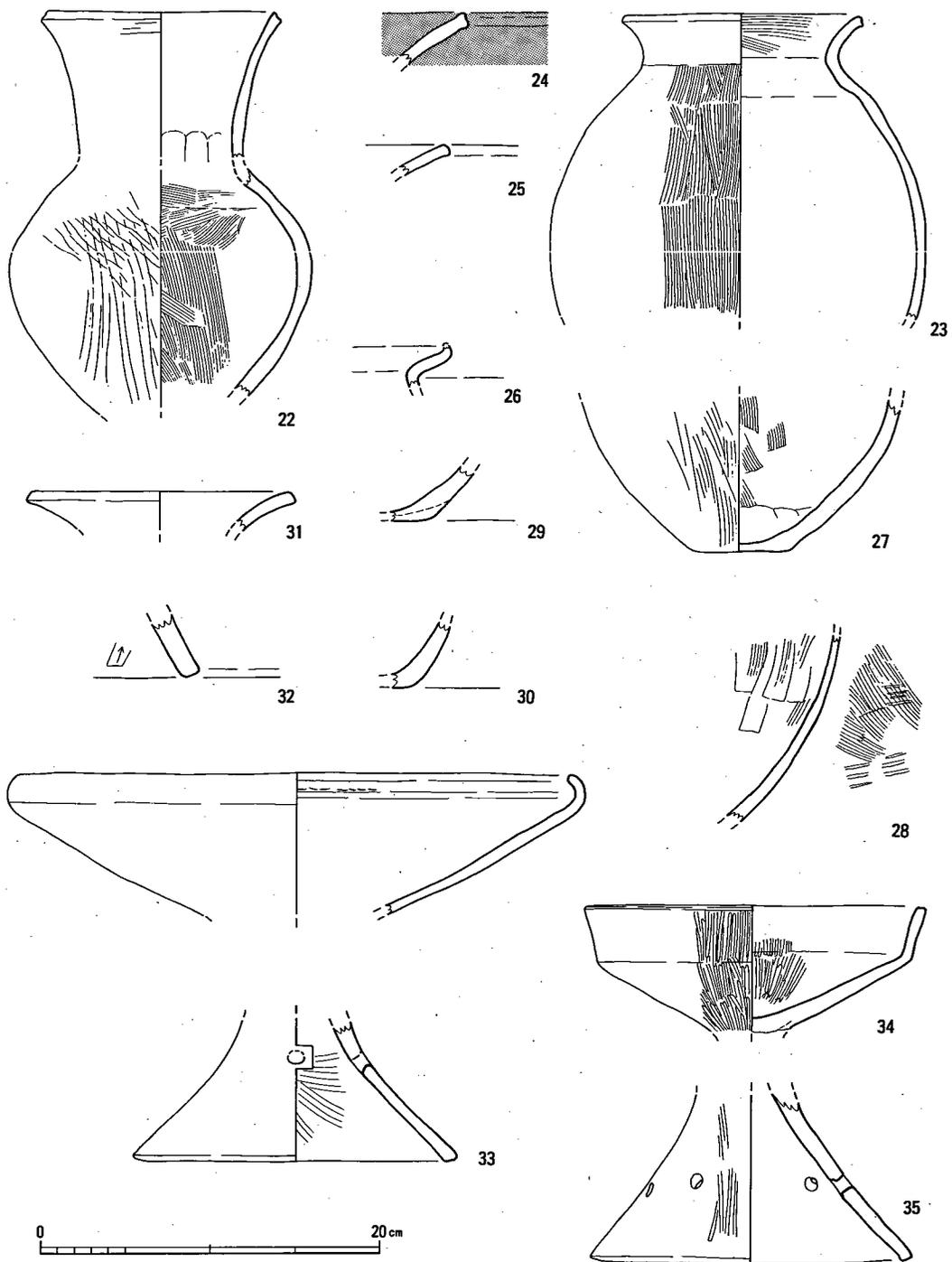
II号墳墓は、15~16、38号墓の4基で構成され、I号より保存がよかつたところから土器の残りがよかつたものがある。

12~14は、15号墓の石蓋の目貼に破片を利用していたもので、12が小型壺、13が中型壺、14が高杯脚部である。12は全体が摩滅しているが外面の一部に赤色顔料が付着している。13は口縁部が特徴的に屈曲し、肉厚の胴・底部で、内外面共にハケ目調整している。とくに底部が丸底であるから外面を削っているはずなのに厚く仕上げてある。さらに特徴的なのは、内面全体に厚く赤色顔料が付着し、外面にも口縁から一部赤色顔料が垂れている。大きさは、口径18.4cm、器高31.8cmである。この土器は、赤色顔料を墓で使用または祭祀を行なった後に、破碎して石蓋上にのせたもので、供献土器としての性格も合わせもつと考える。14の高杯脚部は、表面の剝離・摩滅が著しいが、中実の割合短脚であるところが特徴。

15は、16号墓の棺内中央部の埋土中位で出土した丸底甕で、口縁の強い外反と内面のヘラケズリが特徴。外面はハケ目調整で、中位から上に煤が付着し、下位が加熱のため赤変している。大きさは、口径15cm前後、器高15.8cm、胴部最大径16.1cmである。II号墳墓群の土器は、内面ヘラケズリと丸底であることから古墳初期のものとなる。



第70图 墳墓群出土土器実測図①(1/4)



第71图 坟墓群出土土器实测图②(1/4)

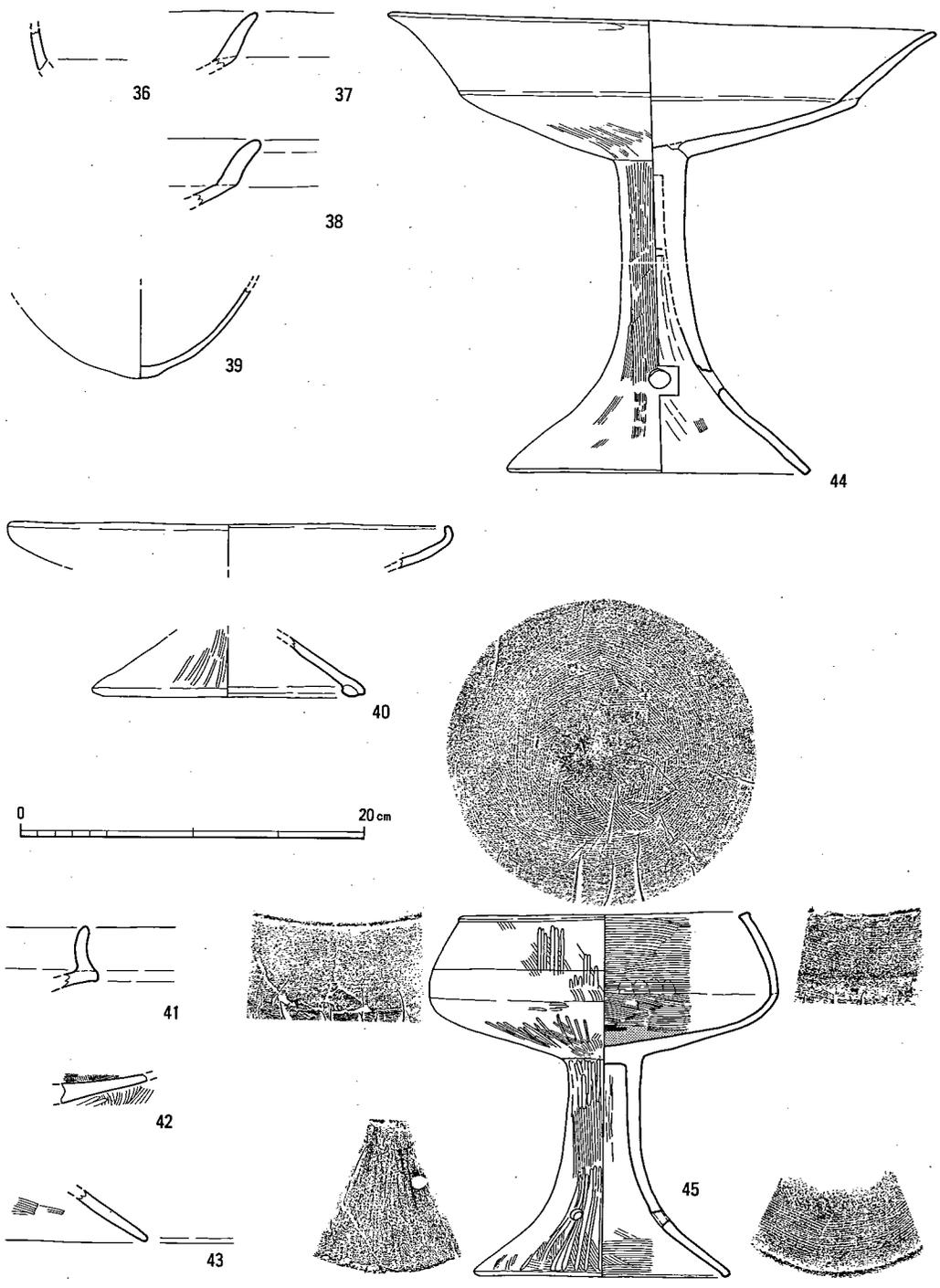
### c Ⅲ (古) 号墳墓群出土土器 (図版102、第70・71図)

Ⅲ (古) 号墳墓群は、墳丘中央部を14号墳石室掘方によって破壊されていることから、仿製鏡と鉄剣が攪乱土から出土している。土器については、削平されてかろうじて残った東側周溝(1・2号周溝)と北側周溝(4号周溝)から出土している。1・2号周溝と4号周溝では、出土する土器群の时期的構成が違うが、4号周溝内の土器がⅢ号墳墓側から流入しているため、Ⅲ号墳墓群内の時期差のある土器群として扱うことにする。

1号周溝出土土器は、第71図22～35の土器群である。22は長頸壺で、口頸部と胴部が直接接合できないが、胎土や調整などから同一個体とした。口径14cm、胴最大径17.8cmの大きさであることから口頸部の割合が大きな器形である。調整は、頸部内面下端に指圧痕、胴部内面に粘土継目の上からハケ目、外面に粗いハケ目状工具によるナデ仕上げとなっている。外面肩に黒色付着物がある。23は、頸部が割合しぼられた中型甕で、口縁が少し湾曲して外反する特徴をもつ。胴部内面上部にわずかな段を有することから、ヘラケズリの後でナデ仕上げされている可能性がある。25・26は甕の口縁部と思われるが、24が口唇部端をわずかに摘上げ、25が外反し、26が丸く屈曲した口唇部端を大きく摘上げている。27は甕の底部で平底に属する。胴部外面下半は、工具によるケズリ状のナデ調整で、内面底部が同じくケズリである。外面は加熱による赤変が見られる。28は甕胴部下半で、外面がタタキの後で上半にハケ目、下端がケズリが見られる。29・30は、凸レンズ状の甕底部で、全体に摩滅が著しいが、29外面底部にハケ目調整が残っている。31・32は、器台と思われる細片で、31が口縁部、32が脚部裾である。外面は摩滅しているが、31の内面がハケ目、32の内面にケズリが残っている。33は、高杯の杯部と脚部裾である。杯部は、口縁が丸く内湾するのが特徴で、内面に爪痕が明瞭に残っている。全体に摩滅しているが内外面共にミガキ調整と思われる。脚部裾端がわずかに内湾するのが特徴で、内面に粗いハケ目調整がある。34・35も高杯の杯部と脚部であるが、別個体である。35は33と同形態であるが、外面にミガキ、6個の穿孔がある。34は、口縁がわずかに外反するが、直立に近い杯部で古式の様相を呈する。器面調整は、外面共に丁寧なミガキである。大きさは、口径19.9cmであることから小型に属すると思われる、新しい様相の現われるかもしれない。1号周溝出土土器群は、壺や甕の口縁・底部、高杯の形態などから、弥生後期後半に属する。

2号周溝出土土器は細片で、壺・高杯の口縁、鉢の底部がある。36は複合口縁壺の口縁部で、外面にミガキ調整があり、下端が接合面から剥離している。37・38は高杯部口縁部で、胎土に違いがあるところから別個体と思われる、立上り部が短い特徴がある。39は甕か鉢の胴下半部で、凸レンズ状の底部が小さいところから鉢の可能性もある。全体に摩滅して、器面調整は不明である。2号周溝の土器は、高杯が弥生後期後半、他が弥生終末である。

### d Ⅲ (新) 号墳墓群出土土器



第72图 墳墓群出土土器实测图③(1/4)

1・2号周溝が埋没した後に営まれた17・18・64号墓とこれに隣接する46号墓を、Ⅲ（新）号墳墓群とするが、土器は64号墓からだけ出土している。64号墓出土土器は、第72図40の高杯で、杯口縁部と脚裾部の同一個体がある。杯部の小さく丸い屈曲と裾端部内側の粘土紐貼付が特徴である。高杯の型式は、形態的にも1号周溝の33の高杯より新しく、遺構の重複関係と合致している。

#### e IV号墳墓群出土土器（第69図16）

IV号墳墓群は、19～21・37・40号墓から構成されるが、隣接する50号墓も付属するものとして合計6基とする。墳墓群が地形的に中央の尾根線に近く上部を著しく削平されているところから墓壇が残っておらず、棺本体が残っているにすぎなかった。したがって、供献土器等がなく、わずかに19号墓から細片が出土した。第70図16は19号墓出土の甕の肩部で、低い台形突帯に斜方向のキザミ目を施す。弥生終末になるだろう。

#### f V号墳墓群出土土器（図版103、第69・72図）

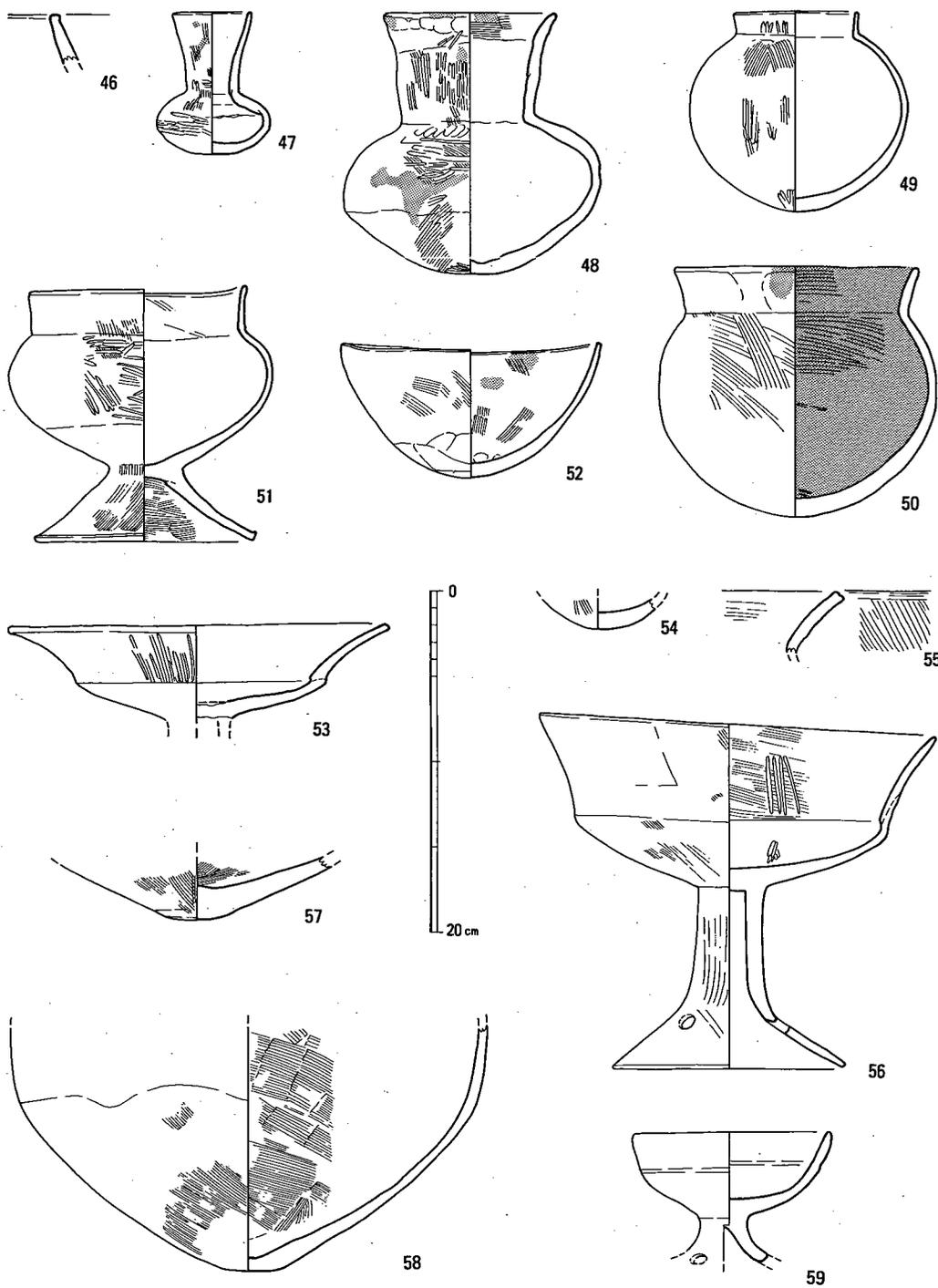
V号墳墓群は、3～5号周溝によって墳丘規模が明瞭な墳丘墓で、22～24号墓・2・3号甕棺墓と隣接する63号墓から構成される。周溝と墳丘の一部が残ることから、周溝内と墓壇内に供献土器が多く残る。

22号墓からは、台部・鉢・高杯脚部が出土している。17は、台付の鉢又は短頸壺で、上部内面がミガキ、台部内外面がハケ目調整となっている。18は小鉢で、粗製の貼付底部をもつ。胴部も粗い作りで、内外面をケズリ状にナデている。19は肉厚の割合短脚の高杯で、柱状部下端に6個の円孔を穿っている。これらの土器は、弥生終末と思われるが、18の鉢の底部形態からやや古い可能性がある。

20は小型甕の口縁部で、全体に摩滅し、時期など特定できない。

24は、深味の杯部を有する高杯片である。

Ⅲ（古）号墳墓群の中の新しい4号周溝から、第72図41～45の土器が出土している。41は複合口縁壺で、小さく外反する口縁が特徴。42・43は高杯の細片で、42が杯底部、43が脚裾部である。44は完形に近く復原できた高杯で、杯部が割合湾曲が少ない直線的な構成と、割合長い柱状部と内湾ぎみの脚裾部が特徴である。脚柱状部は、内面にシボリ痕、下端に3個の円孔を穿っている。口径31.5cm、器高26.4cm、裾径17cmの大きさで、西新町式の古式の様相を示す。45は、碗形高杯の完形品である。碗部上半の内湾と脚部裾のわずかな内湾が特徴で、外面全体にハケ目後に部分的なタテミガキ調整となっている。内面は、碗部と裾部にヨコハケ目調整、柱状部にシボリが残っている。碗部内面底部に一部赤色顔料が付着している。大きさは、口径16.4cm、碗部最大径20.3cm、器高16.2cm、裾径14.4cmである。4号周溝の土器は、44の西新町



第73图 坟墓群出土土器实测图④(1/4)

式の古式高杯に代表されるように弥生終末古段階である。

2号甕棺墓壙内には、供献土器と思われる土器群と土器細片が出土している。第73図46は、墓壙内から出土した複合口縁壺の口唇部細片で内傾している。大型壺の破片であるから混入品であろう。47～53は供献土器で、53の高杯の脚部を欠く以外がほぼ完形に復原できた。47・48は長頸壺で、47が超小型であるが一応精製土器である。器面調整は、外面がハケ目の後に頸部がタテミガキ、胴部がヨコミガキの粗仕上げとなっている。内面は、全体にナデ仕上げであるが粘土継目も残っている。口縁部外面に、一部赤色顔料が付着している。48は長頸壺のうちでも割合頸部が短かく太い壺である。器面調整は、頸部外面がハケ目後タテミガキ、口唇部がヨコミガキであるが、指圧痕も残っている。胴部は、下半部をケズリによって丸底とした後で、ハケ目後ヨコミガキ調整であるが、ミガキが丁寧なものではない。内面は、口唇部にハケ目が残るなど丁寧なナデ仕上げとならず、底部の一部をケズリによってくぼみができている。大きさは口径10.2cm、器高15.15cm、胴最大径15.1cmである。外面全体と口唇部内側は、赤色顔料を塗布したと思われる。49は直口壺で、直立する口縁部と球形胴部が特徴で、底部がわずかに尖っている。器面調整は、外面がハケ目の後にタテミガキ、内面が口唇と口縁がヨコナデ、胴部がナデ仕上げされている。大きさは、口径7.2cm、器高11.65cm、胴最大径12.5cmである。50は墓壙内の土器群の中では破られて割合に散乱していた小型甕で、内面のみに赤色顔料が付着していることから、赤色顔料を使用した後で意識的に破壊されたものと考えられる。器面調整は、内外面共にハケ目が残るが、口縁内外面がヨコナデ、胴部下半外面がハケ工具によるケズリ状ナデ、内面がナデられている。大きさは、口径14cm、器高14.7cm、胴最大径16cmである。51は台付直口壺で、49と比較して口径が広い特徴をもつ。器面調整は、外面が全体にハケ目で、胴部中位から上半部がハケ目後に不定方向の粗ミガキ、下位がケズリ後にミガキがあり、他はハケ目のまま。内面調整は、口縁がハケ目後ヨコナデ、胴部がナデ、台部がハケ目である。大きさは、口径12.7cm、器高14.75cm、胴最大径15.3cm、台裾径12.5cmとなっている。52は丸底鉢で、内面の口縁部付近の一部に赤色顔料が付着している。器面調整は、内外面共にハケ目であるが、外面底部がケズリによって丸底とした後にナデている。大きさは、口径15.2～16cm、器高7.9cm。53は高杯の杯部で、脚柱状部が接合面から剝離しており、接合が脚柱状部に杯部をのせただけであつたらしい。器面調整は、全体的に摩滅していて不明なところが多いが、外面外反部に暗文状の丁寧なタテミガキが施されている。

2号甕棺墓に供献された一括土器群は、高杯の小型化、丸底壺などの新しい要素が加わっていることから、弥生終末新段階よりも新しいものと考えられる。

3号周溝は、V号墳墓群の南西側に位置し、VI号墳墓群の42号墓と重複しこれより古い。周溝内からは土器細片のみであったが、周溝の北側延長線上から完形に近い高杯1個体が出土したので、これも3号周溝に属するものとして報告する。第73図54・55は周溝内、56が延長上出

土である。54は小型で厚味があるところから小型甕で、外面がハケ目、底部が内外面にナデ調整が行われている。55は中型甕口縁で、粗いハケ目調整と端部処理が丁寧であるところから古式の様相がある。56は、杯外反部が立上って深味のある杯部に、割合短脚が付く高杯。杯部の屈曲部が内湾する特徴をもち、内外面がハケ目調整され、内面のみ部分的に粗いミガキが施される。脚部は、柱状部外面がミガキ風のハケ調整、内面が丁寧なナデとなっている。大きさは、口径22.4cm、器高27.5cm、脚部高10.6cmとなっている。脚裾部に3個の円孔を穿っている。瀬戸内系土器との折衷様式であろう。

5号周溝は、V号墳墓群の北側にあり、若干の土器と大小の石が出土した。第73図57・58は中型甕の底部で、57が小さな凸レンズ状底部、58が尖底である。器面調整は、57が内外面共にハケ目、58が胴部下半をケズリの後にハケ目仕上げをしている。58の外面は、加熱による赤変あり。59は小型短脚高杯で、鉢状杯部の内外面に段をもつところに特徴がある。器面は大半が摩滅しているが、口縁部外面にヨコナデ調整が見える。短脚の中央部に割合大き目の3個の円孔を穿っている。大きさは、口径11.1cmとなっている。岡山県の弥生終末にあたる下田所式ではなかろうか。

#### g VI号墳墓群出土土器 (図版104、第73図60～63)

VI号墳墓群は、大型墓壙をもつ42号墓と28号墓から構成されるが、隣接し確実に古墳後期に属する2号墓も1号墓と共にここで扱う。

第74図60は、1号墓出土の中型甕の頸部と肩部破片で、屈曲部に丸味があり、胴部内面がハケ目工具でケズリ状にナデ仕上げしている。古墳前期に属する可能性あり。

61～63は42号墓出土土器で、62・63が墓壙に供献された完形土器。61は、全体に摩滅しているところから不明であるが、高杯の可能性はある。62は、内面に赤色顔料が付着する中型鉢である。口唇部に丸味があり、器面調整は全体にもハケ目であるが、外面下半がケズリによって丸底とした後にもハケ目、内面が粗いハケ目となっている。大きさは、口径18.2cm、器高12.5cmとなっている。63は碗形杯部の高杯で、全体に摩滅ぎみであるが、杯部上半がヨコミガキ、下半に斜ミガキ、脚部外面にタテのケズリ状ミガキが施されている。脚屈曲部に3個の円孔を穿ち、杯部との接合面に放斜状のキザミ目を施す。大きさは、口径18cm、器高18.9cm、脚高10.7cm、脚裾径11.8cm。42号墓供献土器の時期は、弥生終末のうちでも、高杯の脚部が中実で短脚に近いことからやや新しい様相をもつ。

#### h VII号墳墓群出土土器 (第74図64～66)

VII号墳墓群とした一群は、16基から構成されることから、さらに区分できる可能性もある。

64は、43号墓から出土した甕口縁部で、外反して端部の処理、胴部外面のタテミガキ調整な

ど九州の様相ではないところがある。

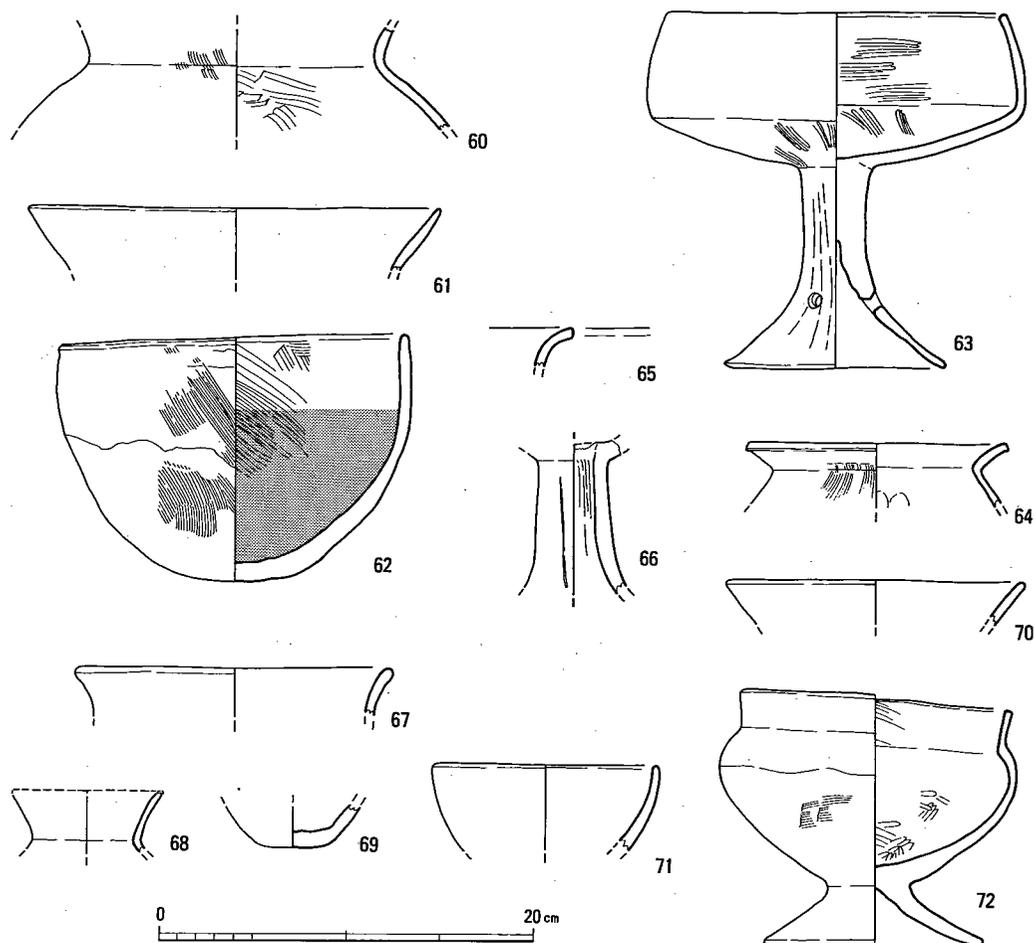
65・66は、54号墓出土の甕口縁細片と高杯脚柱状部片である。器面調整は、65がヨコナデ、66が内外面共に工具によるタテナデらしい。なお、杯部との接合面に放斜状のキザミ目を施す。

i Ⅷ号墳墓群出土土器 (第74図67)

群として構成された一群であるかどうか疑問のある墓群で、削平も著しく土器も1点のみ。

第74図67は、36号墓から出土した細片の形態がわかる1点の甕口縁であるが、全体に摩滅していて時期など詳細が不明。

i Ⅸ号墳墓群出土土器 (第74図68・69)



第74図 墳墓群出土土器実測図⑤(1/4)

IX号墳墓群も削平が著しく、石棺墓も破壊され、土器は墳丘裾の周溝の名残と思われる不整形土壙とした中から出土した。

第74図68・69は、墳墓群西側の周溝と思われる不整形土壙6号とした中から出土した小型壺の口縁部と底部。68は、割合口縁の長い壺であるが全体に摩滅して詳細不明。69は、68と同一個体の可能性もある底部で、丸底に近い底部で、外面が工具よりナデである。

#### k X号墳墓群出土土器 (第74図70~72)

X号墳墓群も削平が著しいが、かろうじて墓壙が残っていた41号墓から、供献土器と破片が出土している。

第74図70は、器形が不明であるが口縁部の細片。71は小型鉢で、外面下半に一部ケズリが残り、その外の部分がナデ調整らしい。72は、広口直口台付壺の供献土器。器面調整は、外面が全体に摩滅しているが、胴部下半がケズリの後に一部ハケ目、内面が口縁にヨコハケ目、胴部に不定方向のミガキ、台部内面にヘラによる渦巻が残っている。大きさは、口径14.5cm、器高13.6cm、台部裾径11.5cm。時期は、弥生終末に属すると考える。

## ② 銅 鏡

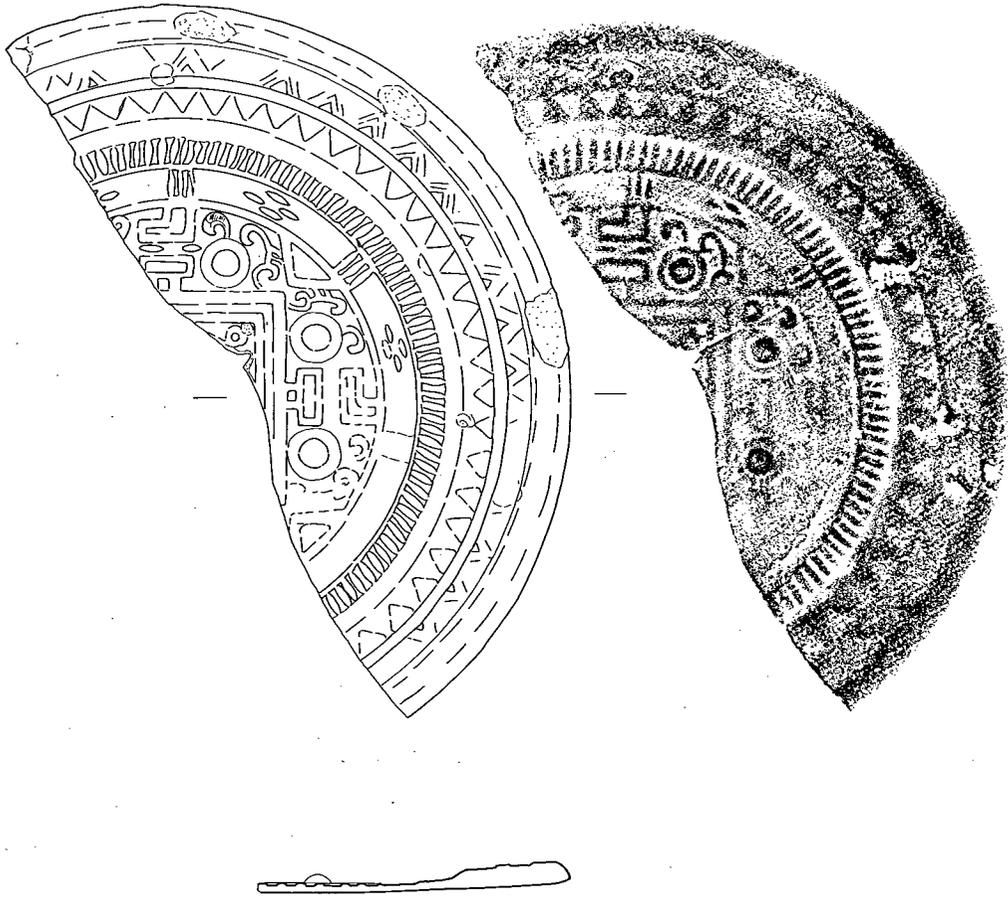
### a 方格規矩渦文鏡 (図版11-1、109-1・2、第75図)

棺内床面胸部から出土した銅鏡片は、方格規矩渦文鏡で、鏡面を上にして副葬されていた。鏡は、鈕を含む半分強を欠損した鏡片で、復原直径10.5cmの小型鏡である。鏡の文様は、外径2.8cmの方格内角の鈕座に小円環文、方格外にT形文・左向L形文・V形文を配し、T形文両側に一對の小乳を置く。T・L形文は複線であるが、V形が単線となっている。また、V形文は直角をなさず、わずかに鈍角を示す。内区の前記の文様間を渦文で埋め、さらにTとL形文の間に長楕円文2個が施されるが、一方には見えない。乳は、円座の単純な小乳である。

銘帯は、幅4.9mmで、銘文ではなく、❖文と三文を交互に配している。銘帯の外圏に櫛歯文帯を配して平縁の外区となっている。鏡縁は、中央に円圏を挟み、内側に鋸歯文、外側に複線山形文となっている。

鏡の量目は、縁幅16.15mm、縁厚さ3.0mm、銘帯地厚さ1.1mm、方格突線部厚さ1.3mm、乳座径6.9mm、乳径4.6mm、乳部厚さ2.5mm。鏡の反りは、約2mm程度に見える。

鏡は全体に保存がよく、鑄造の良否、鑄造後の経過が観察できる。鏡は、貴重品として大事にされたらしく、全体にいわゆる「手ずれ」があり、とくに文様と縁が丸味をおびているが、鑄造時の「湯冷え」が図面の下半3分の1にあり、「手ずれ」する前に文様が欠落していたことがわかる。「手ずれ」と「湯冷え」の違いを明瞭に示しているのが櫛歯文帯で、現品は突線



第75图·6号墓出土方格矩渦文鏡(1/1)

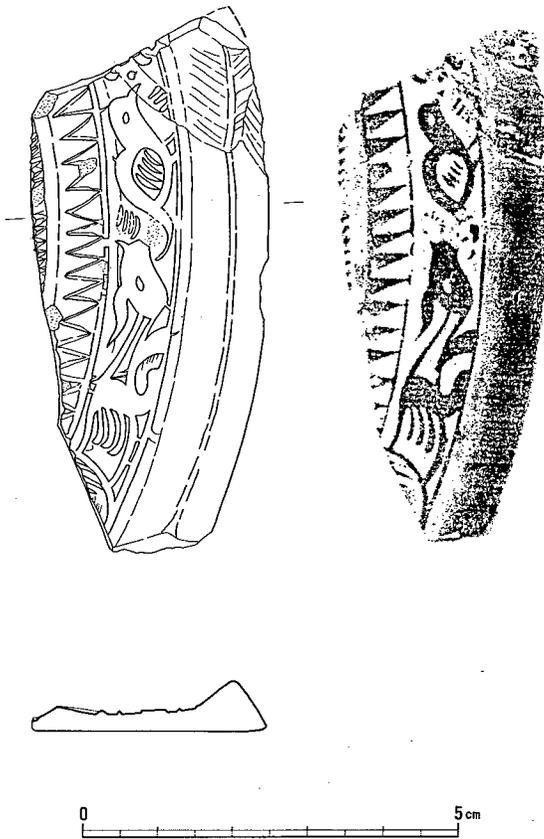
の上面が平坦となり、側面との角に丸味がない。「湯冷え」が全体に生じれば、鏡が製品として完成していないし、櫛歯文も表面が荒れているはずで、平滑にならないはずである。

なお、この鏡は、「手ずれ」が生じるほど使用された後に破鏡となったらしく、破面に「手ずれ」などの摩滅が見られない上に、破面にヤスリ状の研磨痕が見られ、さらに鏡面との角をヤスリ状研磨で面取りしている。

すなわち、この被葬者は、一定期間伝世した鏡が破鏡となった直後に死を向え、破鏡をほとんど使用することなく副葬したものと考えられる。

鏡は、全体に保存が良いため黒鉛色の光沢があり、さらに両面全体に赤色顔料が付着している。

鏡は、銘帯が擬銘であるところから、後漢末の鏡式である。



第76図 8号墓出土三角縁画像鏡(1/1)

b 三角縁画像鏡 (図版11-2、109-3、第76図)

銅鏡は、棺内頭部枕にかかる左側で鏡面を上にして副葬されていた三角縁画像鏡片である。鏡片は、現状で長径7.2cm、幅3.1cmの小片となっているが、鏡縁から復原すると直径22cm前後の大型鏡である。鏡の文様構成は、外側から三角縁・獸文帯・鋸歯文帯の外区、外区の内側にわずかに櫛歯文帯が残っている。外区の獸文帯には、鳥形と頭部に角をもつ四つ足獣が鮮明に平彫りされている。鋸歯文も獸文と同様にシャープに彫られ、摩滅も見られない。また、獸文の頭部や背上に微細な突線が鮮明に見られ、同型鏡を検索・比較する際の有力な手掛りとなる。

鏡片は全体に保存がよく、一部の銹化以外は黒鉛色をし、破面・鏡縁端・三角縁頂部・外区内側端の角のみ摩滅して丸味をもち黒色の光沢が

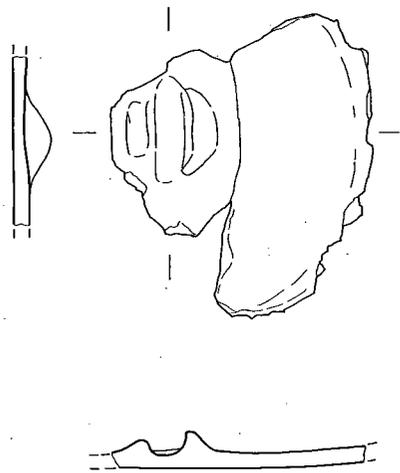
ある。大型鏡であれば大半が鏡縁と鏡面の角をヤスリ状研磨で面取りするが、これが「手ずれ」によって丸味をもつことになる。本鏡は、鏡縁外側に微細なヨコ方向の铸造後仕上研ぎの研磨痕が残っていることから、破鏡となってからも「手ずれ」が局部的な摩滅となっている。鏡面の光沢と比較すると、文様面が铸造後の仕上研ぎと鑄肌をそのまま残すことから、鏡の铸造後伝世せずに破鏡となり、破鏡となって以後の短期間に摩滅したものと考えられる。

鏡の法量は、外区幅29.2mm、三角縁幅11.5mm、三角縁厚さ6.7mm、外区内側厚さ3.3mmである。

鏡式は、三角縁で外区に獣文帯をもつものに獣帯鏡の可能性も若干あるが、いずれにしろ、後漢末に華中から華南で製作されたものであろう。

### c 小形仿製鏡 (図版109-4、第77図)

鏡は、著しく破損した小形仿製鏡で、文様も見られない。文様面の部分で表面の保存のよいところにも文様が見られないので、無文鏡の可能性もあるが、鉛同位対比分析の結果は弥生小形仿製鏡の可能性が強い。鈕も破損しているがその周辺を含めて破片は古いが、鏡縁側の破面が新しいので、鏡縁を発掘時に破損したらしい。鏡片は、復原すると直径8cm前後になると思われる。

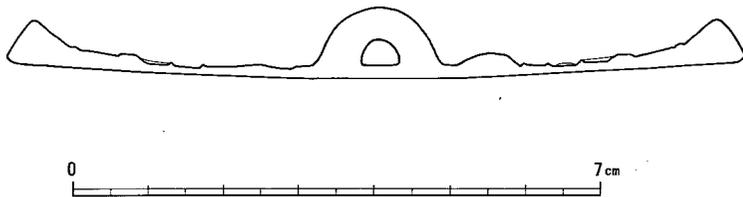
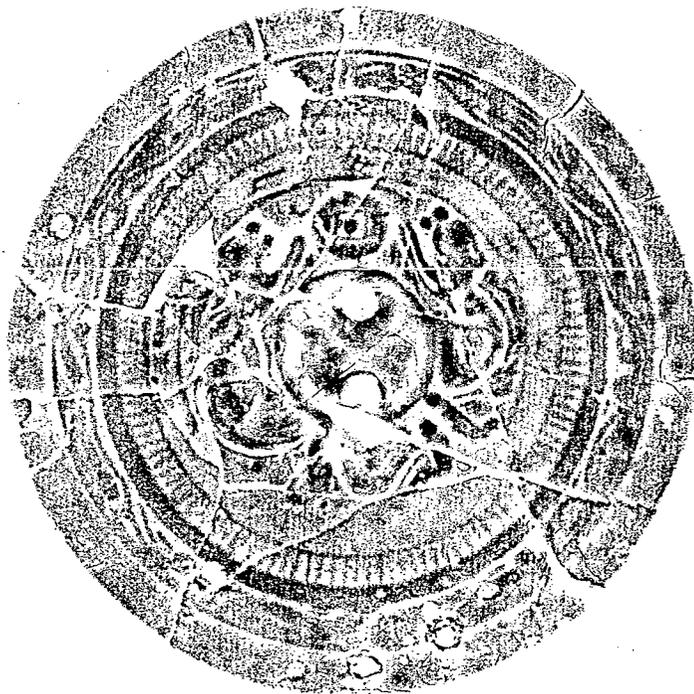


第77図 Ⅲ号墳墓群出土小形仿製鏡(1/1)

### d 三角縁盤龍鏡 (図版11-3、110・111、第78図)

本来は完形鏡として、棺内頭部右側に副葬されていた小型盤龍鏡。鏡には、一部欠損した部分があるが、これは鑄と棺内が荒らされた時に細片となって飛散したものであろう。

鏡の文様構成は、中心の円鈕座からのびる有角獣の龍が左側に、無角獣の虎が右側に各1像配置され対向している。向合った二獣の顔の間に五銖銭1個が浮彫され、その右側に「五」、左側に「困」が陽刻されている。また、五銖銭中央の方格の中に小乳1個と外側の上下に1・2個の珠文がある。獣形は、胴体部のみ細線の輪郭線があり、虎の胴体の下に2本の足、龍の長い胴体の下に1本の足を置いてさらに胴体の一部が出ている。内区の獣形の余白には、渦文やひげ状の細線文が全体に見られる。銘帯には、五銖銭の右側から右回りに「 $\square$ 羊作園 $\square$  $\square$ 、上 $\square$  $\square$  $\square$ 」の11字からなる銘文がかろうじて見える。「作」字は、人偏が略されている。銘帯の外廻りに櫛歯文帯があつて外区となる。外区は、内側に鋸歯文帯がなく円圈のみで、そ



第78図 19号墓出土三角縁盤龍鏡 (1/1)

の外帯が画文帯となっている。画文帯は、獸形が唐草文状に略されて平彫されている。外区外周が三角縁で終わっている。

鏡の法量は、面径9.8cm、鈕径18.1mm、鈕部厚さ9.6mm、鏡縁厚さ5.8mm、鈕孔幅4.6mm、鈕孔高3.2mm、鏡面の反り約2.5mmとなる。

鏡は、全体に保存がよく漆黒色を呈するが、鑄造時の「湯冷え」が二獸の足元から下部に広がっている。「湯冷え」によって、3本の足先から銘帯・櫛齒文帯・外区画文帯が不鮮明な鑄上りとなっている。この「湯冷え」の箇所から、そ

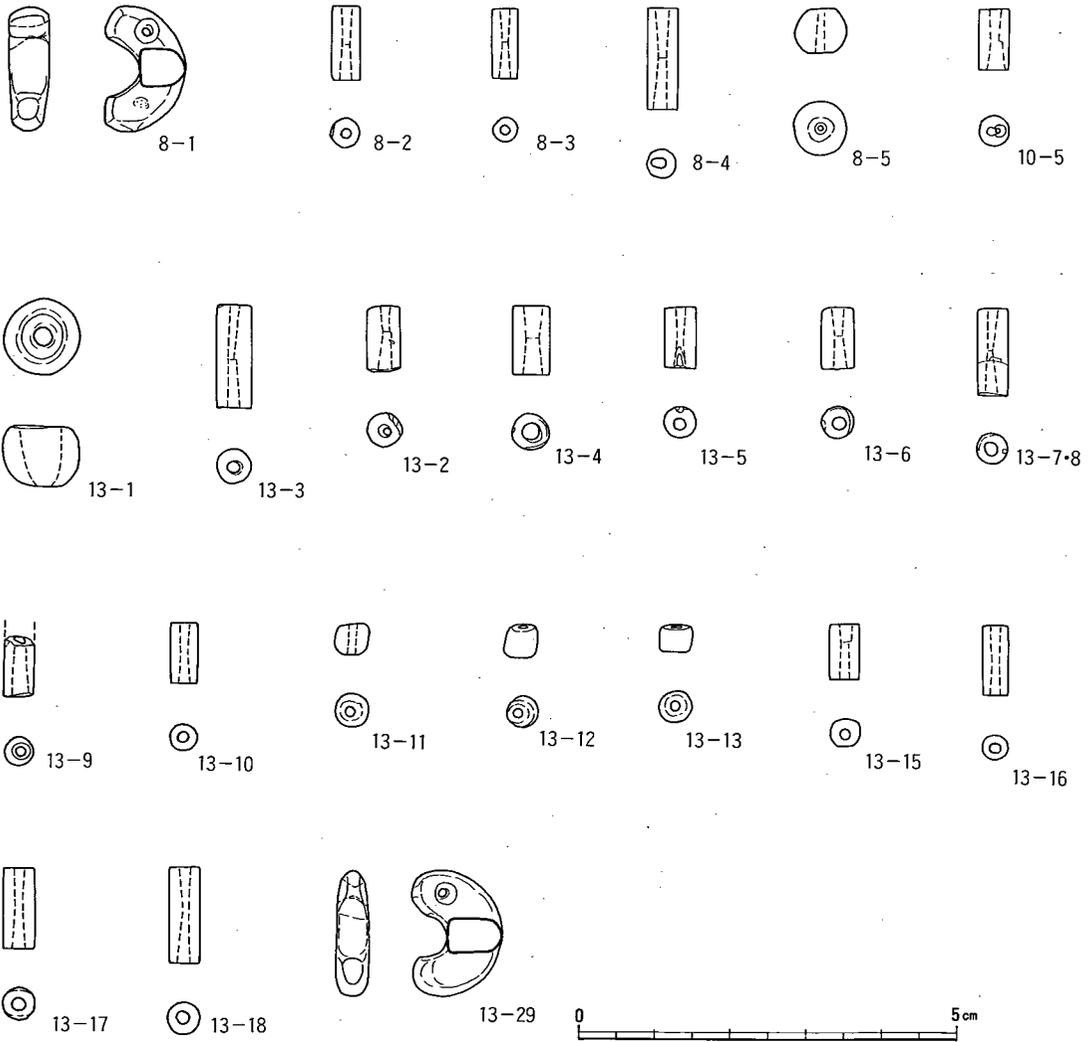
の外側に鑄型の鑄口があり、鑄造の最後になって湯が冷えて文様が不鮮明な鑄上りになったと考える。

鏡には、「湯冷え」のほかに全体にわたって「手ずれ」による摩滅が見られる。とくに摩滅が著しいのは、三角縁の角・外区内側円圈・櫛齒文帯・獸形の突出部・鈕頭であり、鏡文様の突出部全体に及んでいる。

鏡の両面全体に赤色顔料が付着しているが、鏡面には赤色顔料の中に布目痕も見られる。さらに、鈕孔内にも紐状の繊維が少量詰まっている。

③ 玉 類 (図版13~14、第79~80図)

C地区では、8号・10号・13号・20号墓の4基から玉類が出土している。この墳墓群出土の玉類は、首飾りに使用されたものではなく、耳や手首の装飾として利用されたこともあってそのほとんどが小型玉類である。したがって、ここでは、多少大きな玉類である勾玉・管玉・丸玉を図示して、ガラス小玉を表11の一覧表に計測値を示すことにした。ガラス小玉の分類に



第79図 I号墳墓群出土玉類実測図(1/1)

ついで、Aを径4mm前後で厚さも径と同じ程度であるが、厚さが径よりわずかに大きいものがあるため、歪んで長く見える小玉。BはAより小さい3mm前後で、径より厚さが大きく長い小玉。Cは4～5mm前後のものが主体であるが、3mm前後のものも多く、径より厚さが小さく、外形が丸味のある玉らしい小玉。Dは径3mm以上のものと微小小玉の2mm前後のものがあるが、Dの特徴は厚さが著しく薄い。Eは輪切りにしたそのままの状態に近いもので角がある。なお、ここでは、ガラス小玉を3.5mm以上、それ以下をガラス粟玉とした。

**a 8号墓出土玉類** (図版13-1・2、第79図8-1～8-5、表11)

8号墓では、枕にかかる中央部で出土した首飾りと思われる勾玉1点・管玉3点、右耳飾りのガラス小玉16点、ガラス粟玉43点、水晶丸玉1点、右手首飾りのガラス小玉38点、左手首飾りのガラス小玉31点・ガラス粟玉2点の合計135点が出土した。

ヒスイ勾玉は、両面と内側が平坦で、背に丸味がある。管玉は、白緑色のグリータフ製がわずかに中ぶくらみをし、濃緑色の碧玉製が直線的な作り。すべて両側穿孔である。

右耳飾りの水晶丸玉は、整美で片面穿孔し、両側を平坦に研磨している。ガラス小玉は、スカイブルーとコバルトブルーの2色があり、気泡が孔と同方向に並んでいることから引伸して切断する方法で作られている。コバルトブルーの大き目の小玉の孔の両側を平坦に研磨しているものがある。ガラス粟玉は、赤褐色2点とスカイブルー、コバルトブルーの薄いものがある。

右手首飾りは、コバルトブルーの最大径6.7mm、最小径4.1mmの大き目の小玉となっている。やはり、引伸法によって作られ、小さなものまで孔の両面が平坦に研磨されている。

左手首飾りは、コバルトブルーで最大径6.5mm、最小径4.5mmの割合揃った大きさとなっている。同じく引伸法で作られ研磨されているが、玉同士が触れる孔両面ではなく、丸味ある側面が著しく摩滅していることは、左手を右手より多く使用する左利きのためであろうか。

**b 10号墓出土玉類** (図版13-3、第79図10-5、表11)

10号墓からは、小型管玉1点、ガラス小玉8点が出土した。管玉は、縞文様のある白緑色のグリーントフで、両側穿孔が食い違って、片面に2個の孔が重複した形となっている。

ガラス小玉は、スカイブルーとコバルトブルーの2色があり、コバルトブルーの大きい2～3個に孔両面の研磨が見られる。

**c 13号墓出土玉類** (図版14-1、第79図13-1～29、表11)

13号墓からは、両側の耳飾りとして一対の玉類が出土した。

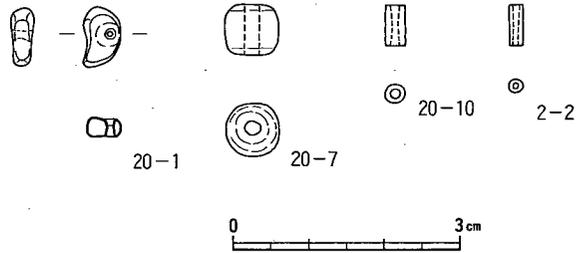
右耳飾りは、ヒスイ丸玉1点を中心に、管玉12点、ガラス小玉4点で構成されている。ヒスイ丸玉は、一方から大きな穿孔を行っているところが縄文玉と同じである。

管玉は、いずれも小型で、メノウ1点、碧玉8点、グリーンタフ3点がある。

ガラス小玉4点は、いずれもコバルトブルーで引伸法、孔両面の研磨がある。

左耳飾りは、ヒスイ勾玉を中心に、ガラス管玉1点、ガラス小玉15点で構成されている。

ヒスイ勾玉は、白緑色の扁平で、頭部より尻の方が厚味があり、高級とはいえない。



第80図 IV・2号墳墓群出土玉類実測図(1/1)

ガラス管玉は、調査時に取上げる時点で破損したが、大きさが長さ約9mm、径約3.5mmのうすいコバルトブルーである。孔と同一方向の無数のスジが伸びているところから、引伸法で作られている。ガラス小玉は、いずれもコバルトブルーで、引伸法、両側の平坦研磨がある。さらに丸味側の摩滅もあり、使用度の多さが考えられる。

#### d 20号墓出土玉類 (図版13-3、第80図、表11)

20号墓の玉類は、頭部で出土した勾玉1点、管玉1点、ガラス丸玉1点、ガラス小玉9点の合計12点から構成されている。勾玉は、極小型碧玉製で、平扁な尻尖がりとなっている。両面穿孔された際に、両面に孔の周囲に同心円状の平坦面ができています。

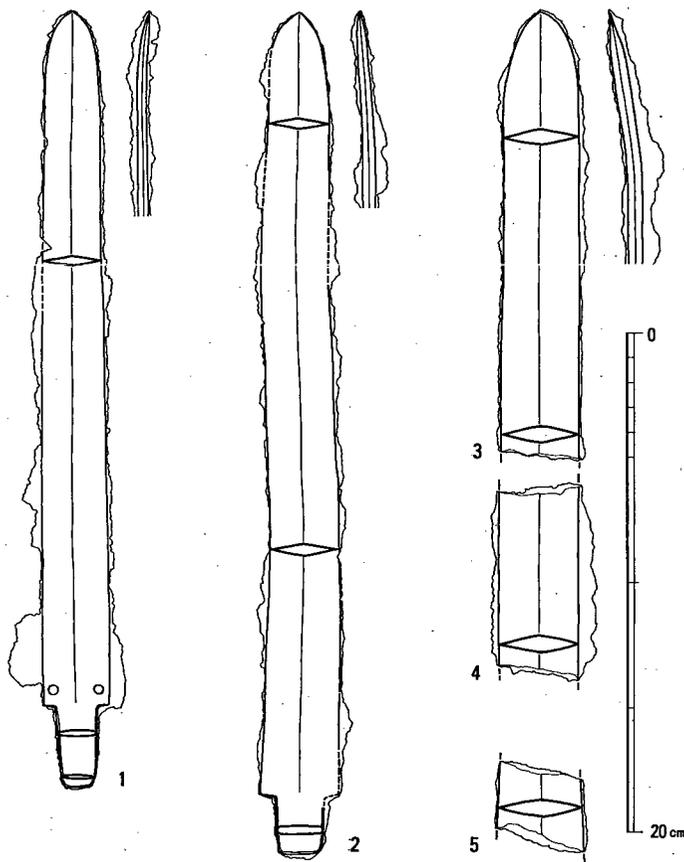
管玉は、黄緑色の碧玉細型で、両面穿孔されている。

ガラス丸玉は、スカイブルーで引伸法で作られ、孔両面を平坦に研磨している。ガラス小玉は、コバルトブルー1点とスカイブルーで、全部が引伸法で作られているが、孔両面の研磨がコバルトブルーの1点だけに限られている。

#### ④ 鉄器 (図版113~118、第81~85図、表12)

今回報告する墳墓群からは、合計67点の鉄製品が出土している。内訳は、武器の剣が5点・素環頭刀子4点・鏃21点、工具の刀子24点・鉞4点・斧3点、農具の手鎌1点、漁具の釣針5点である。鉄器の全長・最大幅・最大厚さについては、本文最後の表12の一覧表に示した。

第81図1は、5号墓出土の剣で、長さ31.1cm、最大幅2.6cm、最大厚さ0.4cm、茎長3.2cm、最大幅1.7cm、最小幅1.7cm、厚さ0.3cmで、剣身関部両側に目釘穴をもつ。剣身の最大幅は関部側にあり、切先近くの幅が2.0cmであるから幅6mmの先細りとなる。剣身と茎基部の厚さに変りないが、茎は厚さも幅と同じように尻細りとなっている。関部の目釘穴は、径5mmの円孔



第81図 墳墓群出土鉄剣実測図(1/3)

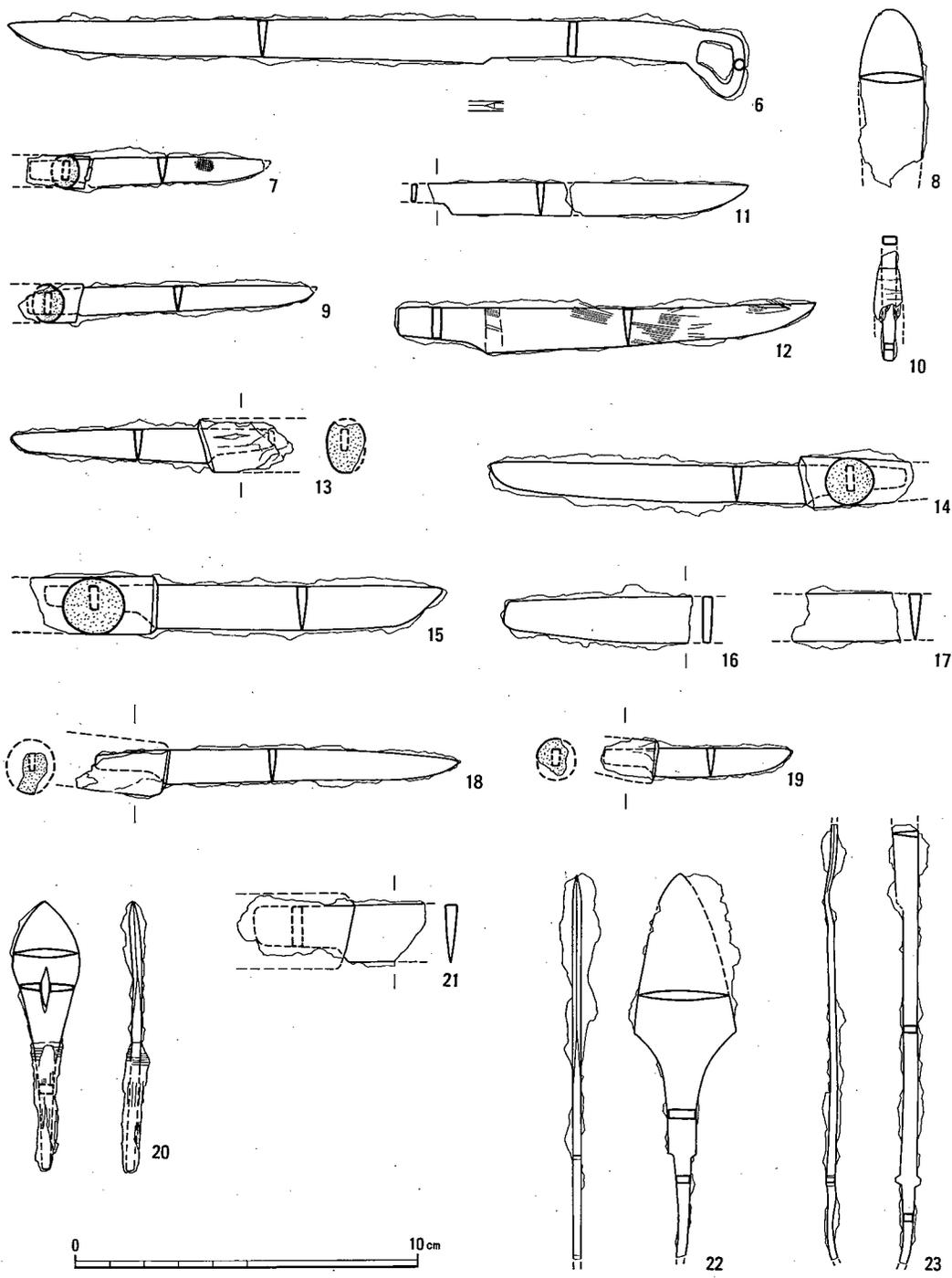
気味である。茎は、長さ2.25cm、最大幅2.0cm、厚さ0.4cmの小さなもの。この剣身も、切先近くから緩やかな反りがある。

第82図6は、6号墓の枕上から出土した素環頭刀子で、身の長さ14.2cm、柄長5.6cm、環長1.7cmの大きさである。身最大幅が関部にあり、柄の幅が1.1cmであるが環側が約1mm小さくなっており、柄のみがわずかに内反りである。柄などに木質などの付着物はなく、環頭部の断面形は丸造りと思われるが正確な形状が不明である。なお、柄と比較して身が先細りなのは、使用による研減りであろう。

7は、6号墓出土の小型刀子で、木製らしき柄が残っている。身の最大幅が関部にあり、刃部がわずかに内反りなのは、使用度に応じた研減りである。茎は、長さ1.7cm、幅約0.6cmの大きさである。柄は、幅0.9cm、厚さ約0.8cmの楕円形の断面形である。身の両面に布目痕がある。

で、中に径4mmの目釘が貫通している。剣身の切先部分に反りがあるが、棺内が荒らされていないことから、副葬前からのものであろうか。図の裏面にあたる切先近くに木葉が錆付き、同じ剣身裏面の数個所に紐状の付着物もあり、鞘等であろうか。関部両側にも木質等の付着物があり、一方は人骨の可能性もある。剣身の鏽は、明瞭なものではない。

2は、Ⅲ号墳墓群の中央部で単独に出土した完形品。14号墳の築造・破壊によって遺構から遊離したものと考える。剣身の最大幅は関部にあり、切先近くの幅2.4cmとは7mmの差がある。剣身は、鏽のための変化であるかもしれないが、蛇行



第82图 墳墓群出土鉄器実測図①(1/2)

8は、6号墓出土の典型的な柳葉形鉄鏃で、発掘時に欠損したらしく身の下半と茎を失っている。最大幅は身の中央部にあり、鏃がなく丸味もっている。

9は、8号墓出土の小型刀子で、鹿角製らしき柄が一部残っている。身の関部に最大幅があり、切先に向かって若干細くなっている。茎は、柄の残存のため正確な形状が不明であるが、長さ1.5cm、幅約0.7cmで、端部が細くなるようだ。

10は、11号墓の壁面の中位で出土した鉄鏃の茎部で、欠損部を見ると発掘時に鏃身を失ったらしい。矢柄の一部と桜皮巻部が残っており、矢柄径が約0.9cmの大きさである。

11は、13号墓の右耳部分から出土した刀子で、茎と身の一部を欠損している。身の現存部は、長さが8.8cmで、身の幅が均一であることと、切先部が割合大きいことから、ほとんど研減りがないものと思われる。茎は欠損しているが、幅0.6cmの大きさ。

12は、13号墓の左耳部分から出土した刀子である。身の最大幅が関部にあり、先細りになっていることから、使用度に応じた研減りがあるようだ。茎は、長さ1.9cm、幅1.0cmの大きさで、わずかに尻細りとなる。身の片面に茅茎状の付着物がある。

13は、18号墓出土の鹿角製柄をもつ小型刀子。身の最大幅が関部にあり、かなり先細りであることから、研減りであろう。茎は、幅1.55cm、厚さ1.15cmで断面楕円形の柄が装着されていることから、形状と大きさが不明である。

14は、19号墓出土の柄付刀子。身の最大幅は、関にあるが、全体に幅に変化が少ない。茎には、径1.3cmの断面円形の柄が付くが、何製か不明である。身に付着物が多いが、何物か不明。

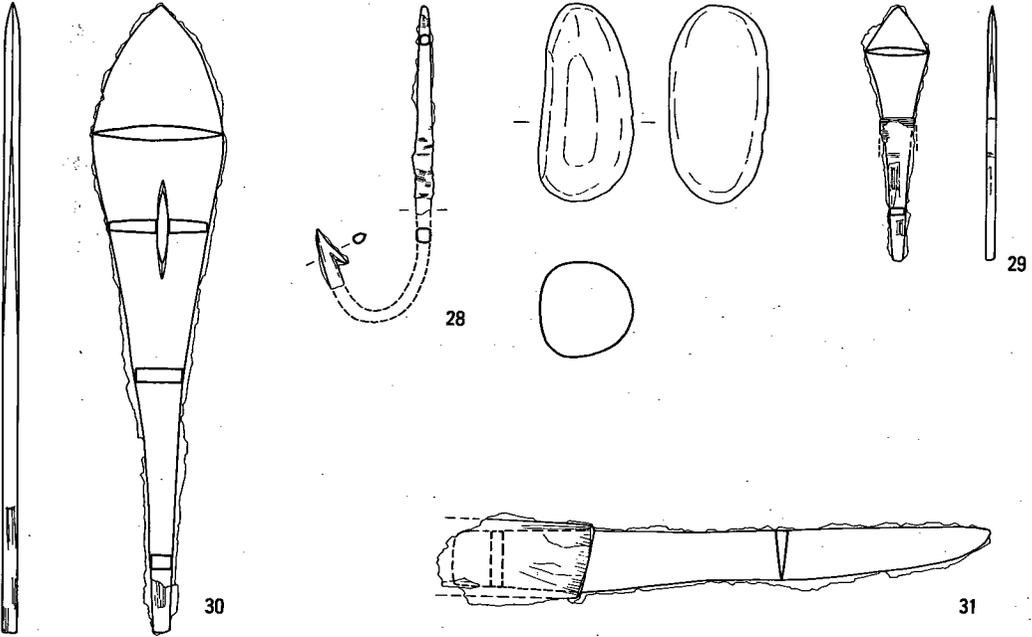
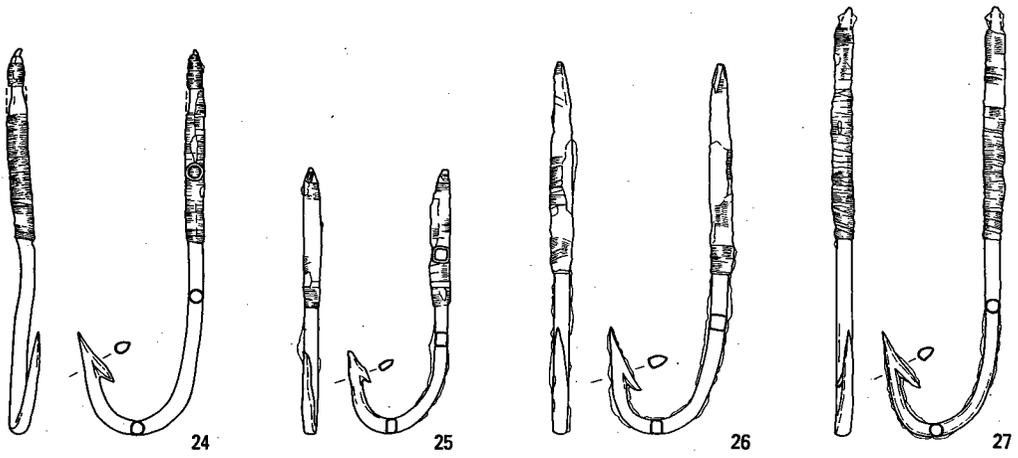
15は、20号墓出土の刀子。身幅は全体に変化なく、切先が急に突がる。茎には、径1.7cmの断面円形柄が残っているので、形状と大きさが不明。

16・17は、荒らされた21号墓から出土した茎と刀子身残欠である。両方の幅と厚さが同じであることから同一個体ともいえるが、刃部に対し茎が大きく、刀子の茎としても大型であることから別個体の可能性が強い。同一個体とすれば、刃部が著しく研減りしたことになる。

18は、22号墓出土の刀子。身幅が全体に同じであるが、刃、背共にわずかに内反りする特徴がある。茎には、鹿角製らしい柄が残存することから、形状と大きさが不明。

19は、24号墓出土の小型刀子。身幅に変化ないことから、最初からこのような小型であったらしい。身の長さ3.9cm。

20は、2号甕棺墓出土の透孔付柳葉形鉄鏃。形からは、椿葉形の小型で、身と茎を区別する段などがなく、茎尻から3.7cmのところから矢柄が装着され、桜皮巻きが見られる。身の中央部で、最大幅部から下に長さ1.4cm、最大幅0.25cmの凸レンズ状透孔が穿たれている。透孔は、ほぼ直角に穿たれているのが特徴で、当遺跡として同型式で最小型であるが、全国的にも同時期で最小となる。ここでは一応柳葉形としたが、刃部が最大幅より先に限られることから、圭頭形との分類について最後に検討する。



第83图 VI-42号墓出土铁器等实测图(1/2)

21は、V号墳墓群の集石遺構から出土した大型刀子。身幅が広いところから相当な大型となるが、茎が短いことから小刀まで大きくならないだろう。茎は、鹿角製らしき柄が若干残っていることから、形状や大きさが不明。

22は、2号墓から出土した三角形鏃で、刃部の鏃身長4.6cm、頸部長3.5cm、茎部が一部欠損している。木質等の付着物は見られない。

23は、2号墓から出土した長頸鏃で、鏃身が片刃であるが、関部の形態が不明であるところから、鏃身・頸部の長さを示せない。関部は棘状関で、茎部が一部欠損している。

第83図24～28は、42号墓棺外から出土した超大型釣針である。釣針は、型的に内鐵式長軸型で、高さ7.0～11.5cmの超（極）大型である。この鉄製釣針で特記すべきことは、超大型であることに加え、5点のうち2点に円棒材が使用されていることである。42号墓は、鉄器の他に供献土器もあり、時期的に弥生終末新段階として特定することができるうえに、遺構の重複から、その前後関係も検証できる利点がある。たとえ時間幅を見たとしても、古墳初期に超大型釣針に円棒材を使用しているのである。

次に各釣針の各寸法と特徴は、24が高さ10.4cm、ふところ幅2.9cm、たちあがり2.7cm、針先から鏃先の長さ1.7cm、軸部の糸巻幅6.2cm、軸径0.4cmの大きさで、軸断面円形、ちもとが先細り、先曲がりと腰曲がり均等である。針先側から見た正面形は、軸に歪があるところから、土圧によるものであるかもしれないが、針先が右ヒネリとなっている。

25は、高さ7.0cm、ふところ幅2.25cm、たちあがり1.25cm、針先～鏃先長1.05cm、糸巻幅3.5cm、軸径0.25×0.35cmの大きさで、軸断面方形、ちもと先細り、先曲がり強い。正面形が、わずかな左ヒネリで、針先も曲がっている。

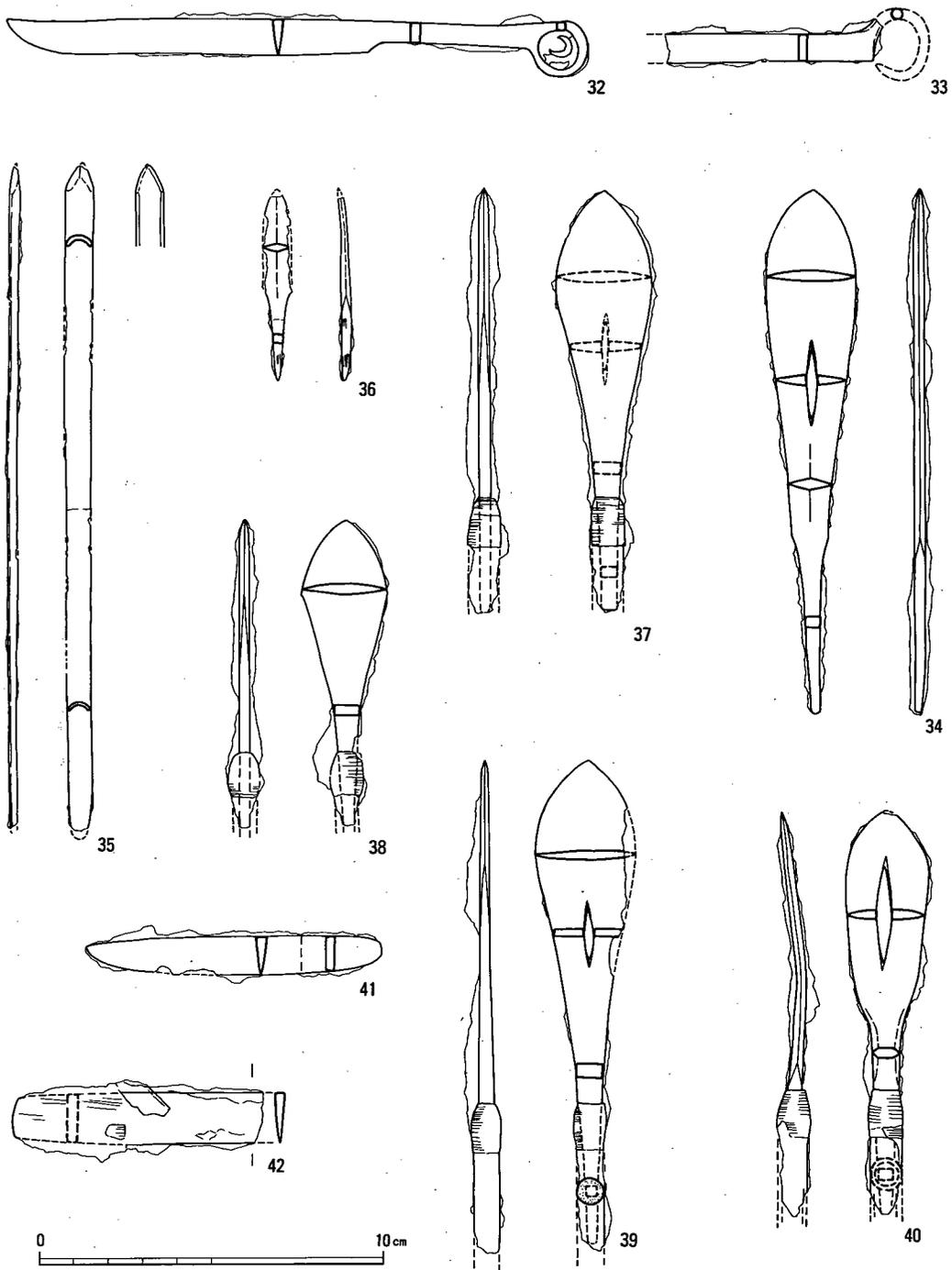
26は、高さ9.9cm、ふところ幅2.6cm、たちあがり2.85cm、針先～鏃先長1.9cm、糸巻幅5.5cm、軸径0.3～0.45cmの大きさで、軸断面方形、わずかな左ヒネリ、先曲がり強い。

27は、高さ11.4cm、ふところ幅2.75cm、たちあがり2.8cm、針先～鏃先長1.8cm、糸巻幅5.6cm、軸径0.35cmの大きさで、軸断面円形、ちもと先細り、先曲がり強く右ヒネリである。

28は、発掘時に欠損して曲がり部分を失ったが、鏃の大きさと糸巻の幅から他の4点と比較して、高さ約8.4cmに復原した。軸現存長5.6cm、径0.4cmの断面方形、針先～鏃先長1.25cmのものである。

これらの長軸釣針に、幅広く巻かれた糸の材質は不明であるが、巻き方に2～3mmの幅の単位があるようにも見えることから、今後材質の分析と共に検討しなければならない。

第83図に示した小石は、28の釣針の軸に添えられていたもので、一方の平坦面に鉄鏽が付着している。大きさは、長さ5.25cm、径2.6×2.4cm、重さ38.3gの火山岩の河原石。超大型鉄製釣針の軸に添えられていたことから、超大型釣針に重りを括り付ける釣漁法はないものだろうか。いずれにしろ、この超大型鉄製釣針の存在は、弥生終末の釣漁法と製作技術の大革新を達

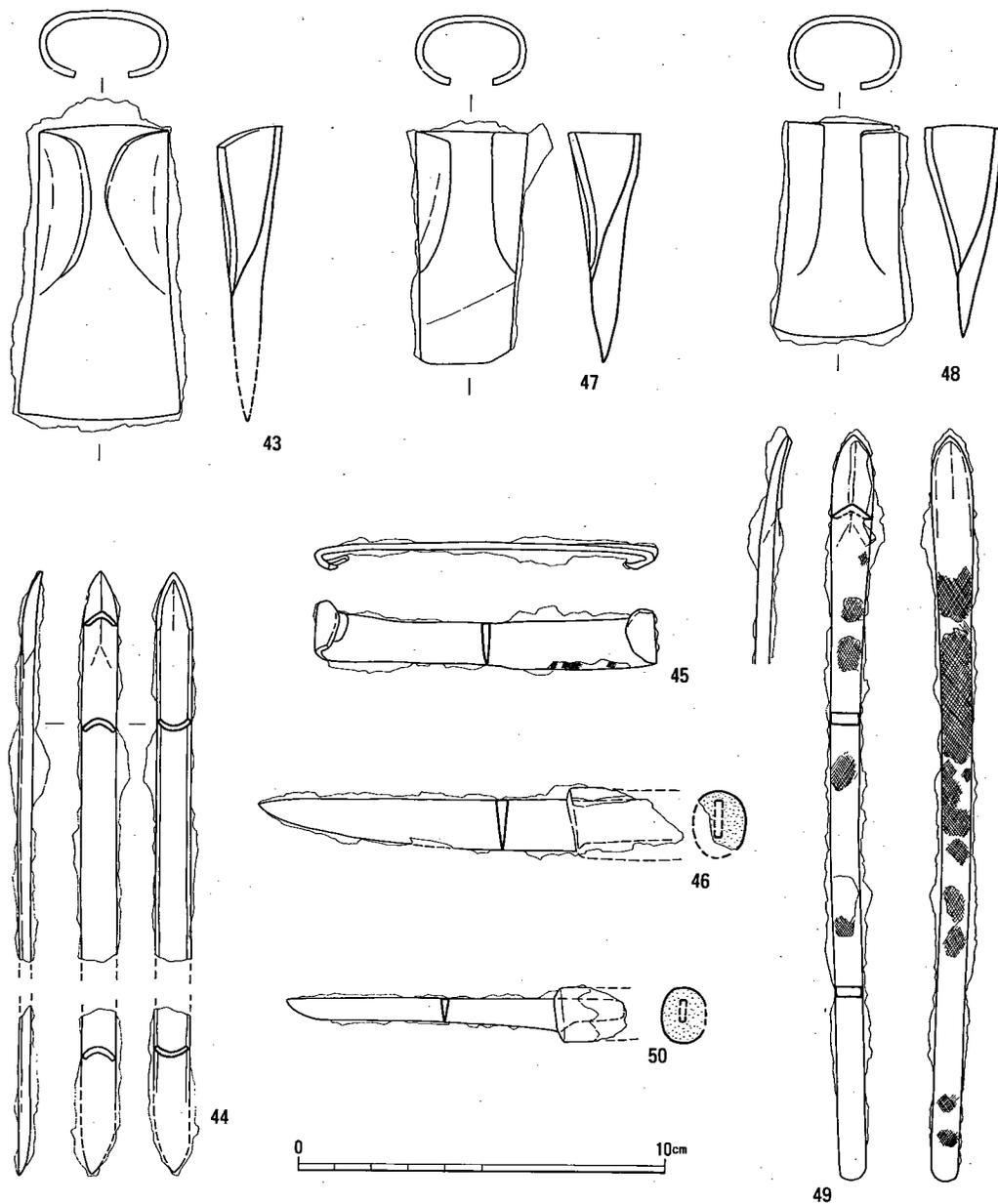


第84图 墳墓群出土鉄器実測図②(1/2)

成し、近海での大型魚の捕獲を可能にしたことで重要な資料となろう。

29は、42号墓棺外で釣針5点に伴出した圭頭形鉄鏃である。先端から最大幅の部分までが刃部で、身と茎の区別もない。矢柄は、茎尻から3.85cmのところから桜皮巻きが始まる。

30は、42号墓棺内に副葬されていた超大型透孔付柳葉形鉄鏃で、当遺跡最大のもの。刃部は、



第85図 墳墓群出土鉄器実測図③(1/2)

先端から最大幅までで、身と茎の区別がない。身の最大幅よりやや下から中央部に、凸レンズ状の透孔を穿っている。透孔は、長さ2.6cm、最大幅0.3cmの大きさで、鋭利な鑿で一気に穿ったようだ。矢柄は、茎尻から3.4cmの位置から木質がわずかに残っている。

31は、42号墓棺内に30の鏃と重ねて副葬されていた刀子である。身は、最大幅が関にあり、急激に幅が細くなる場所から、かなり研滅りしたものである。茎は、鹿角柄が付着して形状や大きさが不明であるが、身幅と同じようだ。身の長さ10.8cmの大きさ。

第84図32は、43号墓の棺外から出土した素環頭刀子で、全体に細身である。刀身は、切先付近が外反りで、さらに中央付近でわずかな内反りとなる。刀身長10.9cm、厚さ3mm、柄長4.2cm、柄幅0.6cmから0.7cm、環頭外径1.6cmの大きさである。柄には付着物はないが、刀身に茎状圧痕、環頭内に紐状付着物がある。

33は、荒らされた44号墓蓋石上から出土した素環頭刀子片である。刀身と環頭を欠損しており、柄幅8.5mm、厚さ2.5mmで、環が丸造りで一方が柄に密着しない。木質の付着物もない。

34は、同じく荒らされた44号墓棺内から出土した大型柳葉形透孔付鏃。鏃身長10.1cm、身最小幅1.1cm、茎部長5.1cm、透孔長2.4cm、孔幅0.3cmの大きさで、鏃身基部付近にわずかな鏃が見られる。茎部に矢柄の痕跡はない。

35は、53号墓から出土した細長い鈍で、最大幅が刃部にある。最小幅は身尻の0.5cmで、身尻近くで急に細くなる。横断面形は、鉄身全体が三日月形で、その先端を刃部として研出したにすぎない。全体に木質等の付着した痕跡はない。

36は、同じく53号墓から出土した柳葉形鏃。この遺跡で最小型鏃で、鏃身にわずかに鏃があり、茎部長2.6cmの尻から1.7cmのところから矢柄を装着したらしい痕跡がある。鏃身にわずかな反りがある。

37・38は、27号墓から出土した柳葉形と圭頭形鏃である。37を柳葉形としたのは、最大幅にあたる部分をすぎたところまで刃部であることからで、基本的には38の圭頭形と大差ない。37は、椿葉形透孔付鏃とすべきもので、長さ約2.1cm、幅0.2cmの凸レンズ状透孔をもつ。37・38の両方共に、全体に錆ぶくれして正確な厚さは不明。両方共に、矢柄を装着している。

39・40は、31号墓出土の大型柳葉形透孔付鏃。39は、椿葉形で刃部が最大幅まで、透孔長2.4cm、幅0.25cm、矢柄に桜皮巻きがある。40は、茎部中央近くまで刃部状を呈し、鏃身に対して大きな透孔をもつ。この透孔は、この遺跡最大の長さ3.2cm、幅0.4cmで、鏃身形態も違っている。これは、透孔自体が本来のものであるが、鏃身形態が使用度に応じて研滅りした可能性もある。茎部には、矢柄が装着され、桜皮巻きもある。

41は、これも31号墓出土小型刀子で、刀身と茎の区別がない。したがって刀身最大幅がそのまま茎幅となっている。刀身の背に内反り状丸味、茎尻にも丸味がある。茎に柄が装着された痕跡がある。

42は、荒らされた32号墓から出土した刀子で、刀身と茎部が幅において同じである。刀身の研減りによってこのような形態となるのであろう。茎は、尻から3.3cmのところから柄が装着されている。

第85図43は、35号墓棺外から出土した袋状斧で、最大幅が刃先にある。両側から折曲げた袋部と刃基部厚さ0.8cmから刃先の断面形が不明であるが両刃であろう。

44は、荒らされた35号墓棺内から出土した鈍で、鉄身全体が三日月形断面をし、身幅も同一であるところから、刃部と身尻の形態に大差がない。

45は、41号墓から出土した本遺跡唯一の農具である手鎌。厚さ2mmの長方形板の両端を折曲げたもので、刃部が片刃状を呈し、使用度に応じた研減りがある。刃部の研減りは、左側に集中していることから右利きの被葬者と考えられる。木柄の装着はなかったらしく、刃部を包むように細目の布目痕が見られる。

46は、小児用の62号墓から出土した刀子。最大幅は関にあり、背と刃が切先に向かって細くなる。刃に古い刃こぼれがあり、鹿角製柄が装着されて茎の形態は不明である。

## 2 D地区の調査記録

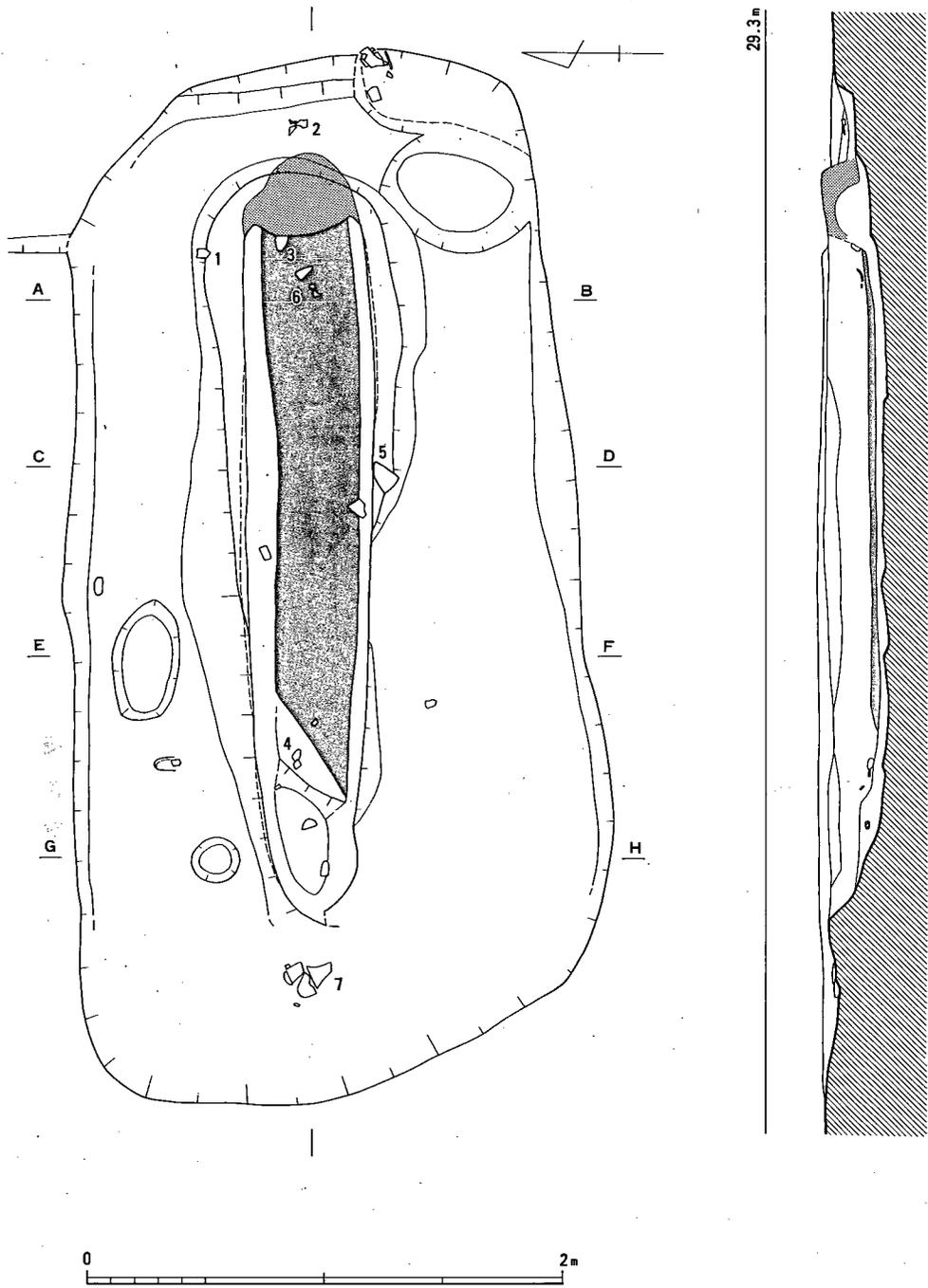
### (1) 遺構

D地区は、弥生終末から古墳初期に限定すると、竪穴式住居跡7軒・墳墓2基が確認されている。この両者が完全に重複していることから、当然のこととして竪穴式住居が先行するのであるが、この住居跡が意識的に埋戻された形跡がある。D地区の竪穴式住居の時期は、C地区と同じ弥生終末の古段階であるから、墳墓が同時期以後ということになる。D地区では、C地区のように検出した順に墓の番号を付すのではなく、最初から簡単に各墳墓が独立して区別できるところから、個別の呼び方をしてきた。そこで、ここでは現場で割竹形木棺墓としたものを1号墳墓、1号～3号石蓋土壙墓を2号墳墓、方墳を3号墳墓として整理した。

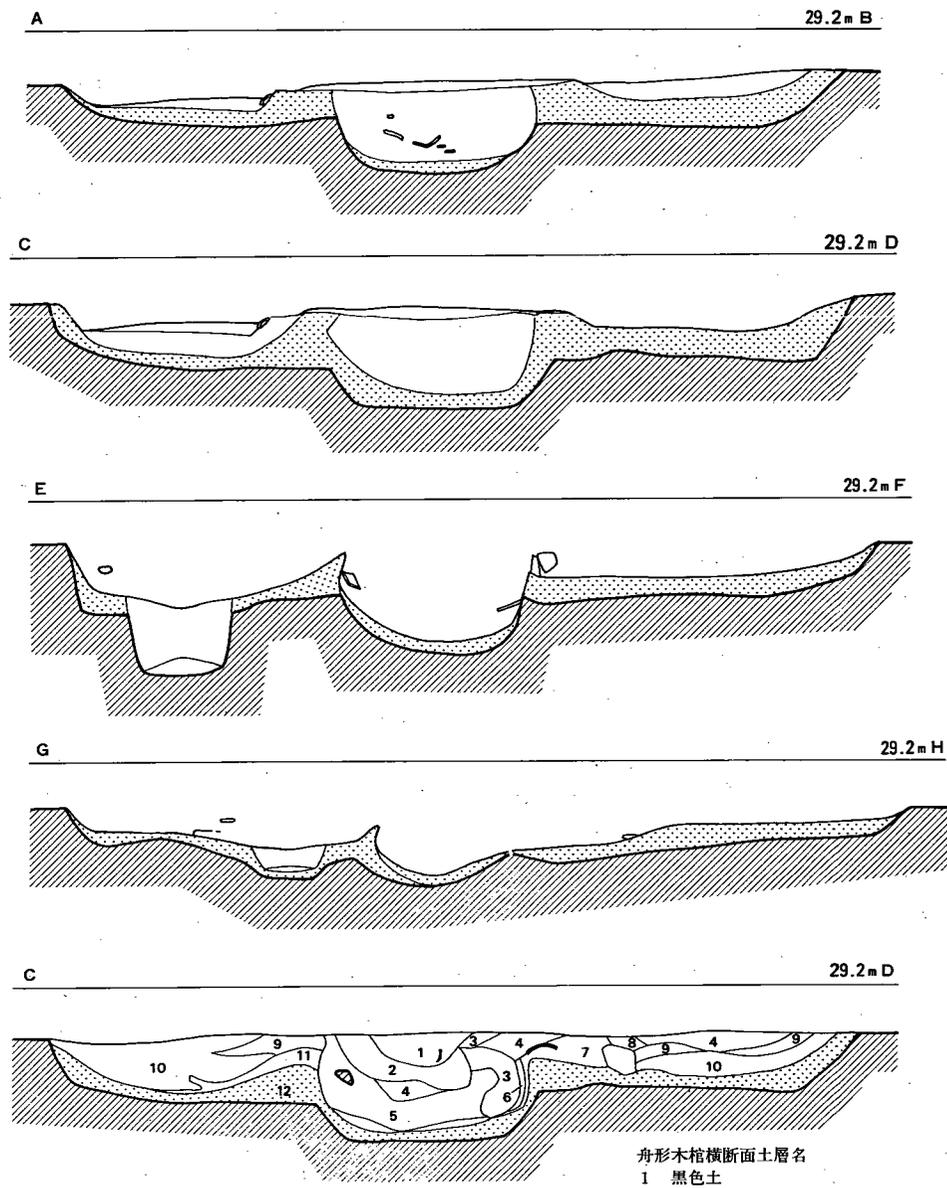
#### ① 1号墳墓（図版57・58、第86・87図）

1号墳墓は、D地区南側中央で、2号竪穴式住居跡を切って造られた木棺墓である。木棺は、隅丸梯形の墓壙の中央に安置された棺床の痕跡を検出することができた。検出できた木棺痕跡は、墓壙全体と掘りくぼめられた棺床に敷かれた、粘土に近い赤褐色土と淡褐色粘質土が混合した土の上に置かれたことになる。この敷かれた粘土性のある混合土は、木棺両側と東側小口が盛上がる形となって、正に粘土床の形態をとっている。

木棺は、一般的に「割竹形木棺」と呼んでいる形式であるが、横断面形で見ると舟底状を呈しており、「割竹形」の名称が示すような正円形でない。木棺の横断面形は、底部外面形が



第86图 舟形木棺实测图(1/30)



- 舟形木棺横断面土层名
- 1 黑色土
  - 2 黑褐色土
  - 3 黄褐色粒混入黑褐色土
  - 4 暗褐色粘质土
  - 5 赤色颜料粒混入暗褐色粘质土
  - 6 暗褐色土混入黄褐色土
  - 7 灰褐色粘质土
  - 8 淡褐色粘质土
  - 9 赤褐色粒混入灰褐色粘质土
  - 10 暗褐色土混入灰褐色粘质土
  - 11 暗褐色土混入赤褐色粘质土
  - 12 赤褐色·淡褐色粘质土混合

第87图 舟形木棺横断面实测图(1/20)

舟底形で、土層横断面形からも上面を含む横断面が横に広い楕円形であることがわかる。したがって、この木棺の形式は、舟形木棺としておきたい。この舟形木棺は、外形の長さが2.25m、東側頭部小口幅50cm、最大幅55cm、西側小口幅40cmの大きさで、内法が床面の赤色顔料の範囲から長さ2.02m、東側小口幅36cm、最大幅39cm、西側小口幅31cmであることがわかる。木棺外形の高さは、土層図から復元すると40cm前後で、内法が30cmというところであろう。木棺内部に赤色顔料が敷かれていることを述べたが、棺内の足元で鉄細片が出土した以外に副葬品は残っていなかった。棺外では、墓壙内各所に土師器細片が散乱していた。

この舟形木棺を主体部とした墳墓は、当然のこととして墳丘の存在が予想されるのであるが、完全に削平されたらしく、周溝さえ残っていなかった。ただし、墳丘を復元するとすれば、西側に隣接する3号墳墓の周溝外側から舟形木棺の中心までの距離が6mであることから、半径6m以内の墳丘規模であることになる。

## ② 2号墳墓 (図版59・60、第88図)

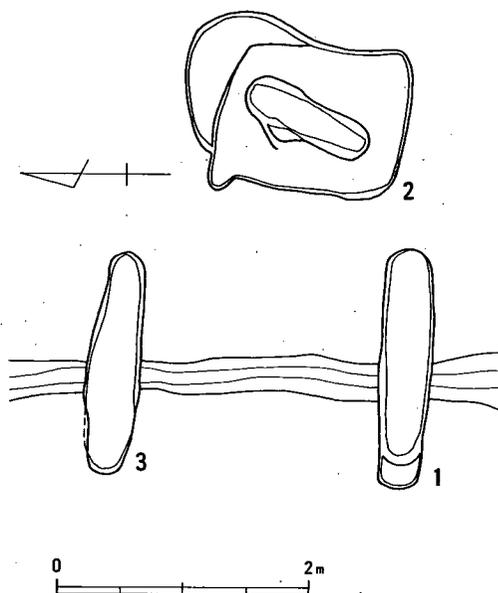
2号墳墓は、1号墳墓の北側にある石蓋土壙墓3基から構成されている。石蓋土壙墓3基がコ字形に規則的な配置で埋葬されていることから、墳丘中央部を意図的に配分したものととして1基の墳丘を想定した。墳丘は完全に削平され、周溝も残っていないことから、規模も不明。

### 1号棺 (図版59-2、第89図1)

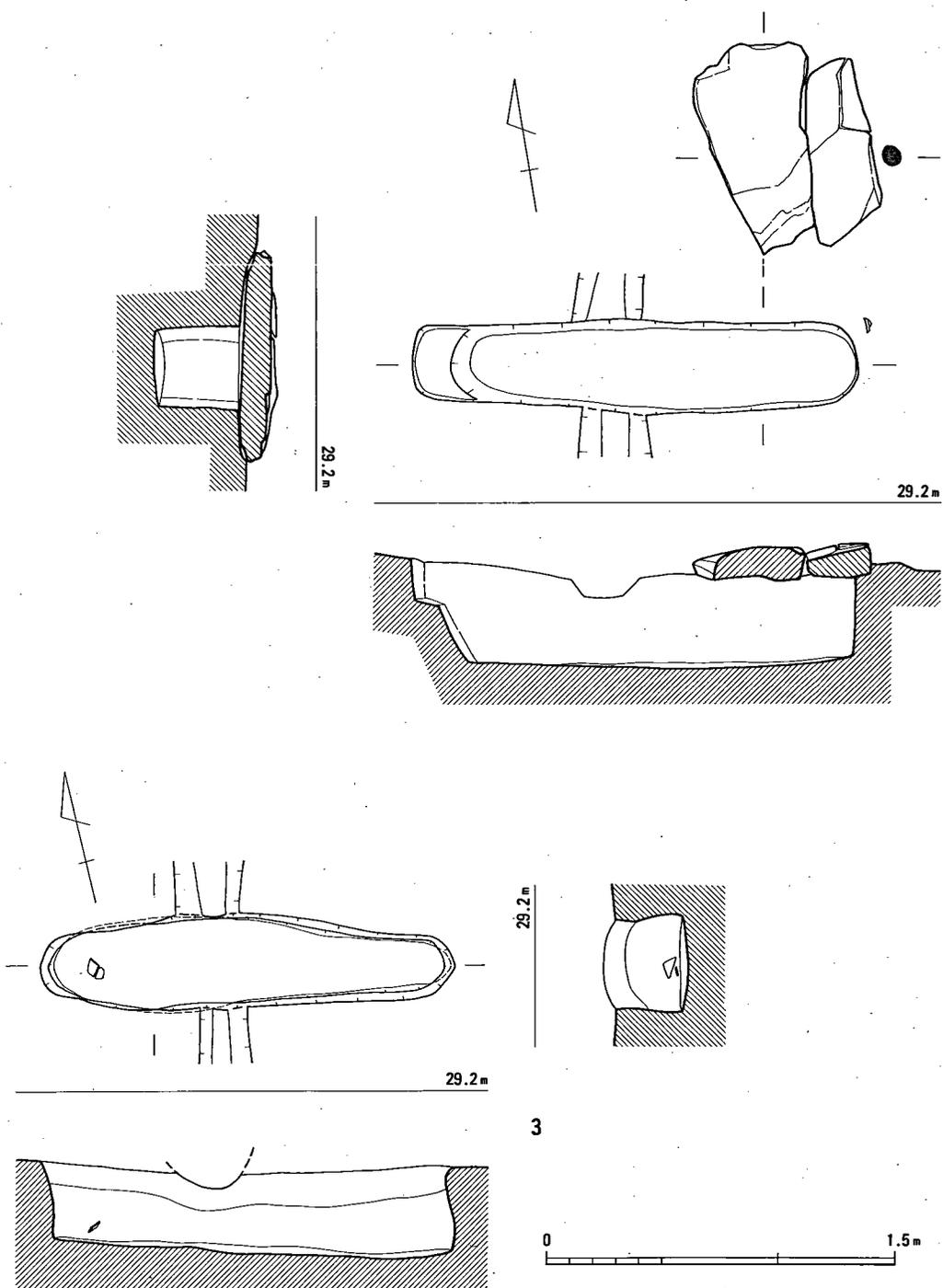
南側に位置する石蓋土壙墓で、片岩を利用した蓋石2枚が東側頭部に残っていた。土壙は、両小口丸造り、最大幅が中央部、枕がないもの。足側の西側小口に1段あるが、意味が不明である。

### 2号棺 (図版60-2、第90図2)

東側に位置する小型石蓋土壙墓で、墓壙の床部と蓋石が完存していた。本来は長方形で対角線上に埋葬したらしいが、頭部側の北東側を拡張している。墓壙内から土器が出土した。蓋石として、4枚の安山岩と片岩が利用



第88図 2号墳墓実測図(1/60)



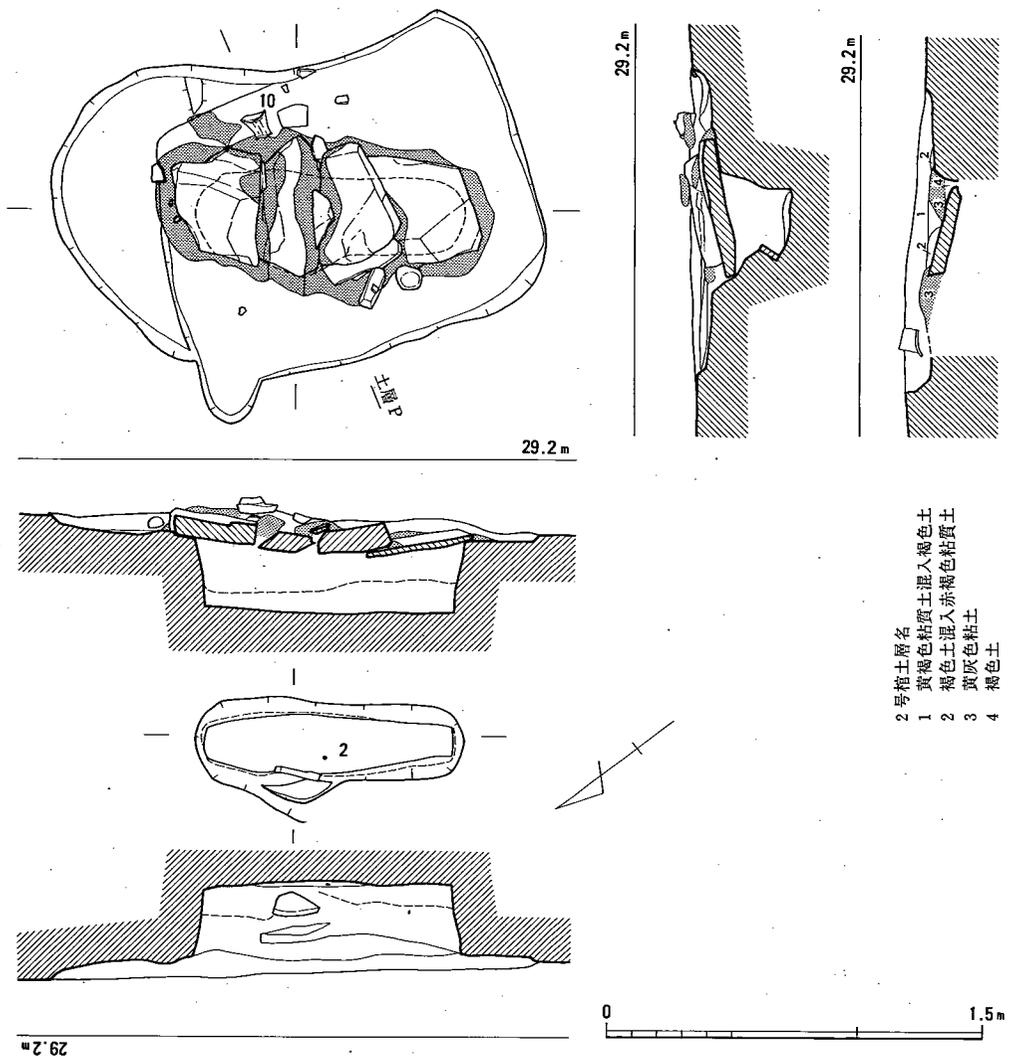
第89图 2-1-3号棺实测图(1/30)

され、粘土目張りされていた。

土壙は、両小口が角張り、腹部が最大幅で、枕がなく、壁面が垂直に近く掘られている。棺床面中央の右側で細形管玉1個が出土した。北東側が頭部位置と思われる。

### 3号棺 (図版60-3、第89図3)

北側にある大型石蓋土壙墓で、蓋以上が削平されている。土壙は、両小口丸造り、西側小口が広く頭部であるが枕がなく、腹部に最大幅がある。壁面の上半分が崩壊しているので石蓋としたが、壁面は内湾して掘られている。



第90図 2-2号棺実測図(1/30)

## (2) 遺物

### ① 土器

#### a 1号墳墓出土土器 (図版、第91図1~7)

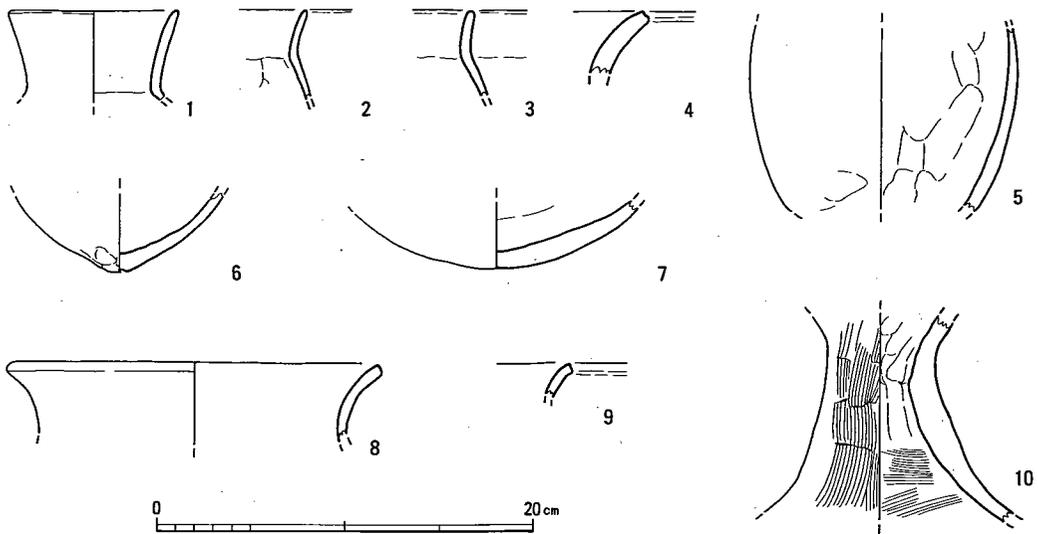
D地区の南側に主体部が1基存在するのがXII号墳墓で、弥生終末と考える2号竪穴住居跡が埋没した後に破壊しているため、住居跡の土器が混入している可能性ももっている。

第91図1~7が、舟形木棺の墓壙内から出土した土器で、1~4が口縁部、5が甕胴部、6・7が甕底部の破片。1は小型壺で、摩滅が著しいが、胴部が急に肉薄になるところから内面へラケズリの可能性ももっている。2・3は、口縁が割合立つ甕口縁部で、全体に摩滅しているが、2の胴部内面にへラケズりらしい痕跡がある。4は中型以上の甕口縁で、形態から古い可能性があり、混入品であろう。5の甕胴部は、全体に摩滅しているが、内面と外面下端にへラケズりらしい痕跡が見える。6・7の底部は、6が尖底、7が丸底で、6の外面下端と7の内面にケズりらしき痕跡がある。

時期は、古墳前期に属する。

#### b 2号墳墓出土土器 (第91図8~10)

この群も削平のため、かろうじて蓋石が一部残っているにすぎなかったことから、土器の出



第91図 D地区墳墓出土土器実測図(1/4)

土も少ない。

第91図8・9は、1号墓出土の甕口縁部細片で、全体に摩滅して詳細が不明であるが、9の外面の一部に煤が付着している。混入品であろう。10は器台で、内外面にハケ目の荒い調整と内面にシボリと指圧痕が見られる。弥生終末から古墳初期のものである。

## ② 玉 類 (図版14-2、第80図、表11)

D地区では、管玉1点が2号墳墓2号棺から出土している。管玉は、白緑色のグリーンタフ製の細形で、両面穿孔されている。

# 3 E地区の調査記録

## (1) 遺 構

E地区では、縄文から中世までの遺構が重複して検出されているが、今回報告の弥生終末から古墳前期に限定すると、地区の南西側最高所に位置する墳丘墓群及び地区北端で丘陵先端にあたる地区に遺構が集中する。地形的に高い地域は、古墳後期以後に意識的に開墾から外された可能性が強く、中世の墓が一部重複し、現代に祠が設けられていた。バイパス建設決定後の遺跡分布調査では、この地区のみ低墳丘が確認され、周辺がすでに開墾されていた。この時点には祠もなく、信仰の対象となっていなかった。

E地点のうち低墳丘が確認された地区は、機械力を使用せずに、墳丘表面から人力で発掘調査を始めた。調査前に確認した墳丘は4基であったところから、これを南側から1号～4号墳丘墓としたが、墳丘が確認できなかった3号墳丘墓の東側に1本の試掘トレンチを設定したところ墳丘が削平された周溝を確認したので、これを5号墳丘墓とした。調査した結果は、1号が確実に古墳前期に属することになったが、この報告では、1号墳丘墓(古墳)と併記することとした。

## ① 1号墳丘墓(古墳) (図版7、61～68、付図1・2 第92～102図)

1号墳丘墓は、E地区の南端にあり、墳丘を確認した中でも最も南側に位置する。調査前の墳丘は、径約6mほどで、一連の墳丘の中で高さにおいて目立つ存在であった。ただ南と東側が開墾によって削平されている予想が最初からあった。

調査は、墳丘の残存具合から検討を付けて略東西・南北の幅25cmの細いトレンチを設定し、

徐々に掘り下げる方法をとった。トレンチ調査の結果、墳裾の北側から西側にかけて周溝が確認されたので、各所に土層断面を残して拡張して行った。周溝は、北西側に角を持つことから方形墳であることが早くわかったが、北側中央部で切れていわゆる陸橋状を呈することから、この部分の調査にかなりの時間を費やした。結果は、方形墳丘の北側に前方部状の突出部が存在していた。

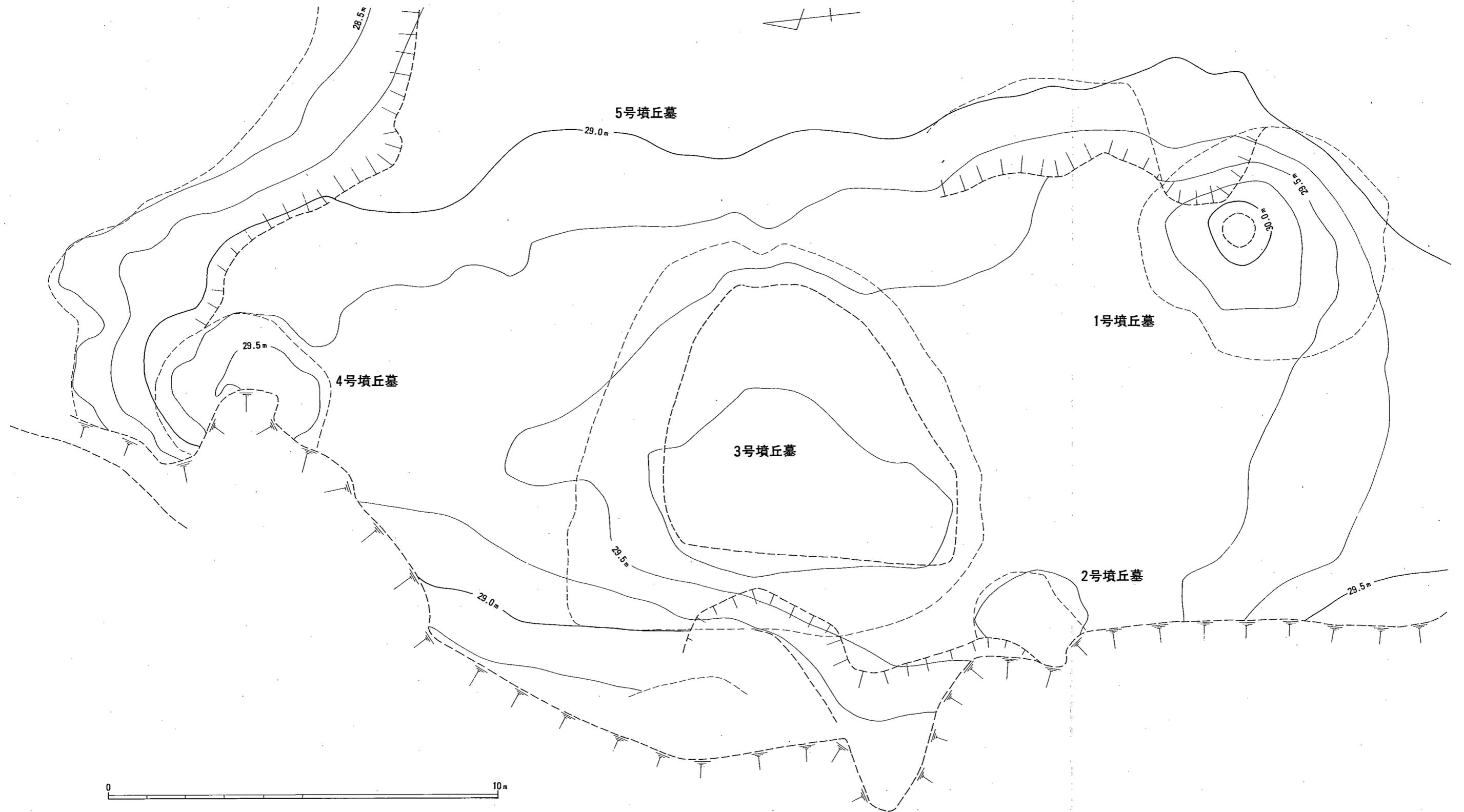
墳丘頂部では、箱式石棺が荒らされたような石組が発見され、板石と河原石が散乱しているように見えた。これを墳頂石組遺構とする。

墳丘北西側の平坦面では、これこそ河原石が散乱しており、性格のつかめないものであるが、一部第97図のように集中している部分も見受けられる。

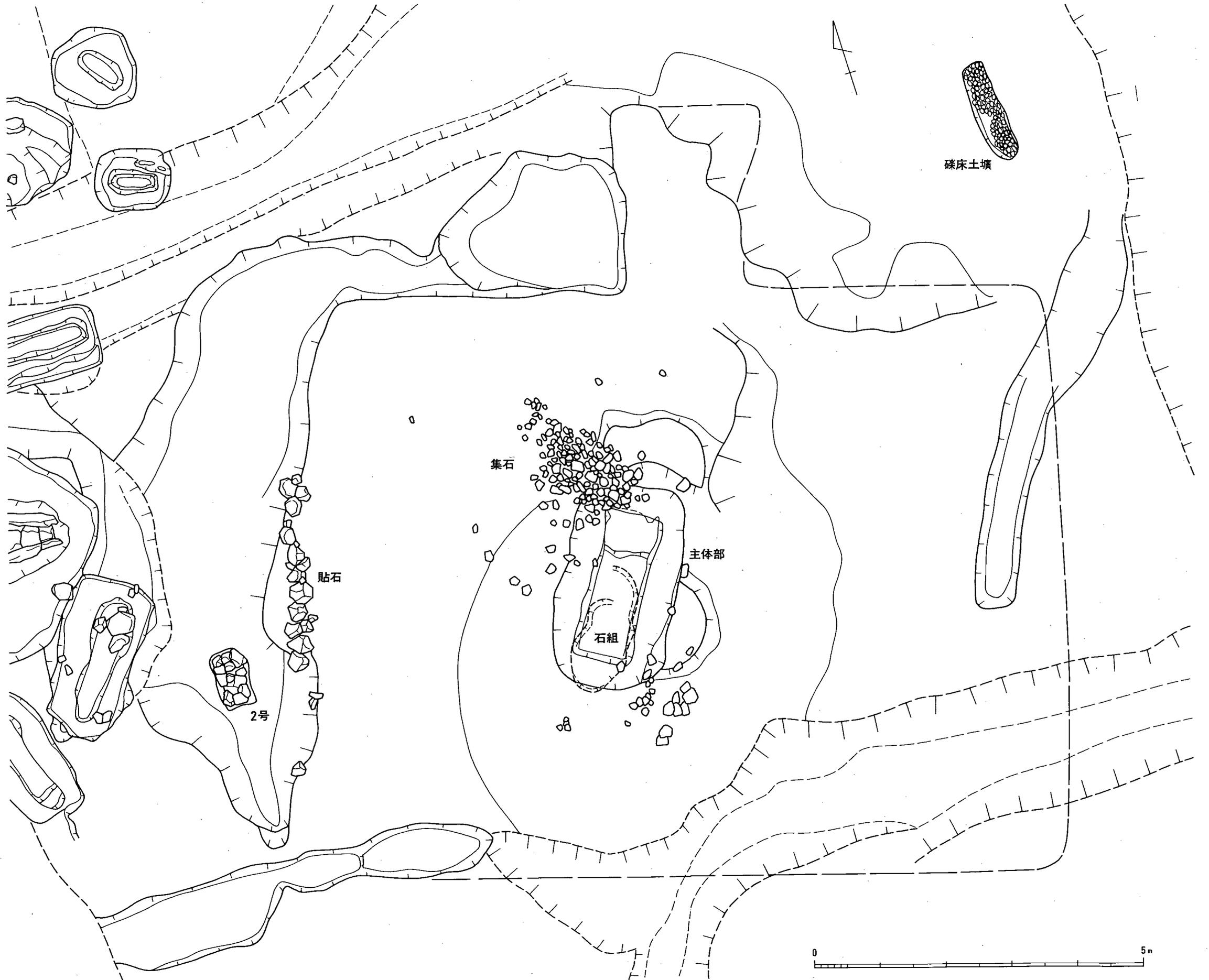
#### α 墳丘 (図版61~65、第93~97図、付図2)

墳丘では、中央に東西径5.5m、南北径約7mの範囲で盛土が確認された。これによると、地形的に高い西側の平坦面に盛土がなく、中央部に向かって厚く盛土を行っており、西側周溝から1~1.5mの間が当初から盛土がなく平坦部を形成していたと思われる。しかも、この平坦部は、周溝に面した突出部を含む墳丘周縁部にあり、墳丘を2段築成としている。これを証明するのが、墳丘北西部に残っている貼石であり、墳丘盛土の土層図で考えられる主体部墓壇の掘削と盛土順位の関係である。貼石の存在は、少なくとも墳丘1段目の平坦部を貼石で覆っていた可能性が、周溝に転落した多量の礫群と墳丘西縁の貼石遺構から考えられる。墳丘中央部の主体部は、墳丘中央部に盛土が90%近く完成した時点で墓壇の掘削を実行しており、埋葬完了後の埋戻しの遂行後に残りの最終盛土、墳丘整形を完了している。このことを、第94図南北墳丘断面図(A-A')で説明すると、主体部墓壇が墳丘最上層から掘込まれておらず、⑤の褐色土と⑫の赤褐色粒混入褐色土が墓壇全体を覆っている。この⑤層は、突出部側で地山を直接覆っており、主体部の埋葬時に突出部に盛土がなされていなかったことを証明している。しかも、現在突出部を覆っている⑧層が中世の整地層であるが、その下⑥層との間に貼石の名残りと思われる若干の礫層が見られ、突出部が周溝を掘削した輪郭と若干の盛土で形成されていたことがわかる。

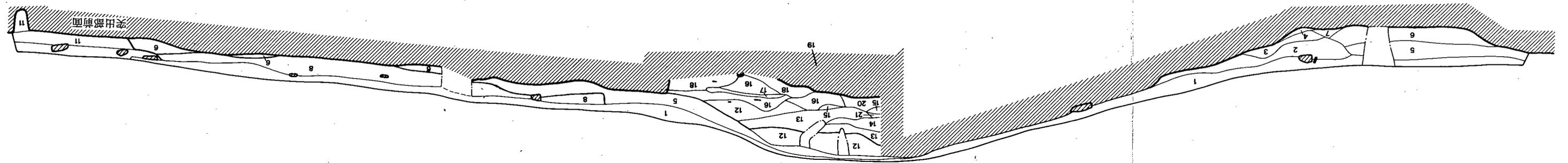
1号墳丘墓(古墳)は、東側と南側の輪郭線を失っているものの、北側の突出部(前方部)と周溝及び西側の周溝と貼石から、突出部をもつ長方形墳(前方後方墳)である。その墳丘を突出部と主体部の位置及び残存周溝の関連から復原すると、突出部が墳丘中央にあるとした場合に東西径が約11.5m、主体部が墳丘中央に位置するとした場合に東西径が約9.6m、突出部を含む南北径が約12mとなる。南北規模は主体部を中心とする以外に復原の根拠がないが、東西径が、突出部と主体部の位置にずれがあるために復原規模に差が生じる。ここでは、北部九州においても突出部が墳丘中央部に位置することが通例であるところから、東西復原径を約



第92图 E地区填丘墓群发掘前地形测量图(1/100)



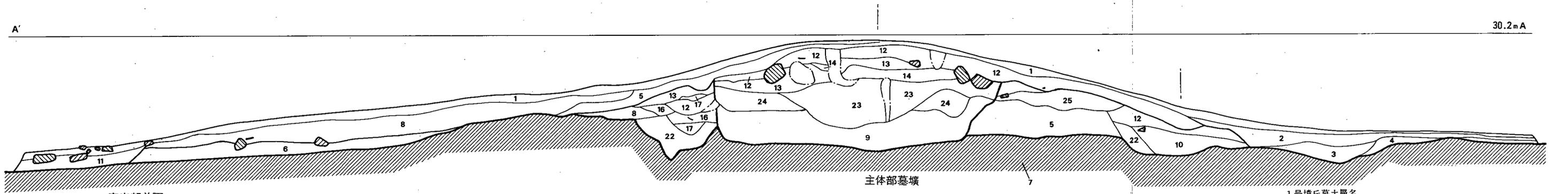
第93図 1号墳丘墓遺構配置図(1/60)



30.2mA

A'

30.2mA



突出部前面

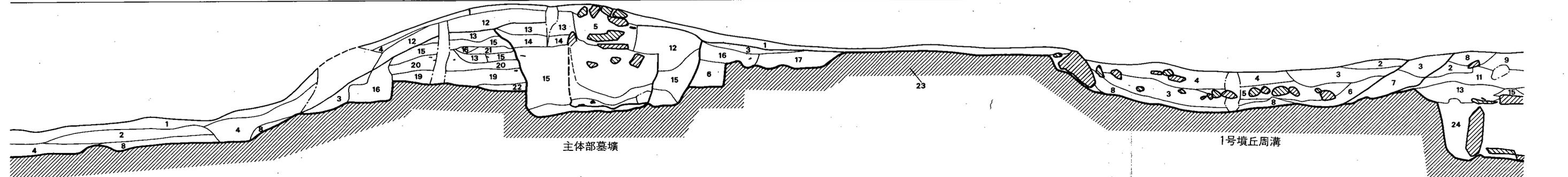
主体部墓墳

- |                 |                               |                     |                      |
|-----------------|-------------------------------|---------------------|----------------------|
| 1号墳丘墓土層名 (A-A') | 7 灰褐色粘質土                      | 13 赤褐色粒混入暗褐色土       | 20 炭粒混入暗褐色・褐色混合土     |
| 1 表土            | 8 褐色土混入茶褐色ブロック<br>(整地層)(瓦器混入) | 14 焼土・暗褐色土混合        | 21 焼土・灰混入黒褐色土        |
| 2 赤褐色土混入褐色土     | 9 灰色粘土・暗褐色土混合                 | 15 焼土混入黒褐色土         | 22 暗褐色土(やわらかい)       |
| 3 赤褐色土混入黒褐色土    | 10 黒褐色土                       | 16 暗褐色土(やわらかい、土器混入) | 23 赤褐色粒混入灰色粘土・暗褐色土混合 |
| 4 赤褐色土混入黄褐色土    | 11 黒色土                        | 17 炭・黒褐色灰           | 24 灰色粘土・褐色土混合        |
| 5 褐色土           | 12 赤褐色粒混入褐色土                  | 18 炭粒・褐色・黒褐色混合土     | 25 黒褐色粘質土            |
| 6 暗褐色土          |                               | 19 赤褐色焼土            |                      |

- 1号墳丘墓土層名
- 1 表土
  - 2 褐色土
  - 3 赤褐色粒混入褐色土
  - 4 赤褐色塊混入褐色粘質土

B

30.2mB'



主体部墓墳

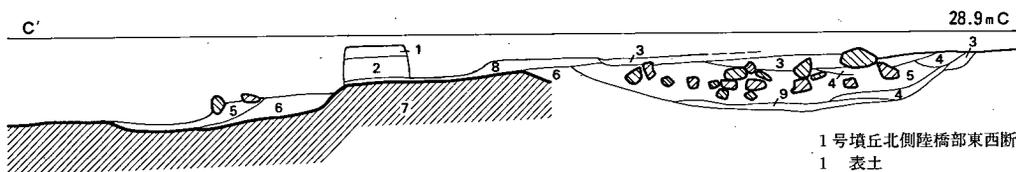
1号墳丘周溝

2号墳丘墓1号棺

- 1号墳丘墓土層名 (B-B')
- |             |                    |                  |
|-------------|--------------------|------------------|
| 1 表土        | 9 炭・赤褐色粒混入淡褐色土     | 18 炭粒・褐色・黒褐色混合土  |
| 2 黒褐色土混入褐色土 | 10 炭粒混入淡褐色土        | 19 赤褐色焼土         |
| 3 黒褐色土      | 11 赤褐色粒混入褐色土       | 20 炭粒混入暗褐色・褐色混合土 |
| 4 黒茶褐色土     | 12 赤褐色粒・灰色土・暗褐色土混合 | 21 焼土・灰混入黒褐色土    |
| 5 黒色土       | 13 赤褐色粒・灰色土・暗褐色土混合 | 22 黄褐色・赤褐色粘質土混合  |
| 6 褐色土混入黒色土  | 14 焼土・暗褐色土混合       | 23 淡褐色粘質土(地山)    |
| 7 褐色土混入黒褐色土 | 15 灰色粘土塊・暗褐色土混合    | 24 褐色・赤褐色粘質土混合   |
| 8 茶褐色土      | 16 褐色土             |                  |
|             | 17 褐色土粘質土          |                  |

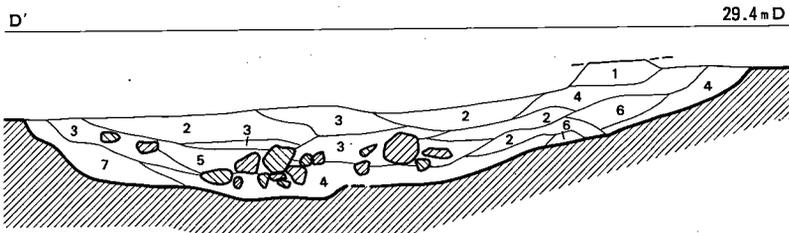


第94図 1号墳丘墓(1号墳)墳丘断面実測図(1/40)



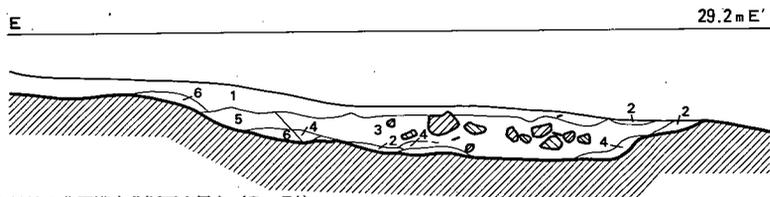
1号墳丘北側陸橋部東西断面(C-C')

- 1 表土
- 2 褐色・赤褐色混合土(中世整地層)
- 3 黑褐色混入褐色土
- 4 褐色土混入黑褐色土
- 5 黑褐色土
- 6 暗褐色土
- 7 黄褐色粒混入淡褐色土
- 9 褐色土混入暗褐色土



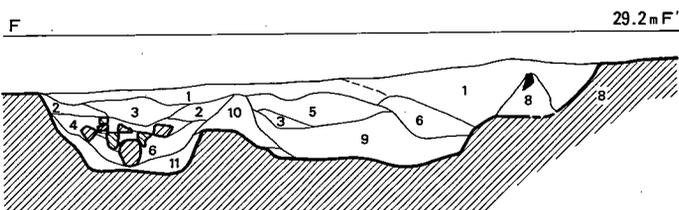
1号墳丘墓土層名(D-D')

- 1 表土
- 2 褐色土混入黑褐色土
- 3 黑褐色土
- 4 黑褐色土混入褐色土
- 5 黑色土
- 6 暗褐色土
- 7 黑褐色土混入黄褐色土

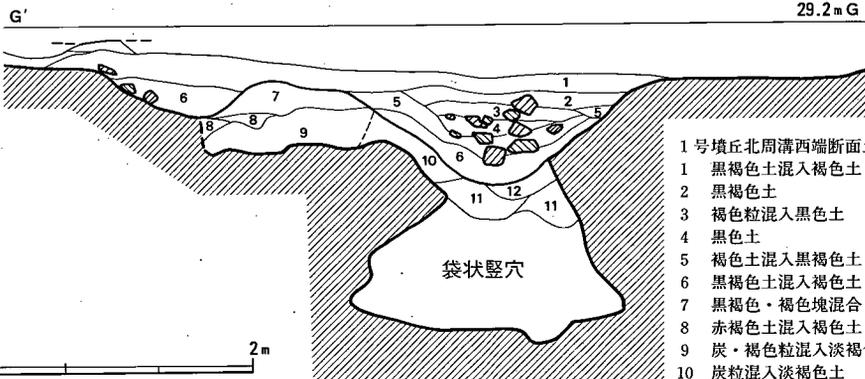


1号墳丘北周溝南北断面土層名(E-E')

- 1 褐色・赤褐色混合土(中世整地層)
- 2 黑褐色土混入褐色土
- 3 黑褐色土
- 4 褐色土混入黑褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 黄褐色粒混入淡褐色土



29.2m F'



29.2m G

1号墳丘北周溝西端断面土層名(G-G')

- 1 黑褐色土混入褐色土
- 2 黑褐色土
- 3 褐色粒混入黑色土
- 4 黑色土
- 5 褐色土混入黑褐色土
- 6 黑褐色土混入褐色土
- 7 黑褐色・褐色塊混合
- 8 赤褐色土混入褐色土
- 9 炭・褐色粒混入淡褐色土
- 10 炭粒混入淡褐色土
- 11 淡褐色粘質土
- 12 褐色土混入淡褐色粘質土



第95图 1号墳丘墓周溝断面实测图(1/40)

11.5mとしておく。突出部は、長さ2.8m、くびれ部幅約1.8m、先端部幅約2.2mで、いわゆる撓形を呈する。しかも、突出部先端が周溝幅より突出することが明瞭である。第94図B-B'の墳丘東西断面図を見ると、墳丘の東側裾が若干削平されているものの、盛土自体に削平が大きく及んでいないことが、主体部墓壙を覆う上層の⑫層が東側に傾斜していることからわかる。この時、同断面図東側に見える盛土を切って掘込まれた⑩層が第2主体部の存在を思わせるが、大木の根があるところから遺構として確認できなかった。

墳丘2段目は、盛土範囲の東西径5.5m、南北径7mに近い規模の平面形をしていると思われるが、1段目規模が東西径が大きいことを考えると、東西径が南北径の7mより大きくなければならない。比率から2段目規模を考えると、1段目南北径9mに対し2段目7mであるから、東西径約8.9mになり、かなり削られていることになる。こうなった場合は、墳丘北西側の石敷が原位置でなく、北側突出部で観察できる中世の整地が墳丘周縁に及んでいたことにもなり、1段目の平坦部がかなり狭いことになる。なお、1段目の平坦部の存在まで否定されることにはならない。もし、否定されることになれば、中央主体部を覆っている⑤・⑫層に掘込まれている後述する墳頂石組遺構が荒らされているとはいえ、完全に後世の遺構ということになり実状に合わないことになる。

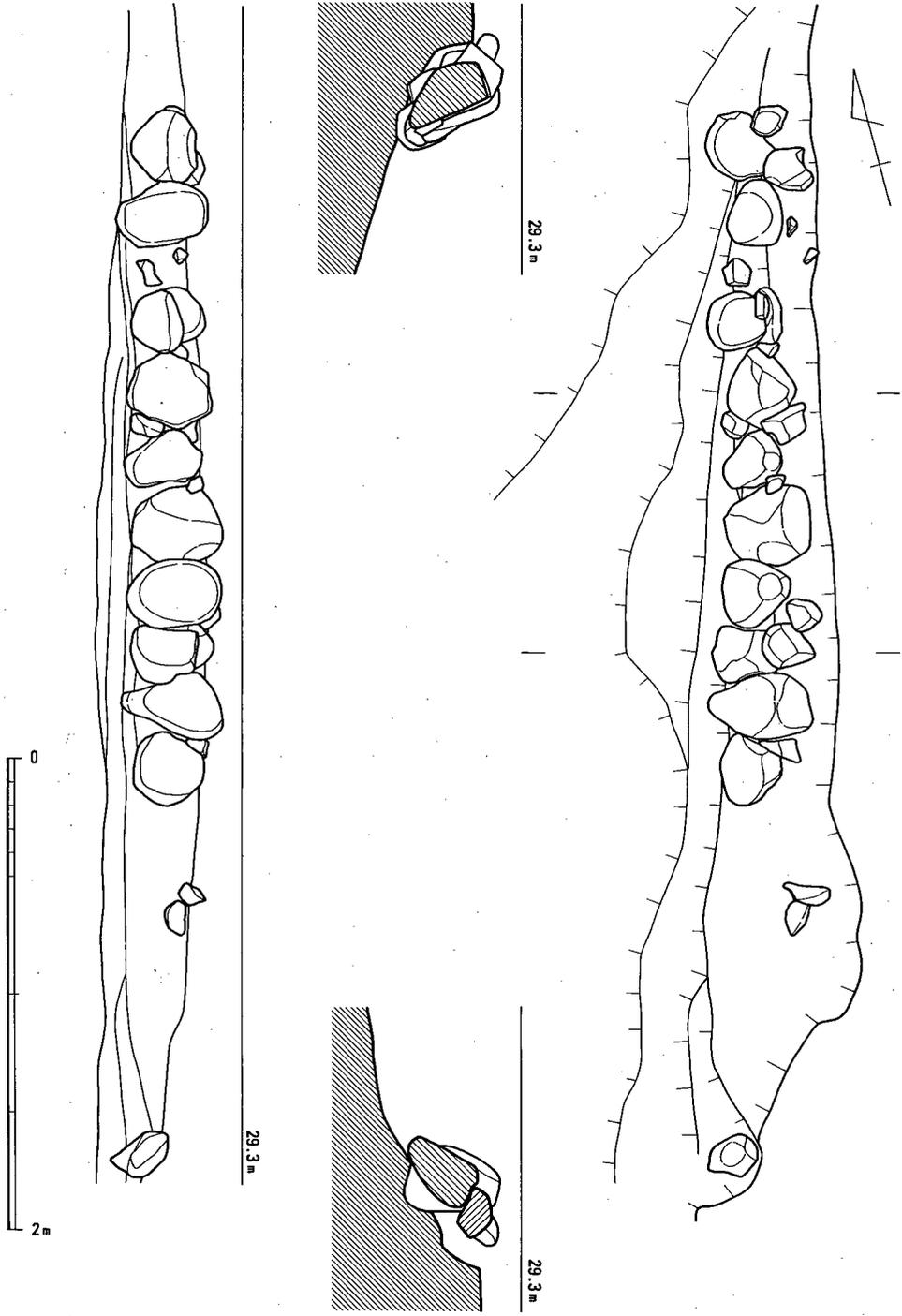
#### b 貼石 (図版65・68-1、第93・96図)

1号墳丘墓では、西側墳丘裾に貼石が存在する。この墳丘墓が時期的には古墳時代に属することから葺石とすべきかもしれないが、古墳の葺石の基底部石が横積みであるのに対し、ここでは縦積みとしているところから貼石とした。貼石は、現存するのが長さ3mで、一部2段積みであるが、前述したように墳丘上に原位置を多少移動しているながらも貼石が存在することと、周溝に転落した多量の石の存在から、墳丘全周に存在したものと考える。さらに、その貼石の2段目からの積み方が、第96図断面図でわかるように墳丘が低いことを示しており、墳丘1段目の存在を暗示している。

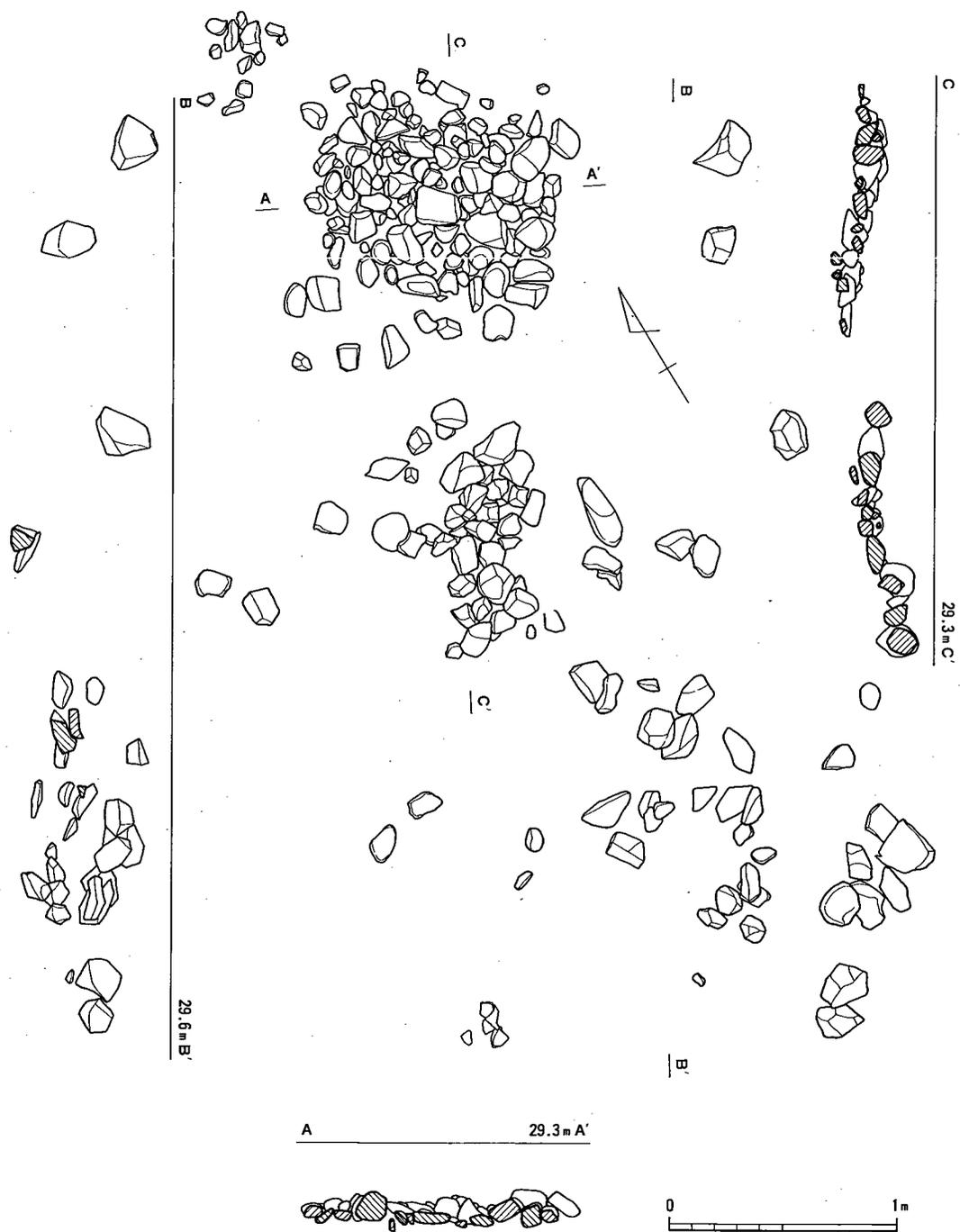
貼石の石材は、石敷や周溝内に転落石と同様に河原石で、基底部に径30~40cm、その上に径20cm大の石を利用している。

#### c 周溝 (図版64・65、第93~95図)

周溝は、墳丘の北側から西側にかけてL字形に残っていた。しかも、北側周溝の東端が墳丘の北側裾線に対し直角に止まっており、突出部または陸橋部の存在を示している。これが陸橋部でないことは、先述したように地山上に若干ながら盛土が存在することと、突出部先端が周溝より突出することで証明されている。しかも、北側周溝の突出部側の幅が広がることは、周溝が突出部に沿ったものであることを示している。北側周溝は、最大幅2.2m、最小幅0.6m、



第96图 1号墳貼石実測図(1/30)



第97图 1号墳墳丘西侧集石実測図(1/30)

最大深さ0.3mの規模である。

西側周溝は、地形的に地山が高い位置にあたることから、幅広くて深く掘られている。西側周溝は、北西側角から南西側角近くまでの、長さ9.3m、幅2.1m、深さ0.65mとなっているが、2号墳丘墓と重複する中央部が最大幅3mに達している。2号墳丘墓との重複関係では、第94図B-B'断面図で明らかなように、2号墳丘墓東側周溝が2号墳丘墓1号棺墓壙を切り、さらにその2号墳丘墓東側周溝を1号墳丘墓西側周溝が切って掘られており、1号墳丘墓が最も新しいことを示している。周溝内には、土器の細片が若干見られたが、図版④-②のように中層で貼石の基底部に使用した径30cm前後の河原石や、2段目以上に積み上げた径20cm以下の河原石が多量に散乱していた。また、周溝の南側底面に掘込まれた極小石蓋土壙墓があり、これを1号墳丘墓2号棺としている。

#### d 主体部（図版66・67、第98～101図）

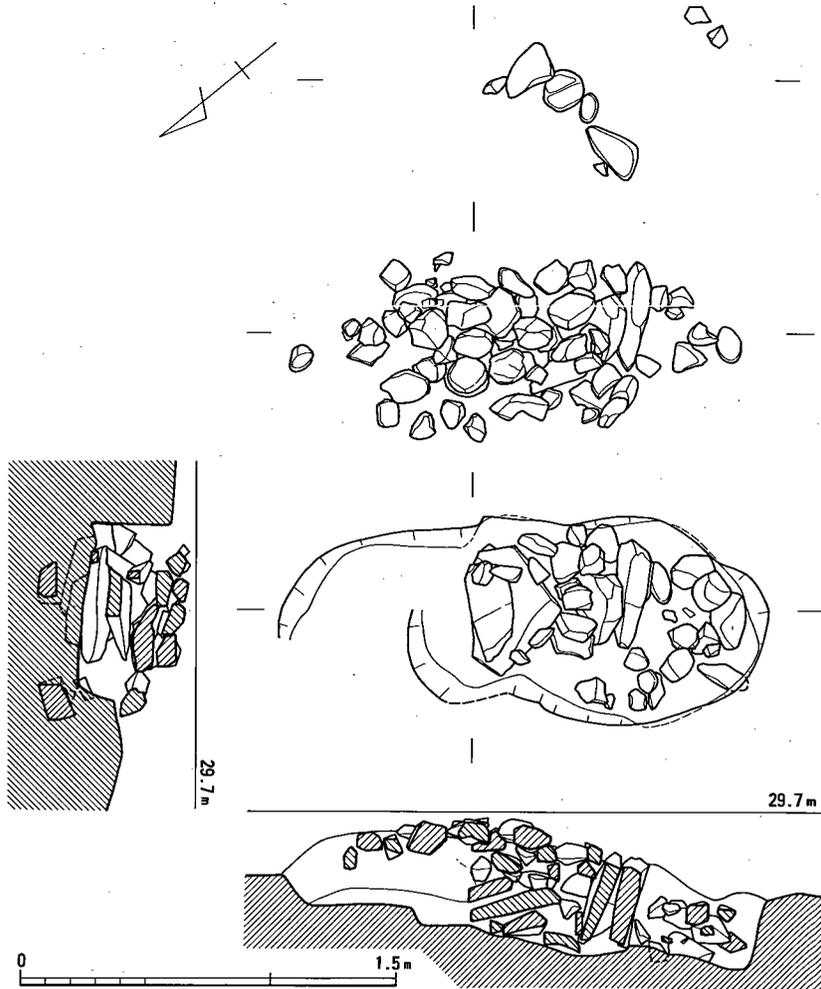
1号墳丘墓の主体部は、墳丘の中央部に位置する木棺を中央主体部とし、その上層の墳頂で確認された遺構を墳頂石組、西側周溝底面に掘込まれた極小石蓋土壙墓を2号棺とし、墳丘外の北東側に存在する礫床土壙墓もここで取り扱うことにする。

#### 墳頂石組（図版66、第98図）

この墳頂石組は、墳丘測量の時点からその存在がわかり、表土層から確認できていた。この遺構は、第94図東西墳丘断面図（B-B'）に示したように中央主体部埋葬後に掘込まれている。しかし、表土層に顔を出していた上層の礫群の検出時点では、その掘方の輪郭がつかめず、上層の礫群を除去した後に現われた片岩と安山岩の板石組を確認した段階で初めて、長楕円形の掘方らしきものが検出できた。この板石組も整然と組合せられたものでなく、立てられた2枚と、それに向かって倒れたように見える3枚の板石、さらにその周辺に散乱する径10～20cmの河原石で構成されている。石組に使用された板石は、径30～50cm大のもので、埋葬遺構とすれば小型箱式石棺墓であったとしても石材が不足することから、小型石蓋土壙墓であれば可能性がある。倒れた板石の下面に赤色顔料が塗布されていることから、石蓋土壙墓の可能性を捨てきれないが、その下の土壌に墓らしき痕跡が見当たらない。この石組の周辺では、土師器細片が散乱していたが、石組をそれ以上新しくする遺物の発見はなかった。この遺構の南西側1.2mのところ鉄斧（第85図48）が出土している。

#### 中央主体部（図版67、第99・100図）

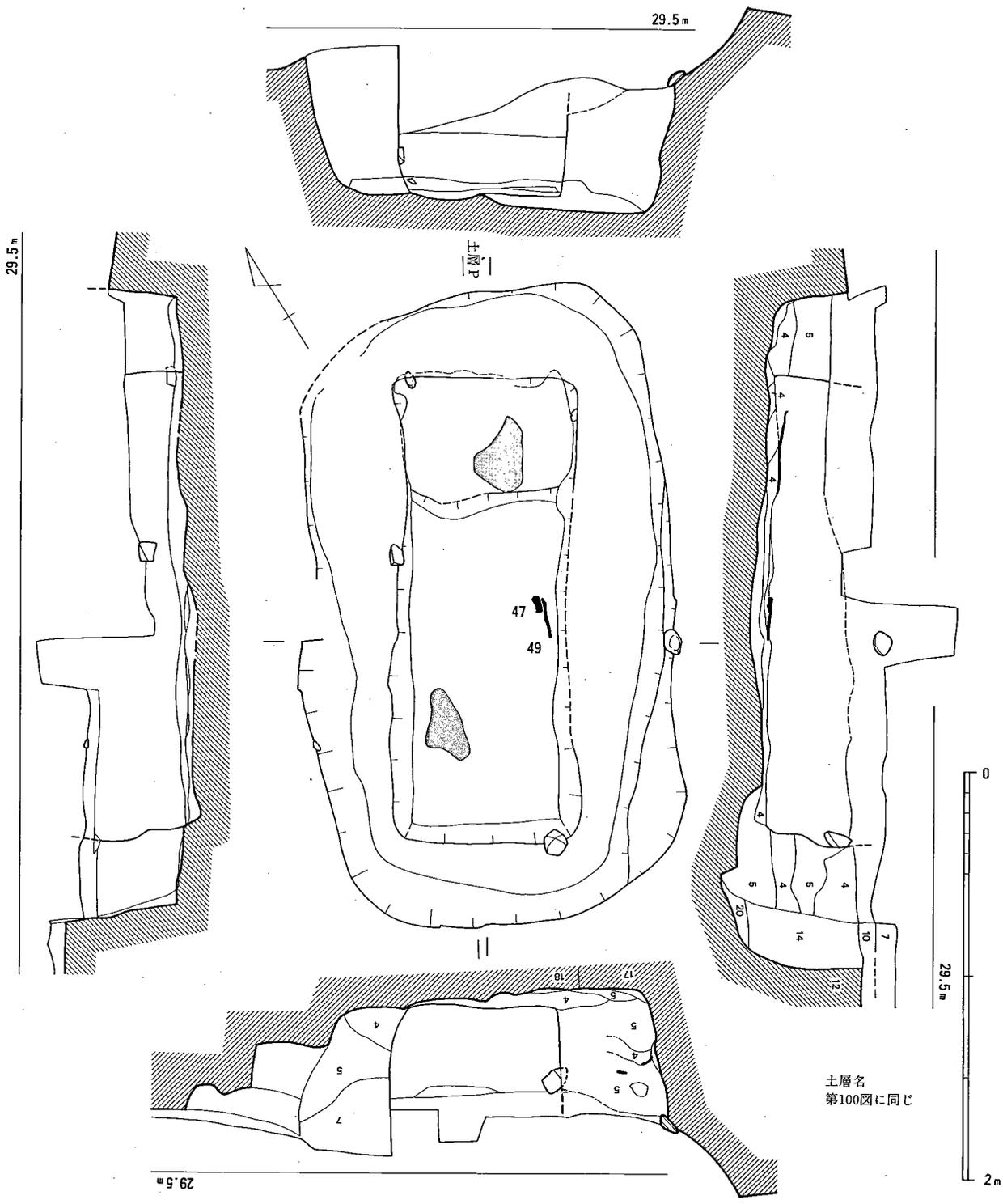
中央主体部は、第99図のように、墳丘盛土後に掘込まれた墓壙内に確認された。墓壙は、上面が長径3.15m、幅1.8m、深さ0.9mの隅丸長方形に掘られ、床面が長径2.95m、最大幅



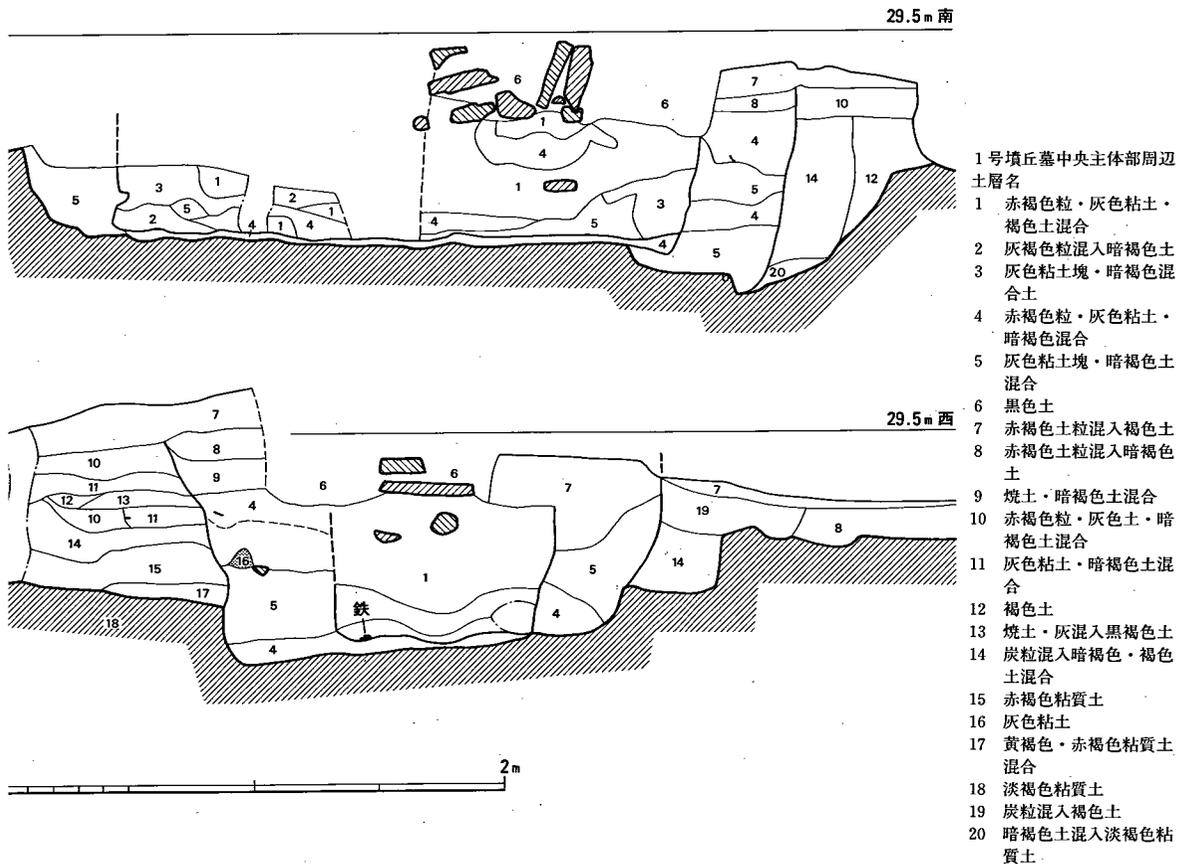
第98図 1号墳丘墓墳頂石組実測図(1/30)

1.65mの北東側が広く仕上げられている。墓壙床面は、中央部と南西側小口部に若干のくぼみが見られるものの、特別に粘土や礫等が敷かれることもない。

墓壙中央部には、墓壙内周辺部埋土と違った土層が確認され、木棺が内臓されていたことがわかる。納められていた木棺は、床面で長さ2.2m、北東側小口幅0.85m、南西側小口幅0.72mの長方形で、壁面が直立していることから、箱形木棺であることがわかる。しかも、床面に側板を埋立てる溝などがいないところから、現地で組み立てる木棺でなく完全な箱形木棺で、第99図横断面図に示されているように、高さ50cmであったこともわかる。ちなみに、この図で見える上部の板石は墳頂石組であるが、木棺の腐食によって陥没した結果でこの位置にあるもので、石組遺構の掘方が不鮮なものこのためである。



第99図 1号墳丘中央主体部実測図(1/30)

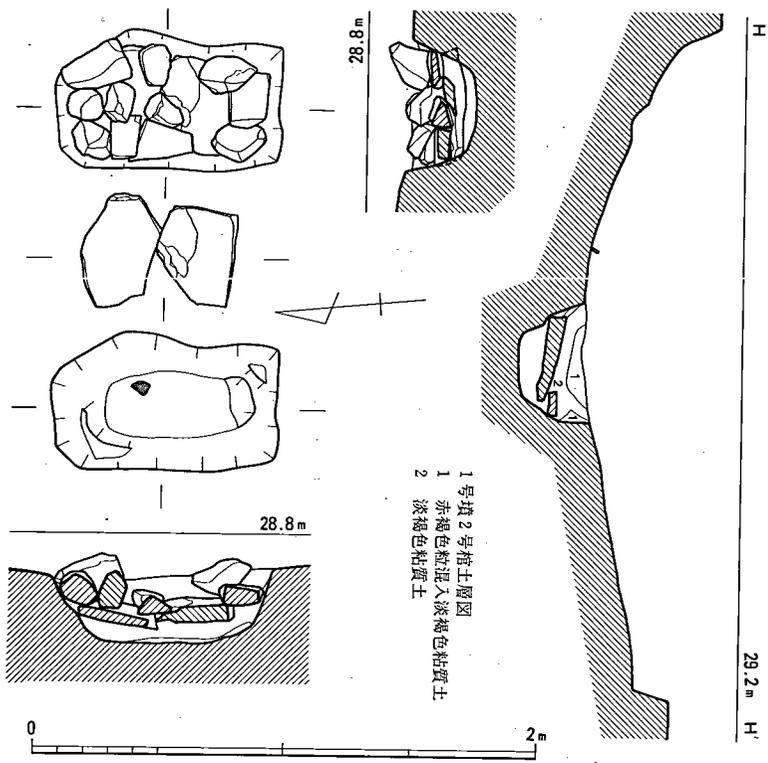


第100図 1号墳丘墓中央主体部周辺土層断面図 (1/30)

木棺内床面には、第100図で枕状の段がわずかながら見られるが、これは墓壇中央部のくぼみによるもので、作付の枕ではない。床面では、頭部と思われる北東側小口付近に赤色顔料が集中しており、足部の一部にも赤味がかつた土が検出されている。副葬品は、左側壁中央部で鉄斧と鉦が発見されたただけであった。鉄器は、鉦が刃部を頭部側に向け、鉄斧が刃を足元に向けているが、この双方に布目痕跡があることから、布に密着して副葬されたようだが、鉦の布目が綾織に見えることから、今後の分析の結果を待たなければならない。

## 2号棺 (図版68、第101図)

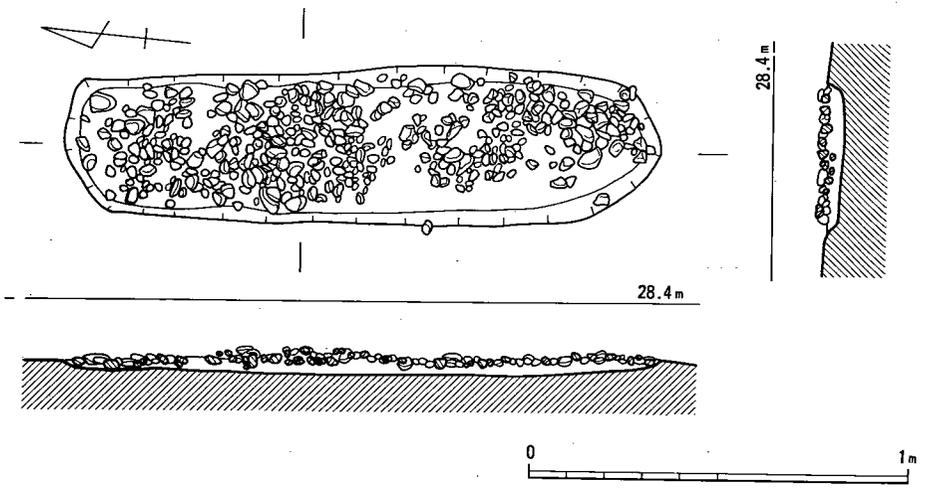
2号棺は、西側周溝底に掘込まれた極小石蓋土壇墓で、周溝内に意図して埋葬されている。2号棺は墓壇が完存しており、周溝の埋没後に掘込まれれば、墓壇の深さが70cm以上となり不自然であり、周溝掘削以前であれば、墓壇内から突出している石が取り上げられているであろう。墓壇は、略長方形で、石蓋の範囲より多少広いだけであり、石蓋の板石も土壇内に落蓋状に配置されている。石蓋は、径30~45cmの安山岩の板石2枚を中心にし、その大きな間隙を径



20cm前後の同じ板石2枚で塞ぎ、さらに小さな間隙に径20cmの河原石を配置している。石蓋は、全体が重くなったために、下部の土層を圧迫した形となっている。

土層は、隅丸長方形を呈し、最大幅が中央部よりやや北側にあることと、北側小口近くの床面に赤色顔料が見られることから、北側が頭位であろう。

第101図 1号墳丘墓2号棺実測図(1/30)



第102図 1号墳丘墓東側磔床土層墓実測図(1/20)

### 礫床土壙墓（第102図）

1号墳丘墓の北東側で発見された礫床土壙墓は、床面の礫がかるうじて残っていたにすぎない。土壙は、北側小口に多少角があり、南側小口が丸造りとなることから、北枕と思われる。土壙の礫床は、土壙底よりやや浮いて、径7cm以下の小石を敷き詰めていたらしいが、赤色顔料や副葬品も発見されず、C地区の36号墓とまったく同じである。

1号墳丘墓は、前方後方墳とすべき初期古墳であり、1墳丘に1主体部の形態を取りつつも主体部に副葬品が少なかったことが、今後の研究課題として残るが、D地区の1号墳墓の舟形木棺と同様に、この地域における古墳出現期の社会体制の一面を如実に現出しているものと思われる。

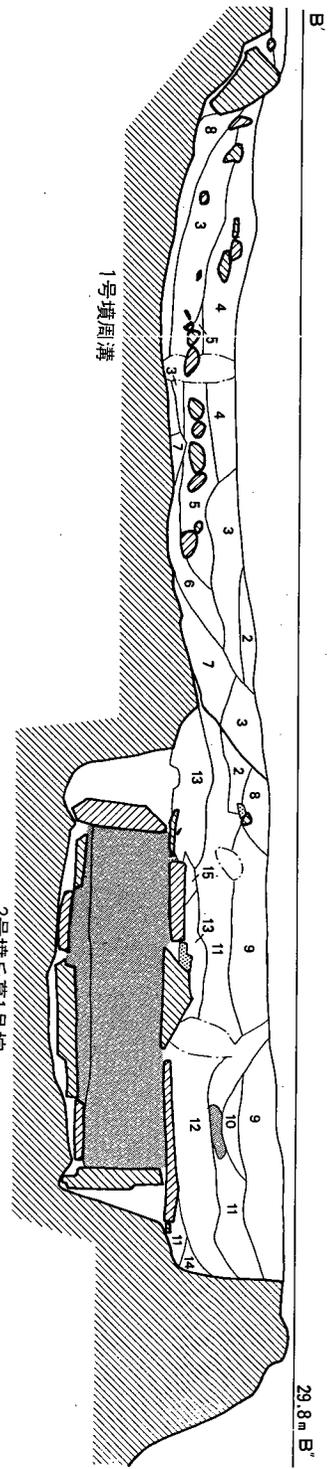
## ② 2号墳丘墓（図版69～75、第103～109図、付図2）

### a 墳丘

2号墳丘墓は、1号墳丘より前に存在していることが第付図2 B'-B"の土層断面によって明らかであるが、3号墳丘墓と区別できるかどうかが問題となる。第92図の地形測量図では、明らかにこの地区に微高地を確認できるのであるが、調査の結果、2号と3号の間に東西に走る中世溝を検出しており、この溝によって墳丘が2分された可能性も出てきた。しかし、2号墳丘墓とした墳丘は、1号棺を囲むような1号墳丘墓周溝より先に掘られた段築状の浅い弧状溝を検出しており、ここで少量ながら1号墳丘墓より古い古式土師器が出土している。この段築状溝は、1号棺・2号棺の墓壙を切って掘られ、その円弧が囲む中心点が1号棺より西側にあり、1号棺と一対になる大型棺が存在するか、独立した1号・2号棺より新しい主体部が存在することになるが、時間的に近い時期に完全に重複しないと思われることから、1号墳丘墓より古くて、3号墳丘墓より新しい2号墳丘墓の存在は確実なところである。

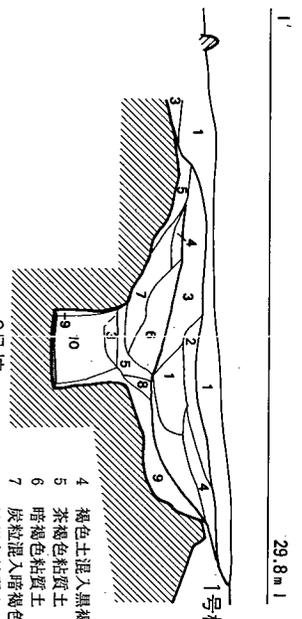
### b 周溝（図版69・70-1、第103・104図、付図2）

前述したように、2号墳丘墓にある1号・2号棺を切って掘られた溝を、周溝とせずに段築状としたのは、1号・2号棺の後に掘られていることだけでなく、周溝であれば1号～5号棺に関係のないものとなり、初期古墳の重複を容認することになる。この弧状溝が実際に墳丘北側で段築を示し、東側のみわずかなくぼみとなるにすぎず、1号棺と一対または鼎立する中央主要部分を意識した、墳丘の再整備や追葬時の墓前祭と考えたい。この段築からは、古式土師器の複合口縁壺などの細片が出土している。したがって、この2号墳丘墓は、2段築成とし、墳丘中央部の2段目内を中心主体部が占拠し、墳丘周縁部にあたる1段目に土壙墓を配置したものと考え、墳丘の西側半分を失っていることになる。墳丘規模は、南北径約9m、東西復原



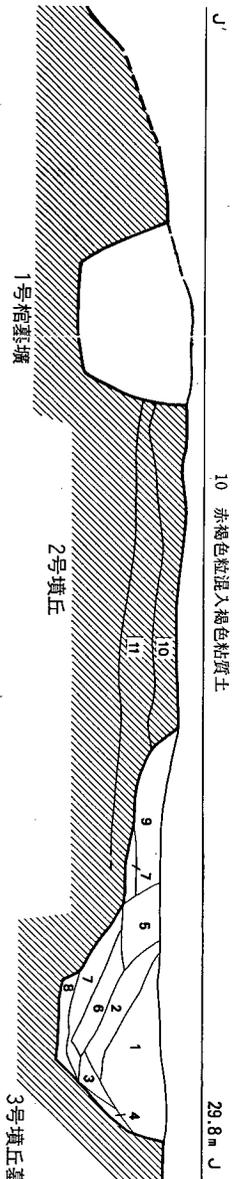
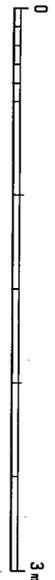
2号墳墓1号棺

- 2号墳墓1号棺
- 1 表土
  - 2 黑褐色土混入褐色土
  - 3 黑褐色土
  - 4 黑茶褐色土
  - 5 黑色土
  - 6 褐色土混入黑色土
  - 7 褐色土混入黑褐色土
  - 8 茶褐色土
  - 9 褐色土・黑褐色土混合土
  - 10 赤褐色粒・褐色・黑褐色混合土
  - 11 赤褐色・褐色混合土
  - 12 赤褐色暗褐色混合土
  - 13 暗褐色粘質土
  - 14 赤褐色土
  - 15 赤褐色粒混入暗褐色粘質土



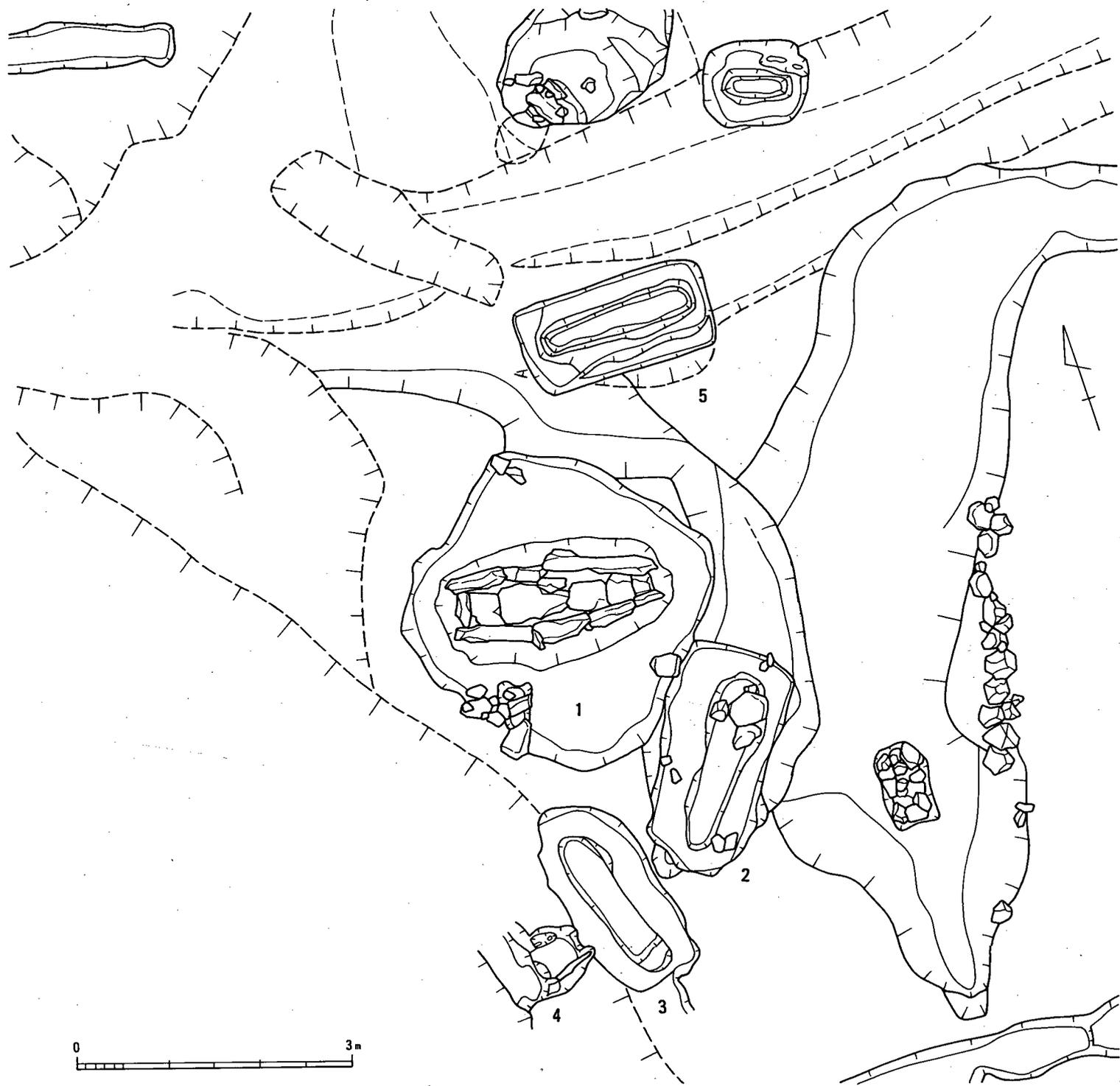
- 2号墳墓墳丘土層名 (2号棺)
- 1 黑褐色土混入褐色土
  - 2 黑色土
  - 3 黑褐色土

- 2号墳墓
- 4 褐色土混入黑褐色土
  - 5 茶褐色粘質土
  - 6 暗褐色粘質土
  - 7 炭粒混入暗褐色粘質土
  - 8 淡褐色粘質土
  - 9 茶褐色土
  - 10 赤褐色粒混入褐色粘質土



- 2号墳墓墳丘土層名
- 1 暗褐色土混入褐色土
  - 2 褐色土混入黑褐色土
  - 3 褐色土 (かわたい)
  - 4 茶褐色土
  - 5 黑褐色土
  - 6 褐色土混入黑色土
  - 7 黑褐色フロック混入褐色土
  - 8 黄褐色粘質土
  - 9 黑色土
  - 10 暗褐色土
  - 11 淡褐色土
- 1号墳墓墳丘 } 地山

第103图 2号墳墓墳丘断面実測图(1/40)



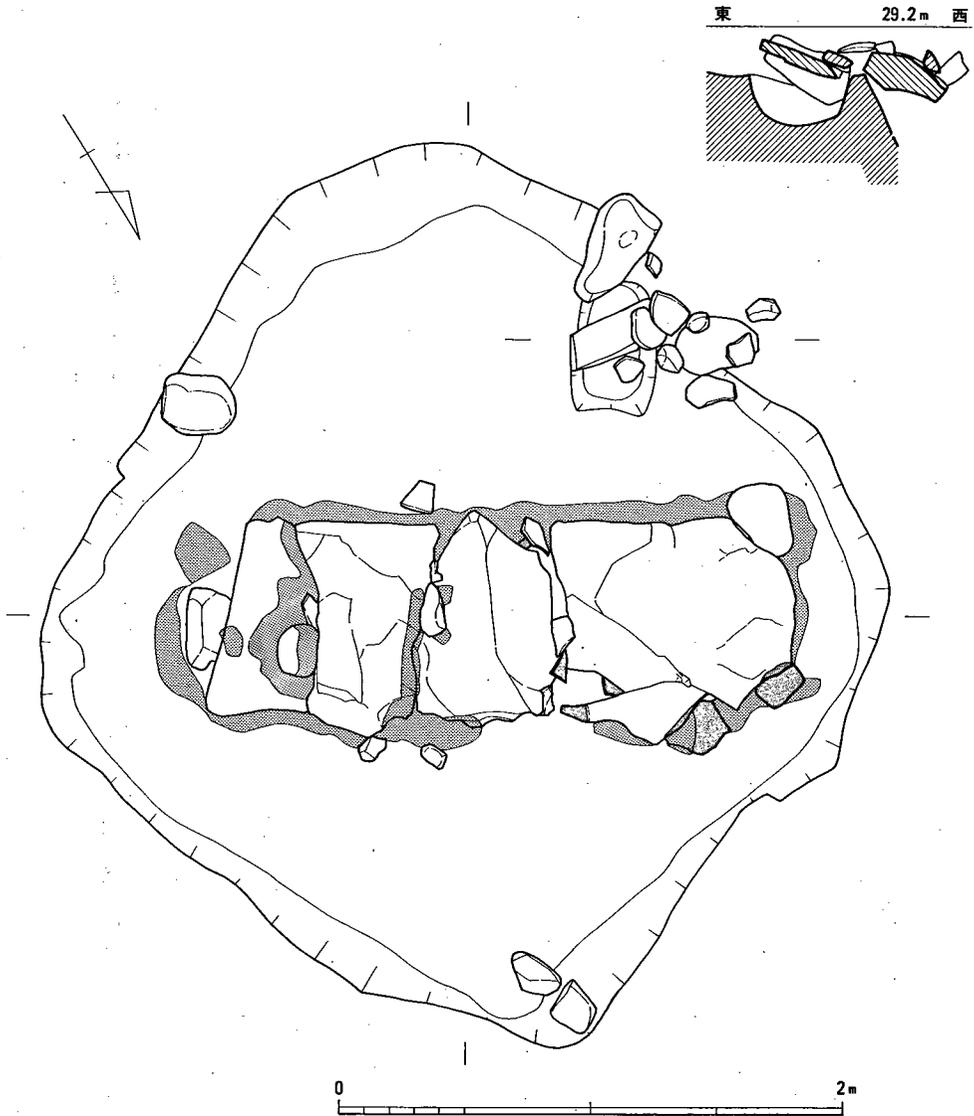
第104図 2号墳丘墓遺構配置図(1/60)

径約8m以上、高さ約0.7mとなる。

c 主体部

1号棺 (図版70~72、第105~107図)

1号棺は、2号墳丘墓の中で中心主体部的な位置を占め、唯一の大型石棺墓である。



第105図 2号墳丘墓1号棺実測図①(1/30)

墓壙は、隅丸方形でわずかに一辺が狭い梯形状を呈し、石棺がその対角線上に配置されている。墳丘の保存が良いこともあって墓壙は完存しており、墓壙掘削後の石棺掘削の關係が明瞭に確認できた。すなわち、墓壙は床面を水平な床面として完掘した後に、中央に石棺を構築するための掘方の上げ土（地山）によって火山の火口状に埋め戻されている。石棺の構築と埋葬は、このままの状態で行われたらしく、この斜面上に若干の赤色顔料の散布が確認できた。

墓壙の西側縁に重複して、径30~40cmと径10~15cm大の河原石の集石を確認したが、墓壙の埋戻し直後のものであるらしく、掘方の輪郭がつかめない。遺構としての性格はつかめないが、標石的な役割があるものと考えたい。

石棺は、安山岩の板石4枚を使用し、頭部になる西側から大きい石材を利用して足元に向かって小さくなる通例の方法で石蓋をしている。蓋石の間隙は、安山岩の小片や河原石で塞ぎ、さらに灰白色粘土で蓋石の周囲・蓋石下まで密封している。蓋石は、下面全面に赤色顔料を塗布している。

本体の箱式石棺は、平面形が腹部を最大幅とし、北西側小口を頭部、足部の南東側小口幅を42cmとしている。石材は全て安山岩の板石を利用しており、両小口に各1枚、両側壁に各4枚を使用している。石材の大きさは、最大で長さ82cm、幅（高さ）55cm、厚さ15cmのものが頭部右側壁に使用されている。

石棺の床面は、同じく安山岩の板石大小5枚が床石として利用されている。被葬者の胸部から腹部に当たる部分に最大の床石が使用されているが、全体に粗い床石の敷方である。

石棺壁面の石材の間隙には、灰白色粘土を外側から詰めているが、大木の根によって多少石材がずれていることもあって、粗い詰方となっている。棺内の全表面に赤色顔料が塗布されている。また、棺内の頭部の左側に切先を西側に向けた刀子とガラス小玉1点、歯2本が、胸部の左側に鏡片とガラス小玉31点が副葬されているが、いずれも床石から浮いているのが気になる。床面には、赤色顔料が厚さ10cm前後詰められていたことから、被葬者の下にも厚さ5cm前後に顔料が敷かれていたと考えれば、歯も3.5cm程浮いている説明ができることになる。

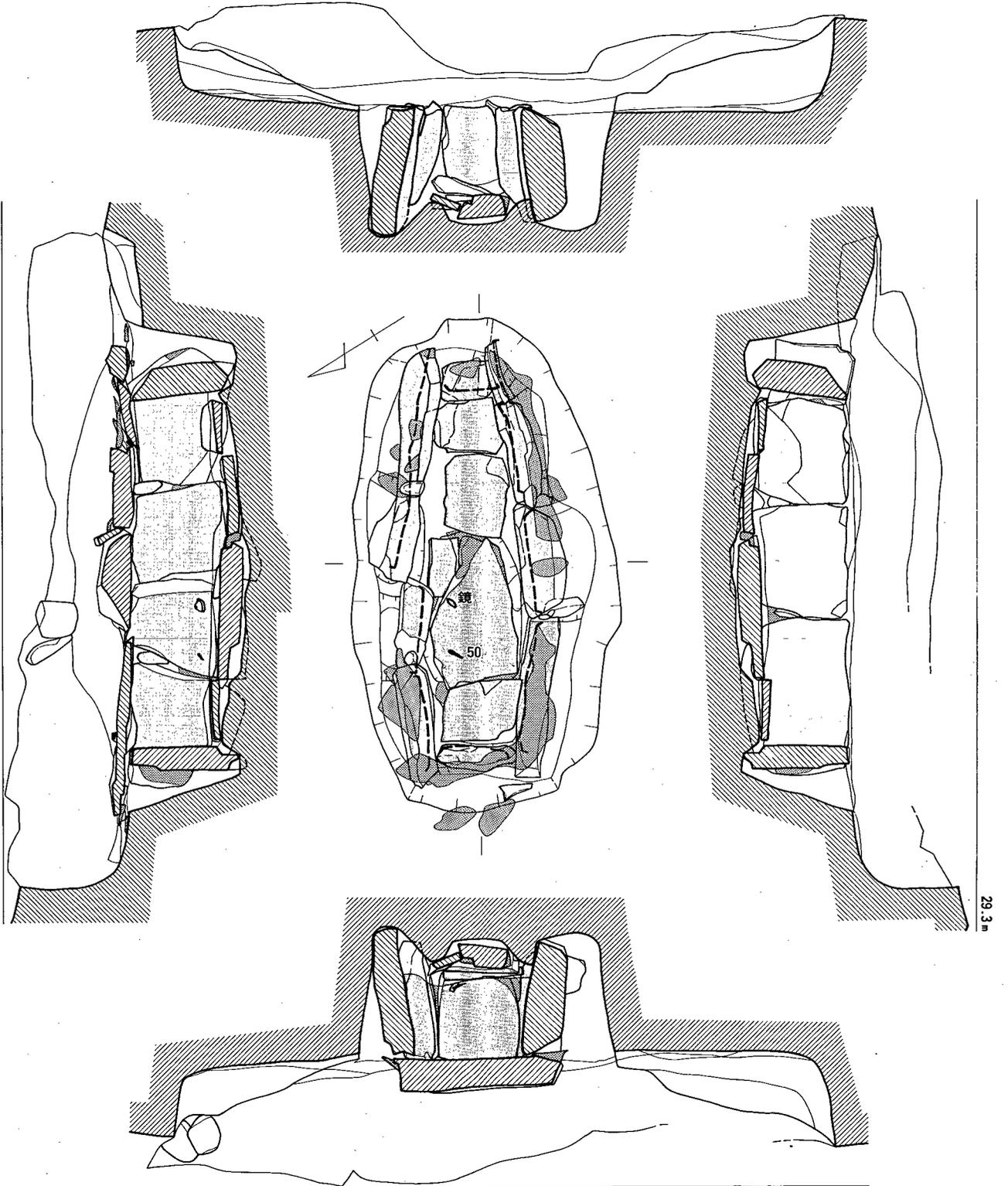
石棺の掘方は、平面形が意図された石棺平面形に合わせ、長さ2.53m、最大幅1.37mの大きさに掘られ、床面の内法を残してその周囲を石材を立てるために、石材に合わせた深さに掘りくぼめている。しかし、石材を立てるくぼみは、比較的浅いものであり、床面も大きく厚い石材の部分がそれなりに深くなっている。

## 2号棺（図版73、第108図）

2号棺は、1号棺の南東側に隣接し、墓壙上部を段築状周溝によって削られている木蓋土壙墓である。墓壙は、最後に1号墳丘墓周溝によって東側上部も削られているが、平面形としては原形が窺える。墓壙の平面形は、北東側が広くて角張り、南西側が丸造りとなり、中央の土

29.3 m

29.3 m



29.3 m

29.3 m

0 2 m

第106图 2号墳丘墓1号棺実測図②(1/30)

墳に合わせて頭部側を広く掘っていることになる。

土墳は、両小口が丸造り、最大幅を肩部にもち、北東小口床面に低い削出枕を付設している。土墳壁面は、全面が内傾して掘られているが、頭部が著しく内湾したものとなっている。棺床面には、赤色顔料が敷かれているが、副葬品はなかった。内傾した壁面の保存がよいことと、土墳足元周縁の粘土目張りの存在、頭部中位に落下した径20~45cm大の河原石の存在から、木蓋土墳墓とした。

### 3号棺（図版74-1・2、第109図3）

3号棺は、1号棺の南側にあり、祇川右岸の崖面によって墓墳の西側半分を失った石蓋土墳墓。東側に残っている墓墳は、石蓋の周囲を一回り大きくしただけの大きさの隅丸方形であるらしい。

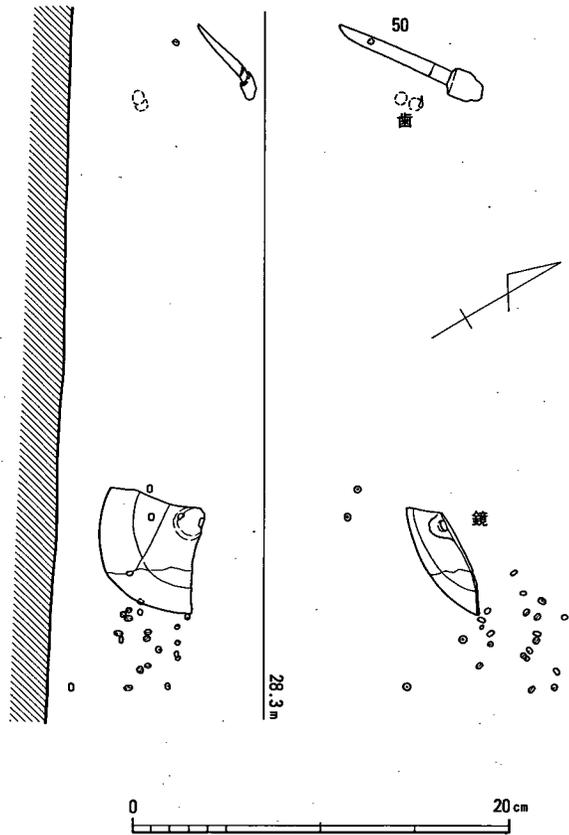
蓋石は、6枚の板石が使用されているが、南側から2枚目と北端の1枚に安山岩、他の4枚が片岩が利用され、その間隙の一部に河原の小石が使用されている。蓋石の下面全面に、赤色顔料が塗布されている。

土墳は、両小口が隅丸造り、最大幅が異例なことに足部にあり、南小口床面に低い削出枕を付設している。壁面は、足元以外が内傾して掘られ、下位と床面に赤色顔料が見られる。

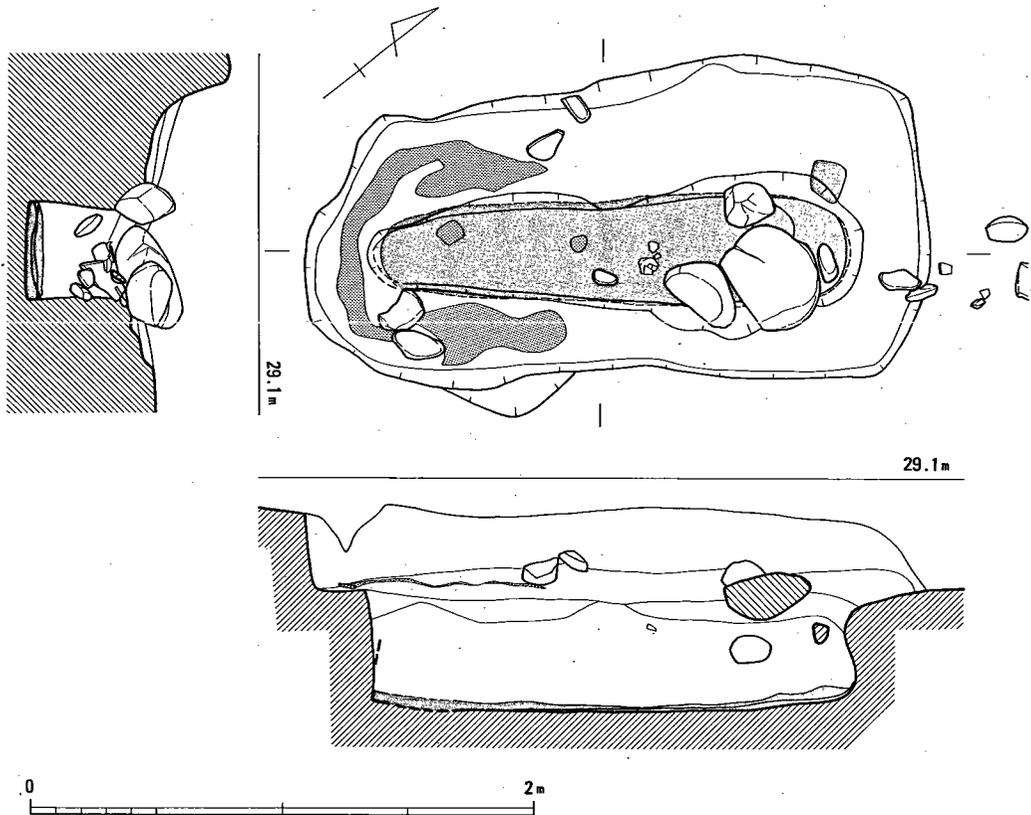
### 4号棺（図版74-3、第109図4）

4号棺は、3号棺の西側に重複して営まれた略式石棺墓である。4号棺は、崖面によって墓墳を完全に破壊されており、墓墳の存在を考えると、3号棺との墓墳同志が完全に重複することになるが、現状ではその前後関係が不明。

石棺は、現状で南側壁の片岩の板材が1枚残っているだけであるが、北側壁にも石材の抜跡があることと、荒らされた棺内残存部に細片となった石材があったことから、両側に板石を使



第107図 2号墳丘墓1号棺副葬品出土状態実測図(1/4)



第108図 2号墳丘墓2号棺実測図(1/30)

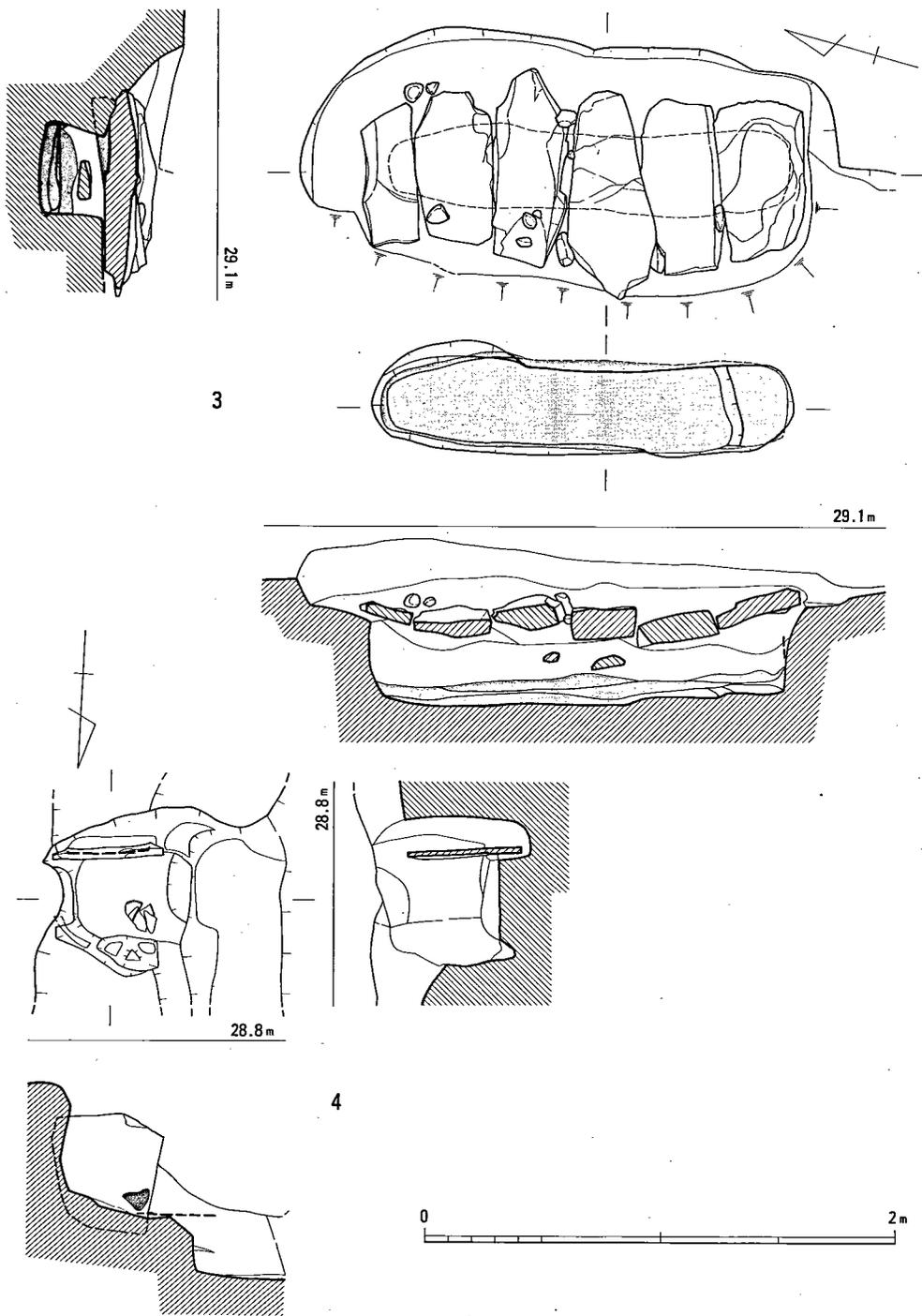
用していたことが確実である。ところが、床面に削出枕が付設される東側小口には、石材を立てる溝が掘られていないところから、略式石棺墓とした。棺内床面が完全に荒らされているが、壁面石材の一部に赤色顔料が残っていることから、全面に赤色顔料があったものとする。

#### 5号棺 (図版75、第110図)

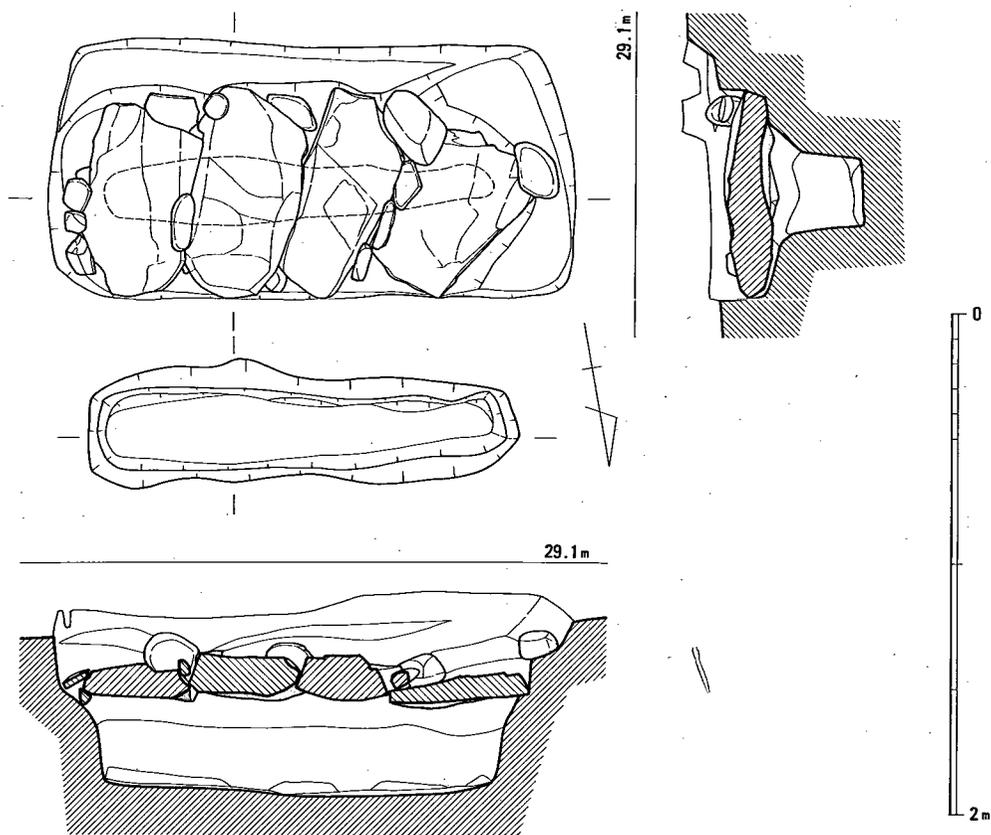
1号棺の北東側にある石蓋土壙墓。墓壙は、上部が削平されているが、南側に残っている部分から判断しても大きなものでなく、蓋石より一回り大きいにすぎない。蓋石には、東側2枚目に安山岩を利用する以外の3枚が片岩を使用している。蓋石の目張りには、河原石を利用しているが粘土の使用が見られない。蓋石の下面には、全面に赤色顔料を塗布している。

土壙は、両小口が丸造りで、胸部に最大幅があり、壁面が外傾した掘り方となり、床面に枕も赤色顔料も見られない。

#### ③ 3号墳丘墓 (図版76~86、第111~128図)



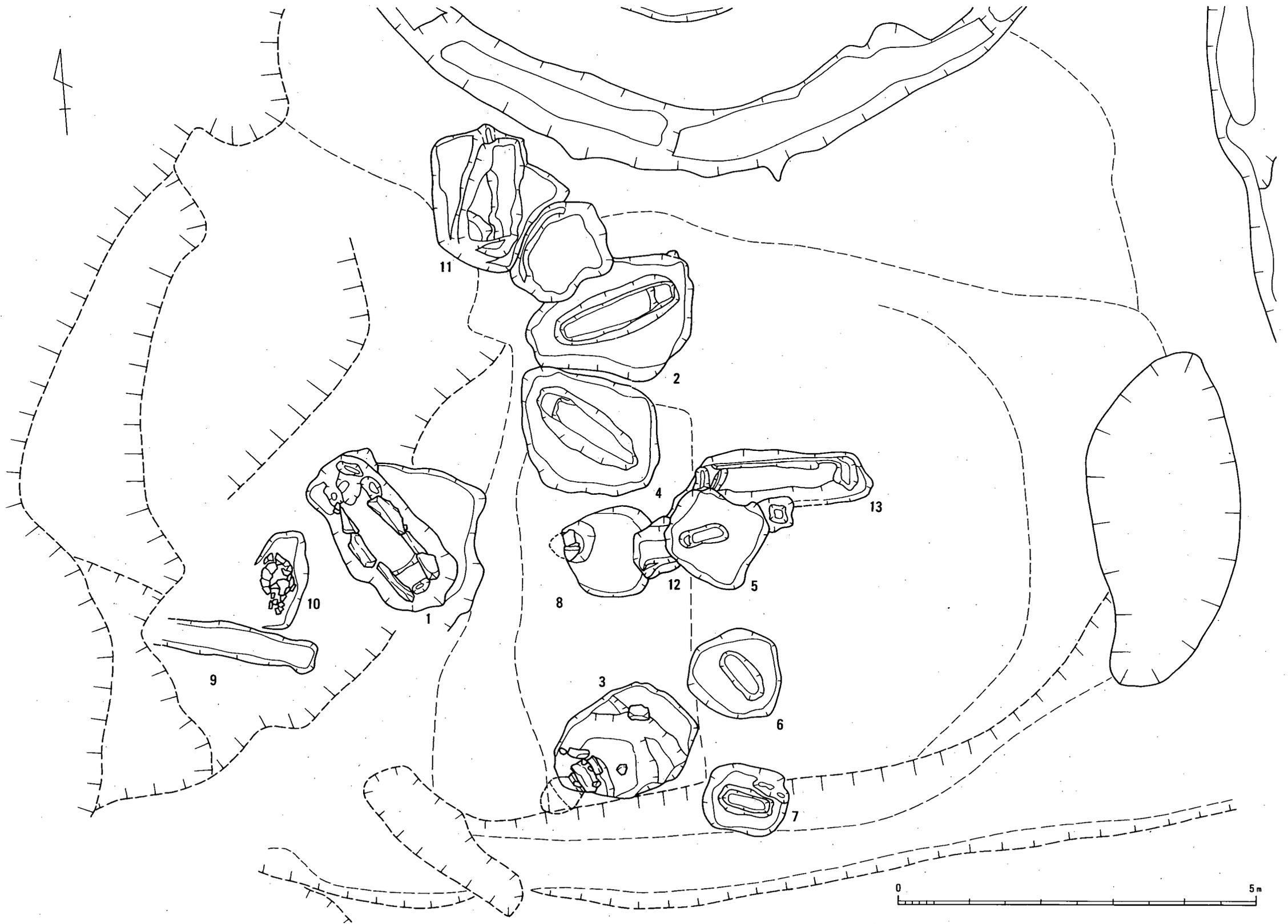
第109图 2号墳丘墓3・4号棺实测图(1/30)



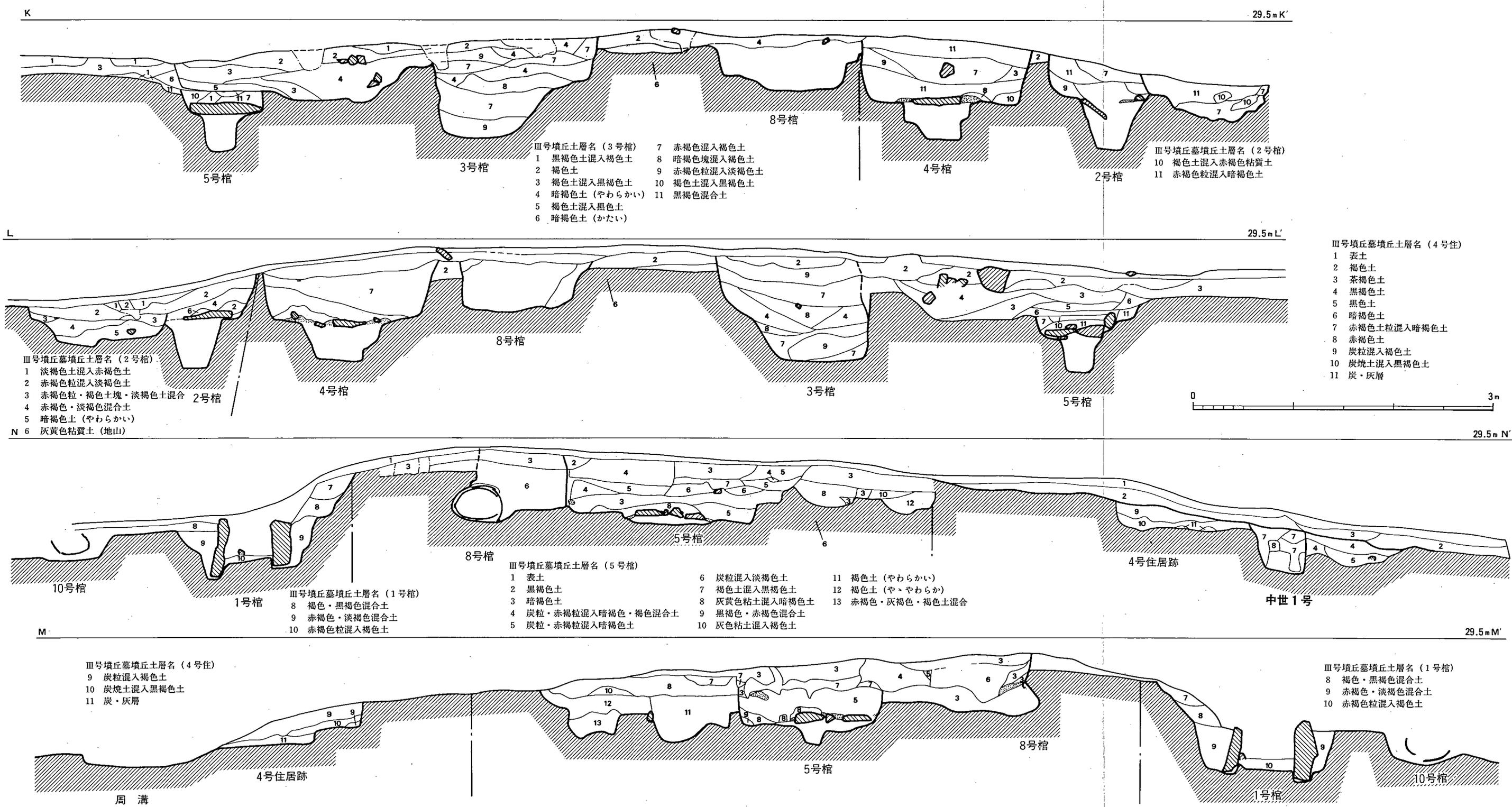
第110図 2号墳丘墓5号棺実測図(1/30)

### α 墳丘

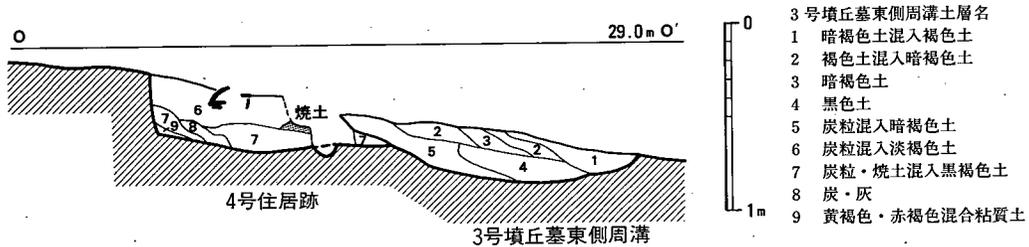
3号墳丘墓の墳丘は、E地区の中で唯一明確に周溝などで区画されたものではなく、2号墳丘墓で述べたごとく、これとの区別が明瞭なものとはいえない。しかし、北側を4号墳丘墓の周溝によって新しく区画されることによって、先に営まれていた墳丘墓が明瞭に独立した存在となったことがわかる。これより先に、墳丘が緩斜面となる東側裾で、第113図のように堅穴住居跡の埋没後に掘られた長楕円形の溝状土壌があり、これが地山の傾斜変換線の墳丘裾部にあたることから、周溝の一部とすることができる。墳丘西側は、祓川崖面によって大きく破壊されていることから、墳丘の3分の1以上を失っている。墳丘南側は、2号墳丘墓1号棺を中心主体部の1つとした時に、2号墳丘墓が独立すると考えるので、現状で中世溝で区画されているものの、本来もこの付近に東側のような不明確な区画が存在したことになる。このように考えると、3号墳丘墓で唯一の石棺である1号棺を中心主体部とした一群の構成が可能になってくる。



第111图 3号墳丘墓遺構配置図(1/60)



第112図 3号墳丘墓墳丘断面実測図(1/40)



第113図 3号墳丘墓東側周溝土層断面実測図(1/40)

墳丘を第112図の断面図で見ると、現状の最高で30cm以上の盛土が確認され、いずれの墓も盛土上面から掘込まれている。しかも、墳丘中央近くに位置すると考えられる1号棺と保存のよい小児用5号棺などと床面レベルを比較した時に、5号棺の方が低いところから、1号棺がさらに高い墳丘上から掘込まれていたと解釈できる。

墳丘規模は、盛土の範囲で南北径約8m、東西径約7mであり、現状での埋葬遺構配置範囲がそれより広い東西径10.2m、南北径10.3mとなる。この場合の墳丘は、10号・1号・11号棺を結ぶ線から北西側を大きく破壊されていることから、東西径が現状の最小でも5割増の規模の隅丸長方形を呈するものとする。しかも、地山整形の基底部分と盛土部分の範囲が不明確ながら段築を形成することから、弥生墳丘墓における段築構成が今後問題になってくる。

## b 主体部

### 1号棺 (図版77-1、第114図)

1号棺は、墳丘西側崖面土取りで破壊された箱式石棺墓。墓壙の一部が残存していたことから、方形墓壙に対角線上に石棺を配置するものであることがわかった。

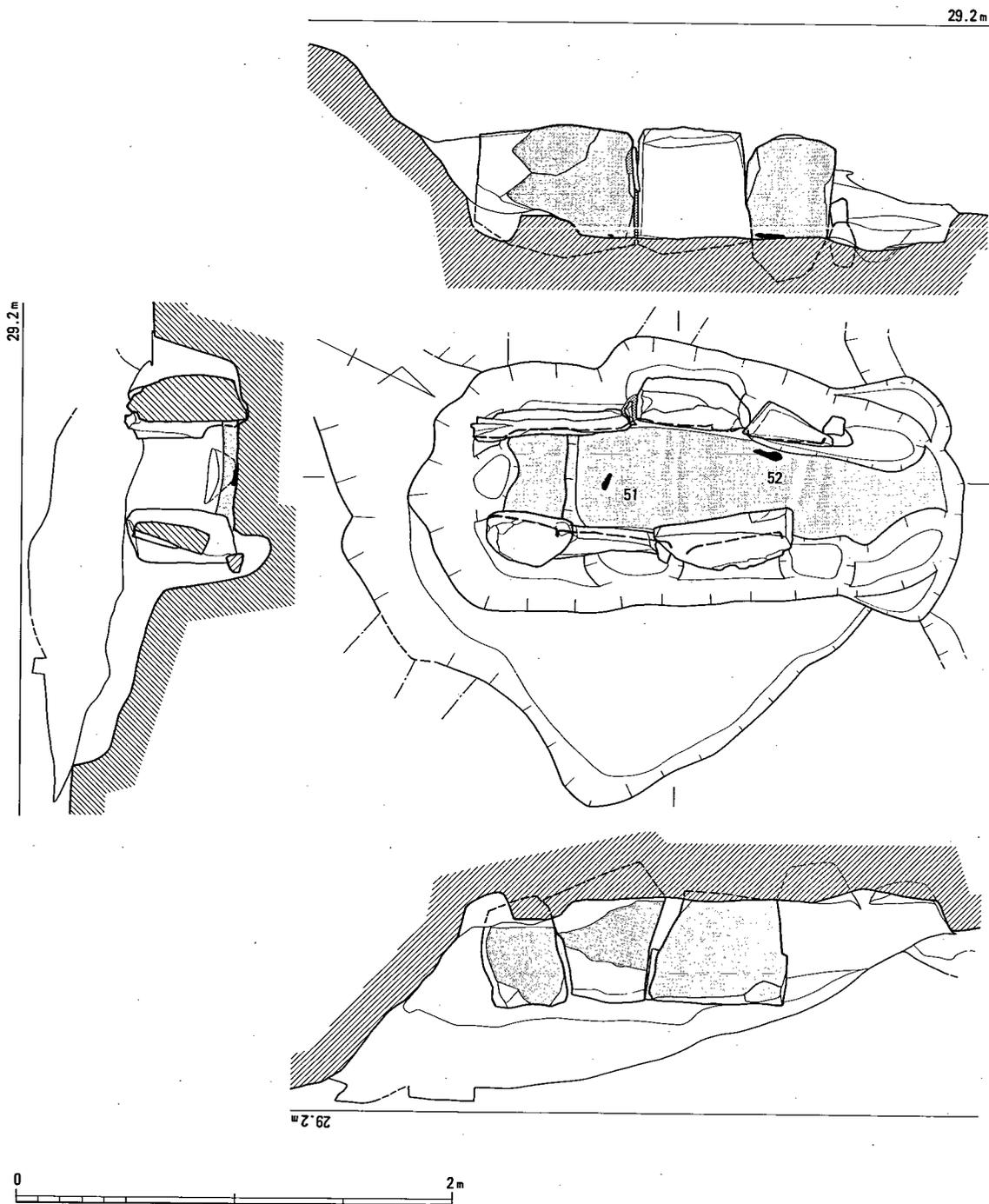
石棺は、蓋石の全部・両小口・側壁の一部を失っているが、形状・規模を復原することができる。平面形は、胸部に最大幅をもち、南側小口に削出枕を付設し、足元幅を頭部幅より広い40cmとしている。石材には、安山岩・片岩・花崗岩が利用され、内面に赤色顔料を塗布している。床面も荒らされていたが、赤色顔料が敷かれ、副葬品として胸部と左足側壁部で各1点の鉄鏃が出土したが、原位置ではないだろう。

### 2号棺 (図版77-2、78-1、第115図)

2号棺は、墳丘の北側にあり、墓壙の東西側一部攪乱によって破壊された石蓋土壙墓。墓壙は菱形で、土壙を対角線上に配置している。

蓋石は、東側頭部1枚が安山岩で、他の6枚が片岩を利用している。蓋石の下面全体に赤色顔料を塗布している。若干の粘土目張りも残っている。蓋石の北側に接して壺1個と、墓壙南端上面には器台1個が供献されていた。

土壙は、両小口が角張り、中央部に最大幅をもち、東側小口に削出枕を付設している。壁面

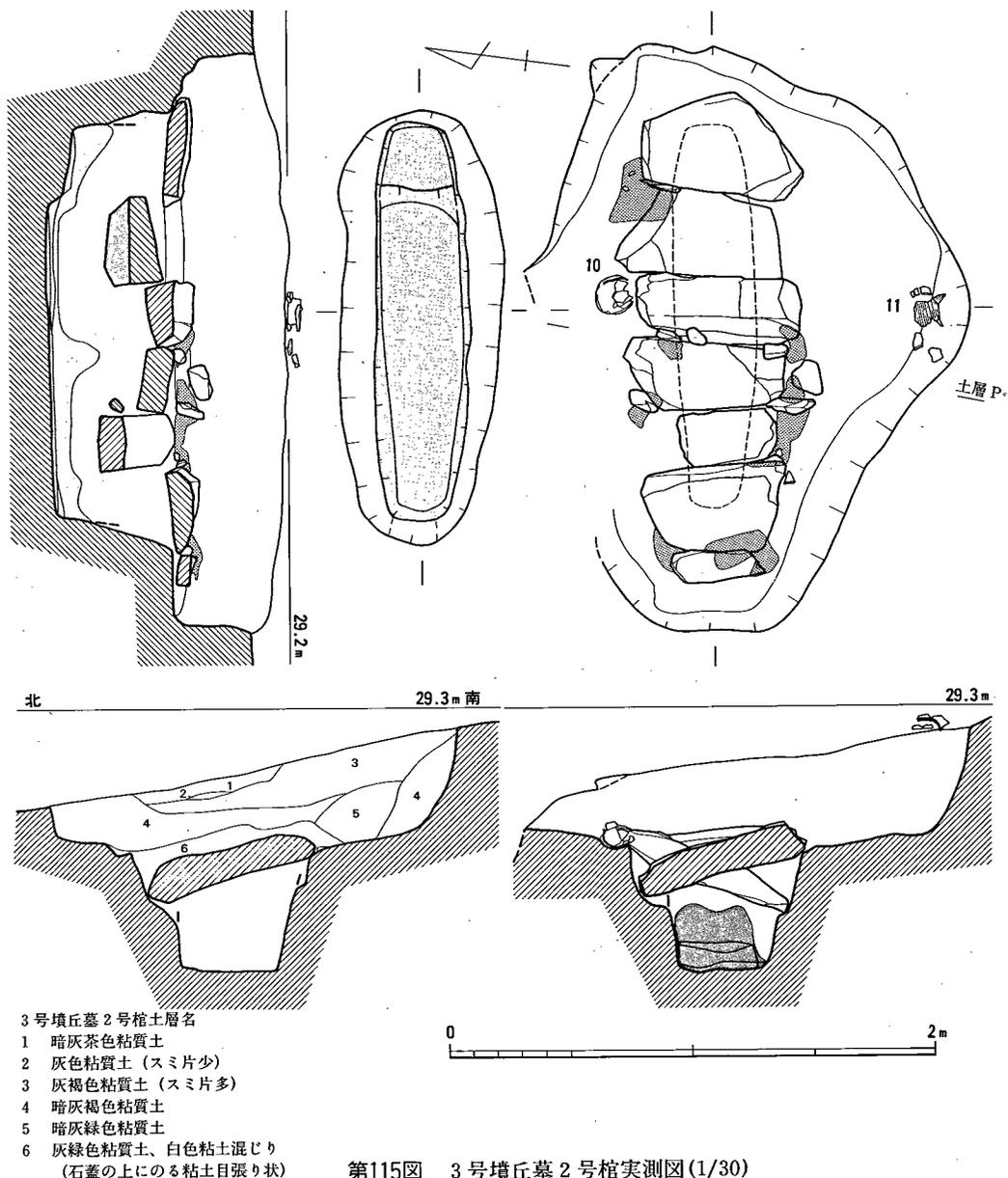


第114图 3号墳丘墓1号棺实测图(1/30)

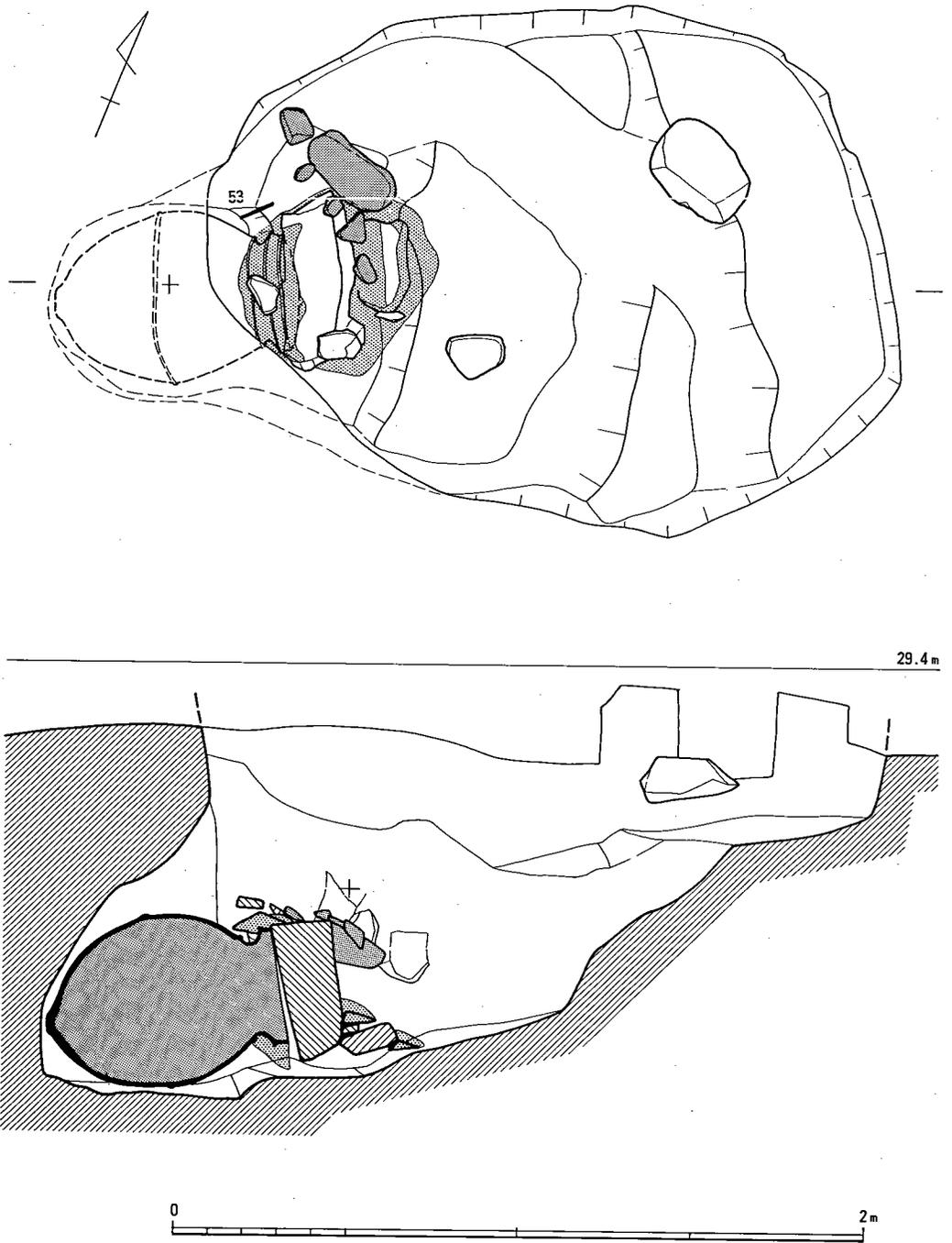
は、蓋石の陥没によって保存が悪いが、わずかに外傾しており、残った部分と床面に赤色顔料が見られる。

3号棺 (図版9、78-2、79、第116~118図)

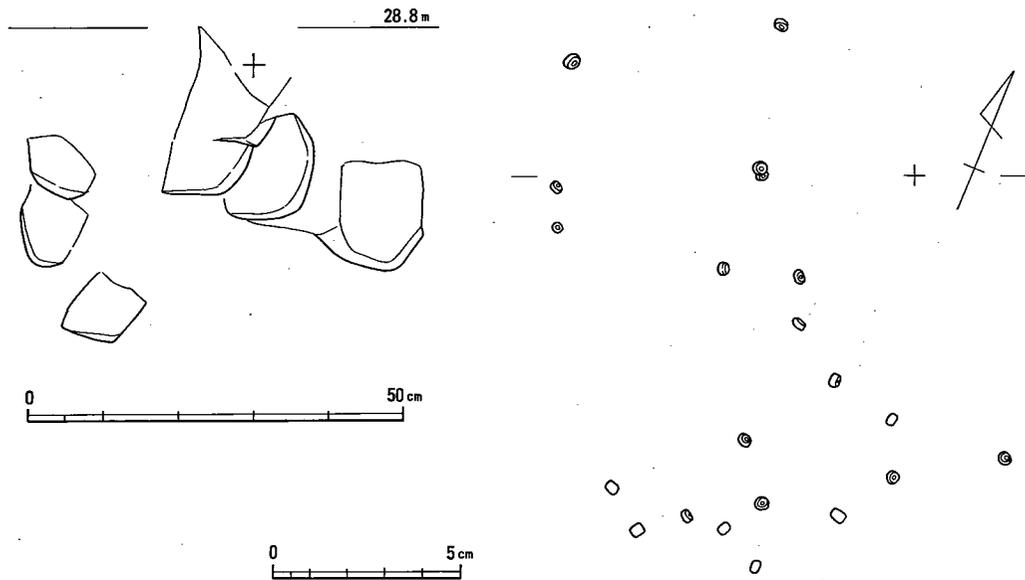
3号棺は、墳丘南側に位置する保存のよい石蓋甕棺墓。墳丘最上層から掘込まれた墓坑は、平面形が角張った卵形を呈し、北東側の深さ約40cmのところには1段の平坦部を形成し、次に西



第115図 3号墳丘墓2号棺実測図(1/30)



第116图 3号墳丘墓3号棺实测图(1/20)

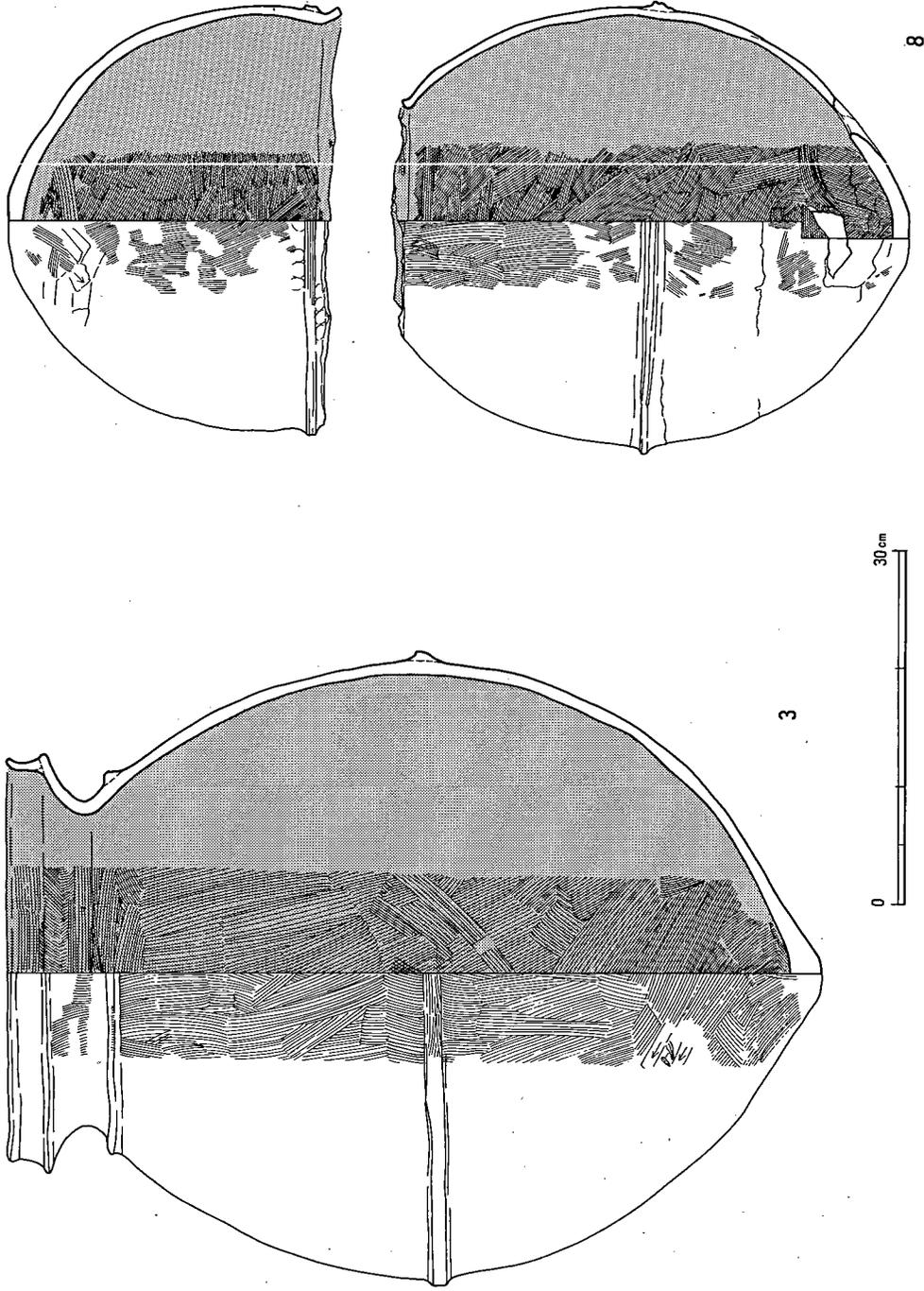


第117図 3号墳丘墓3号棺掘具痕・玉出土状態(1/10・1/2)

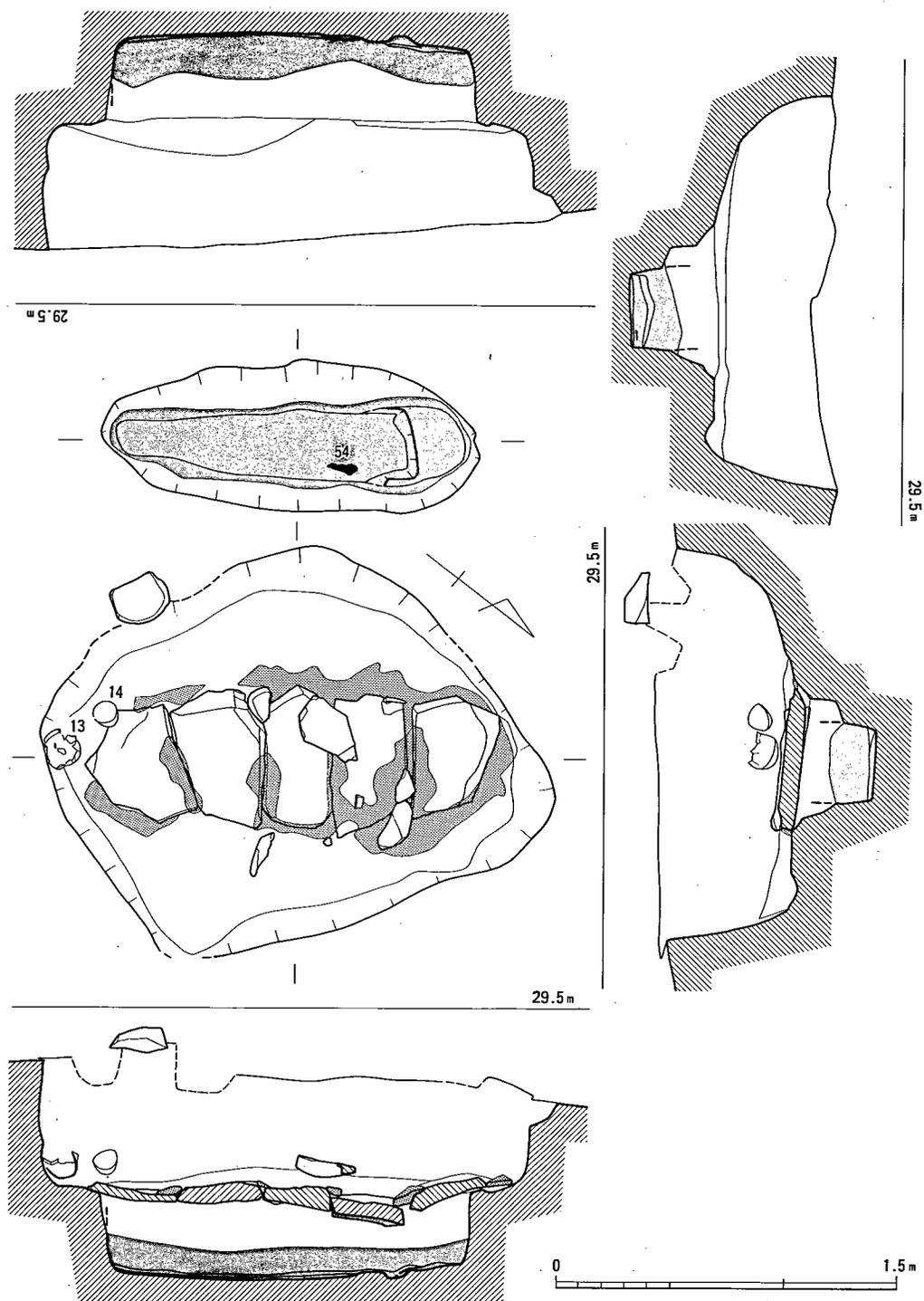
南側に向って階段状に下り、最後に墓壙西南壁に横穴を穿っている。横穴は、床面を舟底状に、端部が丸造りで外に向って大きく開いている。このような甕棺墓壙は、北部九州の成人用甕棺墓に通有の形態で、本格的な甕棺墓壙である。墓壙は、最大幅11cmの鋤で掘られたらしく、第117図のように北東壁にその痕跡がある。墓壙の規模は、竪穴上部長径2.1m、短径1.55m、最深部1.15mで、さらに横穴を奥に0.45m、最下底面が墳丘上面から1.2mとなっている。

この墓壙の横穴部に、大型複合口縁壺を底部を奥に挿入して安置している。この時大型壺は、水平から口縁部を10度上に向け、口縁下に粘土を敷いて安定させている。壺の口縁には、幅52cm、高さ40cm、厚さ17cmの花崗岩の板石を蓋として立て掛けている。この石蓋は、下に根石を置いて安定させる一方で、壺口縁と蓋石の周縁を粘土で密封している。この密封が終わってかと思われるが、口縁外北側に、切先を棺奥に向けた刀子が棺外副葬されている。そして棺が埋められ始めるが、埋土が石蓋の上縁近くになったところで、最大で14×30cm大の石1個と10個の小石が不規則に置かれている。この石は全て河原石で、このうち北側の大きい石を含めて6個の全面に赤色顔料が塗布されている。棺内にも全面に赤色顔料が塗布され、底面に3cmの厚さに堆積しており、この顔料の中にガラス小玉21個が散乱していた。この赤色顔料が塗布された石の存在は、埋葬に伴う祭祀としておくしかないだろう。墓壙では、その外にも数個の河原石が埋土中に含まれていた。

甕棺 (図版105-3、第118図3)



第118图 3号填丘墓3·8号棺夹测图(1/6)

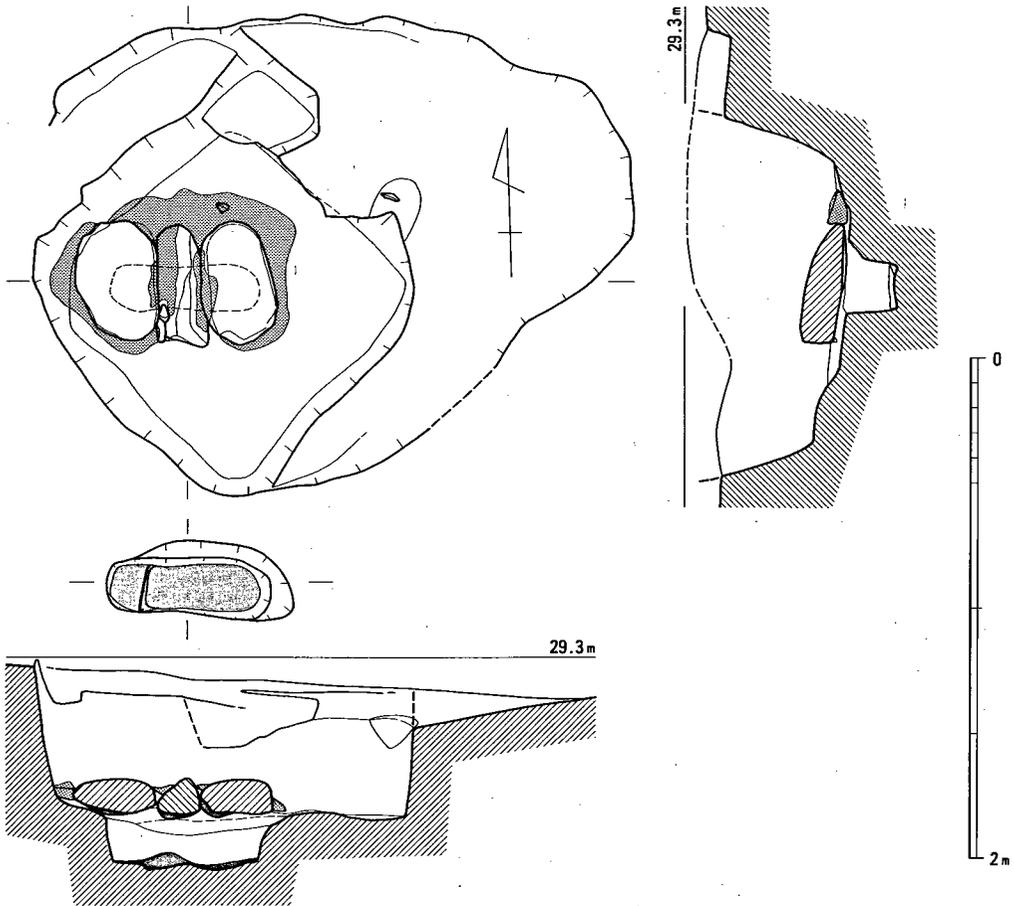


第119图 3号墳丘墓4号棺実測図(1/30)

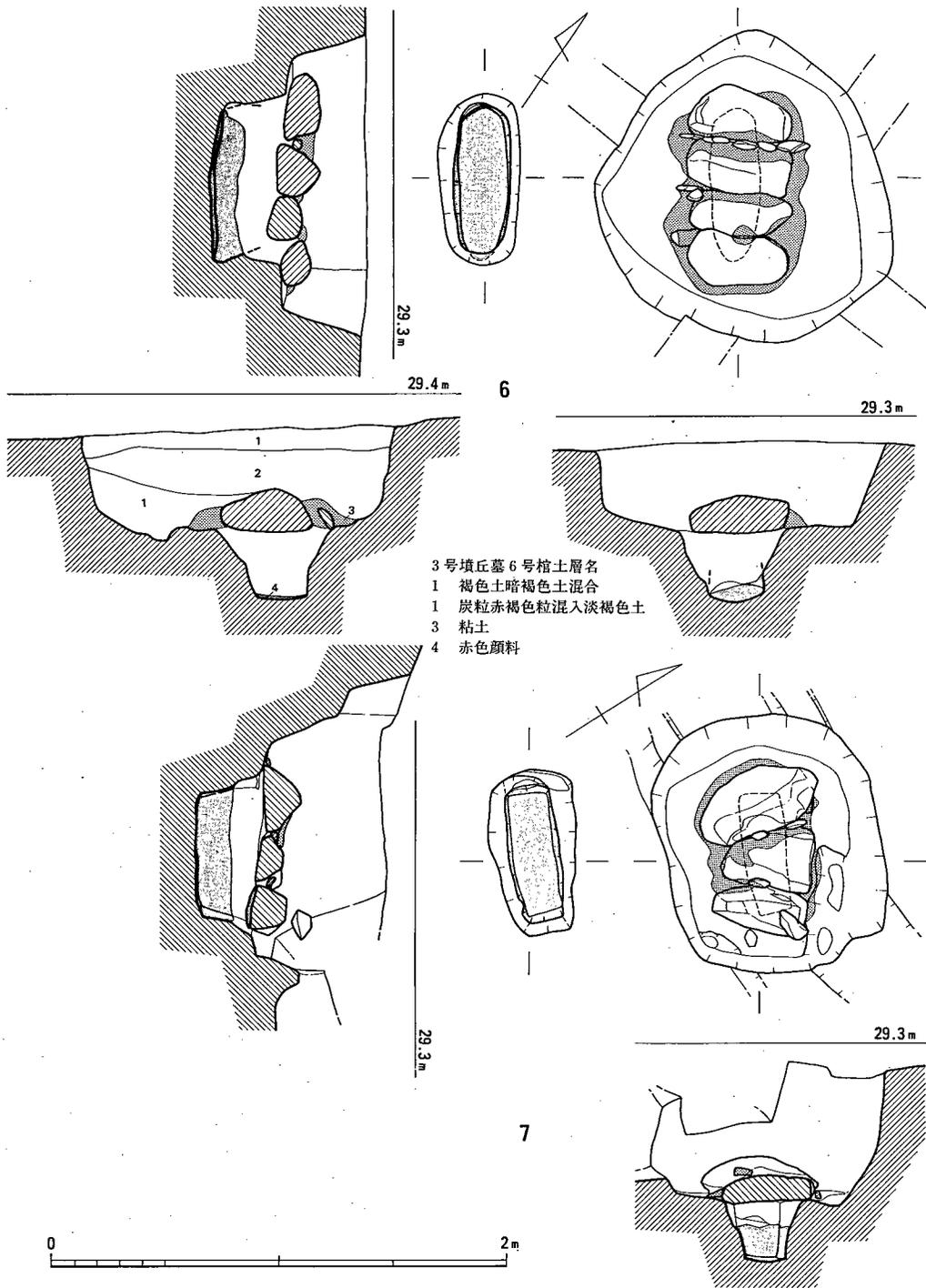
3号棺は、石蓋単棺であり、大型複合口縁壺が利用されている。口縁部は、立上りがわずかに内傾して先端が急に外反する特徴をもつ。胴部は、楕円形に尖底をもつ。肩部と胴部中位の最大径の位置に台形突帯を各1本めぐらす。器面調整は、口縁の内外面がハケ目後コナデ、胴部内外面にハケ目であるが、外面下半にハケ目の前にケズリによって尖底としている。内面全体に赤色顔料が塗布してある。大きさは、口径34.2cm、器高68.5cm、胴最大径53.6cm。甕棺の時期は、弥生終末期の古段階に属する。

4号棺 (図版80、第119図)

4号棺は、墳丘の中央よりやや北側に位置する石蓋土壙墓で、菱形墓壙が完存していた。墓壙は、墳丘の最上層から掘込んでおり、土壙を対角線上に配置している。



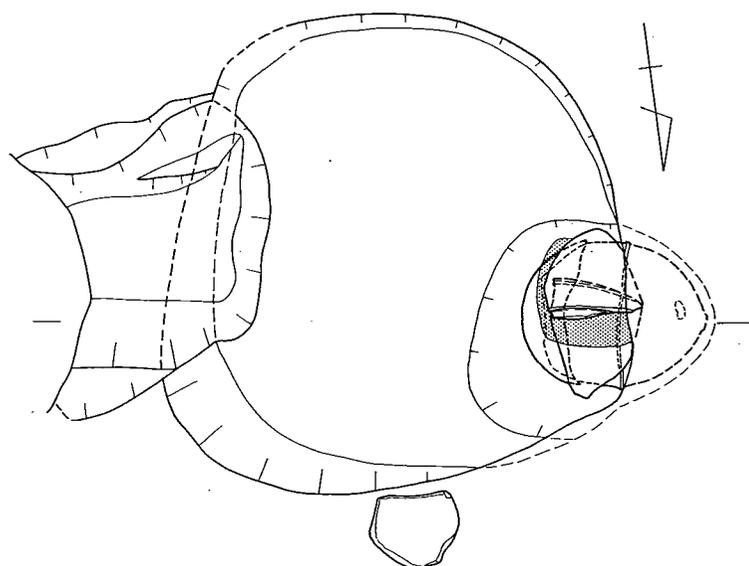
第120図 3号墳丘墓5号棺実測図(1/30)



第121図 3号墳丘墓6・7号棺実測図(1/30)

蓋石は、4枚の片岩が使用され、粘土で目張りしている。足元に当る蓋石の南東端上面に壺と鉢が供献されている。蓋石の下面全部に赤色顔料が塗布されている。

土壙は、両小口が丸造りで、頭部に最大幅をもち、北西側小口床面に低い削出枕を付設する。土壙壁面は、保存のよいところもあって垂直に近く立ち、赤色顔料も塗布されている。床面にも全面に赤色顔料が3cmほど堆積し、枕から18cmのところを歯、左側肩部に先を頭部に向けた鉄鏃1点が副葬されていた。



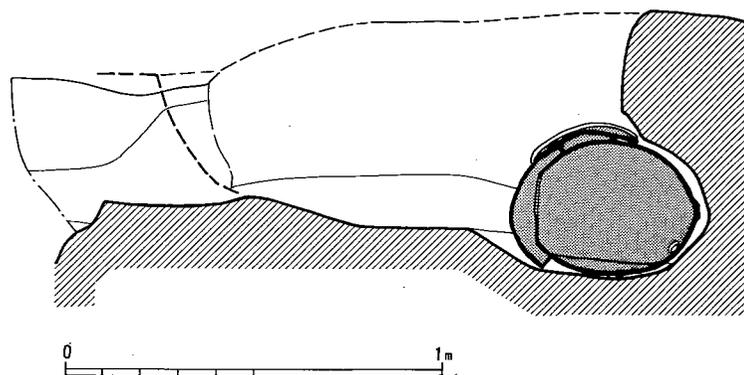
5号棺 (図版81-2・3、第120図)

5号棺は、一群の東側の密集した中であって、12号・13号棺と重複し、いずれよりも古く掘込まれた小型石蓋土壙墓。したがって、墓壙上面を破壊されているが、墳丘上面から深く掘込まれていたことから、墓壙の下半と主体が完存していた。

墓壙は隅丸方形で、対角線上に土壙を安置している。墓壙壁は、垂直に掘られた部分と割合緩傾斜の部分がある。

石蓋は、3個の河原石を使用し、丁寧に粘土目張りされ、下面全体に赤色顔料を塗布している。

土壙は、両小口が丸造り、頭部に最大幅をもち、西側小口床面に



第122図 3号墳丘墓8号棺実測図(1/20)

削出枕を付設している。壁面は、垂直に近い上方開きの掘り方となっている。床面全体に赤色顔料があり、胸部付近のみ5 cmの厚さに盛上がっていた。

#### 6号棺（図版82、第121図6）

6号棺は、一群の南東側にある小型石蓋土壙墓で、重複もなく墓壙も完存していた。墓壙は、不整形であるが一見すると対角線上に土壙を安置する形態をとっている。墓壙壁は、割合上開きになった部分が多い。

石蓋は、4個の厚味のある河原石を使用し、間隙に河原石の小石を置き、周縁まで粘土で密封している。蓋石の下面は、全面に赤色顔料を塗布している。

土壙は、両小口を丸造り、中央に最大幅をもち、北西側小口床面にわずかな段の枕らしきものがある。壁面は、全体に内湾する掘り方となっているが、足元小口がとくに著しい。壁面の保存はあまり良くないが、原状を保っている壁面と床面全体に赤色顔料が見られる。

#### 7号棺（図版83、第121図7）

7号棺は、墳丘の南端にあつて墓壙の南側を中世溝（M1）によって破壊されている。墓壙は、隅丸胴張方形で、壁面が上開きの傾斜をもち、規模として最小のものとなっている。

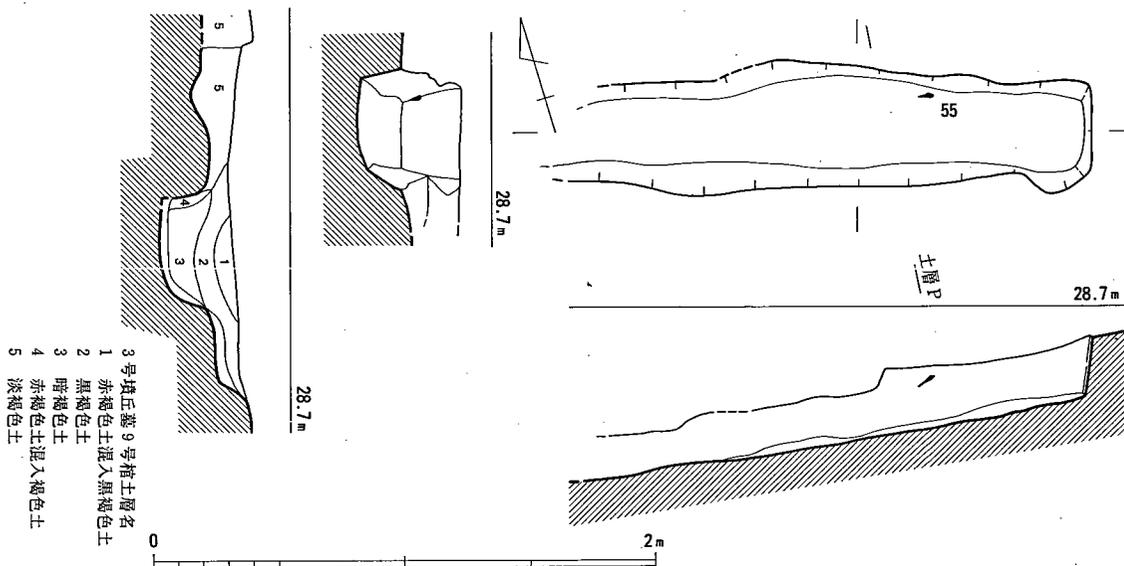
石蓋は、3個の厚味のある河原石を使用し、小石と粘土で目張りしている。蓋石の下面は、全面に赤色顔料を塗布している。

土壙は、両小口が箱形の角造りで、中央部に最大幅をもち、西側を頭部とするが枕がない。壁面の保存がよい下半部と床面全体に赤色顔料が見られる。

#### 8号棺（図版84、第122図）

8号棺は、現状の一群の中央に位置し、12号棺と重複しているが、12号棺が平面的に検出できなかったことから明確さを欠くが、第112図の墳丘断面図でわかるように12号棺より新しい小型甕棺墓。墓壙は、不整楕円形を呈し、底面が割合平坦で、北西側角の壁に横穴を穿って下甕を挿入している。したがって墓壙壁は、東側が緩傾斜で、西側が垂直に近いものとなっている。

甕棺は、下甕に複合口縁壺の頸部以上を打欠き、真横の水平に横穴に挿入し、上甕として鉢形甕を縦に2等分して一方を下甕の打欠いた口縁を覆い、残った半分をさらに半分にして、上甕と下甕の継目の上面を2重に覆っている。さらに、その継目を粘土で密封する丁寧なものとなっている。下甕の底部近くに内側から焼成後に穿孔されているが、下甕を水平に埋置したことから、排水孔としては役立っていない。棺内は、上甕も含めて全面に赤色顔料が塗布され、棺底に3 cmの厚さで沈澱していた。



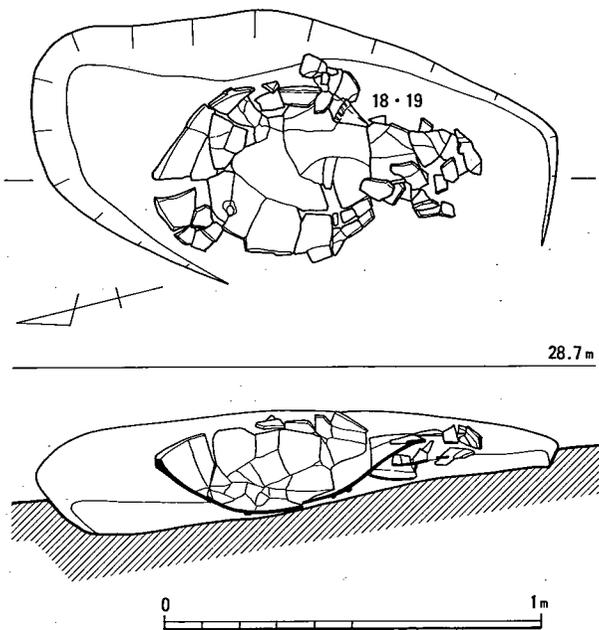
第123図 3号墳丘墓9号棺実測図(1/30)

**甕棺** (図版105-8、第118図8)

8号棺は、上甕と下甕の双方の口縁部を打欠いて合口しているが、上甕がさらに半割りして二重にしていた。

上甕は、く字形口縁の鉢形甕で、口縁の大半を打欠いている。胴部は半球形を呈し、凸レンズ底も丸底に近い。器面調整は、外面が粗いタタキ後下半部をケズリ、全体的に内外面にハケ目とナデを施す。口縁下の台形突帯上面に、突帯に平行して櫛目状ハケ目を施す。大きさは、現口径35.5cm、現器高28cm、胴最大径35.9cm。内面全体に赤色顔料を塗布している。

下甕は、口縁部を打欠いているが複合口縁壺と思われる。楕円形



第124図 3号墳丘墓10号棺実測図(1/20)

胴部中位に台形突帯1本をめぐらすが、肩部に突帯がない。胴部は、内外面ハケ目調整であるが、外面下半をケズリによって丸くしている。大きさは、現口径20cm、現器高43.2cm、胴最大径37.3cm、底径4.5cm。内面全体に赤色顔料を塗布し、底部近くに焼成後に内側から穿孔している。

8号棺の甕棺の時期は、弥生終末古段階に属するものと考えられる。

#### 9号棺 (図版85-1、第123図)

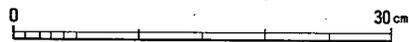
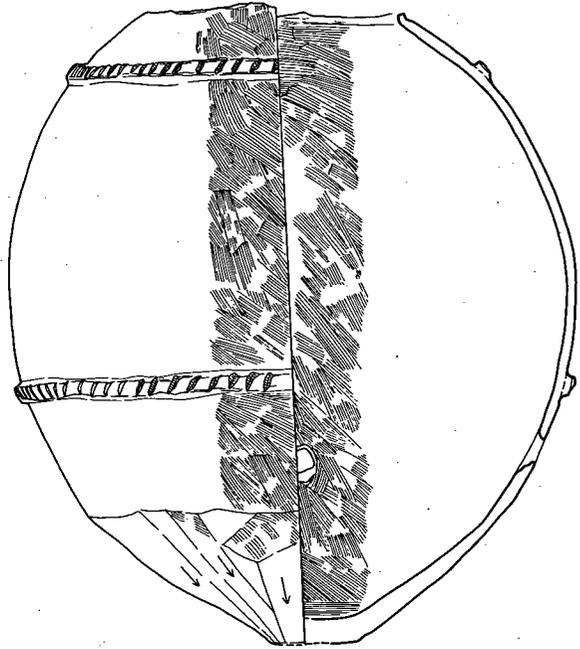
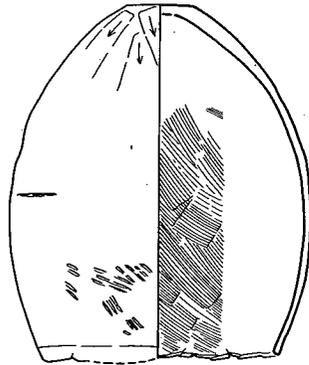
一群の西端で検出されたものであるが、床面が急傾斜であることなどから、埋葬遺構とはいえない土壌。土壌内の北側壁近くで浮いて鉄鏃1点が出土した。遺構としては、墳丘を区画する一部であるかもしれない。

#### 10号棺 (図版85-2、第124・125図)

10号棺は、1号棺の西側に隣接した小型甕棺墓で、上半を破壊されている。墓壙は、長方形を呈したと思われるが、北側が攪乱で変形し、西側を失っている。3号・8号棺の例から、この甕棺も深い縦穴と横穴からなる墓壙を持っていたと思われるので、墳丘盛土の復原にも役立ち、1号棺を中心主体部とする推論も可能になってくる。

甕棺は、下甕に大型複合口縁壺の頸部以上を打欠いて、墓壙に約12度の傾斜で安置し、上甕として日常小型甕の口縁を打欠いて覆口式としている。下甕の下側にあたる胴部突帯の下に外面から穿った焼成後の穿孔がある。

甕棺東側の合口部に接して供献された小鉢2点が置かれていた。



第125図 3号墳丘墓10号棺実測図(1/6)

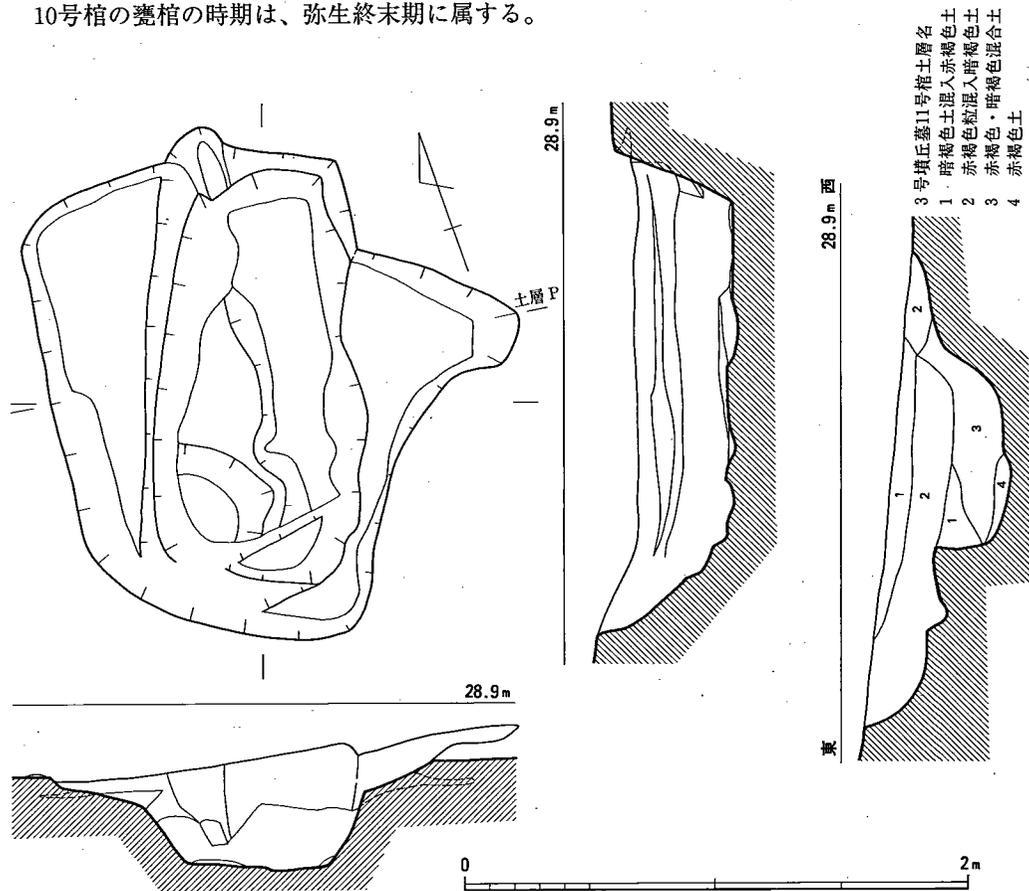
甕 棺 (図版106-10、第125図)

10号棺の甕棺は、上部がかなり破壊されていたが、埋葬が水平であったところから上下甕共に復原できた。復原できた甕棺は、上下甕共口縁部を打欠く合口式であった。

上甕は、口縁を打欠いた日常煮沸用小型甕で、口縁がく字形を呈する形式である。胴部調整は、外面にタタキの後にナデられるが、下半部がケズリ状のナデで終り、内面がハケ目である。底部は、角がとれた平底である。外面に煤が付着している。大きさは、現口径18.6cm、現器高28.2cm、底径5cm。

下甕は、口頸部を打欠いた大型複合口縁壺である。わずかに頸部が残っているところを見ると、基部が直立していた可能性もある。胴部は楕円形で、上部と中位よりやや下に板目キザミ台形突帯各1本をめぐらす。器面調整は、外面下半をヘラケズリによって成形した後、全体の内外面にハケ目を施す。底部は、わずかに凸レンズ状を呈する平底である。大きさは、現口径20.6cm、現器高50.3cm、胴最大径45cm。

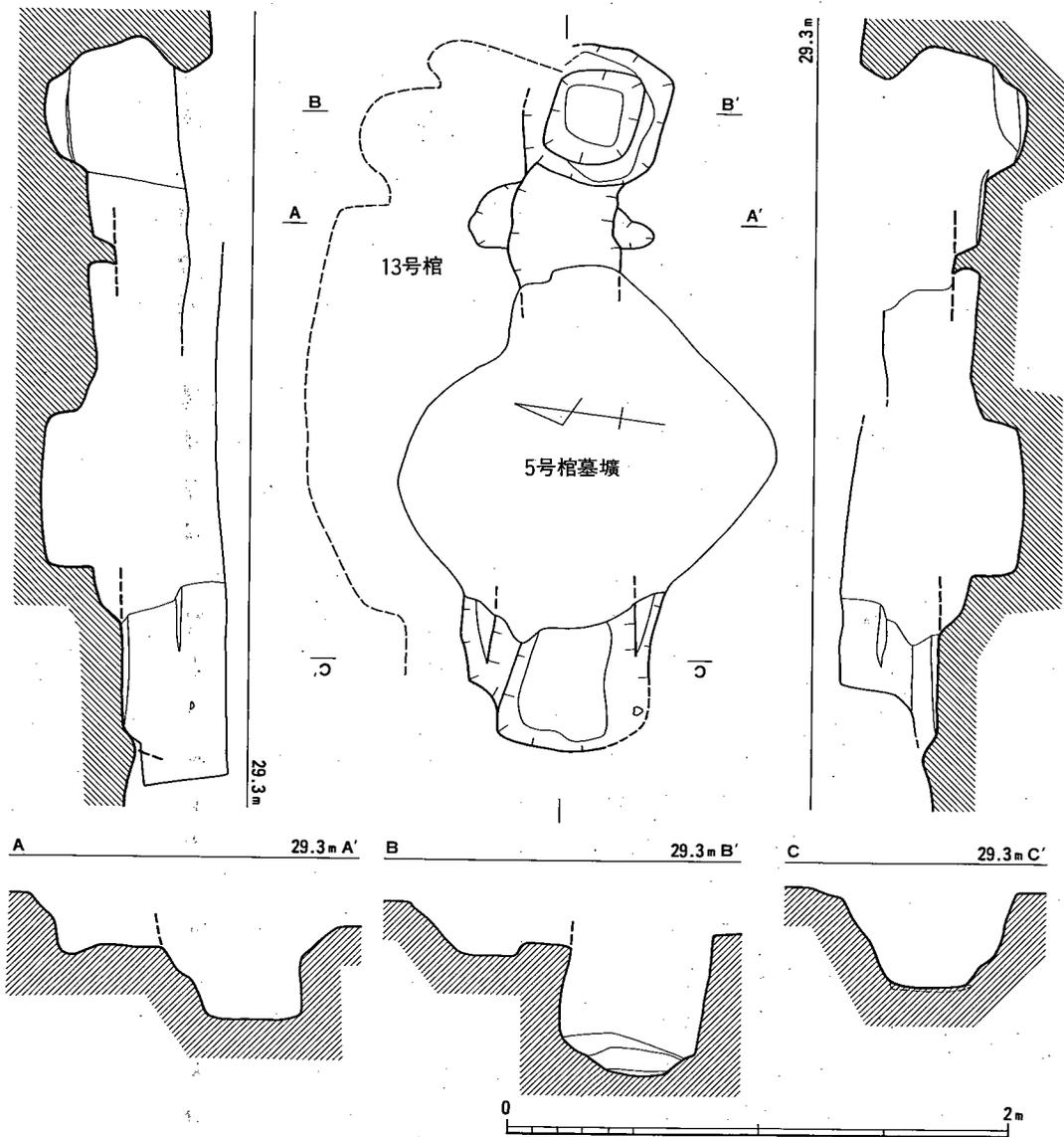
10号棺の甕棺の時期は、弥生終末期に属する。



第126図 3号墳丘墓11号棺実測図(1/30)

11号棺 (図版85-3、第126図)

11号棺は、墳丘の北端にあり、完全に攪乱されて原形をとどめていないが、荒らされていることから石蓋土壙墓と考えられる。残っている墓壙の一部から対角線上に土壌が配置されていたことがわかり、攪乱された土に赤色顔料が含まれていたことから埋葬遺構とできる。



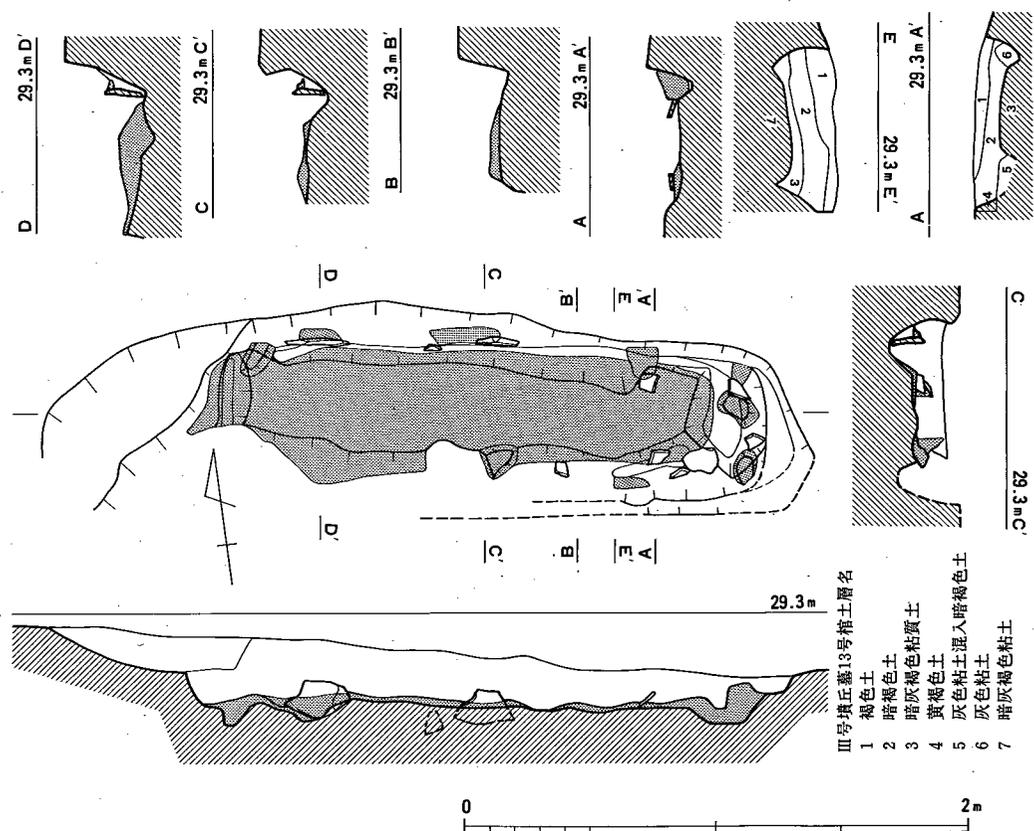
第127図 3号墳丘墓12号棺実測図(1/30)

12号棺 (第127図)

5号・8号・13号棺と重複し、平面形として検出できなかったこと、赤色顔料・粘土等が出土しなかったことから埋葬遺構とする確証がない。最終的な点検で確認された遺構であるために、大部分が調査で破壊された遺構となった。重複関係では、墳丘断面図から、甕棺墓の8号棺より古く、5号・13号棺より新しい細長の土塋である。これが墓であれば、細長い型式の木棺を内蔵し、両側に同じような墓塋をもつことになる。

13号棺 (図版86-1、第128図)

13号棺は、一群の東端にあり、5号・12号棺と重複し、5号棺より新しく、12号棺より古く、両棺の間に埋置された箱形木棺墓。木棺墓は、上部を完全に削平されて基底部分が残存しているにすぎないので、墓塋の大半が失われているが、両側に余裕のない木棺と同じ細長いものであったらしい。



第128図 3号墳丘墓13号棺実測図(1/30)

木棺は、土壙四周に掘込まれた溝と溝に残った安山岩板石片と、粘土床によって、箱形木棺が復原できる。周溝の溝に立てられた小板石は、木棺材の外側に側板を安定させる目的で置かれたものである。

棺内床面全体に灰色粘土があるが、この粘土は木棺上のものと、棺床に当初から敷かれていたものの両方があったらしいことが、断面図から判明している。現状では、13号棺の周辺で盛土が消えているが、13号棺の浅さからいってもさらに50cm前後の盛土がなければならないことになり、墳丘復原の一助となる。

3号墳丘墓は、E地区の墳丘墓の中で唯一3基の甕棺墓をもち、その所属する時期が明確である。しかも、甕棺の型式にも差があると同時に、重複関係からその甕棺墓より古い遺構があることも確認された。このことから地形的な位置関係からも、D・E地区を合わせて最初に営まれた墳丘墓である。なお、2号・11号棺の間で攪乱された穴が検出されているが、ここにも何らかの遺構があったらしく、赤色顔料と赤色顔料が塗布された土器片が出土している。

#### ④ 4号墳丘墓 (図版10、86～96、第129～144図)

4号墳丘墓は、E地区の墳丘墓群では最も北側に位置し、3号墳丘墓から意図して弧状周溝を掘ることによって独立した墳丘を形成している。分布調査の時点から、1号墳丘の次に有望な墳丘墓として把握していたもので、墳頂に建設省の境界コンクリート杭があり、その横に盗掘坑と河原石が散布し、標石の存在も予想できた。墳丘の西側の3分の1は、祓川岸の崖面で失われており、ここにも大きなくぼみがあり、主体部の存在を思わせた。

調査は、墳丘形態を予想して墳頂を中心に略の東西・南北のトレンチを設定したが、当初から存在が予想できた標石によって、中心部の遺構輪郭確認が困難であった。

#### α 墳丘

4号墳丘墓の墳丘は、丘陵頂より北側の緩斜面を選地し、地形的に高い南側に弧状周溝を掘ることによって丘尾切断の形態で墳丘範囲を占有している。墳丘平面形は、弧状周溝が示すとおり楕円形を呈し、北側から北東側の地山整形もこれに応じているところから、西側の3分の1が破壊されている以外の墳丘の保存がよいことがわかる。

墳丘の盛土は、墳頂を中心に南北約8m、東西約7mの範囲で確認できるが、墳丘の基底部分地山整形によって形成するところから、現状で見ても2段築成の墳丘立面形を呈する。

墳丘規模は、1段目の地山整形部が南北の長径13.0m、現状の東西短径9.5m、2段目基底部長径7.5m、現東西短径約6m、盛土高さ0.7m、南側からの全高0.85m、北側からの全高1.4mとなる。

#### b 周溝 (図版87-88、第129・135図)

4号墳丘墓の周溝は、前述したように丘尾切断の弧状周溝で、長さ11m、最大幅1.1m、最深0.6mの規模で残っている。周溝横断面形は、上部が開くU字形を呈し、埋土の中層以上に径40cm前後の河原石と、径20~30cmの河原石が転落している。これらの河原石は、地形的に高い3号墳丘墓から転落したもので、周溝の南側寄りにあり、周溝上層から出土した器台片と3号墳丘墓2号棺墓壙上部で出土した器台片が同一個体に接合できたことから証明されている。

周溝内からは、若干の土器片の他に、南側と南東側周溝中層から鉄鉋片が各1点出土しており、これが同一個体と思われる。3号墳丘墓の頂部に現代の祠跡があったことから墳頂が一部削平されており、標石などの施設が一部にすぎなかったが、4号墳丘墓周溝に転落した径40cm前後の河原石群が3号墳丘墓墳頂の何らかの施設に使用されていたことは確実である。

#### c 主体部

4号墳丘墓の主体部の調査は、先に示したトレンチ設定と同時に、墳頂と西側崖面の盗掘坑を確認することから始め、墳頂直下を1号棺、西側崖面を2号棺とし、後は確認順に番号を付けた。

##### 1号棺 (図版89、第131・132図)

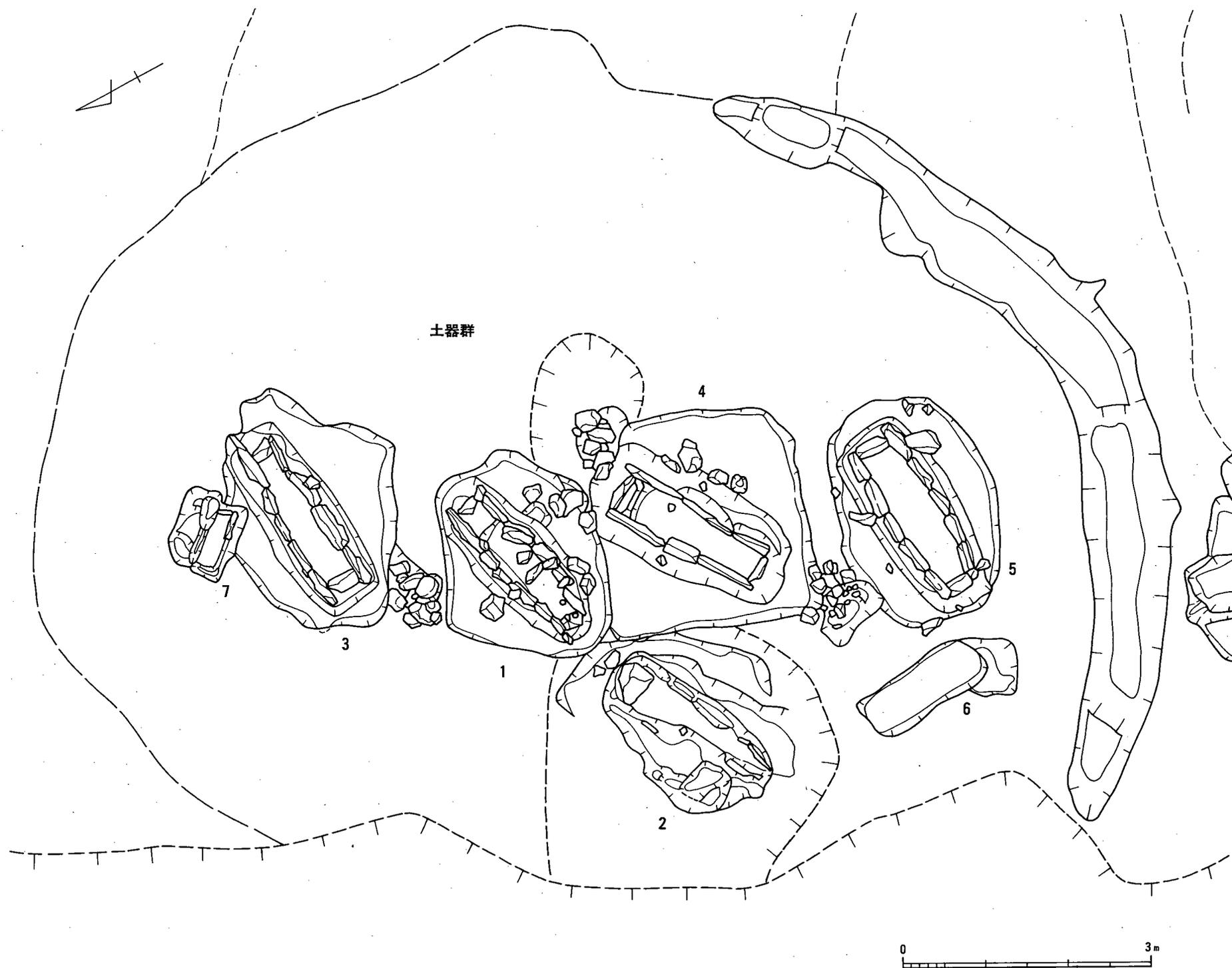
1号棺は、現状の墳丘の墳頂下に位置するが、平面的な墳丘における位置からすれば、中心よりやや北寄りに存在する箱式石棺墓である。墳頂にあった盗掘坑は、割合浅く止って蓋石まで到達せず、広さも墓壙内の狭い範囲であったために、石棺と標石の一部も完存していた。

標石は、盗掘坑で原位置のものが少ないと思われるが、墓壙内上層に径20~45cm大の河原石が9個確認できた。盗掘坑内で明らかに移動したものは除外したので、10個以上の標石が存在していたものと考えられる。

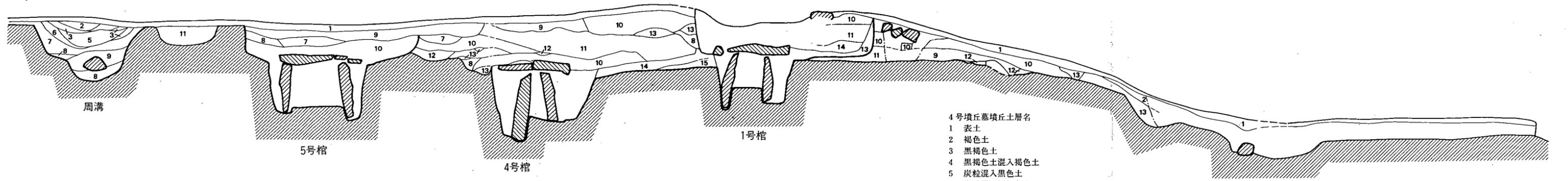
墓壙は不整菱形で、4号棺墓壙を一部切って掘られており、それより新しいことがわかる。墓壙の南側が不規則で菱形にならないのは、4号墳丘墓の盟主である4号棺墓壙を意識して避けたことも考えられる。

石棺は、墓壙の対角線上に設置され、片岩を利用した板石6枚が使用されている。蓋石の目張りには、粘土が使用されず、河原石と片岩の小石を利用した雑なものとなっている。蓋石の裏側には、全面に赤色顔料が塗布されている。

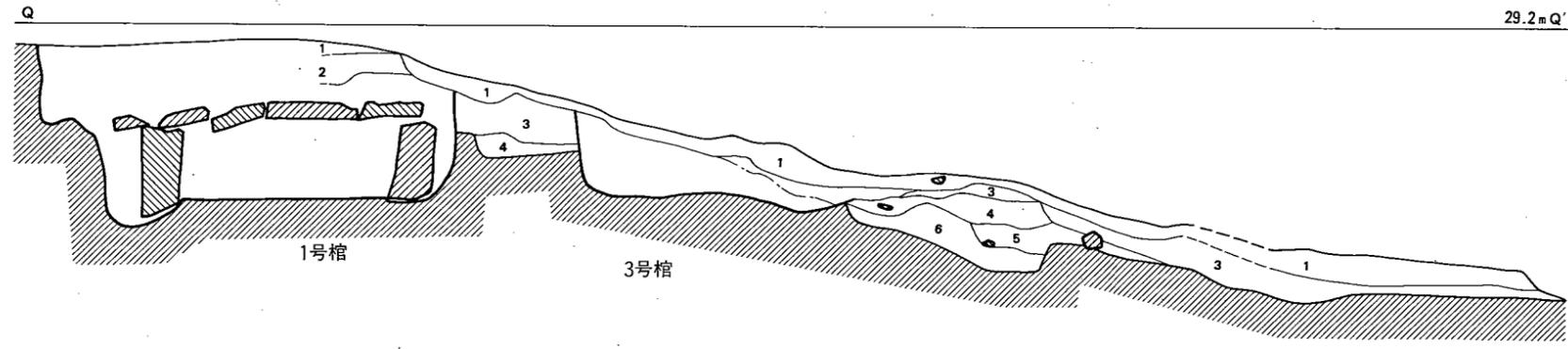
石棺本体は、両小口に各1枚、北側壁に6枚、南側壁に5枚の片岩板石を使用、中央部に最大幅をもたせて割合雑に組立ててある。床面には、東小口側に削出枕を付設して頭部とし、棺中央部左側に刀子1点を副葬している。壁面と床面の全面に赤色顔料を塗布している。壁面の



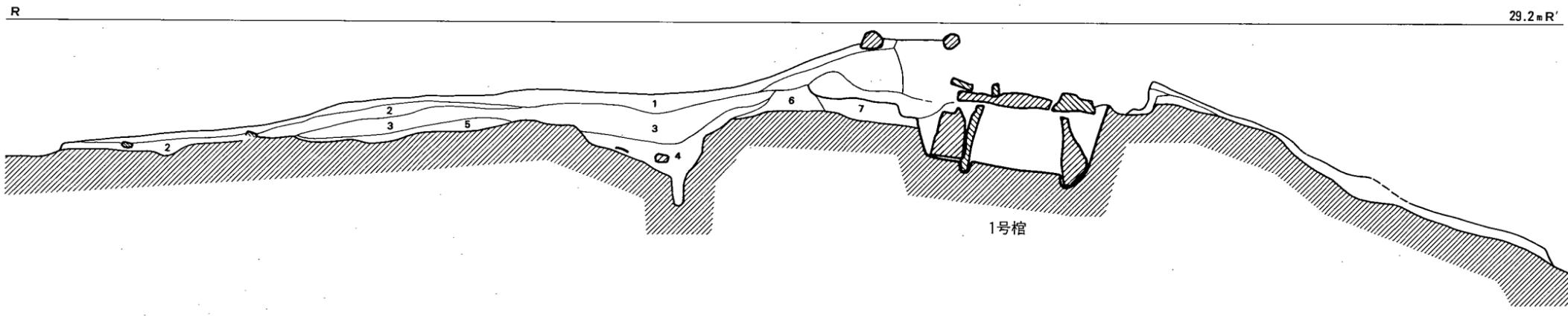
第129図 4号墳丘墓遺構配置図(1/60)



- 4号墳丘墓墳丘土層名
- 1 表土
  - 2 褐色土
  - 3 黒褐色土
  - 4 黒褐色土混入褐色土
  - 5 炭粒混入黒色土
  - 6 炭粒混入黒褐色土
  - 7 炭粒混入暗褐色土
  - 8 赤褐色土混入淡褐色土
  - 9 炭粒混入淡褐色土
  - 10 炭粒・赤褐色土混入淡褐色土
  - 11 炭粒・赤褐色・淡褐色混合土
  - 12 灰褐色土
  - 13 淡褐色混入赤褐色土
  - 14 赤褐色粘質土
  - 15 赤褐色粘質土地山塊

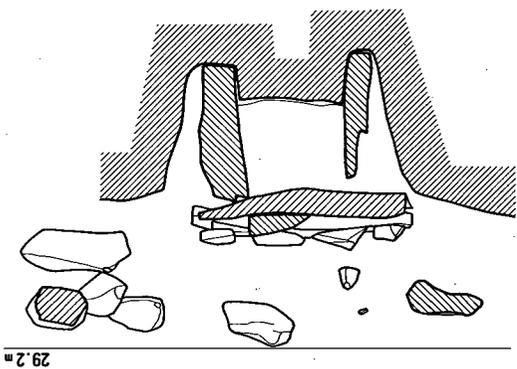


- 4号墳丘墓墳丘土層名
- 1 表土
  - 2 淡黄褐色土
  - 3 炭粒・赤褐色・暗褐色混合土
  - 4 炭粒・暗褐色粘質土
  - 5 炭粒・灰混入暗褐色砂質土
  - 6 炭粒・赤褐色粒混入淡褐色土
  - 7 赤褐色土 (やわらかい)

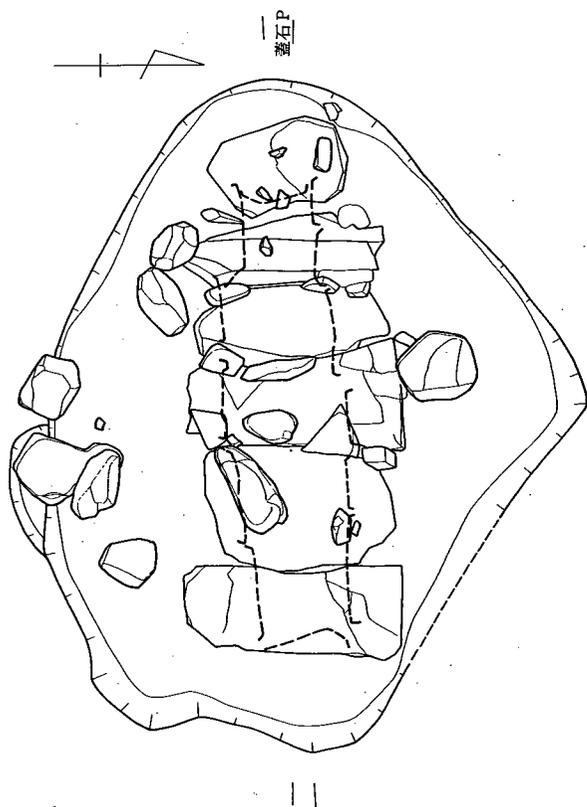


- 4号墳丘墓墳丘土層名
- 1 表土
  - 2 淡褐色土
  - 3 赤褐色混入暗褐色土
  - 4 赤褐色パイラン土・暗褐色混合土
  - 5 暗褐色土
  - 6 暗褐色・黒褐色混合土 (木根カクラン)

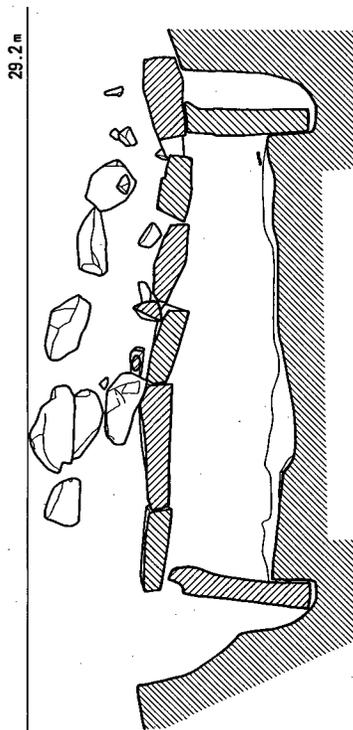
第130図 4号墳丘墓墳丘断面実測図(1/40)



29.2m



29.2m



29.2m



第131图 4号墳丘墓1号棺標石・蓋石実測図(1/30)

石材は、頭部右側に長さ70cmで、この石棺最大の石材を使用しているが、これ以外が全て縦長に立てて使用している。各石材間にわずかに粘土目張りが残っている。

石棺掘方は、床面範囲を残して溝状に掘込まれているが、深さや幅が各石材の大きさや厚さに応じたものとなっている。石棺掘方は、墓壙掘削終了後に掘込まれるのが当然であるが、その際の土砂を墓壙外に全部搬出せずに、墓壙床面両側に置いて均している。

### 2号棺 (図版90、第133図)

2号棺は、墳丘西側中央にある箱式石棺墓。墓壙と石棺本体まで荒らされて、石材の大半を失っている。墓壙の残存部から、平面形が菱形をし、北側を広く残して石棺を安置していたことがわかる。さらに、墓壙の深さは、墳丘中央部にありながら本墳丘内で最も深く掘られているのも特徴となる。

石棺は、東側小口と南北側壁の各1枚の石材が残るだけであるが、床面形や規模の復原が可能である。幅が広い東小口に花崗岩の厚味のある石材を立てて頭部とし、両側壁に残る安山岩板石片から、側壁に安山岩を利用し、その抜跡から頭部を最大幅、足元を最小幅の平面形としている。棺内全面に赤色顔料が塗られ、蓋石裏面も塗られていたらしく墓壙床面にその痕跡がある。墓壙内には、数個の河原石があるところから、標石の存在も考えられる。

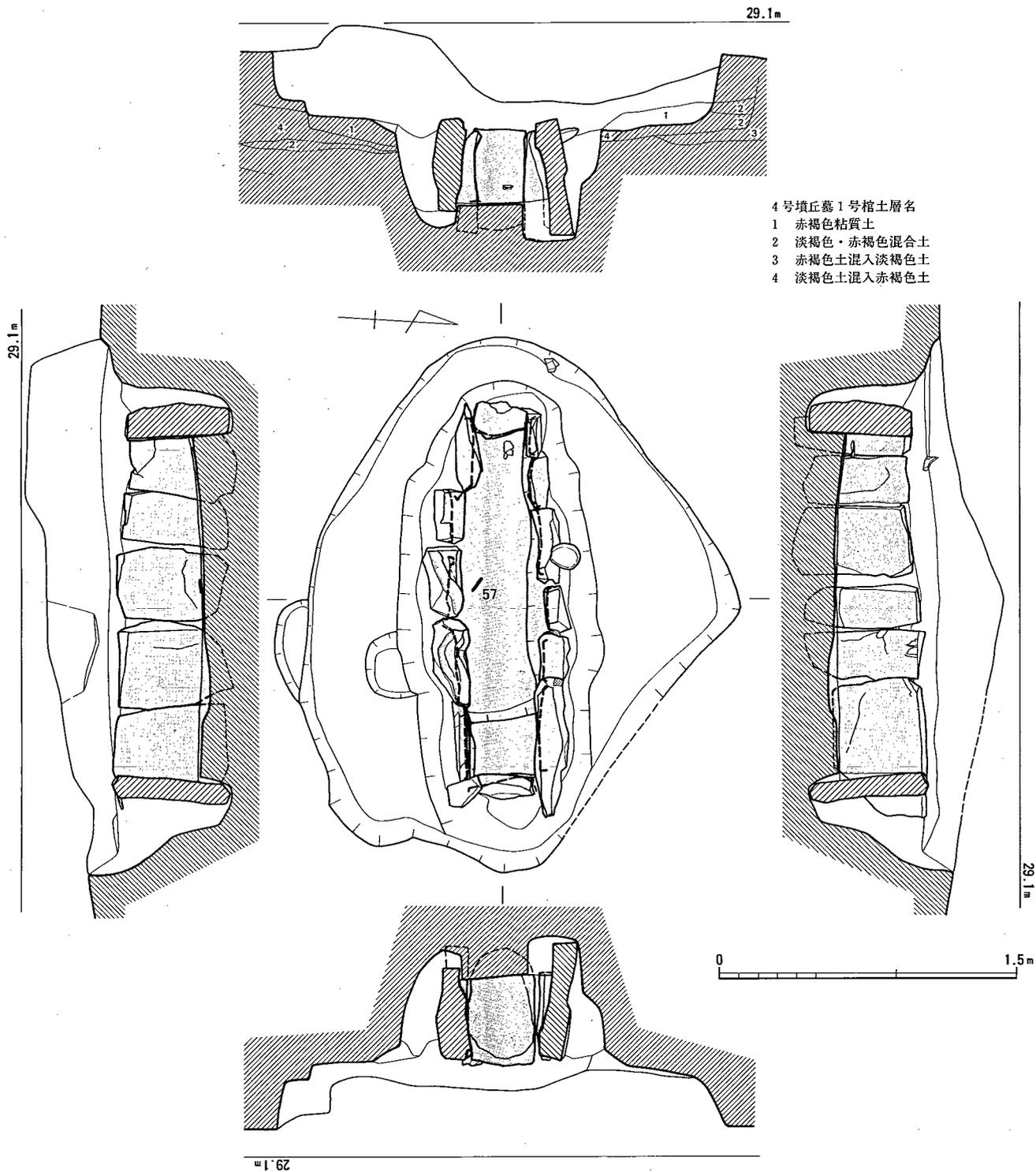
### 3号棺 (図版91、第134・135図)

3号棺は、墳丘の北側にあり、7号棺と重複して営まれる箱式石棺墓。3号棺は、重複した7号棺を含めて荒らされているために前後関係が不明であるが、3号棺が後であれば7号棺を破壊することになるので、7号棺が新しいと見るのが通例である。

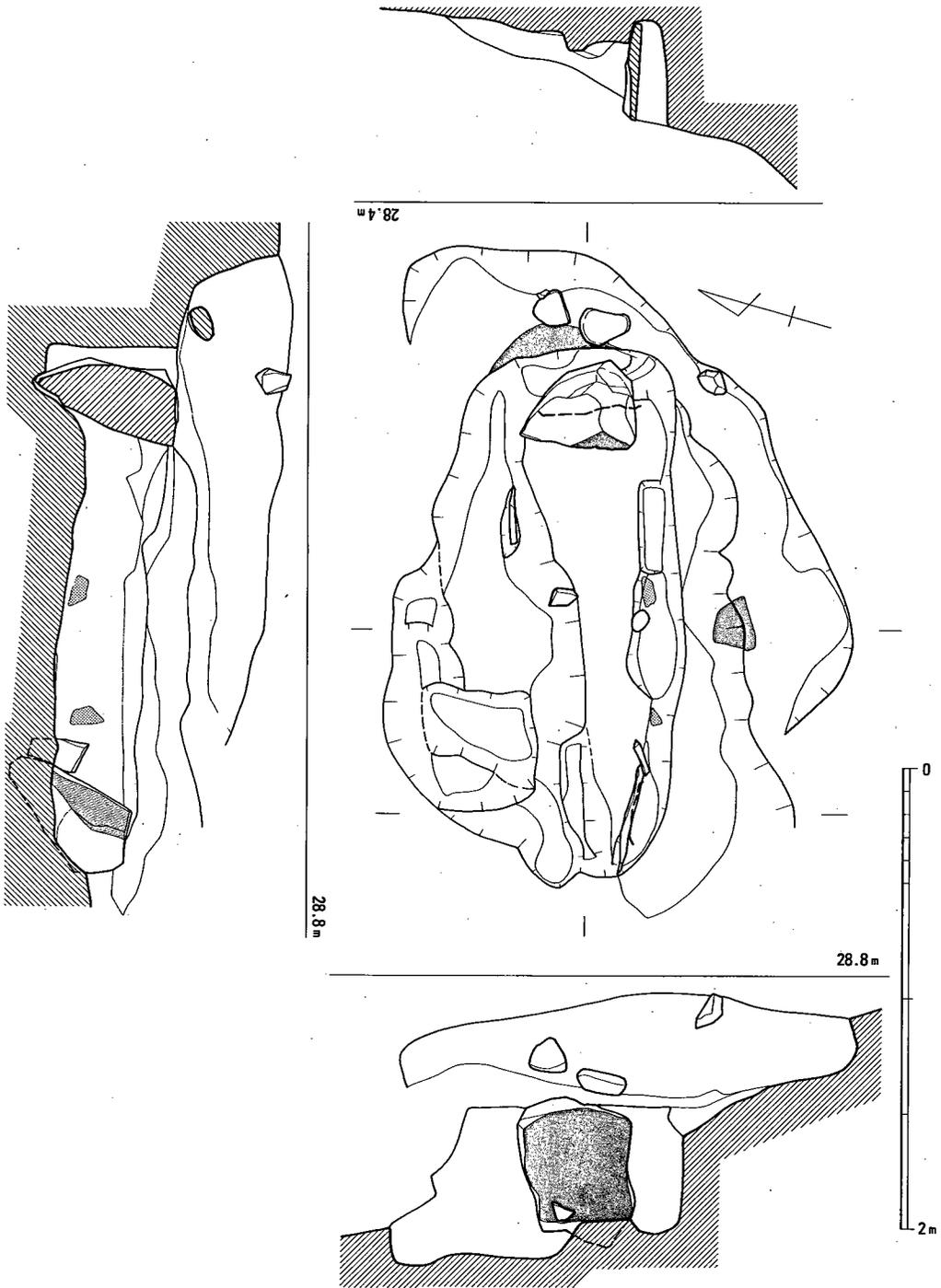
墓壙は、平面形が菱形で対角線上に石棺を安置するもの。墓壙内の大半が荒らされていたが供献土器が残っていた。蓋石も完全に失っており、棺内も完全に荒らされていると思われたが、後述する4号棺同様に、棺内は頭部側半分が荒らされたにすぎなかった。

石棺は、両小口に各1枚、北側壁に5枚、南側壁に4枚の片岩の板石を使用し、肩部を最大幅にして足元が狭く組立てられている。棺内の石材の内側全面に赤色顔料が塗布されている。床面は、幅の広い西側が頭位であるが、この西側半分が盗掘され床面が荒らされているために枕が失われているが、両側壁を見ると枕の位置に赤色顔料が見られないことから、むしろ枕の存在証明をしている。石材の間に粘土目張りがある。

棺内床面の荒らされていない足元側半分は、完全ではないが床面の保存がよく、左足側壁に大型透孔付柳葉形鉄鏃2点が切先を足元に向けて、右腰部に鉄剣先が切先を頭部に向け浮いて発見された。左足部の鉄鏃は原位置を保っているが、右腰の鉄剣が盗掘時に茎側を持上げたために反転したものと思われ、切先の位置が原位置に近く、足元を向いていたと考える。



第132図 4号墳丘墓1号棺实测图(1/30)



第133图 4号墳丘墓2号棺实测图(1/30)

#### 4号棺（図版10・92・93、第136～139図）

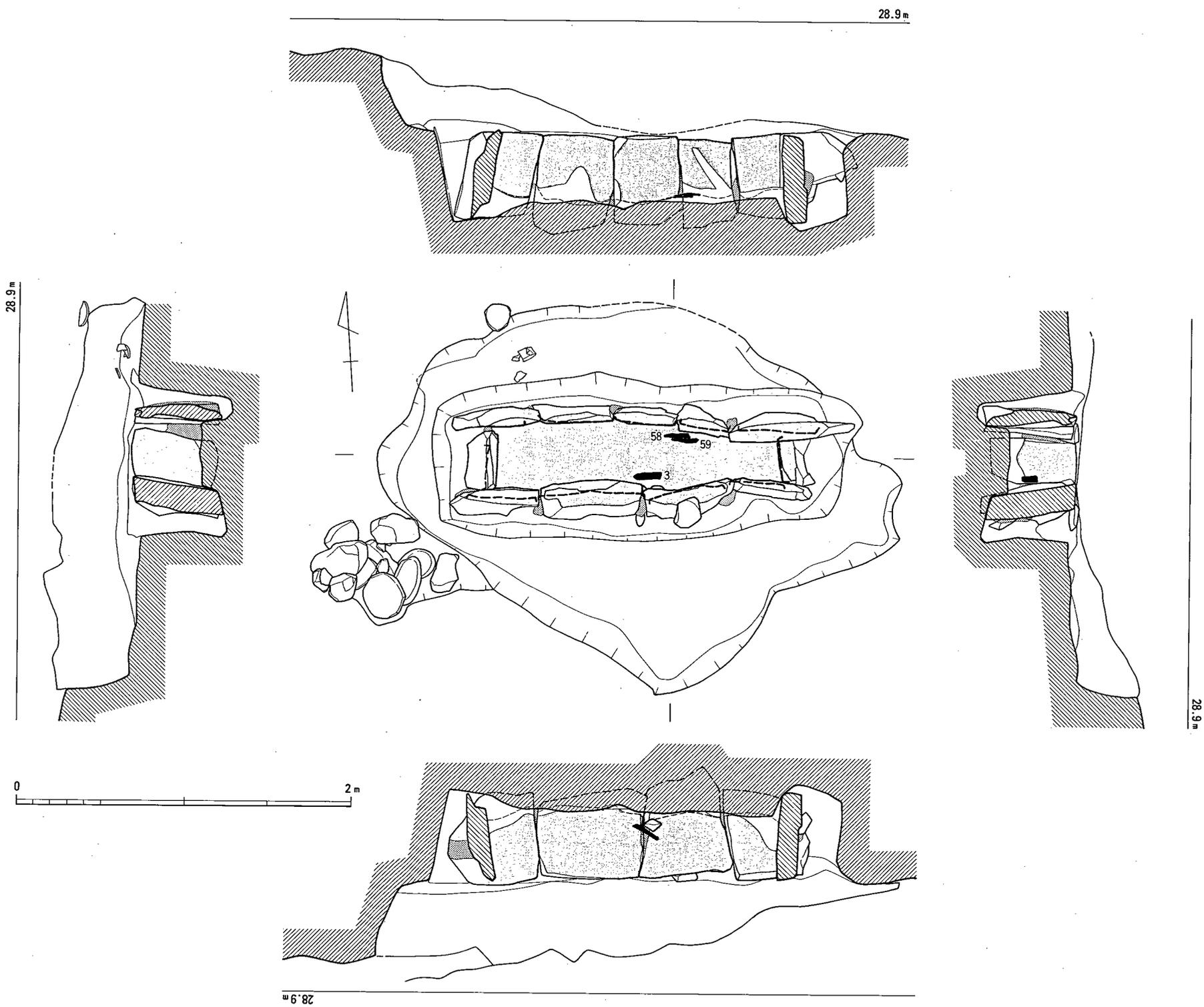
4号棺は、現状の墳頂部からやや南に位置するものの、実質的な墳丘中央部を占めて盟主的存在の箱式石棺墓。墳丘断面図では、この付近の上層部に土層の乱れがあるのと、標石の存在から墓壙の輪郭線の検出に時間を費した。結果は、第138図のように4号棺の一部が盗掘によって荒らされているためであったが、墓壙が完存し、石棺の蓋石1枚が移動して、棺内の頭部のみが荒らされていた。この調査中に、表土層で鉄剣片2点・大型鉄鏃1点が出土し、蓋石近くで赤色顔料混入土から細形管玉10点が出土した。

墓壙は、2つの角が隅丸の方形の平面形を呈する大型で、整美な形態をしている。墓壙の対角線上に石棺を安置し、この時点で石棺の両側面が広い空間として保たれることになるが、墓壙掘削当初は平坦であった床面が、石棺掘方掘込みの上げ土によって厚さ10～20cmにわたって床上げされている。この上面で赤色顔料が部分的に検出され、堅く締まっていることからこの面が埋葬時の作業床面であることがわかる。墓壙埋土上層には、残存した標石と思われる数個の河原石があった。

石棺蓋石は、北東側から大きな順に5枚の安山岩の板石が使用されているが、中央の1枚だけが盗掘時に南側に移動していた。可能なかぎり原位置近くに復原したが、あと10cm程北側が原位置と思われる。蓋石の目張りには、灰白色粘土で周縁を含めて密封し、小石が使用されていない。墓壙南側の2つの粘土塊は、盗掘時に蓋石と共に移動したものである可能性が高い。蓋石の裏面の全面には、赤色顔料が塗布されている。

石棺は、両小口に各1枚、北側壁に3枚、南側壁に4枚の安山岩板石を使用して、整然と組立てられている。石棺床面内法は、長さ1.85m、北東側頭部小口幅0.54m、最大幅（胸部）0.55m、足元最小幅0.42m、深さ0.55mの大きさとなっている。石棺に使用された石材の大きさは、頭部右側壁材が最大で、長さ83cm、高さ59cm、厚さ10cmで、2番目に大きいのが、やはり頭部の左側壁材である。その左側壁の内側に工具痕と思われる4本の影みがある。石棺の組立後には、石材間の間隙を内外両面から丁寧な粘土目張を行い、内面全体に赤色顔料を塗布している。

床面には、北東側小口に削出枕を付設し、全面に赤色顔料を敷いているが、前述したように枕上の頭部から胸部付近の赤色顔料が盗掘時にきれいに浚われている。しかし、盗掘されているといえども床面は完存しており、まさに副葬品と赤色顔料が浚われた程度である。ところが、棺中央部から足元に赤色顔料が完存しており、盗掘時に扱われた形跡がなかった。はたして、棺中央部から細形管玉と極小勾玉が出土し、続いて素環頭刀子が切先を南に向けて副葬されていた。さらに足元小口壁から28cmのところ河原石を利用した石枕がやや左寄りに置かれている。この石枕は、第139図のように長さ17.1cm、最大幅8cm、厚さ3.8cmの大きさで、上面を水



第134图 4号墳丘墓3号棺实测图(1/30)

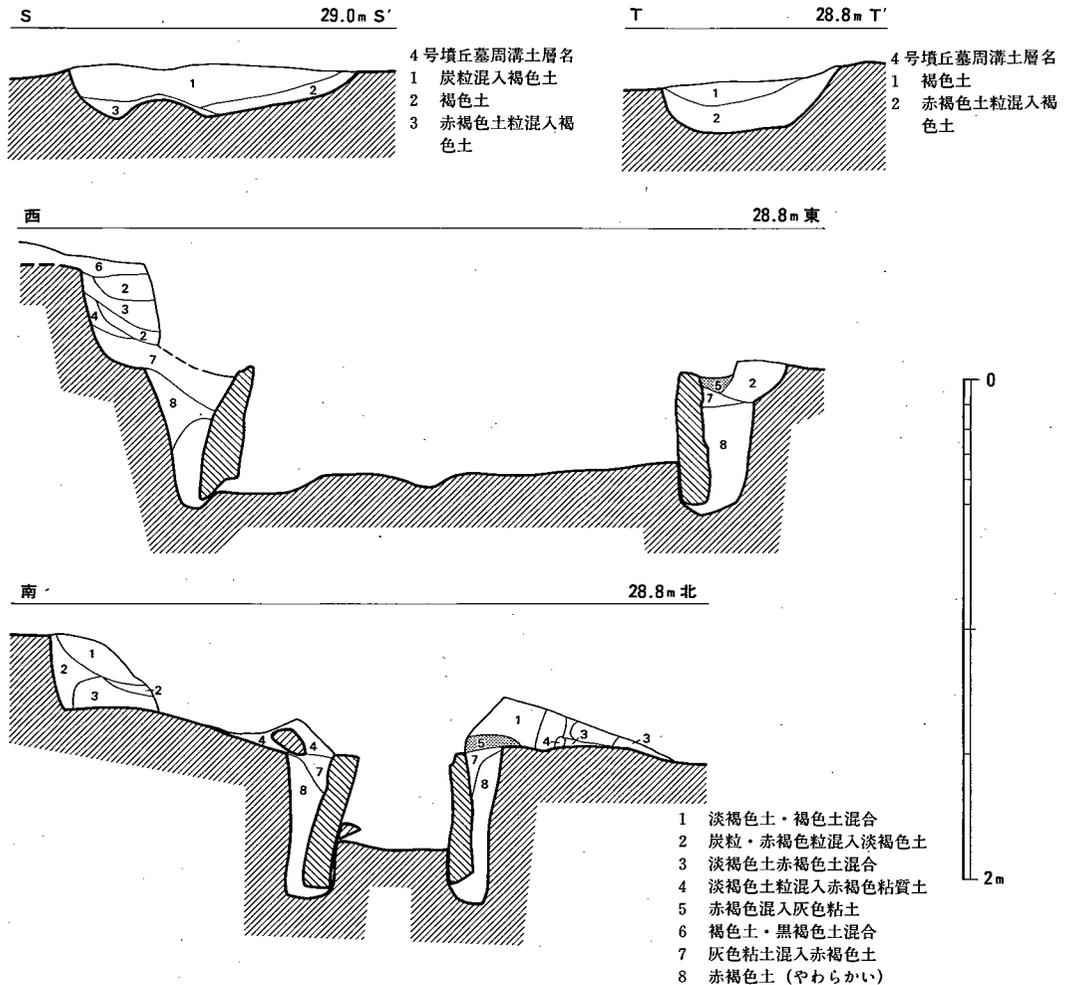
平に設置していることと、その横に完形鏡を副葬することから複数埋葬に伴う石枕とすることができる。

副葬された鏡は、直径13cmの完形の「位至三公」銘蝙蝠座内行花文鏡で、文様面を上にして出土し、鏡の下と南側に人骨片も検出された。鏡は、布で包まれていたらしく、鈕の部分の土を除去したところ、図版112-3のような布目圧痕が見られる。また、鏡の下の床面と文様面の一部に他と違った鮮やかな朱色が残っている。

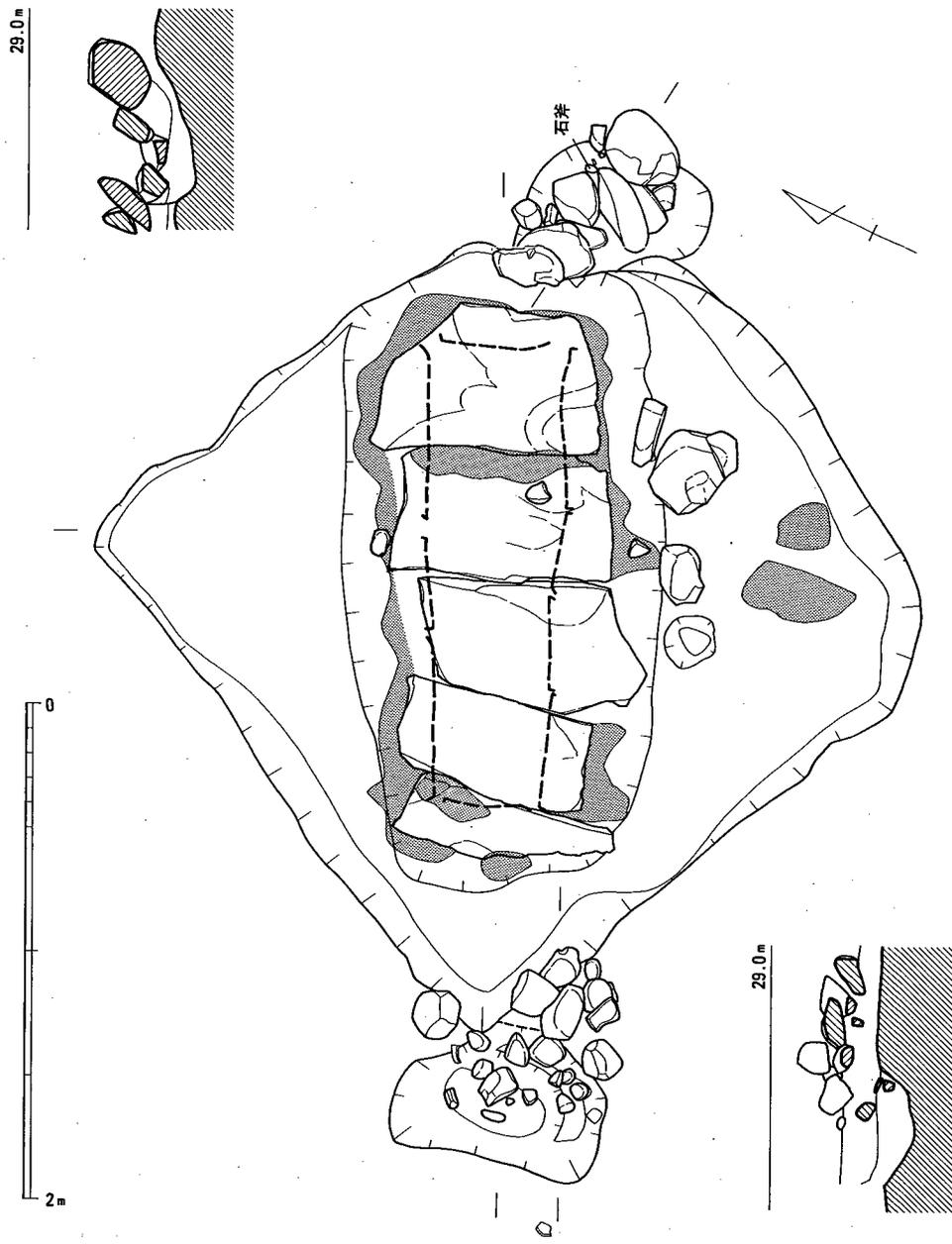
人骨は、石枕の南側と南西側、素環頭刀子の切先部でも検出されたがいずれも小片である。

石棺掘方は、石材が比較的薄いにもかかわらず広目に掘込まれている。

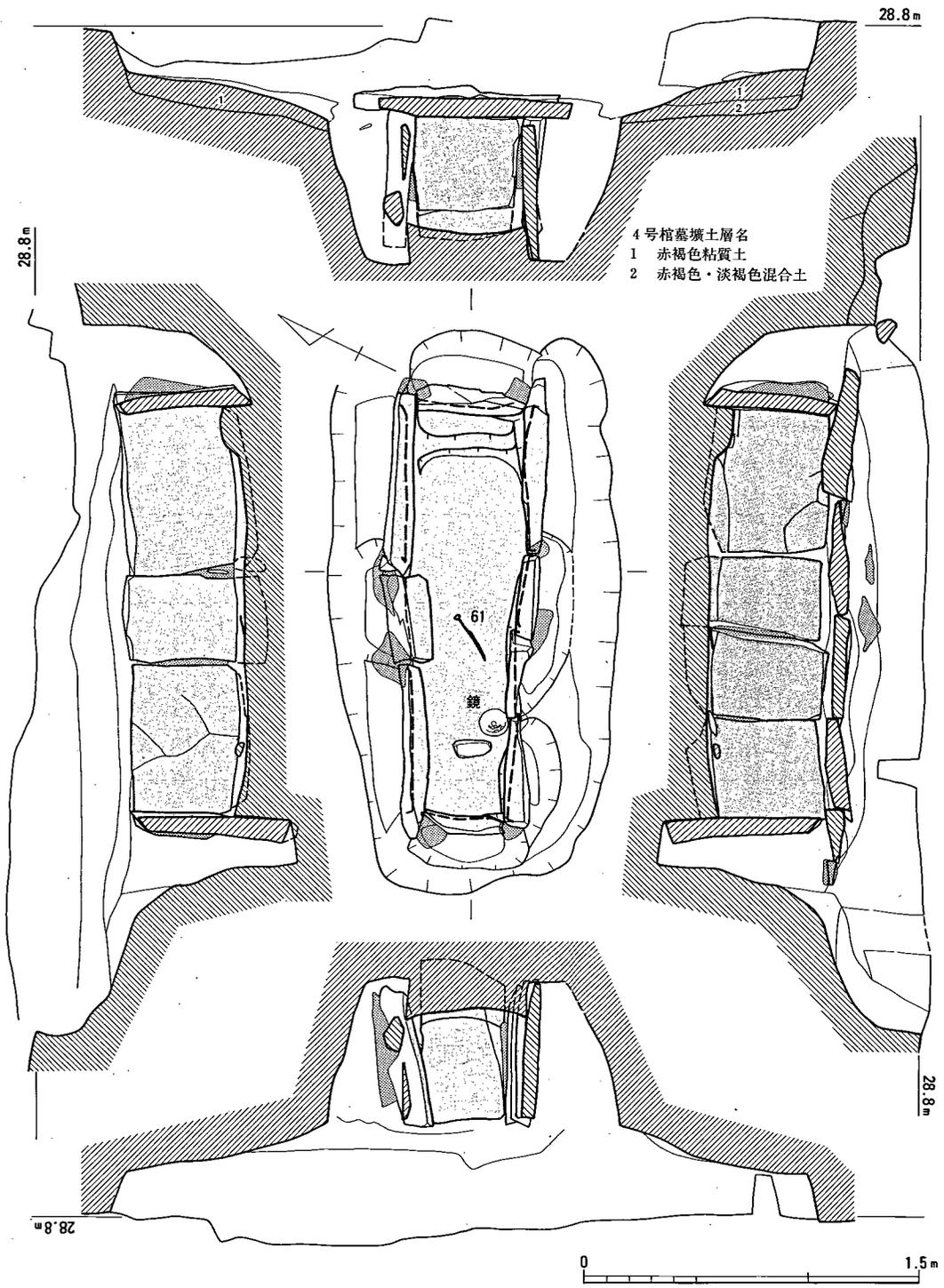
墓壙を埋戻した後になるが、墓壙の両小口側角に小型隅丸土壙に伴って径10~35cmの河原石



第135図 4号墳丘墓周溝・3号棺土層断面実測図(1/30)



第136图 4号墳丘墓4号棺実測図①(1/30)



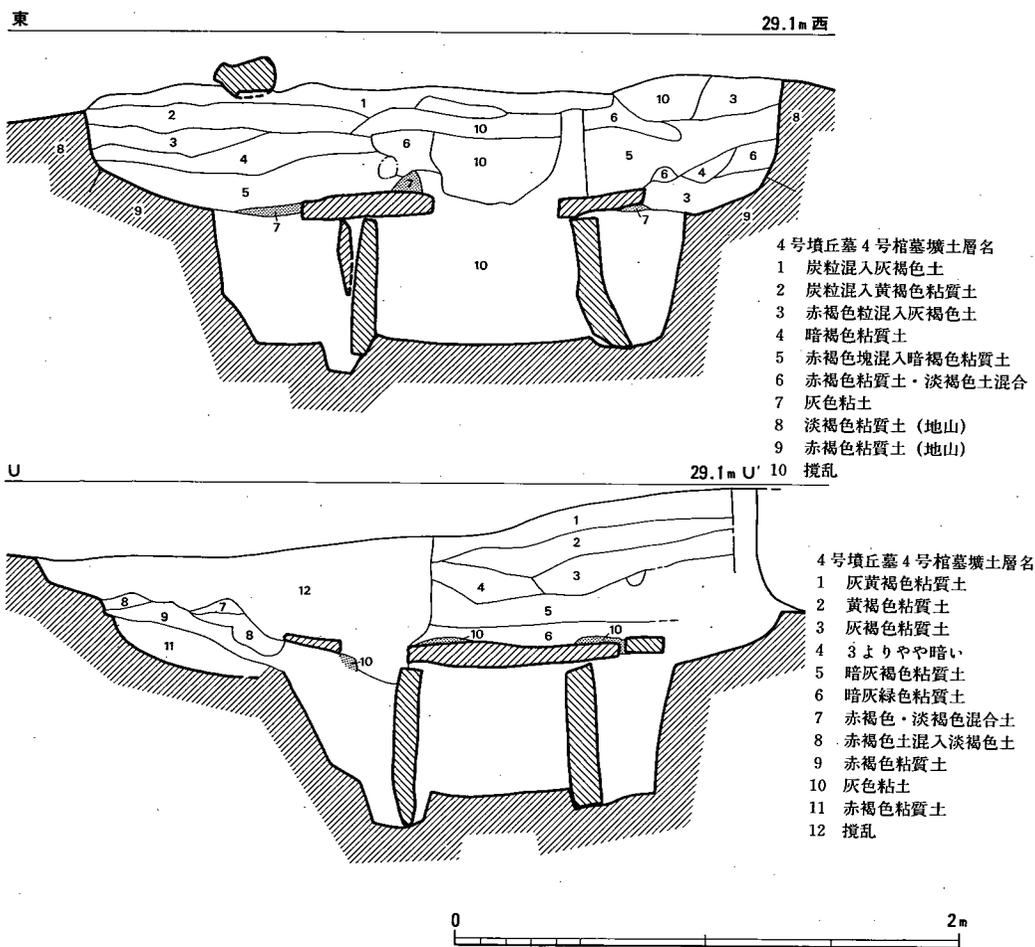
第137图 4号墳丘墓4号棺实测图②(1/30)

の集石があり、後世のものとも思えない。同様なものは、2号墳丘墓1号棺や4号墳丘墓の1号と3号棺の間にもあり、墓壙の位置を示す標石の一種と考えられる。

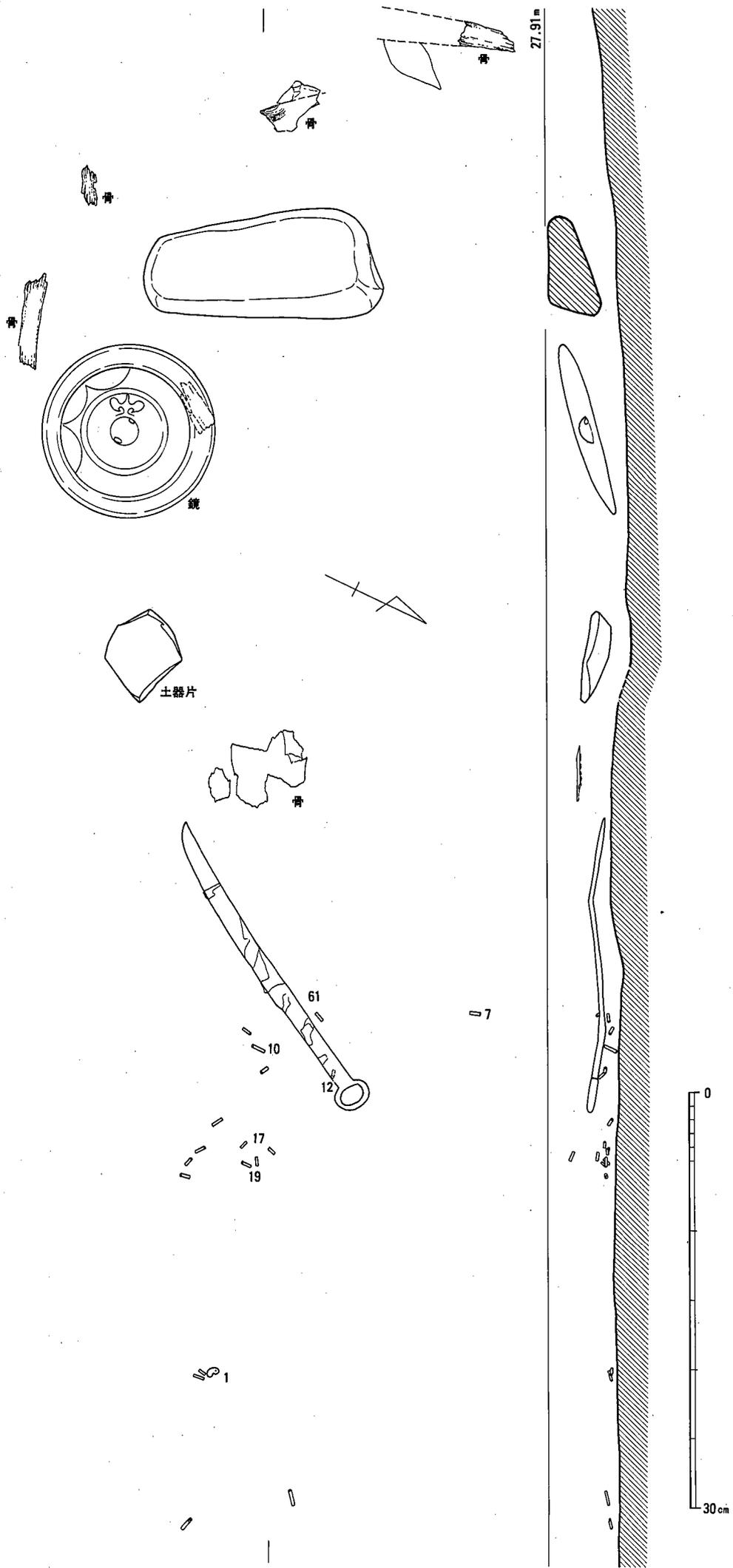
5号棺 (図版94、第140~142図)

5号棺は、一群の南端に位置する箱式石棺墓であるが、蓋石の半分を失い、棺内全体を荒らされていた。墓壙は、長楕円形であるが、その中で石棺を対角線を意図して安置している。蓋石は、西側の3枚の片岩板石が残っているが、目張りに小石が利用される以外に粘土が使用されていない。蓋石の裏面には、赤色顔料が塗布されている。

石棺は、両小口に各1枚、両側壁に各5枚の片岩板石を立並べ、間隙を外側から粘土で目張



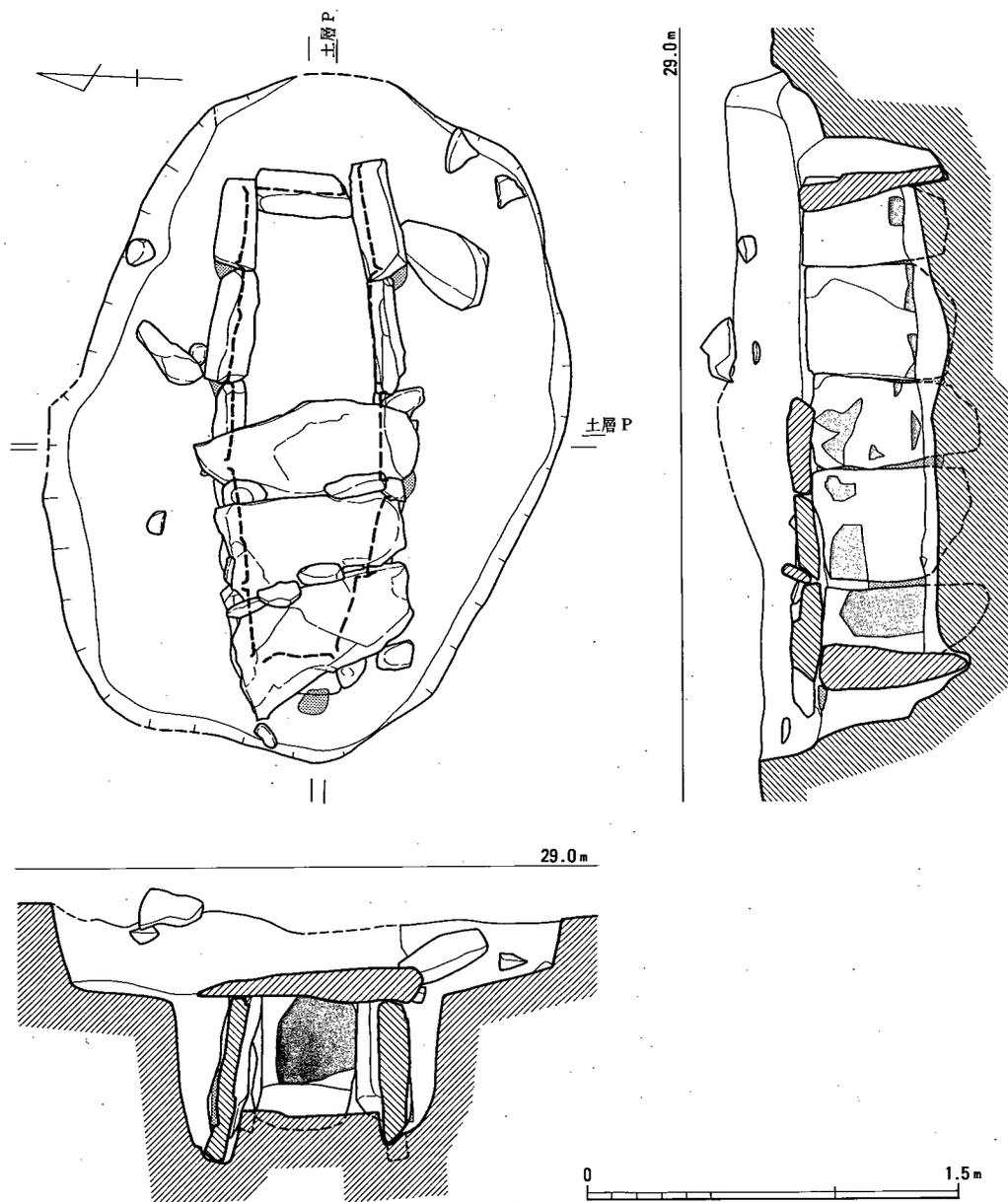
第138図 4号墳丘墓4号棺墓壙土層断面実測図(1/30)



第139图 4号墳丘墓4号棺副葬品出土状态实测图(1/4)

りしている。棺内面には、部分的に赤色顔料が残っているが、当初は全面に塗布されていたものとする。棺中央部が最大幅となる。

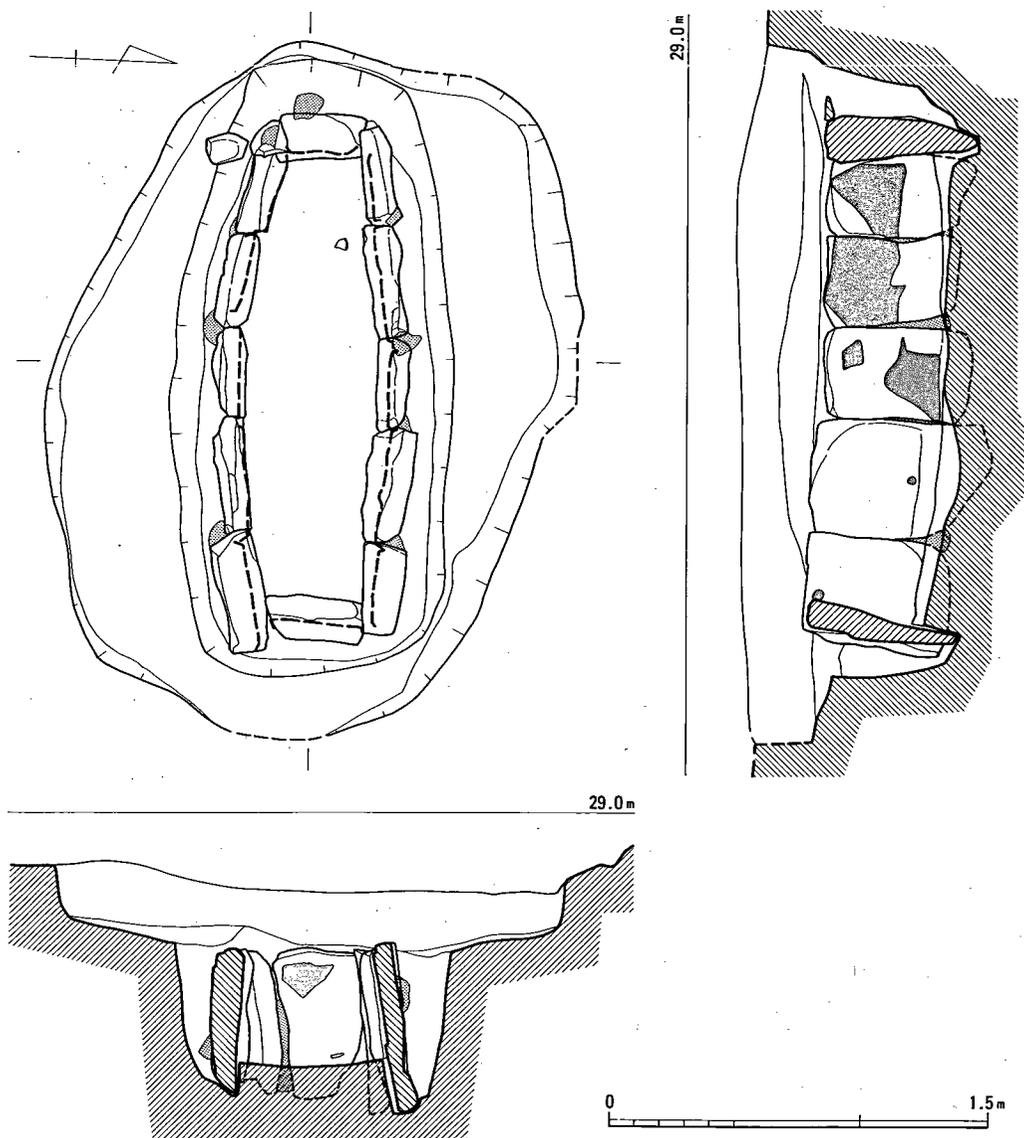
棺内床面は、完全に荒らされて原状を保っている部分がまったくなく、とくに頭部と思われる東側と胸部が深く掘られている。副葬品があったとも考えられる。



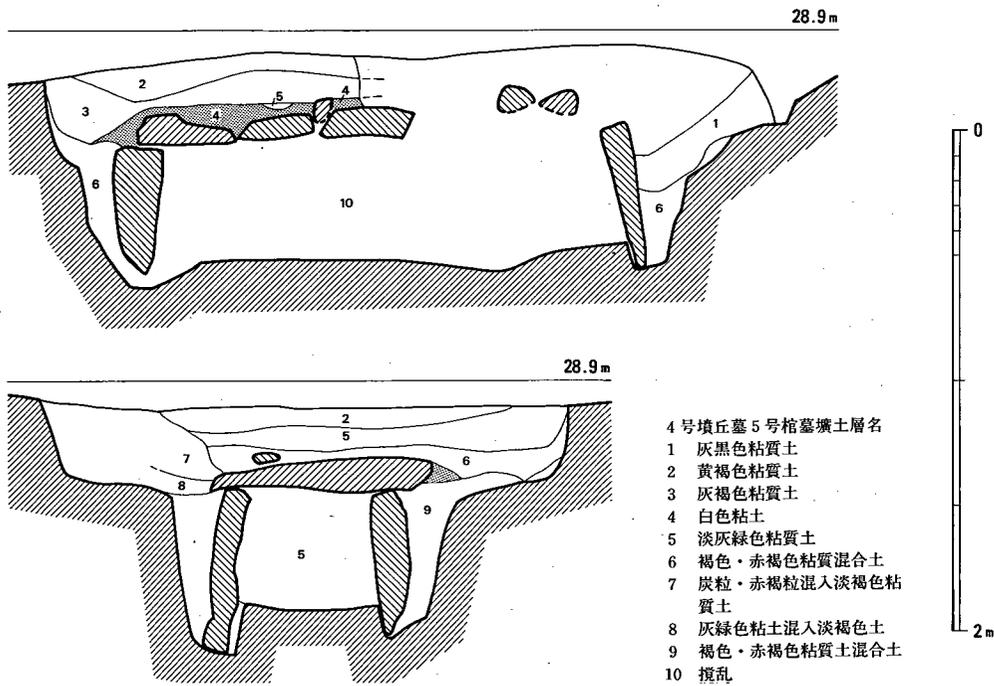
140図 4号墳丘蓋5号棺実測図①(1/30)

6号棺 (図版95-1、第143図)

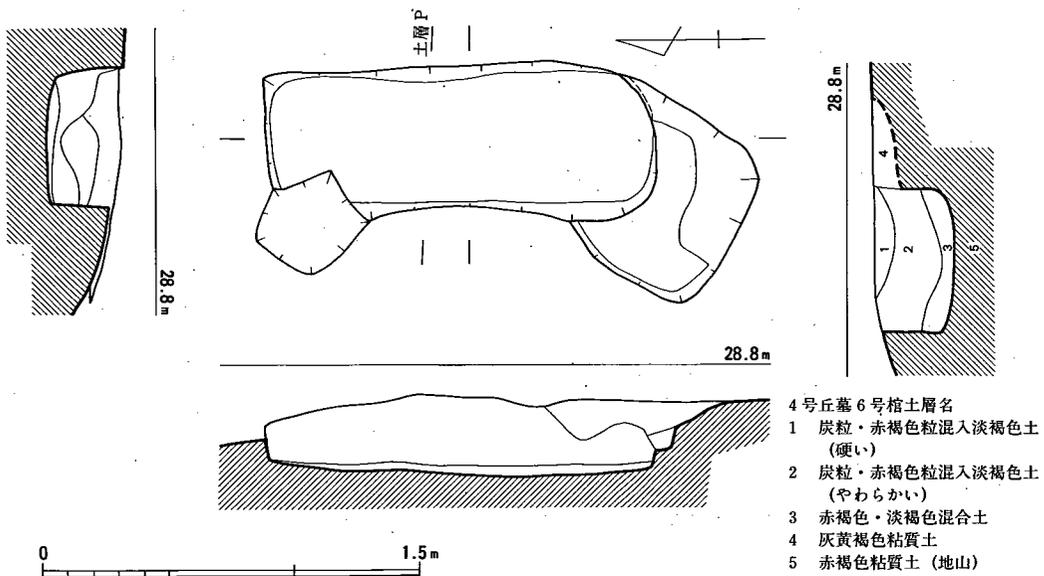
6号棺は、墳丘の南西側にある土壙であるが、赤色顔料や粘土が検出されず、埋葬遺構としての確証がない。形態としては、土壙墓であることから番号を付したが、時期が違う可能性がある。



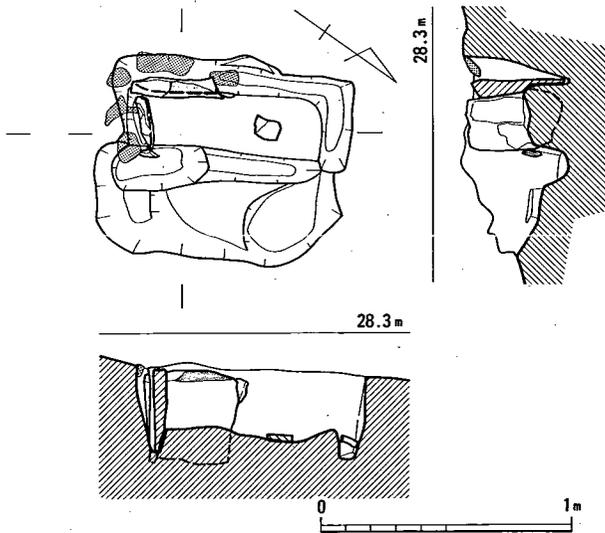
第141図 4号墳丘墓5号棺実測図②(1/30)



第142図 4号墳丘墓5号棺墓墳土層断面実測図(1/30)



第143図 4号墳丘墓6号棺実測図(1/30)



第144図 4号墳丘墓7号棺実測図(1/30)

7号棺 (図版95-2・3、第144図)

7号棺は、墳丘の北端にあり重複している3号棺と共に荒らされているので、新古関係が不明であるが、一般的に7号棺が新しいと考える。7号棺は、本遺跡最小型箱式石棺であることがこの墳丘墓の特徴ともなる。石棺の北東側に墓壇らしきものが見えるのは、床面が低いことから攪乱された時点に掘られたものである。

石棺は、両小口に各1枚、両側壁に各2枚の板石が使用された痕

跡があり、残っている小口材が片岩、側壁材が安山岩が利用されている。

棺内床面も完全に荒らされて枕など不明であるが、北西小口が広いことから頭部と考える。

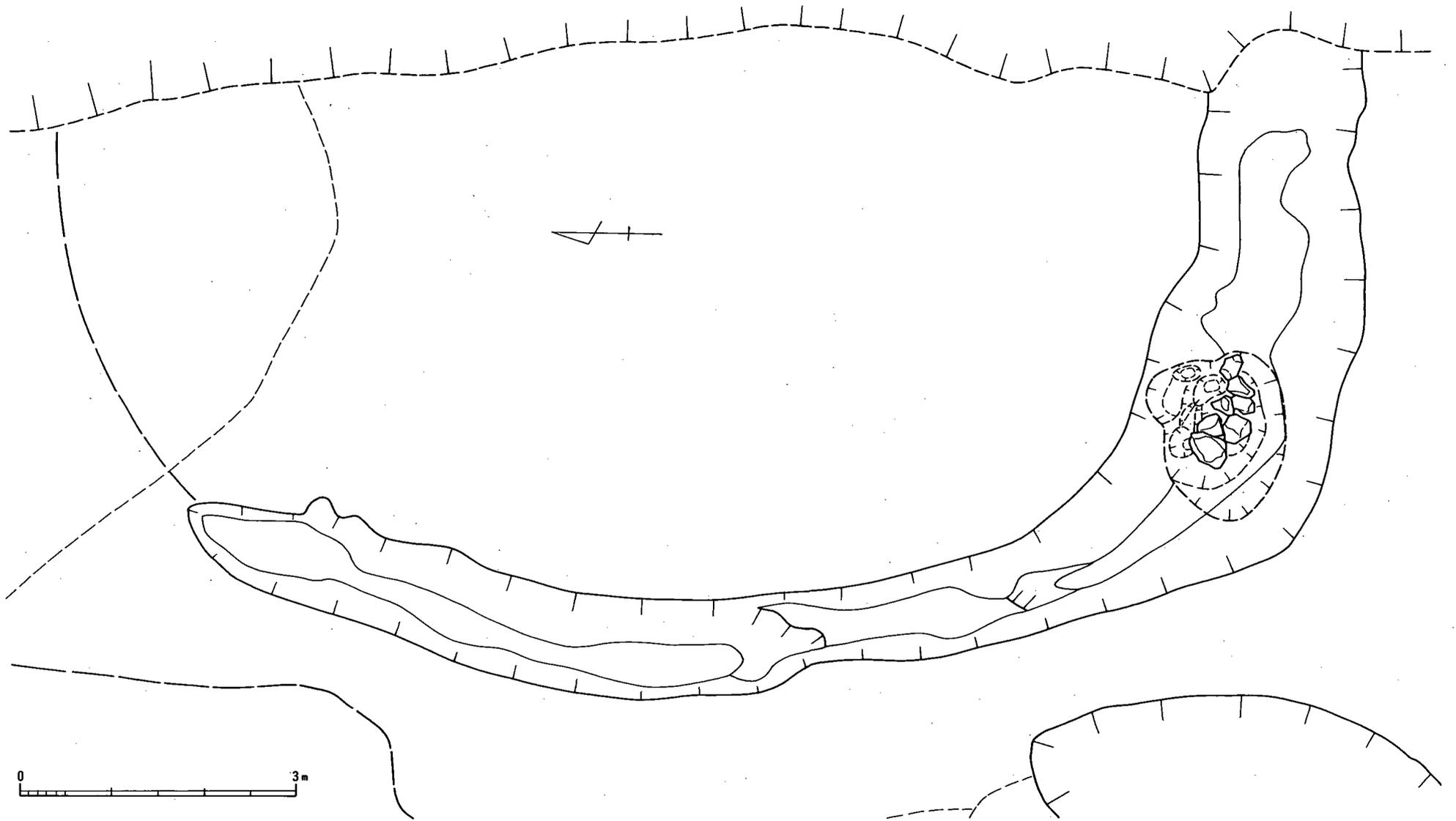
4号墳丘墓を総括すると、第1に主体部の配列が、墳丘の長軸方向に5基が並び、棺の主軸方向が東西側にほぼ一定していることに気付く。頭位方向は、3号・7号棺のみが逆方向となるが、列から離れる2号棺が他と同じ方向であることから、埋葬方位が意識された可能性が強い。

第2に主体部の全部が箱式石棺墓であり、しかも小児用石棺墓は、この遺跡で唯一のもの。1号棺以外の主体部が荒らされているのが残念であるが、副葬品保有の確率が高いものと考えられる。盟主的存在の4号棺は、足元に完形鏡を副葬するが当初の頭部が荒らされていること、これと並列する2号棺が最大規模で、最深部に埋置され4号棺と双壁をなすと考えられること。

第3に、4号棺の複数埋葬の可能性を今後検討しなければならないし、時期的にも古墳出現前夜であり、次に築造された1号墳丘墓との問題点も多い。

#### ⑤ 5号墳丘墓 (図版96・97、第145~147図)

5号墳丘墓は、分布調査の段階で墳丘が確認されなかったことから、試掘トレンチを設定したところ、河原石を含む周溝が確認されていた。実際に発掘調査を実施した段階でも、墳丘が完全に削平され、中央部に弥生終末の竪穴住居跡がかろうじて床面を残していた。この竪穴住

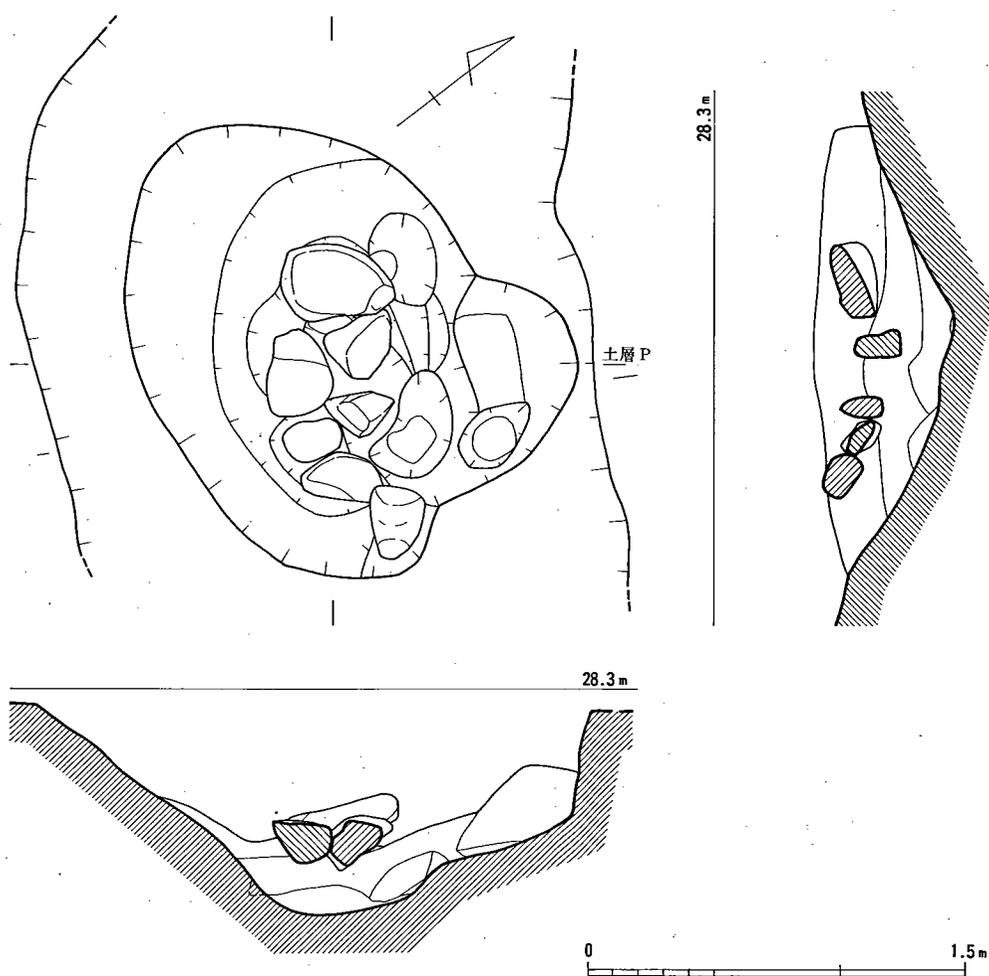


第145图 5号填丘墓遺構配置図(1/60)

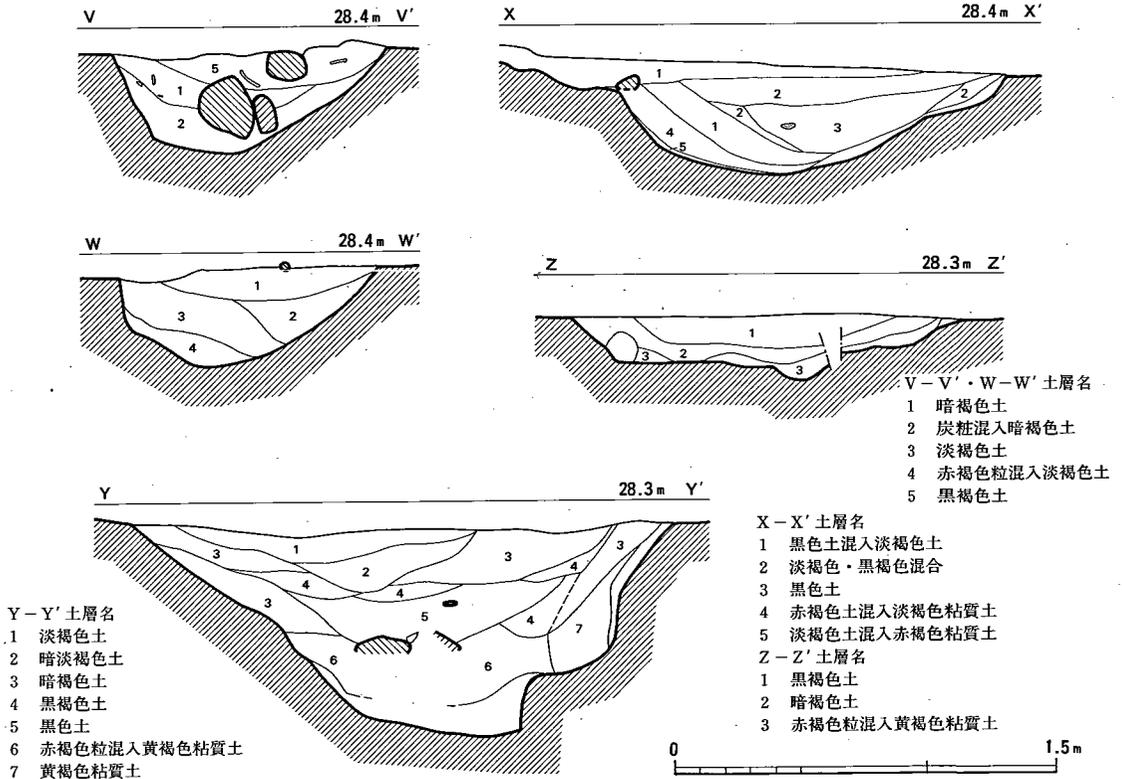
居跡の存在から、少なくとも地山面が50cm以上削平されていることがわかり、隣接する墳丘墓の墳丘1段目の地山整形の規模が大きかったことも証明している。

5号墳丘墓は、墳丘の地山面まで削平されているだけでなく、丘尾切断的な周溝の東側約4割以上を失っている。残された周溝から復原できる墳丘基底部の規模は、南北径約13m、東西径約11mの大きさで、平面形が楕円形をしていたと思われる。

周溝は、現状で地山の高い南と西側から区画独立するためのよう掘削されているが、墳丘中央部が現状より50cm以上高いとすると、溝として全周していた可能性がある。周溝横断面形は、第147図でわかるように、墳丘側がなだらかで、外側が急傾斜になっている。周溝内には、



第146図 5号墳丘墓周溝内遺構実測図(1/30)



第147図 5号墳丘墓周溝土層断面実測図(1/30)

北西側で径10~20cm大の河原石が多く、土器も底面から若干出土している。また、周溝が最も広がっている南西角が急にくぼむ部分があり、この埋土中層に径20~50cm大の河原石が集中しているが、その他に出土品などもなかった(第146図)。

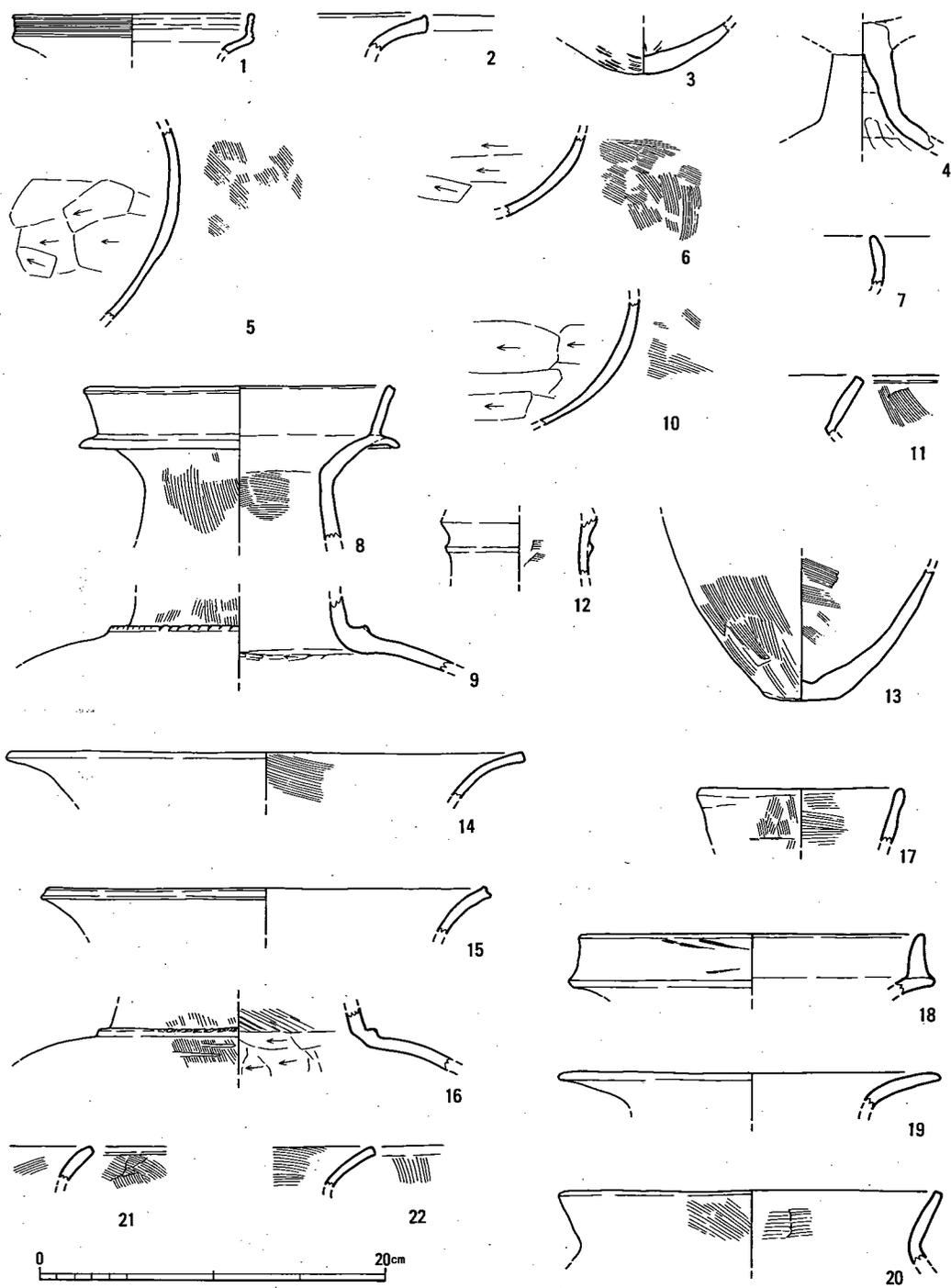
## (2) 遺物

### ① 土器

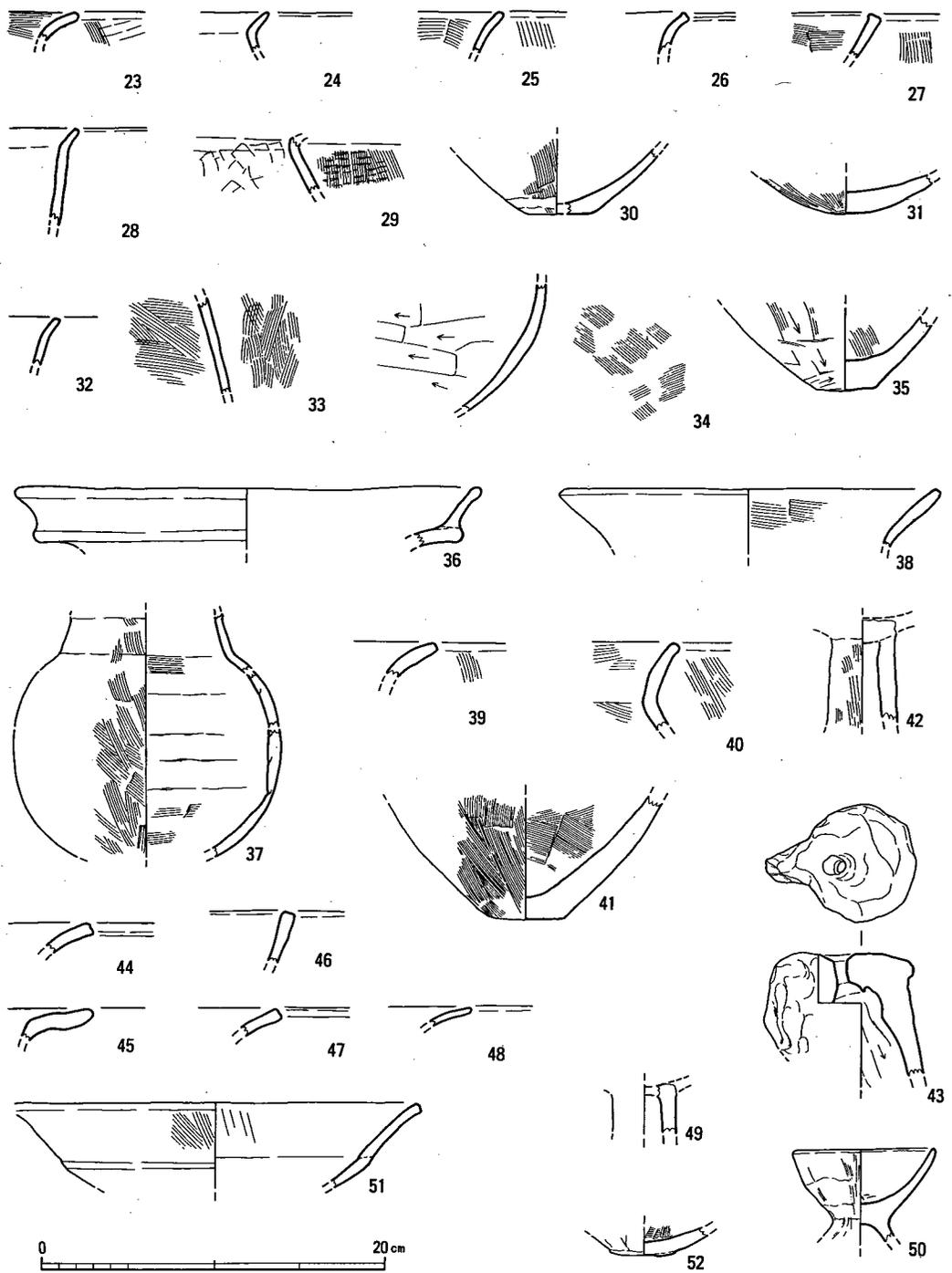
#### n 1号墳丘墓(古墳)出土土器

1号墳丘墓は、北側に突出部をもつ前方後方墳であるが、墳丘がかなり破壊されているところから、供献品としてまとまって出土するのではなく、墳丘と周溝に散乱して出土した。

第148図1~4は、主体部墓壙内及び木棺内に混入していた土器破片である。1は、直立する口縁外面に櫛描平行沈線文を施した甕細片。2は甕口縁と思われるが摩滅し、時期等不明。3は、丸底の甕底部で、外面にタタキ痕と煤が付着し、内面が工具によってケズリ状にナデている。4は、短脚の古式土師器高杯脚部で、外面が摩滅しているがナデらしき調整、内面が指



第148图 1号填丘墓出土土器实测图①(1/4)



第149图 1号墳丘墓出土土器实测图②(1/4)

先によるヨコナデが残る。脚部を杯部に挿入したらしく、剝離面が上端側面に残っている。

5～7は、墳丘の北斜面から出土した破片である。5・6は甕胴部破片で、外面に割合細かいハケ目、下端をケズリ後、ハケ目又はナデている。内面はヨコ方向のケズリであるが器壁が割合厚い。同一個体の可能性がある。7は、碗形土器と思われるが、大きい割に手捏的粗製の調整となっている。

8・10～14は、墳丘の北東斜面と盛土中から出土した。8は、主体部墓壇内と北東斜面から出土した破片が接合できたもので、9・16の肩部と同一個体の可能性がある複合口縁壺。口縁部が外反した下半部に直線的な口唇をのせ、頸部が末広がりとなる特徴をもつ。器面調整は、口縁部内外面共にヨコナデ、頸部内外面がハケ目仕上げとなっている。10は、5・6と同一個体と思われる甕胴部で、調整も同じ。11・12は墳丘盛土中から出土した混入品で、11が弥生後期甕、12が弥生中期長頸壺であろう。13は北東斜面出土であるが、平底に近い底部であることから弥生後期後半の甕が混入したものであろう。14は、直径が30cmと大きく、外反も強いことから弥生終末の高杯の破片の可能性がある。

9・15～17は、墳丘東斜面から出土した破片。9・16は同一個体の可能性のある複合口縁壺の肩部で、キザミ目を施す三角形突帯をめぐらす。器面調整は、外面がハケ目のち一部ミガキ、胴部内面をヘラケズリしている。15の口縁部は、端部の処理が丁寧であることから広口壺である可能性もあり、時期が古くて特定できない。おそらく、墳丘築造時の混入品であろう。17は盛土中の出土で、直口壺または小型甕の口縁部で、ハケ目調整などから弥生終末前後の時期のものであろう。

18～31の土器片は、墳丘南東側盛土中出土品で、墳丘築造時、またはそれ以前の時期のものである。18は複合口縁壺の口縁部で、外反部と立上がり部の接合部が明瞭に観察できる。器面調整は、内外面共にヨコナデ仕上げであるが、外面にヘラ描文状の工具痕が見られる。時期は、弥生終末であろう。19の口縁部は、どちらかといえば、傾斜角などから壺の可能性があるが、壺としても器形が不明であり、時期も特定できない。20の甕口縁部は、傾斜角やハケ目調整などから弥生終末に特定できる。21～27も甕口縁部であるが、これも弥生終末またはそれよりやや古いものであろう。28の甕口縁部は、胴部の傾斜と屈曲具合から弥生前期末に属するものが混入したのであろう。29の甕肩部片は、外面にタタキの後にハケ目、内面が工具によるケズリ状のナデ調整され、口縁の屈曲が鋭いらしいところから弥生終末より古墳前期とされよう。30の甕底部は、弥生後期後半の底部の特徴をもつところから混入品であろう。31の丸底は、肉厚であることから甕底部と思われ、外面がハケ目、内面にケズリ状指ナデ調整であるところから、弥生終末前後の時期である。

32～34は墳丘南側出土土器片で、32が甕口縁、33・34が甕胴部であるが、32・33が時期不明、34が5・6・10と同一個体と思われる古墳前期であろう。

35・36は墳丘南西側出土土器片で、35の甕底部が外面にハケ工具によるケズリ、内面にハケ目後ナデ、底面に靫・藁状圧痕があり、弥生終末。36の複合口縁壺は、立上がりが外方になりに傾斜することから、弥生終末から古墳前期の幅で考えられる。

37～43は、墳丘の北または北西周溝内出土土器で、大半が小片であることから、1号墳丘墓に直接関連するものも少ない。37の壺は、口縁部を欠損しているが、複合口縁の可能性が強く、形態から弥生終末から古墳前期と思われ、1号墳丘墓に関連するものであろう。器面調整は、内外面共にハケ目後ナデで、内面に粘土継目が明瞭に残っている。38～40は甕口縁で弥生終末前後と思われる。41は甕底部で、底面に布目圧痕後ナデしており、弥生後期後半の時期の混入品。42は、弥生終末前後の高杯脚部片。43は、上部一方に取手を付設する支脚で、上面に円孔を穿つ弥生終末前後の時期のもの。

44～50は墳丘西側周溝内出土土器で、50以外が混入品と思われる。44～47は甕口縁、48・49が高杯口縁と脚部で、いずれも弥生終末前後の時期。50は、周溝の2号墳丘墓側で出土しているところから、そちらに関連する可能性もある小型台付鉢で、器面調整が指圧痕や爪痕が残り、手捏の仕上のままである。

51は、墳丘西側裾部に並ぶ貼石の掘方内から出土した弥生終末の西新町式高杯の破片であるが、器面調整にヘラミガキが見られないところから、若干新しい様相かもしれない。

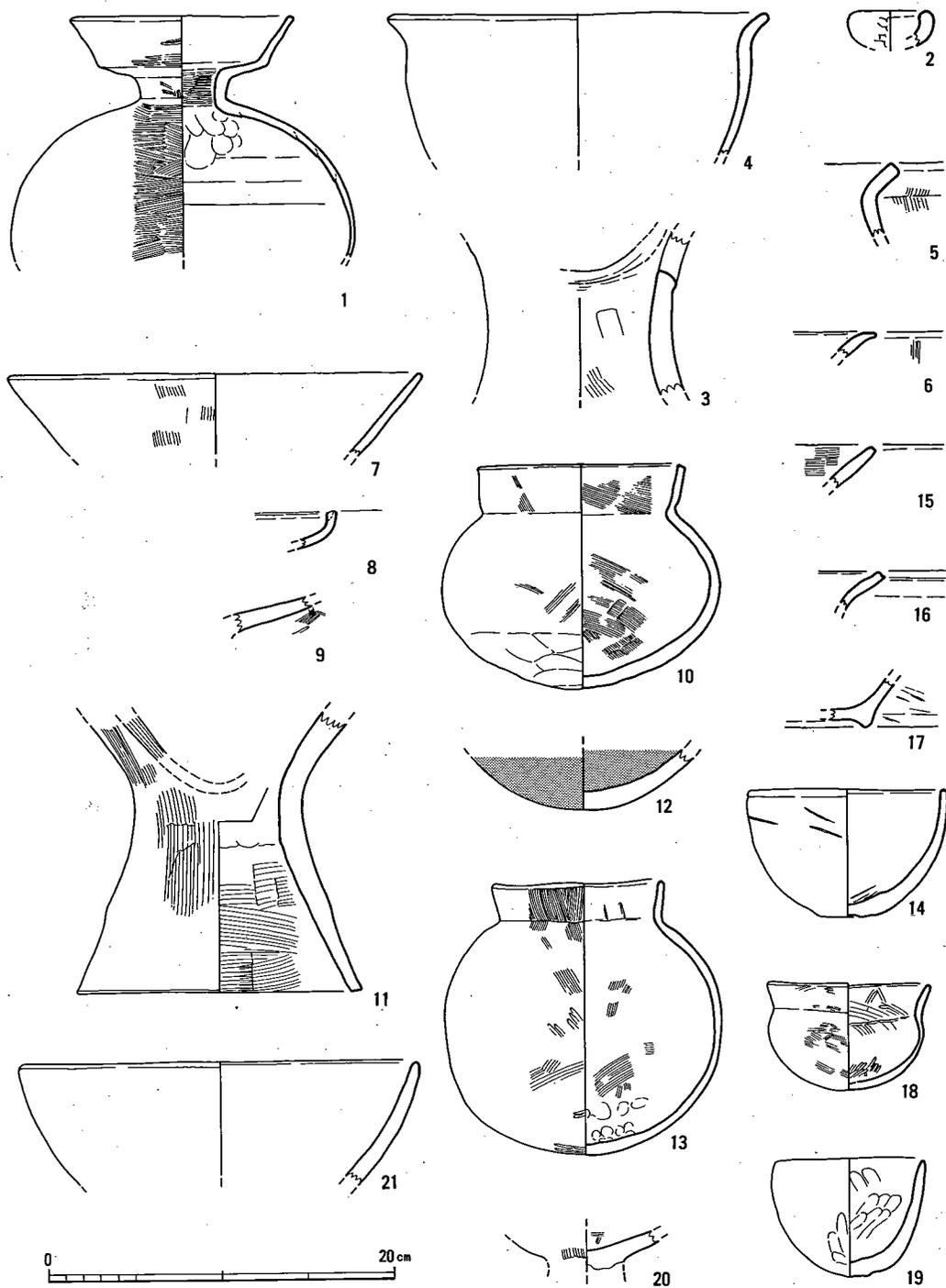
52は、墳丘突出部東側の攪乱された地区から出土した、弥生後期後半の甕底部片。

## ○ 2号墳丘墓出土土器

2号墳丘墓は、西側墳丘を半分近く失っているが、墳丘上面の保存が割合に良かったらしく、1号棺を中心とした段築状墳丘成形があり、この付近で墳丘上祭祀に伴ったと思われる土器が細片ながら検出できた。

第150図1～3は、墳丘北東斜面から東周溝から出土した土器片。1の複合口縁壺は、細片となっていたところから図上復原したもので、器肉が薄く、口頸部内外面と胴部外面に丁寧で細かなヨコヘラミガキ調整を施している。胴部内面は、上端に指圧痕、下半をケズリ、中位に粘土継目が明瞭に残る。器形の特徴は、上開きの頸部で、口縁と頸部が明瞭に段をもち、球形胴も下端の具合がわずかに扁球さみであるところから、庄内古式であることを示している。2は、塊形手捏土器の細片である。3は、東周溝から出土した口縁片側に抉りのある器台片であるが、器台にしては器面調整がナデ仕上げされ丁寧である。

4は、1号棺墓壇内南側から出土した弥生前期末甕で、混入品である。5は、2号棺内に混入していた甕口縁細片で、2号棺に直接関係ないだろう。



第150图 2·3号墳丘墓出土土器实测图(1/4)

### P 3号墳丘墓出土土器

3号墳丘墓の墳頂部には、現代に建立されたと思われる祠堂の敷石が残っていたところから、墳丘頂部が削平されており、墳丘上では土器が出土しなかった。しかし、墳丘東側裾に周溝の一部と考えられる長楕円形のくぼみから器形が復原できない土器細片が出土している。

6～9は、攪乱された1号棺内出土の高杯片である。6は、高杯とした場合が時期が新しくなるかもしれない。7～9は、同一個体と思われる杯部が深い高杯。全体に摩滅しているが、部分的にハケ目とミガキ調整が残っている。

10は、2号棺外に供献された直口壺。直立に近い口縁と扁球形の胴部からなり、全体にハケ目調整されるが、胴部外面下半がケズリによって丸底にされたままとなっている。大きさは、口径11.9～12.9cm、器高12.95cm、胴最大径16cm。11は、2号棺墓壇内最上層出土破片と4号墳丘墓周溝南側上層から出土した破片が接合できたもので、本来が墳丘上にあった器台と理解する。この器台も口縁片側に挟りをもつ形式で、器面は粗いハケ目調整となっている。底径は16.5cmの大きさ。2号棺の供献土器は、弥生終末。

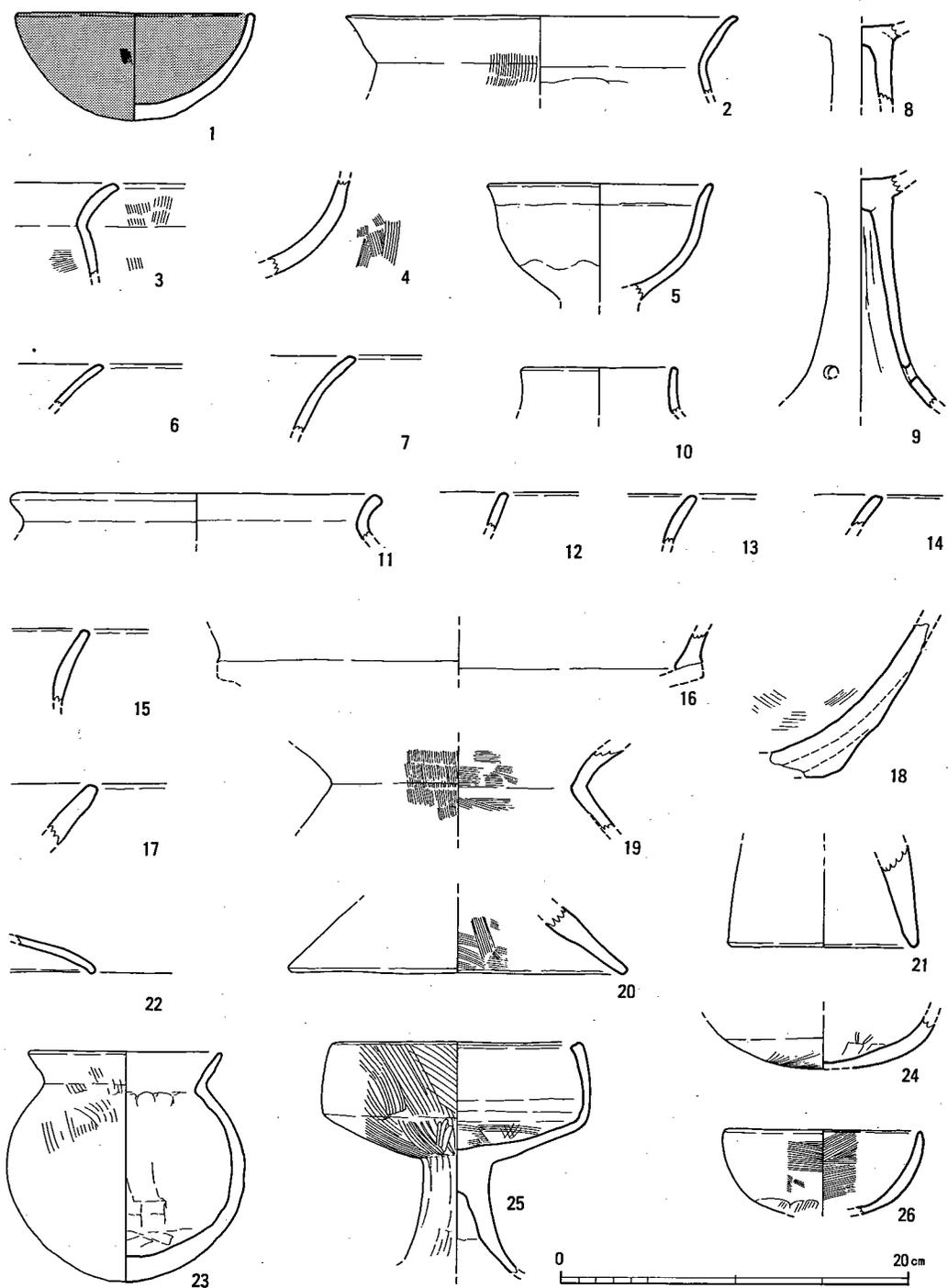
12は、2号棺と11号棺の間に存在する攪乱土壇内から赤色顔料と共に出土した底部片で、内外面全体に赤色顔料が付着している。内面は粗いケズリであるが、外面が割合丁寧にナデられていることから壺の底部である可能性がある。

13～17は、4号棺墓壇内から出土した土器で、13・14が供献土器。13は、割合大型の直口壺で、器面調整が口縁内側にヨコナデ、外面にタテハケ目、胴部外面上半にハケ目後の部分的なナデとミガキ、下半部がケズリで丸底とした後のナデと部分的ミガキとなっている。大きさは、口径9.6cm、器高15.6cm、胴最大径15.9cm。14は、凸レンズ状を呈する平底の鉢で、口縁内外面をヨコナデ、胴部外面上半をタタキ後にナデ、下半をケズリ後ナデ、内面をナデ調整している。底部はケズリのままにしている。大きさは、口径11.5cm、器高7.4cm。16～18は混入品で、15・16が甕口縁、17が縄文土器底部である。13・14の時期は、弥生終末のうちでも古段階に属するものであろう。

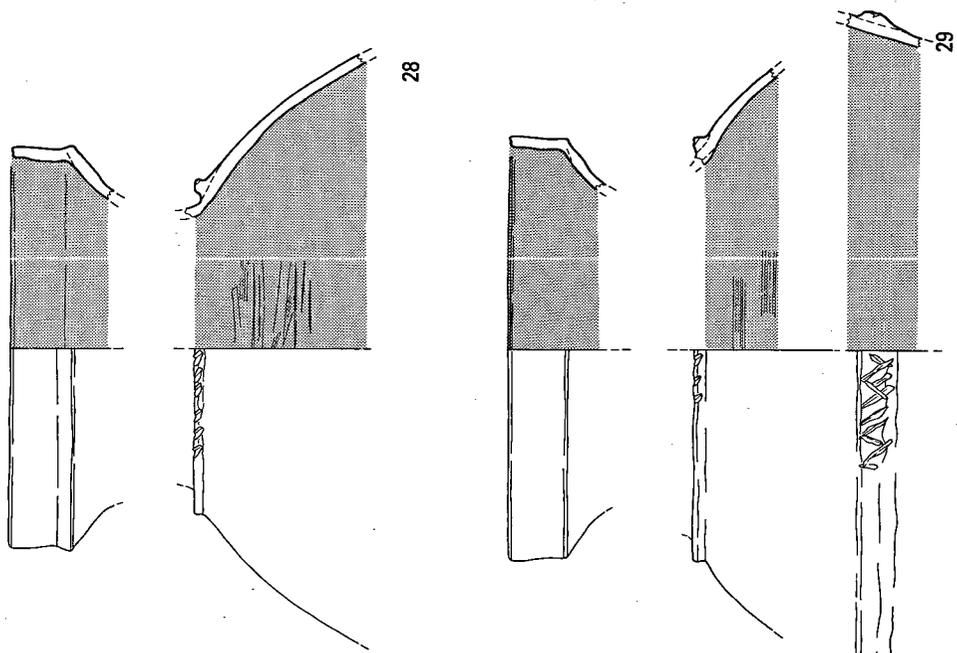
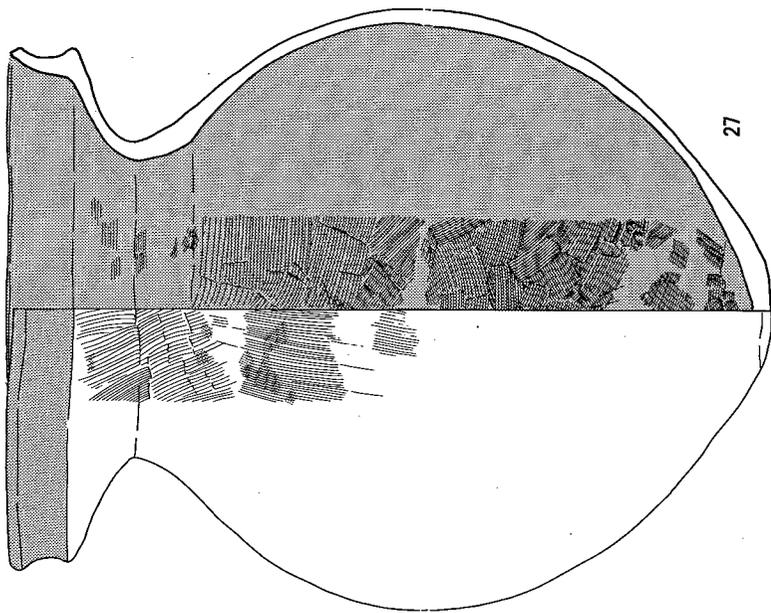
18・19は、10号棺の甕棺墓の供献土器。18は、直口壺に近い鉢といえるもので、口縁が大きく開き壺の形態を失っている。器面調整は、内外面共にハケ目の後にヘラミガキを施している。大きさは、口径9.6cm、器高6.3cm。19は、手捏的な鉢で、内外面に指ナデ痕が見られ、底部も未調整のまま不安定。大きさは、口径8.6cm、器高6.9cm。18・19の時期は、弥生終末。

20は、13号棺内に混入していた高杯片であるが形態や時期が不明確。

21は、墳丘東裾の不整形土壇としたくぼみから出土した中型鉢。全体に摩滅しているところから調整や時期も不明。



第151图 · 4号墳丘墓出土土器实测图①(1/4)



第152图 4号填丘墓出土土器实测图②(1/6)

#### q 4号墳丘墓出土土器

4号墳丘墓は、いくつかの墓壙の上に標石が残るなど、割合に墳丘の原状を残していたが、墳丘自体では北東斜面に散乱していた土器群だけであった。この墳丘北東斜面に散乱していた土器群は、赤色顔料を伴った壺3固体が主であったが、これは祭祀土壙が後世に攪乱されたものとの区別がつきにくいところもある。

第151図1は鉢で、1号棺の棺内・棺外・墳丘北東土器群から出土した破片が接合できた。1号棺は未盗掘であったところから、埋葬時に破壊されて分散したと考える。この鉢は、凸レンズ状底部と内外面をナデとミガキで割合丁寧に調整されていることから弥生終末古段階に属するものとする。鉢の内外面全体に赤色顔料が付着しており、大きさは、口径13.8cm、器高6.3cm。

2～9は、3号棺の棺内・墓壙内から出土したものであるが、棺内と墓壙内の大半が攪乱されているので供献土器ではなく、墳丘下で破壊されている竪穴住居跡の土器が混入した可能性が強い。2～4は弥生終末の甕片である。5は、台付鉢であるが、口縁部がわずかに外反している。内面は摩滅し、外面上半が煤付着、下半がケズリ後ナデ調整している。これも弥生終末。6～9は、高杯の6・7が杯部、8・9が脚部である。脚部が割合長いので終末古段階を含む可能性もあるが、杯の外反が長いことから弥生終末新段階も含んでいる。

10～15は、4号棺の棺内・墓壙・集石から出土した土器細片。10は直口壺、11～15が甕口縁部であるが、4号棺も攪乱されている部分があり、土器も細片であるところから関連不明。11のみは、4号棺西側集石遺構から出土した弥生後期初頭の甕口縁で、外面に煤が付着している。

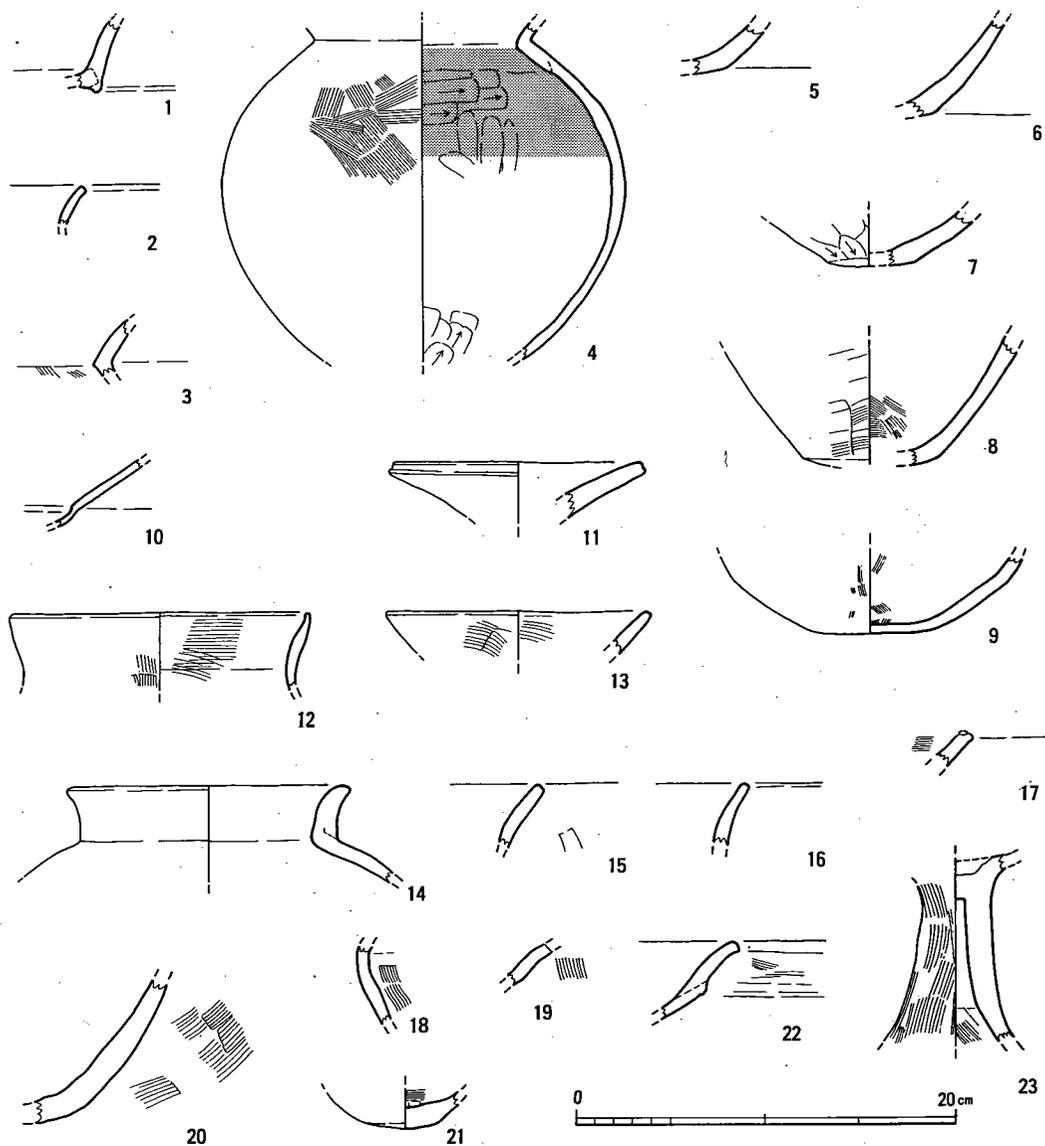
16～18は、完全に攪乱された5号棺から出土した土器片。16は複合口縁壺、17・18は甕の口縁と底部。いずれも弥生終末頃のもの。

19は東南側周溝から出土した甕、20が東側周溝から出土した器台で、いずれも弥生終末古段階に属する。21は墳丘盛土出土の支脚で、これも住居跡に属する可能性があり、弥生終末古段階か。

22～26は、墳丘の北東から東側の斜面から出土した土器群のうち小型のものである。22は高杯の脚裾部と思われる。23・24は小型甕で、23が胴下半部ほど肉厚になる。いずれも胴下半部外面をケズリ、内面をヘラ状工具でケズリ状にナデている。23の大きさは、口径11.2cm、器高13.3cm、胴最大径13.6cm。25は碗形高杯で、杯部内外面を粗いハケ目の後に一部ミガキ、脚柱状部をタテにケズリ状にナデている。杯部口径は、14.3cmの大きさ。26は小型鉢で、内外面にハケ目、外面底部付近がケズリのままとっている。墳丘北東側斜面出土のこれらの土器群は、いずれも弥生終末に属する。

27は、墳丘東斜面に散乱していた破片を復原したが、胴部中位が直接接合できなかつたので図上復原した。胴部の大きさに対して口縁部全体の比重が大きい複合口縁壺で、わずかに区別

できる頸部と卵形の胴部が特徴。口縁部の立上りが外に湾曲し、頸が下広がりを示す特徴は、この遺跡出土の複合口縁壺で唯一の例。器面調整は、口縁内外がハケ目後ヨコナデ、頸部・胴部の内外面にハケ目であるが、胴部外面の下半が摩滅のため不鮮明なれどケズリ後ナデられたものと思われる。内面全体と口縁外面には、強固に赤色顔料が付着している。大きさは、口径28cm、頸部径17cm、器高40.6cm、胴部最大径32cm。時期は、弥生終末新段階から古墳初期にか



第153図 5号墳丘墓出土土器実測図(1/4)

かると考える。

28・29は、墳丘の東側から北東側斜面と攪乱穴に散乱していた破片で、わずかな違いながら2個体分の複合口縁壺である。28・29の口縁部は、直立に立上がり、屈曲部にわずかな違いが見られる。肩部の台形キザミ目突帯もわずかな違いが見られ、内面に赤色顔料が付着している。29の胴部突帯は、胴部下半に位置し、粗いキザミのある底台形突帯となっている。内面に赤色顔料が付着している。28・29の複合口縁壺の時期は、弥生終末期に属する。

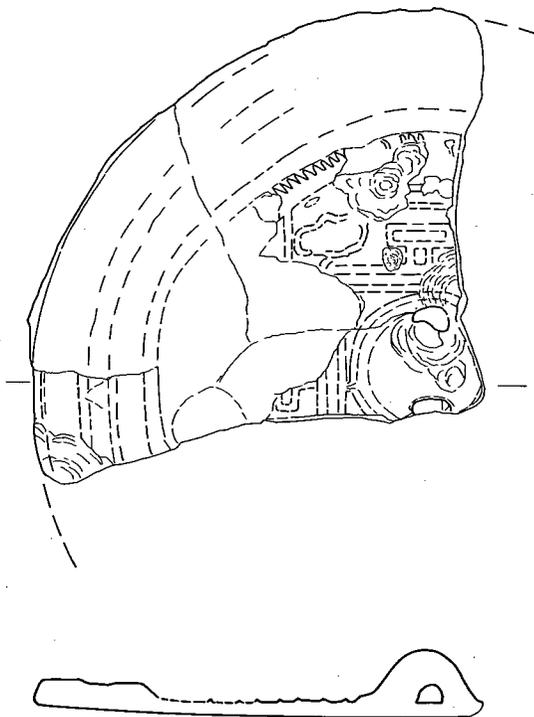
## r 5号墳丘墓出土土器

5号墳丘墓は、墳丘が完全に削平されて主体部が残っていなかったことから、出土した土器が周溝内に限定される。

第153図1～11は、西側周溝から出土した。1は複合口縁壺、2～8が甕、9が壺底部の可能性、10が高杯、11が器台である。これらのうち4だけが周溝底から出土した大きな破片で、5号墳丘墓に伴うと考える。4は、口縁と底部を欠損するので時期の特定が困難であるが、胴部内面の上位と下位にヘラケズリが見られることから土師器に属すると考える。胴部外面に煤が付着している。他の破片は、弥生終末古段階に属する。

12・13は、南西側周溝から出土した甕口縁部。いずれも粗いハケ目調整となっており、弥生終末であろう。

14～23は、南側周溝から出土した14～21が甕、22・23が高杯である。14が直立する厚味のある口縁と胴部内面のケズリらしさから土師器と考えられるが、他が弥生終末の新古を含んでいる。



## ② 銅鏡

α 凹帯縁方格矩鏡 (図版12-1・2、112-1、第154図)

2号墳丘墓1号棺内床面から浮いて出



第154図 1号棺出土凹帯縁方格矩鏡実測図(1/1)

土した鏡片は、凹帯縁方格規矩鏡で、復原径約10cmの鈕を含む4分の1強の破鏡である。鏡片全体が錆と赤色顔料に覆われているため、文様構成の観察に困難をきたしたが、やっと方格規矩文の小型鏡であることが判明した。

鏡の文様構成は、円座鈕に直接複線方格・T形文・L形文・V形文を内区に配置しているが、乳がなく、獣文も存在することは確実なれど特定できない。しかも、L形・V形も一部が確認できるだけで、L形の向きが不明である。その外側は、銘帯がなく直接櫛歯文帯となっている。鏡縁は、厚味のある凹帯縁で、凹帯の中に山形文らしき文様がある。

鏡の法量は、鈕径約13.5mm、鈕部厚さ8.9mm、縁幅16.6mm、縁厚さ3.6mm、内区地厚さ2.3mmである。

鏡片は、破面を含めて全体に著しく「手ずれ」によって摩滅し、文様の突線がほとんど失われ、鏡縁の両角や破面が著しく丸くなっている。とくに、この文様の不鮮明さが「湯冷え」現象でないことは、櫛歯文の上面が著しく平坦に摩滅し、鏡縁に接する部分を残すだけとなっていることが証明している。鈕孔の周囲も著しく摩滅して丸味をおびている。

鏡は、凹帯縁であることから、前漢末の方格規矩鏡である。

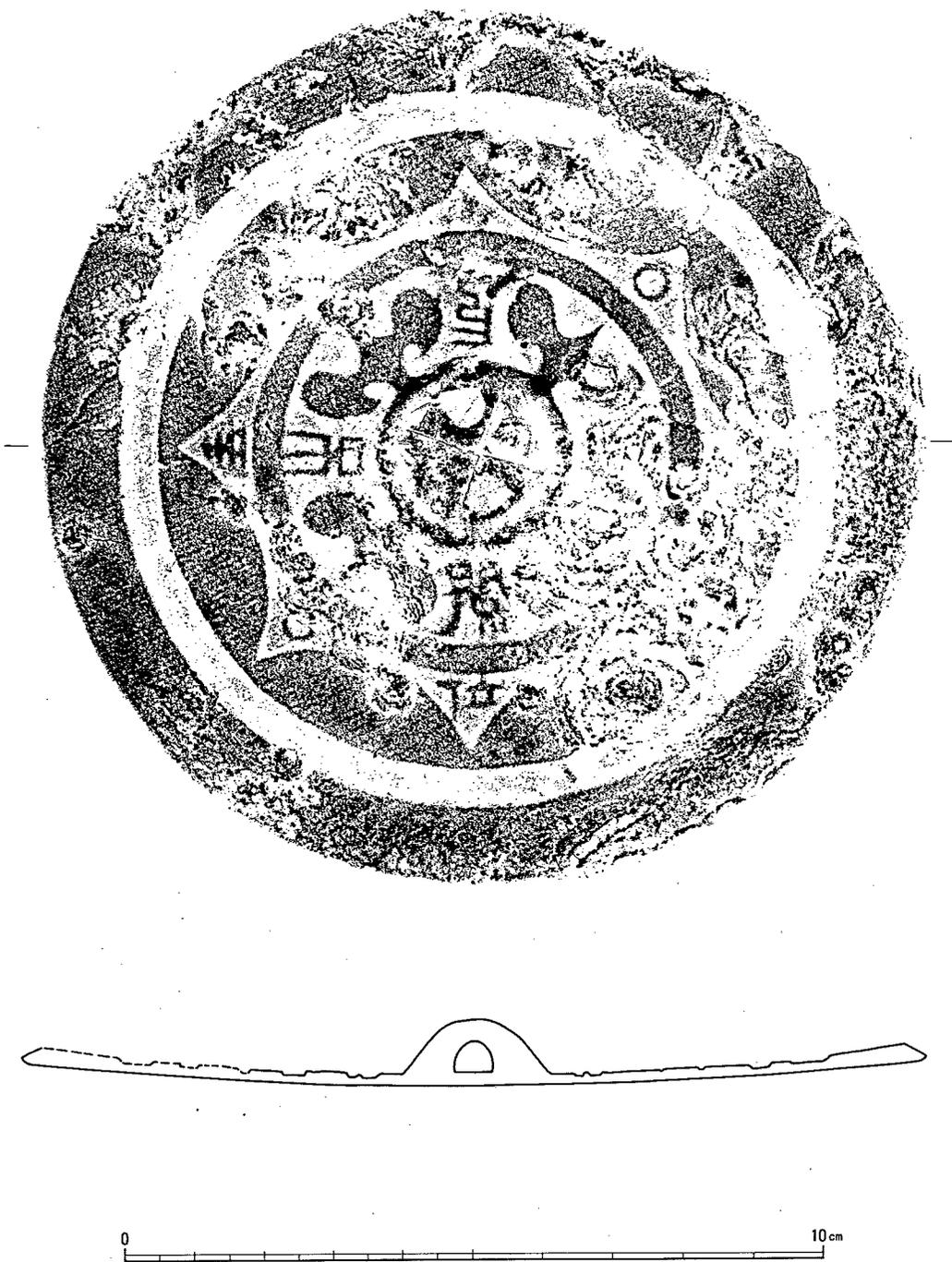
#### b 「長宜孫子」銘内行花文鏡（図版12-2、112-2、第155図）

4号墳丘墓4号棺の足元の石枕横から出土した鏡は、鈕座銘「長宜孫子」内行花文鏡で、直径13cmの完形鏡である。

鏡の文様構成は、中央に円鈕、蝙蝠文座、鈕座弁間に「長宜孫子」の銘文がある。ここで、銘文の配置に特徴があり、通例であると銘文の配置が鈕を中心に右回り、左回り、対角線のいずれかに「長宜子孫」銘が配置されるが、本例は右回りに「長宜孫子」と配置されている。銘文の字形は、少し角張り、「子」や「孫」字の「口」部が方形となり、「長」・「宜」・「孫」の字画の左側の一画のみ外反りの刀形に誇張されている。また、「子」の横画が下に曲り、「孫」の子偏の横画が横直線である。

鈕座の外回りに圈帯があつて、連弧文帯となり、連弧間に銘文と円文を配置している。連弧文は8弧で、銘文は「位至□囟」とあり、銘文と円文の組合せとなっている。その外周が割合広い凹帯となって鏡縁に続く。鏡縁は素文で、内側の厚さ2.0mm、外側の厚さ2.7mmで若干厚さに違いがあり、鏡面との角度が著しい鋭角となっている。各部の法量は、鈕径20.7mm、鈕部厚9.5mm、鈕孔幅5.5mm、鈕孔高4.3mm、鏡縁下場幅14.8mm、花文幅13.3mm、圈帯部・花文部厚1.6mm、凹帯部厚1.3mmとなっている。

鏡は、表面の約半分が錆に覆われているが、表面の保存のよいところもあり、鑄造後の研磨の痕跡も観察できる。まず、鈕座の蝙蝠文の上面に鈕を中心とした同心円状に研磨痕がかすかに見え、鏡面と鏡縁のなす角度が鋭角であることから、面取り研磨がなされたらしく、その研



第155図 4号棺出土「長宜孫子」銘内行花文鏡実測図(1/1)

摩痕がわずかに観察できる。

文様面全体を見ると、文様上面端の角が若干丸味をもっており、使用度に応じた摩滅の「手ずれ」が観察できる。錆のない部分で見ると、「湯冷え」を観察することができないが、連弧文間の「至」銘の字画端が明瞭でないことと、その横の圈帯も角が取れており、「型くずれ」または局所的な摩滅であろう。

鏡は、両面全体に赤色顔料が付着していたが、一方の両面に朱らしき鮮やかな色が残っている部分があり、これは現地でも鏡の部分に集中していることが判明している。なお、鏡に直接錆付いて残っていなかったが、図版112-3のように、鈕部分の土に布目圧痕があることから、布で覆われていたと考える。

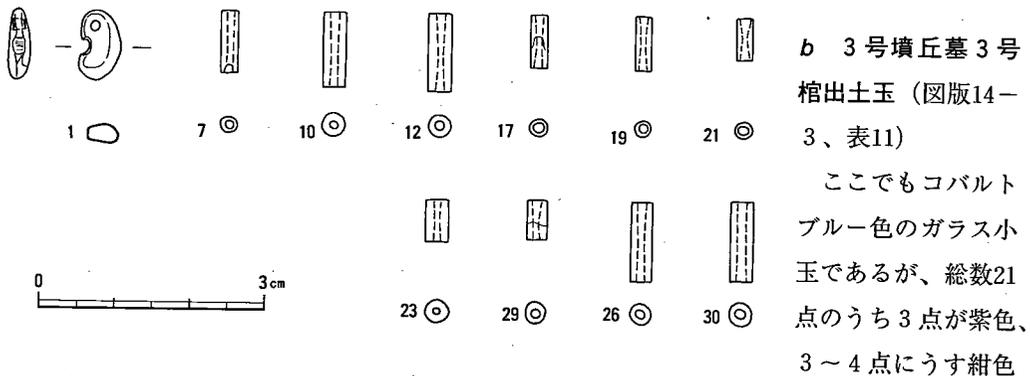
### ③ 玉 類 (図版14-3、15-1、第156図、表11)

E地区では、2号墳丘墓1号棺、3号墳丘墓3号棺、4号墳丘墓4号棺から玉類が出土している。ここでも玉類は小型で、2号・3号墳丘墓でガラス小玉、4号墳丘墓で極小勾玉と細形管玉となっていることから、第156図に示すのは勾玉と管玉の一部で、出土品全部を表11の一覧表に計測値と特徴を示した。

#### α 2号墳丘墓1号棺出土玉 (図版14-3、表11)

ここでは、コバルトブルーのガラス小玉に限定され、出土した32点のうちD類が3点、E類が1点で、その他がC類となり、これもほぼ統一されている。ただ、コバルトブルーの中にも12点が濃紫色で紺色との間に違いがある。

ガラス小玉は、これも引伸法で作られているが、孔面両側がE類も含めて全て研磨され平坦面をなし、片面のみわずかな研磨しかないものもある。全体的に玉表面に摩滅らしき傷みが見られる。



第156図 4号墳丘墓4号棺出土玉類実測図(1/1)

が混入している。形態の分類としては、C類であるが、1点のみ孔側小口全体を平坦に研磨して管玉状を呈するものがある。製作法は、明らかに無数の白色スジがあるものもあり引伸法が確実で、全体が両面を研磨しているが、使用による摩滅と区別できないものもある。全体に表面が傷んでいる。

#### c 4号墳丘墓4号棺玉類(図版15-1、第156図、表11)

4号棺床面中央部から勾玉1点と管玉19点が出土し、盗掘時の棺外の排土中から管玉10点が発見された。

第156図1は、極小勾玉で、淡緑色半透明の軟玉製と思われる。形態は、両面に平坦面、上下が薄く、中央に厚味がある。背が丸造りで内側を小さく穿る。孔は、片面穿孔である。

2以下の管玉は、総てグリーンタフ製の細形管玉で、最長10.6mm、最大径3.1mmの大きさ。大きさと最小値は、長さで5.2mm、径で2.2mmとなり、いかに細く小さいかがわかり、あえて小型管玉の下の細形管玉とした。穿孔は、両側穿孔である。色は、一部に鉄錆で変色しているものもあるが、統一した白緑色である。

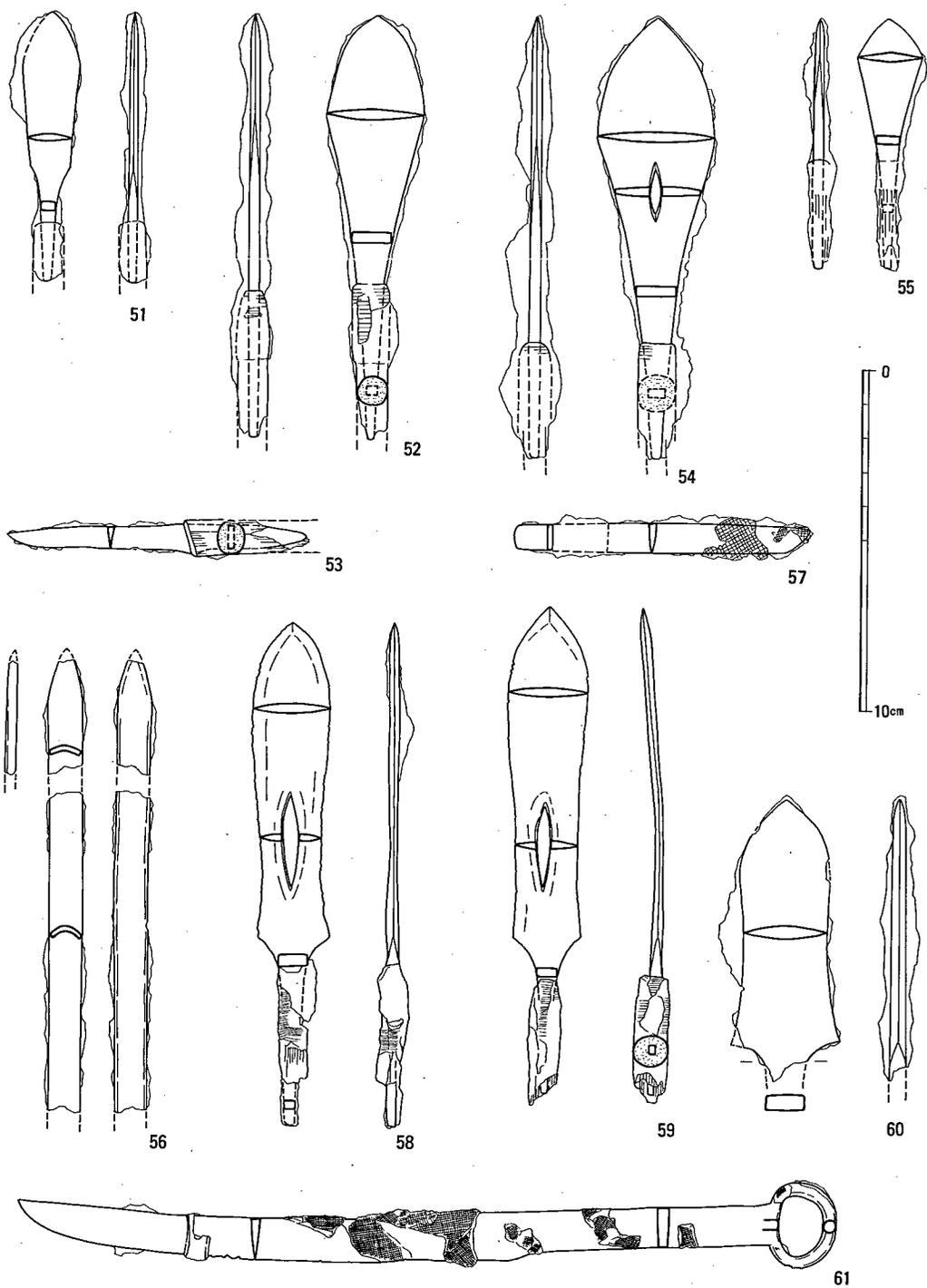
#### ③ 鉄器(図版113・118~120、第81・85・157図、表12)

第85図47・48は、1号墳丘墓出土の袋状鉄斧で、47が主体部木棺内、48が墳丘から発見された。47は、最大幅が袋基部にあり、刃先が最小幅となり、一部で片刃状研ぎとなっている。47の裏面と側面全体に布目が付着している。48は、最大幅が刃先にあり、刃部が短かくなっている。

49は、1号墳丘墓主体部木棺内で鉄斧と伴出した鈍で、身部が断面矩形を呈する。刃部に最大幅があって、身尻が最小幅となる。刃部は反りをもち、上面中央に鑄があって、横断面形がV字形を呈する。また、身部全体が上面から見るとゆるく湾曲しているのは、使用時の力方向が一定しているためであろうか。なお、刃部上面半分に皮状付着物、身部両面に細目綾織状布目が付着しているが、布目は身部に巻いたものではないようで、伴出した鉄斧の布目とも違っている。

50は、2号墳丘墓1号棺内から出土した刀子で、鹿角製柄を装着している。最大幅が関部にあり、身が著しく研減りして細くなっている。茎は柄が残存していることから形状不明であるが、柄は長径1.5cm、短径約1.2cmの楕円形を呈する。

第157図51・52は、3号墳丘墓の荒らされた1号棺内出土柳葉形と圭頭形鉄鏃。51は、最大幅が鏃身先側にあり、関幅1.15cm、鏃身長4.6cmで、茎に矢柄が残存するが、全体に錆に覆われている。52は、平面形では椿葉形と区別がつきにくいだが、刃部が最大幅の角張る部分までで



第157图 墳墓群出土鉄器実測図④(1/2)

ある。矢柄に桜皮巻きがあるが、全体に錆が著しい。

53は、3号墳丘墓の3号棺外から出土した刀子で、木製柄らしきものを装着している。最大幅が関部があり、背が内反りで、研減りによって身が細い。茎は、柄によって形状が不明であるが茎尻が尖がっている。柄は、長径約1.0cm、短径0.85cmの楕円形を呈する。

54は、3号墳丘墓4号棺から出土した大型透孔付圭頭形鎌で、これも椿葉形との区別がつきにくい。透孔は、長さ1.7cm、幅0.35cmの凸レンズ状を呈する。矢柄は、茎尻から3.4cmのところから装着され、先端を桜皮巻きするが、一部二重柄のように見えるのが、矢柄孔内径を示すのであろうか。

55は、3号墳丘墓9号棺から出土した圭頭形鎌。矢柄は、茎尻から3.2cmのところから装着されている。

56は、4号墳丘墓の南側周溝中層から出土した鉞2片で、同一個体と思われる。最大幅は刃部らしい部分にあるが、反りがないところから、刃部ではない可能性もある。身全体が横断面三日月形を呈する。

57は、4号墳丘墓1号棺内から出土した小型刀子で、刀身と茎幅がほとんど変わらないが、身中央部が最大幅となっている。

58・59は、4号墳丘墓3号棺内から出土した大型透孔付柳葉形鎌で、山形関を形成する。鎌身は、断面形が両丸造りで、関幅が58で2.2cm、59で2.0cm、透孔が58で長さ2.9cm、幅0.45cm、59で長さ2.6cm、幅0.4cmとなっている。矢柄は、59が茎尻から3.3cmのところから装着し、径約1.0cmとなっている。両方共に、透孔周辺がわずかな平坦面をもっている。両資料は、完全に近く錆取りに成功し、原形を彷彿とさせる。

第81図3は、4号墳丘墓3号棺内で原位置を多少移動していた剣身である。剣身は、幅で最大幅と切先部の差が1mmしかないことから、鈍い切先の感じがするが、これは研減りがなかったことを示している。剣身には鏝があり、裏面に布目痕らしき付着物がある。剣身の切先近くに反りがある。

4・5は、4号墳丘墓4号棺上の攪乱土中から出土したもので、正確な出土遺構がわからない。法量的には、4が身幅や厚さが3と近似値を示すことから同一個体の可能性が強いが、地形的に低位にある3号棺から高位の墳丘頂である4号棺の位置まで盗掘の時点で移動したことも考え難い。5は、剣身幅が平行していないことから明らかに別個体の切先部分の破片である。この遺跡最大の剣身幅で、4号棺出土の可能性が強い。

第157図60は、4号墳丘墓4号棺上の表土から出土した大型柳葉形鎌で、茎を欠損している。鎌身長7.1cmの大きさで、関部に最大幅があつて山形関を形成する。鎌身は両丸造であるが、錆のために正確な厚さが不明。

61は、4号墳丘墓4号棺内から出土した素環頭刀子。本資料は、入念な錆取りによって細部

観察が可能になった。刀身は外反りで、最大幅が関部にある。柄は、長さ7.0cm、背厚さ3.3～3.5mm、内側厚さ2.5mm、幅が基部1.2cm、柄尻1.1cmとわずかながら各寸法に差があることがわかる。環頭部は、外径幅2.55cm、長さ1.9cm、内径1.7×1.2cm、環円造り径0.4cmとなっている。刀身が細身であることから、多少の研減りを考えなければならない。本資料の刀身と柄の片面、環頭部両面に細目の布片が付着し、刀身片面に幅0.7cmの骨片も付着している。

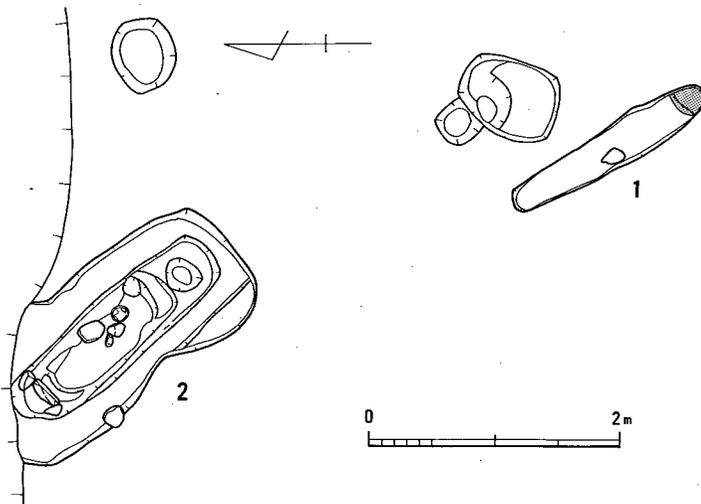
## 4 E地区北端の調査記録

### (1) 遺構

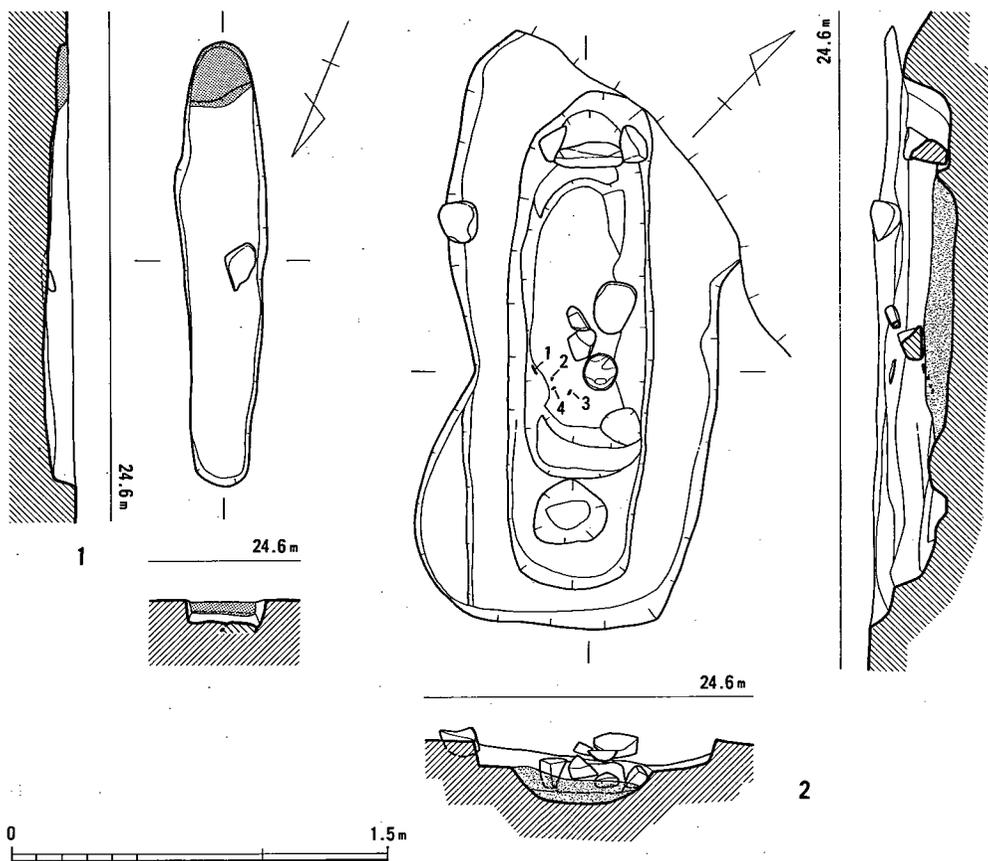
E地区では、1号～5号墳丘墓の外に、弥生終末から古墳初期の墳墓群がもう1群存在する。それは、丘陵先端にあたる地区の北端にあり、4号墳丘墓から直線距離で約60mの位置で、これも段畑の中で試掘によって確認していた。一群は、2基がかろうじて現存していたが、段畑の開墾によって大半が削平されたと思われる。

#### 1号墓 (図版98-2、第159図1)

1号墓は、2号墓の南側にあり、墓壙と土壙大半が削平された木蓋土壙墓と思われる。両小口が丸造りで、胸部に最大幅をもち、南側小口に粘土枕を付設している。棺内には、粘土枕以外になにもなく、中央部に地山の石が露出している。



第158図 北端地区墳墓群遺構配置図(1/60)

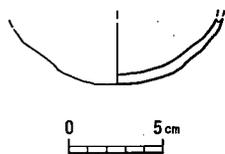


第159図 北端地区1・2号墓実測図(1/30)

2号墓 (図版99、第195図2)

2号墓は、北端にあり、墓壙が残っているが、主体部が浅く、荒らされ方と石材の残存状態から見て小石室の可能性はある。

墓壙は、隅丸長方形で、かろうじて残っているが、中央に掘込まれた主体部が浅いことから、墓壙というより石室掘方といえるかもしれない。



第160図 2号墓出土土器実測図(1/4)

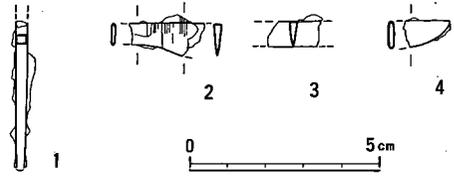
中央の土壌は、一度舟底状に掘りくぼめられた後に埋戻されて床面とし、両小口に石材設置のための掘込みをしている。北西側小口の残っている石材から考えられることは、頭部と思われる南東小口に2枚、北西小口に1枚の石材を立て、両側壁にも若干の石材を積上げる小石室ではないだろうか。あるいは、側壁に木板を利用することもありうる。棺内は完全に荒らされていたが、棺床面の胸部左側で鉄鍬片と刀

子片が、浮いて土器底部が出土した。

## (2) 遺物

### ① 土器

第160図は、2号墓の荒らされた棺内で浮いた状態で出土した丸底甕または壺の底部である。全体的に粗雑な作りの上に、器面が摩滅しているために、器外面が滑らかでない。内面は、ケズリ後ナデられ、外面底部が完全な丸底ではなく、底部らしきものも見える。



第161図 2号墓出土鉄器実測図(1/2)

### ② 鉄器 (図版120-2、第161図)

1は、鉄鏃の茎部片と思われるが、木質等の付着物がない。

2は、小型刀子の刀身と茎部の細片で、茎部に木質らしき付着物があるが、軸に直行している。茎がとくに扁平で薄い。

3は、小型刀子の刀身細片で、2と同一個体であれば切先近くの幅の狭い部分である。

4は、刃がないところから茎部であろうか。2とは幅が違い、大きいので別個体。

### Ⅲ おわりに

ここでは、徳永川ノ上遺跡墳墓群について問題提起をし、『徳永川ノ上遺跡Ⅲ』のまとめに繋げたい。

#### 1 墳丘墓群

徳永川ノ上遺跡の第1の特徴は、弥生終末から古墳初期の墳丘墓が群をなしていることが確認できたことである。

ここでは、墳丘墓とは、墳丘、あるいは周溝が確認され、明確に土師器などが伴わない古墳と認定されないものをいい、現状で盛土が失われていてもこれに含めて考える。したがって、方形周溝墓も本来は墳丘盛土が伴うはずであるから墳丘墓として扱い、台状墓と呼ばれているものも同じである。

徳永川ノ上遺跡では、確実に墳丘墓といえるのが、C地区でI号・Ⅲ号・Ⅳ号・V号・Ⅸ号・X号墳墓群の6基、D地区で2号墳墓、C地区で2号・3号・4号墳丘墓の3基、合計10基である。これに続く古墳初期のものが、D地区の1号墳墓（舟形木棺）、E地区の1号・5号墳丘墓の2基があり、墳墓群として継続している。しかも、確実に土師器が伴わない古墳前期とされるこれらは、主体部が中央に1基となって独立するが、副葬品が皆無に近い状態となり、社会情勢の変化を現出している。

細部については、各項で指摘してきたからここでは省略するが、弥生終末期に限定できる本遺跡の墳丘墓群は、石蓋土壙墓でありながら完形小型鏡を副葬するところから、荒らされた箱式石棺墓が副葬していたであろう鏡の保有数が合計10面前後であることを考えると、いっそう本遺跡のこの地域で占める位置が重要になってくる。まとめでは、この遺跡の南側に続く神手遺跡の墳墓群も含めて検討したい。

#### 2 土器

墳墓群には、幸いなことに甕棺墓・供献用として土器が伴っているのが第2の特徴としてあげられる。しかも、同時共存あるいは意識的に埋戻された堅穴住居跡があり、これとの間に終末期を古段階と新段階に細分可能である。さらに、弥生終末に続く古式土師器も若干ながら出土しており、近年この地域の前期古墳として報告されている苅田町石塚山古墳や大平村能満寺

古墳などを含めて検討したい。

### 3 銅 鏡

徳永川ノ上遺跡では、弥生に属する鏡6面、古墳中期1面の合計7面分の銅鏡が出土したのが第3の特徴である。前述したように、さらに数面が存在した可能性があることを考えると遺跡の重要性が高まる。

豊前地域は、これまで完形鏡もさることながら破鏡も多く出土しており、筑前地域とは違った鏡式群があることで知られている。本遺跡出土の鏡群の鏡式は、方格規矩鏡2面、内行花文鏡1面、盤龍鏡1面、画像鏡1面、小形仿製鏡1面であり、筑前地域に少ない盤龍鏡や画像鏡が含まれ、むしろ小形仿製鏡が少ないともいえる。しかもこの2面が三角縁であり、豊前地域に三角縁が目立つ存在となっている。したがって、これらの鏡群が中国のどの地域で製作されたのか参考にするため若干の三角縁鏡の鉛同位対比分析を依頼して本文末に掲載している。分析結果の検討もまとめて行いたい。

### 4 玉 類

本遺跡では、首飾として使用される中型以上の勾玉や管玉の出土がなかったが、小型玉類の利用方法が明瞭に判明する発掘をすることができたのが第4の特徴といえる。

勾玉や管玉は、これまで漠然と首飾として利用されたと考えられていたと思われるが、ここで明らかに耳飾としても両者が利用されていることが判明した。これまでの発掘では、春日市辻畑遺跡の石蓋土壙墓においてガラス小玉が首飾として、ガラス粟玉が耳飾または髪飾として利用していることを明確にした調査をしたが、本遺跡でもガラス粟玉が耳飾として区別された利用方法がとられていた。

### 5 鉄 器

第5の特徴として、鉄器の量の多さに加えて、鉄鏃と釣針に超大型が多数含まれていることである。それこそ、石棺墓が荒らされていなければ、近隣の遺跡例からしても鉄剣や鉄刀が比率として少なすぎるし、武器のうちの鉄鏃が多いことから指摘できる。

鉄器のうち特徴的な1つが、大型透孔付鉄鏃が9点も存在することである。この形式の鉄鏃が豊前地域北半に多いことも特色であり、その分布が北部九州の中心地である糸島・福岡平野に現存のところ見られないのもその特色を補強している。

# 遺構・遺物一覽表

凡 例

単 位：土器・鉄器はcm、玉はmm

R：反転復原

後5古：弥生後期5様式古段階（註1）

古Ⅱa：土師器Ⅱ様式a段階（註2）

註1 柳田康雄「高三瀨式と西新町式土器」『弥生文化の研究』4、1987 雄山閣出版

註2 柳田康雄「土師器の編年—九州—」『古墳時代の研究』6、1991 雄山閣出版

表2 徳永川ノ上墳墓群一覽表

No.	主軸方位※	床面	墓壇規模(上面) cm				棺規模(床面) cm				副葬品 (供獻品等)	時期	備考
			長	短	長対角長	深さ	主軸長	最大幅	頭位幅	深さ			
K1	N30°E		115	46	-	25+	70+	33.8	33.8			弥生中期末	C地区南部
1	N18°W						216	64	55		(石戈片・石鏃)	弥生中期	C地区南部、1994年報告
3	N89°E	枕、赤色	-	-	-	-	180	47	44			弥生終末	I号墳墓群
4	N84.5°E	枕、赤色	-	-	-	-	180	41	30			弥生終末	◇
5	S87°W	枕、赤色	-	-	-	-	178	45	36		鉄剣	弥生終末	◇
6	N86°E	一、赤色	-	-	300+	-	171	35	30		鏡片、素戔刀子、鉄鐵片	弥生終末	◇
7	S59°E	石枕、赤色	210	130+	225	20+	157	35	32			弥生終末	◇
8	N79°E	枕、赤色	205+	135	-	3+	163	42	37		鏡片、鉄刀子、玉(勾玉、管玉)	弥生終末	◇
9	S41.5°E	枕、-	190	105	-	3+	150	38	31			弥生終末~古墳前	◇
10	S52°E	枕、赤色	-	-	-	-	128	45	45		小玉、管玉	弥生終末	◇
11	S25.5°E	枕、赤色	205	196	-	7+	177	42	37		鉄鐵片(土器)	弥生終末~古墳前	◇
12	S30°E	石枕、-	227	62	-	14+	190	65	65+			弥生終末	◇
13	S64°E	枕、赤色	80+	65+	-	3+	60+	34	29		鉄刀子2、勾玉、玉類	弥生終末	◇
14	S78°E	枕、赤色	244	170	279	31	196	41	35				II号墳墓群
15	N24°W	石枕、?	215	90	-	15+	177	34	28		鉄刀子(土器)	古墳前期	◇
16	N2.5°E	一、-	-	-	-	-	200	64	46		(土器)	古墳前期	◇
38	N31°E	一、-	-	-	-	-	165	59	40			弥生終末	◇
17	S64.5°E	枕、赤色	199	100	-	9+	111	25	20				III号墳墓群
18	S45.5°E	枕、?	228	223	290	15+	173	43	30		鉄刀子		◇

No.	主軸方位※	床面	墓壇規模 (上面) cm				棺規模 (床面) cm				副葬品 (供獻品等)	時期	備考
			長径	短径	長短角長	深さ	箱型式	主軸長	最大幅	頭位幅			
64	S59°E	一、一	—	—	—	—	124	40	35	21+		Ⅲ号墳墓群	
46	N17.5°E	一、赤色	—	—	—	—	202	43	40	38+		◇	
19	N33°W	枕、赤色	230	107	—	4+	174	41	32	39		鏡・鉄刀子	Ⅳ号墳墓群
20	N64°W	枕、赤色	—	—	—	—	164	35	20	32+		玉類(勾玉、管玉、小玉)、 鉄刀子	◇
21	S51°W	枕、赤色	245+	120+	—	—	178	43	43	28+		鉄刀子	◇
37	N45.5°W	一、一	—	—	—	—	80	22	15	31			◇
40	N43°W	枕、赤色	—	—	—	—	83	24	21	10+			◇
50	S9°E	一、一	—	—	—	—	83	34	23	42			◇ 落穴
22	N27.5°W	枕、赤色	265	168	—	16+	167	45	42	44		鉄刀子(土器)	V号墳墓群
23	S78°W	？、赤色	270+	165+	280+	20+	195	55+	42	45+			◇
24	S44°W	一、赤色	370+	277	380+	40	163	52	50	50		鉄刀子	◇ 標石
K 2	S54°W		171	126	—	60+	120	56	46	56		鉄鏃、刀子(土器群)	◇ 標石
K 3	S36°E		56+	44+		12+	56+	39+	28.5	39+			◇ 弥生終末
63	N66°W	一、赤色	—	—	—	—	89	21	18	4+			◇
28	S40°E	枕、赤色	210	120	—	14+	136	40	26	18			◇ Ⅵ号墳墓群標石
42	N51.5°E	枕、赤色	290	235	320	43+	202	50	27	45		鉄鏃・刀子(鈎針5、鏃、土器)	◇ 標石
1	S72°E	—	250+	130	—	10+	211	62	40	45			◇ (古墳前期)
2	S84°E	一、一	—	—	—	—	232	78	78	51		鉄鏃2、鉄片	◇ 古墳後期
25	S37.5°W	枕、一	175+	130	—	25+	120	30	25	47			◇ Ⅶ号墳墓群
26	N78°W	枕、一	140+	79	—	10+	61	22	19	23			◇

No.	主軸方位※	床面	墓壇規模(上面) cm				棺規模(床面) cm				副葬品 (供獻品等)	時期	備考	
			長	短	長対角長	深さ	棺型式	主軸長	最大幅	頭位幅				深さ
43	N14°E	枕、赤色	260	240	300	46+	石蓋	160	39	34	53	Ⅷ号墳墓群		
44	S77.5°W	枕、赤色	210	195	260	33+	石蓋	152	41	36	65	鉄鍔、素環頭刀子		〃
47	S1°W	一、赤色	-	-	-	-	土壙	117	40	33	17+			〃
48	N88.5°E	枕、-	-	-	-	-	(石蓋)	165	38	30	50			〃
49	S58°E	枕、赤色	-	-	-	-	(石蓋)	168	33	30	36+			〃
51	S52°E	枕、-	-	-	-	-	(石蓋)	95	22	20	28+			〃
52	S78.5°E	枕、赤色	195	110	-	16+	石蓋	135	35	28	47			〃
53	S88°W	枕、赤色	205	103	-	43+	木蓋	175	36	28	45	鉄鍔、鉄鍔		〃
54	S38.5°E	枕、赤色	310	207	-	37+	木蓋	52	48	40	65		弥生終末	〃
56	S46°E	枕、-	123+	81+	-	20+	石蓋	99	28	20	44			〃
57	S13.5°E	枕、-	140+	107	158+	7+	石蓋	74	24	24	33			〃
58	N39°E	枕、-	173	94	-	11+	木蓋	113	37	30	54			〃
60	S14°W	枕、-	242	100+	255	18+	石蓋	126	29	26	41			〃
61	N41°W	枕	123+	98	-	15+	石蓋	68	26	20	34			〃
27	N38°W	枕、赤色	-	-	-	-	木蓋	182	37	30	28+	鉄鍔2	Ⅷ号墳墓群	
29	S89°W	枕、-	-	-	-	-	木蓋	160	31	23	15+			〃
36	N23°E	糠床、-	-	-	-	-	糠床	173	50	50	10+			〃
55		枕、赤色	-	-	-	-	木蓋	152	29	22	31+			〃
30	N68°W	一、赤色	-	-	-	-	(木蓋)	149	29	20	36+			Ⅸ号墳墓群
31	N68.5°W	一、赤色	278+	157+	-	-	箱石	207	62	45	54	鉄刀子、鉄鍔2		〃

No.	主軸方位※	床面	墓壇規模(上面) cm				棺規模(床面) cm				副葬品 (供獻品等)	時期	備考			
			長径	短径	長対角長	深さ	棺型式	主軸長	最大幅	頭位幅				深さ		
32	S32.5°E	一、赤色	261+	134+	—	—	—	—	—	箱石	185	53	45	53	Ⅸ号墳墓群	
34	S77.5°E	枕、—	145+	86	—	5+	—	—	—	石蓋	104	31	23	34	X号墳墓群	
35	N52°W	床石、赤色	249+	162+	257+	15+	—	—	—	箱石	184	45	43	37	鉄施(鉄斧)	◇
41	S34.5°E	枕、赤色	252	222	—	10+	—	—	—	石蓋	169	40	30	52	手鎌(土器)	◇
59	N65°W	一、—	132	35	—	7+	—	—	—	土壙?	65	25	12	13		◇
39	S75°E	枕、赤色	117+	101+	—	10+	—	—	—	石蓋	100+	34	30	35		Ⅺ号墳墓群
62	N71°W	枕、—	—	—	—	—	—	—	—	土壙	66	18	14	5+	鉄刀子	◇
K4	S9°W	一、赤色	41+	37+	—	7+	—	—	—	甕棺	50+	58	37.5	58		◇
舟	N90°E	一、赤色	440	226	—	10+	—	—	—	舟形木	225	55	50	22	(土器片)鉄片	◇
1	S80°E	一、—	—	—	—	—	—	—	—	石蓋	166	35	30	40		1号墳墓
2	N36.5°E	一、—	150	120	200	8+	—	—	—	石蓋	102	26	15	28		2号墳墓
3	N72°W	—	—	—	—	—	—	—	—	(石蓋)	174	41	28	37		◇
1	N32.5°E	一、赤色	310	183	—	101	—	—	—	棺木棺	220	84	84	44		◇
2	N6°E	一、赤色	89	50	—	15	—	—	—	石蓋	60	26	20	10		1号墳丘墓
石組	N38.5°E	一、—	194	82	—	46	—	—	—		—	—	—	—		◇
礫床	N5°W									礫床	150	34	34	6+		◇
1	N59°W	床石、赤色	308	300	340	63	—	—	—	箱石	183	67	46	47		2号墳丘墓
2	N42°E	枕、赤色	248	130	—	33	—	—	—	木蓋	188	42	36	43		◇
3	S14.5°E	枕、赤色	230	110+	—	30	—	—	—	石蓋	171	37	30	35		◇
4	N87°E	枕、赤色	—	—	—	—	—	—	—	箱石	50+	37	35	42		◇

No.	主軸方位※	床面	墓碑規模(上面) cm				棺規模(床面) cm				副葬品 (供獻品等)	時期	備考
			長径	短径	長対角長	深さ	棺型式	主軸長	最大幅	頭位幅			
5	S 80°E	一、一	210	104	—	40	石蓋	155	28	19	38	弥生終末	2号墳土墓
1	S 26°E	枕、赤色	200+	200+	300+	47+	箱石	160	55	37	51	弥生終末	3号墳土墓
2	N 82°E	枕、赤色	210	180	240	50	石蓋	160	33	18	48	弥生終末	◇
3	N 68.5°E	一、赤色	248	152	—	120	甍棺	—	—	—	—	弥生終末(古)	◇
4	N 37.5°W	枕、赤色	187	166	228	60	石蓋	156	35	28	37	弥生終末(古)	◇
5	N 88°W	枕、赤色	135	132	151	58	石蓋	60	18	15	20	弥生終末	◇
6	N 34.5°W	枕、赤色	137	128	—	38	石蓋	67	22	18	30	弥生終末	◇
7	N 66°W	一、赤色	113	94	—	63	石蓋	55	18	17	29	弥生終末	◇
8	S 83°E	一、赤色	128	124	—	58	甍棺	48	—	—	—	弥生終末(古)	◇ 穿孔
9	S 73°E	一、一	—	—	—	—	土壙	210+	37	26	24	◇	◇
10	S 13.5°W	一、一	141	73	—	33+	甍棺	85+	—	—	—	弥生終末	◇
11	S 20°W	一、赤色	192	130	—	25	(石蓋)	149	58-	35	30	弥生終末	◇ 人骨片
12	N 84°E	一、一	(300)	78	—	36	(割竹)	220	34	34	22+	弥生終末	◇
13	N 82.5°E	一、一	306	80+	—	14	箱木	208	35	35	14+	弥生終末	◇
1	N 86°E	枕、赤色	238	193	270	45+	箱石	174	48	37	44	弥生終末	4号墳土墓 標石
2	N 74°E	枕、赤色	214+	260	290+	50+	箱石	190	50	50	48	弥生終末	◇
3	N 86°W	枕、赤色	252	207	310	55	箱石	175	43	43	41	弥生終末	◇
4	N 64°E	枕、赤色	266	259	319+	55	箱石	185	55	54	55	弥生終末	◇ 標石
5	N 87°E	？、赤色	270	193	280	35+	箱石	188	60	47	50	弥生終末	◇ 標石
6	S 0°N	一、一	—	—	—	—	土壙	151	53	50	30+	弥生終末	◇

No.	主軸方位※	床面	蓋模規模 (上面) cm					棺規模 (床面) cm					副葬品 (供獻品等)	時期	備考		
			長徑	短徑	長對角底	深さ	箱型式	主軸長	最大幅	頭位幅	深さ						
7	N 35.5°W	?	?	?	-	-	-	-	-	箱	石	70	24	24	22	彌生終末	4号墳丘墓
1	S 22°E	枕、	-	-	-	-	-	-	-	木	蓋	173	31	25	11+	彌生終末	E地区北端
2	S 42.5°E		235+	105	-	-	10+	(石室)	130	40	40	20	20	20	古墳初期	鉄鍔、刀子2	々

表3 徳永川ノ上墳墓群出土甕棺觀察表

押図番号	器種	編年	出土地	口径	器高	胎土	色調	調整	備考
					①胴径 ②底径				
4	甕	中期末	C区南1号甕上	33.0R		細砂、小砂少	外) 灰黄褐色、黒色 内) 灰黄褐色、灰黄色、黒灰色	外) ヨコナア、突帯、ナア 内) ナア	煤付着
4	甕	中期末	C区南1号甕下	36.5	①34.5 ②38.6	細小砂多 粗赤褐色粒、角閃石、雲母	外) 白黄褐色 内) 橙褐色	外) ヨコナア、タテハケ目、ハケ目のちヨコナア 内) ナア	煤付着 外底部赤変 内面赤色顔料
37	壺	古I a	V-2号甕棺上	29.8	①47.5 ②7.5	粗、小砂、砂粒多、角閃石、赤褐色粒、雲母	橙褐色	外) ハケ目のちヨコナア、ヨコナア、ハケ目、キザミ突帯 内) ヨコナア、ヨコナア、ハケ目	内面赤色顔料 打欠き
37	壺	古I a	V-2号甕棺下	47.0	①38.5 ②7.8	粗、細砂少含角閃石、雲母、石英	黄褐色	外) ヨコナア、ハケ目、キザミ突帯、ケズリ 内) ハケ目のちヨコナア、ハケ目	内、外面一部赤色顔料 穿孔1ヶ
39-3	壺	後5新	V-3号甕棺	30.0R		細小砂 赤褐色粒、角閃石	淡黄褐色	外) タテハケ目、キザミ突帯 内) マメツ	黒斑
39-4	壺	後5新	XI-4号甕棺	39.6	①59.4	細砂 角閃石、赤褐色粒	淡黄褐色	外) ヨコナア、ハケ、キザミ突帯2本 内) ハケ目	内面全体、外面赤色顔料、黒斑
118-3	壺	後5古	3-3号棺(単甕)	34.2	①53.6 ②2.7	細砂少 赤褐色粒	暗黄茶褐色	外) ハケ目、ヨコナア、突帯2本、タタキ 内) ハケ目のちナア、ハケ目	外面部分的内面全体赤色顔料付着、黒斑
8	甕	後5古	3-8号棺上		①36.2	細砂 角閃石、赤褐色粒	外) 灰黄褐色、赤褐色 内) 灰黄色、暗灰色	外) ハケ目、ケズリ、ナア、櫛目状ハケ目・突帯 内) ハケ目、指圧痕、タタキ、ミガキ、ナア	打ちかきか、内面全体 外面一部赤色顔料
8	壺	後5古	3-8号棺下		①38.0 ②4.5	細、小砂多、粗砂 赤褐色粒	淡黄橙色	外) ハケ目、ナア、粘土継目 内) ナア、ハケ目	打ち欠き、内面赤色顔料、焼成後の穿孔、黒斑
125-10	甕	後5新	3-10号棺上		①23.6 ②5.3R	細砂	黄茶褐色	外) タタキのちナア、ナア、ケズリ、工具痕 内) ハケ目、ナア	打ち欠き、煤、黒斑
10	壺	後5新	3-10号棺下		①45.0R ②7.0R	粗、細砂多 角閃石	黄褐色	外) ハケ目、ナア、キザミ突帯2本、ケズリ 内) ハケ目	打ち欠き、穿孔

表4 C地区V号墳墓群出土土器觀察表

押図番号	器種	編年	出土地	口径	器高	胎土	色調	調整	備考
					①胴径 ②底径				
41-1	壺	古I a	V表探	40.0R	①61.2R	細砂多	黄褐色	外) キザミ口縁、ヨコナア、キザミ突帯3本、ハケ目、ケズリ 内) ヨコナア、ハケ目	黒斑
2	壺	後5古	V周5と甕2間の石積		②8.0R	細砂多	黄褐色	外) マメツ 内) ミガキ	
3	壺	後5古	V			細砂多 角閃石、赤褐色粒	黄褐色	外) ナア、ヨコナア、ハケ目 内) ナア	4、5と同一個体 内面赤色顔料
4	壺	後5古	V			細砂多 角閃石、赤褐色粒	黄褐色	外) ナア、突帯、ハケ目 内) ハケ目のちナア	3、5と同一個体 内面赤色顔料
5	壺	後5古	V			細砂少 角閃石	黄褐色	外) ハケ目、突帯、ナア 内) ハケ目のちナア	3、4と同一個体 内面赤色顔料

表5 C地区墳墓群出土土器観察表

挿図 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①胴径 ②底径	胎土	色	調	調整	備考
70-1	壺		I-3号墓				細砂 雲母、角閃石、赤褐色粒	淡黄褐色		マメツ	
2	甕		I-4号墓				小、細砂 雲母、角閃石、赤褐色粒	黄褐色		外) ヨコナデ 内) ナデ	
3	甕		I-4号墓				細砂多 雲母、角閃石	外) 淡茶褐色 内) 淡橙褐色		外) ハケ目 内) ナデ	
4	壺	後5古	I-9号墓下層	21.8R			細砂多 雲母、角閃石	淡橙褐色		マメツ	
5	壺	古前	I-9号墓				細砂 雲母、角閃石	暗黄茶褐色		外) ヨコミガキ、ハケ目 内) ナデ	黒斑
6	高杯	後末	I-9号墓P-1				細砂多 雲母、赤褐色粒	外) 橙褐色 内) 黄褐色		マメツ	
7	高杯	後末	I-9号墓				細砂多 雲母、赤褐色粒、角閃石	黄褐色		外) マメツ 内) ハケ目	
8	甕	後末	I-11号墓1層				細砂多 雲母、赤褐色粒	暗黄茶褐色		外) ハケ目 内) マメツ	煤付着
9	壺	古前	I-11号墓2層	8.0R			細砂多 雲母、赤褐色粒	淡橙褐色		マメツ	
10	甕	古前	I-11号墓上層	22.0R			小砂多 雲母、赤褐色粒	淡橙褐色		マメツ	
11	壺	後末	I-11号墓上層				細砂 雲母、赤褐色粒	橙褐色		外) マメツ、ハケ目 内) ナデ	
12	壺	後末	II-15号墓	10.0R			粗細砂多 雲母、角閃石	灰黄色		マメツ	外面一部赤色顔料付着
13	甕	古前	II-15号墓	18.4R	31.8	①29.8	細砂多 角閃石	外) 黄褐色 内) 茶赤褐色		外) ヨコナデ、ハケ目 内) ハケ目	黒斑 内、外面、赤色顔料付着
14	高杯	後末	II-15号墓				粗砂少、細砂多 雲母、角閃石	白黄褐色、暗黄茶褐色		外) ハクリ、マメツ 内) ハクリ、マメツ、ナデ	
15	甕	古前	II-16号墓	15.0R	15.8	①16.1	粗砂、細砂 角閃石、赤褐色粒、石英	外) 橙褐色、灰黄褐色 内) こげ茶色、灰黄褐色		外) ヨコナデ、ハケ目 内) ナデ、ケズリ、工具によるナデ	煤付着、赤変
16	壺	後5新	IV-19号墓				粗砂 赤褐色粒、雲母	白黄褐色		外) キザミ突替、ナデ 内) マメツ	
17	高杯	後5新	V-25号墓P-1				細砂多 雲母、赤褐色粒、角閃石	淡橙褐色		外) ハケ目 内) ミガキ、ハケ目	
18	鉢	後5新	V-25号墓P-2	14.0R	9.5	②4.3R	細砂 雲母	橙褐色		外) ナデ、未調整、粘土織目 内) ナデ、工具痕、ケズリ	
19	高杯	後5新	V-25号墓P-4				細砂多 雲母	淡橙褐色		外) マメツ 内) 工具によるつまさし痕	穿孔6ヶか



插图番号	器種	編年	出土地	口径	器高	胎土	色	調	調整	備考
72-40	高杯	後5新	Ⅲ-64号墓	25.7R		細砂多 雲母、赤褐色粒、角閃石	白黄褐色		外) マメツ、ミガキ 内) マメツ、粘土細貼付	
41	壺	後5古	Ⅲ・V-4号周溝 P-15			細砂少 赤褐色粒	淡黄褐色		外) ヨコナデ 内) マメツ	
42	高杯	後5古	Ⅲ・V-4号周溝 P-18			砂粒をほとんど含まず	黄褐色		外) タテハケ目、ハケ目のちミガキ 内) ハケ目、ハケ目のちミガキ	
43	高杯	後5古	Ⅲ・V-4号周溝 P-11			細砂少 金雲母	淡橙褐色		外) ヨコナデ 内) ハケ目	
44	高杯	後5古	Ⅲ・V-4号周溝	31.5R	26.4	細砂 赤褐色粒、石英	外) 淡褐色 内) 黄褐色		外) ミガキ、マメツ、ヨコナデ、ハケ、ケズ 内) ヨコナデ、しほり痕、ハケ	穿孔3ヶ
45	高杯	後5古	Ⅲ・V-4号周溝	16.4	21.2	細砂 赤褐色粒、角閃石、雲母	外) 黄褐色 内) 橙褐色		外) ハケのちナデ、ハケのちミガキ、タテハケ 内) ヨコナデ、ハケ目、ハケのちナデ、指頭痕	穿孔3ヶ、杯外面黒斑 杯内底に赤色顔料
73-46	壺	後5古	V-2号墓棺			細砂少	黄褐色		ヨコナデ	
47	壺	古I a	V-2号墓棺	4.6R	8.6	砂粒をほとんど含まず	暗黄茶褐色		外) ナデのちミガキ、ハケのちミガキ、ケズ 内) ナデのちミガキ	外面赤色顔料付着 内底部が黒色
48	壺	古I a	V-2号墓棺	10.2	15.1	細砂 角閃石	灰黄褐色		外) ミガキのちナデ、指圧痕、襷裂、ハケ目 内) ハケのちナデ、ケズ、ミガキのちミガキ	底部赤色顔料付着黒斑 内面部分が黒灰色
49	壺	古I a	V-2号墓棺	7.2R	11.6	砂粒をわずかに含む 赤褐色粒、雲母	橙褐色		外) ハケのちミガキ	黒斑
50	甕	古I a	V-2号墓棺 P-13-17	14.0	14.7	細砂やや含む	外) 黄褐色 内) 黄褐色、赤茶褐色		外) ハケのちナデ、ハケ目、ケズリ、工具に よるケズリ、ハケ目のちナデ、工具痕 内) ヨコナデ目、ハケ目のちナデ、ミガキ	外底部黒色付着 内側全体赤色顔料
51	台壺	古I a	V-2号墓棺	12.7	14.7	粗砂 角閃石、赤褐色粒	暗黄茶褐色		外) ハケのちミガキ	黒斑
52	鉢	古I a	V-2号墓棺 P-12	15.2	7.9	粗砂	外) 灰黄褐色 内) 茶褐色		外) ハケ目、ケズリのちナデ 内) ハケ目、ナデ、指圧痕	内面赤色顔料 内面、黒斑
53	高杯	古I a	V-2号墓棺	22.2		細砂 角閃石	外) 橙褐色、茶褐色 内) 茶褐色		外) 暗文状タテミガキ、ナデ、マメツ 内) ヨコナデ、ナデ	口縁部に黒色の付着物
54	鉢	後5新	V-3号周溝			細砂少	黄褐色		外) ハケ目、ナデ 内) ナデ	
55	甕	後5新	V-3号周溝			細砂多 赤褐色粒、雲母	黄茶褐色		外) ハケ、ナデ 内) ハケのちナデ	外面一部分黒斑
56	高杯	後5新	V-3号周溝近	22.3R	27.5'	砂粒	淡黄褐色		外) ハケ、ナデ、ミガキ風ナデ、ハケによる工 具痕 内) ヨコナデ、ハケ目のちミガキ、ナデ、マメツ	穿孔3ヶ
57	壺	後5新	V-3号周溝 P-8			大理石、赤褐色粒	灰黄色		外) ハケ目、ナデ 内) ハケ目	
58	壺	後5新	V-3号周溝 P-23			細砂少	黄橙褐色		外) ハケ目、ケズリのちハケ目 内) ハケ目、マメツ	黒斑、付着土多し 2次加熱による赤変
59	高杯	後5新	V-5号周溝 P-1	11.1R		砂粒 赤褐色粒	淡褐色		外) ヨコナデ、マメツ 内) マメツ	穿孔3ヶ、黒斑

埴垣 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①口径 ②底径	胎土	色	調	調整	備考
74-60	甕	古IIa	VI-1号墓①				細砂多 雲母、赤褐色粒	暗黄褐色		外) ハケ目 内) ケズリ状ナデ、工具痕	
61	甕	後5新	VI-42号墓内	22.0			粗砂 雲母	灰黄褐色		マメツ	
62	鉢	後5新	VI-42号墓	18.2	12.5		粗砂 赤褐色粒	灰黄褐色		外) ナデ、ハケ目、ケズリのちハケ目、ナデ 内) 粗ハケ目、指痕	黒斑 内面赤褐色付着物
63	高杯	後5新	VI-42号墓	18.0R	18.0	②11.8R	雲母、赤褐色粒	淡橙褐色		外) マメツ、タテミガキ 内) ヨコミガキ、斜ミガキ、マメツ	穿孔3ヶ ミ目 黒色付着物
64	甕	後5古	VII-43号墓P-3	14.0R			細砂多 雲母	淡橙褐色		外) ヨコナデ、タテミガキ、工具痕 内) ヨコナデ、指痕	
65	甕	後5古	VII-54号墓				細砂多 雲母	淡黄褐色		外) ヨコナデ、ナデ 内) ヨコナデ	煤
66	高杯	後5古	VII-54号墓				小砂 雲母、赤褐色粒、角閃石	灰黄褐色		外) マメツ、工具痕 内) 工具によるナデ、ナデ	接合面キザミ目、黒色
67	甕		VIII-36号墓	17.0R			細砂多 雲母	灰黄褐色		マメツ	
68	壺	古Ia	IX-不土6	8.0R			細砂多、粗砂 雲母、角閃石	橙褐色		ハクリ、マメツ	
69	壺	古Ia	IX-不土6			②4.0R	細砂多 雲母、角閃石	外) こげ茶 内) 白黄褐色		外) 工具によるナデ 内) マメツ	
70	壺		X-41号P-2	16.0R			細砂 雲母、赤褐色粒	外) 暗黄赤褐色 内) 黒色		マメツ	
71	鉢	後5新	X-41号墓P-3	12.0R			細砂多 雲母、角閃石	灰黄褐色		外) ナデ、ケズリ 内) ナデ	
72	台盤	後5新	X-41号墓P-3	14.5	13.6	②11.5	細砂多、粗砂 角閃石、石英、雲母	黄橙褐色		外) ハケ、マメツ、ケズリのちハケ目 内) ヨコ方向ハケ、ミガキ、ウズ巻	

表6 D地区墳墓出土土器観察表

埴垣 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①口径 ②底径	胎土	色	調	調整	備考
91-1	壺	古IIa	D-舟形木棺	9.0R			細小砂 赤褐色粒	外) 黄橙褐色 内) 茶褐色		マメツ、ハクリ	
2	甕	古IIa	D-舟形木棺				細砂 赤褐色粒	黄橙褐色		マメツ	5と同一個体か
3	甕	古IIa	D-舟形木棺				細砂 赤褐色粒	黄橙褐色		マメツ、ハクリ	
4	壺	古IIa	D-舟形木棺				細砂多 赤褐色粒	黄橙褐色		マメツ	
5	甕	古IIa	D-舟形木棺				細砂 赤褐色粒	黄橙褐色		マメツ、ハクリ、ケズリか	2と同一個体か 外面一部黒斑

挿図 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①胴径 ②底径	胎	土	色	調	調整	備考
91-6	甕	古IIa	D-舟形木棺				細砂 赤褐色粒		黄褐色		ハクリ、マメツ、ケズリか	外底部黒斑、加熱
7	甕	古IIa	D-舟形木棺				細小砂多		暗灰色		外) ナデ 内) ケズリ、ナデ	
8	甕	古Ia	D-2-1号棺	20.0R			粗砂粒 雲母、角閃石		灰黄褐色		マメツ	煤付着
9	甕	古Ia	D-2-1号棺				細砂多 雲母		淡黄褐色		マメツ	
10	器台	古Ia	D-2-2号棺				粗砂少、細砂多 雲母、角閃石		灰黄褐色		外) マメツ、ハケ目 内) シボリ、指痕、ナデ、マメツ、ハケ目	黒色部分

表7 E地区1号墳丘墓出土土器観察表

挿図 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①胴径 ②底径	胎	土	色	調	調整	備考
148-1	甕	古Ib	1-主体部	13.8R			細砂少 石英、角閃石、赤褐色粒		茶褐色、暗茶褐色		外) 櫛揃平行沈線紋、ヨコナデ 内) ヨコナデ	
2	甕	古Ib	1-木棺				細小砂 石英、角閃石、赤褐色粒		外) 淡黄褐色、淡褐色 内) 淡黄褐色、灰色		マメツ	2次加熱か
3	甕	古Ib	1-墓壇内				細小砂少 雲母、角閃石、赤褐色粒		外) 暗黄茶褐色、黒色 内) 黒色		外) タタキのちナデか 内) ケズリ状工具によるナデ	煤付着
4	高杯	古Ib	1-主体部①				細小砂少 石英、角閃石、赤褐色粒		黄褐色、灰黄褐色		ナデ 内) ヨコナデ	接合面
5	甕	古Ib	1-北斜面				砂粒 赤褐色粒、雲母、角閃石		外) 黄茶褐色、黒色 内) 灰黄褐色		外) ハケのちナデ、ケズリのちナデ 内) ナデ、ケズリ	黒斑
6	甕	古Ib	1-北①				砂粒 赤褐色粒、角閃石、雲母		外) 黄茶褐色 内) 灰黄褐色		外) ハケ目のちナデ、ケズリ 内) ケズリ	
7	碗	古Ib	1-北②				細小砂少 角閃石、赤褐色粒		黄褐色		ナデ	
8	壺	古Ib	1-主体部墓壇内 北東側③	17.6R			砂粒 赤褐色粒、角閃石、雲母		黄褐色、黄茶褐色		外) ヨコナデ、ハケのちナデ、突帯、ハケ目 内) ハケ目	
9	壺	古Ib	1-東側④				砂粒 赤褐色粒、雲母		黄茶褐色		外) ハケ目、ヨコナデ、ナデ、キザミ突帯 内) ナデ、ケズリ	
10	甕	古Ib	1-北東⑤				砂粒 赤褐色粒、角閃石、雲母		黄茶褐色、黒灰色、黒色		外) ハケ目、ナデ、ケズリ 内) ケズリ	内面赤色顔料
11	甕	後期	1-北東側盛土				細小砂多 石英、角閃石、赤褐色粒		外) 淡黄褐色 内) 茶褐色、黄褐色		外) ハケ目のちヨコナデ 内) マメツ	
12	壺	中期	1-北東				細砂 雲母、角閃石、赤褐色粒		外) 淡褐色 内) 灰黄褐色		外) ヨコナデ、突帯 内) 工具によるナデ	
13	甕	後4新	1-北東⑥			②4.0	細小砂		外) 茶褐色、赤茶褐色 内) 黒色		ハケ目、マメツ、ナデ	煤付着

插图 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①胴径 ②底径	胎	土	色	調	調整	備考
144-14	高杯	後5新	1-北東⑬	30.0R			細小砂少 石英、角閃石、赤褐色粒		外) 橙褐色 内) 黄橙、淡褐色		外) マメツ、ヨコナデ 内) ハケ目	
15	壺		1-東斜面④	26.0R			小砂少 石英、角閃石、赤褐色粒		内) 淡黄褐色、黒色 外) 黄茶褐色		ヨコナデ	煤か
16	壺	古I b	1-東側⑫				細砂少 赤褐色粒		内) 黒色 外) 黄茶褐色		外) ハケのちヨコナデ、キザミ突帯、ハケのちヨ コナデ、キザミ、ケズリのちヨコナ デ 内) ハケ目、ケズリのちヨコナ デ	
17	壺	後5新	1-頂部東側盛土	12.0R			砂粒多 石英、角閃石		灰黄褐色、灰色		外) ヨコナデ、ハケ目のちヨコナ デ 内) ヨコナデ	
18	壺	後5古	1-南東⑩~⑬ 南東盛土	20.0R			細小砂少 石英、角閃石、雲母		淡茶褐色		ヨコナデ、工具痕か	
19	壺		1-南東盛土	22.0R			細小砂少 赤褐色粒		外) 淡黄褐色、淡褐色 内) 淡黄褐色		ヨコナデ	2次加熱か
20	甕	後5古	1-南東盛土⑩ ~⑬	22.0R			細小砂多 石英、角閃石、赤褐色粒		外) 黄褐色 内) 黄橙、淡褐色		外) ハケ目のちヨコナデ 内) ヨコナデのちヨコナデ	
21	甕	後5古	1-南東盛土⑩ ~⑬				細小砂多 石英、角閃石、赤褐色粒		外) 橙褐色 内) 橙褐色		外) ヨコナデ、ハケ目 内) ハケ目のちヨコナ デ	黒斑
22	甕	後5古	1-南東盛土				砂粒		外) 暗黄茶褐色、灰色 内) 暗黄茶褐色		外) ヨコナデ、ハケ目 内) ハケ目	
149-23	甕	後5古	1-南東盛土⑩ ~⑬				小砂多 雲母、角閃石、乳白色粒		赤褐色、茶褐色		外) ヨコナデ、ハケ目のち工具ナデ 内) ハケ目	
24	甕	後5古	1-南東盛土中				砂粒全と含まず		外) 黄褐色 内) 黄橙、橙褐色		外) ヨコナデ 内) ヨコナデ、ナデ	
25	甕	後5古	1-南東盛土⑭				細砂 石英、角閃石		外) 黄橙、黄茶、黒色 内) 淡橙、淡赤色		ハケ目のちヨコナデ	煤か 2次加熱か
26	甕	後5古	1-南東盛土⑩ ~⑬				細小砂 石英、角閃石、赤褐色粒		赤褐色粒、茶褐色		ヨコナデ	
27	甕	後5古	1-南東盛土⑩				細小砂少 雲母、角閃石、赤褐色粒、 石英		淡褐色		外) ヨコナデ、ハケ目、ハケ目のちヨコナデ 内) ヨコナデ	
28	甕	前期	1-南東盛土⑩ ~⑬				細小砂 角閃石、赤褐色粒		黄褐色		外) マメツ、ナデ 内) マメツ	
29	甕	古I b	1-南東⑬⑭⑮				細砂、粗砂 雲母、赤褐色粒		赤褐色		外) タタキのちハケ 内) ナデ、工具によるケズリ風ナデ	
30	甕	後4古	1-南東盛土中			②3.2	細小砂多 雲母、角閃石、赤褐色粒		外) 黄橙、灰色 内) 赤褐色		外) ハケ目、ナデ 内) ハケ目	
31	甕	後5新	1-南東盛土中				砂粒 雲母、角閃石、赤褐色粒		外) 灰黄褐色、茶褐色 内) 灰黄褐色		外) ハケ目 内) ケズリ状指ナデ	
32	甕		1-南側表土直下				細砂 石英、角閃石、赤褐色粒		黄橙~橙褐色		マメツ	
33	甕		1-南				細小砂多 石英、角閃石、赤褐色粒		外) 暗黄茶褐色 内) 淡黄褐色		ハケ目	

插图 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①順径 ②底径	胎土	色	調	調整	備考
145-34	甕	古I b	1				砂粒 赤褐色粒、角閃石、雲母	外) 茶褐色、黒色 内) 灰黄褐色		外) ハケ目のちナデ、ケズリのちハケ目 内) ケズリ	外面に黒斑
35	甕	後5古	1-南西			②3.4	細砂 角閃石	灰黄褐色		外) ハケの工具によるケズリ、モミ、ワラ状 内) ハケ目のちナデ、マメツ	
36	壺	後5新	1-頂南西部	27.0R			細小砂粒 角閃石、赤褐色粒	暗黄茶褐色		マメツ、ヨコナデ	
37	壺	後5新	1-北側周溝③			①15.5R	細小砂 石英、雲母、角閃石、赤 褐色粒	外) 暗黄茶褐色 内) 淡黄茶、灰色		外) ハケ目のちナデ 内) ハケ目のちヨコナデ、ナデ、ハケ目	
38	甕	後5新	1-北西周溝内 上層	22.0R			細小砂 石英、角閃石、赤褐色粒	黄橙、淡黄橙色		外) ナデ 内) ヨコナデ	
39	甕	後5新	1-北周溝上層				細小砂 石英、角閃石、赤褐色粒	灰黄褐色		外) ヨコナデ、ハケ目 内) ヨコナデ	
40	甕	後5新	1-北側周溝③				細小砂 石英、角閃石、赤褐色粒	橙褐色		外) ヨコナデ、ハケ目 内) ヨコナデ、ハケリ、ハケ目	
41	甕	後4古	1-北周溝③①			②4.2R	細砂多	外) 黄茶褐色、暗黄茶褐色 内) 黄茶褐色		外) ハケ目、底部布目裏後ナデ 内) ハケ目ナデ	
42	高杯	後5新	1-北周溝②				細小砂多 雲母、赤褐色粒、角閃石	淡黄橙色		外) ハケのちナデ 内) ナデ	
43	支脚	後5新	1-北周溝P-23				細小砂多 石英、雲母、角閃石、赤 褐色粒	灰黄褐色		外) ナデ 内) ケズリ	
44	甕	後5新	1-西周溝内上層				細砂 石英、角閃石、赤褐色粒	淡黄褐色		ヨコナデ	
45	甕	後5新	1-西周溝内上層				細砂 石英、角閃石、赤褐色粒	黄茶色、暗黄茶褐色		マメツ	
46	甕	後5新	1-西周溝内上層				細小砂少 石英、角閃石	外) 灰黄褐色、灰色 内) 灰黄褐色		マメツ	
47	甕	後5新	1-西周溝内				細砂 石英、角閃石、赤褐色粒	橙褐色		マメツ	
48	高杯	後5新	1-西周溝内				微細砂 石英、角閃石、赤褐色粒	黄橙色、橙褐色		ヨコナデ	
49	高杯	後5新	1-西周溝内上層				細小砂	黄橙色、灰色		ナデ	
50	台鉢	古I b	1-西周溝③	8.1			細小砂少 雲母、角閃石、赤褐色粒	外) 茶褐色、暗黄茶褐色 内) 茶褐色		外) 工具によるナデ、ナデ 内) ナデ、爪痕	黒斑
51	高杯	後5古	1-西周溝粘土桶方	24.0R			細小砂少	外) 黒色 内) 黄橙色		外) ハケ目のちヨコナデ、マメツ 内) 粗ハケ目のちナデ、ヨコナデ	
52	甕	後4新	1-突出部東側②			②3.5	粗、細砂少 石英、角閃石、赤褐色粒	灰黄褐色、灰色		外) ナデ、底部くぼむ 内) ハケ目のちナデ	

表8 E地区2・3号墳丘墓出土土器観察表

押図番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①胴径 ②底径	胎	土	色	調	調整	備考
150-1	壺	古I a	2-北東斜面	13.0R	①20.0R	細砂少 赤褐色粒、雲母			黄橙褐色		外) ナメツ、ヨコミガキ、ミガキ 内) マメツ、ミガキ、指圧痕、ナメ、ケズリ	
2	埴	古I a	2-北東斜面	5.0R		細砂やや少 雲母			黄橙色		ナメ、未調整	
3	器台	後5古	2-東側周溝			細砂少 角閃石			淡黄橙褐色		外) ナメ 内) ナメ、工具によるナメ	
4	甕	前期	2-1号棺、 墓壇内	22.0R		細砂やや少 雲母			黄橙褐色、黒色		外) マメツ 内) マメツ、ナメ	株付着
5	甕	後4新	2-2号棺内			細砂多			淡黄橙色		外) マメツ、ハケ目 内) ナメ	
6	高杯	後5新	3-1号棺内			細砂石英、角閃石			黄橙色		外) ハケ目 内) ヨコナメ、マメツ	
7	高杯	後5新	3-1号棺内、 攪乱	24.0R		細砂 金雲母			外) 茶褐色 内) 橙褐色、茶褐色		外) ヨコナメ、マメツ、ハケ目 内) ナメ、ヨコナメ	8と9同一個体
8	高杯	後5新	3-1号棺内、 攪乱			細砂少			茶褐色		外) マメツ 内) マメツ、ナメ	7と9同一個体
9	高杯	後5新	3-1号棺内、 攪乱			砂粒 金雲母、赤褐色粒			外) 橙褐色、茶褐色 内) 茶褐色		外) ハケ目のちミガキ 内) ナメ	7と8同一個体
10	壺	後5古	3-2号棺墓壇内	11.9	12.9	粗砂			灰黄褐色		外) ヨコナメ、ハケ目、粗ケズリ 内) ハケ目	黒斑
11	器台	後5古	3-2号棺① 4-南周溝①		②16.5R	細砂やや多 雲母、赤褐色粒			外) 白黄褐色 内) 黄茶褐色		外) タテハケ目、ナメ 内) ナメ、ハケ目	付着土 底部に黒色付着物
12	壺	後5新	3-2号棺北、 攪乱			細砂やや多 角閃石			外) 黄橙褐色、赤褐色 内) 黄褐色、赤褐色		外) ナメ 内) 粗ケズリ	黒斑 内外面赤色顔料
13	壺	後5古	3-4号棺②供献	9.6R	15.6	①15.9R	細砂多 赤褐色粒、角閃石		外) 黄橙色 内) 灰黄褐色、暗灰色		外) タテハケ目、ナメ、ミガキ 内) ヨコナメ、ハケ目のちナメ、工具痕、指 窪	黒斑
14	鉢	後5古	3-4号棺①供献	11.5	7.4	砂粒やや少 赤褐色粒、金雲母			白黄褐色、黒色		外) タテキのちナメ、ケズリのちナメ、ケズ リ 内) ヨコナメ、ナメ、工具痕	
15	甕	後5古	3-4号棺②供献			砂粒少			茶褐色、赤褐色		外) マメツ 内) マメツ、ハケ目	
16	甕	後5古	3-4号棺墓壇内			砂粒やや少 金雲母			黄橙褐色		ヨコナメ	
17	甕	縄文	3-4号棺墓壇内			砂粒ほとんど含まず 赤褐色、雲母、角閃石			白黄褐色		外) タタキ、ナメ 内) ナメ	
18	壺	後5新	3-10号棺供	9.6	6.3	細砂 雲母			橙褐色		外) ミガキ、ハケ目、マメツ 内) ハケのちミガキ、ヨコナメ、ミガキ	
19	鉢	後5新	3-10号棺供	8.5	6.9	細砂			外) 灰黄褐色、橙褐色、黒色 内) 橙褐色		ナメ	黒斑

挿図番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①胴径 ②底径	胎土	色	調	調整	備考
146-20	高杯		3-13号楠南西				細砂少 赤褐色粒、雲母	外) 淡黄褐色 内) 黒色	ハケ目、マメツ		
21	鉢		3-不整土墳1	22.8R			細砂多 角閃石、雲母	淡黄褐色	マメツ		

表9 E地区4号墳丘墓出土土器観察表

挿図番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①胴径 ②底径	胎土	色	調	調整	備考
151-1	鉢	後5古	4-1号棺内			②4.6	細砂少 角閃石、赤褐色粒	外) 茶褐色、灰黄色 内) 灰黄色、茶褐色		外) ヨコナデ、ナデ、ミガキ 内) ヨコナデ、ナデ	内外赤色顔料付着
2	甕	後5新	4-3号棺	22.5R			細砂少 金雲母、角閃石	灰黄褐色		外) ハケ目のちナデ 内) ナデ、ケズリ	
3	甕	後5新	4-3号棺内				細砂多 雲母	外) 淡橙褐色 内) 白黄茶色、黒灰色		外) ハケ目、マメツ 内) マメツ、ハケ目	
4	甕	後5新	4-3号棺墓壇内				細砂多 角閃石、雲母	外) 白黄褐色、黒灰色 内) 白黄褐色、灰色		外) ハケ目、マメツ 内) マメツ、ナデ	黒斑
5	台鉢	後5新	4-3号棺墓壇内	13.1R			小石粒2ヶ、細砂少 雲母	橙褐色		外) ケズリのちナデ 内) マメツ、工具痕	煤
6	高杯	後5新	4-3号棺外				細砂少 角閃石	外) 橙褐色、黒色 内) 黄褐色、黒色		ナデ	煤か
7	高杯	後5新	4-3号棺外				細砂少 角閃石	茶褐色		ナデ	
8	高杯	後5古	4-3号棺南擾乱				細砂若干 赤褐色粒、雲母	外) 淡橙褐色 内) 黒色		外) 工具によるナデ、キザミ 内) ハケ状工具による刺突	
9	高杯	後5古	4-3号棺南擾乱				細砂多、石英、角閃石 赤褐色粒	茶褐色		外) ヨコナデ、ミガキか 内) 工具痕かナデ、シボリ痕	穿孔3個
10	壺	後5新	4-4号棺墓壇	9.0R			細砂少、雲母、角閃石	淡橙褐色		外) ハケ目 内) マメツ	
11	甕	後1新	4-4号棺西側集石	21.6R			小砂粒多、雲母 赤褐色粒、角閃石	外) こげ茶 内) 淡橙褐色		ヨコナデ	煤か
12	甕		4-4号棺内				細砂多 角閃石、雲母	白黄褐色		外) マメツ 内) ナデ	
13	甕		4-4号棺墓壇				細砂少 角閃石、雲母、赤褐色粒	淡黄褐色		ナデ	
14	甕		4-4号棺石蓋横				砂粒ほとんど合ず	淡黄橙褐色		外) マメツ 内) ナデ	
15	甕		4-4号棺内				細砂多 雲母	淡黄褐色		外) マメツ 内) ナデ	
16	壺	後5新	4-5号棺				細砂多、赤褐色粒 雲母	外) 淡橙褐色 内) 橙褐色		外) ヨコナデ 内) マメツ	

挿図番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①胴径 ②底径	胎土	色	調	調整	備考
151-17	甕	後5新	4-5号棺内				細砂少、角閃石	橙茶褐色		マメツ	
18	甕	後5新	4-5号棺				細砂多、雲母 角閃石、赤褐色粒	外) 黄橙、灰色 内) 赤茶褐色		外) ハケ目のナデ、ナデ 内) ハケ目のナデ	
19	甕	後5古	4-東南溝③	19.0R			細砂少、金雲母	灰黄褐色		外) タテハケ目、ナデ 内) ヨコハケ目、ナデ、ハケ目、ハケリ	
20	器台	後5古	4-東南溝③	19.6R			細砂少 角閃石、雲母	灰黄褐色		外) マメツ 内) ハケ目	
21	支脚	後5古	4-盛土			②11.0R	細砂多 角閃石	淡黄褐色		外) マメツ 内) ケズリ	
22	高杯	後5新	4-1号棺東				細砂少 角閃石	外) 暗黄茶褐色 内) 赤茶褐色		ナデ	
23	甕	後5新	4-北東斜面	11.2R	13.3	①13.5R	4-5mmの小石数個 細砂若干、角閃石	白黄褐色		外) マメツ、ケズリ 内) マメツ、ヨコナデ、工具によるナデか、指圧痕	
24	甕	後5新	4-北東斜面				細砂多 石英、角閃石	外) 灰黄褐色 内) 黄褐色		外) ナデ、ハケ目 内) ケズリ状、工具によるナデか、工具痕か	底部に黒色の付着物
25	高杯	後5新	4-東斜面	14.3R			細砂多 角閃石、雲母	黒灰色、黄褐色		外) ハケ目、ケズリ状ナデ、粗いミガキ 内) ヨコナデ、マメツ、ナデ、ハケ目	
26	鉢	後5新	4-4号棺	11.3R			細砂少 角閃石、雲母	茶褐色		外) ヨコハケ目のちナデ、ケズリ 内) ナデ、ナナメハケ目	
152-27	壺	後5新	4-4号棺東	28.0			細砂多 角閃石、石英、雲母	黄褐色		外) ヨコナデ、ハケ、マメツ、スス 内) ヨコナデ、ハケ	内面全体、外面口縁に かけ赤色顔料付着
28	壺	後5新	4-4号棺東	32.4R			細砂多 赤褐色粒	赤茶褐色 暗黄茶褐色		外) ヨコナデ、キザミ突帯、マメツ 内) ナデ、ケズリ状ハケ目	内面全体赤色顔料付着
29	壺	後5新	4-北東斜面	34.0R			細小砂多	黄茶褐色 赤茶褐色		外) ナデ、キザミ突帯2本 内) ナデ、ケズリ状ハケ目	内面赤色顔料付着 外面一部黒色

表10 E地区5号墳丘墓出土土器観察表

挿図番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①胴径 ②底径	胎土	色	調	調整	備考
153-1	壺	後5古	5-北周溝上層				小砂粒少 角閃石、雲母	灰黄褐色		ヨコナデ	
153-2	甕	後5古	5-西周溝上層				細砂	橙褐色		ナデ	
3	甕	後5古	5-西周溝⑤				細砂	白黄褐色		外) ヨコナデ 内) ヨコナデ、ハケ目	
4	甕	古I a	5-西周溝底			①21.4	粗砂多 赤褐色粒	橙茶褐色		外) ナデ、ハケ目 内) ナデ、ケズリ、指圧痕、粘土雜目	内面赤色顔料付着
5	甕	後5古	5-西周溝③				砂粒少 金雲母、角閃石	暗灰黄褐色		外) ケズリ状ナデ 内) ナデ	

押図 番号	器種	編年	出土地	口径	器高	①胴径 ②底径	胎土	色	調	調整	備考
153-6	甕	後5古	5-西周溝⑦				細砂少 金雲母	白黄褐色		外) タテミガキ 内) ナデ	
7	甕	後5古	5-西周溝中層			②4.8R	細砂多 雲母、角閃石、赤褐色粒	灰黄褐色		外) ケズリ、ナデ 内) ナデ	
8	甕	後5古	5-西周溝⑬			②6.0R	細砂やや多 金雲母	灰黄褐色		外) タタキ、ナデ 内) ハケ目	
9	壺	後5古	5-西周溝中央上層			②6.1R	細砂やや多 角閃石	淡白黄橙褐色		外) ハケのちナデ、ナデ 内) ハケのちナデ	
10	高杯	後5新	5-西周溝⑫				細砂 雲母	外) 橙褐色 内) 黄橙褐色、黒色		ナデ	
11	器台	後5古	5-西周溝⑫	13.2R			角閃石、雲母	淡黄褐色		ナデ	
12	甕	後5新	5-南西周溝	16.0R			細砂やや多 雲母、赤褐色粒、角閃石	外) 淡こげ茶 内) こげ茶		外) ナデ、ハケ目 内) ハケ目	
13	甕	後5新	5-南西周溝	14.0R			細砂少 雲母、角閃石	淡黄白色		外) ハケ目 内) ナデ、ハケ目	
14	甕	古I a	5-南西周溝15	15.0R			砂粒 雲母、赤褐色粒	外) 黄褐色 内) 灰黄褐色		外) ナデ 内) ケズリか	
15	甕	後5古	5-南西周溝③				砂粒 金雲母	外) 白黄色 内) 黄褐色		外) ハケ目 内) ヨコナデ	
16	甕	後5新	5-南西周溝⑨				細砂やや多 金雲母	灰黄褐色		ナデ	
17	甕	後5古	5-南西周溝				細砂やや少 角閃石、赤褐色粒	白黄茶色		外) ハクリ、ナデ 内) ヨコハケ目	
18	甕	後5新	5-南西周溝16				細砂	外) 白黄褐色 内) 白黄褐色、黄褐色		外) タテハケ目 内) ナデ	
19	甕	後5新	5-南西周溝2				砂粒少 角閃石、雲母	白黄褐色		外) ヨコナデ、タテハケ目 内) ナデ	
20	甕	後5新	5-南西周溝4、7、 10、17				細砂多 角閃石、雲母	灰黄褐色、灰色		外) ハケ目 内) ナデ	
21	甕	後5古	5-南西周溝8				細砂多 雲母、角閃石	外) 灰黄褐色 内) 黄茶褐色		外) マメツ 内) ハケ目、ナデ	
22	高杯	後5古	5-南西周溝1				細砂少	外) 黄茶褐色 内) 白黄茶色		外) ヨコナデ、ハケ目 内) マメツ	
23	高杯	後5新	5-南西周溝12				細砂少 金雲母	淡黄褐色		外) タテハケ目 内) ナデ、指ナデ、ハクリ面、ケズリ、ハケ目	

表11 徳永川ノ上墳墓群出土玉類一覧表

出土遺構	No.	径 mm	厚(長) mm	孔径 mm	分類	備考
I-8号墓 (首)	勾玉	(厚)5.7	16.5	3.0	勾玉	ひすい 1.5g
〃	1	3.8	10.1	1.5	細管	グリーンタフ(白緑色)両面穿孔
〃	2	3.5	9.5	1.5	細管	〃
〃 (右手首)	1	4.4	4.6	1.4	A	ガラス小玉 コバルトブルー
〃	2	4.8	4.6	1.7	A	〃
〃	3	5.0	4.3	1.5	A	〃
〃	4	4.8	3.8	1.6	C	〃 (ややにごる)
〃	5	5.3	3.8	2.0	C	〃
〃	6	5.0	3.8	2.0	C	〃
〃	7	5.2	4.2	1.0	C	〃
〃	8	5.0	3.5	1.4	C	〃
〃	9	破損	3.2	1.7	C	〃 (破損)
〃	10	破損			C	〃 (〃)
〃	11	4.1	3.5	1.6	A	〃
〃	12	4.5	3.2	1.6	A	〃
〃	13	4.8	5.2	1.5	A	〃
〃	14	5.3	4.1	1.5	C	〃
〃	15	4.3	2.8	2.0	C	〃 (やや色薄い)
〃	16	5.6	3.4	1.5	C	〃
〃	17	5.5	3.5	1.6	C	〃
〃	18	4.9	3.2	1.2	C	〃 (ややにごる)
〃	19	破損				〃 (破損)
〃	20	6.0	3.9	1.7	C	〃
〃	21	5.4	4.1	2.2	C	〃
〃	22	5.0	3.9	1.6	C	〃
〃	23	6.6	3.7	2.9	C	〃
〃	24	6.5	3.9	2.7	C	〃
〃	25	6.7	5.7	2.2	C	〃
〃	26	4.6	2.7	2.0	C	〃
〃	68	5.6	3.5	2.4	C	〃

出土遺構	No.	径 mm	厚(長) mm	孔径 mm	分類	備考
I-8号墓 (右手首)	69	5.0	3.4	2.4	C	ガラス小玉 コバルトブルー
〃 〃	70	5.4	4.0	1.9	C	〃 〃
〃 〃	71	4.9	4.3	2.0	C	〃 〃
〃 〃	72	破損				〃 〃 (破損)
〃 (左手首)	27	5.3	4.2	2.5	C	〃 〃 (やや色薄い)
〃 〃	28	5.1	6.0	1.4	A	〃 〃
〃 〃	29	5.0	4.1	2.2	C	〃 〃
〃 〃	30	5.0	4.1	1.5	C	〃 〃
〃 〃	31	6.0	4.5	1.7	C	〃 〃
〃 〃	32	5.8	3.3	1.7	C	〃 〃
〃 〃	33	5.1	4.6	1.7	C	〃 〃
〃 〃	34	破損				〃 〃 (破損)
〃 〃	35	破損			C	〃 〃 (破損)
〃 〃	36	5.8	4.3	1.9	C	〃 〃
〃 〃	37	4.5	5.4	1.1	A	〃 〃
〃 〃	38	5.7	4.7	1.2	C	〃 〃
〃 〃	39	5.3	5.5	1.6	A	〃 〃
〃 〃	40	4.7	4.9	2.5	A	〃 〃
〃 〃	41	5.8	4.3	1.7	C	〃 〃
〃 〃	42	5.8	4.8	2.1	C	〃 〃
〃 〃	43	破損			C	〃 〃 (破損)
〃 〃	44	破損			?	〃 〃 (破損)
〃 〃	45	6.0	4.5	2.5	C	〃 〃
〃 〃	46	6.1	4.3	2.0	C	〃 〃 (破損)
〃 〃	47	5.4	5.0	2.0	C	〃 〃
〃 〃	48	6.4	4.4	2.4	C	〃 〃
〃 〃	49	6.0	3.6	2.2	C	〃 〃
〃 〃	50	6.5	5.0	2.1	C	〃 〃
〃 〃	51	6.4	5.5	1.7	C	〃 〃
〃 〃	52	5.1	3.7	1.5	C	〃 〃
〃 〃	53	6.1	4.6	2.0	C	〃 〃 (やや色薄い)

出土遺構	No.	径 mm	厚(長) mm	孔径 mm	分類	備考
I-8号墓(左手首)	54	破損			C	ガラス小玉 コバルトブルー (破損)
〃	63	3.2	1.8	0.8	D	ガラス粟玉 コバルトブルー (色うすい、一部破損)
〃	64	2.9	1.9	1.4	D	〃 〃 (色うすい)
〃	66	4.6~5.4	5.5	0.9	A	ガラス小玉 コバルトブルー
〃	67	5.7	4.1	1.9		〃 〃
〃 (首又は右耳)	55	3.2	2.0	1.1	D	ガラス粟玉 コバルトブルー (色うすい)
〃	56	3.9	2.3	1.1	D	ガラス小玉 スカイブルー
〃	57	2.8	2.6	0.8	D、E	ガラス粟玉 コバルトブルー (色きわめてうすい)
〃	58	2.9	2.6	0.8	D	〃 〃 (色うすい)
〃	59	2.7	1.9	1.1	D	〃 〃 (色うすい)
〃	60	2.9	3.6	1.2	D、E	〃 〃 (色うすい)
〃	61	3.7	2.6	1.1	C	ガラス小玉 スカイブルー
〃	65	3.0	1.8	1.1	D	ガラス粟玉 コバルトブルー (色うすい)
〃	73	4.6	3.4	1.0	C	ガラス小玉 スカイブルー
〃	75	3.1	2.1	1.0	D、E	ガラス粟玉 コバルトブルー (色うすい)
〃	76	破損			D	〃 〃 〃
〃	77	破損			D	〃 〃 〃
〃	78	破損			D	〃 イエローグリーン 〃
〃	100	5.6	5.0	1.9	C	ガラス小玉 コバルトブルー
〃	101	6.5	5.1	2.3	C	〃 〃
〃	102	5.2	3.0	2.0	C	〃 〃
〃	103	5.0	3.9	2.1	C	〃 〃
〃 (首付近)	管玉 (Noなし?)	4.1	13.6	1.9	小管	碧玉 グリーン 両面穿孔
〃 (首又は右耳)	1	5.0	3.0	1.5	C	ガラス小玉 スカイブルー
〃	2	3.0	2.0	1.1	D	ガラス粟玉 コバルトブルー (色うすい)
〃	3	5.7	3.5	1.1	C	ガラス小玉 コバルトブルー
〃	4	3.8	3.4	1.0	C	〃 スカイブルー
〃	5	7.1	6.0	1.2	丸玉	水晶丸玉 片面穿孔 (むかえ孔あり)
〃	6	3.5	1.4	1.1	D	ガラス粟玉 コバルトブルー (色うすい)
〃	7	2.9	1.2	1.1	D、E	〃 赤茶色 (にごる、黒クテ織)
〃	8	3.6	3.0	0.8	C	ガラス小玉 スカイブルー

出土遺構	No.	径 mm	厚(長) mm	孔径 mm	分類	備考
I-8号墓(首又は右耳)	9	3.7	2.9	1.1	E	ガラス小玉 スカイブルー
◇ ◇	10	2.7	2.5	0.9	E	ガラス粟玉 コバルトブルー (色うすい)
◇ ◇	11	4.6	3.4	1.4	C	ガラス小玉 スカイブルー
◇ ◇	12	2.6	1.8	0.9	D	ガラス粟玉 コバルトブルー (色うすい)
◇ ◇	13	3.9	3.7	0.9	C	ガラス小玉 スカイブルー
◇ ◇	14	破損			D	ガラス粟玉 グリーンブルー (色うすい)
◇ ◇	15	2.8	1.5	1.1	D	◇ コバルトブルー (色うすい)
◇ ◇	16	2.4	2.1	0.9	D	◇ ◇ (色うすい)
◇ ◇	17	2.9	1.7	0.7	D	◇ ◇ (色うすい)
◇ ◇	18	2.2	2.0	0.6	D	◇ ◇ (色うすい)
◇ ◇	19	2.8	1.2	0.7	D	◇ ◇ (色うすい)
◇ ◇	20	2.4	1.6	0.9	D	◇ ◇ (色うすい)
◇ ◇	21	2.6	1.1	0.9	D	◇ ◇ (色うすい)
◇ ◇	22	3.1	1.9	1.2	D	◇ ◇ (色うすい)
◇ ◇	23	2.8	1.6	0.7	D	◇ ◇ (色うすい)
◇ ◇	24	2.9	1.5	0.9	D	◇ ◇ (色うすく、灰色おびる)
◇ ◇	25	3.7	1.5	1.1	D	ガラス小玉 ◇ (色うすい)
◇ ◇	26	3.9	2.6	1.2	C	◇ スカイブルー
◇ ◇	27	2.9	1.2	0.9	D	ガラス粟玉 コバルトブルー (色うすい)
◇ ◇	28	2.4	1.6	0.9	D	◇ ◇ (色うすい)
◇ ◇	29	2.7	2.6	0.9	D、E	◇ ◇ (色うすい)
◇ ◇	30	2.9	2.1	0.9	D、E	◇ ◇ (色うすい)
◇ ◇	31	破損			D	◇ ◇ (色うすい、破損)
◇ ◇	32	2.4	1.5	0.6	D	◇ ◇ (色うすい)
◇ ◇	33	破損			D	◇ ◇ (色うすい、破損)
◇ ◇	34	2.6	1.4	1.1	D	◇ 赤茶色 (にごる)
◇ ◇	35	破損			D	ガラス粟玉 コバルトブルー (色うすい)
◇ ◇	36	3.1	1.7	0.6	D、E	◇ ◇ (色濃い)
◇ ◇	37	3.7	2.1	1.1	D、E	ガラス小玉 ◇ (色うすい)
◇ ◇	38	3.1	2.0	1.2	D	ガラス粟玉 ◇ (色うすい)
◇ ◇	39	3.4	2.1	0.8	D、E	◇ ◇ (色うすい)

出土遺構	No.	径 mm	厚(長) mm	孔径 mm	分類	備考
I-8号墓(首又は右耳)	40	2.7	2.3	0.5	D	ガラス粟玉 コバルトブルー (色うすい)
〃	41	2.6	1.6	0.7	D	〃 〃 (色うすい)
〃	42	2.4	1.5	0.8	D	〃 〃 (色うすい)
〃	43	2.8	2.1	0.7	D、E	〃 〃 (色うすい)
〃	44	2.5	2.8	0.8	D、E	〃 〃 (色うすい)
〃	104	3.3	2.2	0.9	D、E	〃 グリーンブルー (色うすい)
〃	105	3.2	1.4	0.9	D	〃 スカイブルー (色うすい)
〃	106	2.7	2.6	0.6	D、E	〃 コバルトブルー
〃	107	破損			D	〃 コバルトブルー
〃	108	破損			D	〃 スカイブルー
I-10号墓	1	5.2	3.7	2.1	C	ガラス小玉 コバルトブルー
〃	2	5.8	4.7	1.6	C	〃 〃
〃	3	4.9	4.1	1.3	C	〃 スカイブルー
〃	4	4.1	8.3	1.6	小管	グリーンタフ 白緑色 管玉 両面穿孔 片面は2度孔をあける
〃	5	4.6	3.0	1.8	C	ガラス小玉 コバルトブルー
〃	6	4.2	2.8	1.4	C	〃 〃
〃	7	4.3	2.5	1.1	C	〃 〃
〃	8	4.5	3.6	1.5	C	〃 〃
〃 整理時にNo付す (出土状況図にない)	9	4.9	4.3	1.5	C	〃 スカイブルー
I-13号墓(右耳飾)	1	10.2	8.2	最大5.9 最小2.6	丸玉	ひすい丸玉 白緑色～緑色
〃	2	4.6	8.8	1.3	小管	メノウ 透黄茶色 にごった縞あり 両面穿孔
〃	3	4.8	13.8	3.2	〃	碧玉 緑色 両面穿孔
〃	4	4.8	9.3	2.5	〃	〃 〃
〃	5	4.2	8.3	1.6	〃	〃 〃 (白をおびる)
〃	6	4.3	8.1	1.7	〃	〃 〃 (黄色おびる)
〃	7,8	4.1	11.6	1.5	〃	グリーンタフ 白緑色縞状 両面穿孔
〃	9	3.9	現7.9	1.9	〃	碧玉 緑色 穿孔方向不明
〃	10	3.7	8.2	1.6	〃	〃 緑色 (縞状) 両面穿孔
〃	11	4.6	4.2	1.1	C	ガラス小玉 コバルトブルー
〃	12	4.8	4.6	1.1	C	〃 〃
〃	13	4.4	3.7	1.3	C	〃 〃

出土遺構	No.	径 mm	厚(長) mm	孔径 mm	分類	備考
I-13号墓 (右耳飾)	14	破損				ガラス小玉 コバルトブルー (破損)
〃	15	4.0	7.4	1.6	小管	グリーンタフ 白緑色 両面穿孔
〃	16	3.4	9.2	1.1	〃	〃 〃 〃
〃	17	4.3	10.9	1.8	〃	碧玉 やや黄色おびた緑 〃
〃	18	4.3	12.9	1.8	〃	〃 〃 〃
〃 (左耳飾)	19	5.7	3.8	1.1	E	ガラス小玉 コバルトブルー
〃	20	破損	3.4			〃 〃 (色うすい)
〃	21	4.4	3.9	1.1		〃 〃
〃	22	5.1	3.8	1.1	C	〃 〃
〃	23	5.9	4.2	1.9	C	〃 〃
〃	24	細片となる				細片となって不明
〃	25	4.9	5.2	1.5	A	ガラス小玉 コバルトブルー
〃	26	(3)	(10)		小管	ガラス コバルトブルー 破損 (色とくにうすい)
〃	27	4.9	5.8	1.7	A	ガラス小玉 コバルトブルー
〃	28	5.5	5.2	2.1	C	〃 〃 (色うすい)
〃	29	7.4	厚4.8 長16.7	2.6	勾玉	ひすい 白~灰緑色 両面穿孔
〃	30	5.9	3.7	1.5	C	ガラス小玉 コバルトブルー
〃	31	4.8	3.3	2.0	C	〃 〃
〃	32	4.2	5.3	1.5	A	〃 〃 (色うすい)
〃	33	5.6	4.2	2.5	C	〃 〃
〃	34	6.0	4.0	2.2	C	
〃	35	6.3	4.6	1.5	C	ガラス小玉 コバルトブルー
IV-20号墓 (頭部)	1	4.6	厚3.2 長7.9	1.2	細勾玉	碧玉 緑色 (黒斑あり) 両面穿孔
〃	2	3.5	2.5	1.1	C	ガラス小玉 スカイブルー
〃	3	破損			C	〃 〃 (破損)
〃	4	4.7	3.2	1.1	C	〃 コバルトブルー
〃	5	4.2	2.7	1.7	C	〃 スカイブルー
〃	6	3.6	3.1	1.0	C	〃 〃
〃	7	7.2	6.6	2.0	丸玉	ガラス丸玉 〃
〃	8	4.3	3.0	1.0	C	ガラス小玉 〃
〃	9	4.5	4.2	1.4	C	〃 〃

出土遺構	No.	径 mm	厚(長) mm	孔径 mm	分類	備考
IV-20号墓 (頭部)	10	2.8	5.3	1.4	細管	碧玉 黄緑 両面穿孔
◇ ◇	11	3.9	2.8	1.4	C	ガラス小玉 スカイブルー
◇ ◇	12	4.2	3.3	1.2	C	◇ ◇
D地区2-2号棺		2.0	5.5	0.8	細管	グリーンタフ 白緑色 両面穿孔
2号墳丘墓1号棺	1	5.0	3.4	1.0	C	ガラス小玉 コバルトブルー
◇	2	4.8	3.2	1.2	C	◇ ◇ (側面に平坦面)
◇	3	4.3	3.2	1.0	C	◇ ◇
◇	4	4.8	3.3	1.4	C	◇ ◇
◇	5	4.0	2.4	0.9	C	◇ ◇
◇	6	4.8	3.2	1.1	C	◇ ◇
◇	7	4.0	2.3	1.1	E	◇ ◇
◇	8	4.3	2.6	1.5	C	◇ ◇
◇	9	4.6	2.8	1.3	C	◇ ◇
◇	10	4.2	2.1	1.0	D	◇ ◇
◇	11	4.6	2.5	1.9	C	◇ ◇ (石英粒含)
◇	12	4.6	3.3	1.0	C	◇ ◇
◇	13	4.3	2.4	1.1	C	◇ ◇ (色薄い)
◇	14	3.3	2.7	1.5	C	◇ ◇
◇	15	4.1	3.9	1.4	C	◇ ◇
◇	16	4.0	3.5	1.0	C	◇ ◇
◇	17	4.3	3.0	1.4	C	◇ ◇
◇	18	4.8	3.3	1.6	C	◇ ◇
◇	19	4.6	2.2	1.4	D	◇ ◇
◇	20	4.4	2.4	1.5	C	◇ ◇
◇	21	4.0	3.5	1.0	C	◇ ◇
◇	22	4.3	2.0	1.5	D	◇ ◇
◇	23	4.7	2.6	1.3	C	◇ ◇
◇	24	4.0	2.9	1.1	C	◇ ◇
◇	25	4.4	2.5	1.5	C	◇ ◇ (タテに溝)

出土遺構	No.	径 mm	厚(長) mm	孔径 mm	分類	備考
2号墳丘墓1号棺	26	破損			C	ガラス小玉 コバルトブルー (破損)
◇	27	4.2	3.2	1.5	C	◇ ◇
◇	28	4.8	4.0	1.6	C	◇ ◇
◇	29	4.4	3.3	1.5	C	◇ ◇
◇	30	4.6	3.9	1.4	C	◇ ◇
◇	31	4.3	2.9	1.4	C	◇ ◇
◇	32	4.8	3.6	1.5	C	◇ ◇
3号墳丘墓3号棺	1	破損			C	ガラス小玉 コバルトブルー (破損)
◇	2	4.2	3.4	1.6	C	◇ ◇
◇	3	4.4	3.1	1.1	C	◇ ◇ (タテに無数の白スジ)
◇	4	4.5	3.8	1.1	C	◇ ◇
◇	5	4.3	3.1	1.5	C	◇ ◇
◇	6	4.8	3.7	1.1	C	◇ ◇
◇	7	4.5	3.9	1.2	C	◇ ◇
◇	8	5.4	3.4	1.9	C	◇ ◇
◇	9	4.6	2.6	1.0	C	◇ ◇
◇	10	5.2	3.9	1.4	C	◇ ◇
◇	11	5.3	3.1	1.5	C	◇ ◇
◇	12	5.6	4.1	1.7	C	◇ ◇
◇	13	5.2	3.7	1.4	C	◇ ◇ (タテスジ)
◇	14	4.8	4.6	1.6	C	◇ ◇
◇	15	5.3	4.0	1.4	C	◇ ◇
◇	16	破損			C	◇ ◇ (破損)
◇	17	5.0	4.2	1.7	C	◇ ◇
◇	18	5.3	3.5	1.5	C	◇ ◇
◇	19	4.5	4.3	1.2	E	◇ ◇ (孔周辺平坦) (色薄い灰色に近い)
◇	20	4.9	4.5	2.0	C	◇ ◇
◇	21	4.2	3.5	1.2	C	◇ ◇
4号墳丘墓4号棺	1	4.2	厚2.7 長9.2	1.0	勾玉	材質不明 淡緑色 片面穿孔
◇	2	2.9	6.4	1.1	細管	グリーンタフ 白緑色 両面穿孔

出土遺構	No.	径 mm	厚(長) mm	孔径 mm	分類	備考
4号墳丘墓4号棺	3	2.8	9.1	1.4	細管	グリーンタフ 白緑色 両面穿孔
〃	4	2.9	10.2	1.1	〃	〃 (1部欠) 〃
〃	5	2.9	10.2	1.1	〃	〃 〃
〃	6	2.5	6.9	1.4	〃	〃 〃
〃	7	2.4	8.1	0.9	〃	〃 (面取)
〃	8	2.7	8.4	1.3	〃	〃 (一部ケズリ) 〃
〃	9	2.9	7.9	1.1	〃	〃 〃
〃	10	3.1	10.0	1.0	〃	〃 〃
〃	11	3.0	6.4	0.9	〃	〃 〃
〃	12	3.0	10.4	1.2	〃	〃 (サビ付着) 〃
〃	13	2.8	9.8	1.1	〃	〃 〃
〃	14	2.8	7.5	1.0	〃	〃 〃
〃	15	2.8	8.6	1.4	〃	〃 (一部欠損)
〃	16	3.0	7.6	1.0	〃	〃 〃
〃	17	2.2	7.1	1.0	〃	〃 (キズ) 〃
〃	18	2.3	8.6	1.2	〃	〃 〃
〃	19	2.2	7.2	0.9	〃	〃 〃
〃	20	2.2	7.9	1.0	〃	〃 〃
(整理時にNo付す) (カクラン土中より出土)	21	2.2	5.6	1.1	〃	〃 〃
( 〃 )	22	2.5	7.6	1.1	〃	〃 〃
( 〃 )	23	3.1	5.9	1.0	〃	〃 〃
( 〃 )	24	2.9	8.2	1.0	〃	〃 〃
( 〃 )	25	2.8	8.9	1.1	細管	グリーンタフ 白緑色 管玉 (一部欠) 両面穿孔
( 〃 )	26	2.8	10.6	1.4	〃	〃 〃
( 〃 )	27	2.9	8.9	1.2	〃	〃 〃
( 〃 )	28	3.1	7.3	1.0	〃	〃 〃
( 〃 )	29	2.7	5.2	1.1	〃	〃 〃
( 〃 )	30	3.1	10.7	1.1	〃	〃 〃
C地区住1		3.7	11.9	1.4	細管	グリーンタフ 白緑色 管玉 両面穿孔

表12 徳永川ノ上墳墓群出土鉄器一覽表

No.	名称	出土遺構	法 量 cm			特 徴
			全長	最幅	最厚	
1	劍	I-5号墓	31.1	2.6	0.4	目釘穴、切先反る
2	劍	Ⅲ-墳丘中央	33.7	3.15	0.5	切先が反る
3	劍	4-3号棺	現 18.0	3.1	0.7	切先が反る
4	劍	4号墳丘墓上	現 7.7	3.15	0.7	
5	劍	4号墳丘墓上	現 3.6	3.5	0.7	切先近く
6	素環頭刀子	I-6号墓枕	21.45	1.3	0.25	
7	刀子	I-6号墓	現 6.9	0.85	0.25	
8	柳葉形鏃	I-6号墓	現 5.2	1.9	0.3	
9	刀子	I-8号墓	現 8.4	0.85	0.2	
10	鏃	I-11号墓	現 3.2	0.4	0.2	茎
11	刀子	I-13号墓	現 9.3	1.0	0.2	
12	刀子	I-13号墓	12.0	1.35	0.25	
13	刀子	Ⅲ-18号墓	7.7	1.0	0.25	鹿角柄
14	刀子	Ⅳ-19号墓	12.0	1.15	0.25	
15	刀子	Ⅳ-20号墓	11.6	1.3	0.3	
16	茎(刀子)	Ⅳ-21号墓	現 5.4	1.4	0.3	茎残欠
17	刀子	Ⅳ-21号墓	現 3.2	1.4	0.3	身残欠
18	刀子	V-22号墓	10.6	1.0	0.2	
19	刀子	V-24号墓	5.45	0.85	0.2	
20	柳葉形鏃	V-2号壙棺墓	7.8	2.0	0.25	透孔
21	刀子	V-集石遺構	現 5.0	1.7	0.35	
22	三角形鏃	2号墓	現 11.2	3.0	0.28	
23	長頸鏃	2号墓	現 12.8	0.78	0.2	
24	釣針	Ⅵ-42号墓棺外	10.4	3.3	0.35	
25	釣針	Ⅵ-42号墓棺外	7.0	2.7	0.35	
26	釣針	Ⅵ-42号墓棺外	9.9	3.2	0.4	
27	釣針	Ⅵ-42号墓棺外	11.4	3.2	0.35	
28	釣針	Ⅵ-42号墓棺外	現 5.6	(3.0)	0.38	小石付
29	圭頭形鏃	Ⅵ-42号墓棺外	6.8	1.7	0.2	

No.	名称	出土遺構	法 量 cm			特 徴
			全長	最幅	最厚	
30	柳葉形鏃	Ⅵ-42号墓	16.8	3.5	0.4	透孔
31	刀子	Ⅵ-42号墓	14.2	1.65	0.3	
32	素環頭刀子	Ⅶ-43号墓	16.9	1.05	0.3	
33	素環頭刀子	Ⅶ-44号墓	現6.2	0.8	0.25	
34	柳葉形鏃	Ⅶ-44号墓	15.2	2.65	0.3	透孔
35	鈍	Ⅶ-53号墓	現19.4	0.85	0.15	
36	柳葉形鏃	Ⅶ-53号墓	現5.4	0.9	0.2	
37	柳葉形鏃	Ⅷ-27号墓	12.15	2.85	0.35	透孔
38	圭頭形鏃	Ⅷ-27号墓	8.85	2.5	0.3	
39	柳葉形鏃	Ⅸ-31号墓	14.0	現2.4	0.4	透孔
40	柳葉形鏃	Ⅸ-31号墓	11.7	2.35	0.28	透孔
41	刀子	Ⅸ-31号墓	8.6	1.1	0.25	
42	刀子	Ⅸ-32号墓	現7.3	1.5	0.25	
43	袋状斧	X-35号墓棺外	8.0	4.4	1.7	
44	鈍	X-35号墓	現15.3	0.95	0.2	
45	手鎌	X-41号墓	1.3	9.25	0.6	
46	刀子	XI-62号墓	現11.6	1.4	0.3	
47	袋状斧	1-主体部	6.3	3.1	2.0	
48	袋状斧	1-墳丘	5.9	3.5	2.1	
49	鈍	1-1号棺	20.4	1.1	0.35	布付着
50	刀子	2-1号棺	9.25	0.9	0.2	研減り
51	柳葉形鏃	3-1号棺	7.9	1.7	0.28	
52	圭頭形鏃	3-1号棺	12.45	2.9	0.32	
53	刀子	3-3号棺外	8.75	0.85	0.2	
54	圭頭形鏃	3-4号棺	13.0	5.45	0.3	透孔
55	圭頭形鏃	3-9号棺	7.35	1.9	0.25	
56	鈍	4号墳丘墓周溝	現12.7	1.0	0.2	
57	刀子	4-1号棺	8.6	0.9	0.2	
58	柳葉形鏃	4-3号棺	14.8	2.3	0.35	透孔
59	柳葉形鏃	4-3号棺	14.3	2.35	0.3	透孔
60	柳葉形鏃	4-4号棺上	現8.3	3.1	0.45	

No.	名 称	出 土 遺 構	法 量 cm			特 徵
			全 長	最 幅	最 厚	
61	素環頭刀子	4-4号棺	23.95	1.4	0.33	
62	鏃	北-2号墓	現4.0	0.3	0.3	茎
63	刀子	北-2号墓	現2.0	0.9	0.2	
64	刀子	北-2号墓	現1.4	0.7	0.2	
65	刀子	北-2号墓	現1.2	0.7	0.2	
66	刀子	II-15号墓				紛失
67	刀子	V-2号甕棺墓				紛失

# 化学分析



# 福岡県出土青銅器などの鉛同位体比測定結果

国立歴史民俗博物館 齋藤 努

## 1. はじめに

福岡県教育庁柳田康雄氏より依頼のあった、福岡県内出土の青銅器29点およびガラス1点について鉛同位体比を測定したので報告する。

## 2. 資料

青銅器資料は、いずれも鏝片として提供されたものを分析に用いた。ガラス資料も小片として提供されたものを分析に用いた。

## 3. 方法

国立歴史民俗博物館において最近新たに開発された「高周波加熱分離—鉛同位体比測定法」<sup>1, 2)</sup>を用いて分析を行った。この方法によれば、従来法に比べ、低ブランクで迅速（鉛の分離に要する時間：約15分）に、高精度な測定を行うことが可能である。

## 4. 結果

鉛同位体比の測定結果を資料番号、分析番号、資料の種類、出土地とともに表13に示した。分析番号は当博物館で独自につけたものである。図中に示した番号は、この表13の資料番号である。測定結果は、これまでに報告されている東アジア青銅器のデータと比較するために、馬淵、平尾たちの方法<sup>3~6)</sup>に準じて図示した。ここでは、縦軸に $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ 、横軸に $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ をプロットする「A式図」を用いた。この表示法によれば、弥生時代～平安時代における青銅器の鉛同位体比の変遷を、下記のように示すことができる<sup>5, 6)</sup>。すなわち、

A：弥生時代に将来された前漢鏡の範囲（華北の鉛）

B：後漢・三国時代の舶載鏡の範囲（華中～華南の鉛）

C：日本産鉛の範囲

D：弥生時代に将来された多鈕細文鏡、細形銅剣などの範囲（朝鮮半島の鉛）

図1～図3中の記号A～Dは、これらに対応する。

### (1) 船載鏡

図1に示したとおり、方格規矩鏡（資料1、5、8、9）、内行花文鏡（資料6、10、13、14、20）が、領域A、Bにかけて分布している。これは、これまでの報告と一致する結果である<sup>3、4</sup>。ただし、資料6のみは通常の華北の鉛の範囲とされている領域Aよりわずかに下にプロットされる。連弧文鏡（資料26）のデータは領域AとBの間にプロットされているが、これも、連弧文鏡や方格規矩鏡、細線式獸帯鏡など前漢末期ないし後漢初期から作られたとされる鏡のデータがA～Bの領域に広く分布するという従来の報告と整合する<sup>3、4</sup>。他の青銅鏡（資料2、3、7、11、15、18、19、25、27、28、29）はすべて、後漢中期以降のグループである領域Bにグルーピングされる。

### (2) 仿製鏡

図2に示したとおり、小形仿製鏡4点のうち、2点（資料12、16）の値は領域Aに入り、これまでの報告と一致している<sup>3、4、6</sup>。資料17のデータは領域Bにプロットされた。このような、例外的なデータとしては馬淵、平尾による、久留米市西屋敷遺跡出土の小形仿製鏡の測定例があり、関連性が考えられる<sup>6</sup>。また資料4のデータは領域A、Bの中間にきており、これも小形仿製鏡として例外的な値ではあるが、資料4は今回提供された資料の中で最も微量（< 1 mg）であり、また錆であることを考慮すると汚染を受けている可能性も高いので、再測定を含めて、検討の必要があると思われる。方墳出土の仿製鏡（資料7）は領域Bに入り、従来の研究結果と一致する。

### (3) 多鈕細文鏡

2点の資料（資料21、22）は、いずれも朝鮮系遺物のライン上にのり（図3）、朝鮮半島の原料と考えられる。

### (4) 中国式銅劍

資料23、24はいずれも領域Aにプロットされ（図3）、中国華北産鉛を原料としていたと判断される。

### (5) ガラス

資料30は、A式図（図3）では領域BとCの重なる部分に位置するが、 $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ と $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の関係（B式図）から判断して、領域Bに含まれ、華中～華南の鉛を使用していたと考えられる。

## 5. まとめ

大部分の資料については、従来の研究と整合する結果が得られた。小形仿製鏡において、領域Bに位置する例外的な値をもつものが1点検出された。

### 参考文献

- 1) 齋藤 努、田口 勇：日本文化財科学会第11回大会研究発表要旨集、91 (1994)
- 2) Tsutomu SAITO: The Third International Conference on the Beginning of the Use of Metals and Alloys, 40 (1994)
- 3) 馬淵久夫、平尾良光：MUSEUM、370、4 (1982)
- 4) 馬淵久夫、平尾良光：MUSEUM、370、16 (1982)
- 5) 馬淵久夫、平尾良光：考古学雑誌、73 (2)、199 (1987)
- 6) 馬淵久夫、平尾良光：考古学雑誌、75 (4)、385 (1990)

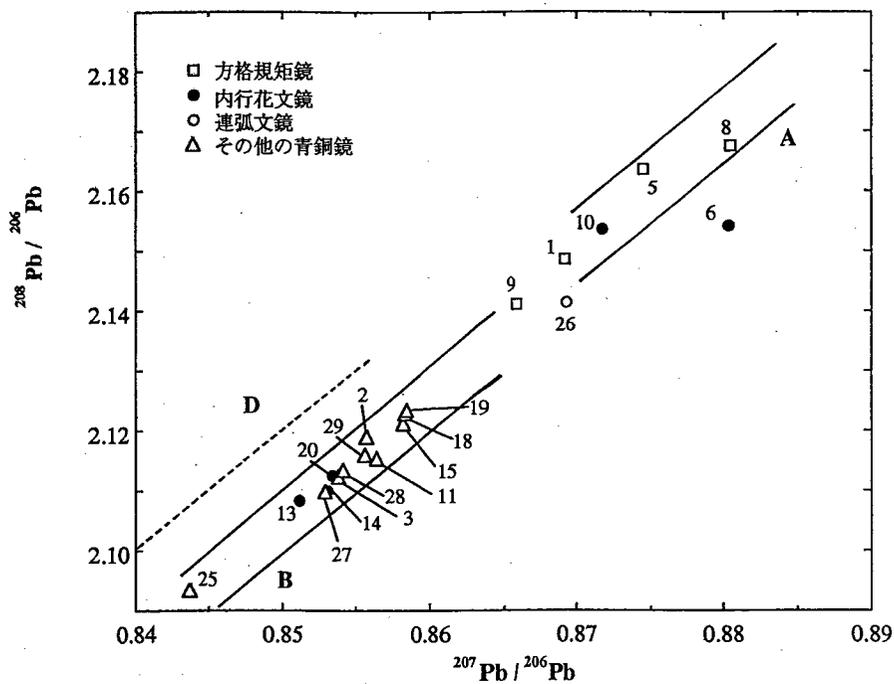


図1. 船載鏡の鉛同位体比

表13 福岡県出土青銅器の鉛同位体比

資料番号	資料	出土地	分析番号	$\frac{207\text{Pb}}{206\text{Pb}}$	$\frac{208\text{Pb}}{206\text{Pb}}$	$\frac{206\text{Pb}}{204\text{Pb}}$	$\frac{207\text{Pb}}{204\text{Pb}}$	$\frac{208\text{Pb}}{204\text{Pb}}$
1	方格規矩鏡	豊津町徳永川ノ上6号墓	B701	0.8692	2.1486	17.930	15.584	38.524
2	三角縁画像鏡	豊津町徳永川ノ上8号墓	B702	0.8558	2.1189	18.327	15.683	38.832
3	三角縁盤龍鏡	豊津町徳永川ノ上19号墓	B703	0.8539	2.1123	18.335	15.656	38.729
4	小形仿製鏡	豊津町徳永川ノ上Ⅲ号墳墓群	B704	0.8679	2.1440	17.956	15.584	38.497
5	凹帯縁方格規矩鏡	豊津町徳永川ノ上2号墳丘墓1号棺	B705	0.8746	2.1637	17.766	15.537	38.441
6	内行花文鏡	豊津町徳永川ノ上4号墳丘墓4号棺	B706	0.8803	2.1531	17.603	15.496	37.900
7	仿製獸帯鏡	豊津町徳永川ノ上4号方墳	B707	0.8556	2.1177	18.327	15.680	38.810
8	方格規矩鏡	北九州市高津尾17区7号墓	B708	0.8804	2.1675	17.648	15.538	38.253
9	方格規矩鏡	北九州市高津尾16区北40号墓	B709	0.8659	2.1411	17.997	15.583	38.533
10	内行花文鏡	勝山町上所田石蓋土壙墓	B710	0.8718	2.1537	17.853	15.564	38.450
11	三角縁鳥文鏡	勝山町上所田石蓋土壙墓	B711	0.8564	2.1152	18.265	15.643	38.633
12	小形仿製鏡	行橋市前田山6号石蓋土壙墓	B712	0.8748	2.1600	17.748	15.526	38.335
13	内行花文鏡	行橋市前田山9号石棺墓	B713	0.8512	2.1082	18.492	15.740	38.987
14	内行花文鏡	行橋市石並箱式石棺墓	B714	0.8531	2.1099	18.406	15.702	38.836
15	夔鳳鏡	豊津町平箱式石棺墓	B715	0.8582	2.1212	18.232	15.647	38.672
16	小形仿製鏡	犀川町統命院箱式石棺墓	B716	0.8726	2.1594	17.812	15.440	38.464
17	小形仿製鏡	大平村能満寺2号墳	B717	0.8597	2.1209	18.076	15.540	38.404
18	夔鳳鏡	大平村能満寺3号墳	B718	0.8583	2.1227	18.232	15.649	38.701

資料番号	資料	出土地	分析番号	$\frac{^{207}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$	$\frac{^{208}\text{Pb}}{^{206}\text{Pb}}$	$\frac{^{206}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{207}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$	$\frac{^{208}\text{Pb}}{^{204}\text{Pb}}$
19	四獣鏡	大平村能満寺3号墳	B719	0.8585	2.1232	18.224	15.646	38.692
20	内行花文鏡	粕屋町平塚大型箱式石棺墓	B720	0.8534	2.1124	18.390	15.694	38.846
21	多鈕細文鏡(大)	小郡市若山遺跡	B721	0.7840	2.0209	20.250	15.876	40.923
22	多鈕細文鏡(小)	小郡市若山遺跡	B722	0.8009	2.0432	19.702	15.779	40.436
23	中国式銅劍(1)	二丈町井牟田	B723	0.8720	2.1509	17.816	15.535	38.325
24	中国式銅劍(2)	二丈町井牟田	B724	0.8689	2.1441	17.897	15.551	38.372
25	画文帯神獸鏡	朝倉町外之隈Ⅰ区1号墳1号墓	B725	0.8437	2.0932	18.615	15.704	38.966
26	三角縁連弧文鏡	朝倉町外之隈Ⅱ区1号墳1号墓	B726	0.8693	2.1415	17.895	15.557	38.323
27	斜縁飛禽鏡	朝倉町外之隈Ⅱ区1号墳2号墓	B727	0.8529	2.1098	18.341	15.644	38.697
28	三角縁飛禽鏡	若宮町汐井掛28号木棺墓	B728	0.8542	2.1134	18.331	15.659	38.808
29	三角縁四禽鏡	北九州市郷屋(C)2号箱式石棺墓	B729	0.8556	2.1159	18.327	15.682	38.783
30	ガラス丸玉	北九州市郷屋(B)2号箱式石棺墓	G401	0.8436	2.0993	18.672	15.752	39.199

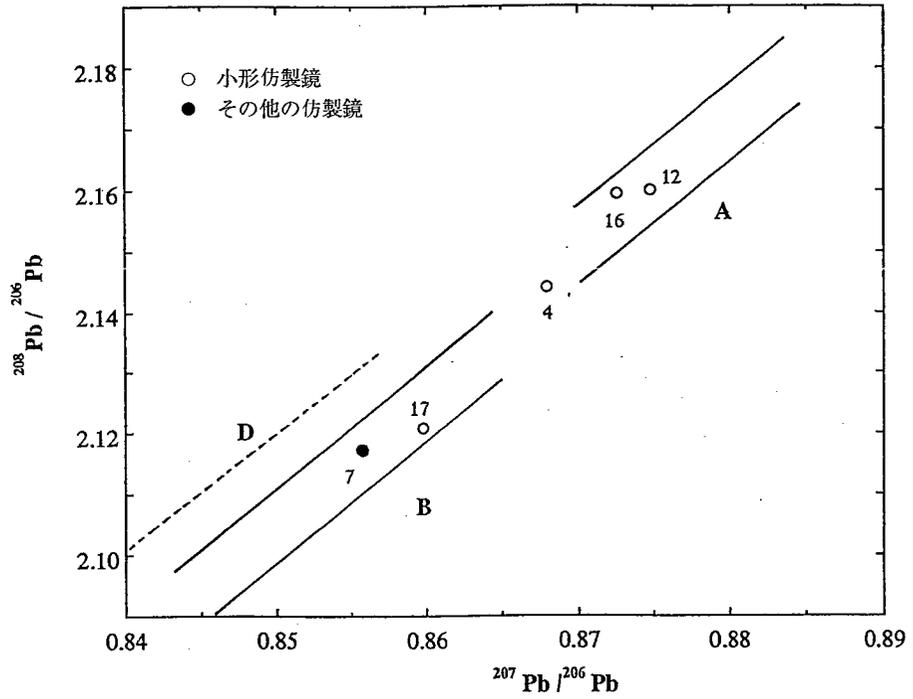


図2. 仿製鏡の鉛同位体比

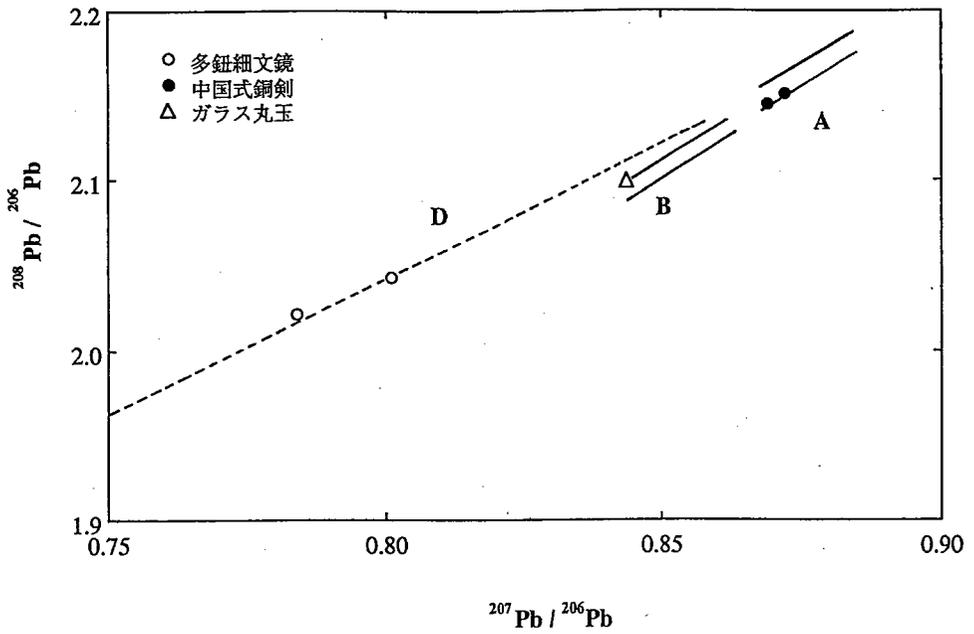


図3. 多鈕細文鏡、中国式銅劍、ガラスの鉛同位体比

# 徳永川ノ上遺跡の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター 本田 光子

## 1 はじめに

川ノ上遺跡の墳墓から出土した赤色物について、その材質と状態を知るために顕微鏡による観察および蛍光X線分析を行った。

墳墓出土赤色顔料に関する現在までの知見に依れば、赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第二鉄  $\text{Fe}_2\text{O}_3$  を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀  $\text{HgS}$  を主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだない。

川ノ上遺跡では、弥生時代終末から古墳時代初頭の墓95基のうち63基に赤色顔料が認められている。そのうち58基の墓から計134点の試料が採取されているので、調査を行った。試料の採取位置等一覧と分析結果および所見を表14に示した。

## 2 試料

赤色顔料が認められた墓については発掘調査時に、赤色の色合いが異なる部位、特に濃い部分等を区別し、床面の赤色部分は頭、腹、足と三分割して採取されている。これらの試料は膨大な量であり、約百のコンテナに満杯であった。ほとんどが肉眼ではベンガラと思われる赤色の粉末が土に混じった状態である。乾燥後、各々から赤色顔料の凝集した小塊を選び出し、さらに残りを縮分して20～30g程度の赤色顔料と土が混じったものを採取した。採取地点1ヶ所についてこれら2種の試料の顕微鏡観察をおこなった。蛍光X線分析には、後者をメノウの乳鉢で粒度を揃え、葉包紙に包んで試料とした。

## 3 顕微鏡観察

実体・生物顕微鏡により落射光・透過光40～400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類、粒度等を観察するものである。三者は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等に認められる特徴の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。

朱は、やや角張った形状、落射光観察に認められる独特の反射・光沢、透過光観察時の透明度および赤色の濃淡の調子等から判断した。はっきりと朱の特徴を持つ粒子を認めることができた試料は少なく、朱の使用量が多く凝集していたものや、ベンガラが少なかったものだけで

あった。比較的大きな朱粒子も表面をベンガラ微粒子が覆っていたり、あるいはきわめて微粒の朱粒子については判断できなかった。ただし、蛍光X線分析の結果で水銀が検出されたものについては丹念に検鏡を行い、すべて朱粒子を確認した。蛍光X線分析で水銀？については、検鏡で朱粒子をはっきり認めることができなかった。

ベンガラは、粒子が小さく光学顕微鏡では細かい特徴を判断することは難しいが、赤色の色調、透明度、形状等から判断した。透明で中空のいわゆるパイプ状粒子は認められなかった。

#### 4 蛍光X線分析

赤色物の主成分元素の検出を目的として実施した。九州産業大学総合機器センター設置の理学電機工業(株)製蛍光X線分析装置システム3511を用い、X線管球；クロム対陰極、印加電圧；50kV、印加電流；50mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管で測定を行った。

試料には赤色顔料の主成分元素としては水銀と鉄が検出された。この他主として混入の土砂に由来する元素は省略した。ただし、鉄は土砂部分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断することになる。なお、鉛丹の主成分元素である鉛は検出されなかった。

#### 5 結果と考察

弥生時代から古墳時代の墳墓での赤色顔料は、主として床面での検出状況から次のように大きく三つに分かれる。

- a類 朱だけが出土する
- b類 朱とベンガラが出土する
- c類 ベンガラだけが出土する

川ノ上遺跡での赤色顔料検出タイプはこれに従って表に示した。また、赤色顔料が認められた墓の割合、赤色顔料検出タイプの比率、棺型式と赤色顔料検出の関係、副葬品を持つ墓の赤色顔料検出タイプについて、図に示した。比較のために北九州市高津尾遺跡（16区）の赤色顔料調査例についても、同様の図を示す。川ノ上遺跡ではa類の墓がない。b類とc類の墓からなり、前者の方が後者より多い。箱式石棺墓では、b類の方がc類より多く、副葬品を持つ墓は前者に集中し後者には1基もない。ただし、石蓋土墳墓や木蓋土墳墓では特に変わらない。

高津尾遺跡（16区）では北地区と南地区で赤色顔料の検出状況が大きく異なる。北にはa類があるが、南はb、c類だけであり、川ノ上遺跡の状況とよく似ている。南地区は丘陵の高所に北地区とは分離して営まれており、溝による区画も持つ等の点で、北地区よりも優位の集団

と考えられる。現在までの分析例から言えば、むしろa類朱だけというタイプをまったく持たず、bとc類からなる川ノ上遺跡や高津尾遺跡(16区)南地区での状況が、北九州地方では後期中頃以降通有のものである。これに対して、山陰から北陸、瀬戸内から近畿地方までは、少ない分析例ではあるが圧倒的にa類が主流である。地域による赤色顔料検出タイプの違いについては、西日本各地の赤色顔料分析例が増加した段階であらためて論じたい。

ところで、赤色顔料検出タイプからみると、その使われ方には以下のような状況が推定される。「予め薄くベンガラが敷かれた床に、すでに別の場所で微量の朱を施された遺骸を置き、さらに上半身に大量のベンガラを散布する」か「すでに別の場所で微量の朱を施した遺骸を床に置き、上半身を中心に大量のベンガラを散布する」かである。川ノ上遺跡の各々の墓での赤色顔料の種類と使われ方は、表の所見に推定した通りである。

なお、b類の朱とベンガラは通常、顕微鏡下で面あるいは層で分離する事が出来、それぞれの使用に時間差を捉えることが可能である。しかし、本例では3、4号墳丘墓など比較的朱が多く使われていた墓だけでしか分離できなかった。他はベンガラと土と朱が混じりあい、朱とベンガラの分離が不可能であった。ベンガラの量が多すぎたからなのか、埋没過程あるいは埋蔵環境によるのか不明である。しかし、ほとんどの墓でベンガラは床面全体から検出されるが、朱は頭胸部周辺からだけであった。また、土器内のもはベンガラだけで朱は含まないことなどから推察して、両者が分離できないのは、ベンガラと朱を使用前に混ぜた結果であるとも思えない。土器に厚く残るベンガラは、あらかじめ朱を施した遺骸の上から撒いた液状のベンガラの残りかもしれない。

## 6 まとめ

- 1 赤色顔料を持つ墓が全体の60%を占める。
- 2 a類：朱だけを持つ墓がない。
- 3 b類：朱とベンガラを持つ墓70%、c類：ベンガラだけを持つ墓30%がある。
- 4 箱式石棺墓で、副葬品を持つものはb類に限られる。
- 5 箱式石棺墓で、他に比べて副葬品を持つものはベンガラの量が多い。4号墳丘墓4号墓は朱、ベンガラともに特に多い。
- 6 墓壙側の土器群は、遺骸の上半身に液状のベンガラを撒くという埋葬儀礼に使用したのかもしれない。

## 謝辞

川ノ上遺跡出土赤色顔料調査の機会を戴いた福岡県教育委員会柳田康雄氏、および調査時に赤色顔料を含んだ大量の土の採取と運搬に携われた関係者の皆様方に改めて感謝致します。X線分析は九州産業大学総合機器センターで行ったもので、ご協力いただいた同センター助手古賀啓子博士に感謝致します。

表14 赤色顔料の試料一覧と分析結果および所見

試料 番号	赤色顔料の検出選構		試料の 採取位置	棺形式	副葬遺物	顕微鏡観察		蛍光X線分析		赤色顔料の 種類	赤色顔料 の 検出タイプ	所 見
						朱	ベンガラ	水銀	鉄			
1	I号墳墓群	3号墓	頭部	木蓋		?	+	?	+	ベンガラ	b	遺骸の胸部に朱を施す。床面にベンガラを塗布、散布したか、あるいは、遺骸の上からベンガラを散布した。
2			腹部			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
3			足部上部			?	+	-	+	ベンガラ		
4			足部			?	+	-	+	ベンガラ		
5	I号墳墓群	4号墓	頭部	木蓋		+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	遺骸の頭胸部に朱を施す。床面にベンガラを塗布、散布したか、あるいは遺骸の上半身にベンガラを散布した。木蓋内部には塗布されていたかわからない。
6			腹部			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
7			足部			?	+	?	+	ベンガラ		
8			棺内			?	+	-	+	ベンガラ		
9	I号墳墓群	5号墓	棺内	木蓋	鉄剣	+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	
10	I号墳墓群	6号墓	頭部	木蓋	鏡片 鉄刀子 鉄鍬	+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	
11			腹部			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
12			足部			-	+	-	+	ベンガラ		
13	I号墳墓群	7号墓	頭部	石蓋		+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	遺骸の頭胸部に朱、床か遺骸にベンガラを塗布または散布し石蓋内面にベンガラを塗布。
14			腹部			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
15	I号墳墓群	8号墓	頭部	木蓋	鏡片 鉄刀子 玉	+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	遺骸に朱を施す。床面にベンガラを塗布、散布したか、あるいは、遺骸の上からベンガラを散布した。
16			腹部			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
17			棺内			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
18	I号墳墓群	10号墓	頭部	配石	玉	-	+	-	+	ベンガラ	c	床面に少量のベンガラを塗布散布したか、あるいは、遺骸の上からベンガラを散布した。
19			腹部			-	+	-	+	ベンガラ		
20			足部			-	+	-	+	ベンガラ		
21			小玉周辺			-	+	-	+	ベンガラ		
22	I号墳墓群	11号墓	頭部	木蓋	鉄鍬片	+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	遺骸の頭胸部に朱を施す。床面にベンガラを塗布、散布したか、あるいは、遺骸の上からベンガラを散布した。
23			腹部			?	+	-	+	ベンガラ		
24			足部			?	+	-	+	ベンガラ		
25			棺内			?	+	-	+	ベンガラ		
26	I号墳墓群	13号墓	頭部	木蓋	刀子 勾玉 玉類	-	+	-	+	ベンガラ	c	棺内床面にベンガラを塗布、散布したか、あるいは遺骸の上からベンガラを散布した。ベンガラは赤土状で、いわゆる広義のベンガラである。
27			腹部			-	+	-	+	ベンガラ		
28			足部北			-	+	-	+	ベンガラ		
29			足部南			-	+	-	+	ベンガラ		
30	II号墳墓群	14号墓	頭部	石蓋		-	+	-	+	ベンガラ	c	床面にベンガラ(少量)を塗布散布したか、あるいは、遺骸の上からベンガラを散布した。石蓋内面にベンガラを塗布。
31			腹部			-	+	-	+	ベンガラ		
32			足部			-	+	-	+	ベンガラ		
33	II号墳墓群	15号墓	頭部	石蓋	土器	+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	遺骸に朱、床か遺骸にベンガラを塗布または散布し、石蓋内面にベンガラを塗布。
34			腹部			?	+	-	+	ベンガラ		

+あり      -なし

試料 番号	赤色顔料の検出機構		試料の 採取位置	棺形式	副葬遺物	顕微鏡観察		蛍光X線分析		赤色顔料の 種類	赤色顔料 の 検出タイプ	所 見
						朱	ベンガラ	水銀	鉄			
35	Ⅲ号墳墓群	17号墓	棺内	石蓋		?	+	?	+	朱?ベンガラ	b又はc	朱は不明
36	Ⅲ号墳墓群	18号墓	棺内	木蓋	鉄刀子	-	+	-	+	ベンガラ	c	床又は遺骸にベンガラを施す。
37	Ⅲ号墳墓群	46号墓	棺内	木蓋		-	+	-	+	ベンガラ	c	床又は遺骸にベンガラを施す。
38	Ⅳ号墳墓群	19号墓	棺内	石蓋	鏡、刀子	-	+	-	+	ベンガラ	c	床又は遺骸及び墓内にベンガラ
39	Ⅳ号墳墓群	20号墓	棺内	石蓋	刀子、玉	+	?	+	+	朱、ベンガラ	b	ベンガラは少量
40	Ⅳ号墳墓群	21号墓	頭部	箱石		+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	遺骸の頭胸部に朱を施す。 床面あるいは遺骸にベンガラを塗布又は散布。 石棺内面にもベンガラを塗布。
41			腹部			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
42			足部			?	+	-	+	ベンガラ		
43			棺内			?	+	-	+	ベンガラ		
44			黒い部分			-	+	-	+	ベンガラ		
45	V号墳墓群	2号墓	棺内	甕棺		+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	遺骸の一部に朱を施す。 甕棺内面にベンガラを塗布、遺骸全体にもベンガラを散布。
46	V号墳墓群	3号墓	棺内	甕棺		+	+	+	+	朱、ベンガラ		
47	V号墳墓群	22号墓	棺内	箱石		-	+	-	+	ベンガラ	c	床又は遺骸と棺内面にベンガラ
48	V号墳墓群	23号墓	棺内	箱石		+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	遺骸の頭胸部に朱を施す。 床面あるいは遺骸にベンガラを塗布又は散布。石棺内面にもベンガラを塗布。
49	V号墳墓群	24号墓	頭部	箱石	鉄刀子	+	+	+	+	朱、ベンガラ		
50			腹部			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
51	V号墳墓群	63号墓	足側東	土墳		+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	頭部に朱、遺骸が床にベンガラ
52	Ⅵ号墳墓群	28号墓	頭部	石蓋		+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	遺骸の頭部に朱を施す。 床面あるいは遺骸にベンガラを塗布又は散布。石蓋内面にもベンガラを塗布。
53			腹部			?	+	-	+	ベンガラ		
54			足部			?	+	-	+	ベンガラ		
55	Ⅵ号墳墓群	42号墓	頭部	石蓋	鉄鍬 釣針	+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	遺骸の頭部に朱を施し、床面、遺骸にベンガラを塗布散布 石蓋内面にもベンガラ
56			棺内			-	+	-	+	ベンガラ		
57	Ⅶ号墳墓群	43号墓	腹部	石蓋	素環頭	-	+	-	+	ベンガラ	c	床か遺骸、石蓋内面にベンガラ
58	Ⅶ号墳墓群	44号墓	腹部	石蓋	鍬、刀子	+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	頭胸部に朱、棺内面にベンガラ
59	Ⅶ号墳墓群	47号墓	頭部	土墳		+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	遺骸の頭胸部に朱を施す。 床面あるいは遺骸にベンガラを塗布又は散布。
60			腹部			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
61			足部			?	+	+	+	ベンガラ		
62	Ⅶ号墳墓群	48号墓	南側	石蓋		-	+	-	+	ベンガラ	c	床か遺骸、石蓋内面にベンガラ
63	Ⅶ号墳墓群	52号墓	頭部	石蓋		-	+	-	+	ベンガラ	c	床か遺骸、及び石蓋にベンガラ
64	Ⅶ号墳墓群	53号墓	棺内	木蓋	鍬、鈍	-	+	-	+	ベンガラ	c	床か遺骸にベンガラ
65	Ⅶ号墳墓群	54号墓	棺内	木蓋		+	?	+	+	朱(ベンガラ)	b	遺骸に朱、ベンガラは不明
66	Ⅶ号墳墓群	27号墓	頭部	木蓋		+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	遺骸の頭胸部に朱を施す。 床面あるいは遺骸にベンガラを塗布又は散布。
67			腹部			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
68			足部			?	+	-	+	ベンガラ		

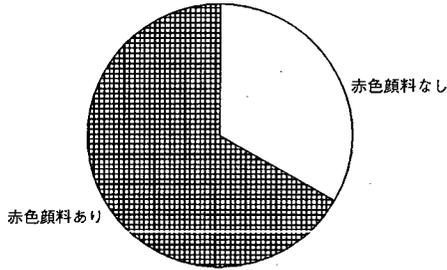
+あり -なし

試料 番号	赤色顔料の検出遺構		試料の 採取位置	棺形式	副葬遺物	顕微鏡観察		蛍光X線分析		赤色顔料の 種類	赤色顔料 の 検出タイプ	所 見
						朱	ベンガラ	水銀	鉄			
69	Ⅷ号墳墓群	55号墓	頭部	木蓋		-	+	-	+	ベンガラ	c	床面あるいは遺骸にベンガラを塗布又は散布。
70			腹部			-	+	-	+	ベンガラ		
71	Ⅸ号墳墓群	30号墓	頭部	木蓋		+	+	+	+	朱,ベンガラ	b	遺骸の頭胸部に朱を施す。床面あるいは遺骸にベンガラを塗布又は散布。
72			足部			+	+	+	+	朱,ベンガラ		
73	Ⅸ号墳墓群	31号墓	頭部	箱石	鉄刀子 鉄鏃	+	+	+	+	朱,ベンガラ	b	遺骸に朱を施し、床面にベンガラを塗布、散布したか、あるいは遺骸の上からベンガラを散布。石棺内面にベンガラを塗布。朱,ベンガラ量は頭く腹く足なので、頭位は逆か。
74			腹部			+	+	+	+	朱,ベンガラ		
75			足部			+	+	+	+	朱,ベンガラ		
76			棺内			-	+	-	+	ベンガラ		
77	X号墳墓群	35号墓	棺内	箱石	鉄斧、鉈	+	+	+	+	朱,ベンガラ	b	遺骸に朱,ベンガラは少量
78	X号墳墓群	41号墓	頭部	石蓋	手鎌 土器	-	+	-	+	ベンガラ	c	床あるいは遺骸にベンガラを塗布または散布した。石蓋内面にもベンガラを塗布。
79			腹部			-	+	-	+	ベンガラ		
80	XI号墳墓群	4号墓	棺内	甕棺		?	?					赤色顔料はなし
81	XI号墳墓群	39号墓	棺内	石蓋		+	+	+	+	朱,ベンガラ	b	遺骸に朱,ベンガラは少量
82	XI号墳墓群	62号墓	中央	土塚		+	+	+	+	朱,ベンガラ	b	遺骸の頭胸部に朱、床あるいは遺骸にベンガラを塗布、散布した。
83			東側			?	+	?	+	ベンガラ		
84	1号墳墓	舟形木棺	棺内	舟形木		+	+	+	+	朱,ベンガラ	b	遺骸に朱,ベンガラは少量
85	2号墳丘墓	1号棺	頭部	箱石	鏡 鉄刀子 玉	+	+	+	+	朱,ベンガラ	b	朱,ベンガラ量は頭>腹>足である。遺骸の頭胸部を中心に朱を施し、ベンガラは床面の上半身側に多く塗布、散布したか、あるいは遺骸の上半身にベンガラを散布したか。石棺内面にベンガラを塗布。
86			中央			+	+	+	+	朱,ベンガラ		
87			足			?	+	-	+	ベンガラ		
88			鏡周辺			+	+	+	+	朱,ベンガラ		
89			刀子周辺			+	+	+	+	朱,ベンガラ		
90	2号墳丘墓	2号棺	頭部	木蓋		+	+	+	+	朱,ベンガラ	b	ベンガラ量は頭>腹>足。遺骸の頭部に朱,ベンガラは床面の上半身側に多く塗布、散布したか、あるいは遺骸の上半身にベンガラを散布。
91			腹部			?	+	?	+	ベンガラ		
92			足部			?	+	?	+	ベンガラ		
93	2号墳丘墓	3号棺	北	石蓋		-	+	-	+	ベンガラ	b	遺骸の頭胸部に朱を施し、床面にベンガラを塗布、散布したか、あるいは遺骸の上からベンガラを散布。石蓋内面にベンガラを塗布。頭位は南か。
94			中			-	+	-	+	ベンガラ		
95			南			?	+	+	+	朱?,ベンガラ		
96	3号墳丘墓	1号棺	頸部(特)	箱石	鉄鏃2	+	+	+	+	朱,ベンガラ	b	遺骸の頭胸部に朱を施し、棺内床面にベンガラを塗布、散布したか、あるいは遺骸の上からベンガラを散布。石棺内面にベンガラを塗布。
97			腹部			+	+	+	+	朱,ベンガラ		
98			足部			?	+	?	+	ベンガラ		
99	3号墳丘墓	2号棺	頸部(特)	石蓋		+	+	+	+	朱,ベンガラ	b	
101			棺外			-	+	-	+	ベンガラ		
101	3号墳丘墓	3号棺	棺内	甕棺	刀子	+	+	+	+	朱,ベンガラ	b	遺骸の頭胸部に朱、棺内面にベンガラを塗布、遺骸全体にベンガラを散布。ベンガラは多量
102			棺内面	甕棺	玉	+	+	+	+	朱,ベンガラ		

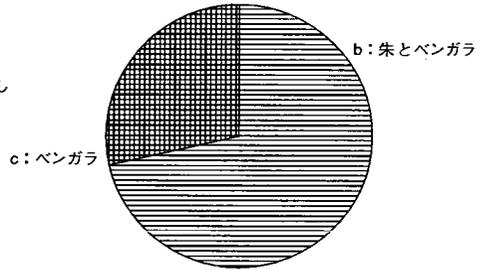
+あり      -なし

試料 番号	赤色顔料の検出遺構		試料の 採取位置	棺形式	副葬遺物	顕微鏡観察		蛍光X線分析		赤色顔料の 種類	赤色顔料の 検出タイプ	所 見
						朱	ベンガラ	水銀	鉄			
103	3号墳丘墓	4号棺	頭部	石蓋	鉄鍔	+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	遺骸の頭胸部に多量の朱を施す。 少量のベンガラを床面に塗布、散 布したか、あるいは遺骸の上から 散布。 石蓋内面にベンガラを塗布。
104			腹部			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
105			棺内			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
106	3号墳丘墓	5号棺	東	石蓋		-	+	-	+	ベンガラ	c	床面にベンガラを塗布。ある いは散布したか、または 遺骸の上からベンガラを散 布したのか。石蓋内面にも ベンガラを塗布。
107			西			-	+	-	+	ベンガラ		
108			蓋石用溝			-	+	-	+	ベンガラ		
109	3号墳丘墓	6号棺	棺内	石蓋		+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	遺骸の一部に朱を施し、少量のベ ンガラを床や遺骸全体に散布、蓋 内にもベンガラを使用か。
110	3号墳丘墓	7号棺	西	石蓋		+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	
111	3号墳丘墓	8号棺	棺内	甕棺		?	+	?	+	朱?、ベンガラ	bかc	棺内面にはベンガラ、遺骸のおそ らく頭胸部には朱を施し、全体に はベンガラを散布した
112	3号墳丘墓	10号棺	下甕内	甕棺		+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	
113	4号墳丘墓	1号棺	頭部	箱石	刀子 鉄鍔	+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	遺骸の頭胸部に朱を施し、棺内 床面にベンガラを塗布、散布し たか、あるいは遺骸の上からベ ンガラを散布。石棺内面にベン ガラを塗布。 朱の量は頭く履く足である。遺 骸が1体であれば頭位は逆で あろうか。逆位置の2体埋葬の 可能性もあろうか。
114			腹			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
115			足			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
116			床面			?	+	-	+	朱?、ベンガラ		
117			東側土器群			-	+	-	+	ベンガラ		
118	4号墳丘墓	2号棺	床	箱石		-	+	-	+	ベンガラ	c	棺内面、床(遺骸)にベンガラ
119	4号墳丘墓	3号棺	棺内	箱石	鉄剣、簀2	+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	棺にベンガラ、遺骸に朱、ベンガラ
120	4号墳丘墓	4号棺	頭部	箱石	鏡 素環頭 刀子 玉	+	+	+	+	朱、ベンガラ	b	遺骸の一部を中心に多 量の朱を施す。棺内床 面にベンガラを塗布、 散布したか、あるいは 遺骸の上からベンガラ を散布石棺内面にベン ガラを塗布。 朱の量は他の墓に比べ て、格段と多い。頭、 鏡周辺にまとまった量 が認められる。 ベンガラは量も他に比 べて、極めて多い。特 に、枕、鏡の下に多い。 東側土器群の、周囲に 残っていたものはベン ガラである。土器の内 面に厚く付着残存して いたものもベンガラで ある。
121			石枕の下			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
122			中側骨周辺			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
123			足元骨周辺			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
124			足先			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
125			床面			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
126			棺内			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
127			棺内東側			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
128			棺内西側			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
129			鏡周辺			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
130			鏡下			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
131			鏡周辺(特未)			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
132			素環頭刀子周			+	+	+	+	朱、ベンガラ		
133			東側土器群			-	+	-	+	ベンガラ		
134	4号墳丘墓	5号棺	石材	箱石		-	+	-	+	ベンガラ	c	棺内面をベンガラで塗布
135	5号墳丘墓	西周溝底	甕内			-	+	-	+	ベンガラ	c	甕内にベンガラが残存している

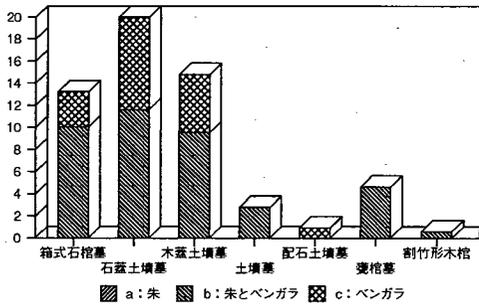
+あり -なし



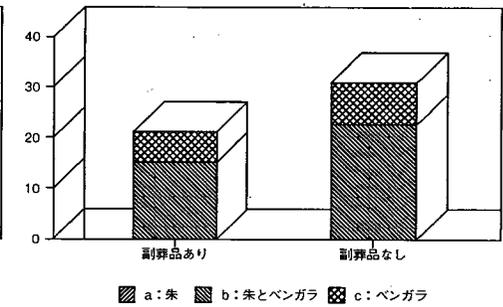
赤色顔料を持つ墓の割合



赤色顔料の検出タイプ

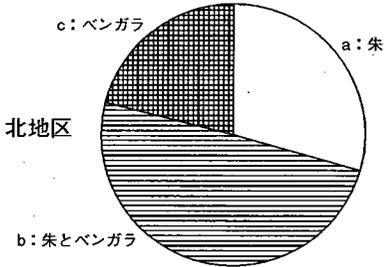


棺型式と赤色顔料

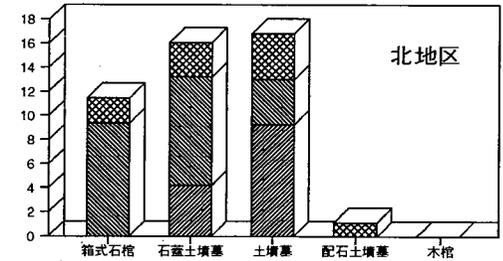


副葬品と赤色顔料

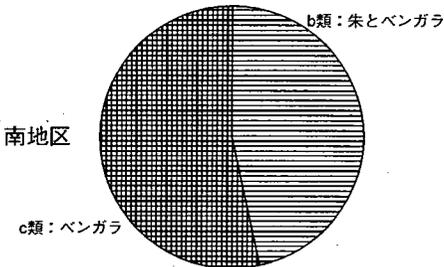
川ノ上遺跡出土の赤色顔料



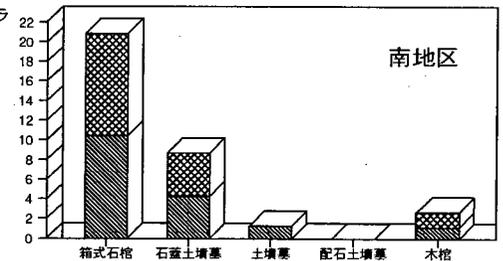
北地区



北地区



南地区



南地区

赤色顔料の検出タイプ

棺型式と赤色顔料

北九州市高津尾遺跡出土の赤色顔料

## 報告書抄録

ふりがな	とくながかわのうえいせき
書名	徳永川ノ上遺跡
副書名	福岡県京都郡豊津町大字徳永所在遺跡群の調査
巻次	II
シリーズ名	一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第7集
編著者名	柳田康雄
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812 福岡県福岡市博多区東公園7-7 TEL092-651-1111
発行年月日	西暦1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とくながかわのうえ 徳永川ノ上 いせき 遺跡	ふくおかけん みやこぐんとよ 福岡県京都郡豊 つまろおあざとくなが 津町大字徳永	406244	—	°	°	1988.6	12,500	国道10号 線バイパス 建設に伴う事前 調査
						~		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
徳永川ノ上 遺跡	墳墓	弥生～古墳	墳丘墓(箱式石 棺墓、石蓋土壙 墓、木蓋土壙墓、 木棺墓) 古墳(木棺、石 蓋土壙墓)	鏡・玉類・鉄 器・弥生土器 ・土師器	弥生終末の墳丘墓 群と初期古墳

一般国道  
10号線 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第7集

## 徳永川ノ上遺跡Ⅱ

1996年3月31日

発行 福岡県教育委員会  
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 瞬報社写真印刷株式会社  
福岡市中央区天神5丁目4番16号  
城戸ビル3F

福岡行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 7	登録番号 11

一般国道10号線 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第7集

徳永川ノ上遺跡Ⅱ 正誤表

本文中に誤りがありましたので以下のように訂正いたします

	誤	正
例言 下から2行目	同位対比	同位体比
P33 10行目	46号墓(図版35-1、第 図46)	46号墓(図版35-1、第69図46)
折り込み 第112図 土層断面N-N'右下	中世1号	中世1号土壌墓
折り込み 第145図	5号墳丘墓遺構配置図	5号墳丘墓遺構実測図
P183	2号墓 (図版99、第195図2)	2号墓 (図版99、第159図2)
P201 2行目 挿図番号	144-14	148-14
P202 2行目 挿図番号	145-34	149-34
P204 2行目 挿図番号	146-20	150-20